太宰府市の文化財第 116 集

大宰府条坊跡 43

—大宰府条坊跡第 193・210・210-2・283・284 次調査、山ノ井遺跡第 1 次調査—

210ST010 淡茶色土出土　草文双鳥鏡

平成 25 年
2013
太宰府市教育委員会

『大宰府条坊跡43』正誤表

修正した文字をゴチック体で記載している

頁・箇所	誤		正	
215頁 S-5	S-5		S-5	
	土師器	坏a(ｲﾄ) 小皿a(ｲﾄ) 人形? 破片	土師器	坏a(ｲﾄ) 小皿a(ｲﾄ) 人形? 破片
	瓦類	平瓦(無文)	瓦類	平瓦(無文)
	石製品	緑色片岩(81) 五輪塔	石製品	緑色片岩**(71)** 五輪塔
215頁 S-20 明黄茶色土	S-20 明黄茶色土		S-20 明黄茶色土	
	土師器	小皿a	土師器	小皿a
	国産陶器	壺	国産陶器	壺
215頁 茶色土			**中国陶器**	**壺V (1)**
	茶色土		茶色土	
	同安窯系青磁	椀;I-1b(1)	同安窯系青磁	椀;I-1b(1)
	土師質土器	焙烙 火鉢	土師質土器	焙烙 火鉢
	須恵質土器	擂鉢	須恵質土器	擂鉢
	肥前系陶磁器	染付皿(五花系ｽﾀﾝﾌﾟ) 椀(ｽﾀﾝﾌﾟ) 角皿 皿 椀 染付皿(見込み蛇ノ目ﾊｷﾞ) 徳利	肥前系陶磁器	染付皿(五花系ｽﾀﾝﾌﾟ) 椀(ｽﾀﾝﾌﾟ) 角皿 **端反椀 椀蓋** 皿 椀 染付皿(見込み蛇ノ目ﾊｷﾞ**、くらわんか手**) 徳利
	国産陶器	甕 椀 椀(墨書「ﾌﾆｼ」) 壺 徳利 筒形 小型土鍋 擂鉢 行平(近世)	国産陶器	甕 椀 壺 徳利 筒形 小型土鍋 擂鉢 行平(近世) **植木鉢**(墨書「ﾌﾆｼ」)
	国産磁器	壺 白磁椀 破片(白磁)	国産磁器	壺 白磁椀 破片(白磁)
	青白磁	梅瓶(1)	青白磁	梅瓶(1)
	瓦類	平瓦(瓦質、縄目) 丸瓦(瓦質、縄目) 丸瓦(土師質、無文) 燻し瓦 ｻﾝ瓦	瓦類	平瓦(瓦質、縄目) 丸瓦(瓦質、縄目) 丸瓦(土師質、無文) 燻し瓦 **桟瓦**
	石製品	緑色片岩(42) 五輪塔(阿蘇凝灰岩)	石製品	緑色片岩(42) 五輪塔(阿蘇凝灰岩)
215頁 黄色土	黄色土		黄色土	
	土師器	坏a(ｲﾄ)	土師器	坏a(ｲﾄ)
	土師質土器	火鉢	土師質土器	火鉢
	肥前系陶磁器	染付皿(近代)	肥前系陶磁器	染付皿(近代)
	国産陶器	壺	国産陶器	壺
	国産磁器	椀 青磁筒形壺	国産磁器	椀 青磁筒形壺
	白磁	他;耳壺III	白磁	他;耳壺III
	瓦類	平瓦(瓦質) 平瓦(須恵質、無文) 燻し瓦 平瓦(須恵質、格子) 丸瓦(須恵質、無文) ｻﾝ瓦	瓦類	平瓦(瓦質) 平瓦(須恵質、無文) 燻し瓦 平瓦(須恵質、格子) 丸瓦(須恵質、無文) **桟瓦**
	石製品	五輪塔(阿蘇凝灰岩) 緑色片岩(54)	石製品	五輪塔(阿蘇凝灰岩) 緑色片岩(54)
215頁 灰茶色土	灰茶色土		灰茶色土	
	土師器	坏a(ｲﾄ) 小皿a(ｲﾄ) 破片(煮沸具)	土師器	坏a(ｲﾄ) 小皿a(ｲﾄ) 破片(煮沸具)
	龍泉窯系青磁	椀;I-2(1) II-b(2) III-2(1) 破片(1) 他;壺	龍泉窯系青磁	椀;I-2(1) II-b(2) III-2(1) 破片(1) 他;壺
	高麗青磁	象嵌;椀(1)	高麗青磁	象嵌;椀(1)
	土師質土器	火鉢	土師質土器	火鉢
	瓦質土器	擂鉢 破片	瓦質土器	擂鉢 破片
	肥前系陶磁器	染付;椀 皿	肥前系陶磁器	染付;椀 皿
	国産陶器	椀 椀(内面平行文) 甕 壺 油差し 破片	国産陶器	椀 椀(内面平行文) 甕 壺 油差し 破片
	白磁	椀;破片(1)	白磁	椀;破片(1)
	青白磁	梅瓶(4)	青白磁	梅瓶(4)
	中国陶器	壺;A-2(1) II(未分類)(1)	中国陶器	壺;**A (1)** A-2(1) II(未分類)(1)
	李朝	釉青砂器椀	李朝	釉青砂器椀
	瓦類	丸瓦(瓦質、無文) 平瓦(須恵質、無文) 軒平瓦 平瓦(土師質、縄目) 平瓦(須恵質、縄目) 燻し瓦	瓦類	丸瓦(瓦質、無文) 平瓦(須恵質、無文) 軒平瓦 平瓦(土師質、縄目) 平瓦(須恵質、縄目) 燻し瓦
	石製品	阿蘇凝灰岩 緑色片岩(61) 石斧?	石製品	阿蘇凝灰岩 緑色片岩(61) 石斧?
216頁 表土	表土		表土	
	須恵器	甕	須恵器	甕
	土師器	小皿a(ｲﾄ)	土師器	小皿a(ｲﾄ)
	龍泉窯系青磁	椀;II-b(1)	龍泉窯系青磁	椀;II-b(1)
	土師質土器	鍋	土師質土器	鍋
	肥前系陶磁器	染付;椀 皿 湯飲み椀	肥前系陶磁器	染付;椀 **坏** 湯飲み椀 **鉢**
	国産陶器	椀 擂鉢 皿(「太宰府神社」見込み銘入り) 鉢? 瓶? 皿?	国産陶器	椀 擂鉢 皿(「太宰府神社」見込み銘入り) 鉢? 瓶? 皿?
	国産磁器	坏(貫入) 椀 椀(ﾌﾟﾘﾝﾄ、近代) 染付小坏(近代)	国産磁器	坏(貫入) 椀 椀(ﾌﾟﾘﾝﾄ、近代) 染付小坏(近代)
	白磁	椀;IV-1(1)	白磁	椀;IV-1(1)
	中国陶器	壺;A-1(1)	中国陶器	壺;A-1(1)
	瓦類	丸瓦(瓦質、無文) 平瓦(須恵質、二重格子) 燻し瓦	瓦類	丸瓦(瓦質、無文) 平瓦(須恵質、二重格子) 燻し瓦
	石製品	緑色片岩(15) 五輪塔(凝灰岩)	石製品	緑色片岩(15) 五輪塔(凝灰岩)
	土製品	ﾚﾝｶﾞ×塼?	土製品	ﾚﾝｶﾞ×塼?

太宰府市の文化財第 116 集

大宰府条坊跡 43

—大宰府条坊跡第 193･210･210-2･283･284 次調査、山ノ井遺跡第 1 次調査—

平成 25 年
2013
太宰府市教育委員会

序

本書は、太宰府市の北側に位置する四王寺山の東南裾に展開する大字山ノ井、朝日地区で行われた、大宰府条坊跡に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書です。

今回、報告する地域は「府の大寺」として知られている観世音寺の北東部にあたります。ここには観世音寺に付随して四十九あったと伝わる小～中規模な寺のあつまりがあり、これを観世音寺子院群と総称しています。また、朝日地区の南には少弐氏に関係するとみられる御所ノ内地区の中世遺跡群、北東方向には仁治２年（1240）に随乗坊湛慧（ずいじょうぼうたんね）によって創建された臨済宗大徳寺派の横岳崇福寺跡があるなど、歴史的に貴重な遺跡が点在しております。

本書は平成９年度と 22 年度におこなった国庫補助事業による個人住宅建築に伴う緊急発掘調査と、平成 12 年度におこなった宅地造成に伴う発掘調査と同年度に公園整備に伴う国庫補助事業による範囲確認調査、平成 23 年度におこなった国庫補助事業による重要遺跡範囲確認調査を収録しており、古代から中世にわたる貴重な遺構と遺物を紹介しております。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

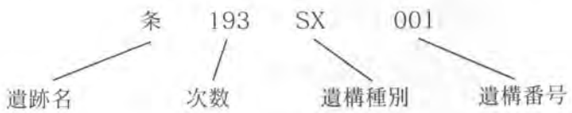
平成 25 年３月

太宰府市教育委員会

教育長　木村　甚治

例　言

1. 本書は太宰府市観世音寺５丁目で行われた大宰府条坊跡、山ノ井遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第Ⅱ座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお遺構の性格を表記する記号については、SA 柵列跡、SB 掘立柱建物跡、SD 溝、SE 井戸、SF 道路状遺構、SI 住居跡、SK 土坑、ST 墳墓、SX その他の遺構 などであり、略号として以下のように記載している。



4. 遺構の実測は、発掘調査担当者および、調査補助員平島義孝（現株式会社埋蔵文化財サポートシステム）が行った。航空測量についてはアジア航測株式会社に、平板地形図測量は埋蔵文化財サポートシステムに委託をした。
5. 調査の空中写真撮影は（有）空中写真企画（代表諫山広宣）並びにアジア航測株式会社が行った。
6. 遺物の実測は山村信榮、宮崎亮一、高橋学の他は、福井円、吉富千春、今岡一恵、西野元勝（現小城市教育委員会嘱託）が行った。
7. 遺物の整理接合・復元作業は馬場由美、住山景子、末永亜由子が行った。金属製品の整理接合・復元作業・保存処理業務は株式会社タクトに委託した。
8. 遺物の写真撮影はフォトハウス岡、山村が行った。
9. 表入力・写真整理は瀬戸口みな子、市川晴美、中原順子、吉村有紀が行った。
10. 遺物の整理作業全般に、遠藤茜、白石渓冴（現大野城市教育委員会嘱託）の助力を得た。
11. 図の浄書は調査担当者および遺物実測者が行った。遺構図のデジタルトレースについては、一部株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託をした。
12. 本書に用いた分類は以下のとおり。
    須恵器・・・『宮ノ本遺跡Ⅱ　－窯跡篇－』（太宰府市の文化財第10集）1992
    陶磁器・・・『大宰府条坊跡XV　－陶磁器分類－』（太宰府市の文化財 第49集）2000
    土器・・・・『大宰府条坊跡Ⅲ』（太宰府市の文化財第７集）1983
    瓦・・・・・『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』 九州歴史資料館　2000
    『宝満山遺跡４』（太宰府市の文化財第７９集）太宰府市教育委員会　2005
    瓦質・土師質土器・・・山村信榮「太宰府出土の瓦質土器」『中世土器の基礎研究Ⅵ』1990
13. 第210次・210-2次調査の現地と整理作業時には、狭川真一氏（(財) 元興寺文化財研究所）にご指導ご教示をいただいた。また、条210表土出土の層塔については、井形進氏（九州歴史資料館）にご指導ご教示をいただいた。
14. 執筆は目次に示すとおりである。編集は高橋が担当した。

目　次

Ⅰ. 調査地周辺の地理的・歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（高橋）4

Ⅱ. 調査体制 ・・（高橋）6

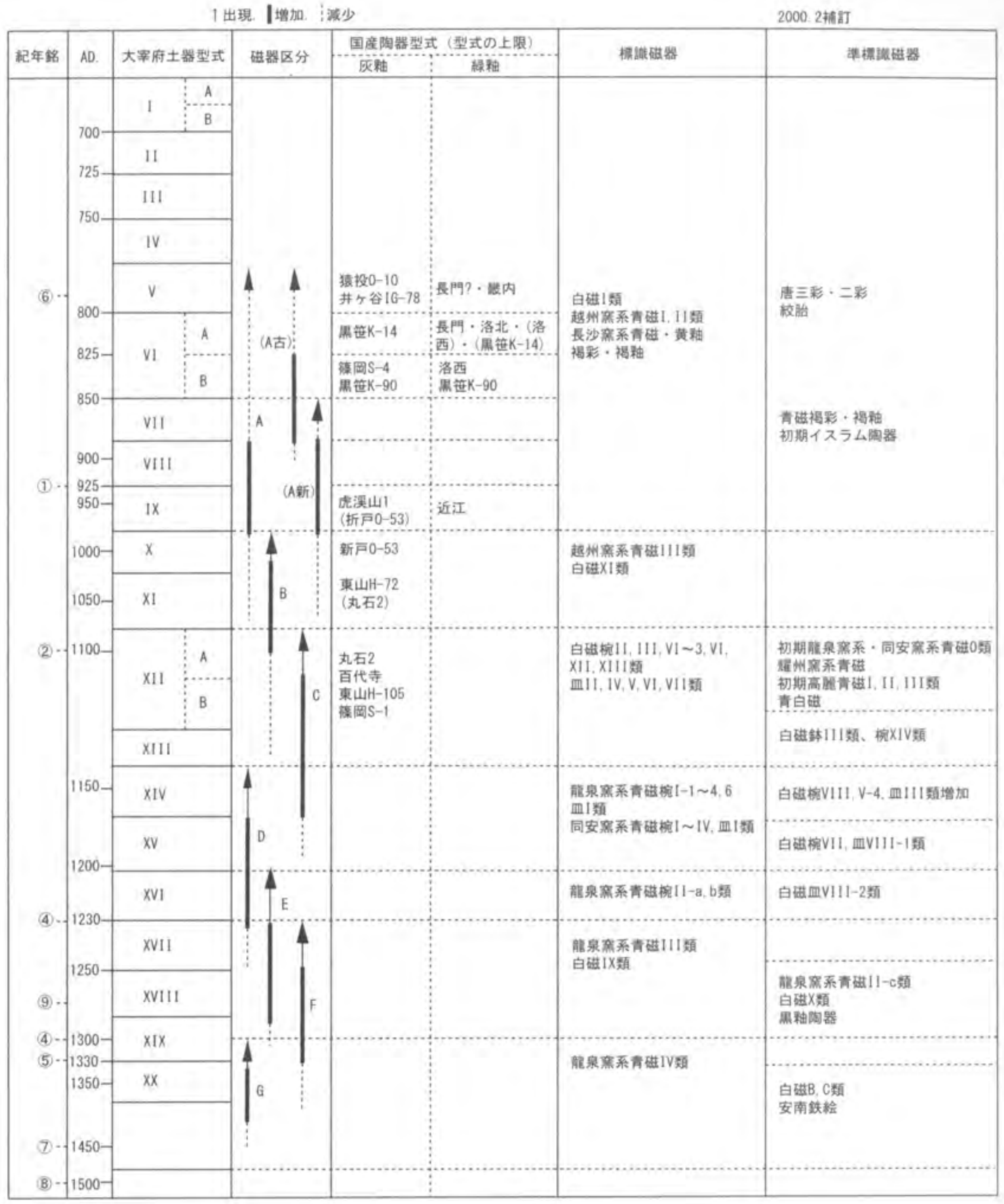
Ⅲ. 調査および整理方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（高橋）8

Ⅳ. 調査報告
1．大宰府条坊跡第193次調査
(1) 調査に至る経過 ・・（山村）9
(2) 基本層位 ・・・（山村）9
(3) 検出遺構 ・・・（山村・高橋）11
(4) 出土遺物 ・・・（高橋）33
(5) 小結 ・・・（山村）83
2．大宰府条坊跡第210次調査
(1) 調査に至る経過 ・・（高橋）111
(2) 基本層位 ・・・（高橋）111
(3) 検出遺構 ・・・（高橋）111
(4) 出土遺物 ・・・（高橋）138
(5) 小結 ・・・（高橋）186
(6) 大宰府条坊跡第210次調査隣接地調査について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（高橋）193
3．大宰府条坊跡第210-2次調査
(1) 調査に至る経過 ・・（高橋）195
(2) 基本層位 ・・・（高橋）195
(3) 検出遺構 ・・・（高橋）196
(4) 出土遺物 ・・・（高橋）201
(5) 小結 ・・・（高橋）210
4．大宰府条坊跡第283次調査
(1) 調査に至る経過 ・・（宮崎）217
(2) 基本層位 ・・・（宮崎）217
(3) 検出遺構 ・・・（宮崎）217
(4) 出土遺物 ・・・（宮崎）221
(5) 小結 ・・・（宮崎）229
5．大宰府条坊跡第284次調査
(1) 調査に至る経過 ・・（宮崎）235
(2) 基本層位 ・・・（宮崎）237
(3) 検出遺構 ・・・（宮崎）237
(4) 出土遺物 ・・・（宮崎）239

(5) 小結 ・・ (宮崎) 243
6. 山ノ井遺跡第1次調査
(1) 調査に至る経過 ・・ (山村) 247
(2) 基本層位 ・・ (山村) 247
(3) 検出遺構 ・・ (山村) 247
(4) 出土遺物 ・・ (山村) 249
(5) 小結 ・・・ (山村) 252

V. 特論 ・・・ (高橋・西野) 256

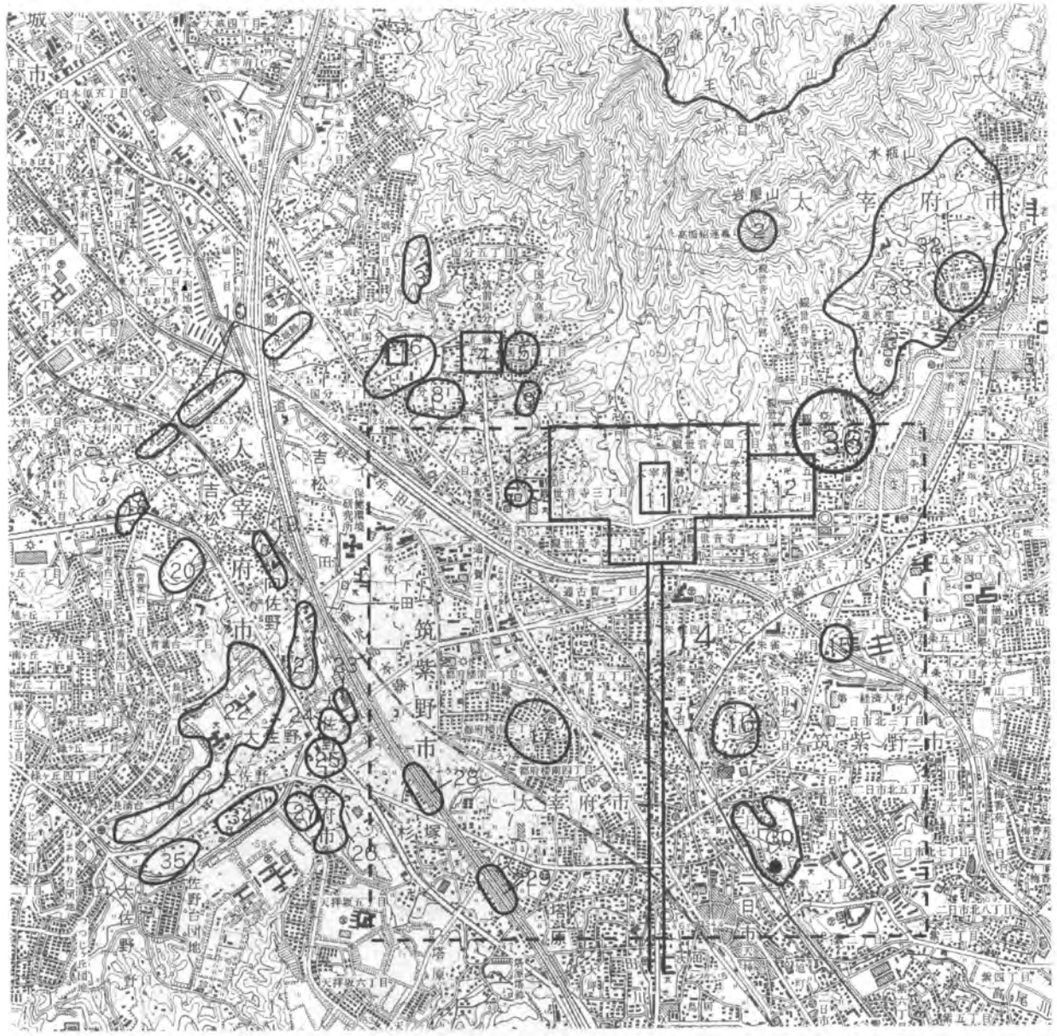
VI. 総括 ・・ (高橋) 264



紀年銘資料
①A. D. 927 延長5年, 大宰府74次SD205A溝
②A. D. 1091 寛治5年, 平安京左京4条1坊SE8井戸
③A. D. 1224 貞応3年, 大宰府33次SD605溝
④A. D. 1304 嘉元2年, 大宰府109. 111次SD3200溝
⑤A. D. 1330 元徳2年, 大宰府45次SX1200池
⑥A. D. 784 延暦3年, 長岡京102次SD10201溝
⑦A. D. 1459・1465 長禄3・寛正5年, 福岡市井相田CII・SG16池
⑧A. D. 1501 文亀元年, 大宰府70次SD1805溝
⑨A. D. 1265 文永2年, 博多62次713土壙

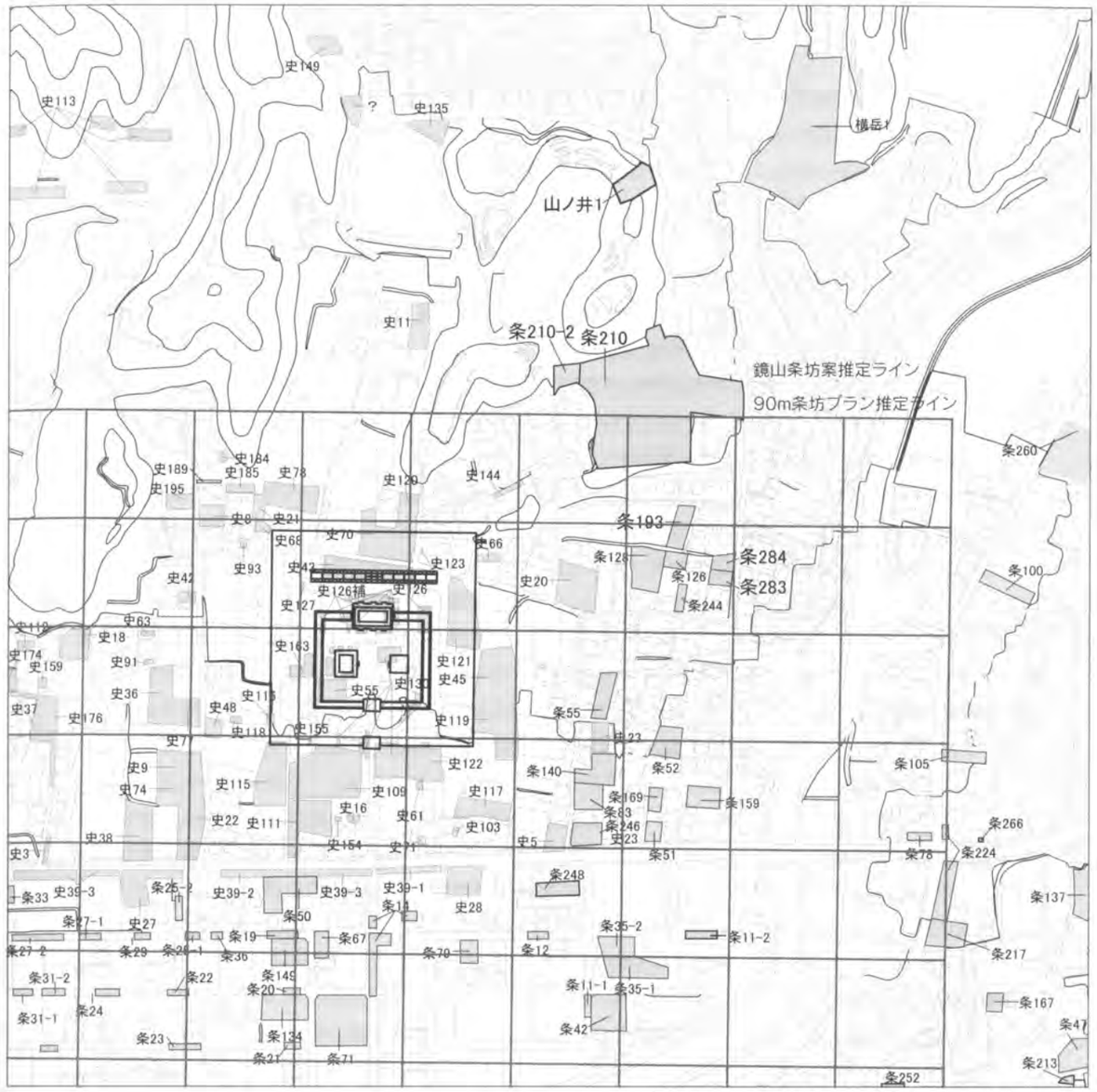
文献
①九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
②田辺昭三・吉川義彦「平安京跡発掘調査報告左京四条一坊」1975 平安京調査会
③九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」1975
④九州歴史資料館「大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報」1989
⑤九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
⑥長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
⑦福岡市教育委員会「井相田C遺跡II」「福岡市埋蔵文化財調査報告書179」1988
⑧九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
⑨福岡市教育委員会「博多48」「福岡市埋蔵文化財調査報告書397」1995

Fig.1 大宰府出土土器型式と国産陶器・貿易陶磁編年



1.大野城跡
2.岩屋城跡
3.陣ノ尾遺跡
4.筑前国分寺跡
5.辻遺跡
6.国分松本遺跡
7.筑前国分尼寺跡
8.国分千足町遺跡
9.御笠団印出土地
10.水城跡
11.大宰府政庁跡
12.観世音寺
13.遠賀団印出土地
14.大宰府条坊跡(破線内)
15.君畑遺跡
16.般若寺跡
17.市ノ上遺跡
18.神ノ前窯跡
19.原口遺跡
20.篠振遺跡
21.前田遺跡
22.宮ノ本遺跡
23.雛川遺跡
24.フケ遺跡
25.尾崎遺跡
26.脇道遺跡
27.殿城戸遺跡
28.剣塚遺跡
29.唐人塚遺跡
30.峯・峯畑遺跡(●は峯火葬墓)
31.客館跡推定地(西鉄操車場跡)
32.浦城跡
33.原遺跡
34.京ノ尾遺跡
35.カヤノ遺跡
36.報告現場一帯

Fig.2　太宰府市周辺遺跡分布図（1/30000）



条○次…大宰府条坊跡第○次調査(太宰府市教委　調査分)
史○次…大宰府史跡第○次調査(九州歴史資料館　調査分)

Fig.3　調査地と周辺調査地点（1/5000）

I. 調査地周辺の地理的・歴史的環境

地理的環境

太宰府市は福岡県の中央部に位置し、福岡市の南東約 16km 付近に立地する。北は四王寺山、東に宝満山があり、市を縦貫する御笠川は、宝満山に源を発して市街地を通り、途中鷺田川、大佐野川と合流し、特別史跡水城跡を越えて、末は博多湾に注いでいる。地形的には福岡市から久留米に抜ける交通の要所に位置し、南北の山稜に挟まれた峡間地である。調査地点は平野部、平野と丘陵の接合部、丘陵部と多岐にわたっているが、おおむね四王寺山から南へ派生する舌状丘陵と、その突端部に接合するなだらかな平坦面に遺構が点在している。

歴史的環境

調査地は、字名でいうところの「山ノ井」、「朝日」の範囲に点在している。山ノ井の地名は南北朝期にはすでに確認されている。永和 2 年（1376）に、二条良基が九州探題今川了俊にあてた歌伝書「九州問答」に「宰府山ノ井ニテ　山ノ井ノ陰サヘシゲル木ズエ哉」と周阿の作を載せており、連歌師周阿が大宰府の山ノ井の地で、連歌を催したことが知られている。朝日の地名は、『筑前國續風土記拾遺』によると以下の通りである。

「朝日山　横岳に境へる小山の名前なり。太宰少貳貞經入道妙恵の弟に朝日但馬守資治（鎮西要略に資信に作る。）其子資真經法等世に朝日氏と稱す。此地より出たる家名なり。大内家筑前を押領せし後は子孫富國を去て肥前國にあり。今の崇福寺の内に朝日地蔵とて有ハむかしここに在りしを崇福寺を箱崎の松原に移されしときかしこに地蔵も移せり。依て名つく。」また同じく『筑前國續風土記拾遺』によると、朝日地蔵付近はもと崇福寺の境内で、佛性寺という塔頭の址であったという。佛性寺はおそらくは「ブッショウジ」と発するのであり、これは観世音寺 49 子院の 1 つ「仏餉寺」と同じ寺をさしていると推測できる。

現地の位置関係から朝日地蔵の付近は、横岳崇福寺の境内域と観世音寺子院群の境となっており、両方の勢力がぶつかる拠点のため、このような伝承の混在が生まれたものと思われる。『太宰府横嶽山諸伽藍図』には朝日地蔵、朝日山としか記されてないため、横岳崇福寺の伽藍内に「ブッショウジ」という寺があったかどうかは不明であるが、このあたりの古寺址の伝承が江戸期まで伝わっている点を重要視しておきたい。また、条坊第 193 次調査地点の道路を挟んだ北側の丘陵までの平坦地に建てられている家の屋号を、地元ではブッショウジと呼んでいることも大きな証左となろう。また字朝日の南側には少弐氏の居館があったと推定される字御所ノ内もあり、重要な政治拠点にも近接していることは注目される点である。

この地域の歴史を語るときに観世音寺と横岳崇福寺の二つの大寺の歴史的展開は欠かすことができない。まずは観世音寺に注目してみたい。観世音寺の創建は、『続日本紀』和銅 2 年（709）の元明天皇の詔から、天智天皇が母斉明天皇のために発願し建立したのが始まりとされる。天智天皇在命中の詔であるならば、遅くても 671 年以前には建設の計画が建っていたことになる。伽藍造営の段階は複数に分かれていたと推測されるが、天平 17 年 11 月に僧玄昉が大宰府に派遣された後、天平 18 年（746）6 月に観世音寺は完成したと記録されている。（『元亨釈書』）観世音寺は大宰府政庁から東へ 4 町ほどしか離れておらず、後に府（大宰府）の大寺と称されるほど大宰府と緊密な関係が立地の上からもうかがえる。古代の観世音寺は、大宰府という巨大な権力の後ろ盾があったうえに、荘園経営が順調にすすみ発展を続けた。しかしながら、古代末になると、その威光に陰りが見受けられる。1 つはたび重なる災害が要因となる建物の被災によるもの。2 つには後ろ盾となる大宰府自体の衰退。3 つには信仰の変容。また、康和 2 年（1120）には奈良東大寺の末寺となっている。これも衰退の原因の 1 つとしてあげられよう。そうしたなか中世以後は武家に庇護をもとめていく。とくに建久 7 年（1196）に大宰少弐を任じ鎮西守護職となった資頼を祖とする少弐氏一族は観世音寺に対して積極的に保護をしている。中世段階でのこうした武家による庇護の表れが、観世音寺子院と伝えられる 49 院の伝承に繋がっていくと考えられる。

観世音寺子院群のはじまりは、武藤資頼が観世音寺の近くに安養院、華蔵院以下 2 院を建てたことが契機となった可能性が高く、その具体的な時期は 1196 ～ 1228 年の間と考えられている。これ以後、観世音寺の周辺には子院とよばれる寺院が点在することとなる。おそらく、子院の規模は大小あり、それぞれ成立の背景が異なることも影響してか、子院それぞれの伝承が現在までほとんど伝わってきていない。そのため子院の位置を推定できるのもおおよそ半数に過ぎない。少弐氏が大宰府を追われた以後は、大内氏が筑前に進出してくる。以後、高橋、豊臣、小早川などの武家勢力により寺領が没収され、没落に拍車がかかった。近世になると博多商人の尽力で講堂が再建されるが、黒田藩による積極的な修繕はなかったと思われる。その後、元禄 16 年（1703）には戒壇院が分離独立して律宗の寺院となった。さらに寛政 2 年（1790）には宗旨改めによって観世音寺は安楽寺延寿王院の支配下となり、府の大寺と称せられた威光は見る影もなくなった。近現代に入ると、観世音寺復興会を始めとする地域の方々の努力と、国、県、町（のち市）の援助により往時の姿を取り戻してきているといえよう。

横岳崇福寺は仁治元年（1240）に随乗坊湛慧によって建立された禅宗寺院（臨済宗）である。建立の翌年、湛慧は中国の宋から帰国した師である聖一国師（円爾弁円）を迎えて開堂した。聖一国師は、1 年の在寺の後、都に上り、仁治 3 年（1242）には、博多に承天寺を建立して、禅の普及に努めることとなる。崇福寺は、文永 9 年（1272）には、湛慧の要請に応じて、南浦紹明（後の大応国師）が開山することになる。大応国師は中国の元軍が襲来した文永・弘安の役に当たって、大宰少弐武藤資頼のもとで、元軍との折衝役としても活躍している。そのため武藤少弐氏との結びつきは強かったと推測できる。開山以後、太宰府の地に 33 年にわたってとどまることとなり、禅寺として発展していく。崇福寺は、武藤氏の庇護のもと、大応派の名僧の活躍とともに名声を高めていき、隆盛時には、現在の太宰府市の白川（旧小字横岳）辺りから東観世団地一帯に広がる広大な地に伽藍が展開した。史料や伝承によれば禅宗様式の七堂伽藍の他に、十三塔頭、十七庵を擁した立派なものであり、天正年間の薩摩島津氏の岩屋城攻めの際に、兵火に巻き込まれて伽藍の大半を焼失するまで三百数十年法灯は絶えることがなかったとされている。

注目されるのは朝日地蔵に伝わる説話で、「観世音寺の節分の行事に巻き込まれ、鬼として叩かれた湛慧禅師は、自らを嘆き朝日山の東麓に穴を掘り、読経を唱えそのまま息絶えた」というものである。朝日地蔵のある場所は元々、「開基湛慧禅師塔　延寶二年　吉塚宗也建」と記された碑が建っており、明治 30 年 11 月まではその存在が追える。延寶二年は西暦 1674 年。また、大野城太宰府旧蹟全図北（文化 3 年（1806）成立か）にも現地付近に「タンエノトウ」と記載されているため、江戸時代に碑もしくは塔はあったと考えられる。

この湛慧の話は、旧来の宮寺であった観世音寺と新しく台頭してきた横岳崇福寺との対立関係を表していると思われる。実際には湛慧の学徳ゆえか、横岳崇福寺は公の寺（官寺）として認められ、その後隆盛を誇った。このように今回報告する地域は、歴史的にも古代から中世にかけて政治の中心地に近く、宗教施設が展開する重要な地域となっている。

考古学的所見

大宰府条坊跡第193次（以下、大宰府条坊跡については条と略す）の周辺にあたる字朝日地区では、数回の埋蔵文化財の発掘調査が行われている。条193次の南側で条126次調査。南東側で条128次調査。条126次の南側では条244次調査。条128次調査から観世音寺方向に向かうと、九州歴史資料館が調査した大宰府史跡第20次調査がある。（以下、大宰府史跡については史と略す）条126次は11～14世紀代の遺構で構成され、井戸や溝、土坑などが検出されている。特に南北方向の2条の溝（SD050、SD095）については、調査担当者は11世紀前半に埋没した大宰府条坊関係のものとしている。条128次は遺構面が3面検出されており、8世紀～13世紀後半までの遺構が確認されている。第1面で調査している12世紀中頃～13世紀後半の遺構としては、壁溝を有する構築物、桶組井戸、廃棄土坑などが確認されている。条244次調査は、8世紀代～14世紀初頭の遺構で構成されているが、鎌倉時代以降は削平により確認できない状態だった。史20次調査では、南北方向の落ち込みと東西方向の石垣を検出している。土器は土師器の坏、皿で底部切り離し技法が糸切りのため12世紀以降の可能性が考えられる。調査担当は鎌倉期後期～室町期と推定している。

参考文献

『筑前國續風土記拾遺』
『大宰府市史考古資料編』1992年　太宰府市
高倉洋彰『大宰府と観世音寺』1996年　海鳥社
『大宰府史跡 昭和47年度発掘調査略報』1973年　九州歴史資料館

II. 調査体制

各年次の調査体制は以下の通りである。

（平成9／1997年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主　事	今村江利子
調査	技術主査	狭川真一（9年10月1日～）
	主任技師	狭川真一（～9年9月30日）
		城戸康利、山村信榮（調査担当）、中島恒次郎、井上信正
	技　師	髙橋　学（調査担当）、宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子、森田レイ子

（平成12／2000年度）

総括	教育長	長野治己（～12月24日）
		關　敏治（12月25日～）
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美（4月1日～）
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫（～10月23日）
		神原　稔（11月1日～）
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	野寄美希
	嘱　託	鈴木弘江
調査	技術主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮、中島恒次郎、井上信正、髙橋　学（調査担当）、宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子、森田レイ子、佐藤道文

（平成22／2010年度）

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	山田純裕
	文化財課長	井上　均
	保護活用係長	菊武良一
	調査係長	池本義彦
	主任主査	吉原慎一
	事務主査	橋川史典
調査	主任主査	城戸康利（都市整備課併任）
		山村信榮、中島恒次郎、井上信正
	技術主査	髙橋　学、宮崎亮一（調査担当）
	技師	遠藤　茜
	技師（嘱託）	白石渓冴

（平成23／2011年度）

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	齋藤廣之
	文化財課長	井上　均
	保護活用係長	菊武良一
	調査係長	池本義彦
	事務主査	橋川史典
	主事	古川あや
調査	主任主査	山村信榮（調査・整理担当）、中島恒次郎、井上信正
	技術主査	髙橋　学（整理担当）、宮崎亮一（整理担当）
	主任技師	遠藤　茜
	技師（嘱託）	白石渓冴

景観・歴史のまち推進係
係長　　城戸康利（文化財課併任）

（平成 24 ／ 2012 年度）・・・報告書発行

総括	教育長	關　敏治（～ 12 月 1 日）
		木村甚治（12 月 25 日～）
庶務	教育部長	古野洋敏
	文化財課長	井上　均（～ 6 月 30 日）
	・	菊武良一（7 月 1 日～）
	文化財副課長	城戸康利（7 月 1 日～）
	保護活用係長	菊武良一（～ 6 月 30 日）
		友添浩一（7 月 1 日～）
	調査係長	山村信榮
	事務主査	橋川史典
	主事	古川あや
調査	主任主査	中島恒次郎（～ 6 月 30 日）
		井上信正
	技術主査	髙橋　学（整理担当）
		宮崎亮一
	主任技師	遠藤　茜
事務取扱	景観・歴史のまち推進係長	中島恒次郎（文化財課併任）（7 月 1 日～）

III. 調査および整理方法

太宰府市教育委員会では、1979（昭和 54）年から現在まで市の事業の一環として、埋蔵文化財包蔵地区内の埋蔵文化財発掘調査を行ってきた。調査方針や整理方法については、詳しくは参考文献を参照していただきたい。この調査方針ならびに太宰府市発掘調査整理指針を元に、太宰府市の調査・整理方法については熟成が為されてきた。その特徴としては、担当職員が複数存在しても、同じ調査・整理の質を保てるように、調査、整理、報告の各作業において遵守すべきルールを作成している点にある。もちろん、各担当者の裁量の範囲内で多少、弾力的な運用は行っているが、骨子の部分が共通していることが資料の信頼性の向上につながっていると考えている。

今後は担当者の退職などで未整理のままとなっている多くの発掘調査現場の報告書の刊行が課題となってくる。増え続ける出土品の保存場所と共に解決していかねばならない問題である。

【参考文献】

『大宰府条坊跡』太宰府町の文化財第 5 集　太宰府市教育委員会　1982
『太宰府・佐野地区遺跡群 I』太宰府市の文化財第 14 集　太宰府市教育委員会 1989

IV. 調査報告

1．大宰府条坊跡第 193 次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市観世音寺 5 丁目 7（旧大字観世音寺字仏餉寺）に所在する畑地で、専用住宅の建築に先立ち、平成 9（1997）年 4 月 17 日から 9 月 29 日にかけて国庫補助事業で発掘調査を実施した。調査の途中で観世音寺子院に係わる可能性のある建物群が確認されたため、地権者と交渉をおこなったところ遺跡の保護に同意があったため、調査は基本的に検出面で止め、1 面目の遺構が深かった調査区南東側の F5 区周辺の一部を掘削し 2 面目の遺構の確認をおこない、その後に埋め戻しをおこなった。調査は髙橋学と山村信榮が担当した。開発対象面積は 700 ㎡、調査面積は 570 ㎡である。

(2) 基本層位

(Fig.4)

遺構は耕作土直下の現地表面から深さ 0.2m で確認された。面は四王寺山のある北側に高く御笠川のある南側に向かって緩やかな傾斜を持ち、調査区北側の遺構検出面のレベルは標高 45m、南側では 44.5m を測る。掘削深度の深い SE030 壁面での土層観察では最初の遺構確認面から無遺物層と思われる層までの深さは 1.4m を測り、その間に 7 面の層理面が確認されている。

Fig.4 第 193 次調査調査区東壁土層図、調査区 2 面目西壁土層図（1/80）

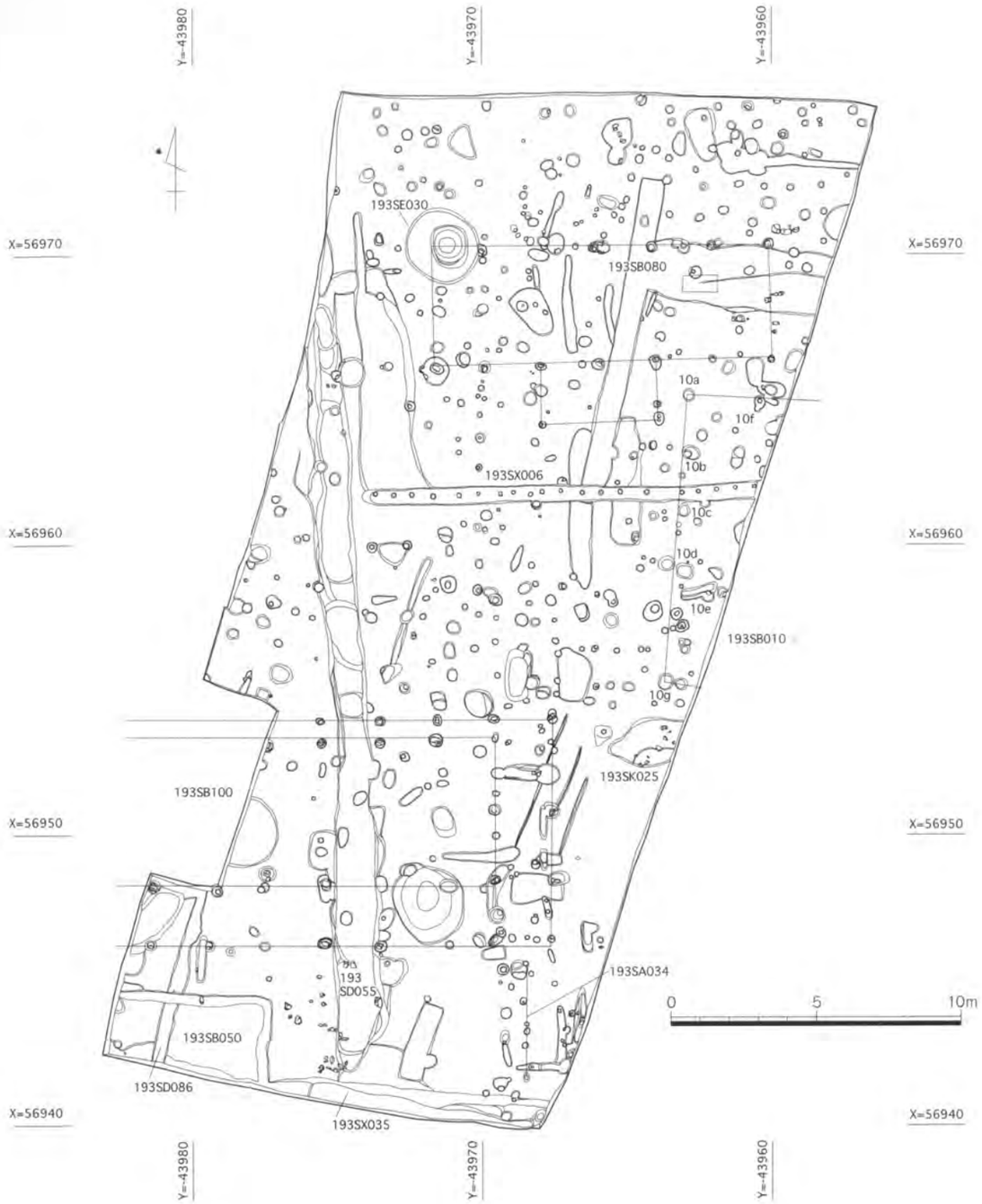


Fig.5 第 193 次調査遺構図（1/200）

(3) 検出遺構（Pla.1-1）

1 面遺構

柵

193SA034（Fig.7）

調査区南東で確認された間以上の南北の柵で、振れは N-1° 42′ 35″ -W を測る。柱間は北から 1.2、1.2、1.5m の南北 3.9m を測る。この南側は地形上の段落ちとなっている。連続する土坑群 SX036、037、086 に並行しており、関連性が指摘される。また、この遺構の北にある掘立柱建物 SB100 とも方位を同じくして近接しており、そちらとの関係も考慮する必要があるが、先の土坑群と SB100 は重複して前後関係があり、帰属先により性格が大きく異なることになる。12 世紀後半以降の遺構 SK073 を切って形成されており、それより新しい時期のものと言える。

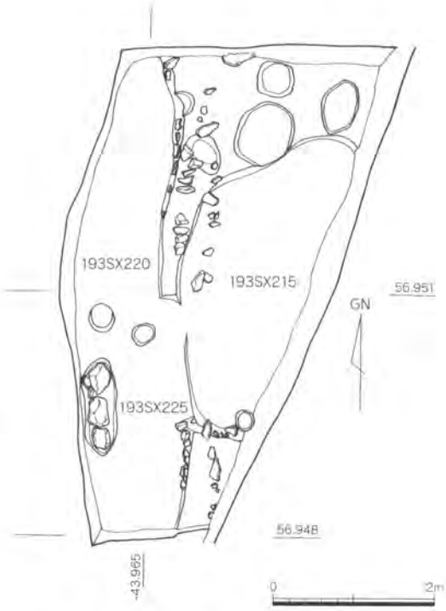


Fig.6 第 193 次調査 2 面目遺構図（1/80）

掘立柱建物

193SB010（Fig.7）

調査区中央東側で検出された遺構で、1 間 ×5 間以上の南北棟の建物で東側の調査区外に広がって展開するものと考えられる。振れは N-1° 21′ 50″ -E で、建物の規模は東西 3.5m 以上、南北 10m 以上、柱間は東西 2.5m、南北 2.0m を測る。柱の太さは柱痕から約 20cm に復元される。築地壁の基礎地業跡の可能性がある SX006 と交差するため、それと関連するとみられる掘立柱建物 SB080 とは時期差があると考えられる。調査区内では唯一の南北棟である。柱穴からは 13 世紀中頃までの遺物が出土しており、築地壁 SX006 は 14 世紀後半までの遺物を持っており、この間に建てられたか、それ以降に成立したかは物理的な先後関係からは判断できない。

193SB050（Fig.8）

調査区南西側で検出された遺構で、溝が矩形に掘られた上から径 15cm ほどの柱が約 1.2 ～ 1.5m 間隔で打ちこまれている。柱痕は 6 つ確認されている。掘り方を伴わず形状がやや先細っているため、上から杭のように打ち込まれたものと考えられる。条坊 88 次や南条坊で先行事例があり、工房などに利用された壁建ちの建物と評価されている遺構である。振れは N-2° 23′ 9″ -E を測る。溝中に掘り返した痕跡や柱間に礎盤のような石が置かれていることから、建て替えや補修があった可能性がある。溝からは銅銭のほか 13 世紀中頃までの土器類が出土している。西側は 13 世紀前半までの遺物を持つ溝 SD086 を切り、南側は 16 世紀の遺物を持つ段落ち SX035 により切られる。

193SB080（Fig.9）

調査区北側で検出された東西棟の掘立柱建物で、東西 6 間、南北 2 間、東西 11.5m、南北 4m を測る。柱間は西端の 1 間（1.6m）を除けばほぼ 2m 間隔で施工されている。平板な花崗岩の角亜礫を礎盤とし、柱材は柱痕から 15cm 程度に復元される。東西中央の 2 間分の南側に幅 4m、長さ 2m の庇が設けられる。建物の振れは N-0° 51′ 34″ -W を測る。柱掘り方からは 13 世紀中頃までの遺物が出土している。

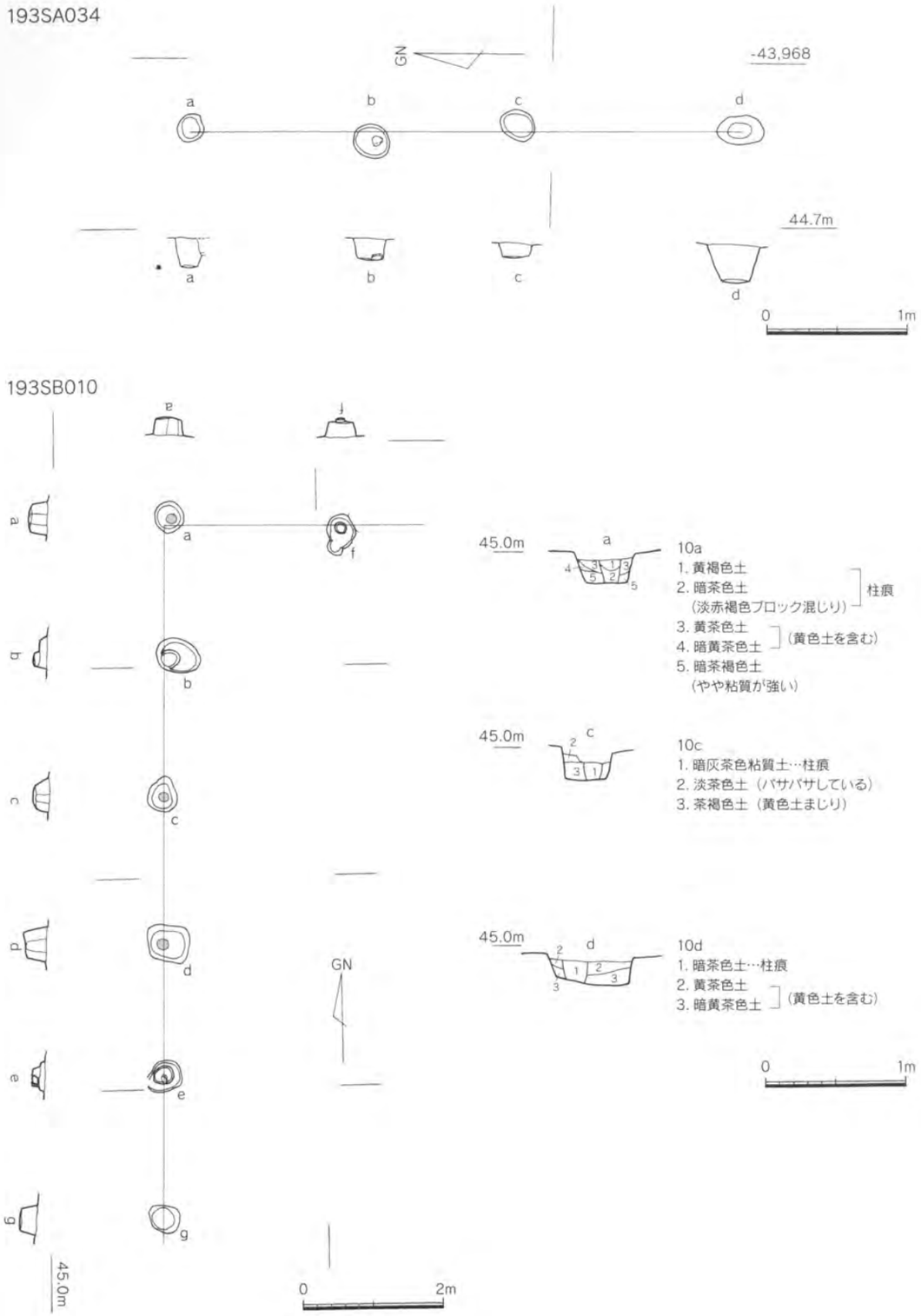


Fig.7　193SA034・193SB010（1/40、1/80、土層図は 1/40）

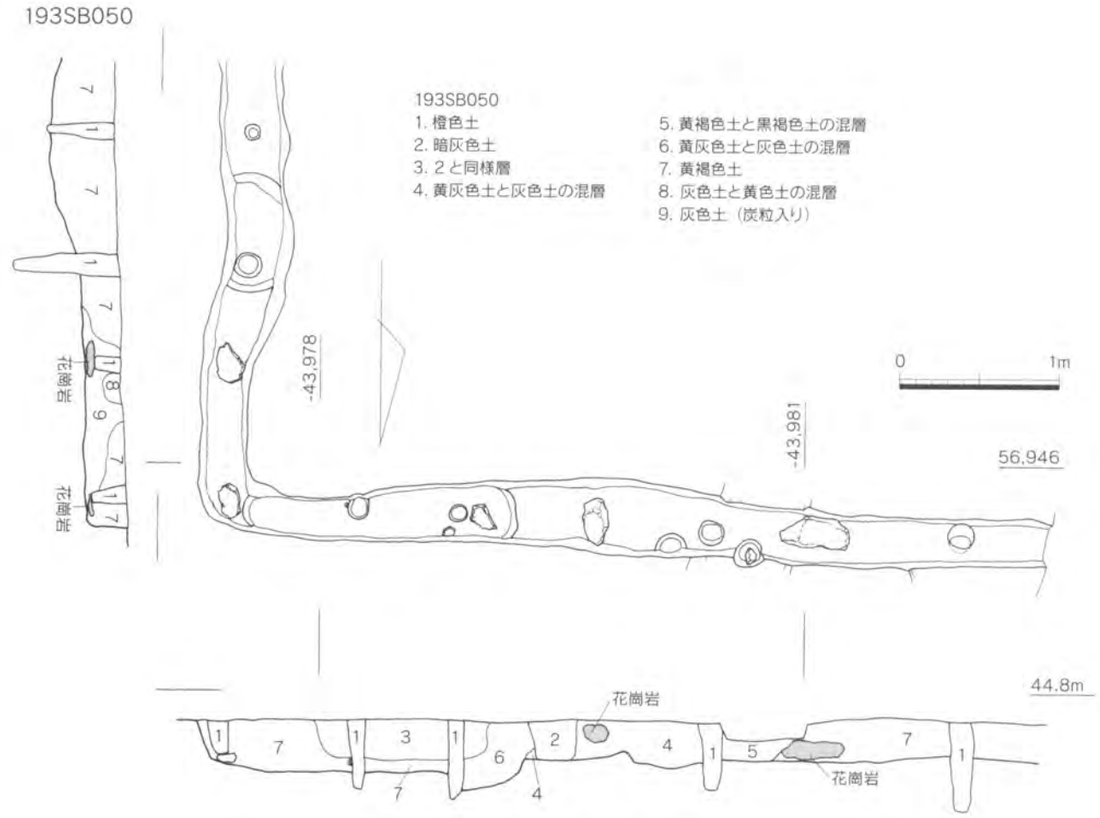


Fig.8 193SB050 遺構図（1/40）

建物の北西角は 13 世紀中頃までの遺物を持つ井戸 SE030 に切られており、それに先行する時期に位置付けられる。南に延びる連続する土坑群 SX036、037、086 の正面にあたるため、そちらとの関係があるのかもしれない。

193SB100（Fig.10）

調査区南側で検出された東西棟の掘立柱建物で、東西 7 間以上、南北 4 間、東西 13.9m、南北 7.75m を測る。南北と東側には庇があり、身舎は 6×2 間となる。検出された柱 29 に対して 19 個に花崗岩の小礫による礎盤が入れられている。柱材は柱痕から 15 ～ 20cm であったことが知られる。建物の振れは N-0° 30′ 47″ -W を測る。本調査区中では最大で、3 面以上に庇を持つ主殿的な建物といえる。14 世紀前半までの遺物を持つ 193SK098、15 世紀までの遺物を包含する溝 SD055 の埋土を穿って建てられており、それ以降の時期の建物といえる。柱 ap、aq、bd、などに掘り返した不整合な土層が観察され、建物解体時に柱が掘り取られたものがあった可能性がある。庇を持つ建物の構造から、居館の主屋か仏殿のような性格が考えられる。建物の正面にはこの建物に先行した時期に小堂の基壇と考えられる SX224 があり、仏殿であった可能性も想定される。

溝

193SD055（Fig.11）

調査区の西端を穿つ、検出長 30m、幅 1.2 ～ 1.6m、深さ 0.2 ～ 0.3m、振れが N-2° 23′ 35″

193SB080

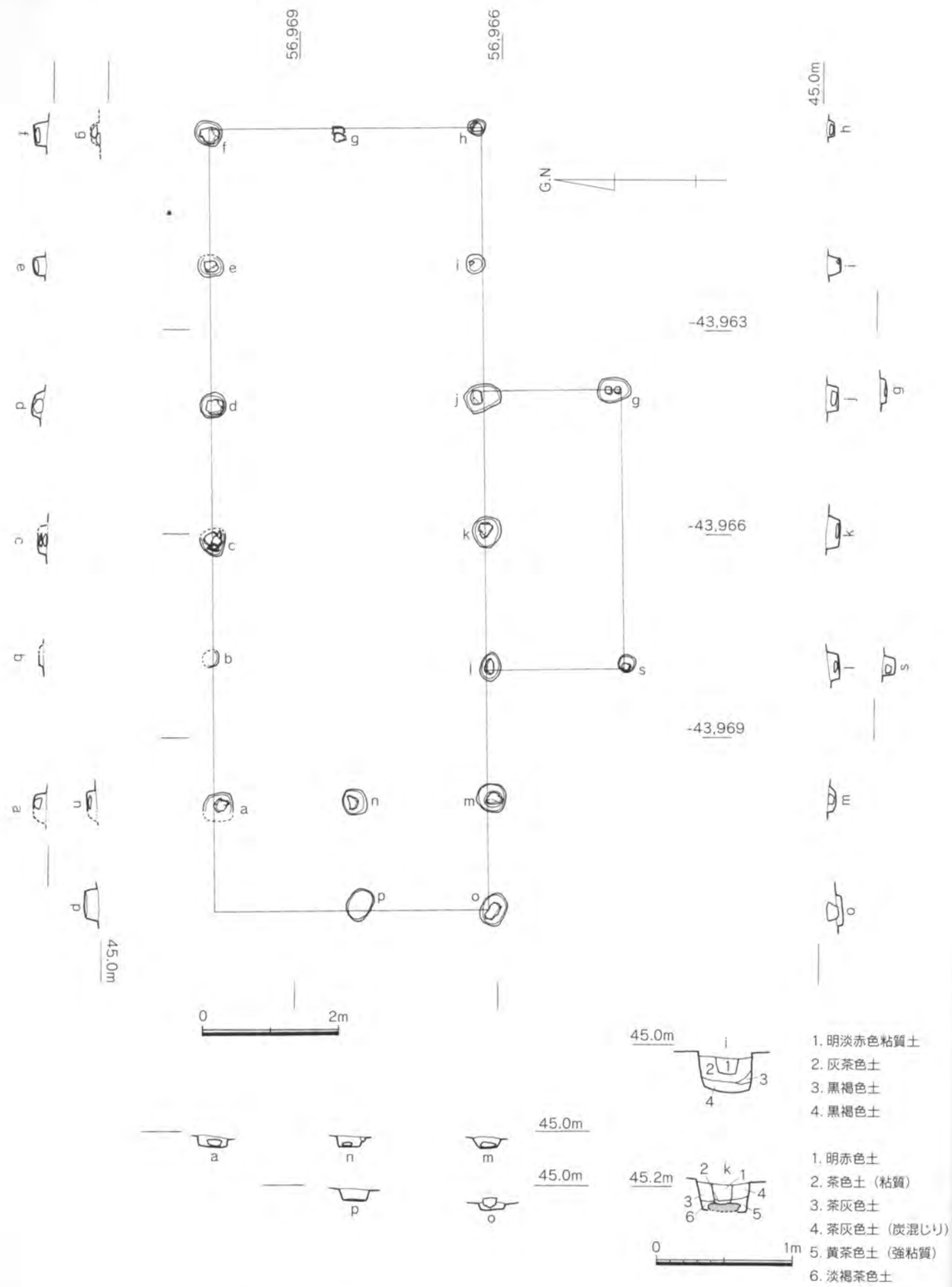


Fig.9　193SB080 遺構図（1/80、土層図は 1/40）

193SB100

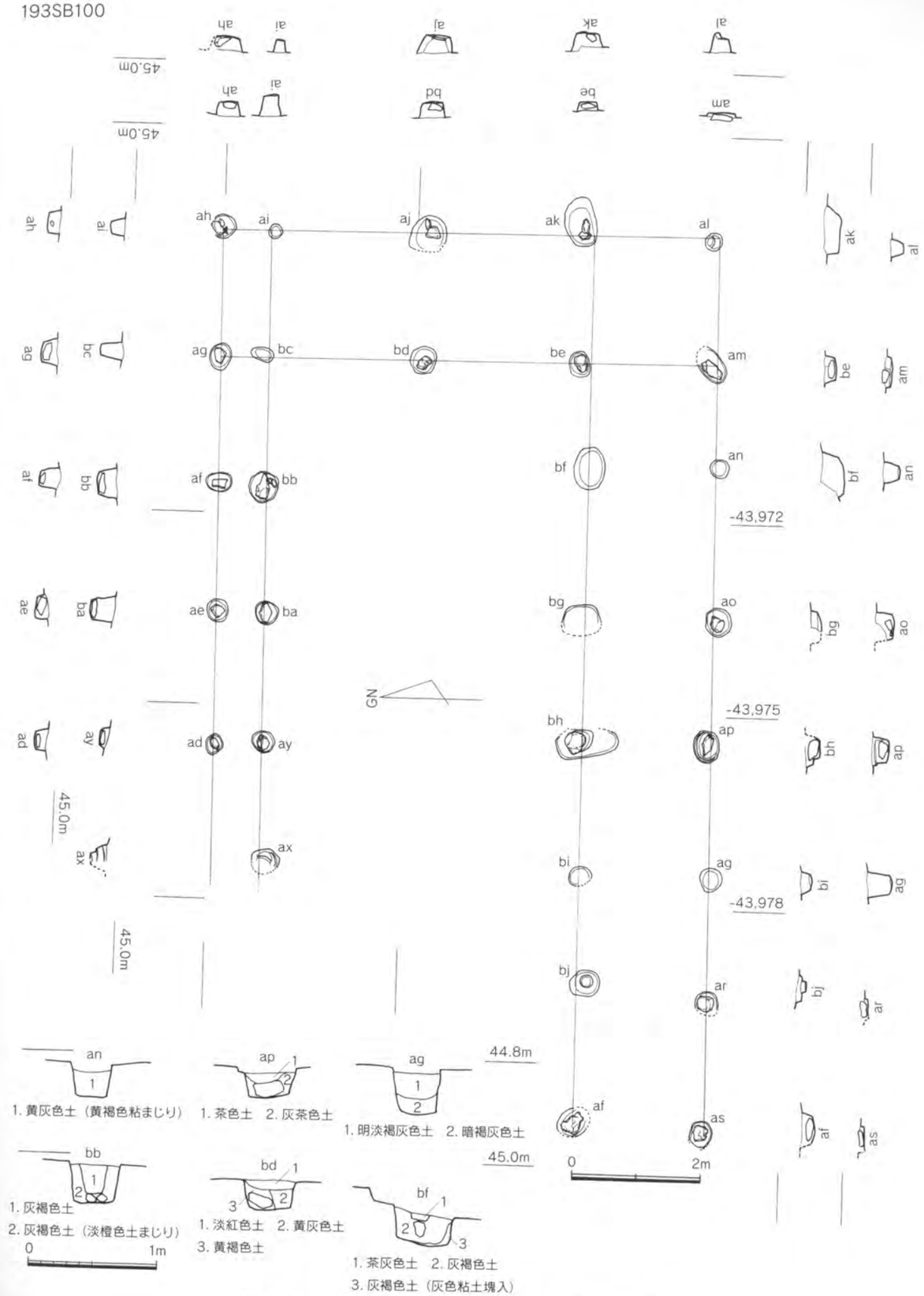


Fig.10　193SB100 遺構図（1/80、土層図は 1/40）

-W を測る南北溝である。溝底は一時的な水流により特に北側で凹凸が見られる。埋没土である最上層の明茶色土には 15 世紀代までの遺物を包含している。それ以下の層には 13 世紀後半までの遺物が見られる。掘立柱建物 SB100 に先行する遺構である。掘立柱建物群よりもやや東に傾いた方位を持っている。

193SD078 (Fig.11)

調査区の南中央付近にある遺構で、検出長 2.7m、幅 0.5 ～ 0.2m、深さ 0.05m、振れは東西の正方位に乗る溝である。埋土は 13 世紀中頃までの遺物を包含している。この溝の西延長部分の SD055 の溝の東肩のラインが東側に膨らんでおり、本来はつながって一体であった可能性もある。

193SD086 (Fig.11)

調査区の南西角にある遺構で、検出長 6m、幅 0.6 ～ 0.3m、深さ 0.1m、振れは N-11° 27′ 30″ -E を測る。13 世紀前半までの遺物が出土している。SB050 に先行する遺構である。

193SD121 (Fig.11)

調査区の中央付近西寄りにある遺構で、検出長 4m、幅 0.35 ～ 0.2m、深さ 0.05m、振れは N-10° 13′ 37″ -E を測る。遺構の時期を示す顕著な遺物は出土していない。

193SD143 (Fig.11)

調査区の北西にある遺構で、検出長 6m、幅 0.6 ～ 0.3m、深さ 0.1m、振れは N-3° 48′ 50″ -W を測る。SD055 に並行し、帯状で 13 世紀中頃までの遺物を持つ整地 SX040 を穿って形成される。13 世紀中頃までの遺物が出土している。

井戸

193SE030 (Fig.12)

調査区の北西にある遺構で、深さ 3.1m、掘り方は 2.5 ～ 2.6m の楕円形、井戸枠は径 1.2m の円形を呈す。調査途中で遺構が崩壊したため充分な土層観察ができなかったが、枠内の埋土は黄色系、掘り方の裏込めは茶色系の土壌で分離される。層の上位は掘り込みがあり層が乱れている。土坑などの 2 次的な用途があったものと考えられる。掘り方外側の地山部分では検出面から約 1.4m の深さで遺物包含層が 6 層観察され、それ以下の無遺物層と考えられる 6 層の層が観察された。遺物は枠内埋土、裏込めともに 13 世紀中頃までのものが出土している。

土坑

193SK008 (Fig.13)

調査区の中央東側で検出された。長さ 1.3m、幅 0.4m、深さ 0.4m を測る。

193SK015 (Fig.13)

調査区の中央東側で検出された。長さ 0.4m、幅 0.3m、深さ 0.2m を測る。淡黄灰色土で埋没する。

193SK021 (Fig.13)

調査区の中央東側で検出された。長さ 0.5m、幅 0.5m、深さ 0.3m を測る。13 世紀後半までの遺物が出土している。

193SK025 (Fig.13)

調査区の中央東側で検出された。長さ 2.6m、幅 1.7m、深さ 0.3m を測る。黒茶色土から褐色土で埋没する不整形な形状を呈す。13 世紀後半までの遺物が出土している。

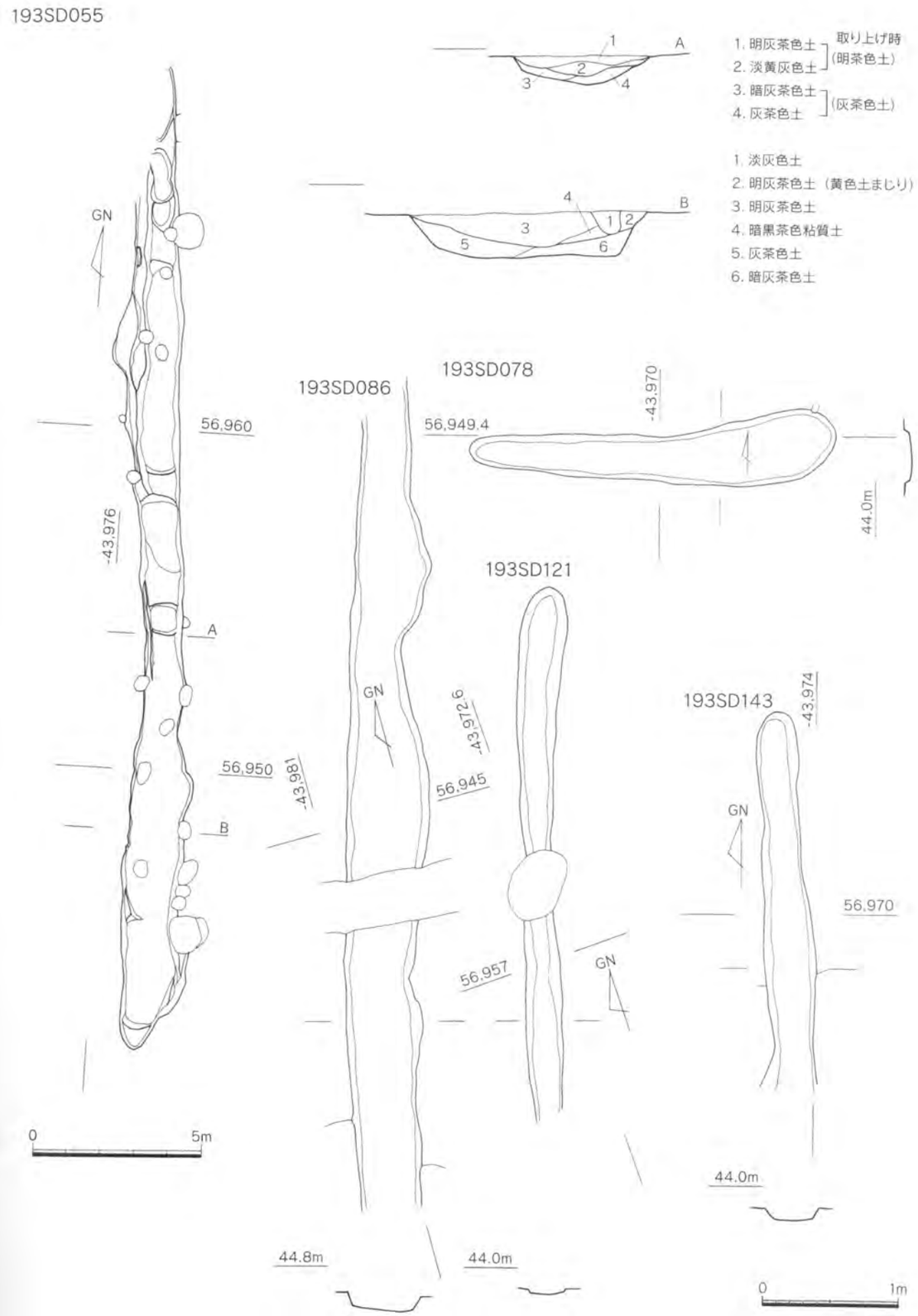


Fig.11　193SD055・078・086・121・143 遺構図（193SD055 は 1/160, 他は 1/40）

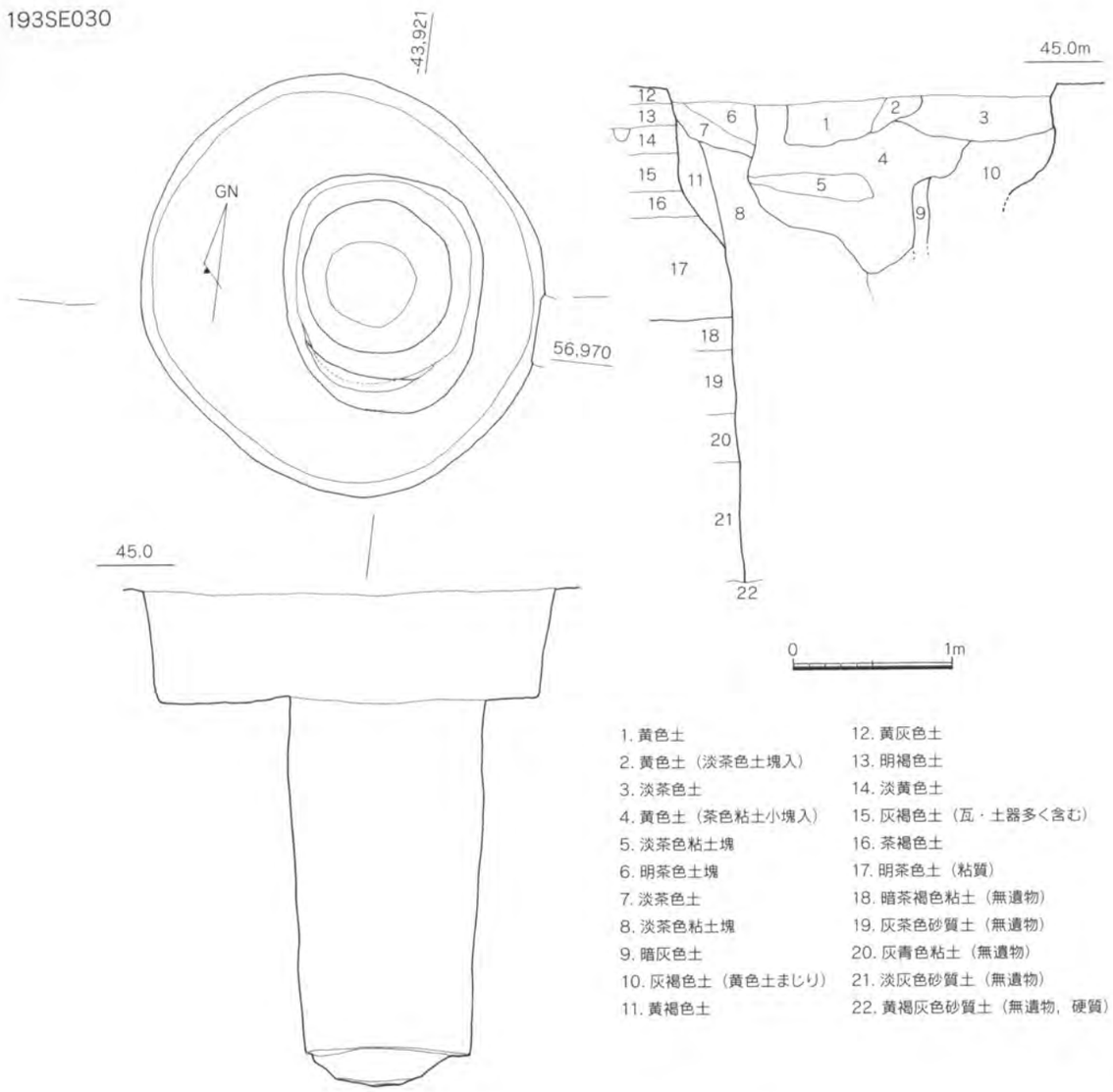


Fig.12 193SE030 遺構図・土層図（1/40）

193SK043（Fig.13）

調査区の北辺で検出された。長さ 0.8m、幅 0.5m、深さ 0.1m を測る。茶色土で埋没する。12 世紀までの遺物が出土している。

193SK044（Fig.13）

調査区の北辺中央で検出された。長さ 1.1m、幅 1.0m、深さ 0.1m を測る。茶褐色土で埋没する。SK046 を切る。12 世紀中頃までの遺物が出土している。

193SK046（Fig.13）

調査区の北辺中央で検出された。長さ 0.6m、幅 0.6m、深さ 0.1m を測る。茶灰色土で埋没する。SK044 に切られる。12 世紀中頃までの遺物が出土している。

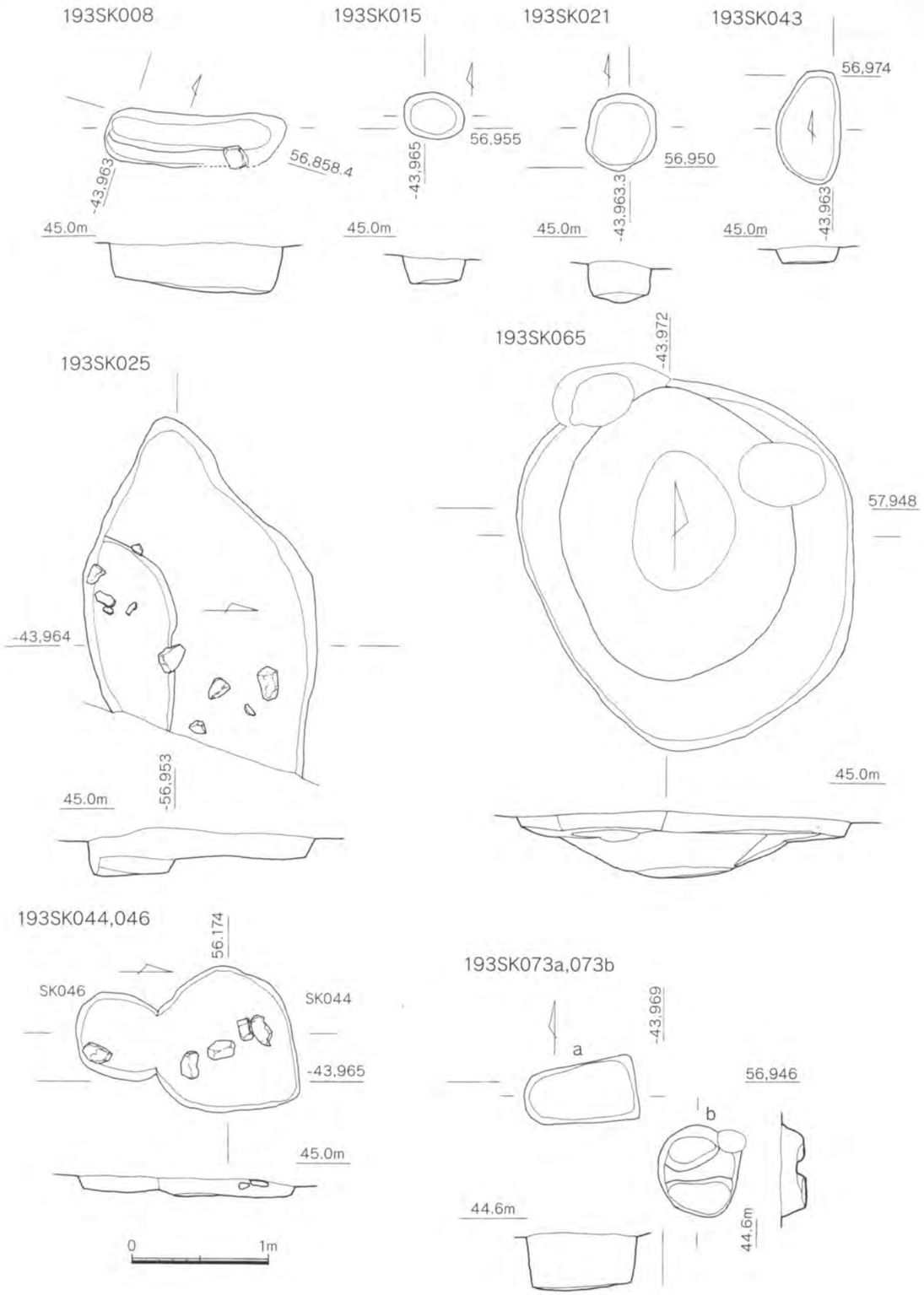


Fig.13 193SK008・015・021・025・043・044・046・065・073a.b 遺構図（1/40）

193SK059

調査区の北部やや東よりで検出された。長さ 1.0m、幅 0.4 m、深さ 0.14m を測る。埋土は明灰色土。193SK038（12 世紀中頃～後半）に切られる。12 世紀後半までの遺物が出土している。

193SK065（Fig.13）

調査区の北辺で検出された。長さ 2.7m、幅 2.4m、深さ 0.5m を測る。真中が深いすり鉢状を呈する。12 世紀中頃までの遺物が出土している。

193SK073（Fig.13）

調査区の南東で検出された。a は長さ 0.8m、幅 0.4m、深さ 0.4m を測る。b は長さ 0.7 m、幅 0.6m、深さ 0.2m を測る。明茶色土で埋没する。12 世紀後半までの遺物が出土している。

193SK077（Fig.14）

調査区の南側東寄りで検出された。長さ 1.8m、幅 1.1m、深さ 0.2 m を測る。灰黄色ブロック土で埋められている。平面形は方形を呈する。13 世紀後半までの遺物が出土している。

193SK079（Fig.14）

調査区の南側中央付近で検出された。長さ 1.1m、幅 0.6m、深さ 0.3m を測る。暗茶色土で埋没する。平面形は楕円形を呈する。近世までの遺物が出土している。

193SK088（Fig.14）

調査区の南側東寄りで検出された。長さ 1.6m、幅 0.4m、深さ 0.3m を測る。明茶色土で埋没している。平面形は溝状を呈する。

193SK098（Fig.14）

調査区の中央で検出された。長さ 1.1m、幅 1.0m、深さ 0.3 m を測る。下層は茶灰色土、上層は淡茶黄色の埋土である。平面形は方形を呈する。14 世紀前半までの遺物がまとまって出土している。掘立柱建物 SB100 はこの遺構を切って形成される。

193SK104（Fig.14）

調査区の中央で検出された。長さ 1.8m、幅 0.9m、深さ 0.3m を測る。長楕円形を呈する。13 世紀中頃までの遺物が出土している。

193SK128（Fig.14）

調査区の北西で検出された。長さ 1.0m、幅 0.9m、深さ 0.2m を測る。茶褐色の埋土である。掘立柱建物 SB080 はこの遺構を切って形成される。

193SK137（Fig.14）

調査区の北西で検出された。長さ 1.2m、幅 1.0m、深さ 0.3m を測る。埋土は暗灰茶色土である。13 世紀中頃までの遺物が出土している。

193SK186（Fig.14）

調査区の北西で検出された。長さ 1.0m、幅 0.9m、深さ 0.5m を測る。埋土は茶色土である。13 世紀前後～前半の遺物が出土している。

193SK227

調査区南東部で検出された。193SX220 の下層にあたる。遺構のプランは調査区外に延びる。長さ 3.3m、幅 0.95m、深さ 0.32m を測る。埋土はパサパサした明赤灰色土混じりの暗黒色粘質土。出土遺物は、12 世紀前半～中頃までの遺物が出土している。

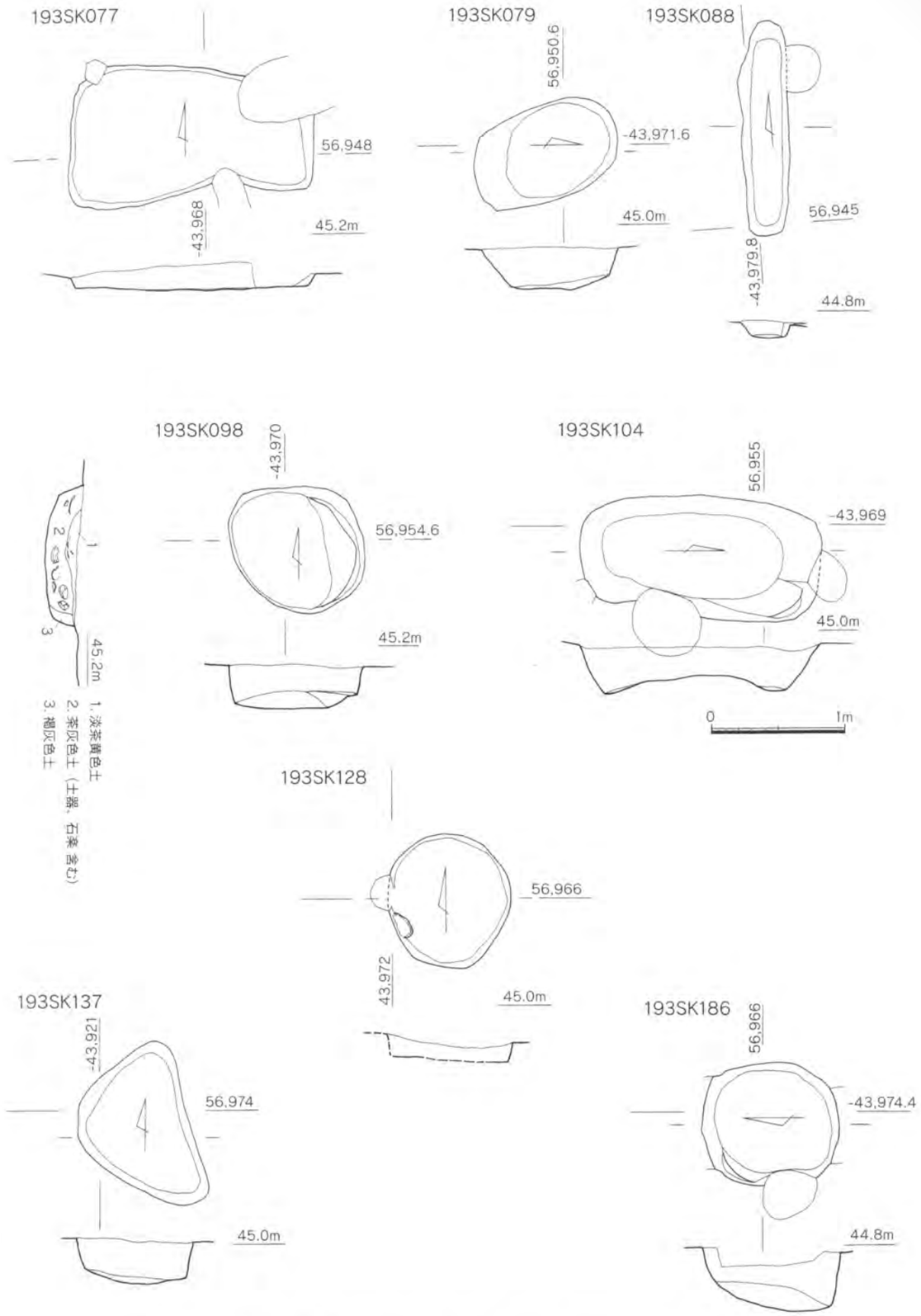


Fig.14 193SK077・079・088・098・104・128・137・186 遺構図（1/40）

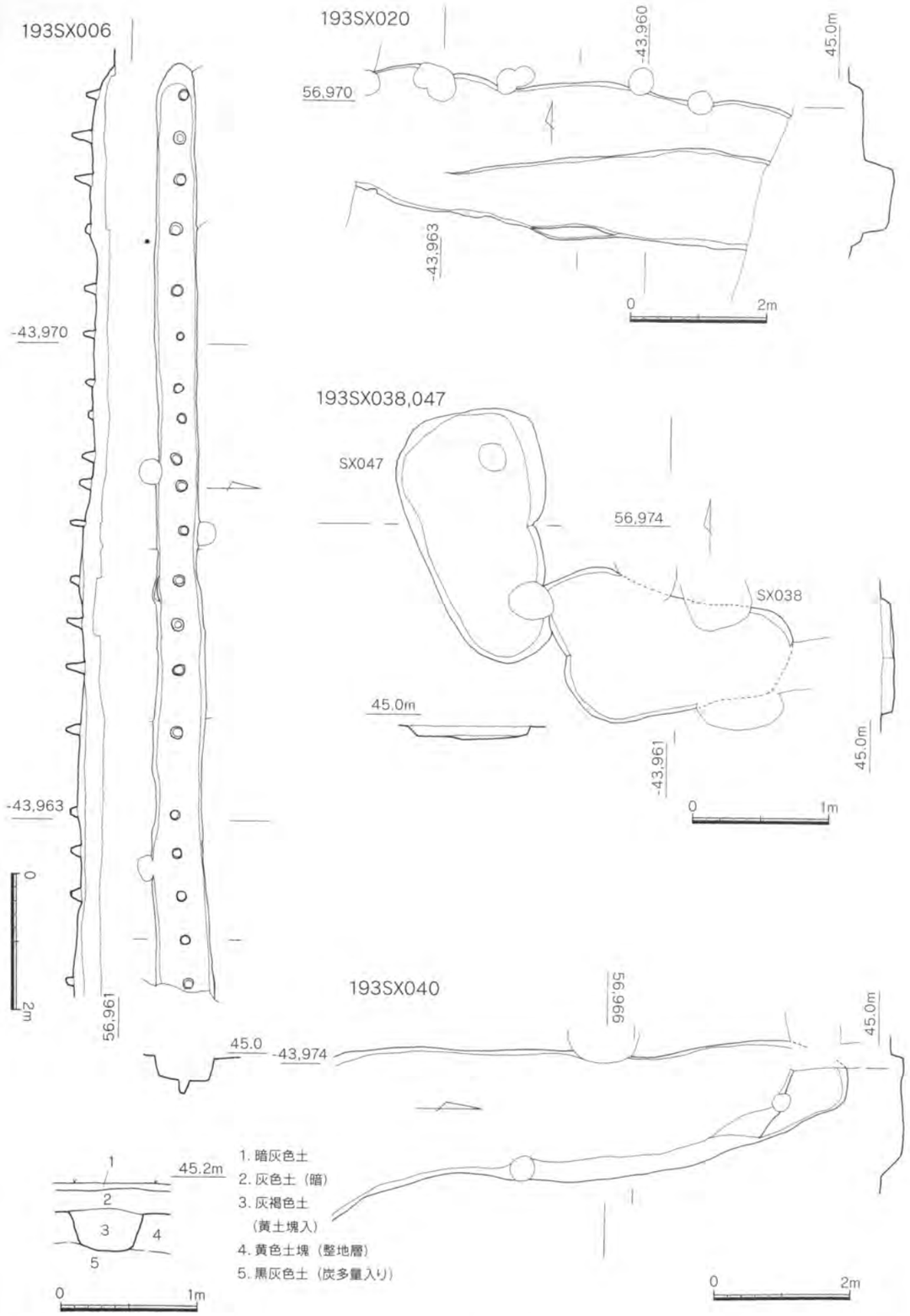


Fig.15 193SX006・020・038・040・047 遺構図（006・040 は 1/80、土層は 1/40、他は 1/40）

その他の遺構

193SX002

調査区中央東側にある小穴群。埋土は茶灰色土。鉱滓が出土している。出土遺物から 12 世紀代以降の埋没。193SK008（13 世紀代埋没）を切っているため、埋没時期は 13 世紀以降と考えられる。

193SX006（Fig.15）

調査区の中央を東西に渡る溝状を呈す遺構で、検出長 14.5m、幅 0.8 ～ 0.6m、深さ 0.2 ～ 0.4m、振れが N-1° 0′ 40″ -E を測る。黄色土ブロックが入る灰褐色土の人為的埋土で、0.4 ～ 1.0m 程度の不統一な間隔で 15 ～ 20cm の太さの杭状の柱が建てられている。芯柱を持つ築地遺構と考えられる。埋土から 14 世紀後半までの遺物が出土している。土地区画や建物配置にとって重要な構造物である。

193SX007

調査区北部やや東よりに位置する小穴群。小穴の 1 つは 193SB080 の柱穴と推定している。出土遺物から埋没時期は 12 世紀以降と考えられる。

193SX011

調査区北東部にある小穴群。埋土は茶灰色土。出土遺物から埋没は 12 世紀以降と考えられる。

193SX014

調査区北東部にある小穴。埋土は赤褐色土。釘の破片が出土している。

193SX016

調査区北東部にある小穴群。埋土は淡黄茶色土。193SX020 を切る。出土遺物から埋没時期は 13 世紀中頃以降。

193SX020（Fig.15）

調査区北東にある長さ 6m、幅 2.2m 深さ 0.3m を測る溜まり状、ないしは整地遺構である。埋土は、黒色粘質土→黒色土→褐色土→炭層（193SX023）の順番で堆積している。埋土からは 13 世紀後半までの遺物が出土している。陶磁器区分では F 期。SB080 に先行する遺構である。

193SX023

調査区北東部に位置する東西方向の溝状のたまり。193SX005 に切られている。埋土は炭混じりの暗黒色土。出土遺物から 13 世紀後半以降の埋没と考えられる。

193SX027

調査区北部東よりに位置する小穴群。出土遺物から 12 世紀以降に埋没している。

193SX035（Fig.16）

調査区南端いっぱいにある東西方向の段落ちで、茶色土が堆積し、16 世紀までの遺物が出土している。この南側は現在でも段差のある土地境となっている。

193SX036、037、068、086（Fig.16）

調査区南東にある長さ 9m、幅 1.5m に亘って連続して形成された溝状、土坑状の遺構で、それぞれの深さ 0.2 ～ 0.3m を測る。13 世紀前半までの遺物が出土している。西の SX068、036 のラインにはところどころ杭の痕跡が重複しており、これも築地状の遺構の基礎部分の可能性もある。南から北に至る遺跡内での動線に関する遺構と考えられる。掘立柱建物 SB100 に先行して存在する。築地遺構 SX006 や掘立柱建物 SB080 との関係が想定される。

193SX038（Fig.15）

調査区北東にある長さ 1.8m、幅 1.1m 深さ 0.1m を測る溜まり状で、12 世紀中頃までの遺物が出土している。

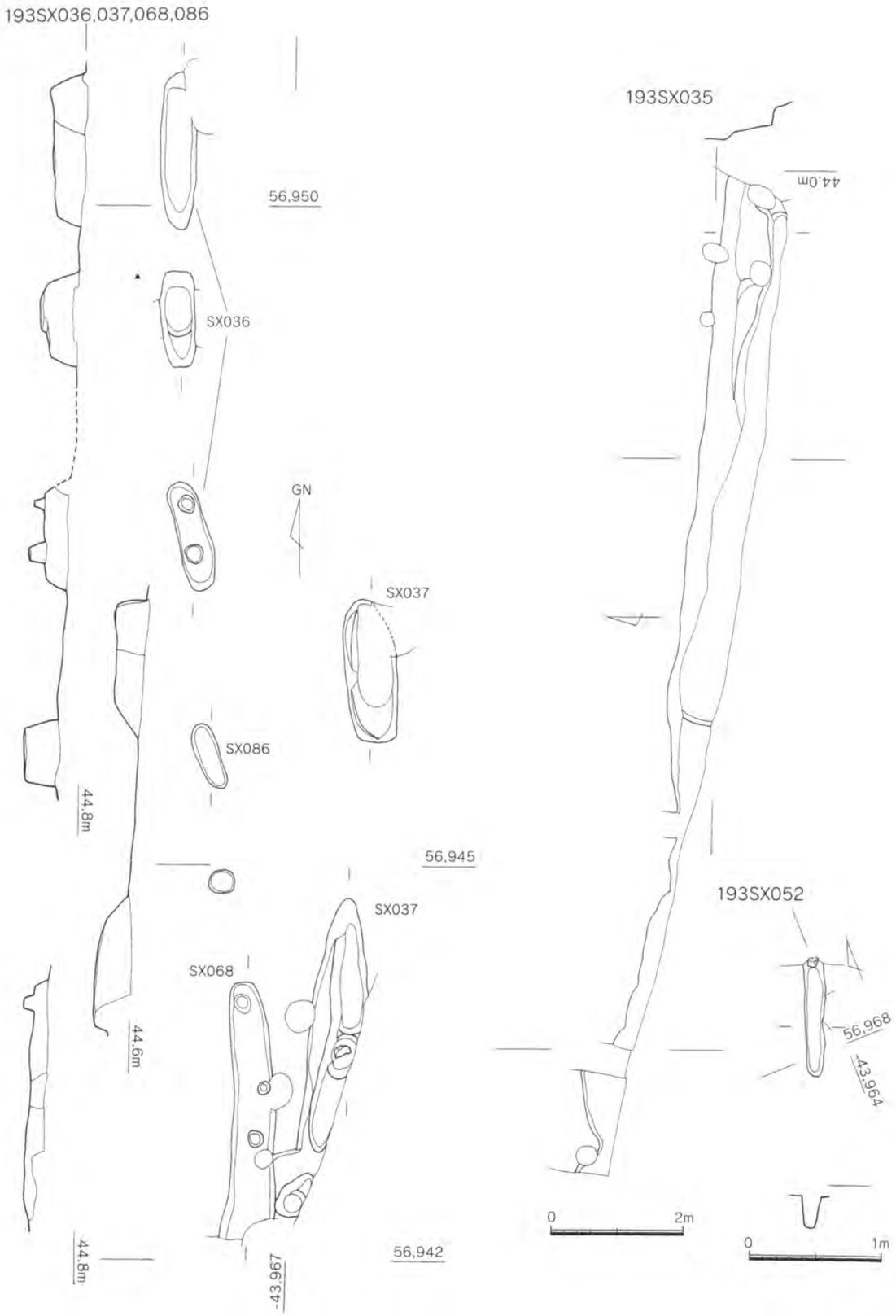


Fig.16 193SX035・036・037・052・068 遺構図（1/40、035 は 1/80）

193SX040（Fig.15）

調査区北西にある長さ 10m、幅 4m 深さ 0.3m を測る南北に長い帯状の整地で、13 世紀中頃までの遺物が出土している。掘立柱建物 SB080 の南西側を埋めるような形で存在する。

193SX042

調査区北部中央に位置する小穴群。埋土は淡茶色土。出土遺物から埋没時期は 12 世紀中頃以降と考えられる。

193SX047（Fig.15）

調査区北東にある長さ 1.8m、幅 1.1m 深さ 0.1m を測る溜まり状で、炭混じりの暗茶色土で埋没する。13 世紀までの遺物が出土している。

193SX048

調査区北部中央に位置する確認（試掘）調査時の南北方向のトレンチ。

193SX049

調査区北部に位置する小穴群。49a、49b、49c それぞれは柱穴と認定され、193SB080 に編入した。出土遺物から 12 世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX052（Fig.16）

調査区北東にある長さ 5.0m、幅 0.6m 深さ 0.2m を測る東西に長い帯状の溜まり遺構で、下層は灰色粘質土、上層は暗茶色土で埋没し 12 世紀までの遺物が出土している。

193SX053

調査区北部東よりに位置する小穴群。埋土は茶色土。出土遺物から 12 世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX057

調査区中央部東よりに位置する小穴群。埋土は明茶色土。出土遺物から 12 世紀中頃以降に埋没したと考えられる。

193SX060（Fig.17）

調査区北東にある長さ 0.8m、幅 0.1m 深さ 0.3m を測る溜まり状で、灰色土で埋没し 12 世紀までの遺物が出土している。

193SX061（Fig.17）

調査区南東にある長さ 4.5m、幅 1.5m の 3 条からなる溝群で、深さは 0.1m を測り、茶灰色土で埋没している。鋤による耕作痕跡と考えられる。建物遺構廃絶後に形成されたもので、近世遺構の所産と考えられる。

193SX067

調査区南東部に位置する小穴。長さ 0.6m、0.45 m、深さ 0.24m を測る。滑石製石鍋片が出土している。

193SX069

調査区中央部に位置する小穴群。一部、193SB080 の柱穴に編入する。埋土は茶色土。出土遺物から 12 世紀前半以降に埋没したと考えられる。

193SX071

調査区南東部に位置する東西溝状のたまり遺構。埋土は茶色土。長さ 1.53m、幅 0.3m、深さ 0.32m を測る。出土遺物から 12 世紀以降の埋没と考えられる。鉄釘が出土している。

193SX081

調査区中央部に位置する小穴群。埋土は茶色土。出土遺物から埋没は 13 世紀中頃以降と考えられる。

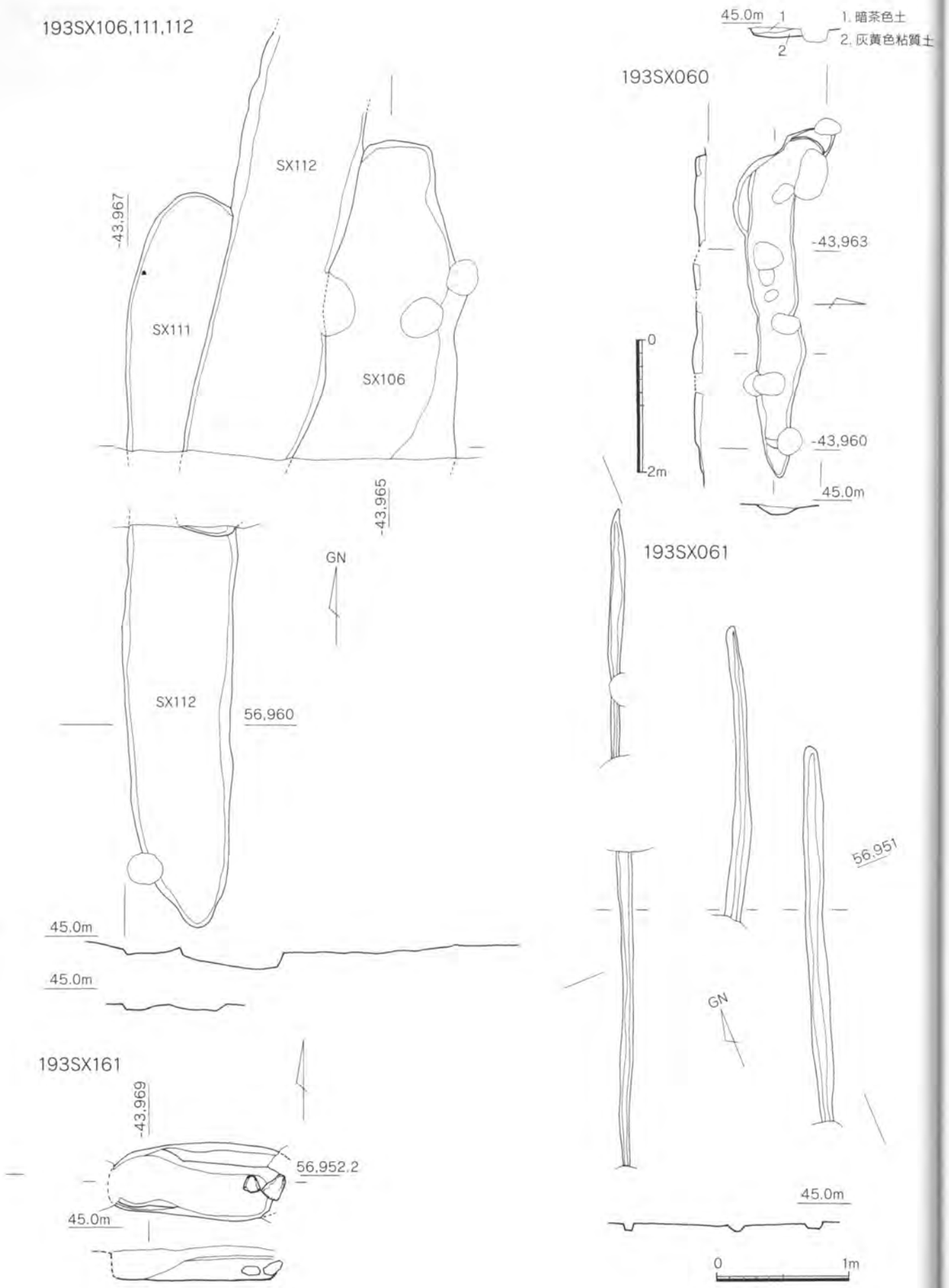


Fig.17　193SX060・061・106・111・112・161 遺構図（1/40、060 は 1/80）

193SX087

調査区南部やや西よりに位置する溜まり状遺構。東西 3.3m、南北 4.9m を測る。埋土は黒色土。193SB050 や 193SD086 に切られる。出土遺物から 13 世紀後半以降に埋没したと考えられる。

193SX091

調査区北部中央に位置する小穴群。埋土は茶色土。出土遺物から 13 世紀中頃以降には埋没したと考えられる。

193SX093

調査区北部中央に位置する小穴群。埋土は茶色土。出土遺物から 12 世紀以降に埋没したこと考えられる。

193SX093a

調査区北部中央に位置する小穴。埋土は茶色土。直径 0.4m、深さ 0.24m を測る。穴の東壁に沿って平たい石が検出されている。出土遺物から 12 世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX096

調査区南部西側に位置する溜まり状遺構。調査区外に延びている。埋土は茶色土。南北長 3.6m、東西長 1.9m を測る。平面形は北東から南西方向に延びる溝状態を呈している。

193SX106、111、112（Fig.17）

調査区中央東寄りにある長さ 6.0m、幅 2.5m の範囲に 3 つの南北に長い帯状の溜まり遺構が重複する形で検出された。112 を 106 と 111 が切って形成される。深さ 0.1m 前後のごく浅いもので、SX106 は黒茶色土、SX111 は灰色土、SX112 は淡茶色土が埋没する。12 世紀までの遺物が出土している。SX112 の近世の遺物はトレンチが重複することによる混入か。

193SX108

調査区南部中央に位置する小穴群。193SD055 を切っている。出土遺物から 13 世紀中頃以降に埋没したと考えられ、切られている方の 193SD055 の出土遺物傾向（15 世紀までの遺物群）を見ると、15 世紀以降に埋没したと考えたい。

193SX113

調査区中央部西側に位置する小穴群。埋土は淡茶色土。出土遺物から 12 世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX114

調査区中央部に位置するたまり状遺構。長さ 3m、幅 0.83m、深さ 0.06m を測る。埋土は茶色土。出土遺物から 13 世紀中頃以降に埋没したと考えられる。

193SX118

調査区中央部西側に位置する小穴群。埋土は灰色土。出土遺物から埋没時期は 12 世紀以降と考えられる。

193SX136

調査区北部中央に位置する小穴群。埋土は茶灰色土。出土遺物から埋没は 13 世紀前半以降と考えられる。

193SX138

調査区中央南部に位置する小穴。埋土は黄茶色土。193SK65 に切られる。出土遺物より 12 世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX149

調査区中央西部に位置する小穴群。193SX151 を切る。出土遺物より 13 世紀代に埋没したと考えられる。

193SX151

調査区中央部西部に位置するたまり状遺構。193SX149 に切られる。出土遺物より 13 世紀代に埋没したと考えられる。

193SX152

調査区北部西側に位置する小穴。193SD055 を切る。埋土は茶色土。出土遺物より 12 世紀以降に埋没したと想定でき、遺構の切り合い関係上で切られている 193SD055 が 15 世紀代に埋没しているため、この小穴もそれ以降に埋没したものと考えられる。

193SX161 (Fig.17)

調査区中央やや東よりに位置する東西方向に長いたまり状の遺構。S-62、97 に切られている。長さ 1.3 m、幅 0.55 m、深さ 0.43 mを測る。埋土は淡灰色土。出土遺物より 14 世紀前後の遺物が出土している。

193SX167

調査区中央に位置する小穴群。出土遺物から 12 世紀以降に埋没したものと考えられる。鉱滓が出土している。

193SX169

調査区北部西側に位置する小穴。直径 0.35m、深さ 0.18m を測る。193SD055 の溝の底から検出された。出土遺物が小片のため埋没時期は不明だが、遺構の切り合い関係から 15 世紀以前と考えられる。

193SX173

調査区中央部に位置する小穴群。出土遺物から 13 世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX178

調査区南部に位置する小穴。193SD055 の溝底より検出した。南北長 0.5m、東西長 0.4m、深さ 0.07m を測る。出土遺物より 12 世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX188

調査区北部中央に位置する小穴。S-211 を切る。出土遺物から 12 世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX192

調査区北部中央に位置する小穴。193SX091 に切られる。193SB080 の柱穴 080c にあたると考えている。出土遺物から 12 世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX193

調査区北部中央に位置する小穴。出土遺物より埋没時期は 12 世紀以降と考えられる。

193SX196

調査区北部西側に位置する整地状遺構。埋土は淡灰色土。出土遺物から埋没時期は 13 世紀後半と考えている。

193SX197

調査区南部東側に位置する整地状遺構。埋土は茶色土。プランは調査区外に延びる。出土遺物から埋没時期は 14 世紀以降である。

193SX198 (Fig.18)

調査区南東に位置するたまり状、もしくは整地の遺構。SK025 (13 世紀後半以降埋没) と、SX197 (14

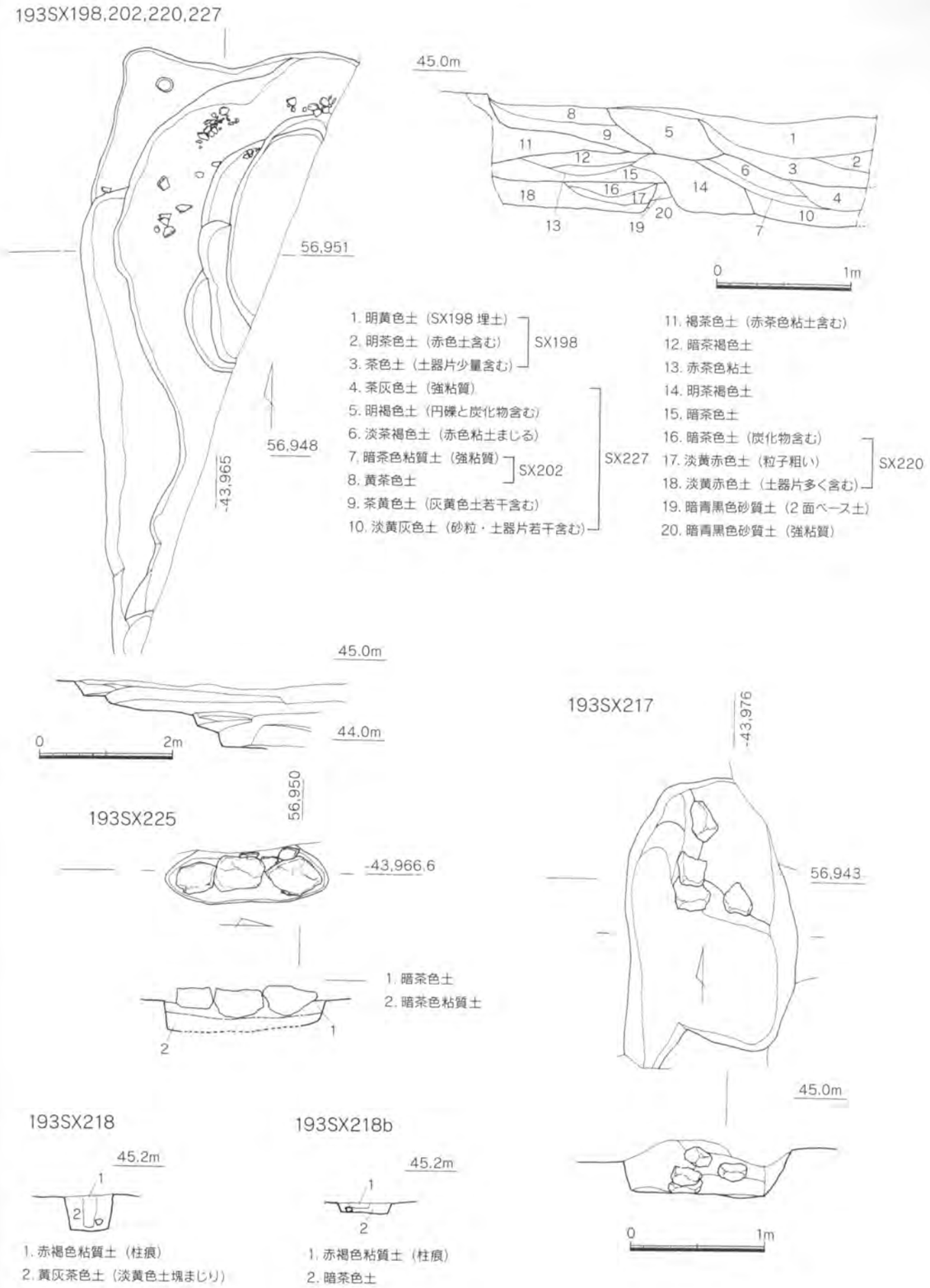


Fig.18 193SX198・202・217・218a・218b・220・225・227遺構図(198・202・220・227は1/80、他は1/40)

世紀以降埋没）の遺構に切られる。埋土は明茶色土。

193SX202（Fig.18）

調査区南部東側に広がる整地状遺構。193SK227 の上層にあたる。埋土は淡茶褐色土。出土遺物は 13 世紀後半～ 14 世紀前半までのものが出土している。

193SX204

調査区北部西側に位置する整地状遺構。S-206 の上層で、193SX040 の下層にあたる。土色は灰青褐色土。

193SX205・

調査区北部西側に位置する小穴。193SK040 に切られる。鉄釘が出土している。

193SX212

調査区南部中央に位置するたまり状遺構。193SD055 を掘り下げると、溝底で検出された遺構。埋土は茶色土。出土遺物から 13 世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX214

調査区北部中央に位置するたまり状遺構。193SX060 を切っている。埋土は暗茶色土。出土遺物は少なく時期を積極的に認定できないが、切り合い関係から考えると遺構の埋没は、12 世紀以降と考えられる。

193SX215（Fig.19）

調査区南部東側に位置するたまり状遺構。調査面としては 2 面目となる。赤褐色土のベース面に切

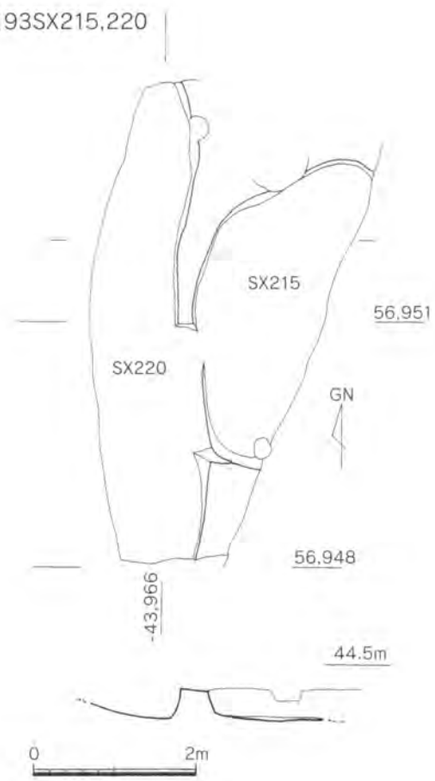


Fig.19　193SX215・220 遺構図（1/80）

り込み、長さ 4m、幅 1.2m、深さ 0.15m を測る。埋土は明茶色土。出土遺物から 13 世紀後半以降に埋没したと考えられる。

193SX216

調査区南部中央に位置する整地状遺構。193SX224 と同じ範囲にあたるため、下層の遺構の落ち込み土の可能性もある。埋土は褐色土。出土遺物から埋没は 13 世紀前半以降と考えられる。

193SX217（Fig.18）

調査区南部中央に位置するたまり状もしくは溝状遺構。埋土は黄色土。193SX231 に切られる。出土遺物から 12 世紀中頃以降に埋没したと考えられる。

193SX218a・218b（Fig.18）

調査区中央部に位置する小穴群。掘立柱建物の柱穴となる可能性もある。埋土は a が赤色土、b が茶色土であった。ともに出土遺物量が少なく時期は不明。

193SX220（Fig.19）

調査区南部東側に位置するたまり状遺構もしくは溝状遺構。第 2 遺構面。長さ 6m 以上、幅 1.2m 以上、深さ 0.23m を測る。これは全面を掘っていないので検出した範囲での数値である。東側の壁に石が列状に検出されたが、この遺構に伴うものかは判断できなかった。埋土は暗茶色土。出土遺物から 13 世紀中頃から 14 世紀初頭以降に埋没している。

193SX221

調査区南部に位置する整地遺構。南端の段落ちを埋めており、193SX035 の下層にあたる。埋土は茶色土。出土遺物より 13 世紀後半以降に埋没している。

193SX224（Fig.20、Pla.1-2）

調査区南部中央に位置する倉庫基礎もしくは、仏堂等の基壇跡と考えている。平面形はおおよそ方形で、北西隅がすこし突出している形をしている。東西長 3.8m、南北長 4.0m、高さ 0.6m を測る。東南西の 3 方向に平べったい縦 0.4m× 横 0.3m× 厚さ 0.2 m程度の大きさの石を積み並べ土留めとして、その内部に礫混じりの土を敷き詰めて、上面にも礫を並べている。中央に南北方向の確認トレンチを入れて土層を確認したところ、北から南へ傾斜堆積をしている土層が 3 層確認できた。おそらく、このように礫混じり土を敷くことによって、建物の基礎地業としているのだろう。出土遺物から 13 世紀前半以降に構築されて、13 世紀後半～ 14 世紀初頭以降に埋没していると考えている。

193SX225（Fig.18）

調査区南部東側に位置する石組み遺構。前述の 193SX220 を掘り下げたときに底面で検出された。長さ 1.2m、幅 0.4m、深さ 0.1m の溝状の堀方に、平坦な石を 3 つ南北方向に並べている。石の大きさは、長さ 0.4m、幅 0.3m、厚さ 0.22m 程度のものである。部分的掘り下げの範囲で検出されたものであり、遺構の性格については不明である。出土遺物からは 12 世紀以降に埋没したと推定される。

193SX227（Fig.18）

調査区南部東端に堆積する土層を SX227 として取り上げた。193SX202 の下層にあたる。ぱさぱさした明赤灰色土混じりの黒茶色粘質土。鉄釘が出土している。

193SX228

調査区南部中央に位置する土層を SX228 として取り上げている。193SX224 の南部断ち割り時の土層。滑石製石鍋の破片が出土している。

193SX229

調査区南部に位置する 193SX224 の東側を検出したときの土層。整地か。埋土は黄色土。出土遺物

Fig.20　193SX224 遺構図（1/40）

から 12 世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX231

調査区南部に位置する SX216 に切られるたまり状遺構。埋土は黄灰色土。出土遺物から 12 世紀中頃以降に埋没したと考えられる。

193SX232

調査区南部に位置する 193SX224 の東側を検出したときの土層。整地か。埋土は黒色土。出土遺物から 13 世紀中頃に埋没したと考えられる。

193SX237

調査区南部東側に位置する小穴。遺構面は 2 面目。193SX215 に切られる。長さ 0.8m、幅 0.65m m、深さ 0.18m を測る。埋土は淡灰色土。出土遺物から 13 世紀前半以降に埋没したと考えられる。

193SX238

調査区南部東側に位置する小穴群。遺構面は 2 面目。埋土は淡灰色土。出土遺物から、13 世紀中頃以降に埋没したと考えられる。

土層

明黄灰色

1 面目の遺構面のベース土の上層。出土遺物は 13 世紀中頃を中心としている。

暗灰色土

1 面目の遺構面ベース土の下層。出土遺物は 13 世紀中頃を中心としている。

茶色土

1 面目遺構の検出面での人工層位。出土遺物は弥生時代から明治時代まで及ぶ。

(4) 出土遺物

第 1 遺構面出土遺物

建物出土遺物

193SB010a 黄茶色土出土遺物（Fig.21）

土師器

小皿 a1（1）　復元口径 8.4cm、器高 1.1cm、復元底径 6.4cm。底部切り離し技法は回転ヘラ切り。

193SB010b 出土遺物（Fig.21）

土師器

小皿 b（2）　復元口径 7.2cm、器高 2.15cm、底径 3.2cm。底部切り離し技法は器壁摩耗のため不明。

坏 b（3 ～ 6）　3 は口縁部を欠損する。器高 2.6 ＋ cm、底径 4.9cm。底部切り離し技法は回転糸切り。4 は復元口径 13.4cm、器高 3.4cm、底径 5.4cm。底部切り離しは回転糸切り。5 は復元口径 12.8cm、器高 3.85cm、底径 5.4cm。底部切り離しは回転糸切り。内面見込み部分に穴を開けようとしたのか、3 ～ 4mm の範囲の窪みが 4 カ所確認できる。6 は口縁部を欠損。器高 3.0 ＋ cm、底径 6.4cm。底部切り離し技法は回転糸切り。3 ～ 6 いずれも色調は淡暗橙色。

193SB010c 暗灰茶色粘出土遺物（Fig.21）

土師器

小皿 a1（7）　小破片。器高 1.3+cm。底部切り離し技法は回転糸切り。

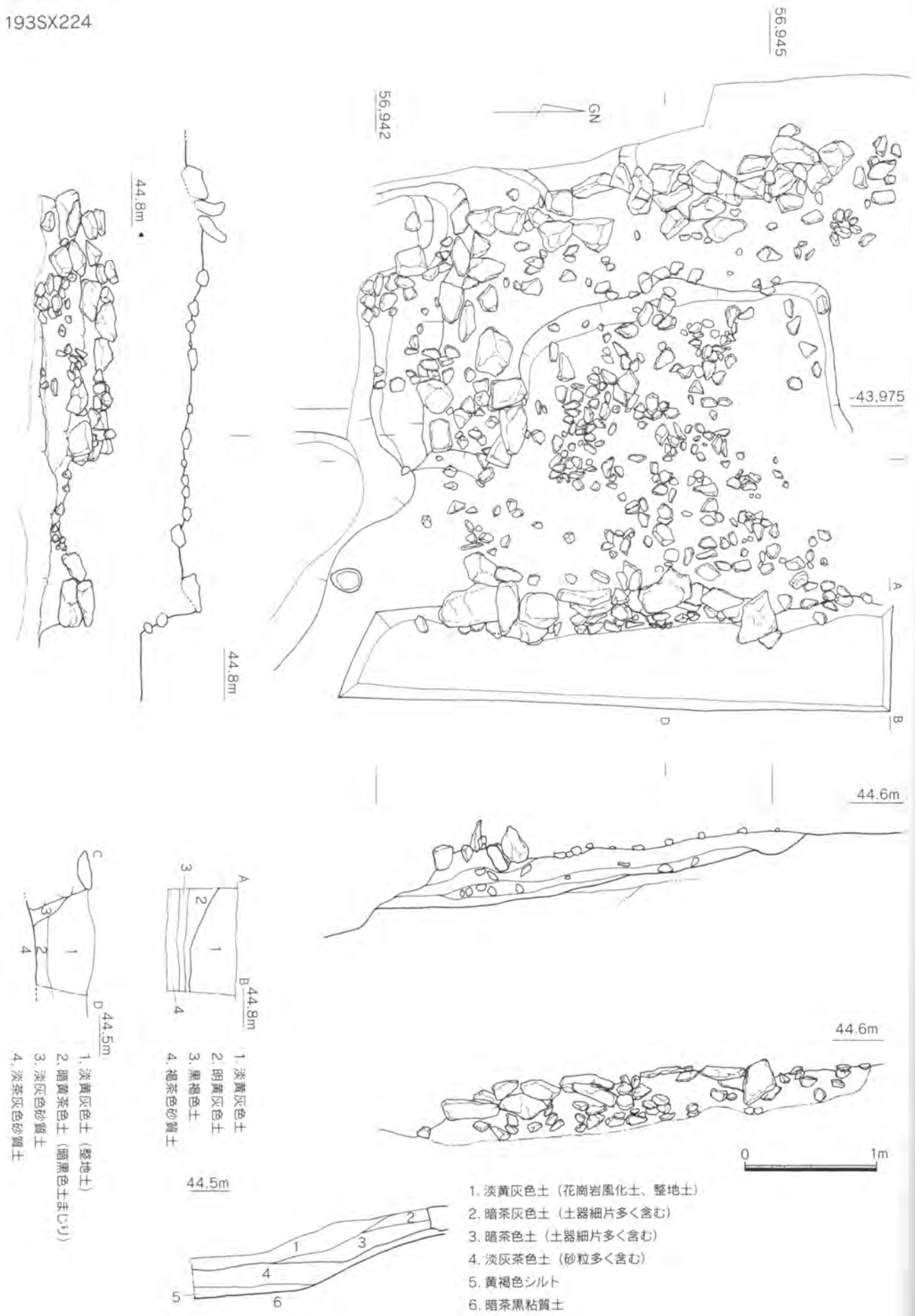


Fig.20　193SX224 遺構図（1/40）

から 12 世紀以降に埋没したと考えられる。

193SX231

調査区南部に位置する SX216 に切られるたまり状遺構。埋土は黄灰色土。出土遺物から 12 世紀中頃以降に埋没したと考えられる。

193SX232

調査区南部に位置する 193SX224 の東側を検出したときの土層。整地か。埋土は黒色土。出土遺物から 13 世紀中頃に埋没したと考えられる。

193SX237

調査区南部東側に位置する小穴。遺構面は 2 面目。193SX215 に切られる。長さ 0.8m、幅 0.65m m、深さ 0.18m を測る。埋土は淡灰色土。出土遺物から 13 世紀前半以降に埋没したと考えられる。

193SX238

調査区南部東側に位置する小穴群。遺構面は 2 面目。埋土は淡灰色土。出土遺物から、13 世紀中頃以降に埋没したと考えられる。

土層

明黄灰色

1 面目の遺構面のベース土の上層。出土遺物は 13 世紀中頃を中心としている。

暗灰色土

1 面目の遺構面ベース土の下層。出土遺物は 13 世紀中頃を中心としている。

茶色土

1 面目遺構の検出面での人工層位。出土遺物は弥生時代から明治時代まで及ぶ。

(4) 出土遺物

第 1 遺構面出土遺物

建物出土遺物

193SB010a 黄茶色土出土遺物（Fig.21）

土師器

小皿 a1（1）　復元口径 8.4cm、器高 1.1cm、復元底径 6.4cm。底部切り離し技法は回転ヘラ切り。

193SB010b 出土遺物（Fig.21）

土師器

小皿 b（2）　復元口径 7.2cm、器高 2.15cm、底径 3.2cm。底部切り離し技法は器壁摩耗のため不明。

坏 b（3 ～ 6）　3 は口縁部を欠損する。器高 2.6 ＋ cm、底径 4.9cm。底部切り離し技法は回転糸切り。4 は復元口径 13.4cm、器高 3.4cm、底径 5.4cm。底部切り離しは回転糸切り。5 は復元口径 12.8cm、器高 3.85cm、底径 5.4cm。底部切り離しは回転糸切り。内面見込み部分に穴を開けようとしたのか、3 ～ 4mm の範囲の窪みが 4 カ所確認できる。6 は口縁部を欠損。器高 3.0 ＋ cm、底径 6.4cm。底部切り離し技法は回転糸切り。3 ～ 6 いずれも色調は淡暗橙色。

193SB010c 暗灰茶色粘出土遺物（Fig.21）

土師器

小皿 a1（7）　小破片。器高 1.3+cm。底部切り離し技法は回転糸切り。

193SB010d 暗黄茶色土出土遺物（Fig.21）

土師器

坏ｂ（8）　口縁部を欠損する。器高 1.8+cm、復元底径 5.6cm。底部切り離し技法は回転糸切り。

坏ｂ（9）　復元口径 12.4cm、器高 3.1cm、底径 5.9cm。底部切り離し技法は回転糸切り。通常の坏ｂの器形からすると、器高が低いため坏ａに近い器形である。

193SB050 出土遺物（Fig.21）

石製品

不明製品（10）　工具による加工痕跡が部分的にあり、図上下部は平滑な加工をほどされている。滑石製石鍋の二次利用製品の一部か。

193SB050 茶褐色土出土遺物（Fig.21）

土師器

小皿ａ1（11）　復元口径 9cm、器高 1.2cm、復元底径 6.4cm。底部切り離し技法は回転糸切り。板状圧痕あり。

須恵質土器

鉢（12、13）　ともに捏鉢の口縁破片。口縁端部外面に重ね焼き時の痕跡で、暗灰色～灰黒色に変化しているのが確認できる。

瓦質土器

鉢（14）　小破片。口縁部を内側に屈曲させる。口縁部外面は重ね焼き時の痕跡で、帯状に灰黒色変化している。

瓦類

平瓦（15）　破片。凹面には布目痕。凸面には格子目叩き。端部をヘラ切り調整。

石製品

石鍋（16、17）　滑石製石鍋の破片。16 は底部破片。17 は外面に煤が付着している。

193SB050j 出土遺物（Fig.21）

土師器

小皿ａ1（18）　小破片。器高 1.2+cm。底部切り離し技法は回転糸切り。板状圧痕あり。

193SB080a 出土遺物（Fig.21）

土師器

小皿ａ1（19）　復元口径 8.6cm、器高 1cm、復元底径 7.2cm。焼成不良。摩耗のため調整不明。

瓦質土器

鉢（20）　口縁部の破片。

石製品

不明品（21）　縦 2.45cm、横 1.5cm、厚さ 0.9cm。滑石製。二次加工品と思われる。

193SB080e 出土遺物（Fig.21）

須恵質土器

鉢（22）　口縁端部。

瓦質土器

椀（23）　口縁部破片。内面はミガキｃ、外面は口縁端部から 2cm ほど下部までをミガキｃを施す。口縁端部は内側に沈線が 1 条入る。

瓦類

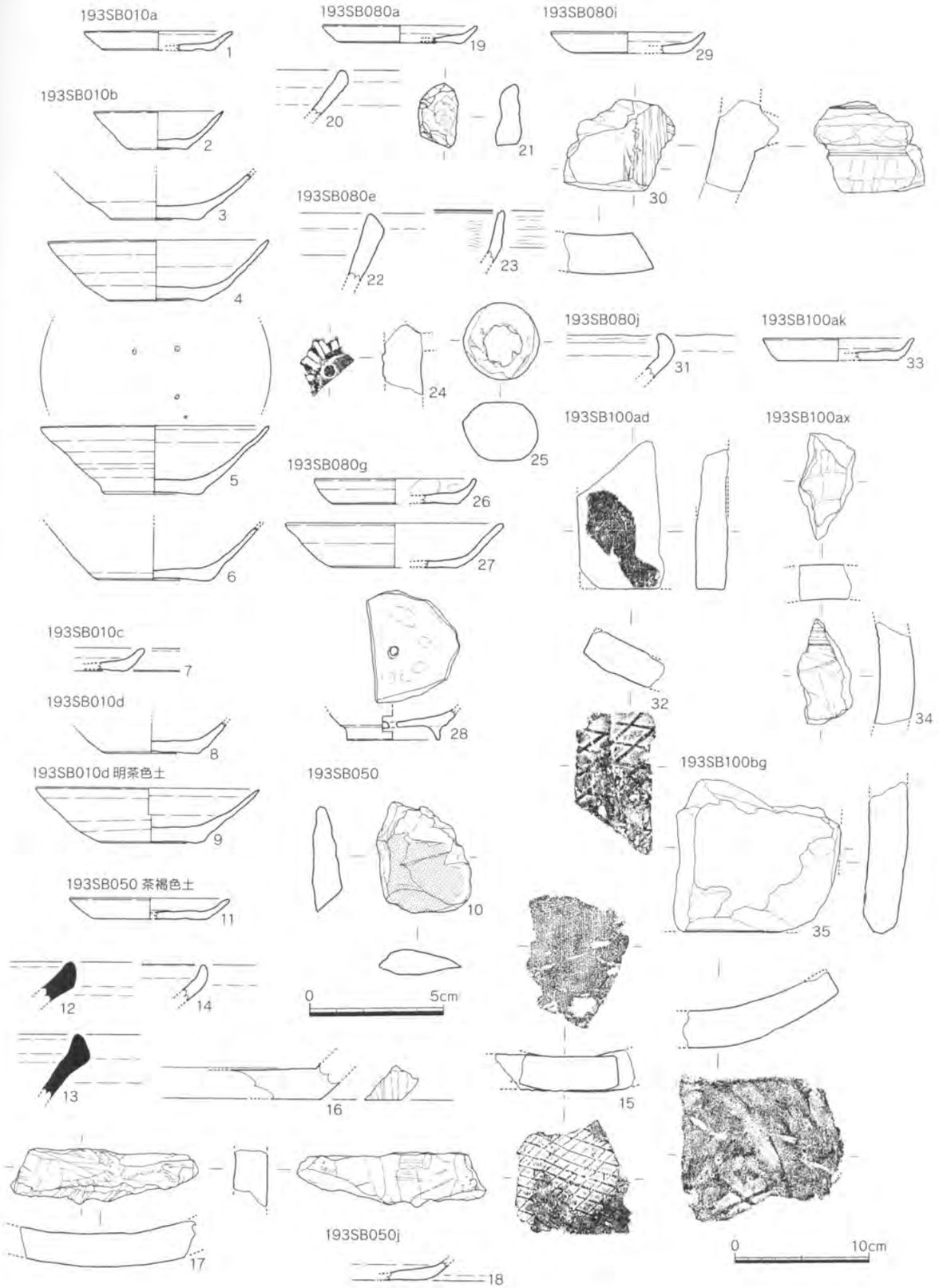


Fig.21 第 193 次調査建物出土遺物実測図（1/2、1/3、1/4）

軒丸瓦（24）　瓦当面の小破片。複弁。焼成は良好で須恵質。

土製品

瓦玉（25）　縦 2.9cm、横 2.8cm、厚さ 2.2cm。焼成は良好。土師質。

193SB080g 出土遺物（Fig.21）

土師器

小皿 a1（26）　復元口径 9cm、器高 1.4cm、復元底径 7.2cm。底部切り離し技法は回転糸切り。

坏 a（27）　復元口径 12.2cm、2.5cm、復元底径 7.2cm。底部切り離し技法は回転糸切り技法。板状圧痕。口縁部はやや外反する。

小皿 c× 椀 c（28）　底部破片。器高 1.7+cm、復元底径 5.2cm。内底面中央部に外面まで抜ける穿孔がある。直径 4mm 程度。

193SB080i 出土遺物（Fig.21）

土師器

小皿 a1（29）　復元口径 8.6cm、器高 1.2cm、復元底径 6.4cm。底部切り離し技法は回転糸切り。

石製品

石鍋（30）　滑石製石鍋。外面の鍔部。二次加工されている。外面には使用時の煤が付着している。

193SB080j 出土遺物（Fig.21）

瓦質土器

鉢（31）　口縁部破片。

193SB100ad 出土遺物（Fig.21）

瓦類

平瓦（32）　端部破片。凹面は細かな布目痕。凸面は格子目叩き。端部はヘラ切り。焼成はやや良好。瓦質。

193SB100ak 出土遺物（Fig.21）

土師器

小皿 a1（33）　復元口径 8.4cm、器高 1.25cm、復元底径 6.8cm。底部切り離し技法は回転糸切り。

193SB100ax 出土遺物（Fig.21）

石製品

不明製品（34）　滑石製石鍋の破片。二次加工品か。

193SB100bg 出土遺物（Fig.21）

瓦類

平瓦（35）　端部破片。凹面は布目痕がわずかに残る。凸面は格子目叩き後に、ナデを強く施す。焼成はやや良好。土師質。端部は凹面側からも凸面側からもヘラ切りされており、このことから、この端部は狭端部の可能性がある。表面が灰赤色を呈しており、2 次焼成を受けた可能性もある。

溝出土遺物

193SD055 出土遺物（Fig.22）

土師器

坏 b（1 ～ 3）　1 は復元口径 11.4cm、器高 2.7cm、底径 5.8cm。底部切り離し技法は回転糸切り。2 は底部の破片。3 は底部破片。内面見込み中央部に外面まで貫通する穿孔が施される。穿孔の直径は 3mm。

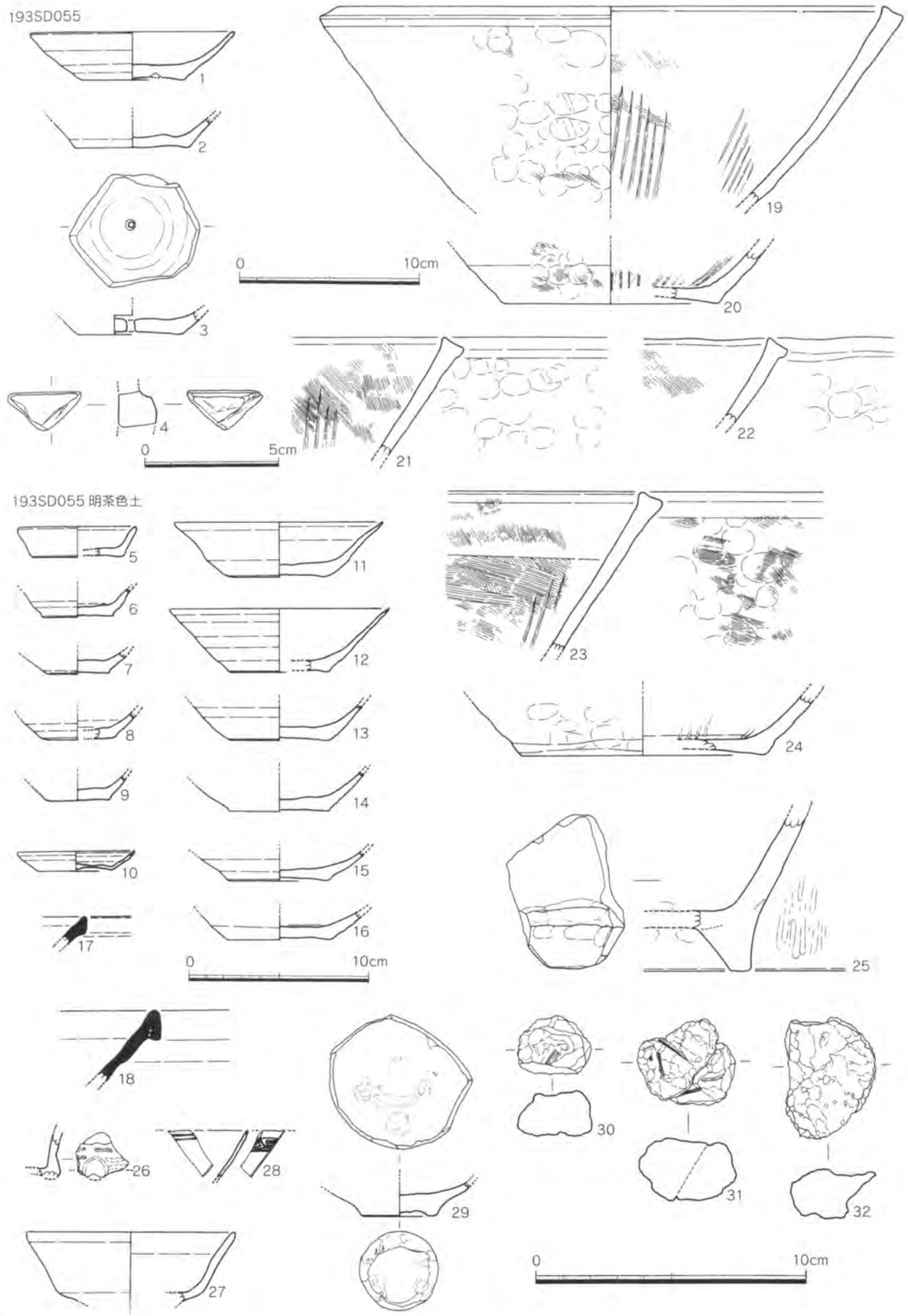


Fig.22　第 193 次調査溝出土遺物実測図その 1（1/2、1/3）

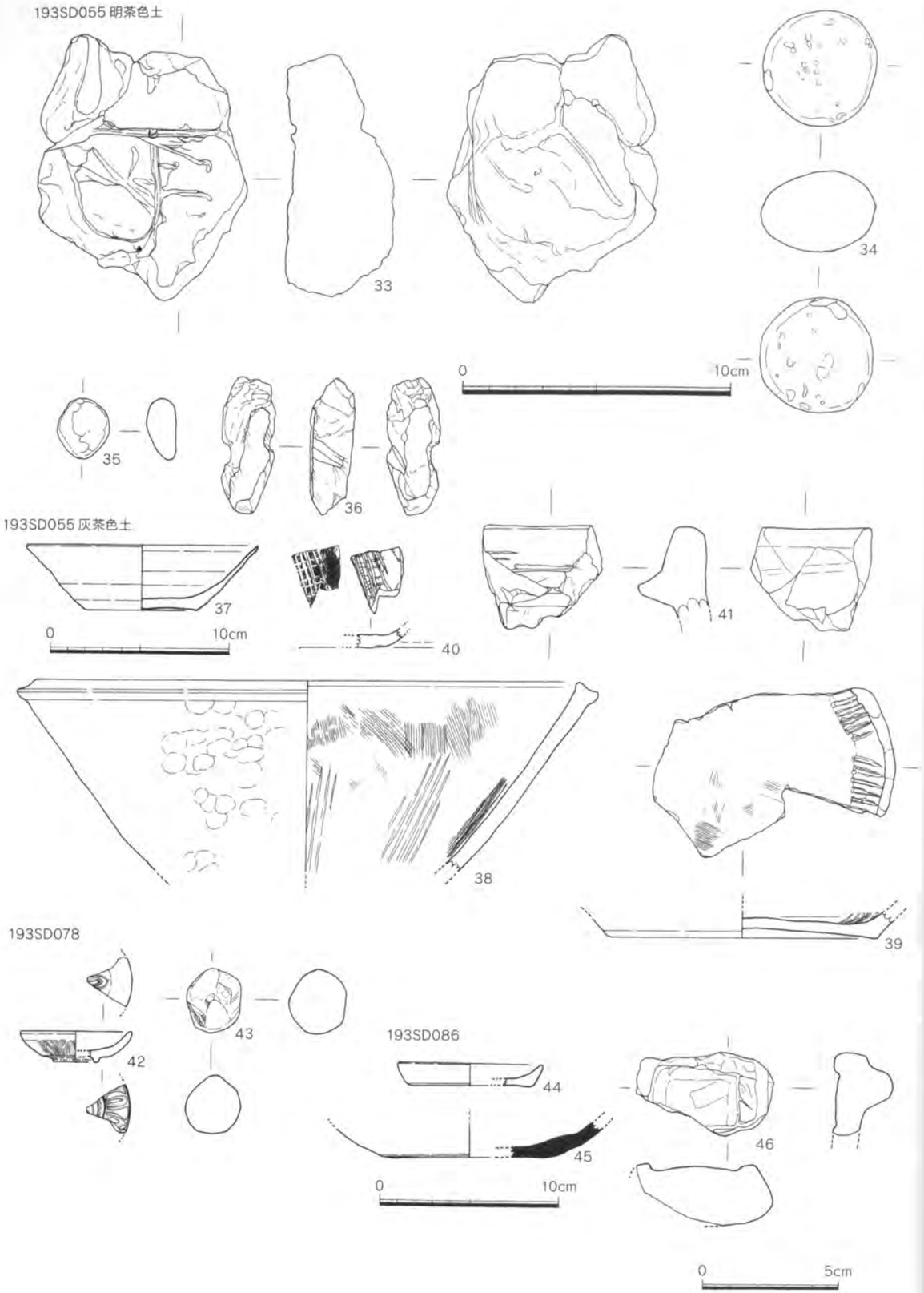


Fig.23　第 193 次調査溝出土遺物実測図その 2（1/2、1/3）

石製品

不明品（4）　破片。滑石製石鍋の二次加工品か。

193SD055 明茶色土出土遺物（Fig.22、23）

土師器

小皿 b（5 ～ 10）　5 は復元口径 6.6cm、器高 1.7cm、復元底径 5.2cm。口縁部が黒色化。灯明皿か。6 ～ 9 は口縁部を欠損する破片。10 は器壁が 2mm 程度の非常に薄いつくり。ロクロ挽き。

坏 b（11 ～ 16）　11 は復元口径 11.6cm、器高 3.05cm、復元底径 5.8cm。底部切り離し技法は回転糸切り。口縁部は少し外反している。12 は復元口径 12.2cm、3.55cm、復元底径 5.6cm。底部切り離し技法は回転糸切り。口縁部は体部から直線的に伸びる。13 ～ 16 は口縁部を欠損する破片。

須恵質土器

鉢（17、18）　口縁部破片。東播系。

土師質土器

擂り鉢（19 ～ 24）　19 は口縁部～体部破片。復元口径 34cm、器高 11+cm。内面は細かい刷毛目調整を施し、それをナデ消した後に 5 本の擂り目を施す。外面は指頭圧痕が目立つ。色調は内外面ともに淡白橙色。焼成は良好。ただし、器壁はサンドイッチ状態で内部に黒灰色の塊が見える。このことからも瓦質土器の焼成不良の可能性も考えられる。20 は底部破片。復元底径は 12.1cm。擂り目が底部と体部の接合付近から施されているのが観察できる。21、22、23 は口縁部～体部破片。24 は底部破片。外面には指頭圧痕が残る。

瓦質土器

火鉢（25）　底部破片。脚付き。内面は横ナデ。外面は縦方向の丁寧なミガキ c。脚は貼り付け。

龍泉窯系青磁

椀(27)　復元口径 11.6cm、器高 3.9+cm。内面の口縁部側に文様を彫っている可能性あり。未分類。Ⅳ類の系統か。

香炉（26）　器高 2.45+cm。八卦文。脚付き。仏具。Ⅲ類系か。

染付

椀（28）　口縁部の破片。青い呉須により、内外面に文様を付ける。内面は線。外面は雷紋のような記号が巡る。明染付か。

高麗青磁

椀（29）　口縁部を欠損する底部破片。器高 1.9+cm、底径 4.3cm。高台の畳付と内面の見込み部には乳白色の目跡が残る。釉はごくわずかに灰色がかった透明釉が内外面にかけられる。畳付部の釉は雑に削り取られている。

土製品

焼土塊（30、31、33）　一面ないし二面方向に平坦な面を持つ焼けた土の塊。平坦な面には藁の痕跡が認められる。

炉壁（32）　表面に黒灰色の鉱物が溶解して付着している。やや光沢がありガラス質。それ以外の面は灰色の器壁が露出している。

石製品

叩き石（34）　縦 4.25cm、横 4.3cm、厚さ 3cm。表面は打痕が残る。

碁石（35）　縦 2.25cm、横 2cm、厚さ 1.15cm。色調は白色。石材は長石。全面をなめらかに研磨して丸みを帯びている。

不明製品（36） 滑石製石鍋の二次利用品か。

193SD055 灰茶色土出土遺物（Fig.23）

土師器

坏 b（37） 口径 13cm、器高 3.65cm、底径 6.2cm。焼成は良好。色調は赤褐色。底部切り離し技法は回転糸切り。

土師質土器

擂鉢（38、39） 38 は口縁部から体部の破片。復元口径 32.4cm、器高 10.8 + cm。内面は横ナデ後に細かな刷毛目調整。その後に、6 条の擂り目を、間隔を開けて刻む。色調は内外面ともに淡白橙色。焼成はやや不良で、器壁断面を観察すると中心部に帯状に灰色を呈す生焼け部がある。39 は底部の破片。器高 1.5 + cm、復元底径 15.1cm。見込み部から体部の立ち上がりに擂り目を施している。見込み部には擂り目を施していない。焼成はやや不良。器壁断面には生焼け部がサンドイッチ状になっており、灰黒色を呈す。底面は一定方向の刷毛目調整をして平滑に仕上げている。

国産陶器

卸皿（40） 底部破片。内面に格子状の卸目を施す。底部外面は回転糸切り。色調は淡黄褐白色。瀬戸美濃産か。

石製品

石鍋（41） 口縁部破片。滑石製。断面三角形鍔。

193SD078 出土遺物（Fig.23）

青磁

小皿 c（42） 復元口径 6.2cm、器高 1.7cm、復元底径 2.5cm。内外面に蓮華文を彫る。未分類。

土製品

土玉（43） 縦 2.4cm、横 2.05cm、厚さ 2.1cm。全面をナデ調整して丸みを帯びている。

193SD086 出土遺物（Fig.23）

土師器

小皿 a1（44） 口径 8.1cm、器高 0.75cm、底径 7cm。底部切り離し技法は回転糸切り。

須恵質土器

鉢（45） 底部破片。器高 2+cm、復元底径 10cm。内面は使用により摩滅している。捏鉢か。

石製品

不明製品（46） 縦 3.1cm、横 5.1cm、厚さ 2.1cm。滑石石鍋の二次利用品。内側に枠を作るように溝を彫り、やや丸みを帯びた平坦面を作り出している。

井戸出土遺物

193SE030 茶褐色土出土遺物（Fig.24）

瓦質土器

鉢（1） 口縁部破片。

瓦類

平瓦（2） 端部破片。凹面には布目痕。凸面には格子目叩き。端部は半分まではヘラ切りしているが、残りは分割した後、未調整である。

193SE030 黄色土出土遺物（Fig.24）

須恵器

蓋（3～7） 3～5は蓋a。口縁部の返りの位置が多様だが、時期差と考えられる。6は蓋3。7は蓋4。須恵器蓋の時期としては7世紀末から8世紀後半まで存在する型式である。井戸自体は共伴遺物からもっと新しい段階に構築されたものであるため、この須恵器群は周辺に存在してたであろう遺跡からの混入と考えられる。

土師器

蓋 3（8） 口縁部から体部の破片。復元口径 15.6cm、器高 2.55 + cm。口縁端部に沈線状の溝が施される。焼成は不良。器形が特殊なため皿の可能性も残る。

小皿 b（9） 口径 7cm、器高 1.75cm、底径 4.6cm。底部切り離し技法は回転糸切り。

瓦

平瓦（10） 破片。凹面は摩滅が激しく不明。凸面は縄目叩き。指頭圧痕による窪みがある。端部調整はヘラ切り。焼成は良好で瓦質。

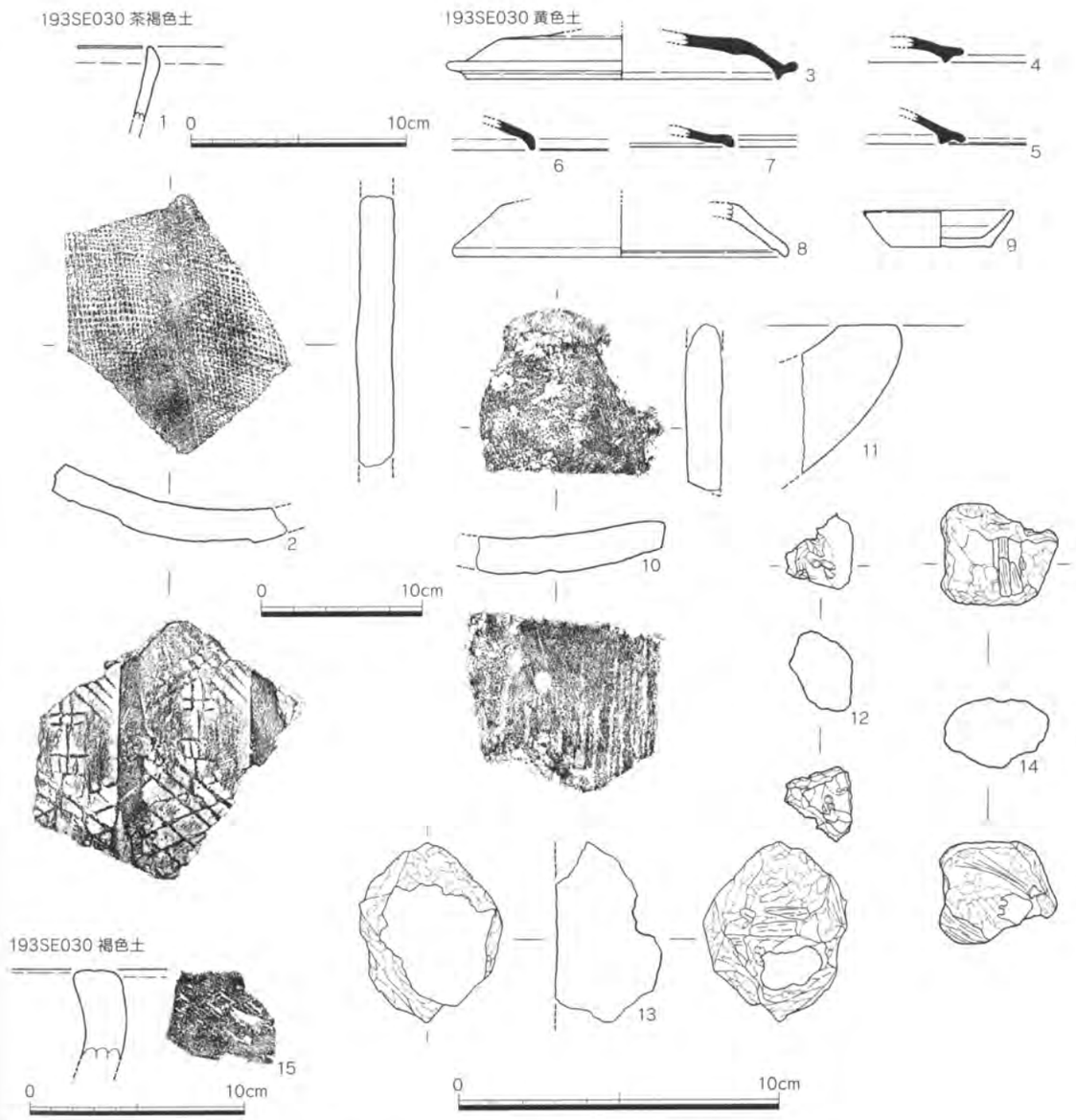


Fig.24 第 193 次調査井戸出土遺物実測図その 1（1/2、1/3）

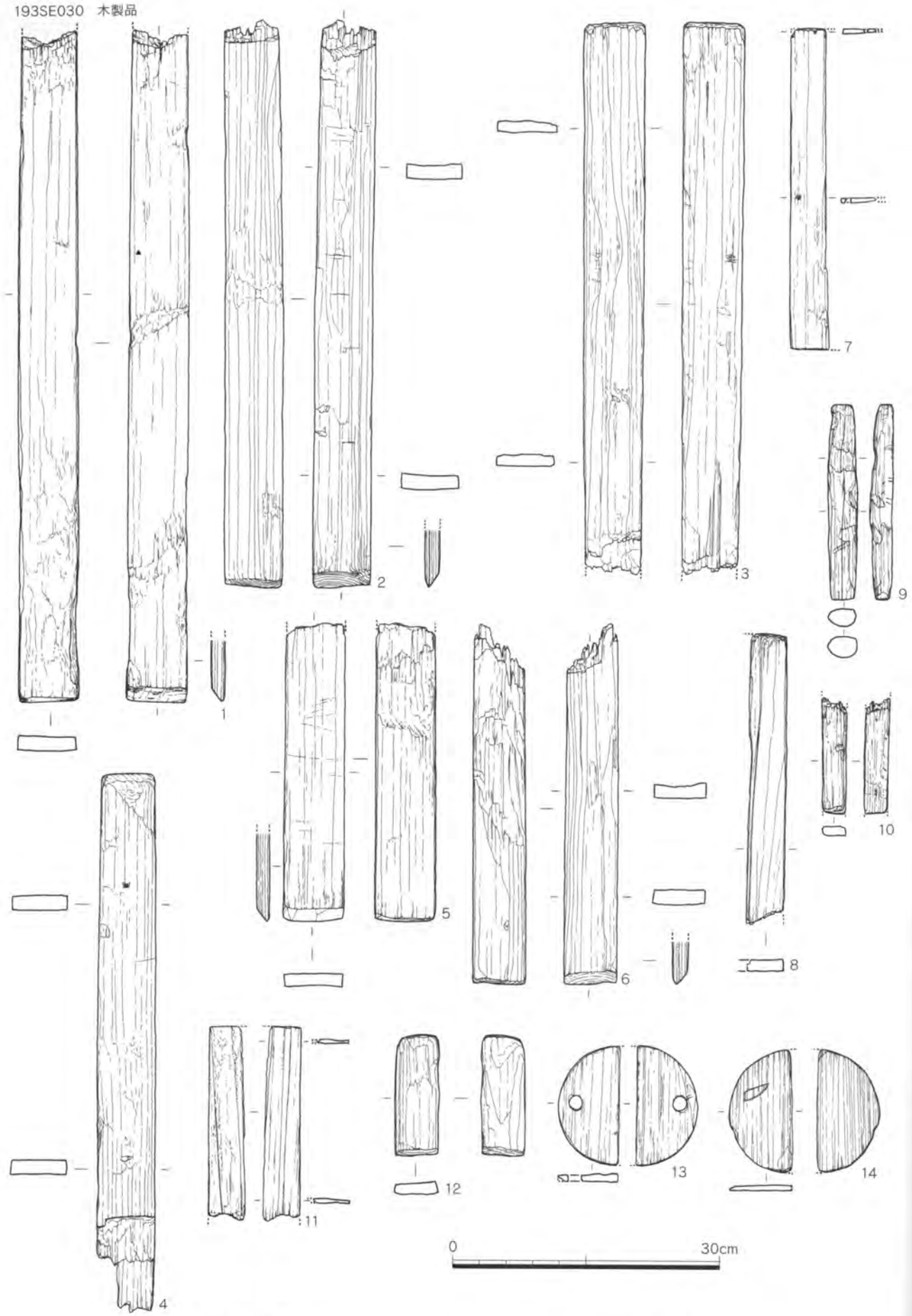


Fig.25 第193次調査井戸出土遺物実測図その2 (1/6)

石製品

石鍋 (11) 口縁部破片。色調は淡灰褐色。石材は砂岩。

金属製品

鉱滓 (12) 小破片。色調は暗灰褐色～暗茶褐色。

土製品

炉壁 (13) 胎土の基本的な色調は淡橙褐色だが、内面は灰色に変化している。外面には藁などの痕跡がみえる。

焼土塊 (14) 小破片。内外面とも藁の痕跡が認められる。

193SE030 出土遺物 (Fig.25)

木製品

井戸枠材 (1 ～ 6) 縦板。5は破片。縦33.9cm、横6.9cm、厚み1.5cm。横方向の両端部は切断して、縦方向の平面は若干加工をして平坦にしている。縦方向の下部は斜めに切断して突出させている。全体として縦は64.6cm ～ 76cm。長横幅は5 ～ 7cm弱で両面を鋭利な器具で切断している。下部は斜めに切り落として鋭く加工している。こちらが井戸枠の底部に突き刺す側と考えられる。12は小破片。縦13.7cm、横5.1cm、厚み1.4cm。両端は加工されている。

板材 (7、8) 7は縦36.5cm、横4.3cm、厚さ0.6cm。中央部と上部に穿孔が認められる。ほかの井戸枠に比べると厚さが薄い。8は片側が割れた破片。横方向の端部は切断して加工されている。縦33cm、横4.3cm、厚さ1.4cm。

横桟 (9、10) 9は、縦22.1cm、横3.4cm、厚み2.6cm。両端は加工している。板材ではなく丸木を加工している。横桟か。10は小破片。横桟か。

蓋 (13、14) 13は縦14.0cm、横7.2cm、厚み0.7cm。本来円形だが現状は1/2。14は縦13.55cm、縦6.9cm、厚さ1.05cm。中央から外側に近い部位に穴が開けられている。穴の直径は1.6cm。13と同じく残存率は半分。13と14は接合しない。

土坑出土遺物

193SK008 出土遺物 (Fig.26)

土製品

取瓶 (1) 器高3.5+ cm。内面は器壁が還元化しており、青灰色を呈し焼締まっている。胎土の色調は明灰色。

193SK021 出土遺物 (Fig.26)

土師器

杯b (2) 底部～体部の破片。器高2.0+ cm、底径6.1 cm。色調は淡紅灰色。底部切り離し技法は回転糸切り。

193SK025 出土遺物 (Fig.26)

土師器

小皿a1 (3、4) 3は復元口径8.7 cm、器高1.2 cm、復元底径6.8 cm。色調は黄灰色。底部切り離し技法は、回転糸切り。器形はやや歪んでいる。4は器高1.0+ cm。色調は赤褐色。底部切り離し技法は回転糸切り。

杯a (5、6) 5は口径13.7 cm、器高2.8 cm、底径9.4 cm。底部切り離しは回転糸切り。黄灰色。6は復元口径13.7 cm、器高3.2 cm、底径8.8 cm。底部切り離し技法は回転糸切り。色調は茶褐色。器

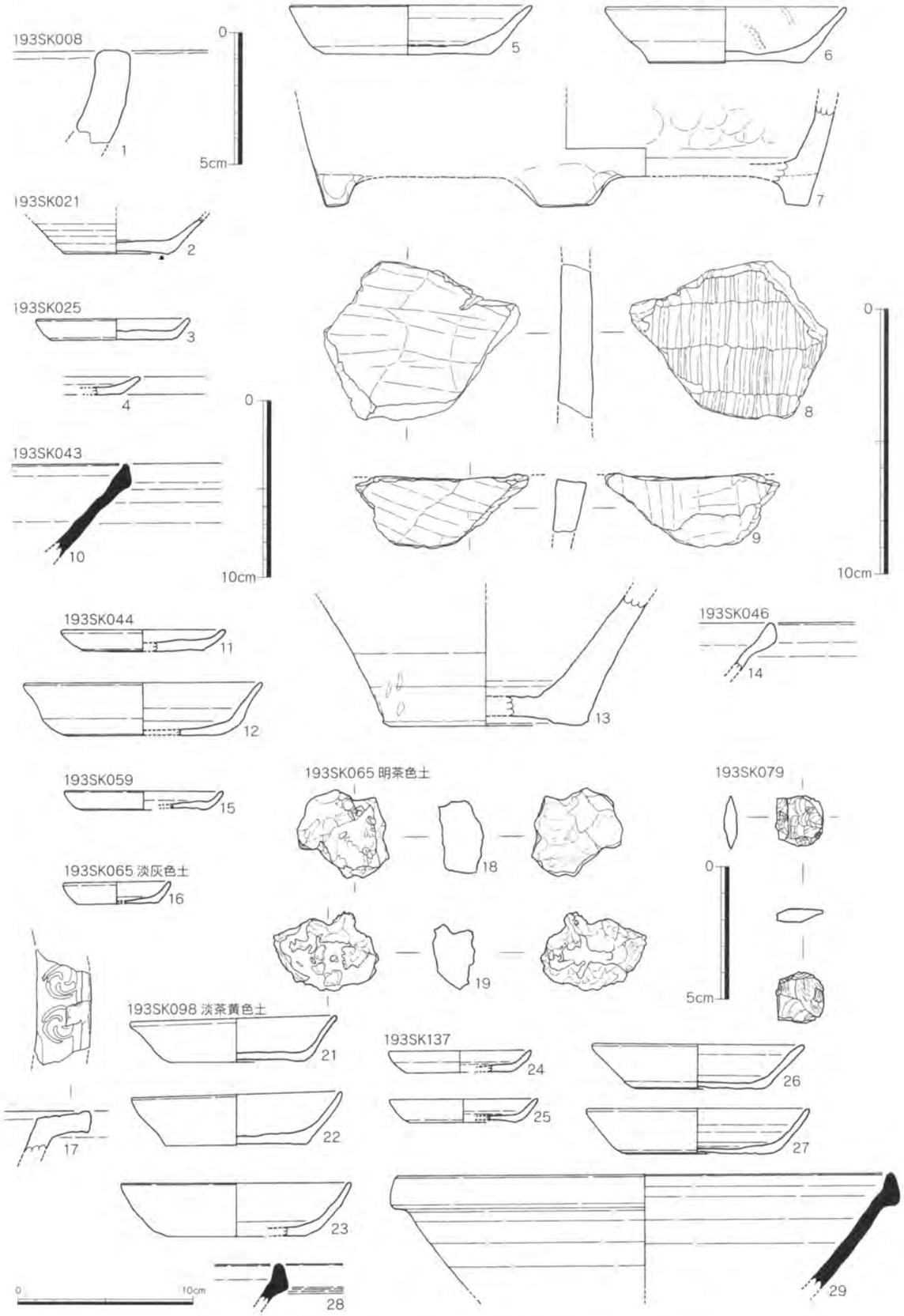


Fig.26　第 193 次調査土坑出土遺物実測図その 1（1/2、1/3）

形から坏 b の可能性もある。

瓦質土器

火鉢(7)　底部破片。器高 5.7+ ㎝、復元底径 27.2 ㎝。台形の脚が付く。底部は未調整で粗い砂目となっている。焼成はやや不良。器壁断面がサンドイッチ状になって、中央部が灰黒色を呈す。外面にわずかに瓦質化しており、薄黒色をしている。

石製品

滑石製石鍋（8、9）　8 は縦 6.0+ ㎝、横 7.4+ ㎝、厚 1.2 ㎝。外面に縦方向の細かい単位での鑿削り痕跡あり。9 は縦 2.75+ ㎝、横 6.5+ ㎝、厚 1.1 ㎝。

193SK043 出土遺物（Fig.26）

須恵質土器

鉢（10）　器高 5.3+ ㎝。焼成はやや不良。色調は明茶褐色。

193SK044 出土遺物（Fig.26）

土師器

小皿 a1（11）　復元口径 9.4 ㎝、器高 1.25 ㎝、復元底径 6.9 ㎝。色調は褐黒色。底部切り離し技法は回転糸切り。

杯 a（12）　復元口径 13.6 ㎝、器高 3.0 ㎝、復元底径 9.1 ㎝。色調は黄灰色。底部切り離し技法は回転糸切りか。

国産陶器

壺（13）　底部破片。器高 7.0+ ㎝、復元底部径 11.6 ㎝。内外面に青灰色の釉垂れが認められる。底部外面の外側に、離れ砂的な帯が円形に認められる。底部外面から内面に向かっておされて、わずかに上げ底状態になっている。

193SK046 出土遺物（Fig.26）

瓦質土器

捏鉢（14）　口縁部破片。器高 2.7+ ㎝。焼成はやや不良。

193SK059 出土遺物（Fig.26）

土師器

小皿 a1（15）　破片。口径復元 9.0 ㎝、器高 1.1 ㎝、復元底径 7.4 ㎝。色調は黄灰色。底部切り離し技法は回転糸切り。XVI 期。

193SK065 淡灰色土出土遺物（Fig.26）

土師器

小皿 b（16）　復元口径 6.1 ㎝、器高 1.25 ㎝、復元底径 4.6 ㎝。色調は黄灰色。底部切り離し技法は回転糸切り。

瓦質土器

土鍋（17）　口縁部破片。器高2.4+㎝。焼成はやや不良。色調は赤黄灰色～薄黒灰色。口縁部上部に、左三つ巴文が連続スタンプされている。

193SK065 明茶色土出土遺物（Fig.26）

鉄製品

鉄滓（18、19）　18 は縦 3.3 ㎝、横 3.5 ㎝、厚 1.6 ㎝。19 は縦 3.0 ㎝、横 4.0 ㎝、厚 1.5 ㎝。

193SK079 出土遺物（Fig.26）

石製品

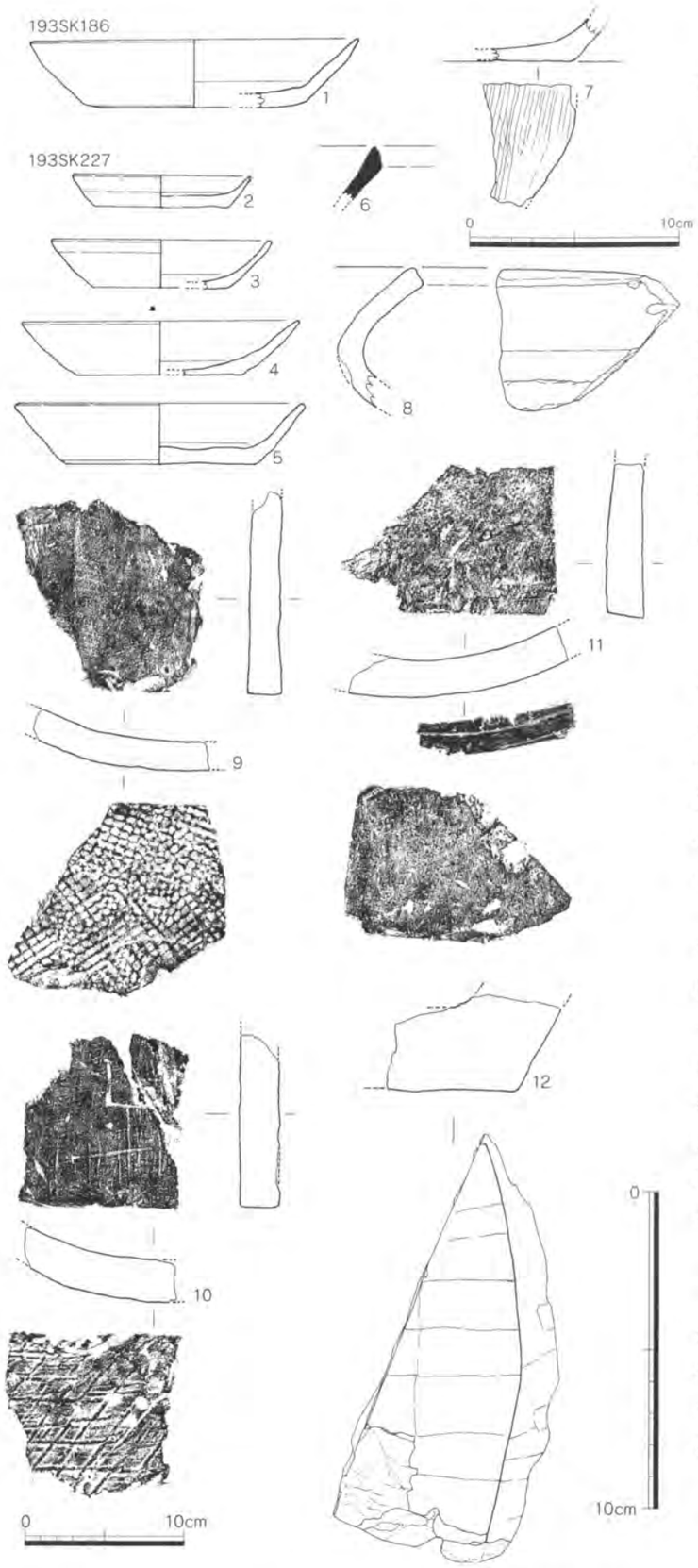


Fig.27　第 193 次調査土坑出土遺物実測図その 2（1/2、1/3）

剥片（20）　縦 1.8 ㎝、横 1.9 ㎝、厚 0.5 ㎝。石材は黒曜石。

193SK098 淡茶黄色土出土遺物（Fig.26）

土師器

杯 a（21、22、23）　21 は復元口径 11.65 ㎝、器高 2.45 ㎝、底径 7.65 ㎝。22 は口径 11.9 ㎝、器高 2.85 ㎝、底径 8.0 ㎝。21.22 は共に底部切り離し技法は回転糸切り。23 は復元口径 13.0 ㎝、器高 3.05 ㎝、復元底径 8.0 ㎝。底部の残存が少なく底部切り離し技法は不明。

193SK137 出土遺物（Fig.26）

土師器

小皿 a1（24、25）　24 は復元口径 8.0 ㎝、器高 1.25 ㎝、復元底径 5.9 ㎝。色調は黄灰色。底部切り離し技法は回転糸切り。25 は復元口径 8.4 ㎝、器高 1.3 ㎝、復元底径 6.0 ㎝。底部切り離し技法は風化のため不明。

杯 a（26、27）　26 は復元口径 12.0 ㎝、器高 2.5 ㎝、復元底径 7.5 ㎝。色調は黄灰色だが、一部淡赤灰色を呈す。底部切り離し技法は回転糸切り。その後に板状圧痕。27 は復元口径 12.6 ㎝、器高 2.55 ㎝、復元底径 8.4 ㎝。底部切り離し技法は回転糸切り。その後に板状圧痕。

須恵質土器

捏鉢（28、29）　28 は口縁端部破片。器高 2.0+ ㎝。東播系。29 は口縁部から体部の破片。復元口径 27.8 ㎝、器高 6.5+ ㎝。東播系。

193SK186 出土遺物（Fig.27）

土師器

坏 a（1）　復元口径 15.5cm、器高 3.2cm、復元底径 9.5cm。底部切り離しは回転糸切り、後に板状圧痕。色調は黄灰色。

193SK227 出土遺物（Fig.27）

土師器

小皿 a（2）　復元口径 8.4 ㎝、器高 1.5 ㎝、復元底径 3.1 ㎝。底部切り離しは回転糸切り。

小杯 a（3）　復元口径 10.4 ㎝、器高 2.3 ㎝、復元底径 6.4 ㎝。底部切り離しは回転糸切り。

杯 a（4、5）　4 は復元口径 13.2 ㎝、器高 2.55 ㎝、復元底径 8.0 ㎝。底部切り離しは回転糸切り。5 は復元口径 13.7 ㎝、器高 2.9 ㎝、底径 8.8 ㎝。底部切り離しは回転糸切り。板状圧痕あり。XVII 期。

須恵質土器

捏鉢（6）　口縁部破片。器高 2.5+ ㎝。

瓦質土器

鉢（7）　底部破片。器高 2.1 ㎝。焼成はやや不良。瓦質。底部に並行のカキメ調整。

甕（8）　器高 6.6 ㎝。口縁部破片。焼成は不良。

瓦類

平瓦（9 ～ 11）　9 は縦 12.7+ ㎝、横 11.1+ ㎝、厚 2.1 ㎝。焼成はやや不良で瓦質。凹面は布目痕跡をナデ消している。凹面は格子叩き目痕跡。端部はヘラ切り、広端部の可能性が高い。10 は縦 10.9+ ㎝、横 9.6+ ㎝、厚 2.6+ ㎝。焼成はやや良好。瓦質。凹面は布目痕跡、凸面は格子目叩き調整。端部はヘラ調整。11 は縦 9.7 ㎝、横 13.8 ㎝、厚 2.6 ㎝。焼成はやや良好。画質。淡黄灰色。凹面はナデ調整。凸面は工具をつかったナデ調整。側端部はヘラで切れ目をいれたあと折っている。端部はヘラ調整。凹面側の端部縁をヘラで調整している。端部に二条の刻線がはいる。

石製品

滑石製石鍋（12）　底部破片。器高 3.0 ㎝。二次利用をしようと底面を上下方向から切っていることが断面で確認できる。最後はへし折ったようだ。底部から体部にかけては煤が器壁にしみこんでおり、鍋を火にかけたことがわかる。

その他の遺構出土遺物

193SX002 出土遺物（Fig.28）

金属製品

鉱滓（1）　縦 3.8 ㎝、横 4.7 ㎝、厚 1.15 ㎝。片側の面に土師質の器壁のようなものが残存しているので、そちら側が炉に接していたと考えられる。

193SX006 出土遺物（Fig.28）

土師器

小皿 a（2、3）　2 は復元口径 8.6 ㎝、器高 1.1 ㎝、復元底径 6.8 ㎝。底部切り離し技法は回転糸切り。3 は復元口径 8.8 ㎝、器高 1.2 ㎝、復元底径 7.0 ㎝。

国産陶器

鉢（4）　底部破片。器高 2.2+ ㎝。上げ底状の底部。内面は器壁が摩滅して平滑になっている。

石製品

滑石製品（5）　縦 2.1 ㎝、横 1.6 ㎝、厚 0.8 ㎝。外径 5mm、内径 2mm の穴が穿たれている。再利用品か。

193SX007 出土遺物（Fig.28）

土師器

小皿 a1（6） 復元口径 9.7 ㎝、器高 0.9 ㎝、復元底径 7.7 ㎝。摩耗のため調整不明。

杯 a（7） 復元口径 11.2 ㎝、器高 2.4 ㎝、復元底径 8.0 ㎝。摩耗のため調整不明。

瓦質土器

捏鉢（8、9） 8は口縁部破片。器高2.3㎝。焼成は不良。9は口縁部破片。器高2.4㎝。焼成は不良。色調は明灰色。

193SX016 出土遺物（Fig.28）

石製品

滑石製石鍋（10） 破片。縦 2.85 ㎝、横 4.6 ㎝。

193SX020 出土遺物（Fig.28）

土師器

小皿 a1（11） 復元口径 9.3 ㎝、器高 1.35 ㎝、復元底径 7.4 ㎝。底部切り離し技法は不明。板状圧痕あり。

杯 a（12） 復元口径 12.2 ㎝、器高 2.55 ㎝、復元底径 8.6 ㎝。色調は黄灰色。底部切り離し技法は回転糸切り。

193SX020 褐色土出土遺物（Fig.28）

弥生土器

壺（13） 口縁部破片。器高 2.5+ ㎝。色調は黄赤色。

須恵質土器

鉢（14～16） 14は器高3.1+㎝。15は口縁部破片だが、端部を欠く。器高3.2+㎝。16は器高2.8+㎝。14～16は捏鉢の口縁部。東播系か。

国産陶器

甕（17） 口縁部破片。器高 3.2+ ㎝。常滑産か。

中国陶器

鉢（18、19） 18は口縁部破片。復元口径24.9㎝、器高3.7+㎝。鉢I-1a。19は復元口径24.4㎝、器高11.1㎝、復元底径8.6㎝。内面に6条の摺目を施す。鉢II-1.a類。

石製品

紡錘車（20） 破片。縦 5.9+cm、横 2.4+cm、厚さ 1.5cm。底面は平坦に仕上げて、上部はやや丸味を帯びている。中央に直径 1cm 以上の穴を穿っている。色調は暗灰色。石材は滑石。

193SX020 黒色土出土遺物（Fig.28）

土師器

小皿 a1（21） 復元口径 9.4 ㎝、器高 1.3 ㎝、復元底径 7.4 ㎝。胎土は 2mm 以下の黄金色雲母片を大量に含む。色調は赤褐色。底部切り離し技法は回転糸切り。

杯 a（22） 復元口径 13.0 ㎝、器高 2.45 ㎝、復元底径 8.8 ㎝。色調は赤褐色。底部切り離し技法は回転糸切り。

杯 c（23） 高台部の破片。器高 2.2+ ㎝、高台径 6.0 ㎝。貼り付け高台。

須恵質土器

鉢（24） 器高 3.3 ㎝。

193SX020 黒色粘出土遺物（Fig.28）

須恵器

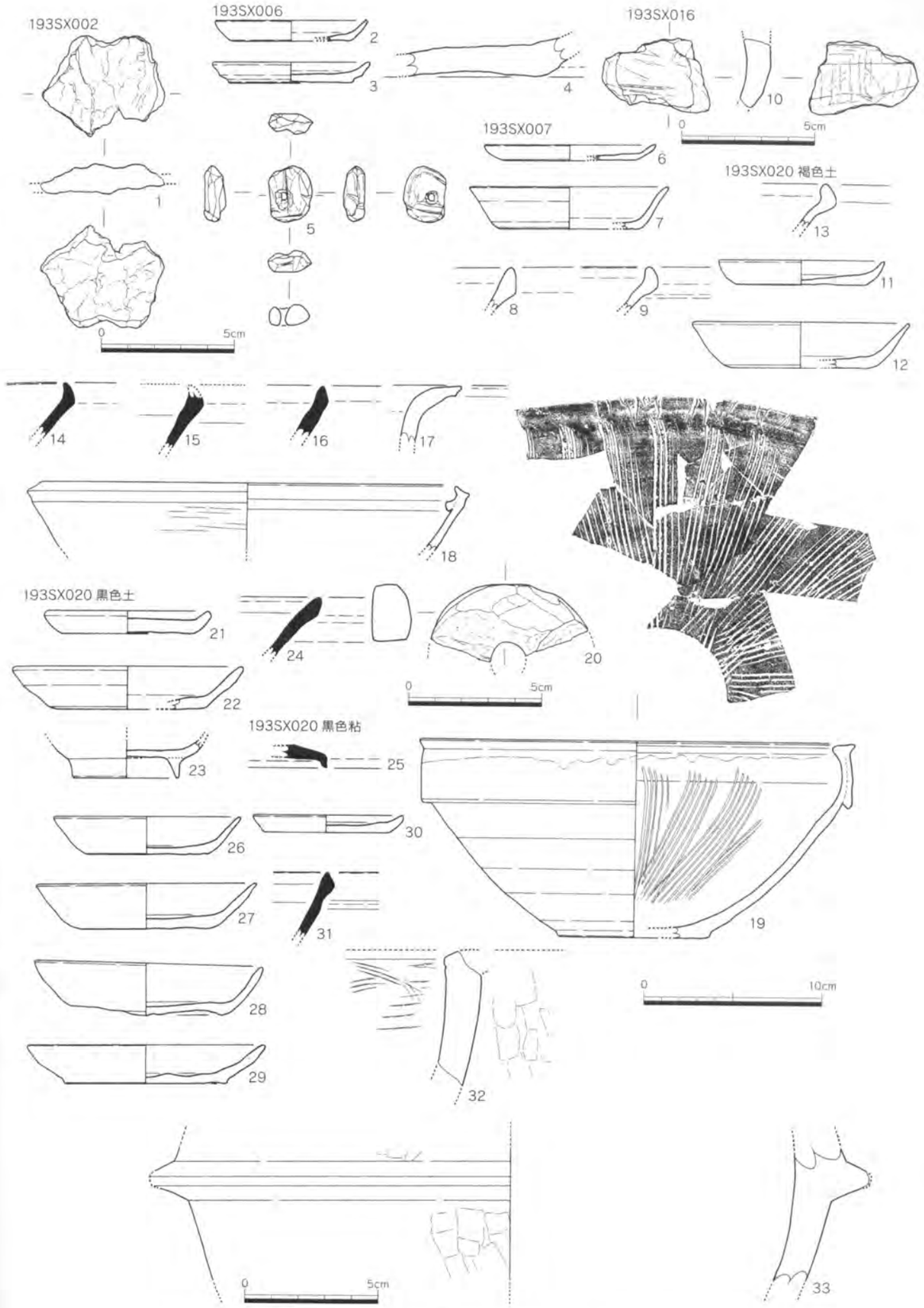


Fig.28 第 193 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 1（1/2、1/3）

蓋３（25）　口縁部破片。器高 1.3+ ㎝。口縁端部をやや外につまむ。

杯ａ（26 ～ 29）　26 は復元口径 10.6 ㎝、器高 2.15 ㎝、復元底径 7.0 ㎝。色調は灰白色。底部切り離し技法は回転糸切り。器壁がやや薄手。27 は復元口径 12.4 ㎝、器高 2.55 ㎝、底径 7.3 ㎝。底部切り離し技法は回転糸切り。胎土は、1mm 以下の金色雲母を少量含む。28 は完形。ただし、器形は歪んでいる。口径 12.8 ㎝、器高 2.95 ㎝、底径 8.6 ㎝。底部切り離し技法は回転糸切り。29 は復元口径 12.2cm、器高 2.55cm、復元底径 8.6cm。色調は淡褐灰色。底部切り離し技法は回転糸切り。

小皿ａ1（30）　口径 8.4 ㎝、器高 1.0 ㎝、底径 7.0 ㎝。底部切り離し技法は回転糸切り。その後に板状圧痕を施す。

須恵質土器

鉢（31）　口縁部破片。器高 3.7+ ㎝。口縁部外側に強いナデが入って屈曲している。

石製品

滑石製石鍋（32、33）　32 は体部の破片。器高 5.1+ ㎝、厚さ 1.3 ㎝。33 は鍔部の破片。器高 5.05 ㎝、復元鍔部最大径 27.1 ㎝。32.33 ともに外面に煤が付着している。

193SX023 出土遺物（Fig.29）

土師器

小皿ａ1（1、2）　1 は復元口径 9.0 ㎝、器高 1.3 ㎝、復元底径 7.2 ㎝。底部切り離し技法は不明。板状圧痕が確認できる。2 は復元口径 9.5 ㎝、器高 1.35 ㎝、復元底径 7.4 ㎝。底部切り離しは不明瞭。

杯ａ（3）　復元口径 14.2 ㎝、器高 2.2 ㎝、復元底径 9.2 ㎝。底部切り離し技法は回転糸切り。

193SX027 出土遺物（Fig.29）

須恵器

杯身（4）　口縁部破片。器高 1.3+ ㎝。

緑釉陶器

杯ｃ× 皿ｃ（5）　器高 1.2+ ㎝、復元高台径 6.0 ㎝。硬質。貼り付け高台。高台畳付まで施釉するが、外面高台内部は露胎しており、漬け掛けと思われる。見込みのヘラミガキ単位は太い。内面見込みにトチンのような痕跡がある。胎土の色調は青灰色。釉調は濃緑色。東海産か。

193SX035 出土遺物（Fig.29）

国産陶器

鉢（6）　底部破片。器高6.3+㎝、復元底径10.4㎝。内面は強い回転ナデ調整。外面は叩き調整の跡、刷毛目調整をして最後にナデ調整をしている。焼成は良好。色調は明赤褐色～黒褐色。常滑産。

瓦類

丸瓦（7）　縦 11.6+ ㎝、横 10.6+ ㎝、厚さ 2.7 ㎝。玉縁部の破片。凹面は布目痕、凸面は格子目叩き。焼成はやや良好で瓦質。側端部はヘラ切り調整。

平瓦（8、9）　8 は縦 12.0+ ㎝、横 7.6+ ㎝、厚さ 2.2 ㎝。焼成はやや不良で瓦質。凹面は布目痕、凸面は格子目叩き。側端部はヘラ切り調整。9 は縦 8.65+ ㎝、横 7.7+ ㎝、厚さ 2.2 ㎝。凹面は布目痕、凸面は格子叩き目。焼成は良好で、須恵質。

金属製品

鉱滓（10、11）　10 は縦 3.15 ㎝、横 2.6 ㎝、厚さ 1.8 ㎝。11 は縦 4.4 ㎝、横 3.8 ㎝、厚さ 2.7 ㎝。

193SX038 出土遺物（Fig.29）

瓦類

丸瓦（12）　縦 7.2 ㎝、横 6.6 ㎝、厚さ 1.4 ～ 1.6 ㎝。焼成は良好で須恵質。側端部は半分ヘラ切

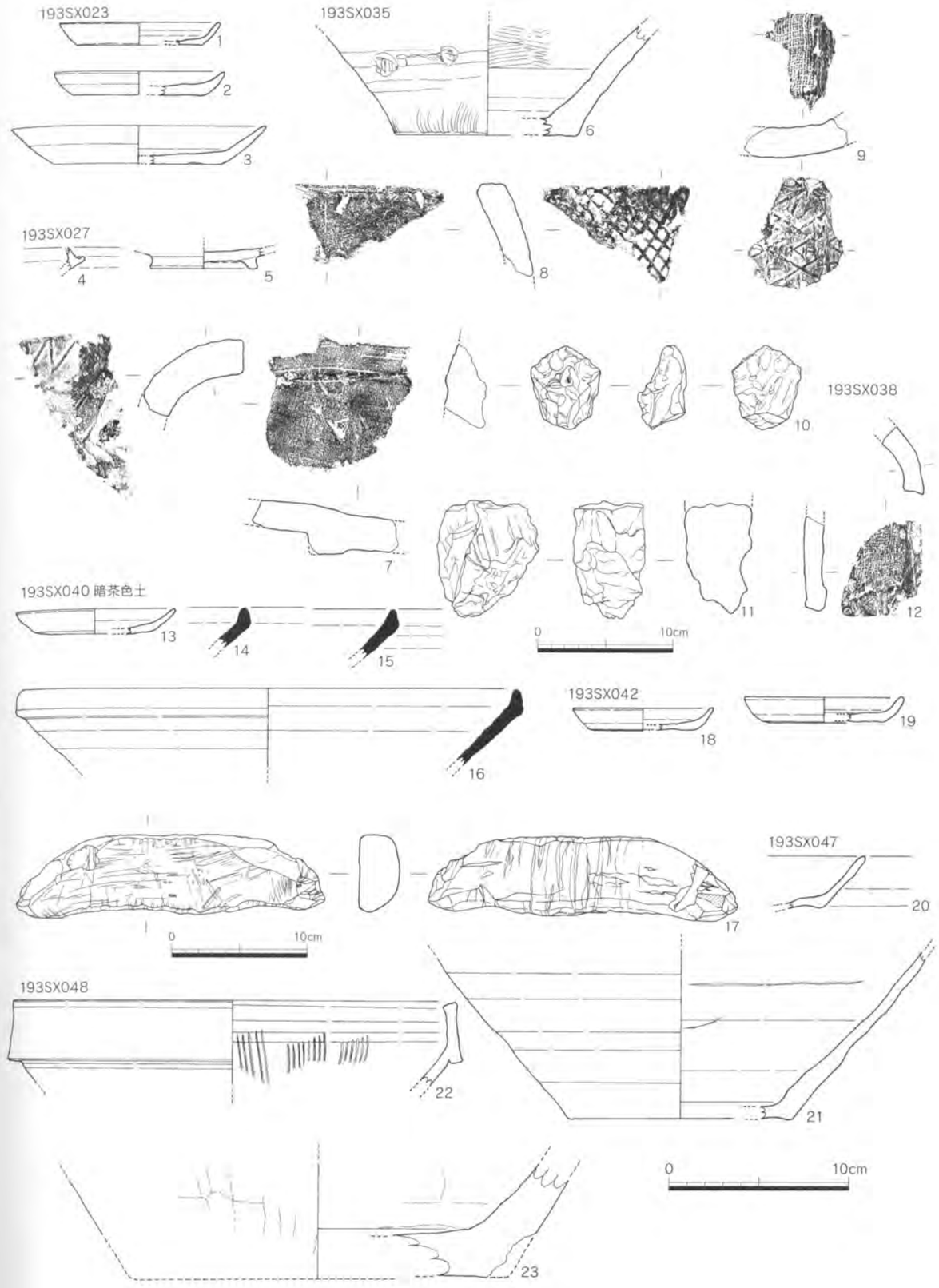


Fig.29　第 193 次調査その他の遺構出土遺物実測図その２（1/2、1/3、1/4）

りの後に折る。

193SX040 暗茶色土出土遺物 (Fig.29)

土師器

小皿 a1 (13) 復元口径 9.0 cm、器高 1.4 cm、復元底径 6.6 cm。底部切り離し技法は不明。

須恵質土器

捏鉢 (14 ～ 16) 14 ～ 16 は口縁部破片。すべて東播系と考えられる。14 は器高 2.2+ cm。15 は器高 2.8+ cm。16 は復元口径 27.7 cm、器高 4.3+ cm。

石製品

滑石製石鍋 (17) 縦 3.1 cm、横 11.5 cm、厚さ 1.5 cm。石鍋の再加工品ではあるが、利用目的は不明。

193SX042 出土遺物 (Fig.29)

土師器

小皿 a1 (18、19) 18 は復元口径 7.8 cm、器高 1.25 cm、復元底径 6.1 cm。19 は復元口径 8.9 cm、器高 1.4 cm、復元底径 7.0 cm。18、19 共に底部切り離し技法は回転糸切り。19 は切り離し後に板状圧痕を施す。

193SX047 出土遺物 (Fig.29)

土師器

坏 b (20) 器高 2.9+ cm。底部切り離し技法は回転糸切り。焼成は良好。

須恵質土器

捏鉢 (21) 底部から体部の破片。器高 9.5+ cm、復元底径 12.5 cm。焼成は不良で瓦質。

193SX048 出土遺物 (Fig.29)

輸入陶器

鉢 (22) 復元口径 25.0 cm、器高 4.7+ cm。II -1a 類。

石製品

滑石製石鍋 (23) 底部破片。器高4.3+cm、復元底径14.0cm程度か。内面は使用痕が多く残っている。

193SX052 出土遺物 (Fig.30)

瓦質土器

片口鉢 (1) 口縁部破片。器高 1.2+ cm。焼成は不良。瓦質。

193SX053 出土遺物 (Fig.30)

土師器

小皿 a1 (2) 復元口径 8.2 cm、器高 1.1 cm、復元底径 6.3+ cm。色調は赤褐色。底部切り離しは回転糸切り技法。

193SX056 出土遺物 (Fig.30)

石製品

砥石 (3) 縦 3.1 cm、横 1.65 cm、厚さ 1.0 cm。4 面が使用痕により平滑になっている。

193SX057 出土遺物 (Fig.30)

土師器

小皿 a1 (4) 復元口径 7.2 cm、器高 1.2 cm、復元底径 5.4 cm。色調は黄白色。底部切り離しは回転糸切り技法。

金属製品

鉱滓 (5) 縦4.6cm、横3.5cm、暑さ2.6cm。表面が金属質でなめらかな面と、土師質の部位が存在する。

193SX060 出土遺物 (Fig.30)

土師器

小皿 a1 (6) 復元口径 9.0 cm、器高 0.8 cm、復元底径 7.2 cm。色調は黄灰色。底部切り離しは回転糸切り後に、板状圧痕。

坏 a (7) 口径 13.0 cm、器高 2.55 cm、底径 8.8 cm。色調は淡赤褐色。底部切り離し技法は、回転糸切り技法。

瓦類

平瓦 (8) 厚さ2.3cm。焼成はやや不良。土師質。色調は黄灰色。凹面は布目痕跡、凸面は格子目叩き。記号として格子目内に「×」が確認できる。側端部はヘラ切り。

193SX067 出土遺物 (Fig.30)

石製品

滑石製石鍋 (9) 縦 2.8+ cm、横 6.7+ cm、暑さ 1.2 cm。外面は炭素が吸着している。煮炊きの痕跡と考えられる。

193SX069 出土遺物 (Fig.30)

石製品

滑石製加工品 (10) 縦 5.7 cm、横 6.3 cm、暑さ 2.1 cm。楕円形を呈す。石鍋の二次加工品。

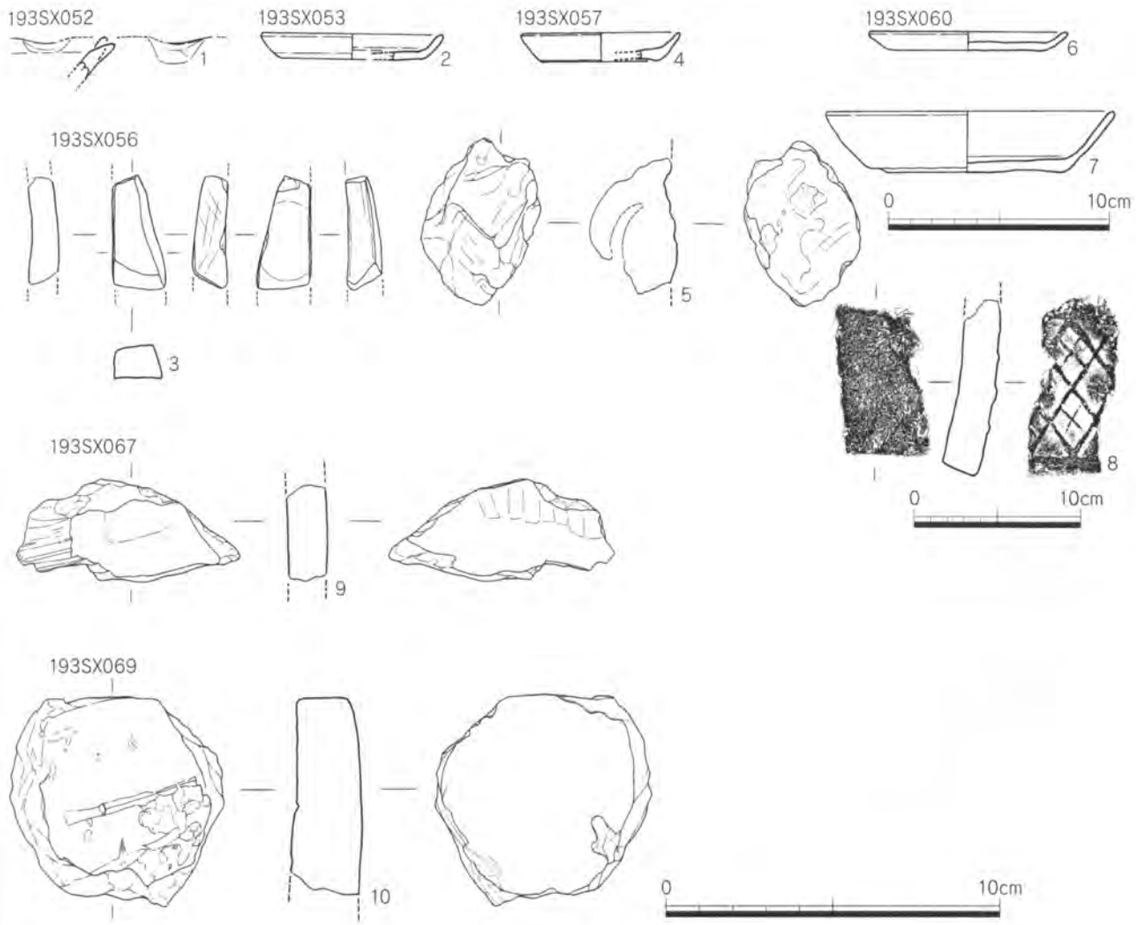


Fig.30 第 193 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 3 (1/2、1/3、1/4)

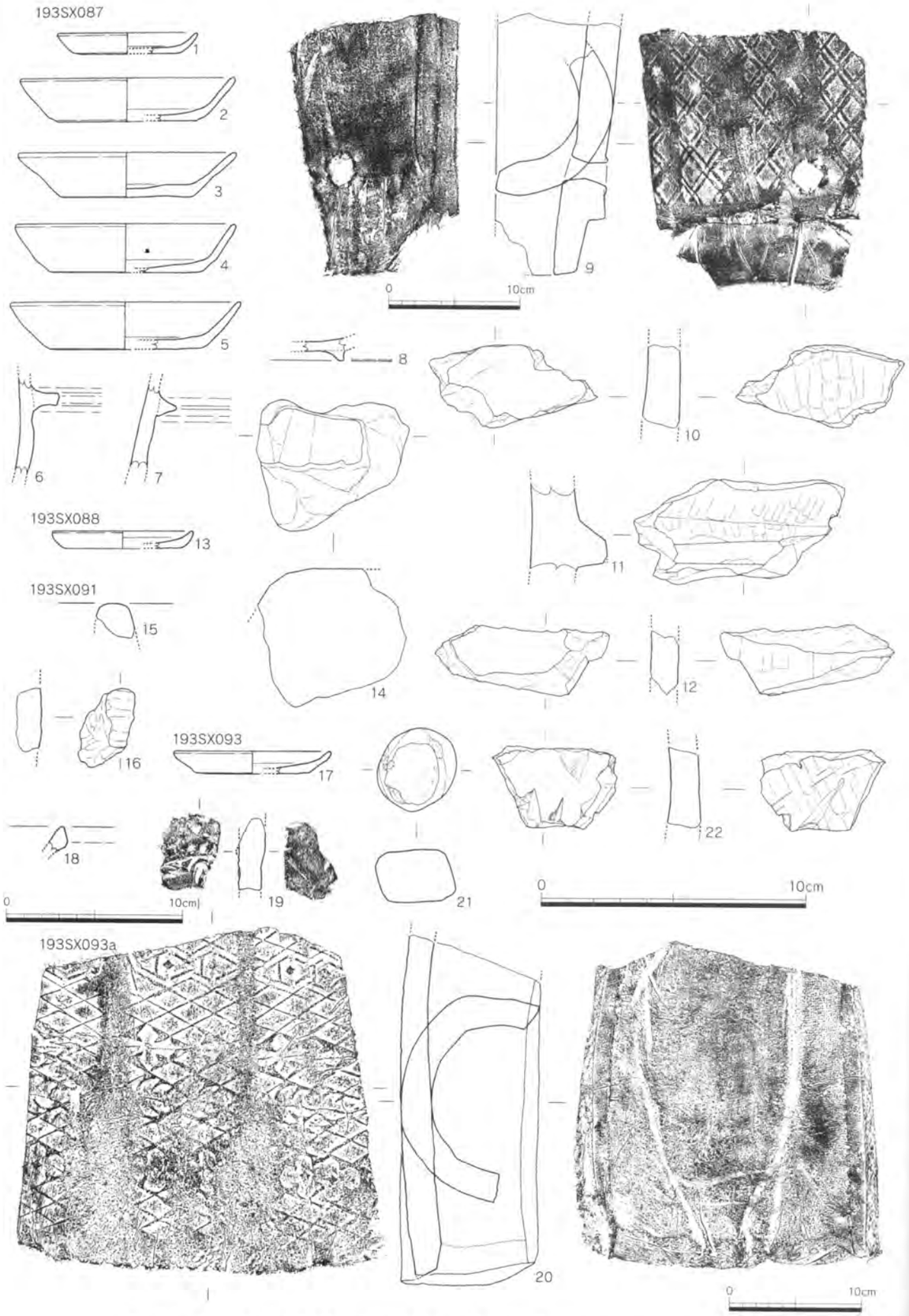


Fig.31　第 193 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 4（1/2、1/3、1/4）

193SX087 出土遺物（Fig.31）

土師器

小皿 a1（1）　復元口径 8.0 ㎝、器高 1.2 ㎝、復元底径 6.1 ㎝。底部切り離しは回転糸切り。

坏 a（2 ～ 5）　2 は復元口径 12.2 ㎝、器高 2.5 ㎝、復元底径 8.0 ㎝。底部切り離しは回転糸切り。板状圧痕あり。色調は黄灰色。3 は復元口径 12.4 ㎝、器高 2.6 ㎝、復元底径 7.6 ㎝。底部切り離しは回転糸切り。板状圧痕あり。色調は黄灰色。4 は復元口径 12.5 ㎝、器高 2.8 ㎝、復元底径 8.6 ㎝。底部切り離しは回転糸切り。色調は黄灰色。5 は、復元底径 13.0cm、器高 2.7cm、復元底径 8.6cm。底部切り離しは不明。板状圧痕あり。色調は淡赤灰色。

土師質土器

羽釜（7）　鍔部の破片。器高 4.7+cm。焼成は良好。色調は赤褐色。外面に煤が付着する。

瓦質土器

羽釜（6）　鍔部の破片。器高 5.6+ ㎝。焼成は良好。色調は灰色～濃黒色。外面の前面にわたって煤が吸着している。

瓦器

椀 c（8）　器高 1.3+ ㎝。貼り付け高台。内面は灰白色で瓦質化していない。

瓦類

丸瓦（9）　縦 19.2 ㎝、横 11.1 ㎝、厚さ 2.5 ㎝。玉縁部の破片。焼成はやや不良。色調は黄白色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を少量含む。端部はヘラ切り。側縁部はヘラ切り後に凹面側をヘラにより調整している。凹面は布目痕、凸面は格子目。二重格子である。凸面方向から、瓦の中央に直径 2.2cm の孔を穿っている。

石製品

滑石製石鍋（10～12）　10は器高3.1+cm、厚さ1.3cm。11は器高3.3cm、厚さ1.7cm、鍔部厚さ2.8cm。鍔部の破片。色調は茶褐色。12は厚さ1.0cm。外面は煤が付着している。

193SX088 出土遺物（Fig.31）

土師器

小皿 a1（13）　復元口径 8.0 ㎝、器高 1.0 ㎝、復元底径 6.6 ㎝。底部切り離しは回転糸切り。

土製品

鋳型（14）　縦4.9+cm、横5.1+cm、厚さ5.1+cm。平坦面と斜面によって構成されている鋳型。色調は、灰白色。鋳型面のクロミは残存している。鍋か。

193SX091 出土遺物（Fig.31）

石製品

滑石製石鍋（15、16）　15 は口縁部の破片。器高 0.9+ ㎝。16 は体部の小片。

193SX093 出土遺物（Fig.31）

土師器

小皿 a1（17）　復元口径 8.9 ㎝、器高 1.3 ㎝、復元底径 6.4 ㎝。底部切り離しは回転糸切り。胎土に 1mm 以下の金色雲母を多量に含む。

須恵質土器

鉢（18）　口縁部破片。焼成は良好。

瓦類

軒丸瓦（19）　瓦当面の破片。縦 5.4+ ㎝、厚さ 2.05 ㎝。焼成は不良。瓦質。蓮弁と珠文を部分的

に確認できる。

丸瓦（20） 縦 26.4 ㎝、横 15.5 ㎝、厚さ 2.3 ㎝。焼成は良好。須恵質。色調は褐灰色。胎土は5mm 以下の白色粒子を多量に含む。端部はヘラ切り。側縁部は半分ヘラ切りの後に破断して未調整。凹面は布目圧痕と吊り紐痕跡あり。凸面は格子叩目調整。叩き目には、記号が 2 種類確認できる。器形は歪んでいる。

土製品

瓦玉（21） 縦 3.15 ㎝、横 3.0 ㎝、厚さ 2.0 ㎝。色調は暗黒色。

石製品

滑石製石鍋（22） 体部の破片。厚さ 1.2 ㎝。

193SX096 出土遺物（Fig.32）

須恵器

蓋（1） 器高 1.5+ ㎝。天井部ヘラ削り。線刻の記号あり。焼成はやや良好。色調は暗灰赤色。

甕（2） 器高 2.4+ ㎝。口縁部破片。

193SX106 出土遺物（Fig.32）

土製品

土壁（3～9） それぞれ、色調は赤褐色を呈す。苫を含んでいた痕跡が残る。平らな面をもつ個体は、壁の面に使われていたと考えられる。3は縦5.0+㎝、横4.4+㎝、厚さ3.7㎝。4は縦2.6+㎝、横3.5+㎝、厚さ1.9+㎝。5は縦2.6+㎝、横2.5+㎝、厚さ2.0+㎝。6は縦4.1+㎝、横4.0+㎝、厚さ2.3+㎝。7は縦5.7+㎝、横4.9+㎝、厚さ3.4+㎝。8は縦2.3+㎝、横1.7+㎝、厚さ1.4+㎝。9は縦2.7+㎝、横4.6+㎝、厚さ1.3+㎝。10は縦3.8+㎝、横5.6+㎝、厚さ4.1+㎝。

193SX111 出土遺物（Fig.32）

瓦類

平瓦（11） 縦9.2+㎝、横14.2+㎝、厚さ2.2+㎝。側端部は一部にヘラ切りで分割ラインをいれて、あとは割ってそのままの状態。端部は凹面に面取り状にヘラ調整をしている。凹面は布目痕跡をナデ消している。凸面は格子目叩き調整。焼成はやや不良。瓦質。

193SX112 出土遺物（Fig.32）

石製品

不明製品（12） 縦 2.3+ ㎝、横 1.25 ㎝、厚さ 0.8+ ㎝。滑石製石鍋の再利用品か。

193SX113 出土遺物（Fig.32）

土師器

椀 c（13） 器高 2.25+ ㎝、復元高台径 7.4 ㎝。

193SX114 出土遺物（Fig.32）

土師器

小皿 a1（14） 復元口径 8.2 ㎝、器高 1.05 ㎝、復元底径 5.8 ㎝。底部切り離しは回転糸切り。焼成は良好。色調は赤褐色。

須恵質土器

こね鉢（15） 口縁部破片。器高 3.0+ ㎝。東播系。

193SX118 出土遺物（Fig.32）

土師器

鉢（16） 口縁部破片。器高4.9+㎝。口縁部端部を内側に傾斜させる。外面の前面に煤が付着している。

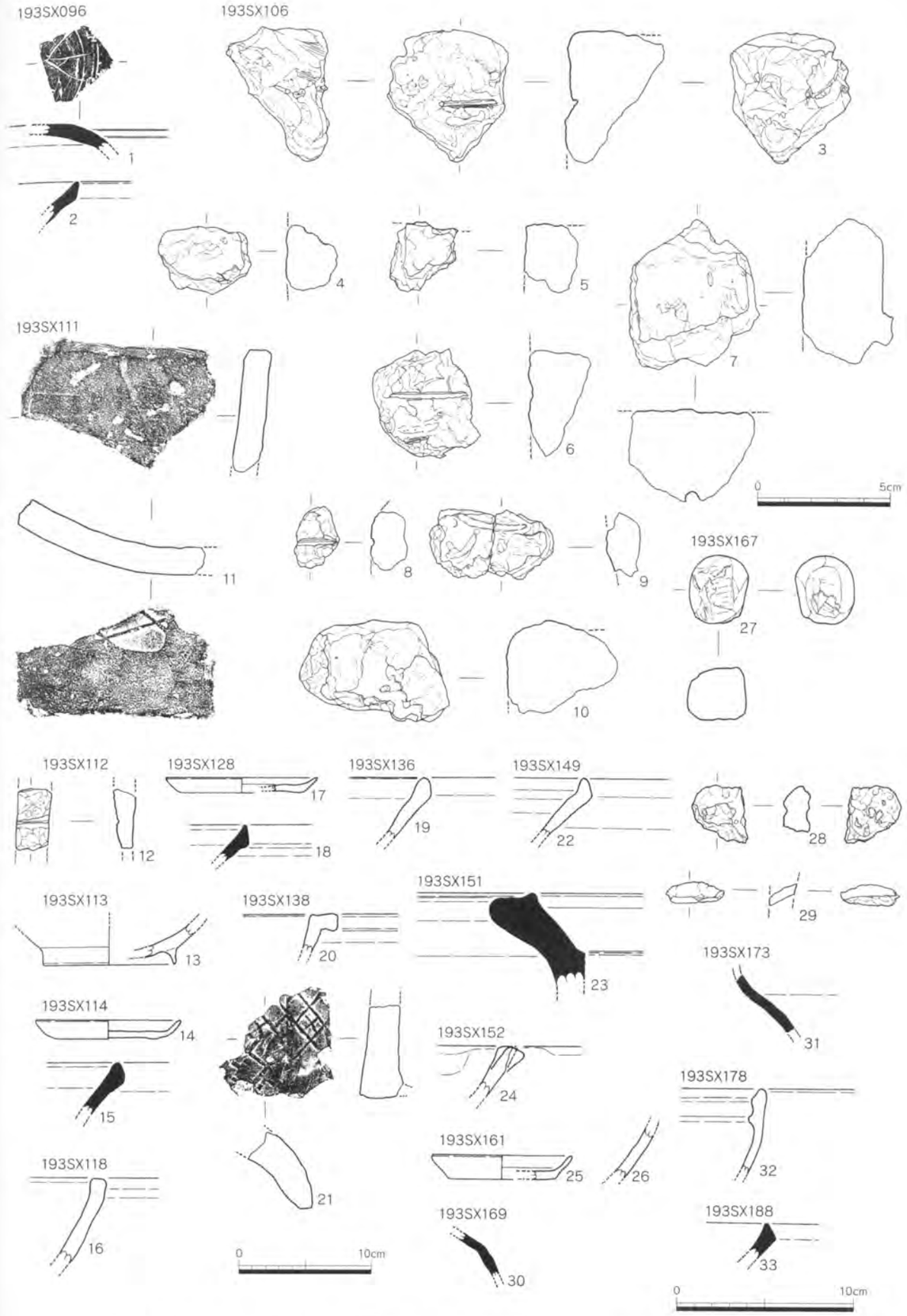


Fig.32 第 193 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 5（1/2、1/3、1/4）

193SX128 出土遺物 (Fig.32)

土師器

小皿 a1 (17)　復元口径 8.6 cm、器高 0.85 cm、復元底径 7.0 cm。底部切り離しは回転糸切り。その後に板状圧痕を施す。

須恵器

鉢 (18)　器高 2.1+ cm。口縁部破片。東播系。

193SX136 出土遺物 (Fig.32)

瓦質土器

鉢 (19)　器高 3.4+ cm。口縁部破片。焼成は不良。色調は灰白色。

193SX138 出土遺物 (Fig.32)

土師質土器

鍋 (20)　口縁部破片。器高 2.2+ cm。口縁部はＬ字型で横方向に水辺に延びている。外面には煤が吸着している。焼成は良好。

瓦類

丸瓦 (21)　縦 8.6 cm、横 8.3 cm、厚さ 2.5 cm。玉縁部が剥離している。凹面はナデ調整。凸面は格子目叩き調整。格子目の間に「×」字あり。側端部はヘラ切り。

193SX149 出土遺物 (Fig.32)

土師質土器

鉢 (22)　口縁部破片。器高 3.2+ cm。焼成はやや不良。色調は淡赤色。

193SX151 出土遺物 (Fig.32)

中国陶器

壺 (23)　器高5.2+cm。口縁部破片。大きく内湾する口縁と考える。口縁部外面に小さい突帯を持つ。焼成は良好。外面は焼締まっているが、器壁の内面は灰白色でサンドイッチ状となっている。

193SX152 出土遺物 (Fig.32)

土師質土器

片口鉢 (24)　器高 3.0 cm。口縁部片口部の破片。焼成はやや良好。色調は黄灰色。

193SX161 出土遺物 (Fig.32)

土師器

小皿 a1 (25)　復元口径 7.9 cm、器高 1.35 cm、復元底径 6.0 cm。底部切り離しは回転糸切り。色調は明赤褐色。XIX 期。

施釉陶器

鉢 (26)　器高2.9+cm。体部破片。内外面に施釉あり。2次焼成をうけており、表面の釉の残存が悪い。

193SX167 出土遺物 (Fig.32)

土製品

瓦玉 (27)　縦 2.5 cm、横 2.2 cm、厚さ 1.9 cm。色調は灰白色～淡黄灰色。

金属製品

鉱滓 (28)　縦 2.2 cm、横 2.1 cm、厚さ 1.0 cm。色調は暗灰色。

石製品

滑石製品 (29)　破片。縦 0.7+ cm、横 2.2+ cm、厚さ 1.05+ cm。

193SX169 出土遺物 (Fig.32)

中国陶器

甕 (30)　器高 2.5+ cm。C 群。

193SX173 出土遺物 (Fig.32)

中国陶器

壺 (31)　体部から頸部の破片。3.2+ cm。外面はヘラ削り。内面はロクロナデ。A 群。

193SX178 出土遺物 (Fig.32)

中国陶器

鉢 (32)　口縁部破片。器高 4.7+ cm。Ⅰ-1b 類。

193SX188 出土遺物 (Fig.32)

須恵質土器

鉢 (33)　口縁部破片。器高 2.1+ cm。

193SX192 出土遺物 (Fig.33)

瓦類

平瓦 (1)　縦 15.5+ cm、横 5.5+ cm、厚さ 2.4 cm。焼成は良好。瓦質。胎土は 5mm 以下の白色粒子を少量含む。凹面は布目痕、凸面は格子目叩き。

193SX193 出土遺物 (Fig.33)

土師器

坏 a (2)　復元口径 14.8+ cm、器高 2.8+ cm、復元底径 10.6 cm。焼成は良好。色調は灰黄色。底部は回転糸切り調整。

193SX196 出土遺物 (Fig.33)

土師器

坏 a (3 ～ 7)　3 は復元口径 11.3 cm、器高 2.2 cm、復元底径 7.4 cm。色調は灰黄色。調整は不明。4 は復元口径 13.6 cm、器高 2.3 cm、復元底径 10.0 cm。色調は灰黄色。調整は不明。5 は口縁部を欠く破片。復元口径 13.7 cm、復元器高 2.8 cm、復元底径 8.4 cm。底部切り離しは回転糸切りの後に板状圧痕。6 は口縁部の破片。器高 1.8+ cm。焼成は不良。色調は灰黄色。7 は器高 2.3+ cm。色調は灰黄色。表面が風化しており調整は不明。

坏 c (8)　器高 1.6+ cm、復元高台径 4.6 cm。貼付高台。焼成は良好。小椀の可能性もある。高台の断面は逆三角形。

須恵質土器

片口鉢 (9)　口縁部の破片。片口部。復元口径 25.2 cm、器高 5.4+ cm。焼成はやや不良。瓦質化している。口縁部外面は帯状に黒色化している。

瓦質土器

鉢 (10)　口縁部の破片。器高 3.9+ cm。焼成はやや不良。色調は灰白色～淡黒灰色。内外面は刷毛目調整。口縁部は肥厚させて横ナデ調整。

石製品

滑石製石鍋 (11)　底面から立ち上がりの破片。最大幅 4.8 cm。外面は縦方向の削り。直径 5mm の穴が底面を貫いている。二次加工品。

193SX197 出土遺物 (Fig.33)

須恵質土器

鉢 (12)　口縁部の破片。器高 4.5+ cm。口縁部をやや肥厚させる。

石製品

滑石製石鍋（13）　縦 1.8 cm、横 3.7 cm、厚さ 1.1 cm。外面に炭素が吸着している。煤と思われる。

193SX198 出土遺物（Fig.33）

金属製品

鉱滓（14）　縦 2.0 cm、横 2.8 cm、厚さ 1.1 cm。

193SX198 茶色土出土遺物（Fig.33）

土師器

小皿 a1（15）　復元口径 8.3 cm、器高 0.8 cm、復元底径 6.4 cm。色調は灰黄色。底部は回転糸切り。

小坏 a× 小皿 b（16）　復元口径 9.1 cm、器高 1.6 cm、復元底径 7.6 cm。底部回転糸切り。

瓦質土器

鉢 × 火鉢（17）　底部の破片。器高 7.2 cm。内面の調整は不明瞭ながら横方向のナデ調整か。外面は丁寧な削り調整と考えられるが、不明瞭なため推測にとどめておく。

瓦類

軒丸瓦（18）　瓦頭面の破片。残存高2.5cm。珠文と唐草文の一部も確認できる。焼成は良好。須恵質。

193SX199 茶色土出土遺物（Fig.33）

土師器

小皿 a1（19）　復元口径 9.0 cm、器高 1.1 cm、復元底径 7.4 cm。色調は淡赤黄色。底部回転糸切り。

石製品

滑石製石鍋（20）　縦 1.4 cm、横 4.4 cm、厚さ 2.5 cm。二次利用をした際にでた破片か。

193SX202 出土遺物（Fig.33、34）

土師器

小皿 a1（21、22）　21 はほぼ完形。復元口径 8.0 cm、器高 1.3 cm、復元底径 6.0 cm。色調は灰黄色。底部は回転糸切り。22 は復元口径 8.6 cm、器高 1.1 cm、復元底径 7.0 cm。色調は赤褐色。底部切り離しは、回転糸切り。

坏 a（23）　復元口径 15.8 cm、器高 3.1 cm、復元底径 10.0 cm。表面が風化しており、調整は不明。

須恵質土器

鉢（24）　器高 2.1+ cm。東播系。

瓦質土器

火鉢（25）　口縁部破片。器高 3.3+ cm。焼成はやや不良。そのためやや土師質化している。色調は黄灰色～灰白色。強く内湾した口縁部。口縁端部は内面に向かって緩い三角状を呈す。

瓦器

椀（26、27）　26 は口縁部破片。器高 2.3+ cm。外面の回転ナデ調整が強い。27 は口縁部破片。器高 1.7+ cm。口縁端部が黒色化している。

椀 c（28）　高台破片。器高 1.3+ cm、復元高台径 8.6 cm。貼付高台。高台の断面形は丸みを帯びた方形。

中国陶器

鉢（29）　口縁部破片。復元口径 22.4 cm、器高 4.3+ cm。内面に摺目。口縁端部に黒色釉が掛かっている。鉢 II -1a 類。

甕（30）　口縁部破片。器高 4.2+ cm。甕 III 類。

盤（31）　口縁部破片。器高 1.5+ cm。盤 II 類か。

中国陶器の年代観としては、13 世紀～ 14 世紀前半と考えられる。

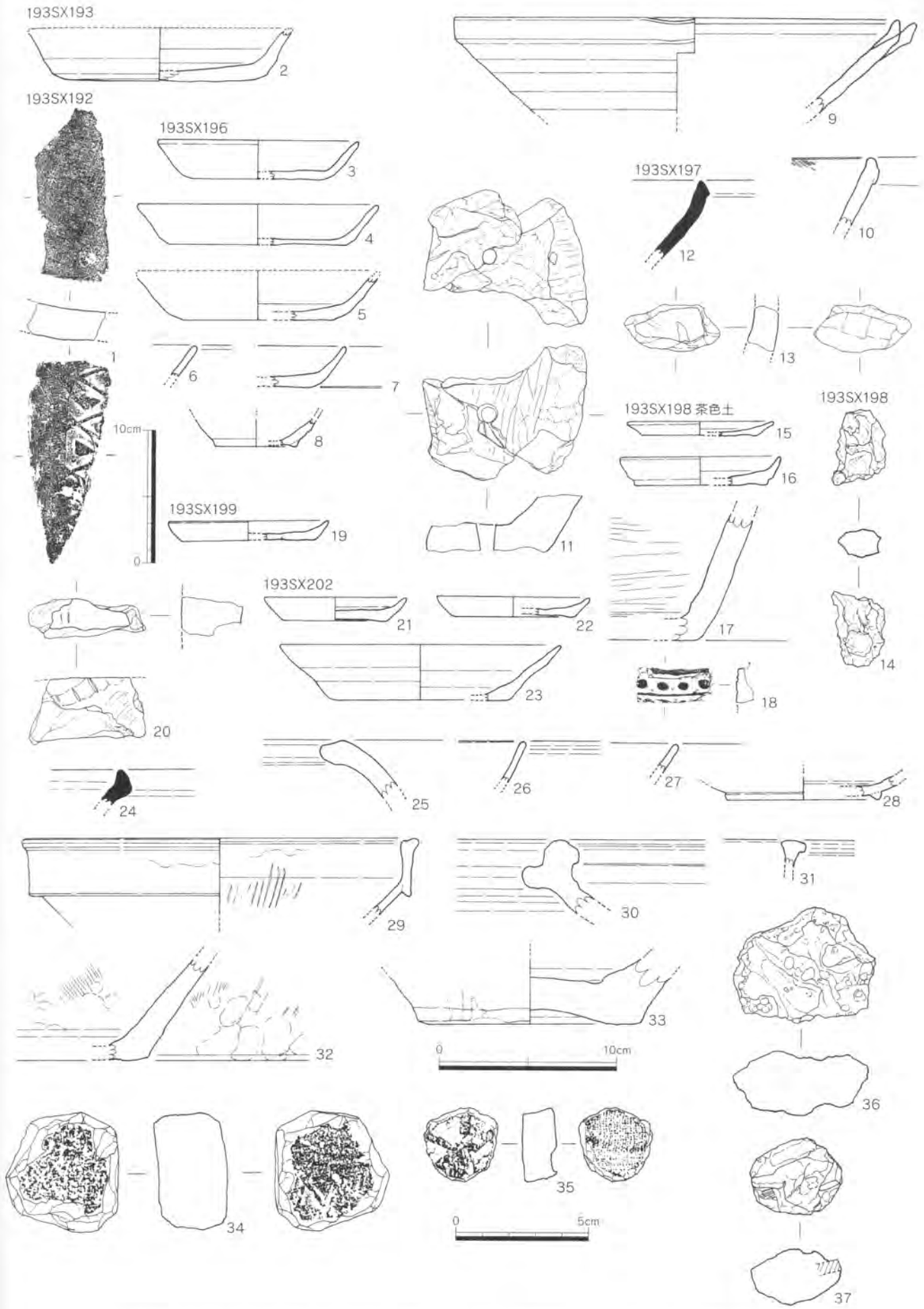


Fig.33 第 193 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 6（1/2、1/3、1/4）

国産陶器

鉢（32、33） 32は底部破片。器高5.7+ cm。焼成はやや不良。色調は黄赤灰色。内面は横ナデ。外面は刷毛目調整。33は底部の破片。器高3.8 cm、復元底径12.5 cm。外底面から押し上げられたように外底面中央部が底面から浮いている。色調は明赤褐色。胎土は2mm以下の白色粒子を多量に含む。外底部の端から2cm程度が盛り上がり高台状になっている。内面見込み部に強い回転ナデ。

土製品

瓦玉（34、35） 34は縦4.3 cm、横4.5 cm、厚さ2.6 cm。焼成は良好。やや還元炎焼成。須恵質。35は縦2.8 cm、横2.7 cm、厚さ1.3 cm。焼成は良好。須恵質。

鉱滓（36） 縦4.4 cm、横5.3 cm、厚さ2.3 cm。炉壁の可能性もある。

焼土塊（37） 縦2.9 cm、横3.5 cm、厚さ2.1 cm。淡赤灰色の土師器片を含む。

炉壁（38） 体部の破片か。縦5.9 cm、横9.4 cm、厚さ2.9 cm。内面に灰白色～黒色の鉱滓がべったりと付着している。器壁は熱により内側が暗茶褐色、外側は明茶色に変化している。胎土は5mm以下の白色粒子を大量に含む。

石製品

滑石製石鍋（39～41） 39は小破片。縦2.9 cm、横5.6 cm、厚さ1.0 cm。割れ口を丁寧に加工していることから石鍋の再利用品と考えられる。40は体部の破片。縦5.2 cm、横6.6 cm、厚さ1.7 cm。金鋸のようなものでの切断の傷が残っている。再利用品を切り取ったあとの資料か。41は破片。縦6.4 cm、横12.6 cm、厚さ1.1 cm。外面は縦方向の細かい削り調整。内面は横方向の削りのあとに平滑に仕上げている。割ったあとにきちんと断面を加工していることから、石鍋の再利用品と考えられる。用途は不明。

193SX204 出土遺物（Fig. 34）

石製品

滑石製石鍋（42） 復元口径18.1 cm、器高6.3+ cm。鍔の先端が若干下がっている。外面は多方向の削り調整、内面は使用によって平滑になっている。

193SX212 出土遺物（Fig. 34）

土師質土器

擂鉢（43） 口縁部破片。器高3.1+ cm。焼成はやや不良。器壁の断面を観察すると、中心に黒い焼成不良を挟んでサンドイッチ状になっている。

鍋（44） 口縁部破片。器高1.6+ cm。口縁部上面に巴紋のようなスタンプを施す。色調は赤褐色。

193SX214 出土遺物（Fig. 34）

土師器

坏a（45） 復元口径11.8 cm、器高2.4 cm、復元底径8.3 cm。底部切り離しは不明。

土製品

焼土塊（46） 破片。縦3.9 cm、横4.7 cm、厚さ1.9 cm。平坦面が1箇所ある。平坦面の裏面は、スサ混じりのため、平坦面が表側と推測できる。色調は暗褐色～赤褐色。

瓦玉（47） 縦2.7 cm、横2.4 cm、厚さ1.95 cm。色調は淡灰白色～淡黒色。かなり丸くなっている。

193SX215 出土遺物（Fig. 34）

須恵器

坏a（48、49） 48は復元口径12.2 cm、器高2.6 cm、復元底径9.0 cm。色調は暗灰色。底部切り離しは回転糸切り。その後に板状圧痕。内面に黒灰色の有機質が付着している。49は底部破片。器高1.3+ cm、復元底径8.2 cm。色調は明赤褐色。底部切り離し技法は、回転糸切り。後に板状圧痕。

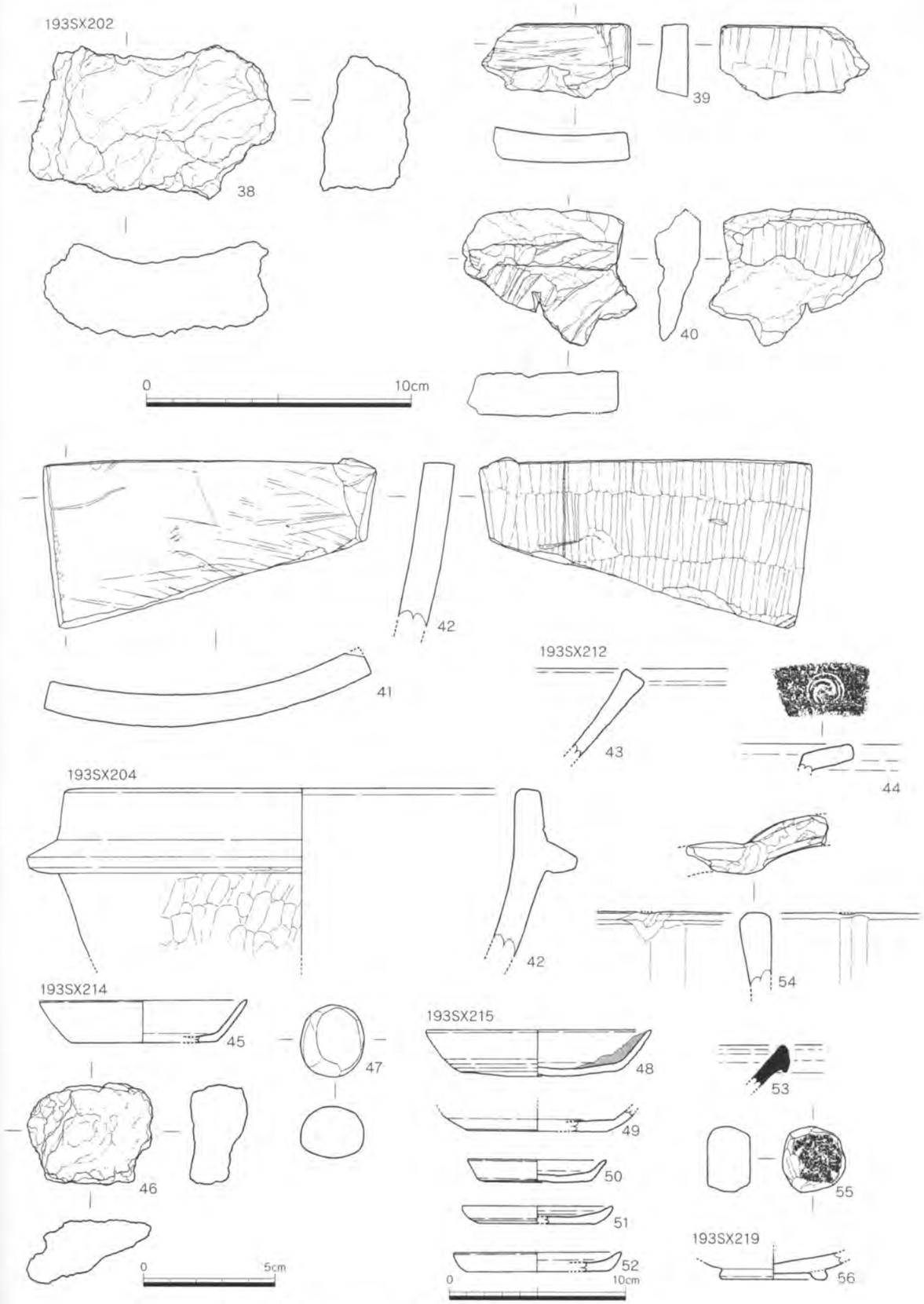


Fig.34 第193次調査その他の遺構出土遺物実測図その7（1/2、1/3、1/4）

小皿 a1（50 ～ 52） 50 は口径 7.8 ㎝、器高 1.3 ㎝、底径 6.4 ㎝。色調は黄灰色。底部は回転糸切り後に板状圧痕。51 は復元口径 8.5 ㎝、器高 1.0 ㎝、復元底径 6.6 ㎝。色調は黄灰色。底部は回転糸切りの後に板状圧痕。52 は復元口径 9.5 ㎝、器高 1.1 ㎝、復元底径 8.2 ㎝。色調は黄灰色。底部切り離し技法は不明。

須恵質土器

鉢（53） 口縁部破片。器高 2.4+ ㎝。焼成は良好。還元炎焼成。色調は淡青灰色。東播系。

瓦質土器

火鉢（54） ・口縁部の破片。器高 4.2+cm。口縁部は輪花形となっている。焼成はやや良好。色調は外面が灰黒色、内面が灰白色。胎土は 1mm 以下の白色粒子を少量含む。

土製品

瓦玉（55） 縦 2.4 ㎝、横 2.5 ㎝、厚さ 1.6 ㎝。瓦の平坦面が確認できる。

193SX219 出土遺物（Fig. 34）

瓦器

椀 c（56） 高台片。器高 1.6+ ㎝、復元底径 6.1 ㎝。貼り付け高台。焼成はやや不良。色調は暗灰色～灰白色。器壁表面の風化が激しくて調整は不明。

193SX220 暗茶色土出土遺物（Fig. 35、36）

土師器

小皿 a1（1 ～ 25） 小皿 a1 の色調は茶褐色系か黄灰色系の大きく２つに分かれる。茶褐色系は、2、6 ～ 8、11、17 ～ 19、23 ～ 25。黄灰色系は、1、3 ～ 5、9、10、12 ～ 16、20 ～ 22。それぞれの比率はおおよそ 5：5 である。底部切り離し技法はすべて回転糸切り技法。板状圧痕がある個体とない個体がある。（Tab.3-2,3-3 参照）

1 は口径 7.7 ㎝、器高 1.2 ㎝、底径 5.6 ㎝。2 は復元口径 8.1 ㎝、器高 1.5 ㎝、復元底径 6.3 ㎝。3 は口径 8.2 ㎝、器高 0.95 ㎝、底径 6.3 ㎝。4 は口径 8.2 ㎝、器高 1.25 ㎝、底径 6.6 ㎝。5 は口径 8.3 ㎝、器高 1.0 ㎝、底径 6.1 ㎝。6 は口径 9.0 ㎝、器高 1.0 ㎝、復元底径 7.4 ㎝。7 は口径 8.5 ㎝、器高 1.0 ㎝、底径 5.8 ㎝。8 は口径 8.5 ㎝、器高 1.0 ㎝、底径 7.3 ㎝。9 は復元口径 8.6 ㎝、器高 1.0 ㎝、復元底径 6.3 ㎝。10 は復元口径 8.6 ㎝、器高 0.9 ㎝、復元底径 7.4 ㎝。11 は復元口径 8.1 ㎝、器高 1.15 ㎝、復元底径 6.3 ㎝。12 は復元口径 9.4 ㎝、器高 1.2 ㎝、復元底径 7.2 ㎝。13 は復元口径 8.8 ㎝、器高 1.2 ㎝、復元底径 7.7 ㎝。14 は口径 9.0 ㎝、器高 1.0 ㎝、底径 6.4 ㎝。15 は口径 9.0 ㎝、器高 0.9 ㎝、底径 7.0 ㎝。16 は復元口径 9.0 ㎝、器高 0.9 ㎝、復元底径 7.0 ㎝。17 は口径 9.0 ㎝、器高 0.9 ㎝、底径 7.0 ㎝。18 は復元口径 9.0 ㎝、器高 1.2 ㎝、復元底径 7.2 ㎝。19 は復元口径 9.0 ㎝、器高 0.9 ㎝、復元底径 7.6 ㎝。20 は口径 9.1 ㎝、器高 1.1 ㎝、底径 7.2 ㎝。21 は復元口径 9.2 ㎝、器高 1.3 ㎝、復元底径 7.0 ㎝。22 は復元口径 9.2 ㎝、器高 1.0 ㎝、復元底径 7.6 ㎝。23 は復元口径 9.4 ㎝、器高 1.2 ㎝、復元底径 7.2 ㎝。24 は復元口径 9.4 ㎝、器高 1.0 ㎝、復元底径 7.0 ㎝。25 は器高 0.85+ ㎝、復元底径 8.0 ㎝。

坏 a（26 ～ 40） 26 は、復元口径 12.2 ㎝、器高 2.25 ㎝、復元底径 8.6 ㎝。色調は黄灰色。底部切り離しは底部回転糸切り。27 は口縁部の破片。復元口径 12.4 ㎝、器高 2.3 ㎝、復元底径 8.6 ㎝。色調は黄灰色。底部切り離しは回転糸切り。28 は復元口径 12.6 ㎝、器高 2.2 ㎝、復元底径 8.6 ㎝。色調は黄灰色。底部回転糸切り、後に板状圧痕。29 は復元口径 12.8 ㎝、器高 3.2 ㎝、復元底径 9.4 ㎝。焼成は良好。色調は赤褐色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を多く含む。底部は回転糸切り。内面見込み部分が黒色変している。30 は復元口径 12.9 ㎝、器高 2.4 ㎝、復元底径 8.7 ㎝。色調は淡赤褐色。

底部は回転糸切り後に板状圧痕。胎土は 1mm 以下の白色粒子を極少量含む。黒色雲母片を極少量含む。31 は口径 13.0 ㎝、器高 2.2 ㎝、底径 7.9 ㎝。色調は赤褐色。底部回転糸切り。32 は復元口径 13.2 ㎝、器高 2.2 ㎝、復元底径 8.2 ㎝。色調は黄灰色。底部は底部回転糸切り。33 は復元口径 13.2 ㎝、器高 2.25 ㎝、復元底径 9.2 ㎝。焼成は良好。色調は黄灰色。底部は底部回転糸切りの後に板状圧痕。34 は口径 13.3 ㎝、器高 2.15 ㎝、底径 9.1 ㎝。色調は淡赤褐色。底部は底部回転糸切りの後に板状圧痕。35 は復元口径 13.2 ㎝、器高 2.2 ㎝、復元底径 8.2 ㎝。色調は赤褐色。底部切り離しは回転糸切り技法。36 は復元口径 13.6 ㎝、器高 2.2 ㎝、復元底径 7.8 ㎝。焼成はやや不良。色調は淡赤灰色。底部外面は回転糸切り。37 は復元口径 13.6 ㎝、器高 2.3 ㎝、復元底径 9.1 ㎝。色調は明赤灰色。底部切り離しは底部回転糸切り。38 は復元口径 13.8 ㎝、器高 2.25 ㎝、復元底径 8.4 ㎝。焼成は良好。色調は明黄灰色。底部切り離しは底部回転糸切り。39 は底部から体部の破片。器高 1.9+ ㎝。復元底径 8.4 ㎝。色調は黄灰色。底部切り離しは底部回転糸切り。40 は破片資料。器高 2.1+ ㎝。色調は黄灰色。底部切り離しは底部回転糸切り。

小皿 c（41） 復元口径 9.1 ㎝、器高 1.9 ㎝、高台径 6.9 ㎝。焼成は良好。色調は暗赤褐色。胎土は 1mm 以下の白色粒子を少量含む。金色雲母を極少量含む。

土師質土器

鍋（42） 復元口径 34.0 ㎝、器高 7.9+ ㎝。焼成は良好。色調は黄灰色～淡黒灰色。外面は横ナデ調整。内面は使用により調整は不明瞭。外面には黒色の炭化物が吸着している。

須恵質土器

こね鉢（43 ～ 47） 43 ～ 45 は口縁部破片。すべて東播系の捏鉢と考えられる。焼成良好で還元炎。43 は器高 4.3+ ㎝。44 は器高 5.2+ ㎝。45 は 5.4+ ㎝。46 は底部破片。器高 2.3+ ㎝。内面は使用のため表面が摩滅している。47 は底部破片。焼成は不良。瓦質化している。器高 3.7+ ㎝、復元底径 11.6 ㎝。外面は縦方向の刷毛目調整。外面底部に板状圧痕。

中国陶器

壺（48） 器高 2.9+ ㎝。不明破片。焼成良好。色調は赤褐色。胎土 3mm 以下の白色粒子を多量に含む。外面にわずかに褐色系の釉が付着している。口縁部内面下に強いナデ調整が入る。外面にも二重の刻線が巡る。

瓦類

平瓦（49） 縦 7.2+ ㎝、横 8.6+ ㎝、厚さ 2.2 ㎝。色調はやや不良。瓦質。色調は明灰色。内面は布目痕をナデ調整。外面は格子目叩き。凹面の端部にヘラ削りを施している。こちらが狭端面の可能性がある。

土製品

焼土塊（50） 縦 4.7 ㎝、横 6.7 ㎝、厚さ 2.5 ㎝。色調は明赤灰色～淡茶色。胎土は 4mm 以下の白色粒子を少量含む。

石製品

滑石製石鍋（51） 口縁部から鍔部までの破片。復元口径 33.0 ㎝、器高 7.9+ ㎝。鍔断面形は台形で、先端がやや下がっている。

滑石製加工品（52） 石鍋の破片。縦 2.5+ ㎝、横 9.6+ ㎝、厚さ 1.6 ㎝。

193SX221 出土遺物（Fig. 36）

土師器

小皿 a1（53） 復元口径 8.9 ㎝、器高 0.95 ㎝、復元底径 6.6 ㎝。焼成はやや不良。底部切り離し技法は、

回転糸切り。その後に板状圧痕。

193SX224 出土遺物 (Fig. 16)

土師器

小杯 b (54)　復元口径 9.4 cm、器高 2.5 cm、復元底径 5.2 cm。色調は茶褐色。底部回転糸切り。

小皿 a1 (55)　復元口径 8.7 cm、器高 1.15 cm、復元底径 6.2 cm。色調は赤褐色。底部回転糸切り後に板状圧痕。

須恵質土器

杯 (56)　高台部の破片。器高 1.4+ cm。底部平底で糸切り。内面は平滑。

土製品

土壁 (57)　縦 3.4 cm、横 4.2 cm、厚さ 2.1 cm。断面にスサの痕跡がある。

193SX224 茶色土出土遺物 (Fig. 36)

土師器

小皿 a1 (58)　復元口径 8.7 cm、器高 1.15 cm、復元底径 6.2 cm。

土製品

土壁 (59)　縦 3.6+ cm、横 4.6+ cm、厚さ 2.9+ cm。一面に平坦な面がある。こちらが表側と考えられる。

193SX224 暗茶色土出土遺物 (Fig. 36)

須恵器

杯身 (60)　口縁部の破片。器高 2.0+ cm。焼成は良好。色調は暗灰色。外面底部側にカキ目痕あり。

土師器

小皿 a (61)　復元口径 9.0 cm、器高 0.9 cm、復元底径 7.6 cm。底部回転糸切り。

杯 a (62)　復元口径 13.3 cm、器高 2.4 cm、復元底径 8.8 cm。色調は灰黄色。体部の器壁が薄い。底部回転糸切り後に板状圧痕。

須恵質土器

鉢 (63、64)　共に口縁部の破片。東播系捏鉢。63 は器高 2.3+ cm。64 は器高 2.5+ cm。

土製品

瓦玉 (65)　縦 2.9 cm、横 2.4 cm、厚さ 2.25 cm。焼成は不良。瓦質。

石製品

滑石製品 (66)　縦 4.0 cm、横 2.4+ cm、厚さ 1.2 cm。硯のように中央を凹ませている。周辺部は綺麗に加工している。二次加工品。

193SX224 東土層　明黄灰色土出土遺物 (Fig. 36)

土師器

杯 a (67)　口径 11.9 cm、器高 2.6 cm、底径 7.7 cm。色調は黄灰色。底部回転糸切り後に板状圧痕。

193SX224 西土層　暗黒茶色土出土遺物 (Fig. 16)

土師器

杯 a (68)　復元口径 13.5 cm、器高 2.7 cm、復元底径 9.0 cm。表面の風化により調整不明。

193SX225 出土遺物 (Fig. 36)

土師器

小皿 a1 (69)　口径 8.4 cm、器高 0.9 cm、底径 6.0 cm。底部回転糸切り。その後に板状圧痕。器壁が薄い。

193SX228 出土遺物 (Fig. 36)

石製品

滑石製石鍋 (70)　破片。縦 5.7 cm、横 5.5 cm、厚さ 1.45 cm。2 次加工品か。

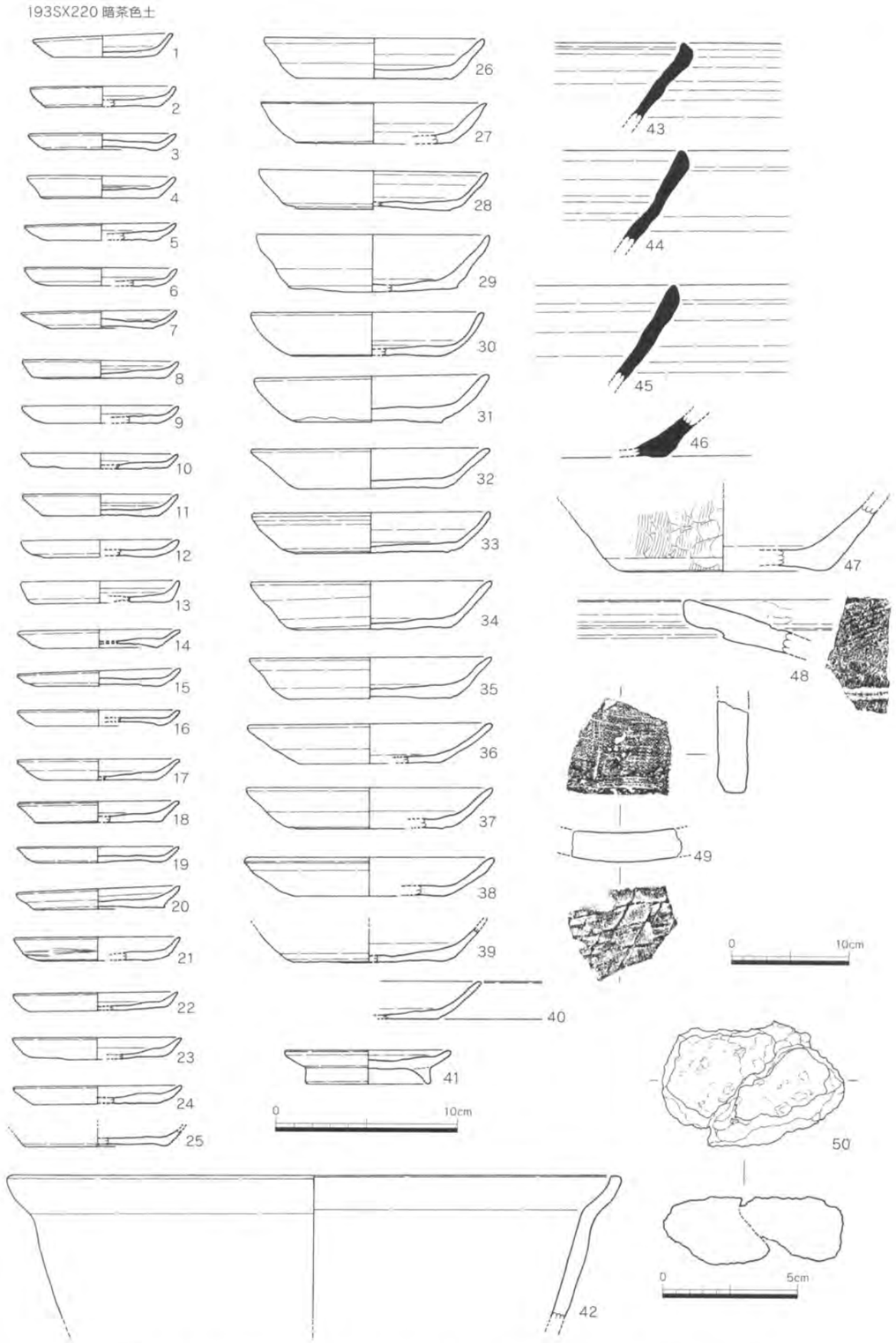


Fig.35 第 193 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 8 (1/2、1/3、1/4)

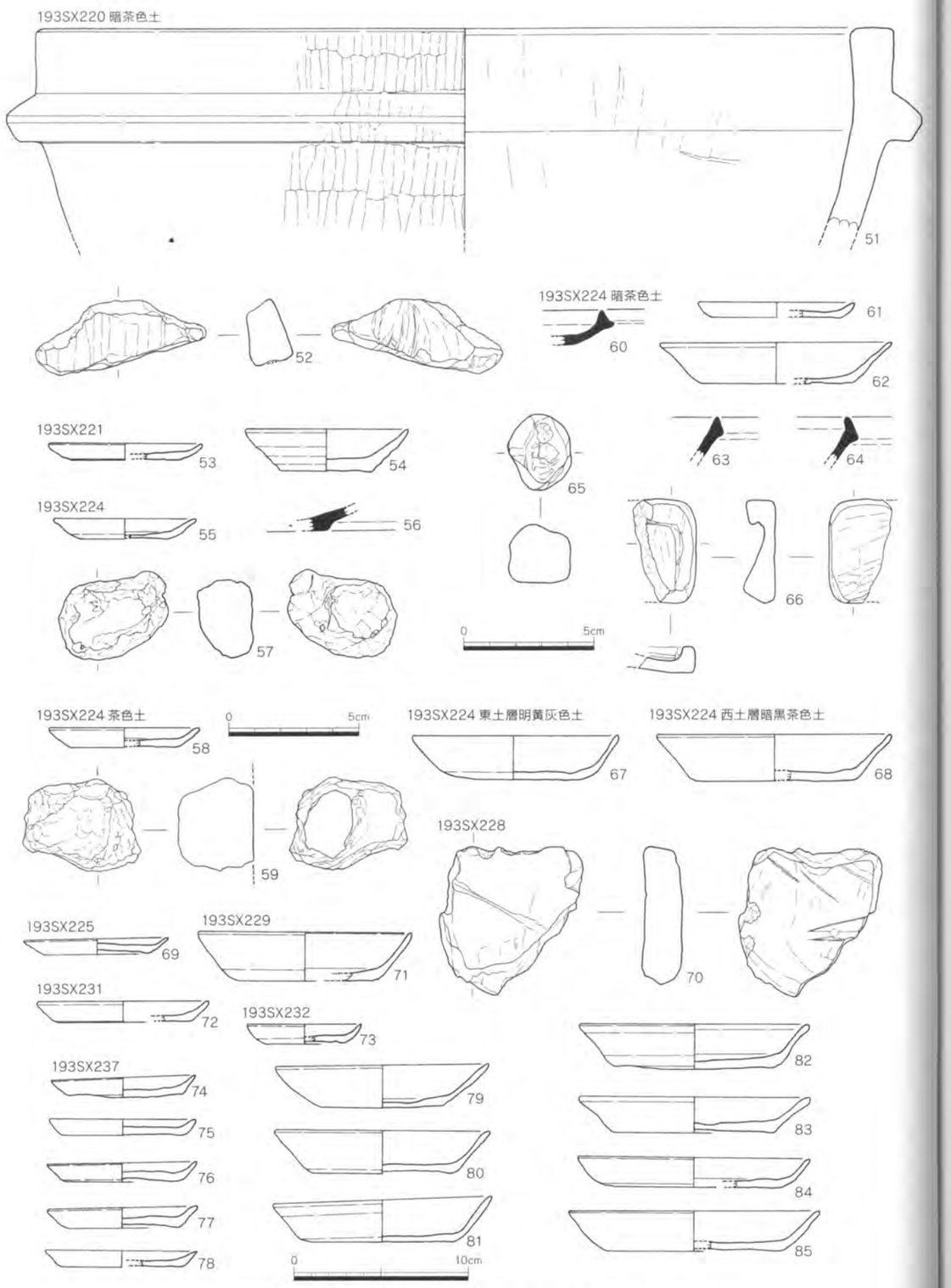


Fig.36 第 193 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 9（1/2、1/3）

193SX229 出土遺物（Fig. 36）

土師器

杯 a（71） 復元口径 12.3 ㎝、器高 2.8 ㎝、復元底径 8.0 ㎝。色調は黄灰色。底部回転糸切。

193SX231 出土遺物（Fig. 36）

土師器

小皿 a1（72） 復元口径 9.9 ㎝、器高 1.2 ㎝、復元底径 8.0 ㎝。底部回転糸切り。

193SX232 出土遺物（Fig. 36）

小皿 a1（73） 復元口径 6.6 ㎝、器高 1.1 ㎝、復元底径 4.6 ㎝。底部回転糸切り。

193SX237 出土遺物（Fig. 36）

土師器

小皿 a（74 ～ 78） すべて底部切り離しは回転糸切り技法を使い、その後に板状圧痕が施されている。色調は黄灰色を呈す。74 は口径 8.35 ㎝、器高 1.35 ㎝、底径 6.5 ㎝。75 は復元口径 8.4 ㎝、器高 0.95 ㎝、復元底径 7.0 ㎝。76 は口径 8.7 ㎝、器高 1.2 ㎝、底径 6.4 ㎝。77 は口径 8.7 ㎝、器高 1.25 ㎝、底径 6.4 ㎝。78 は復元口径 8.8 ㎝、器高 0.9 ㎝、復元底径 7.1 ㎝。

杯 a（79 ～ 85） 底部切り離しは回転糸切り技法で、その後にほとんどの個体は板状圧痕を施している。例外としては、83 が施されていないのと、81 は表面が溶けており調整は確認できない。色調は 82 と 83 が赤褐色で、他は黄灰色である。79 は口径 12.25 ㎝、器高 2.6 ㎝、底径 7.1 ㎝。80 は復元口径 12.4 ㎝、器高 2.45 ㎝、復元底径 8.0 ㎝。81 は口径 12.6 ㎝、器高 2.7 ㎝、底径 8.3 ㎝。82 は復元口径 13.2 ㎝、器高 2.6 ㎝、底径 9.2 ㎝。83 は復元口径 13.3 ㎝、器高 2.05 ㎝、復元底径 9.2 ㎝。84 は復元口径 13.3 ㎝、器高 1.7 ㎝、復元底径 10.0 ㎝。85 は復元口径 14.4 ㎝、器高 2.3 ㎝、復元底径 10.4 ㎝。

193SX238 出土遺物（Fig.37）

土師器

小皿 a1（1 ～ 21） すべて底部切り離しは回転糸切り技法が使われている。板状圧痕を施される固体が多い。色調は黄灰色系と（1 ～ 3、5 ～ 7、12、14）と赤褐色系（4、8 ～ 11、13、15 ～ 21）の 2 つに分けられる。割合もおおよそ 1：1 である。傾向としては、黄灰色系のグループが、口径が小さいことを指摘できる。

出土金属製品

193SX005 出土遺物（Fig.38）

金属製品

釘（1） 縦 4.3+ ㎝、横 0.95 ㎝、厚さ 0.75 ㎝。

193SX006 出土遺物（Fig.38）

金属製品

釘（2） 縦 2.65+ ㎝と 2.3+ ㎝が残存する。横 1.1 ㎝、厚さ 0.65 ㎝。

用途不明（3） 縦 2.3+ ㎝、横 3.7 ㎝、厚さ 0.7 ㎝。

193SX011 出土遺物（Fig.38）

金属製品

釘（4） 縦 2.65+ ㎝、横 0.5 ㎝、厚さ 1.7 ㎝。

193SX014 出土遺物（Fig.38）

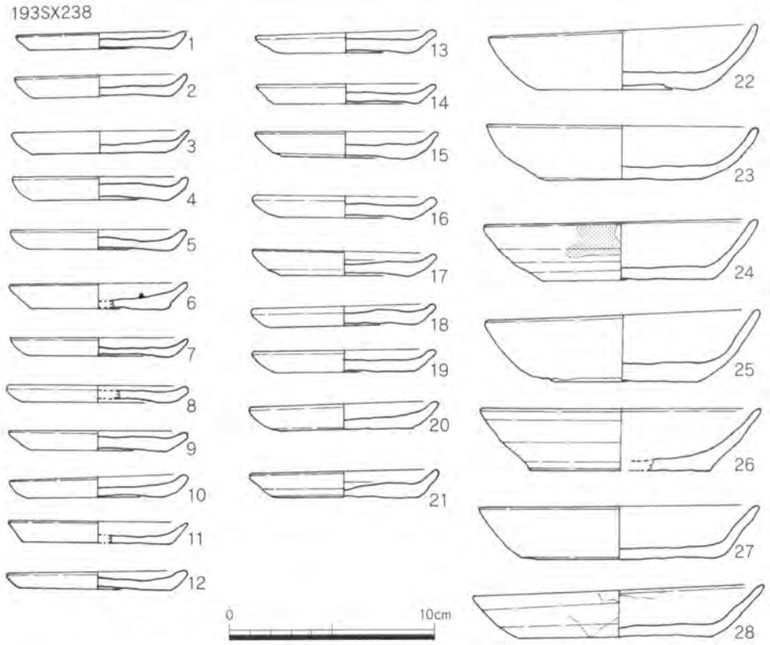


Fig.37 第 193 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 10（1/3）

金属製品

釘（5） 縦 2.2+ cm、横 1.8 cm、厚さ 0.7 cm。

193SX015 出土遺物（Fig.38）

金属製品

不明製品（6） 縦 1.8+ cm、横 1.3 cm、厚さ 1.0 cm。釘か。

193SX020 褐色土出土遺物（Fig.38）

金属製品

釘（7 ～ 9） 7 は縦 1.95+ cm、2.1+ cm、1.25 cm が残存する。横 0.8 cm。厚さは基部付近で 0.8 cm程度、先端部付近では 0.3 cm程度である。8 は縦 3.0+ cm、横 0.8 cm、厚さ 0.6 cmである。9 は縦 4.05 cm、横 1.65 cm、厚さ 1.5 cm。

193SX020 黒色土出土遺物（Fig.38）

金属製品

不明製品（10） 縦 4.0+ cm、横 1.55 cm、厚さ 0.9 cm。轡か。

釘（11） 縦 5.4 cm、横 1.1 cm、厚さ 0.9 cm。

193SK021 出土遺物（Fig.38）

金属製品

不明製品（12） 縦 1.9+ cm、横 0.8 cm、厚さ 0.6 cm。釘か。

193SX023 出土遺物（Fig.38）

金属製品

釘（13、15） 13 は縦 6.4+ cm、横 1.05 cm、厚さ 1.0 cm。15 は縦 3.15+ cm、横 1.0 cm、厚さ 0.8 cm。

不明製品（14） 縦 2.7+ cm、横 4.2+ cm、厚さ 0.4 cm。

193SX027 出土遺物（Fig.38）

金属製品

釘（16） 縦 2.7+ cm、横 0.7 cm、厚さ 0.7 cm。

193SE030 黄色土出土遺物（Fig.38）

金属製品

釘（17 ～ 21） 17 は縦 2.4+ cm、横 1.1 cm、厚さ 1.0 cm。18 は縦 2.3+ cm、横 0.75 cm、厚さ 0.55 cm。19 は縦 2.6+ cmと 2.2+ cmが残存する。横 0.8 cm、厚さ 1.0 cm。20 は縦 1.9+ cm、横 0.7 cm、厚さ 0.6 cm。21 は縦 2.6+ cm、横 1.0 cm、厚さ 0.8 cm。

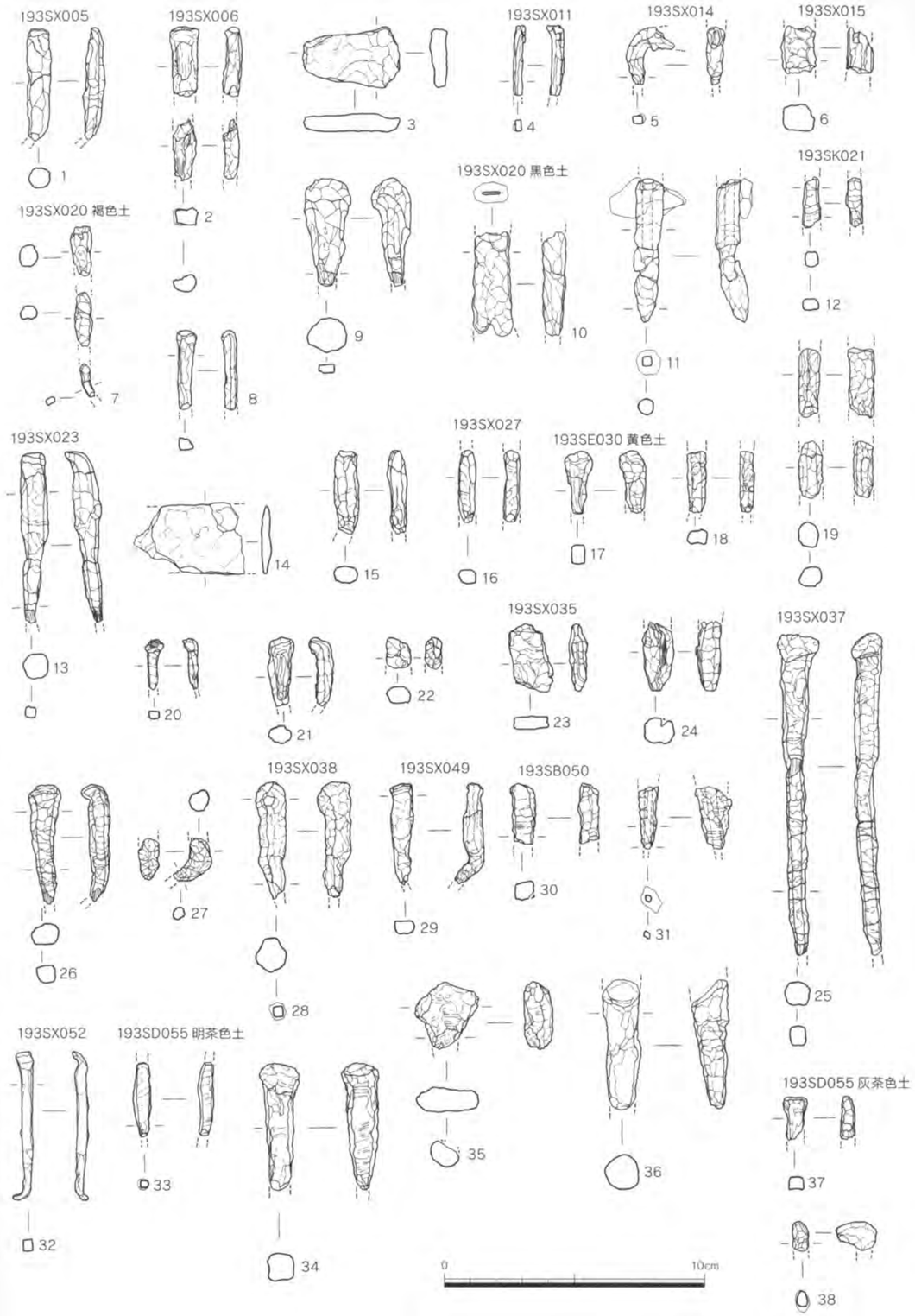


Fig.38 第 193 次調査その他の遺構出土金属器実測図その 1（1/2）

不明製品（22） 縦 1.2+ cm、横 0.95 cm、厚さ 0.65 cm。

193SX035 出土遺物（Fig.38）

金属製品

不明製品（23） 縦 1.6+ cm、横 1.7 cm、厚さ 0.7 cm。刀子か。

釘（24） 縦 2.6+ cm、横 1.2 cm、厚さ 0.95 cm。

193SX037 出土遺物（Fig.38）

金属製品

釘（25 ～ 27） *25 は縦 12.1+ cm、横 1.6 cm。厚さ 1.2 cm。26 は縦 4.5+ cm、横 1.25 cm、厚さ 0.9 cm。27 は縦 1.6+ cm、横 0.8 cm。

193SX038 出土遺物（Fig.38）

金属製品

釘（28） 縦 4.3 cm、横 1.2 cm、厚さ 1.3 cm。

193SX049 出土遺物（Fig.38）

金属製品

釘（29） 縦 3.8 cm、横 0.85 cm、厚さ 0.8 cm。

193SB050 出土遺物（Fig.38）

金属製品

釘（30、31） 30 は縦 2.3+ cm、横 1.0 cm、厚さ 0.8 cm。31 は縦 2.4+ cm、横 0.75 cm、厚さ 1.2 cm。

193SX052 出土遺物（Fig.38）

金属製品

釘（32） 縦 5.6 cm、横 0.7 cm、厚さ 0.45 cm。

193SD055 明茶色土出土遺物（Fig.38）

金属製品

釘（33 ～ 36） 33 は縦 2.8+ cm、横 0.6 cm、厚さ 0.6 cm。34 は縦 4.8+ cm、横 1.5cm、厚さ 1.4 cm。35 は縦 2.6+ cm、横 2.4 cm、厚さ 1.1 cm。36 は縦 4.9+ cm、横 1.5 cm、厚さ 1.4 cm。

193SD055 灰茶色土出土遺物（Fig.38）

金属製品

釘（37、38） 37 は縦 1.7 cm、横 0.9 cm、厚さ 0.6 cm。38 は縦 1.2 cm、横 0.6 cm、厚さ 1.5 cm。

193SX071 出土遺物（Fig.39）

金属製品

釘（1） 縦 2.4+ cm、横 1.1 cm、厚さ 1.0 cm。

193SX081 出土遺物（Fig.39）

金属製品

釘（2） 縦 4.1+ cm、横 1.2 cm、厚さ 1.0 cm。

193SD086 出土遺物（Fig.39）

金属製品

釘（3） 縦 1.15+ cm、横 0.85 cm、厚さ 0.5 cm。

193SX087 出土遺物（Fig.39）

金属製品

釘（4 ～ 7） 4 は縦 2.0 cm、横 0.6 cm、厚さ 0.55 cm。5 は縦 2.2 cm、幅 2.2 cm残存する。横 0.7 cm、

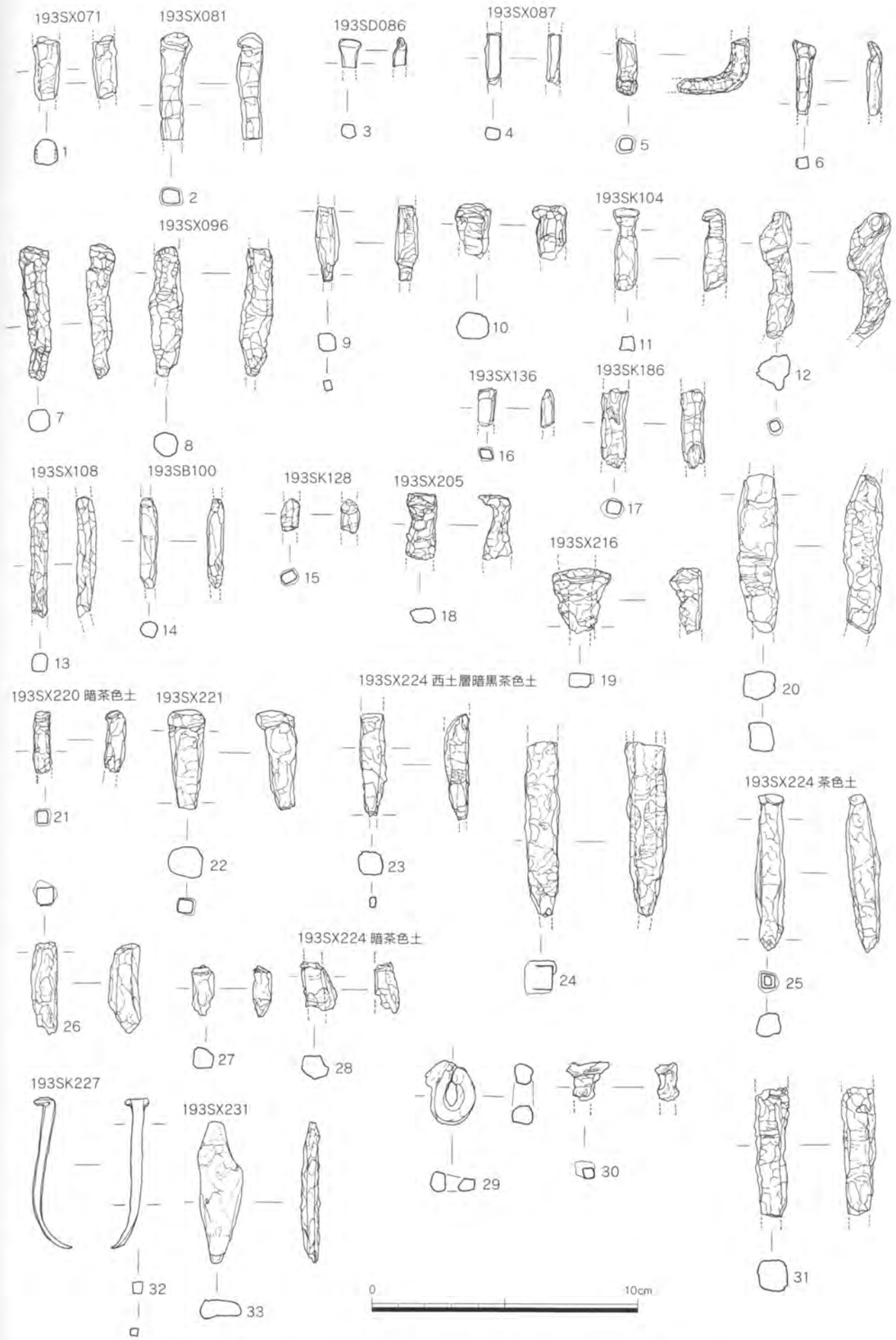


Fig.39 第 193 次調査その他の遺構出土金属器実測図その 2（1/2）

厚さ 0.8 cm。6 は縦 2.8+ cm、横 0.9 cm、厚さ 0.6 cm。7 は縦 5.1 cm、横 1.25 cm、厚さ 1.0 cm。

193SX096 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (8 ～ 10)　8 は縦 4.9+ cm、横 1.3 cm、厚さ 1.2 cm。9 は縦 2.9+ cm、横 0.9 cm、厚さ 0.8 cm。10 は縦 2.1+ cm、横 1.3 cm、厚さ 1.3 cm。

193SK104 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (11、12)　11 は縦 3.1+ cm、横 1.0 cm、厚さ 0.9 cm。12 は縦 4.8+ cm、横 1.2 cm、厚さ 1.6 cm。

193SX108 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (13)　縦 4.5+ cm、横 0.7 cm、厚さ 0.75 cm。

193SB100 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (14)　縦 3.4+ cm、横 0.6 cm、厚さ 0.6 cm。

193SK128 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (15)　縦 1.3+ cm、横 0.75 cm、厚さ 0.75 cm。

193SX136 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (16)　縦 1.5+ cm、横 0.7 cm、厚さ 0.5 cm。

193SK186 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (17)　縦 3.0 cm、横 1.0 cm、厚さ 1.0 cm。

193SX205 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (18)　縦 2.5+ cm、横 1.1 cm、厚さ 1.0 cm。

193SX216 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (19、20)　19 は縦 2.5+ cm、横 2.2 cm、厚さ 1.2 cm。20 は縦 5.9+ cm、横 1.6 cm、厚さ 1.5 cm。

193SX220 暗茶色土出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (21)　縦 2.3+ cm、横 0.7 cm、厚さ 0.8 cm。

193SX221 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (22)　縦 3.7+ cm、横 1.4 cm、厚さ 1.5 cm。

193SX224 西土層暗黒茶色土出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (23、24)　23 は縦 6.6+ cm、横 1.3 cm、厚さ 1.6 cm。24 は縦 4.0+ cm、横 1.0 cm、厚さ 0.9 cm。

193SX224 茶色土出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (25、26)　25 は縦 5.9+ cm、横 1.1 cm、厚さ 1.2 cm。26 は縦 3.4+ cm、横 1.0 cm、厚さ 1.2 cm。

193SX224 暗茶色土出土遺物 (Fig.39)

金属製品

釘 (27 ～ 31)　27 は縦 1.9+ cm、横 0.8 cm、厚さ 0.7 cm。28 は縦 1.8+ cm、横 0.9 ～ 1.2 cm、厚さ 0.9 cm。29 は縦 2.4 cm、横 1.7 cm、厚さ 0.7 cm。30 は縦 1.4+ cm、横 0.7 ～ 1.6 cm、厚さ 0.8 cm。31 は縦 4.9+ cm、横 1.3 cm、厚さ 1.3 cm。

193SK227 出土遺物 (Fig.39、40)

金属製品

釘 (32)　縦 5.65 cm、横 025 ～ 0.9 cm、厚さ 0.1 ～ 0.9 cm。

鉄滓 (1) 縦 10.5cm、横 11.6cm、厚さ 3.9cm を測る。重さ 1.447kg。

193SK231 出土遺物 (Fig.39)

金属製品

用途不明 (33)　縦 5.3+ cm、横 0.5 ～ 1.6 cm、厚さ 0.7 cm。

193 暗灰色土出土遺物 (Fig.40)

金属製品

用途不明 (2)　縦 4.4+ cm、横 1.9 ～ 2.4 cm、厚さ 1.55 cm。

193 茶色土出土遺物 (Fig.40)

金属製品

用途不明 (3 ～ 16) それぞれ小破片のため用途は不明。鉄で作られた製品の破片である。

193 出土銭貨

193SX020 褐色土出土遺物 (Fig.40)

金属製品

元祐通寶 (17)　書体は行書。背の下部左側にノ字形の突起が確認できる。北宋、初鋳 1086 年。銭径 (A) 24.78mm。銭径 (B) 24.57mm、内径 (C) 20.94mm、内径 (D) 20.23mm、銭厚 1.44 ～ 1.64mm。量目 2.8g を計る。

寛永通寶 (18)　字体から新寛永と判別される。寛永通寶の分類によれば、2 期以降の所産となる。また、背に「文」の字がないため、この銭は 3 期と推定される。3 期は各地で増産されており、時期的には元禄 10 年 (1697) ～天明元年 (1781) 頃と考えられている。銭径 (A) 23.45mm。銭径 (B) 23.55mm、内径 (C) 18.67mm、内径 (D) 18.65mm、銭厚 0.95 ～ 0.98mm。量目 2.6g を計る。

193SX050 茶褐色土出土遺物 (Fig.40)

金属製品

□聖元寶 (19)　書体は篆書。破片資料。銭径不明、銭径内径も不明、銭厚 1.23 ～ 1.51mm、量目 1.1g を計る。銭文の上を 1 字欠くが、おそらくは「天」の字があてはまり、天聖元寶でよいと考えられる。天聖元寶であれば、北宋、初鋳 1023 年である。中央の四角の穴がずれて見かけ上菱形になっている。

193SB100 出土遺物 (Fig.40)

金属製品

聖宋元寶 (20)　銅書体は行書。表はかなり摩滅している。銭経 (A) 24.78mm。銭径 (B) 24.86mm、内径 (C) 18.14mm、内径 (D) 17.70mm、銭厚 1.14 ～ 1.29mm。量目 3.1g を計る。北宋、初鋳 1101 年。

193SX202 出土遺物 (Fig.40)

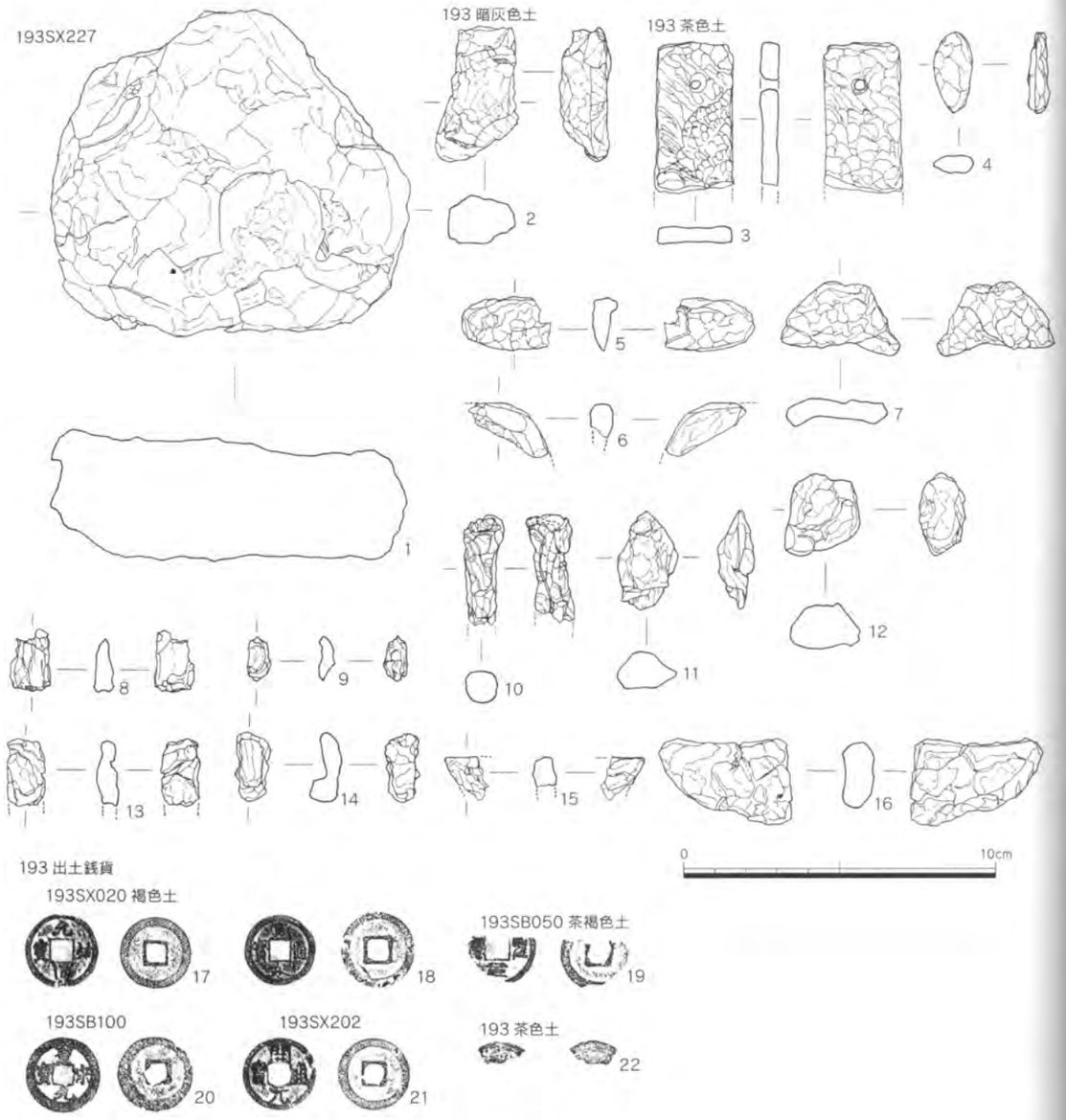


Fig.40　第 193 次調査その他の遺構出土金属器実測図その 3（1/2）

金属製品

開元通寶（21）　銅銭。出土状態から２枚重なっており、表側が開元通寶となるが、裏は不明。銭が脆弱だったため剥離はせずに保存処理をしている。銭径（A）23.96mm。銭径（B）24.33mm、内径（C）18.80mm、内径（D）19.84mm、銭厚 2.52 ～ 2.84mm（ただし、２枚重なった状態での数値）、量目 5.5g（２枚重なった状態での数値）を計る。

193 茶色土出土遺物（Fig.40）

金属製品

不明（22）　破片のため銭種は不明。量目 0.4g。

193 明黄灰色土出土遺物（Fig.41）

土師器

小皿 a1（1）　復元口径 8.8cm、器高 1.3cm、底径 7.2cm。底部切り離しは回転糸切り。色調は黄灰色。

黒色土器

椀 c（2）　底部の破片。貼り付け高台。器高 1.3cm、底径 7.2cm。B 類。

須恵質土器

甕（3）　口縁部破片。焼成は不良。やや瓦質。色調は灰白色～濃黒灰色。外面は細かい格子目叩き。内面は剥離がひどく不明。軟質系の甕か。

瓦類

平瓦（4）　縦 10.5+cm、横 10.2+cm、厚さ 2.7cm。焼成は良好で須恵質。凹面は縦方向に模骨の痕跡が確認できる。凸面は縄目。側端部、端部ともにヘラ切り調整。

石製品

滑石製石鍋（5）　復元口径 19.0cm、器高 3.9+cm。口径的にはやや小ぶりの印象がある。

193 暗灰色土出土遺物（Fig.41）

土師器

小皿 a1（6 ～ 9）　6 は復元口径 8.0cm、器高 1.2cm、復元底径 6.2cm。底部切り離しは回転糸切り。色調は黄灰色。7 は復元口径 8.2cm、器高 1.2cm、復元底径 5.0cm。底部切り離しは回転糸切り。色調は淡赤褐色。8 は復元口径 8.8cm、器高 1.0cm、復元底径 6.2cm。底部切り離しは回転糸切り。板状圧痕あり。色調は黄灰色。焼成は良好。9 は復元口径 8.9cm、器高 1.3cm、復元底径 6.7cm。底部切り離しは回転糸切り。板状圧痕あり。色調は黄灰色。

坏 a（10 ～ 13）　10 は口縁部破片。器高 2.15+cm。口縁端部内側に沈線が巡る。11 は復元口径 10.9c m、器高 2.65cm、復元底径 7.8cm。底部切り離しは回転糸切り。板状圧痕あり。色調は淡赤褐色。12 は復元口径 12.5cm、器高 2.5cm、復元底径 7.6cm。底部切り離しは回転糸切り。板状圧痕あり。色調は明灰黄色。13 は口径 12.7cm、器高 2.3cm、底径 9.6cm。底部切り離しは回転糸切り。その後に板状圧痕。色調は黄灰色。

大皿 c× 大坏 c（14）　高台部の破片。器高 1.9+cm、底径 10.8m。内面に煤が付いている。

須恵質土器

捏鉢（15）　底部破片。器高 2.6+cm。復元底径 9.8cm。底部切り離しは回転糸切り。焼成はやや良好。色調は淡灰色。内面は使用痕跡のために摩滅。

土師質土器

捏鉢（16）　口縁部の片口部の破片。内面は刷毛目調整。外面はナデ調整。

瓦質土器

捏鉢（17）　底部破片。器高 4.9+cm、復元底径 12.2cm。内面は使用痕で平滑になっている。

中国陶器

鉢（18）　口縁部破片。器高 2.9+cm。Ⅰ -2 類。

瓦類

軒丸瓦（19 ～ 20）　19 は複弁。中房の蓮子は 2 個確認できる。焼成は良好。やや須恵質。20 は複弁。中房の蓮子が 2 個確認でき、それぞれ近接している。焼成はやや不良。

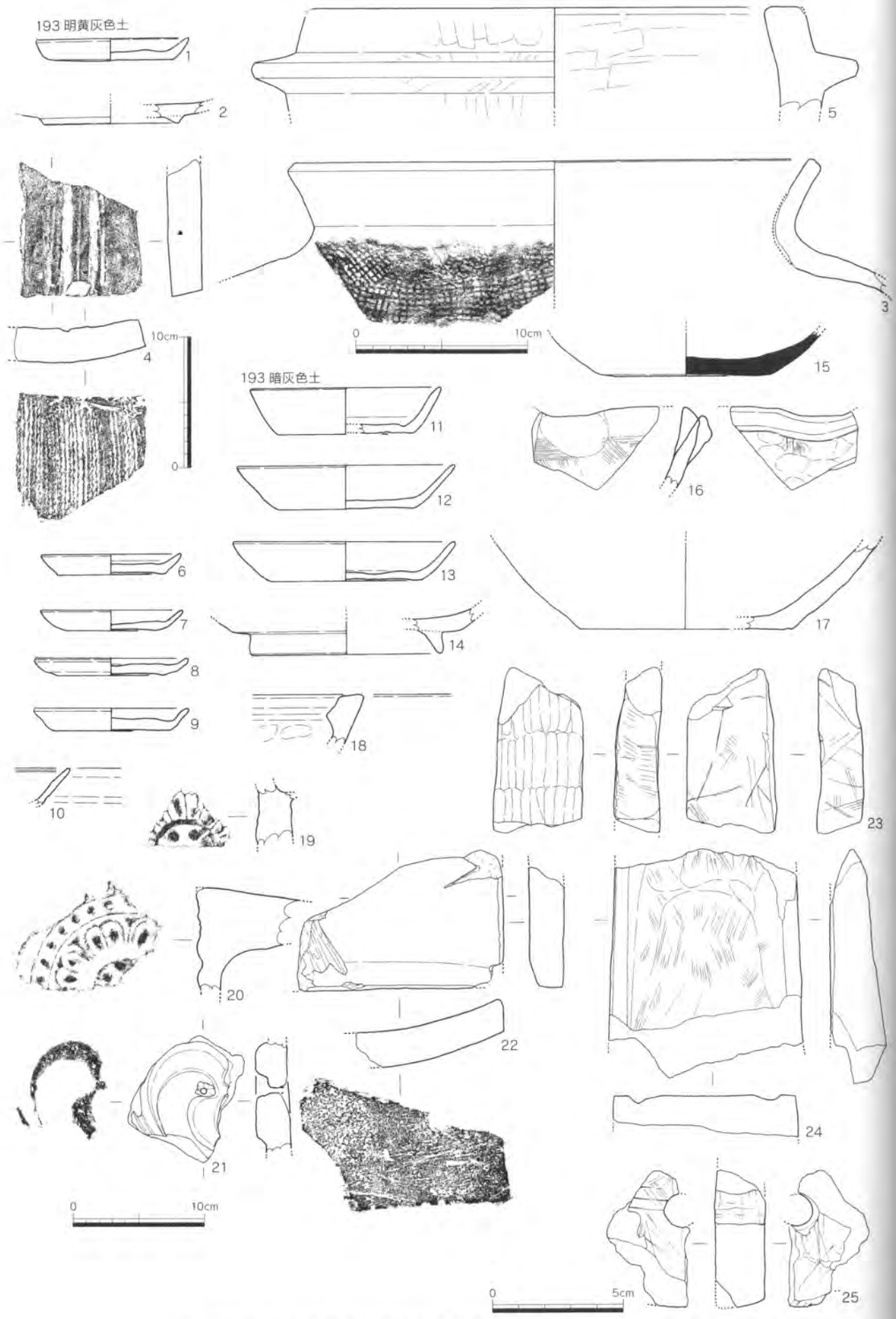


Fig.41 第 193 次調査土層出土遺物実測図その 1（1/2、1/3、1/4）

道具瓦（21） 左巴紋の一部。裏が平坦な点と、中央に 0.5cm の穴を貫通させていることから、道具瓦の一種と判断した。

平瓦（22） 狭端部の破片。焼成は良好。狭端部凹面端に幅 1.8cm のヘラ調整を行い、傾斜をつけている。側端部はヘラ切り。凹面は丁寧なナデ調整。凸面は部分的にヘラ削り。

石製品

滑石製製品（23、25） 23 は滑石製石鍋の体部の破片。体部を切断して、切断面は加工している。いわゆる 2 次利用品と考えられるが、目的は不明。25 は縦 5.2+cm、幅 3.1+cm、厚み 1.9cm。直径 1.2cm の穴が穿たれ貫通している。

硯（24） 縦 8.7+cm、幅 7.4cm、厚み 2.2+cm。底面は剥離している。陸の部分は使用痕による平滑になっている。色調は明茶赤色。石材は泥岩。

193 暗灰色土出土遺物（Fig.42）

中国陶器

緑釉陶器盤（1） 復元口径 32.4cm、器高 8.3cm、復元底経 28.5cm を測る。未分類。口縁部は玉縁状でやや外反する。胴部はやや外側に張っており、底部は平底を呈す。底面を除く全面に緑釉を施す。底部はヘラ削りにより釉を削りとっている。体部外面下部はヘラ削り調整、上部は回転ナデ。内面も回転ナデを施す。釉色は明緑色～暗深緑色を呈す。外面の中央部で釉調が変わっており、上部は釉薬を重ねていると思われる。釉の表面は滑らかではなく、部分的に貫入が入っている。胎土の色調は淡灰黄色。胎土はやや密。淡茶色、白色の微細な粒子を含む。内底面に線刻で草花文のような絵柄を刻んでいる。

193 茶色土出土遺物（Fig.43）

須恵器

蓋Ⅰ（1、2） 1 は口縁部の破片。器高 1.6+cm。焼成は良好。2 は口縁部の破片。器高 1.0+cm。器壁がやや薄い。

土師器

小皿Ⅰ（3～6） 3 は口縁部を一部欠損する破片。口径 8.0cm、器高 1.2cm、底径 6.1cm。色調は、赤褐色。底部切り離しは回転糸切り、後に板状圧痕が施される。4 は復元口径 8.3cm、器高 0.9cm、復元底径 6.1cm。色調は黄灰色。底部は回転糸切りの後に板状圧痕。5 は口径 8.6cm、器高 1.0cm、底径 6.0cm。色調は黄灰色。底部切り離しは回転糸切り。その後、板状圧痕。6 は口径 8.6cm、器高 1.0cm、底径 6.2cm。色調は黄灰色。器形は歪んでいる。底部切り離しは回転糸切り。その後に板状圧痕。

坏 a（7～10） 7 は復元

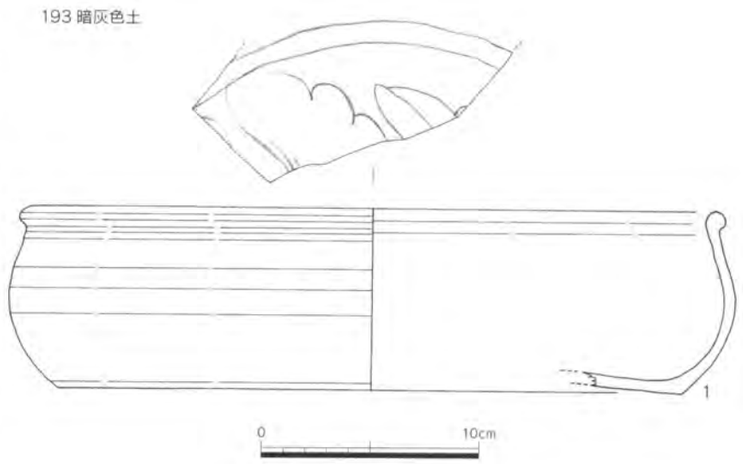


Fig.42 第 193 次調査土層出土遺物実測図その 2（1/3）

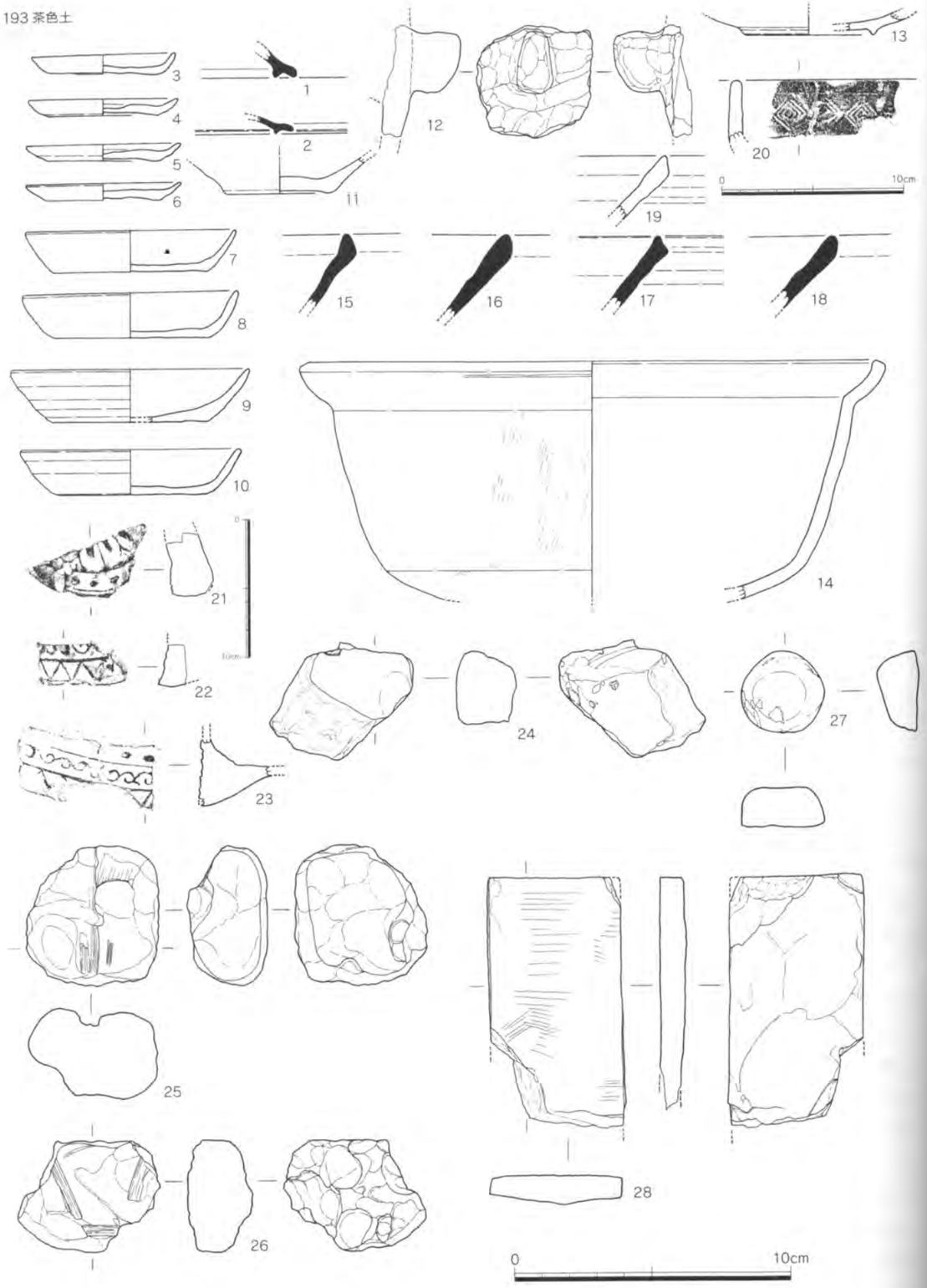


Fig.43 第 193 次調査土層出土遺物実測図その 3（1/2、1/3、1/4）

口径 11.6cm、器高 2.3cm、復元底径 8.4cm。色調は灰白色。底部回転糸切り。8 はほぼ完形。口径 12.0cm、器高 2.6cm、底径 8.6cm。底部切り離しが回転糸切りで、その後に板状圧痕。9 は復元口径 13.2cm、器高 2.9cm、底径 8.6cm。色調は黄灰色。底部回転糸切りの後に、板状圧痕。10 は復元口径 12.2cm、器高 2.5cm、復元底径 8.4cm。色調は赤褐色。2mm 以下の白色粒子をやや大量に含む。底部は回転糸切りの後に板状圧痕。

坏 b（11） 底部の破片。器高 1.95+cm、底径 5.8cm。色調は明黄灰色。底部は回転糸切り。

甕（12） 取手部の破片。取手は台形を呈し貼り付けている。焼成は良好。色調は茶色～暗褐色。

瓦器

椀 c（13） 高台部の破片。高台は貼り付け高台。器高 1.2+cm、復元底径 7.2cm。色調は明灰色。内面の器壁は平滑なため、ミガキが施してある可能性が高い。

土師質土器

鍋（14） 復元口径 32.2cm、器高 13.1+cm、復元底径 22.8cm。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を内側に傾斜させている。焼成は良好。色調は黒褐色～明茶色。胎土は 4mm 以下の白色粒子を多く含む。外面は縦刷毛調整、内面は横ナデ調整。外面に使用時に付着したと思われる炭化物が大量に付着する。

須恵質土器

こね鉢（15～16） 15 は口縁部の破片。器高 3.9cm。東播系。17 は口縁部破片。器高 3.9+cm 東播系。

瓦質土器

鉢（17～19） 3 点とも東播系こね鉢の模様をした瓦質土器と考えられる。色調は灰白色だが、肥厚した口縁部外面を中心に、口縁部外面に淡黒色変が認められる。重ね焼き時の痕跡か。17 は口縁部の破片。器高 4.6+cm。18 は口縁部の破片。器高 3.9+cm。19 は口縁部の破片。器高 1.3+cm。焼成はやや不良。

火鉢（20） 20 は口縁部破片。器高 3.4+cm。焼成はやや不良。色調は暗灰色。外面に菱形のスタンプ文を巡らす。内面は回転ナデ調整。口径が小さいようなので手焙りの可能性もある。

瓦類

軒丸瓦（21） 瓦当面の破片。複弁。焼成は良好。須恵質。

軒平瓦（22、23） 22 は小破片。外区の鋸歯文と、唐草文が確認できる。焼成は良好で、須恵質。23 も 22 と同様の特長を持っている。共に九州歴史資料館分類の 604 と思われる。

土製品

焼土塊（24～26） 24 は縦 4.4+cm、横 5.3+cm、厚さ 2.2+cm。25 は縦 5.2+cm、横 4.9+cm、厚さ 3.3+cm。26 は縦 3.6+cm、横 5.2+cm、厚さ 1.4+cm。共に色調は灰黄色～淡赤灰色。スサ痕跡が認められるので、土壁の一部と考えられる。

瓦玉（27） 縦 3.0cm、横 3.0cm、厚さ 1.6cm。色調は灰白色。

石製品

砥石（28） 縦 9.2+cm、横 4.9cm、厚さ 1.1cm。表面は砥石として使われて平滑になっている。裏面は割れて剥離面となっている。表面側には長軸に対して直交する細かい傷が多い。下部の割れ口以外の 3 辺は、砥石として使っていた可能性がある。片岩製。

193 茶色土出土遺物（Fig.44）

石製品

滑石製石鍋（29、30） 29 は口縁部の破片。復元口径 19.2cm、器高 3.1+cm。鍔部は断面三角形

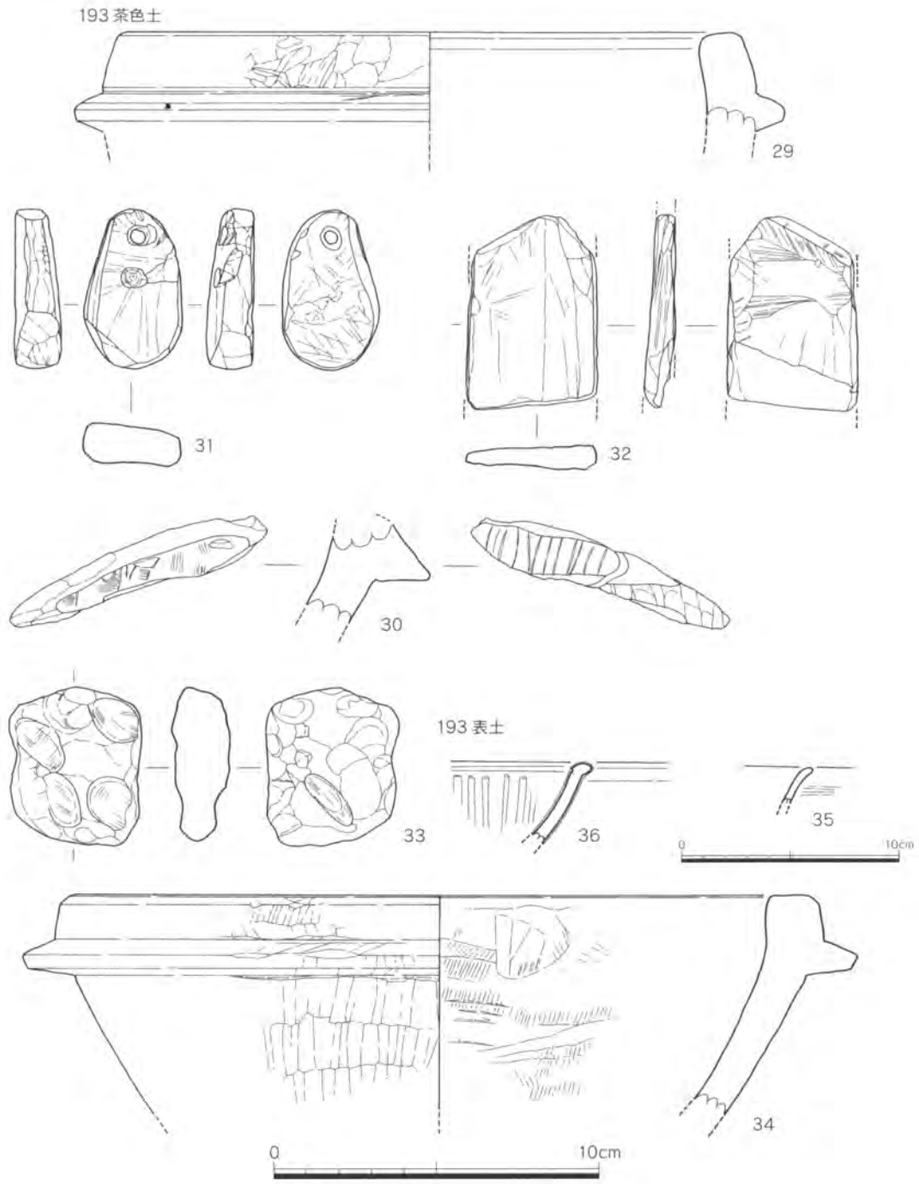


Fig.44 第 193 次調査土層出土遺物実測図その 4（1/2、1/3）

を呈すが、尖端部は丸みを帯びる。30 は鍔部の破片。器高 2.6+cm。

不明製品（31 ～ 33） 31 は涙滴型をしており、錘もしくは装飾品か。縦 4.95cm、横 3.0cm、厚さ 1.25cm。上部に直径 4mm の貫通した穿孔がみられる。その 7mm 下に同じように直径 7mm の楕円形の穴が確認できるが、これは貫通していない。滑石製。32 は砥石か。縦 6.0cm、横 4.0cm、厚さ 0.8cm。頁岩製。33 は、縦 4.9cm、横 4.1cm、厚さ 1.8cm。色調は赤褐色。表面に丸い窪みが点在する。尖端部を丸めるための砥石か。

193 表土出土遺物（Fig.44）

石製品

滑石製石鍋（34） 復元口径 23.4cm、器高 6.7+cm。色調は淡赤褐色。鍔は口縁部下部にあり、断面形は三角形。ただし、三角形の頂点にあたる場所は面取りして平坦に仕上げている。

黒色土器

椀（35） 口縁部破片。器高 1.7+cm。口縁部は外反している。B 類。

龍泉窯系青磁

鉢（36） 口縁部の破片。器高 3.8+cm。口縁端部を肥厚させて外反させる。内面には幅 3mm の縦方向の凹面の削りをいれる。未分類だが、Ⅳ類に近いと思われる。

(5) 小結

193 次調査の遺構変遷

今回の調査では部分的に 2 面までの遺構確認が出来た程度で、SE030 壁面での土層観察から最大で 7 面におよぶ面的な重層が予測されているため、限定的な情報と言わざるを得ない。検出された遺構は正方位を意識して配置されたもので、切り合い関係と出土した遺物からおおまかに 3 つの時期に分けて考える必要がある。

a. 1 期　鎌倉後期の様相（13 世紀代）

調査区北にあり東西に長い掘立柱建物 193SB080 を中心とし、その中央間の南延長上にある動線にかかわると思われる 193SX036、037、068、086、柵 193SA034 と 193SX111,112、掘立柱建物 193SB010、調査区南にある祠の基壇と考えられる 193SX224 とその東の壁建ちの建物 193SB050 で、土坑 193SK065 などである。井戸 193SE030 はそれに少し遅れて穿たれるものか。193SB080 と 193SB010 は位置的に近接するため同時に存在したかは不明である。掘立柱建物は 193SB080 には柱基礎に礎盤となる花崗岩が敷かれ 193SB010 にはないことなど、建物仕様上の差も認められる。出土遺物は中国陶磁器では龍泉窯系青磁 III 類までが出土し、香炉も含まれることから持仏堂や居宅内での礼拝空間があったと考えられる。193SX224 は祠の基壇と考えられ、これが宗教的な施設の中枢になっていた可能性もある。193SB080 は東西棟で検出された中では動線施設を伴う主殿的な建物といえる。井戸や土坑の存在から居宅的な生活空間としての土地利用が考えられる。この時期の遺物を持つ説明しきれていないピット群が多数存在し、小規模な塀などの施設がまだ復元可能である。また、193SB050 は桁方向で半分残存している程度と思われ、南側は 16 世紀の遺物が含まれる段落ち 193SX035 に切られていることから、当該期のステージ面はさらに南側に数メートルあったものと考えられる。

b. 2 期　室町前期の様相（14 世紀後半から 15 世紀代）

15 世紀までの遺物が出土している南北溝 SD055 と 14 世紀後半までの遺物が出土した築地基礎と思われる東西溝状の 193SX006 が相当する。この遺構以外での当該時期の遺物の出土はほとんどない。

広い空閑地に土地をレイアウトする溝と築地が整然と存在していた景観が想定される。

c. 3期　室町後期の様相（15 世紀代以降）

調査区南側の東西棟 193SB100 とその南側の段落ち 193SX035 がそれに当たる。193SB100 は柱穴に礎盤があり、庇を持つ構造から居館の主屋か仏殿のような性格が考えられる。この土地の字が「佛餉寺（ぶっしょうじ）」であることから寺院関連の遺構である可能性を指摘したい。これ以外の遺構は基本的になく、広い空閑地の段造成の際に堂が 1 宇建っていた姿が想像される。

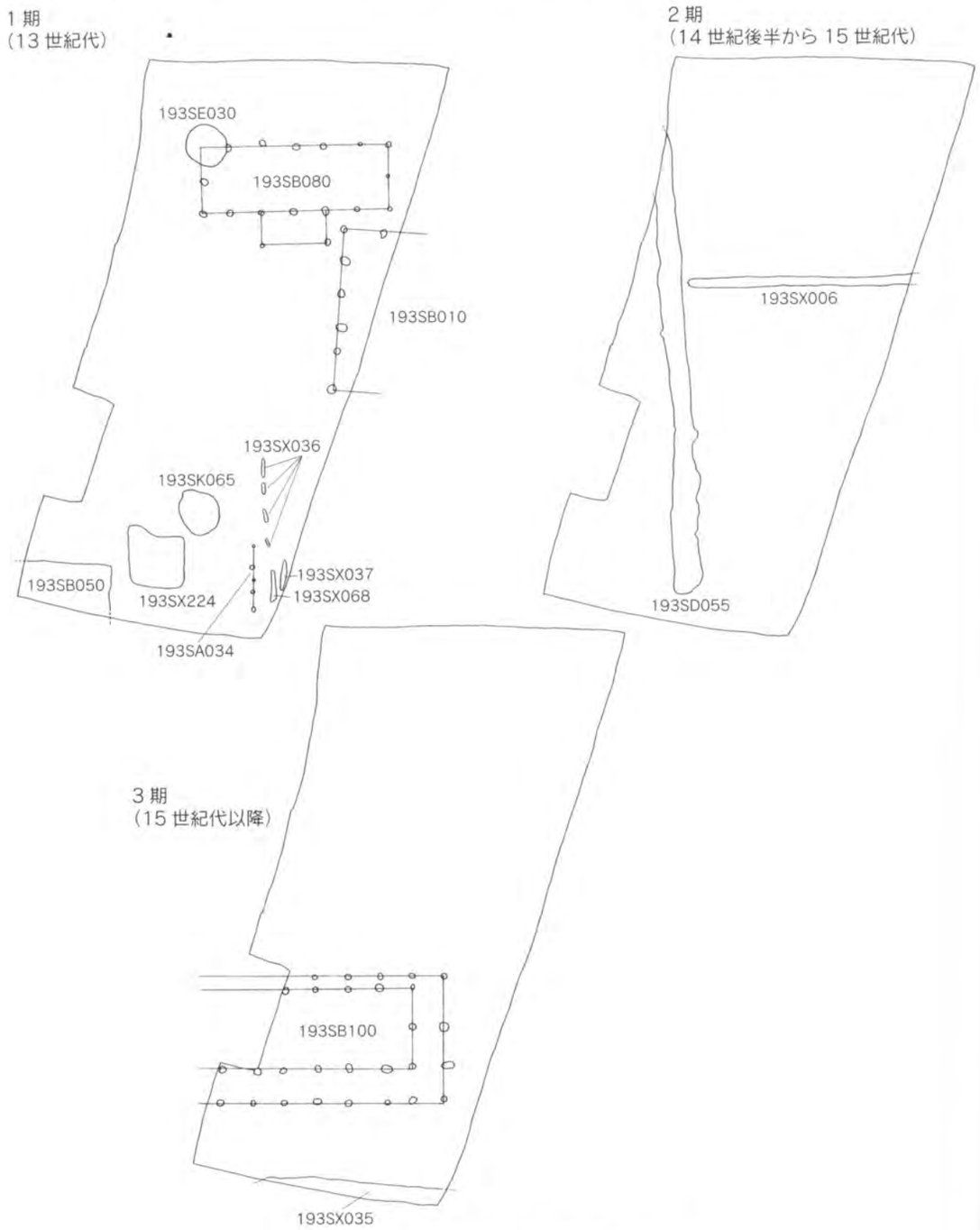


Fig.45　第 193 次調査主要遺構変遷図

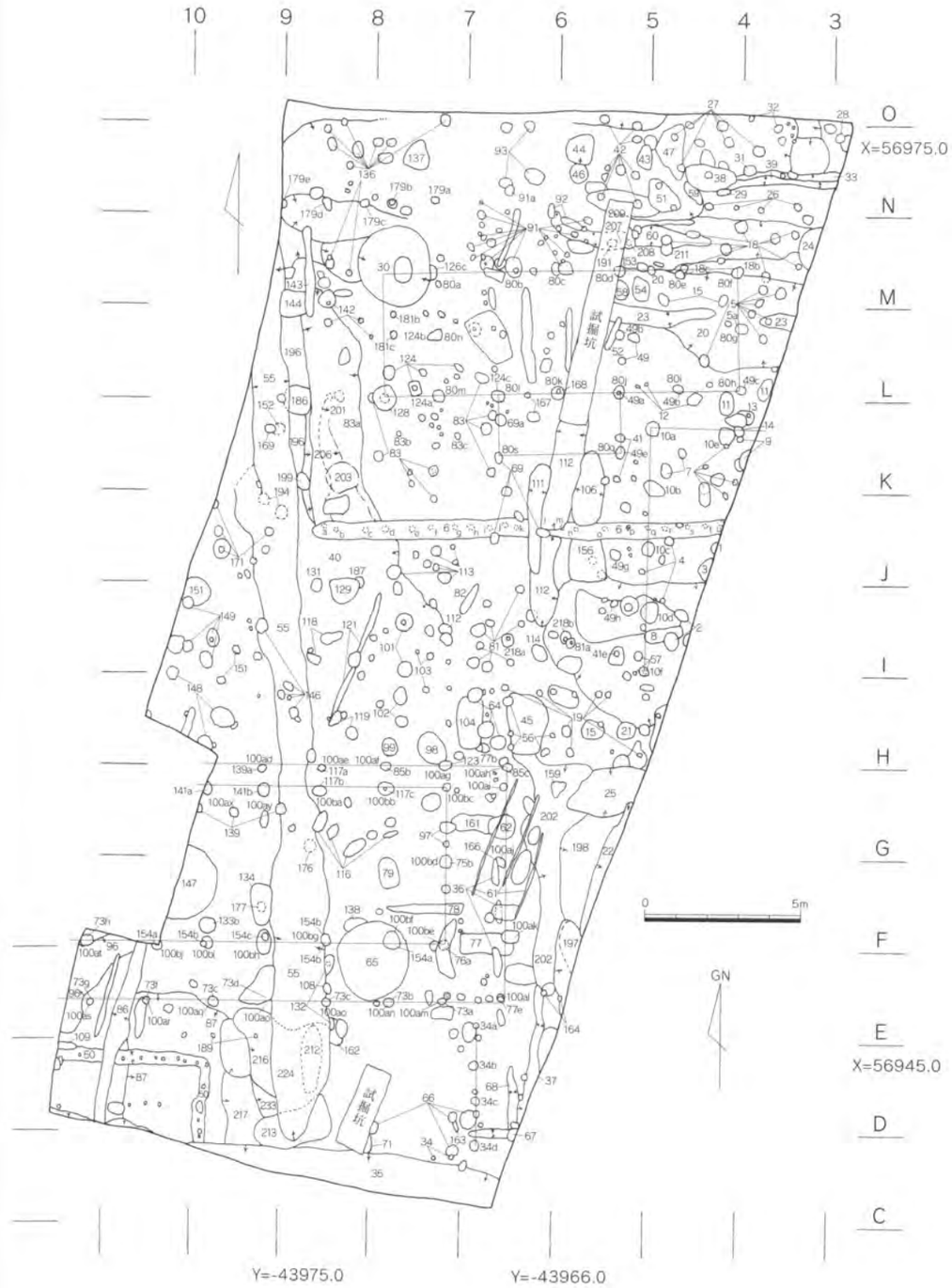


Fig.46　第 193 次調査遺構略測図 1 面目（1/200）

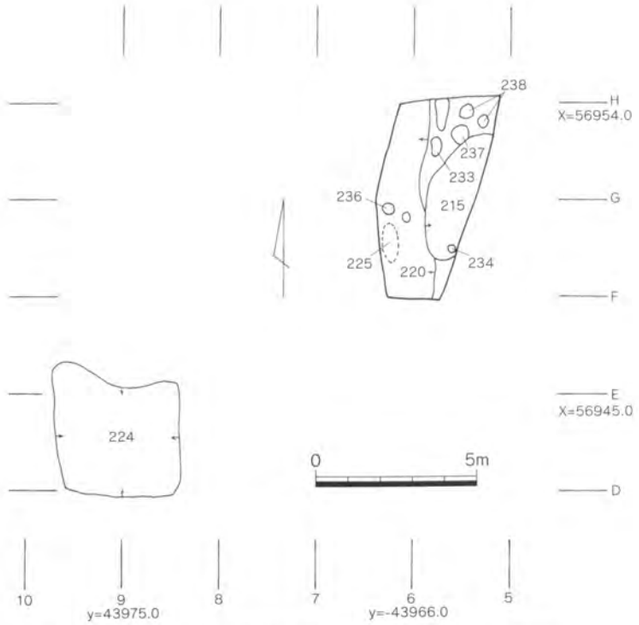


Fig.47　第 193 次調査遺構略測図 2 面目（1/200）

Tab.1-1　大宰府条坊跡第 193 次調査　遺構番号台帳（1）

※「遺構面」で未記入のものは、1 面目および遺構面不明のものを含む。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
1		小穴		黒色土				J4
2	193SX002	小穴		茶灰色土	8→2		12c～	I4
3		土坑		淡茶色土			中世	J4
4		小穴群		淡茶色土	6→4		13c 後半～	I4～J4
5	193SX005	小穴群	5a のみ SB080 に編入	淡黄茶色土	20→5		12c～	L3・4～M3
6	193SX006	溝×壁	溝の底に小穴が連続する。土壁か。	淡黄茶色土	6→4		14c 後半～	J4～J8
7	193SX007	小穴群	1つの小穴は 193SB080 に編入				12c～	K4
8	193SK008	溝状×土坑			8→2		13c～	I4
9		小穴群		茶色土	14→9		12c 中頃～	K3～4
10	193SB010	掘立柱建物		淡茶色土			13c 後半～	I4～K4
11	193SX011	小穴群		茶灰色土			12c～	L3・L4
12		小穴群		茶灰色土				L4・5
13		小穴						K3
14	193SX014	小穴		赤褐色土	14→9			K4
15	193SK015	土坑		淡黄灰色土				H5
16	193SX016	小穴群		淡黄茶色土	20→16		13c 中頃～	M4
17		小穴		淡黄茶色土	20→17			M4
18	193SB080	小穴群	18b,c が SB080 に編入	淡黄茶色土			13c 中頃～	M3～M4
19		小穴群					12c 中頃～	H5
20	193SX020	整地×溝	整地と思われる	暗褐色土	20→5・16・17・23・54		13c 後半～	L3～L5
21	193SK021	土坑					13c 後半～	H5
22		溝			25・197→22			F5～G5
23	193SX023	たまり状遺構	炭混じり	暗黒色土	20→23		13c 後半～	L3・L4
24		土坑		黄茶色土			13c 中頃～	M3
25	193SK025	土坑		黒茶色土→褐色土	25→22		13c 後半～	G5
26		小穴群	柵列の可能性あり	茶色土				N3～N4
27	193SX027	小穴群			38・47→27			N4
28	193SB080	小穴		茶色土				N3
29		たまり状遺構			38→29			N4
30	193SE030	井戸	193SB080 を切っている	褐色土→黄色土→茶褐色土→黄茶色土	80→30		13c 中頃～	M7
31		小穴		茶色土				N3
32		小穴群						N3
33		溝状		黒茶色土	33→39			N3～N4
34	193SA034	柵列						C6～E6
35	193SX035	たまり状遺構	段落ち	茶色土			16c～	C6～C9
36	193SX036	たまり状遺構	SX068 とセットで区画施設か	茶色土				E6
37	193SX037	溝状×たまり状遺構	整地土の落ち込みの別か		68→37			D6～E6
38	193SX038	たまり状遺構			39→38		12c 中頃～12c 後半	N4
39		たまり状遺構			33→39		12c 中頃～	N3・N4
40	193SX040	整地					13c 中頃～	J8～M8
41		小穴群		淡茶色土				I5～K5
42	193SX042	小穴群		淡茶色土			12c 中頃～	N5
43	193SK043	土坑		茶色土			12c～	N5
44	193SK044	土坑		茶褐色土	46→44		12c 中頃～	N5
45		土坑		茶色土	45→56		12c～	H6
46	193SK046	土坑		茶灰色土	46→44		13c～	N5
47	193SX047	たまり状遺構	炭混じり	暗茶色土	47→27		13c～	N4
48	193SX048	試掘穴埋土	試掘時のトレンチ内埋土である	青茶色土				L5
49	193SX049	小穴群	49a,b,c が SB080 に編入				12c～	L5
50	193SB050	壁立ち建物	側溝内に柱を立てている	茶褐色土	50→87・109		13c 中頃～	D9～D11
51		たまり状土坑	炭混じり	暗茶色土	51→26・53		12c～	N4
52	193SX052	たまり状遺構		灰色土	49→52		12c～	L5
53	193SX053	小穴群		茶色土	51→53→17		12c～	M5
54		たまり状遺構		茶色土				M5
55	193SD055	溝		明茶色土	55→100		15c～	D8
56	193SX056	小穴群		茶色土	45→56			H6
57	193SX057	小穴群		明茶色土			12c 中頃～	I5
58		土坑		茶灰色土				M5
59	193SK059	土坑		明灰色土	59→38		12c～	N4
60	193SX060	たまり状遺構		灰色粘			12c～	M5
61	193SX061	鼎痕跡		茶灰色土				F6～G6
62		土坑		淡黄茶色土	62→61		12c～	G6
63	193SB100	小穴群		黒色土	63→104		12c 中頃～	G6～H6
64		小穴群		淡茶色土				H6
65	193SK065	土坑			65→100i		12c 中頃～	F8
66		小穴群		茶色土			12c 中頃～	C・D7
67	193SX067	小穴			68→67			C・D7
68	193SX068	たまり状遺構	SX036 とセットで区画施設か		68→63・67			D6
69	193SX069	小穴群	掘立柱建物に関係する	茶色土			12 世紀前半～	J6～K6
70		欠番						
71	193SX071	たまり状土坑		茶色土			12c～	C7
72		小穴		茶色土				E7
73	193SK073	土坑群		明茶色土	73→36		12c～	E6・7
74	193SB100	小穴群						F7
75	193SB100	小穴	193SB100 へ編入					G7
76	193SB100	たまり状遺構	76a を 100h にする	茶色土			12c～	E7・F7
77	193SK077	土坑	77a を 105k にする	灰黄色ブロック			13c 中頃～	F6
78	193SD078	溝		茶色土			13c 中頃～	F7
79	193SK079	土坑		暗茶色土			近世～	F7
80	193SB080	礎石建物	49a.49b.49c.49e.5a.18b.18c.153.126a.124a.124b.28.124a.168.192.128 下層.193.69.181c を S-80 へ変更				13c～	K4～M7

Tab.1-2　大宰府条坊跡第 193 次調査　遺構番号台帳（2）

※「遺構面」で未記入のものは、1 面目および遺構面不明のものを含む。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
81	193SX081	小穴群		茶色土			13c 中頃～	I6
82		溝						I6
83		小穴群		茶灰色土				K6 ～ L6
84		小穴		茶灰色土				L6
85	193SB100ah	礎石建物	S-85d.85e を変更	茶色土				H7
86	193SD086	溝		茶色土			13c 前半～	D11 ～ 12
87	193SX087	たまり状遺構		黒色土	88 → 50		13c 後半～	D10
88	193SK088	土坑		明茶色土	88 → 100			E10
89		小穴		明茶色土				E10
90								
91	193SX091	●穴群		茶色土	192 → 91		13c 中頃～	N6
92		小溝		灰色土				N6
93	193SX093	小穴群		茶色土				N6
94		小溝		灰色土				M6
95		溝状たまり		灰色粘				L5・6
96	193SX096	たまり状遺構		茶色土			12 世紀～	E11
97		小穴群		明茶色土				G7
98	193SK098	土坑（廃土） 土器多く出土		茶灰色土	98 → 100			H7
99		土坑　XP		茶灰色土				H7
100	193SB100	掘立柱建物	73.a.b.c.d.e.f.g.h　77.a　141.a.b　117b.c　166.63.85e.d　123.117a.139.a.75a.b　76.a　154a.b.c.e.d を S-100 に変更				15 世紀～	E6 ～ G9
101		小穴		明茶色土			12c ～	I7
102		小穴群		茶色土				H7
103		小穴群						I7
104	193SK104	土坑					13c 中頃～	H6
105					100 と同一遺構と判断したため、100 で再登録した			F8
106	193SX106	たまり状遺構		黒茶色土	6 → 106		12c ～	J・K5
107		土坑			107 → 104 → 68			H6
108	193SX108	小穴群					13c 中頃～	E8
109		土坑						D11
110		欠番						
111	193SX111	たまり状遺構		灰色土	112 → 111		12c ～	J6
112	193SX112	溝状たまり		淡茶色土	6 → 112		近世～	J5 ～ K6
113	193SX113	小穴群		淡茶色土			12 c～	J7
114	193SX114	たまり状遺構		茶色土	114 → 6 → 111		13c 中頃～	I6
115		欠番						G8
116		土坑状		茶灰色土				G8
117	193SB100	小穴		暗茶色土				G8
118	193SX118	小穴群		灰色土				I8
119		小穴		茶色土				H8
120		欠番						
121	193SD121	溝						H8 ～ I7
122		小穴						I7
123	193SB100	小穴		茶色土	98 → 123			H7
124	193SB080	小穴群		茶色土			13c 前半～	L7
125		欠番						
126	193SB080	小穴群		茶色土	126 → 30		13c 中頃～	M7
127		溝		灰色土			12c 中頃～	M6
128	193SK128	土坑		茶褐色土	128 → 80			K7
129		土坑						I8
130		欠番						
131		小穴						I8
132		小穴群		茶色土			13c 前半～	E8
133		小穴		茶色土			12c ～	F9
134		土坑		茶色土				F9
135		欠番						
136	193SX136	小穴群		茶灰色土			12c 後半～	N7
137	193SK137	土坑		暗灰茶色土			13c 中頃～	N7
138	193SX138	小穴		黄茶色土	138 → 65		12c ～	F8
139	193SB100	小穴群						G9
140		欠番						
141	193SB100	掘立柱建物						G9
142		小穴		茶色土				L8
143	193SD143	溝		灰茶色土	40 → 143		13c 中頃～	M8
144		たまり状遺構		茶色土				M8
145		欠番						
146		小穴群		淡茶色土	S-55 →		12c 後半～	H8 ～ Z9
147		土坑 × たまり状遺構		明茶色土			12c 後半～	F9
148		土坑群		灰茶色土				H9
149	193SX149	小穴群			151 → 149			H9
150		欠番						
151	193SX151	たまり状			151 → 149		13c ～	I9
152	193SX152	小穴		茶色土	169 → 55 → 152		12c ～	K9
153	193SB080	小穴		明黄色土				M5
154	197SB100	小穴			154 → 65			F7
155		欠番						
156		たまり状遺構		暗茶色土	157 → 156			J5
157		小穴群			157 → 156			J5
158		小穴群						K5
159		たまり状遺構						G5

Tab.1-3　大宰府条坊跡第 193 次調査　遺構番号台帳（3）

※「遺構面」で未記入のものは、1 面目および遺構面不明のものを含む。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
160		欠番						
161	193SX161	たまり状遺構		淡灰色土	161 → 97.62		12c ～	G6・7
162		小穴			162 → 108			E8
163		溝状たまり						D7
164		小穴						E6
165		欠番						
166	193SB100aj	小穴　礎板石						F6
167	193SX167	小穴群					12 c～	K・L6
168	193SX168	柱穴					13c 中頃～	L6
169	193SX169	小穴			169 → 55			K9
170		欠番						
171		小穴群		灰茶色土			12c ～	J9
172		たまり状遺構		茶灰色土			12c ～	L6
173	193SX173	小穴群					13c ～	H7
174		小穴			106 → 174?			K5
175		欠番						
176		小穴			176 → 55			G8
177		小穴					13c 中頃～	F9
178	193SX178	小穴			178 → 55		12c ～	E8
179		小穴					12c 中頃～	N7 ～ 8
180		欠番						
181		小穴	a.b					L7
182		小穴			172 → 181			L6
183		小穴　石					13c 中頃～	L7
184		小穴　石						L9
185		欠番						
186	193SK186	土坑		茶色土	186 → 40.55		13c 前後～前半	K8
187		小穴						J8
188	193SX188	小穴			211 → 188		12c ～	M4
189		小穴群			87・216 → 189			E9
190		欠番						
191		小穴						M5
192	193SB080	小穴			192 → 91			M6
193	193SX193	小穴			193 → 127			M6
194		小穴群		茶色土	194 → 55			J9
195		欠番						
196	193SX196	整地		淡灰色土	196 → 193		13c 後半～	J8 ～ W8
197	193SX197	整地		茶色土	198 → 197		14c ～	E5
198	193SX198	整地		明黄色土			13c 中頃～	F5
199	193SX199	土坑		暗茶色土				K8
200		欠番						
201		整地		暗茶色土				K8
202	193SX202	整地		淡茶褐色土			13c 後半～	E6 ～ G5
203		たまり状遺構		赤色粘質土				K8
204	193SX204	整地		灰青褐色土				K8
205	193SX205	小穴						L8
206		整地		褐茶灰色土 ﾌﾞﾛｯｸまじり				K8
207		小穴		茶色土	207 → 191			M5
208		小穴						M5
209		小穴		茶色土			13c 前半～	M5
210		欠番						M5
211		小穴			211 → 188			M4
212	193SX212	整地 × 土坑		茶色土			13c ～	D8
213		たまり状遺構		暗茶色土			13c 中頃～	D8
214		たまり状遺構		暗茶色土	S-60 → 214	2		M5
215	193SX195	たまり状土坑		明茶色土	220 → 215	2	13c 後半～	G5 ～
216	193SX216	整地		褐色土	331 → 216 → 189		13c 前半～	D9
217	193SX217	整地 × 溝		黄色土			12c 中頃～	D9
218	193SX218	小穴群	a.b	赤色　茶色				I5.6
219	193SX219	整地 × 土坑		茶色土	219 → 35			C9
220	193SX220	たまり状遺構 × 溝		暗茶色土		2		G6
221	193SX221	整地		茶色土	221 → 35		13c 後半～	C8
222		整地		淡黄灰色土				C7
223		整地		淡茶色土				D9
224	193SX224	倉庫 × 基壇		茶色土			12c 後半～	D8
225	193SX225	石組遺構		暗茶色砂	S-225 → S-220			F6
226		土坑		茶色土				C8
227	193SK227	土坑	SX202 の下層にあたる	バサバサした明赤灰色土混じりの暗黒色粘質土	227 → 202		13c 後半～	F5 ～ G5
228	193SX228	土色	断割時に出土 S-224 南部　断割土層出土					C9
229	193SX229	整地		黄色土				D9
230		欠番						
231	193SX231	整地		黄灰色土			12c 中頃～	D9
232	193SX232	整地		黒色土			13c 中頃～	D9
233		小穴 × たまり状遺構		暗灰茶色土		2		H5
234		小穴		灰色土		2		G5
235		欠番						
236		小穴		灰色砂質土		2		G6
237	193SX237	小穴		淡灰色土		2	13c 後半～	G5
238	193SX238	小穴群		淡灰色土		2		G5

Tab.2-1　大宰府条坊跡第 193 次調査　出土遺物一覧表（1）

S-2

須恵器	甕口縁　高台
同安窯系青磁	皿；破片 (1)
国産陶器	常滑甕（1 ～ 4 型式）(1)
金属製品	鉱滓

S-3

須恵器	甕
土師器	破片
瓦質土器	破片

S-4

土師器	破片　▲
瓦質土器	擂鉢
瓦類	平瓦（瓦質、格子）　平（瓦質、縄目）　破片

S-5

土師器	坏 a (仆)　椀 c (底部中央に孔)　小皿 (仆)
同安窯系青磁	椀；破片 (1)
白磁	椀；V ～ VIII (2)

S-6

須恵器	壺 f
土師器	坏 a (仆)　破片
瓦器	椀
越州窯系青磁	坏；I (2)（未分類）
龍泉窯系青磁	椀；I (1)　II (1)　III (1)　上田 B×C (1)　破片 (1)
同安窯系青磁	椀；I-1 (4)　I-1b (1)　I-1c (1)
国産陶器	メ化ン (1)
白磁	椀；V-4×VIII-1.3 (1)　破片 (1)
	皿；V (1)　V ～ VIII (1)　VIII (1)　IX (1)　破片 (1)
	他；壺 III (3)
中国陶器	鉢；I (1)　I (1)（未分類）
	他；C 群 (3)
瓦類	平瓦（瓦質、格子）
石製品	滑石再利用品　擂鉢

S-6J

土師器	破片

S-6M

土師器	坏 a
龍泉窯系青磁	椀；II-b (1)
瓦類	平瓦（土師質、格子）

S-6N

土師器	小皿 a (仆)　甕

S-6O

土師器	坏 a (仆)

S-6U

土師器	小皿 a (仆)

S-7

土師器	坏 a　小皿 a　高台　破片
同安窯系青磁	椀；I-1b (1)
須恵質土器	甕
瓦質土器	こね鉢
白磁	椀；V-1a×VIII-2 (2)　VIII (1)　VIII-4 (1)　破片 (1)
中国陶器	壺；破片 B (1)
	他；壺 × 水注 A (1)
瓦類	破片（土師質）

S-8

龍泉窯系青磁	椀；II-b (1)
同安窯系青磁	椀；破片 (1)
須恵質土器	甕　こね鉢
青白磁	合子 (1)
中国陶器	壺；破片 B (1)
瓦類	破片（瓦質、格子）
土製品	炉壁

S-9

土師器	小皿 a
龍泉窯系青磁	椀；浅型椀 I-1 (1)
須恵質土器	甕
石製品	滑石再利用品

S-10a

須恵器	破片
土師器	坏

S-10a　暗茶色土

土師器	破片

S-10a　黄褐色土

土師器	破片

S-10a　黄茶色土

土師器	小皿 a (仆)
白磁	壺；III (1)
中国陶器	甕；破片？(1)
瓦類	破片

S-10a　暗茶褐色土

土師器	破片
白磁	壺；III (1)
土製品	焼土塊

S-10 b

須恵器	甕
土師器	坏 a　坏 a (仆)
金属製品	鉱滓

S-10c

土師器	破片
中国陶器	甕；破片？(1)

S-10c　茶褐色土

土師器	破片

S-10c 暗灰茶色粘

須恵器	破片
土師器	小皿 a (仆)

S-10d

土師器	坏 a (仆)　破片

S-10d　黄茶色土

龍泉窯系青磁	椀；II-b (1)
	皿；破片 (1)
瓦類	破片（須恵質、格子）

S-10d　暗茶色土

土師器	坏 b (仆)

S-10d　暗黄茶色土

土師器	坏 a (仆)　甕
白磁	皿；IX-1 (1)
金属製品	鉱滓

S-10f

土師器	坏 a

S-11

須恵器	甕　壺
土師器	坏 a
中国陶器	他；緑釉盤 (1)（未分類）

S-12

土師器	坏

S-13

須恵器	片
土師器	坏 a (仆)

S-14

土師器	破片

S-15

土師器	破片

Tab.2-2　大宰府条坊跡第 193 次調査　出土遺物一覧表（2）

S-16

土師器	破片
越州窯系青磁	椀；II- c (1)　破片 (2)　破片？(1)
須恵質土器	破片
瓦質土器	甕
白磁	皿；IX-1 (1)
中国陶器	他；壺 B (1)
石製品	滑石製石鍋

S-17

土師器	破片
黒色土器 A	破片
中国陶器	鉢；小鉢 II-1a (1)

S-18

須恵器	蓋 c
土師器	坏 a　高台
瓦器	椀
龍泉窯系青磁	椀；I-2 (1)　II-b (1)
	皿；I (1)
須恵質土器	甕　こね鉢　破片
瓦類	軒丸瓦（須恵質）
土製品	土玉

S-18a

白磁	皿；VI×VII (1)
瓦類	平瓦（須恵質、格子）

S-18 b

土師器	破片　破片（煮沸具）

S-19

土師器	坏 a (仆)　椀 c
越州窯系青磁	椀；小椀 I (1)　II-b (1)
同安窯系青磁	皿；破片 (1)
須恵質土器	破片
白磁	椀；破片 (1)
中国陶器	他；盤 I (1)
瓦類	平瓦（土師質）

S-20　褐色土

土師器	坏 a (仆)　坏 c× 椀 c　小皿 a (仆)
瓦器	椀
龍泉窯系青磁	椀；I-6a (1)　II-b (6)　III (1)　破片 (1)
	他；坏 III-3b (2)　破片 (III)　(1)　破片 (2)
同安窯系青磁	椀；I-1b (2)　破片 (4)
	皿；破片 (1)
土師質土器	こね鉢
須恵質土器	甕　こね鉢
瓦質土器	こね鉢
国産陶器	甕（常滑）
白磁	椀；IV (1)　IX (1)
	皿；IX (3)　IX-2 (3)
	他；蓋？(1)　壺 (3)
中国陶器	壺；破片 A (1)　破片 B (1)
	他；盤 I-2b (1)　破片 I (1)（未分類）
瓦類	平瓦（須恵質、格子）
金属製品	鉱滓
石製品	滑石製石鍋　孔板

S-20　黒色土

土師器	坏 a (仆)　坏 c× 椀 c　小皿 a (仆)　甕
越州窯系青磁	椀；I (2)　II (1)　II-a (2)　II-b (2)
同安窯系青磁	皿；破片 (1)
高麗青磁	椀；I (1)
白磁	椀；V×VIII (1)　V-4×VIII-1.3 (1)　VIII (3)
	皿；II (1)　IX (1)　IX-1 b (1)　破片 (1)
	他；壺 (3)　壺 I (1)　壺 III (1)　破片 (1)
中国陶器	他；緑釉坏 (1)（未分類）　水注 X (1)
瓦類	丸瓦（須恵質、無文）　平瓦（瓦質、格子）

S-20　黒色粘

須恵器	蓋 3
土師器	坏 a (仆)　小皿 a (仆)
龍泉窯系青磁	椀；I (1)　I-2 (1)　II-b (1)
	他；坏？(1)
同安窯系青磁	椀；I-1a (1)
	皿；破片 (2)
須恵質土器	こね鉢
瓦質土器	鉢
国産陶器	甕
白磁	椀；V-1a×VIII-2 (1)　VIII (1)
	皿；IX (1)　破片 (1)
	他；合子 (2)　壺？(2)　破片 (1)
中国陶器	壺；B (1)　B (1)（未分類）
瓦類	丸瓦（須恵質、無文）　平瓦（須恵質、格子）
	平瓦（瓦質、縄目）

S-21

土師器	坏 a (仆)　小皿 a (仆)
龍泉窯系青磁	他；器物 (1)（未分類）
国産陶器	甕　壺？(常滑？) (1)
白磁	椀；VIII (1)　VIII-1 (1)
	皿；IX-1 (1)
中国陶器	他；破片 A (1)

S-22

土師器	坏 a　小皿　破片

S-23

土師器	坏 a (仆)　坏 c× 椀 c　小皿 a (仆)
瓦器	椀
龍泉窯系青磁	椀；I (1)　II-b (3)　破片 (1)
	他；坏 III-3b (1)
同安窯系青磁	椀；破片 (1)
国産陶器	甕
白磁	椀；V2×VIII4 (1)
	皿；IX-2 (1)
	他；破片 (2)
中国陶器	他；水注 X (2)
瓦類	平瓦（須恵質、格子）　軒丸瓦（須恵質）

S-24

須恵器	破片
土師器	破片（煮沸具）
龍泉窯系青磁	椀；I (1)　III (1)
白磁	皿；破片 (1)
瓦類	破片（瓦質、格子）

S-25

須恵器	甕　破片
土師器	坏 a (仆)　小皿 a (仆)　甕
龍泉窯系青磁	椀；I (3)　I-2 (1)　II (1)
	皿；破片 (1)
同安窯系青磁	椀；I-1b (1)　破片 (1)
須恵質土器	こね鉢
瓦質土器	火鉢
白磁	椀；V (1)　破片 (1)
	皿；III-2 (1)　V×VI (1)
中国陶器	壺；C2 (1)
	鉢；I (1)
	甕；I? (1)
	他；D2 (1)
石製品	滑石製石鍋

S-25　黒茶色土

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	平瓦（須恵質、縄目）
土製品	焼土塊

S-26

土師器	坏 (仆)　破片
黒色土器 A	破片
国産陶器	甕

S-27

須恵器	蓋　坏身　甕
土師器	坏 a (仆)
瓦類	平瓦（須恵質、縄目）　平瓦（瓦質、格子）

Tab.2-3　大宰府条坊跡第 193 次調査　出土遺物一覧表（3）

S-28

須恵器	破片
土師器	坏（仆）
土製品	焼土塊

S-29

土師器	坏（仆）
須恵質土器	破片

S-30　茶褐色土

須恵器	蓋 3　坏 c　甕
土師器	蓋 c　坏 a（仆）　坏 c　小皿 a
黒色土器 A	破片
越州窯系青磁	椀；I-2 ア（1）
龍泉窯系青磁	椀；II-b（2）
	皿；破片（1）
同安窯系青磁	椀；破片（1）
	皿；破片（1）
須恵質土器	こね鉢
国産陶器	甕（産地不明）（1）
白磁	椀；V-1×VIII-2（1）　V-4×VIII-I.3（1）
	皿；III（1）　VII-1'（1）
瓦類	格子瓦（須恵質）　平瓦（瓦質、無文）
	平瓦（須恵質、縄目）　平瓦（瓦質、格子「平井」
金属製品	鉱滓

S-30　黄色土

須恵器	蓋 3　蓋 a1　坏 c　甕
土師器	小皿 a（仆）　鉢　高台　把手　破片
龍泉窯系青磁	椀；I（1）　I-2（1）　II-b（1）　III（1）　破片（2）
	皿；破片（1）
同安窯系青磁	椀；I-Ib（4）　破片（2）
白磁	椀；II（1）　V～VIII（1）　V-2×VIII-4（1）　VIII（2）
	IX-2a（1）　破片（1）
	皿；V×VI（1）　IX-I（1）
中国陶器	壺；破片？（1）
	鉢；I（1）
	他；盤 c（1）　盤 I-I（1）　破片 B（1）
瓦類	平瓦（土師質、縄目）　平瓦（土師質、格子）
金属製品	鉱滓、銅滓
石製品	石鏃
土製品	土壁

S-30　褐色土

須恵器	破片
土師器	小皿 a（仆）　高台
龍泉窯系青磁	椀；破片（2）
同安窯系青磁	椀；I（1）
	他；破片（2）
瓦質土器	火鉢
白磁	皿；IX（1）
瓦類	丸瓦（土師質、無文）　破片（瓦質、格子）

S-31

須恵器	破片
土師器	坏 a（ヘラ）
瓦類	破片

S-32

須恵器	破片
土師器	坏 a
黒色土器 B	破片
瓦類	破片

S-33

土師器	坏 a（仆）　小皿 a（仆）
瓦器	破片

S-34

土師器	破片

S-35

土師器	坏 a（仆）　托？
越州窯系青磁	他；壺×水注（1）
龍泉窯系青磁	椀；I（2）　II（2）　III（1）　上田 B-III（1）　破片（2）
	皿；破片（1）
	他；坏（未分類）　壺（1）
高麗青磁	象嵌；梅瓶（1）
須恵質土器	こね鉢　こね鉢（東播系）
国産陶器	甕（1）　鉢（常滑？）（1）
白磁	椀；VIII-1（1）
	皿；IX（1）　IX-Id（1）　森田 E（1）　破片（1）
	他；破片（1）
中国陶器	他；壺×水注 B（1）
李朝	雑釉陶器；坏（1）　陶器；壺×徳利（1）
瓦類	平瓦（瓦質、格子、文字）　丸瓦（瓦質、格子）　破片
金属製品	鉱滓
石製品	滑石製石鍋

S-36

土師器	小皿
白磁	皿；VIII-1'（1）
瓦類	破片（須恵質）

S-37

土師器	小皿 a（仆）
国産陶器	破片

S-38

土師器	坏 a（仆）　小皿 a（仆）
瓦器	破片
龍泉窯系青磁	椀；I-2（1）
同安窯系青磁	椀；I-Ib（1）
瓦類	平瓦（須恵質、無文）
土製品	土壁

S-39

土師器	破片
須恵質土器	甕
白磁	椀；V-Ia×VIII-2（1）　VIII（1）
	他；III（1）
瓦類	平瓦（須恵質、無文）

S-40　暗茶色土

須恵器	破片
土師器	小皿 a（仆）
龍泉窯系青磁	椀；I（1）　I-4（1）　II　II-a（1）　II-b（2）　破片（2）
	皿；破片（1）
	他；壺？（1）
同安窯系青磁	椀；I-Ib（1）　破片（2）
須恵質土器	こね鉢　こね鉢（東播系）
国産陶器	甕（常滑？）（1）　甕（産地不明）（1）
白磁	椀；V4×VIII-I.3（1）　破片（1）
	皿；IX（1）
	他；壺 III（1）　破片（3）
中国陶器	壺；耳壺 B（1）　破片 D（1）
	鉢；IV-1（1）
	他；盤 I（1）
石製品	滑石　滑石製石鍋

S-41

土師器	破片
瓦器	破片

S-41 b

土師器	破片
中国陶器	甕；破片 D（1）

S-41c

土師器	破片
国産陶器	甕

S-41e

土師器	破片
中国陶器	甕；破片 D（1）
瓦器	破片

Tab.2-4　大宰府条坊跡第 193 次調査　出土遺物一覧表（4）

S-42

須恵器	甕
土師器	坏 a（仆）　小皿 a（仆）
龍泉窯系青磁	椀；I（1）
同安窯系青磁	椀；I-Ib（1）　破片（1）
	皿；破片（1）
瓦質土器	甕
国産陶器	甕（備前 II?）（1）
白磁	他；合子（1）　破片（1）
瓦類	軒平瓦（瓦質、無文）
金属製品	鉱滓

S-43

土師器	坏 a（仆）　椀 c　小皿 a（仆）
須恵質土器	こね鉢
白磁	他；合子（1）

S-44

土師器	坏 a（ヘラ、仆）　椀 c　小皿 a（仆）
同安窯系青磁	椀；I-Ib（1）　破片（1）
中国陶器	壺；耳壺 B（1）
瓦類	軒丸瓦（須恵質）
石製品	滑石

S-45

土師器	坏 a（仆）　小皿 a（仆）
黒色土器 B	椀 c
瓦類	平瓦（土師質、縄目）

S-46

土師器	小皿 a（仆）
同安窯系青磁	椀；I-Ib（2）
瓦質土器	こね鉢
金属製品	鉱滓

S-47

須恵器	坏×椀口縁　甕　破片
土師器	坏 a（仆）　椀 c
瓦器	口縁
同安窯系青磁	椀；I-Ib（3）　破片（1）
瓦質土器	鉢
白磁	椀；VIII-4（1）
	他；破片（3）

S-48

土師器	坏 a（仆）
龍泉窯系青磁	椀；I-2（1）　I-4b（1）
同安窯系青磁	椀；I-Ib（4）
肥前系陶磁器	破片
国産磁器	肥前系染付；坏？（1）
白磁	椀；IV（1）　破片（1）
	皿；IX（2）　IX-1（1）　IX-2（1）
	他；破片（1）
中国陶器	壺；破片 A（1）
	甕；破片 D（2）
瓦類	平瓦（瓦質、縄目）　平瓦（土師質、格子）
石製品	滑石　緑色片岩　滑石製石鍋

S-49

土師器	小皿 a（仆）　破片
同安窯系青磁	椀；II-b（1）
瓦質土器	こね鉢

S-49 b

土師器	坏 a（仆）　小皿 a（仆）　破片
青白磁	合子（1）
石製品	滑石製石鍋

S-50

須恵器	甕
土師器	小皿 a（仆）
瓦器	破片
龍泉窯系青磁	椀；I（1）　I-6a（1）　II（1）　II-b（1）　III（1）
	他；小椀 I-Ib?（1）
白磁	椀；破片（1）
	皿；V×VI（1）　VII-Ib（1）
	他；破片（1）
中国陶器	壺；破片 A-2（1）
瓦類	平瓦（土師質、無文）
石製品	滑石製

S-50　茶褐色土

土師器	坏
瓦器	破片
須恵質土器	こね鉢
瓦類	平瓦（須恵質、格子）
石製品	滑石製石鍋

S-50a

瓦類	破片（須恵質）
石製品	滑石

S-50j

土師器	小皿 a（仆）
中国陶器	壺；破片 B（1）

S-51

土師器	坏 a（仆）　小皿 a（仆）
国産陶器	甕（産地不明）

S-52

土師器	坏 a（仆）
瓦質土器	片口鍋

S-53

土師器	坏 a（仆）　小皿 a（仆）

S-54

須恵器	破片
土師器	破片

S-55

須恵器	蓋
土師器	坏 a（仆）　孔あり
龍泉窯系青磁	椀；I（1）　I-I（1）　I-Ia（1）　II（1）　II-b（1）
同安窯系青磁	椀；破片（1）
土師質土器	擂鉢
白磁	椀；V-2×VIII-4（1）　VIII-I（1）
中国陶器	壺；破片 B（1）
瓦類	平瓦（瓦質、格子）
石製品	滑石　石鏃

S-55　明茶色土

須恵器	蓋 3　甕
土師器	坏 b（仆）　鉢 c
龍泉窯系青磁	椀；I-2（1）　II-a（1）　II-b（3）　II-b?（1）　破片（1）
	皿；破片（1）
	他；香炉 III（1）　大皿（1）　坏 IV（1）（未分類）
	浅形椀 I-2（1）　破片（1）
同安窯系青磁	椀；I-Ib（1）　I-Ic（2）　破片（2）
	皿；破片（1）
	他；破片（1）
高麗青磁	象嵌；椀（1）
土師質土器	擂鉢
須恵質土器	こね鉢　こね鉢（東播系）
瓦質土器	火鉢
肥前系陶磁器	染付（まじり）
国産陶器	甕（常滑）
白磁	椀；V（1）　VIII（1）　破片（1）
	皿；III（1）　III-1（1）　VI-Ia（1）　IX（1）　破片（1）
	他；壺 II（1）　壺 III（1）　破片（1）
青白磁	小壺（1）　壺（1）
染付（輸入）	椀（明染付）（1）
中国陶器	壺；破片 B（1）
	他；盤 I-b（1）
李朝	青磁椀（1）
瓦類	平瓦（須恵質、無文）　平瓦（須恵質、格子）
	丸瓦（須恵質、格子）
金属製品	鉱滓
石製品	玉石
土製品	壁土

Tab.2-5　大宰府条坊跡第 193 次調査　出土遺物一覧表 (5)

S-55　灰茶色土

須恵器	蓋 3
土師器	坏？　坏 a (仆)　坏 b (仆)
龍泉窯系青磁	椀；II-b (1)　破片 (1)
同安窯系青磁	椀；I-1b (1)　破片 (1)
土師質土器	擂鉢
瀬戸	おろし皿
国産陶器	甕 (産地不明) (1)
白磁	椀；V-2×VIII-4 (1)
	皿；IX (2)
	他；合子 (1)　破片 (1)
青白磁	合子 (1)
中国陶器	壺；破片 [redacted] (2)
瓦類	平瓦 (瓦質、縄目)
金属製品	鉱滓
石製品	滑石製石鍋

S-56

土師器	破片
白磁	椀；破片
石製品	砥石

S-57

土師器	小皿 a (仆)
龍泉窯系青磁	椀；I-2 (1)
白磁	椀；V-4×VIII-1.3 (1)
中国陶器	鉢；破片 ?C-1 (1)
金属製品	鉱滓

S-58

土師器	破片
瓦類	破片

S-59

土師器	小皿 a (仆)
瓦器	破片
白磁	椀；V-4×VIII-1.3 (1)

S-60

須恵器	坏
土師器	坏 a (仆)　小皿 a (仆)　甕
白磁	椀；I-1b (1)　破片 (1)
瓦類	平瓦 (瓦質、格子、文字「×」
土製品	壁土

S-61

瓦器	破片 (須恵質)

S-62

土師器	小皿 a (仆)
白磁	皿；VII-2a (1)

S-63

土師器	坏 a
龍泉窯系青磁	椀；I-2 (1)
中国陶器	壺；破片 B (1)

S-64

須恵器	鉢
土師器	小皿 a (仆)
白磁	他；破片 (1)

S-65　明茶色土

土師器	坏 a (仆)
龍泉窯系青磁	椀；I (1)　II-a (1)
同安窯系青磁	皿；破片 (1)
白磁	椀；V-4×VIII-1.3 (1)　VIII-1 (1)　破片 (1)
中国陶器	壺；破片 A-2 (1)
瓦類	平瓦 (瓦質、格子)
金属製品	鉱滓

S-65　淡灰色土

須恵器	鉢
土師器	坏 a (仆)　小皿 a (仆)
同安窯系青磁	椀；破片 (1)
	皿；破片 (1)
瓦質土器	破片
白磁	皿；破片 (1)
瓦類	軒平瓦 (瓦質、巴文)　破片 (瓦質)

S-65　灰茶色土

土師器	破片
須恵質土器	甕
瓦類	平瓦 (瓦質、格子)　平瓦 (須恵質)

S-66

土師器	破片
龍泉窯系青磁	椀；II-b (1)
瓦類	丸瓦 (瓦質、無文)

S-67

土師器	破片
石製品	滑石製石鍋

S-68

土師器	破片
国産陶器	破片
白磁	皿；IV (1)
中国陶器	壺；破片 B (1)

S-69

須恵器	甕　破片
土師器	小皿 a (仆)
黒色土器 A	破片
白磁	椀；V-C? (1)
石製品	滑石

S-71

土師器	小皿 a (仆)
瓦類	丸瓦 (瓦質、格子)　破片 (須恵質、格子)

S-72

土師器	破片
瓦器	破片
白磁	他；合子 (1)
瓦類	平瓦 (瓦質、格子)

S-73

土師器	破片
白磁	椀；II (1)
瓦類	平瓦 (須恵質、格子)

S-73a

土師器	破片
白磁	椀；VIII-1 (1)

S-73b

土師器	破片

S-73d

土師器	小皿 a (仆)

S-73e

土師器	破片
瓦類	破片 (瓦質)

S-74

土師器	破片

S-75a

土師器	破片
龍泉窯系青磁	椀；O 類 (1)　破片 (1)
白磁	壺；破片 ? (1)

S-75b

土師器	破片

S-76

土師器	小皿 a (仆)
龍泉窯系青磁	椀；I-2 (1)
	他；破片 III (1)
同安窯系青磁	椀；I (1)
金属製品	鉱滓

Tab.2-6　大宰府条坊跡第 193 次調査　出土遺物一覧表 (6)

S-77

須恵器	坏身
龍泉窯系青磁	椀；I (1)
同安窯系青磁	椀；I (1)
白磁	椀；破片 (1)
	皿；IX (1)　破片 (1)
中国陶器	壺；破片 B (1)
瓦類	平瓦 (須恵質、格子)　瓦玉

S-77a

土師器	小皿 a (仆)

S-78

土師器	破片
龍泉窯系青磁	皿；III (1)　(未分類)
土製品	土玉

S-79

須恵器	甕
土師器	坏 a (仆)
黒色土器 A	破片
龍泉窯系青磁	皿；破片 (1)
同安窯系青磁	椀；破片 (1)
国産陶器	破片 (1)
白磁	他；破片 (1)
石製品	黒曜石

S-81

須恵器	甕
土師器	小皿 a (仆)　破片
龍泉窯系青磁	椀；II-b (1)
須恵質土器	こね鉢
国産陶器	甕 (常滑 I) (1)
中国陶器	壺；破片 B (1)
瓦類	平瓦 (須恵質、格子)

S-82

土師器	小皿 a (仆)
肥前系陶磁器	椀 × 坏　染付；皿 (1)
白磁	椀；破片 (1)

S-83

土師器	坏　小皿 (仆)
須恵質土器	甕
白磁	他；破片 (1)
中国陶器	壺；破片 A-2 (1)　破片 C-1 (1)
瓦類	平瓦 (須恵質、瓦質)

S-83a

土師器	破片

S-84

土師器	破片
黒色土器 A	破片

S-85d

土師器	破片

S-86

土師器	小皿 a (仆)
龍泉窯系青磁	椀；II-a (1)
同安窯系青磁	椀；破片 (1)
須恵質土器	こね鉢
白磁	椀；V-4×VIII-1.3 (1)
中国陶器	他；椀 (褐釉、産地不明) (1)
石製品	滑石製石鍋再利用品

S-87

須恵器	蓋 3　甕　壺　鉢 c
瓦器	椀 c
龍泉窯系青磁	椀；I-1b (1)　I-2 (1)　I-4 (1)　II-a (1)　II-b (7)　III-2 (4)
	他；小坏 III (1)　(未分類)　破片 (2)
瓦質土器	羽釜
白磁	椀；V-4×VIII-1.3 (1)　VIII (1)　破片 (4)
	皿；IX (1)
	他；壺 III (3)　破片 (2)
青白磁	椀？(1)
中国陶器	壺；破片 B (3)
	甕；破片 D (1)
	他；盤 I-b (1)　破片 B (1)
瓦類	丸瓦 (土師質、格子、孔あり)　平瓦 (土師質、縄目)
金属製品	鉱滓 (椀形)
石製品	滑石製石鍋

S-88

土師器	小皿 a (仆)
須恵質土器	こね鉢
国産陶器	破片
白磁	椀；IV (1)
土製品	鋳型？

S-89

土師器	破片

S-91

土師器	小皿 a (仆)
龍泉窯系青磁	椀；II-b (1)
同安窯系青磁	椀；I-1b (1)
	皿；I-1 (1)
国産陶器	甕
白磁	皿；II (1)
青白磁	椀？(1)
中国陶器	他；破片 C (1)
瓦類	丸瓦 (瓦質、格子)　平瓦 (瓦質、格子)　破片 (須恵質)
石製品	滑石

S-91a

同安窯系青磁	皿；I-1 (1)

S-92

土師器	坏 a (仆)

S-93

須恵器	壺底部
土師器	小皿 a (仆)　甕
須恵質土器	鉢
中国陶器	壺；A-2
瓦類	軒丸瓦 (瓦質)　瓦玉
石製品	滑石製石鍋

S-93a

同安窯系青磁	椀；I-1b (1)
瓦類	丸瓦 (須恵質、格子)

S-94

須恵器	破片
土師器	破片
須恵質土器	破片

S-95a

土師器	坏 c　小皿 a (仆)
龍泉窯系青磁	椀；II-b (1)
白磁	皿；破片 (1)

S-95b

須恵器	甕　口縁部
土師器	破片

S-96

須恵器	蓋 (ヘラ)　甕
土師器	小皿 a (仆)
同安窯系青磁	椀；I-1b (1)
須恵質土器	鉢
白磁	椀；破片 (1)
中国陶器	他；A-2 水注 ? (1)　C-2 (1)
土製品	土玉

Tab.2-7　大宰府条坊跡第 193 次調査　出土遺物一覧表（7）

S-97

土師器	破片
中国陶器	他；盤 C-1 (1)

S-98

土師器	坏 a (仆)　小皿 a (仆)
瓦類	平瓦 (須恵質、縄目)
土製品	土錘

S-98　淡茶黄色土

土師器	坏 a (仆)　小皿 a (仆)

S-98　茶灰色土

土師器	坏 a (仆)　小皿 a (仆)

S-99

土師器	坏 a (仆)

S-101

土師器	坏 a (仆)　小皿 a (仆)

S-102

須恵器	甕
土師器	坏 a (仆)　甕
国産陶器	鉢

S-103

土師器	坏 a (仆)
龍泉窯系青磁	皿；I-1 (1)
国産陶器	甕
瓦類	平瓦 (須恵質、格子)

S-104

土師器	小皿 a (仆)
龍泉窯系青磁	椀；II-b (1)　破片 (1)
	他；小椀 I (1)
白磁	他；合子蓋 (1)　壺 III (1)
瓦類	丸瓦 (須恵質、格子)

S-106

須恵器	蓋 3
土師器	坏 a (仆)　小皿 a (仆)
瓦器	破片
白磁	他；破片 (1)
瓦類	平瓦 (瓦質、格子)
土製品	焼土塊 (土壁 ?)

S-107

土師器	坏 a (仆)
白磁	皿；破片 (1)

S-108

須恵器	破片
土師器	破片
白磁	皿；IX (1)
中国陶器	鉢；鉢 ?A 群 (1)（未分類）

S-108

須恵器	坏
土師器	破片

S-111

土師器	小皿 a (仆)
瓦類	平瓦 (瓦質、格子)
金属製品	鉱滓

S-112

土師器	坏 a (仆)　小皿 a (仆)　破片 (煮沸具)　破片
龍泉窯系青磁	椀；I (1)　I-2 (1)　II-b (2)　破片 (1)
瓦質土器	破片
緑釉陶器	椀 (洛北)
肥前系陶磁器	広東椀　丸椀　皿
国産磁器	器種不明 (1)
白磁	椀；VIII-1 (1)
	皿；IX-a (1)　IX-b (1)
	他；壺 (1)
中国陶器	他；C 群 (1)
瓦類	平瓦 (瓦質、格子)　破片 (瓦質)
金属製品	鉱滓
石製品	滑石

S-113

土師器	破片
龍泉窯系青磁	椀；I (1)
白磁	皿；破片 (1)

S-114

土師器	小皿 a (仆)　破片 (煮沸具)
龍泉窯系青磁	椀；II-b (1)
	皿；I (1)
	他；坏 III-b? (1)
同安窯系青磁	椀；I-1b (2)
中国陶器	他；盤 ?C 群 (1)
瓦類	破片

S-116

土師器	破片 (煮沸具)
国産陶器	甕

S-117c

土師器	破片

S-117

土師器	破片
瓦類	破片 (瓦質)

S-118

土師器	坏 a　土錘
龍泉窯系青磁	椀；I-4 (1)

S-119

須恵器	破片
土師器	椀　小皿 a
同安窯系青磁	椀；I-1b
中国陶器	他；盤 ?C 群 (1)

S-121

土師器	破片

S-122

土師器	小皿 a (仆)　破片

S-123

土師器	破片

S-124

土師器	破片
瓦器	破片
龍泉窯系青磁	他；壺 ? (1)
須恵質土器	鉢
白磁	皿；III-1 (1)
	他；破片 (1)
青白磁	皿 (1)
石製品	滑石

S-124c

須恵器	破片
土師器	坏 a　小皿 (仆)
龍泉窯系青磁	椀；II-b (1)

S-126

土師器	小皿 a
瓦質土器	鍋
白磁	皿；IX (1)
石製品	滑石

S-127

土師器	小皿 a (仆)
龍泉窯系青磁	椀；I-2 (1)
同安窯系青磁	椀；I-1c (1)
瓦類	破片 (須恵質)

S-128

土師器	小皿 a (仆)
瓦器	破片
越州窯系青磁	他；破片 I (1)
同安窯系青磁	椀；I-1c (2)
須恵質土器	こね鉢
中国陶器	他；盤 C 群 (1)
瓦類	破片 (瓦質)
土製品	焼土塊

Tab.2-8　大宰府条坊跡第 193 次調査　出土遺物一覧表（8）

S-129

土師器	破片

S-131

土師器	破片

S-132

須恵器	破片
土師器	破片
龍泉窯系青磁	椀；I-2 (1)　II-a (1)

S-133

土師器	坏 a (仆)　小皿 a (仆)
国産陶器	甕
瓦類	平瓦 (須恵質、無文)　平瓦 (須恵質、格子)

S-134

土師器	破片
白磁	皿；III-1? (1)
石製品	黒曜石

S-136

須恵器	破片
土師器	甕
黒色土器 B	破片
同安窯系青磁	椀；破片 (1)
瓦質土器	こね鉢　破片
白磁	椀；V-4×VIII-1.3 (1)　VIII-1 (1)
瓦類	丸瓦 (須恵質、無文)　平瓦 (瓦質、縄目)

S-137

土師器	坏 a (仆)　小皿 a (仆)
龍泉窯系青磁	椀；I-2 (1)　II-b (1)　III-2 (1)
須恵質土器	こね鉢 (東播系)　破片
白磁	椀；破片 (1)
	皿；IX-1 (1)
中国陶器	壺；A 群 (1)
	鉢；IV-1 (1)
瓦類	平瓦 (土師質、格子)

S-138

土師器	坏　鍋
同安窯系青磁	椀；I-1c (1)
瓦類	丸瓦 (瓦質、格子)

S-139

瓦類	平瓦 (瓦質、格子)

S-139a

土師器	破片

S-141

土師器	破片
金属製品	鉱滓
石製品	滑石

S-141b

土師器	破片

S-142

須恵器	破片
土師器	坏 a (ヘラ)
龍泉窯系青磁	椀；破片 (1)
	皿；龍 × 同 (1)
中国陶器	他；B 群 (1)

S-142a

土師器	破片 (仆)
龍泉窯系青磁	椀；I-2 (1)

S-143

白磁	皿；IX (1)
	他；破片 (1)

S-144

土師器	坏
龍泉窯系青磁	他；破片 (1)
瓦類	平瓦 (須恵質、格子)

S-146

同安窯系青磁	椀；I-1b (1)
金属製品	鉱滓

S-147

土師器	小皿 a (仆)
黒色土器 A	破片
龍泉窯系青磁	皿；龍 × 同 (1)

S-148

須恵器	蓋 3
中国陶器	他；D 群 (1)
瓦類	平瓦 (瓦質、格子)

S-149

須恵器	破片
土師質土器	こね鉢

S-151

須恵器	甕
土師器	破片
中国陶器	甕；I (1)
瓦類	破片 (瓦質)

S-152

土師器	坏 a (仆)
土師質土器	片口
瓦類	破片 (瓦質)
金属製品	鉄釘

S-153

須恵器	甕
土師器	坏 a (仆)
白磁	椀；V-4×VIII-1.3 (1)

S-154

土師器	破片
黒色土器 B	破片

S-154a

土師器	破片
瓦類	平瓦 (瓦質、格子)

S-154d

土師器	破片

S-154e

土師器	小皿 a (仆)
瓦類	破片

S-156

瓦器	破片
須恵質土器	甕
白磁	椀；V-1×VIII-2 (1)
中国陶器	他；破片 A 群 (1)
瓦類	平瓦 (土師質、格子)

S-157

須恵器	坏
土師器	破片 (仆)

S-158

土師器	破片
白磁	椀；V-1×VIII-2 (1)

S-159

土師器	坏 a (仆)　破片
中国陶器	他；盤 (1)
瓦類	破片

S-161

土師器	坏 a (仆)　小皿 a (仆)
中国陶器	他；C 群 (1)
瓦類	平瓦 (瓦質、格子)

S-162

土師器	坏　小皿 a (仆)
瓦類	瓦玉 (須恵質)

Tab.2-9　大宰府条坊跡第 193 次調査　出土遺物一覧表（9）

S-163

土師器	破片

S-164

白磁	椀；V (1)

S-166

土師器	破片

S-167

土師器	坏 a (仆)
瓦類	瓦玉 (土師質)
金属製品	鉱滓
石製品	滑石製

S-168

須恵器	甕
土師器	破片
同安窯系青磁	椀；I-1b (1)
白磁	皿；IX (1)

S-169

土師器	破片

S-171

土師器	坏 a　小皿 a (仆)
中国陶器	他；盤 (1)
瓦類	平瓦 (瓦質、無文)

S-172

土師器	坏 a (仆)　小皿 a (仆)
白磁	椀；破片 (1)
	皿；破片 (3)
	他；破片 (1)
中国陶器	他；盤 I-1 (1)
瓦類	破片

S-173

土師器	坏 a
中国陶器	壺；壺 ?A 群 -2 (1)

S-174

中国陶器	他；C 群 (1)

S-176

土師器	破片

S-177

土師器	破片 (仆)
白磁	皿；IX-1 (1)

S-178

土師器	小皿 a (仆)
中国陶器	鉢；I-1b (1)

S-179

土師器	破片
龍泉窯系青磁	他；破片 (1)
同安窯系青磁	椀；I-1b (1)
瓦類	破片

S-179b

土師器	破片

S-179d

土師器	小皿 a (仆)
同安窯系青磁	椀；I-1b (1)

S-179e

土師器	破片

S-181a

土師器	破片

S-181b

土師器	坏

S-182

須恵器	破片
土師器	破片

S-183

土師器	坏
白磁	皿；IX (1)

S-184

土師器	坏

S-186

須恵器	大鉢 ×
土師器	坏 a　破片
瓦器	破片
龍泉窯系青磁	椀，II-a (1)
瓦類	平瓦 (土師質，縄目)

S-187

須恵器	蓋
土師器	破片

S-188a

土師器	椀 × 坏 c　破片
瓦類	破片 (瓦質、格子)

S-188b

土師器	小皿 a (仆)　破片
須恵質土器	こね鉢
瓦質土器	破片

S-189

土師器	小皿 a (仆)
瓦質土器	破片 (土師質)

S-191

土師器	小皿 a (仆)
瓦質土器	平瓦 (瓦質、無文)

S-192

土師器	小皿 a (仆)
瓦質土器	丸瓦 (須恵質、格子)　平瓦 (瓦質、格子)

S-193

土師器	坏 a (仆)
龍泉窯系青磁	椀；破片 (1)

S-194

中国陶器	甕；D 群 (1)

S-196

土師器	坏 a (仆)　椀 c
瓦器	椀　皿
龍泉窯系青磁	椀；I (1)
同安窯系青磁	皿；I-1b (1)
須恵質土器	こね鉢 (東播系)
瓦質土器	片口
国産陶器	甕 (常滑)　壺 × 甕
白磁	椀；V-4×VIII-1.3 (1)
	皿；V×VI (1)
中国陶器	他；盤 (1)
瓦類	平瓦 (瓦質、無文)

S-197

須恵器	甕
土師器	坏
龍泉窯系青磁	椀；上田 D-1 (1)
同安窯系青磁	椀；I-1b (1)
須恵質土器	こね鉢
瓦類	平瓦 (土師質、無文)
石製品	滑石

S-198

土師器	坏 a (仆)　小皿 a
龍泉窯系青磁	椀；II-b (2)
土師質土器	火鉢
白磁	椀；IV (1)
	皿；III? (1)　IX-1 (1)　破片 (1)
中国陶器	甕；B 群 (1)
	他；A 群 (1)　B 群 (2)
瓦類	軒平瓦 (須恵質)
金属製品	鉱滓

Tab.2-10　大宰府条坊跡第 193 次調査　出土遺物一覧表（10）

S-198　茶色土

土師器	小皿 a (仆)　破片 (煮沸具)
越州窯系青磁	椀；I (1)
白磁	椀；V-2c (1)
瓦類	破片 (須恵質)

S-199

土師器	小皿 a (仆)
石製品	滑石

S-201

須恵器	坏 c
土師器	小皿 a (仆)
越州窯系青磁	椀；I (1)
龍泉窯系青磁	椀；2 b (1)
同安窯系青磁	椀；I-1b (1)
中国陶器	壺；B 類 (2)
瓦類	平瓦 (瓦質、縄目)

S-202

須恵器	蓋 3　坏 c
土師器	坏 a　坏 c× 椀 c　小皿 a (仆)
瓦器	椀 c
越州窯系青磁	椀；I (1)　I-2 (1)
龍泉窯系青磁	椀；I (1)　II-b (1)
	皿；破片 (1)
	他；椀 × 坏 III (1)　壺 (1)　破片 (1)
同安窯系青磁	他；破片 (1)
土師質土器	火鉢
須恵質土器	こね鉢 (東播系)
緑釉陶器	壺 (周防)
国産陶器	甕　壺？
白磁	椀；IV (3)　V-I×VIII-1.3 (3)　V-3 (1)　破片 (3)
	皿；V×VI (1)
	他；壺 (1)　壺 III (3)　破片 (5)
青白磁	椀　合子蓋
中国陶器	壺；B 群 (1)
	鉢；II-1a (1)　VI (1)
	甕；D-1 群 (3) 同一個体か　III (1)
瓦類	平瓦 (須恵質、格子)　平瓦 (瓦質、格子)
	丸瓦 (須恵質、無文)　瓦玉
金属製品	鉱滓
石製品	滑石製石鍋
土製品	炉壁　焼土塊

S-204

土師器	破片
瓦類	平瓦 (瓦質、格子)
石製品	滑石製石鍋

S-207

土師器	破片

S-208

土師器	破片
須恵質土器	こね鉢
中国陶器	鉢；I-1 (1)
瓦類	平瓦 (瓦質、格子)
石製品	黒曜石

S-209

須恵器	破片
土師器	破片
龍泉窯系青磁	椀；I (1)　II-b (1)

S-211

土師器	小皿
瓦類	破片 (瓦質)

S-212

須恵器	坏 c　甕
土師器	坏 a (仆)　小皿 a (仆)　甕
龍泉窯系青磁	椀；I (1)　II-b (1)
土師質土器	鍋　擂鉢
白磁	他；壺 III (1)　破片 (1)
瓦類	丸瓦 (瓦質、縄目)　平瓦 (瓦質、無文)
	平瓦 (瓦質、格子)
石製品	緑色片岩

S-213

土師器	破片 (仆)
龍泉窯系青磁	椀；2 b (1)　III-2c (1)
同安窯系青磁	椀；I (1)
白磁	椀；IV (1)

S-214

白磁	椀；破片 (1)
瓦類	瓦玉
土製品	焼土塊

S-212

須恵器	甕
土師器	坏 a (仆)　小皿 a
龍泉窯系青磁	椀；I-1 (1)　I-b (1)　II-b (2)　破片 (1)
同安窯系青磁	椀；I-1b (1)
	皿；I-1a (1)
須恵質土器	こね鉢 (東播系)
瓦質土器	火鉢 (輪花型)
白磁	椀；V-1×VIII-2 (1)　破片 (1)
	他；水注 (1)　壺 III (1)
中国陶器	他；小盤 I (1)　破片 C 群 (2)
瓦類	丸瓦 (須恵質、無文)　平瓦 (瓦質、格子)
	平瓦 (須恵質、格子)　瓦玉

S-216

須恵器	坏 c　甕
土師器	坏 a
龍泉窯系青磁	椀；II-b (1)
同安窯系青磁	皿；I-2b (1)
白磁	椀；破片 (1)
中国陶器	鉢；I-1b (1)
瓦類	平瓦 (瓦質、格子)

S-217

須恵器	壺
越州窯系青磁	鉢；鉢 (1)　(未分類)
龍泉窯系青磁	椀；I-2 (1)
瓦類	平瓦 (土師質、縄目)　丸瓦 (須恵質、無文)

S-218a

土師器	破片

S-218b

土師器	破片

S-219

須恵器	甕
瓦器	椀 c
龍泉窯系青磁	椀；破片 (1)
白磁	皿；破片 (1)
金属製品	鉱滓

S-220

土師器	坏 a (仆)　椀 c　小皿 a (仆)
龍泉窯系青磁	椀；I-1c (1)　I-2 (4)　II-b (3)　III-1 (1)
	皿；皿 × 椀 (1)
同安窯系青磁	椀；I-1b (6)　I-1c (1)　破片 (5)
	皿；I-1 (1)　I-b (1)
土師質土器	鍋
須恵質土器	こね鉢
緑釉陶器	椀 (東海)　(1)
国産陶器	甕 (2)
白磁	椀；IV (1)　V (1)　V-4×VIII-1.3 (2)　VII (1)　IX (2)
	破片 (5)
	他；破片 II (1)
青白磁	皿 (1)　大皿？(1)
中国陶器	壺；IV (1)　A-1 [2]　A-2 (1)　A 群 (5)　A 群壺？(2)
	C 群 (1)
	鉢；IV? (1)
	甕；D 群 [2]
	他；小盤 I-2' (1)　盤 I (3)　盤 I-1' a (3) 同じ個体？
	盤 I-2 (1)　C 群 (1)
瓦類	平瓦 (須恵質、縄目)　平瓦 (土師質、無文)
	平瓦 (須恵質、格子)
石製品	滑石製石鍋
土製品	焼土塊

Tab.2-11　大宰府条坊跡第 193 次調査　出土遺物一覧表（11）

S-221

須恵器	甕
土師器	坏 a（不明）　小皿 a（仆）
越州窯系青磁	皿；II-1a（1）
龍泉窯系青磁	他；破片（1）
土師質土器	擂鉢
須恵質土器	こね鉢
白磁	椀；II-1（1）
	他；破片（2）
中国陶器	他；破片 C 群（1）
瓦類	丸瓦（瓦質、不明）　丸瓦（須恵質、無文）
	丸瓦（土師質、格子）　平瓦（瓦質、格子）

S-222

須恵器	破片
土師器	甕　破片
瓦類	破片

S-223

土師器	破片
瓦類	丸瓦（瓦質、無文）

S-224

須恵器	破片
土師器	坏 b（仆）
龍泉窯系青磁	椀；I（1）　破片（1）
同安窯系青磁	皿；破片（1）
瓦質土器	擂鉢
緑釉陶器	皿（洛北？）（1）
白磁	他；破片（2）
瓦類	平瓦（須恵質、縄目）
金属製品	鉱滓
土製品	焼土塊

S-224　茶色土

龍泉窯系青磁	椀；II-b（1）
	皿；龍×同（1）
同安窯系青磁	皿；I-1a（1）　I-1b（1）
国産陶器	甕
瓦類	丸瓦（瓦質、無文）

S-224　暗茶色土

須恵器	坏身　坏 c　壺
同安窯系青磁	椀；破片（1）
	他；破片（1）
須恵質土器	こね鉢
白磁	椀；破片
中国陶器	壺；B 群（1）
石製品	滑石製石鍋再利用品

S-224　東土層　明黄灰色土

土師器	坏 a（仆）
瓦類	平瓦（須恵質、格子）

S-224　西土層　暗黒茶色土

土師器	坏 a
須恵質土器	甕

S-225

須恵器	破片
土師器	小皿 a（仆）　破片（仆）
白磁	椀；破片（1）
瓦類	破片（瓦質）

S-227

土師器	坏 a（仆）　小皿 a（仆）　高台
黒色土器 A	破片
黒色土器 B	椀
龍泉窯系青磁	椀；I（1）　I-2（1）　I-6b（1）　II-b（3）
同安窯系青磁	椀；I-1b（1）　I-1c（1）
	皿；I-1（2）
須恵質土器	こね鉢
瓦質土器	甕
国産陶器	甕（常滑 1 型式）（1）
白磁	椀；II（1）　IV（1）　V（1）　V-1×VIII-2（2）
	V-2×VI ～ VIII-4（1）　VIII-1（1）　破片（2）
	皿；III-1（1）　破片（3）
	他；破片（8）
中国陶器	他；盤？（1）　A 群（1）　A 群壺（1）　A-2 壺？（1）　A-2 鉢（1）
	B 群（1）　D 群甕（1）
瓦類	平瓦（瓦質、格子）　平瓦（土師質、縄目）
金属製品	鉄塊
石製品	滑石製石鍋

S-228

白磁	椀；破片（1）
瓦類	平瓦（須恵質、格子）
石製品	滑石製不明品

S-229

須恵器	坏 c
土師器	坏 a（仆）
石製品	緑色片岩

S-231

須恵器	脚部　蓋つまみ部（ボタン状）
土師器	破片（煮沸具）　破片
瓦器	破片
龍泉窯系青磁	椀；I-2（1）
	皿；I（1）
国産陶器	常滑　甕 6 型式
白磁	椀；II（1）
	皿；VI-1b（1）　破片（1）
	他；破片（1）
中国陶器	他；A（1）　破片 A-2（1）
瓦類	平瓦（瓦質、格子）

S-232

須恵器	破片
土師器	小皿 a（仆）
白磁	椀；V（1）
	皿；IX-1（1）

S-233

土師器	破片

S-234

土師器	破片（仆）

S-236

土師器	小皿

S-237

土師器	坏 a（仆）　小皿 a（仆）
龍泉窯系青磁	椀；I-2（1）　II-a（1）　II-b（1）
白磁	壺；合子（1）

S-238

土師器	坏 a（仆）　小皿 a（仆）

Z

須恵器	甕
土師器	坏 a　小皿 a
同安窯系青磁	椀；I-1b（1）　破片（1）
青白磁	椀（1）
中国陶器	甕；IV（1）

Tab.2-12　大宰府条坊跡第 193 次調査　出土遺物一覧表（12）

茶色土

須恵器	蓋　坏蓋 3　坏　坏 c　高坏　坏蓋ツマミ　甕　壺
土師器	坏 a（仆）　高坏　小皿 a（仆）　把手　破片（煮沸具）
黒色土器 A	破片
黒色土器 B	椀
瓦器	椀
越州窯系青磁	鉢；水注（1）
龍泉窯系青磁	椀；I?（1）　I（16）　I-2（10）　I-4（4）　I-6b（1）　II（1）
	II-a（9）　II-b（45）　III-2 細（2）　III-2 太（2）　III（12）
	III-1×壺（1）　III-2（5）　小椀？（1）　小椀 I-3（1）
	小椀 II-b（1）　小椀 III（1）　椀×壺（1）
	椀？（内面型文様あり）（未分類）
	皿；大皿（1）　I（5）
	他；坏？（1）　坏 III-1b（1）　坏 III-2×3（1）　壺？（2）
	水注？（1）　破片（1）
同安窯系青磁	椀；I（6）　I-1（1）　I-1a（1）　I-1b（33）　I-1c（12）　III（4）
	III-1c（1）　III-a（1）　破片（13）
	皿；I（7）　I-b（1）　I-1b（1）　I-2b（3）　皿？（1）
	他；同？破片（1）
高麗青磁	象嵌；破片（1）
土師質土器	椀（貼り付け高台）　擂鉢　鍋　羽釜
須恵質土器	こね鉢
瓦質土器	甕（大型）　火鉢　羽釜　破片
緑釉陶器	椀（洛北）　破片
瀬戸	華瓶
肥前系陶磁器	染付椀　外面青磁染付椀　染付椀（プリント）明治～
	破片
国産陶器	椀（山茶椀）　椀（高取）　皿（唐津）　甕（常滑）
	甕（近代～）　甕（2）　大甕（常滑壺）　壺×甕（1）
	鉢　すり鉢　こね鉢（常滑）
国産磁器	椀　破片　？破片
白磁	椀；II（3）　IV（15）　IV-1a（3）　IV-1b（1）　V（4）　V×VI（1）
	V-1×VIII-2（10）　V-2×VI ～ VIII-4（7）　V-2c（1）
	V-2×VIII-4（1）　V-4×VIII-1.3（15）　V ～ VII（2）
	VII-b（1）　VIII-1（4）　VIII-2（1）　VIII-4（2）
	VIII-4?（1）　IX（4）　椀？（1）　椀×皿（2）　破片（30）
	皿；III-1（2）　IV-1（1）　IV?（1）　VI ～ VIII（1）　VIII-2c?（1）
	IX（2）　IX-1（1）　IX-1b（5）　IX-1c（2）　IX-2b（2）
	IX-2c（1）　IX-a（3）　IX-b（5）　IX-c（1）　白？皿（1）
	破片（10）
	他；坏（森田 D 群）　壺（5）　壺？（4）　壺?II（1）　壺 III（5）
	合子蓋（3）　合子（身）（1）　水注把手（1）　破片（18）
	破片 II（2）
青白磁	椀（3）　皿？（1）
染付（輸入）	明染？椀×皿（1）
中国陶器	壺；IV（3）　A-2（2）　A 群（13）　B 群（5）　C 群（3）　小壺か（1）
	壺?B 群（3）
	鉢；I（1）　I-1b（1）　II（1）　III（1）　擂鉢
	甕；A 群（1）　D 群（1）
	他；小盤 I-2（1）　盤 I（3）　盤 I-2b（1）　盤 III　A 群（2）
	B 群（1）　C 群（3）
須恵器（輸入）	朝鮮系無釉陶器壺（2）
李朝	雑釉陶器椀（1）
弥生土器	甕底部
瓦類	丸瓦（土師質）　丸瓦（瓦質）　平瓦（瓦質）　平瓦（須恵質）
	平瓦（縄目）　平瓦（格子）　平瓦（土師質、二重格子）
	平瓦（縄目）　軒平瓦）　熨し瓦
金属製品	銅滓　鉄製品
石製品	滑石製石鍋　不明品　砥石　黒曜石（1）
土製品	瓦玉　土壁

暗灰色土

須恵器	蓋 3　坏
土師器	坏 a（仆）　大坏 c×大皿 c　小皿 a（仆）
龍泉窯系青磁	椀；II-a（1）　II-b（4）　III-1（1）
同安窯系青磁	椀；I-1b（1）　I-1c（1）
須恵質土器	こね鉢　こね鉢（東播系）　甕
瓦質土器	片口こね鉢　鉢？
白磁	椀；IV（2）　V-1×VIII-2（1）　V-2×VIII-4（1）　破片（1）
	皿；V×VI（1）　IX（2）　IX-2（1）
	他；壺 III（1）　破片（1）
中国陶器	鉢；I（1）
	他；盤（緑釉）（2）（未分類）　盤 I-1b（4）　盤 c-1（1）　壺 B（3）
	破片 B（2）
瓦類	平瓦（瓦質、格子）　平瓦（瓦質、縄目）　軒丸瓦　道具瓦
石製品	滑石製石鍋二次利用品　硯

灰色土

須恵器	甕
黒色土器 B	高台
龍泉窯系青磁	椀；I-1a（1）　I-2（1）　I-4（1）　II-b（2）　III-2（2）
	皿；破片（1）
	他；坏（1）
同安窯系青磁	椀；I-1b（1）　I-1c（1）
須恵質土器	こね鉢（東播系）
瓦質土器	鍋
肥前系陶磁器	染付；丸椀（1）　瀧反椀（1）　椀？（1）　破片（1）
国産陶器	甕（東海）（1）　鉢（近世～）（3）　破片
白磁	椀；V-1×VIII-2（2）　破片（2）
	皿；IX（1）
	他；合子（1）　破片（3）
青白磁	壺（1）
中国陶器	他；盤 I-b（2）　盤 c-1（1）
金属製品	鉱滓
土製品	瓦玉　炉壁

明黄灰色土

須恵器	甕　壺 b
土師器	坏 a（仆）　小皿 a（仆）
黒色土器 B	椀
龍泉窯系青磁	椀；I（2）　I-2（3）　II-b（2）　III-1B（1）　III-2（2）　破片（1）
同安窯系青磁	椀；I-1b（2）　破片（2）
須恵質土器	こね鉢（東播系）
瓦質土器	甕
国産陶器	甕
白磁	椀；V-1×VIII-2（1）　V-2×VIII-4（1）　V-4×VIII-1.3（1）
	VIII（2）　VIII-1（2）　XI（1）　破片 D-1（2）
	皿；III（1）　IX（1）
	他；壺 III（2）
中国陶器	壺；破片 A-2（1）　破片 B（3）
	甕；破片 D-1（2）　破片 D-1（1）（未分類）
	他；盤 I-2（2）　盤 II（1）　盤 c-1（5）　盤？（1）　甕 D-1（1）
	鉢 IV-1（1）
瓦類	平瓦（須恵質、格子）　平瓦（須恵質、縄目）
石製品	滑石製石鍋　砥石
土製品	加工土器（1）

表土

土師器	坏 a　小皿 a
黒色土器 B	破片
越州窯系青磁	椀；I-2 イ（1）　I-b（1）
龍泉窯系青磁	椀；I（1）　I-1a（1）　I-2（2）　I-3（1）　II-a（2）　II-b（1）
	破片（1）
	皿；I-2（1）　破片（1）
	他；破片（1）
同安窯系青磁	椀；I（1）　I-1（1）　I-1b（2）　II-b（3）
	他；坏 III（1）　鉢（1）（未分類）
肥前系陶磁器	染付；丸椀（2）
白磁	椀；II（1）　V（2）　V-1×VIII-4（1）　V-2×VIII-4（1）
	V ～ VII（1）　VIII-1（1）　VIII-2（1）　破片（3）
	皿；VIII-1a（1）　IX（1）
	他；壺 III（2）　破片（1）
中国陶器	壺；耳壺 B（1）
瓦類	平瓦（瓦質、格子）
金属製品	鉱滓
石製品	滑石製石鍋

Tab.3-1　大宰府条坊跡　第 193 次出土遺物計測表

A：内底ナデ　B：板状圧痕

S-5

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 c×椀 c	−	R-001	−	1.7+α	(5.2)	−	−
	小皿 a	〃	R-003	(9.0)	1.4	(7.2)	○	−
	坏 a	イト	R-002	(12.2)	2.5	(7.2)	○?	○

S-6N

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	R-001	(8.6)	1.1	(6.8)	○	○

S-6U

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	R-001	(8.8)	1.2	(7.0)	○	○

S-7

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	ヘラ?	R-001	(9.7)	0.9	(7.7)	−	−
	坏 a	ヘラ	R-002	(11.2)	2.4	(8.0)	−	−

S-10a 黄茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	ヘラ	R-001	(8.4)	1.1	(6.8)	−	−

S-10b

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 b	−	R-005	(7.2)	2.15	3.2	○	−
	坏 b	イト	R-001	(13.4)	3.4	5.4	○	−
	坏 b	〃	R-002	(12.8)	3.85	5.4	○?	−
	坏 b	〃	R-003	−	2.5+α	4.9	○?	−
	坏 b	〃	R-004	−	3.0+α	6.4	○	−

S-10c 暗灰茶色粘

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	R-001	−	1.3+α	−	○	−

S-10d 暗黄茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 b	イト	R-001	−	1.8+α	(5.6)	○?	−

S-10d 暗茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a× 坏 b	イト	R-001	(12.4)	3.1	5.9	○?	−?

S-18

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
瓦器	椀	−	R-004	−	2.5+α	−	−	−

S-20 褐色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-003	(9.3)	1.35	(7.4)	○	−
	坏 a	〃	R-002	(12.2)	2.55	(8.6)	○	−

S-20 黒色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-002	(9.4)	1.3	(7.4)	○	○
	坏 a	〃	R-003	(13.0)	2.45	(8.8)	○?	−
	坏 c	−	R-004	−	2.2+α	6.0	−	−

S-20 黒色粘

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
須恵器	蓋	−	R-007	−	1.3+α	−	−	−
土師器	小皿 a1	イト	R-005	8.4	1.0	7.0	○	○
	坏 a	〃	R-001	(10.6)	2.15	(7.0)	○?	−
	坏 a	〃	R-002	(13.4)	2.15	(9.2)	○	○
	坏 a	〃	R-003	12.8	2.95	8.6	○	○
	坏 a	〃	R-004	(12.4)	2.55	7.3	○	○

S-21

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 b	イト	R-001	−	2.0+α	6.1	○?	−

S-23

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(9.0)	1.3	(7.2)	−	○
	小皿 a1	−	R-002	(9.5)	1.35	(7.4)	○	−
	坏 a	イト?	R-003	(14.2)	2.2	(9.2)	−	−

S-25

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	R-001	−	1.0	−	−	○?
	小皿 a	〃	R-004	(8.7)	1.2	(6.8)	○	○
	坏 a	〃	R-005	(13.7)	3.2	8.8	○	○?
	坏 a	〃	R-006	13.7	2.8	9.4	○	○?

S-27

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
須恵器	坏身	−	R-001	−	1.3+α	−	−	−

S-30 黄色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
須恵器	蓋 a1	−	R-001	(14.5)	2.2+α	−	−	−
	蓋 a1	−	R-002	−	1.2+α	−	−	−
	小蓋 3	−	R-003	−	0.9+α	−	−	−
	蓋 2	−	R-007	−	1.4+α	−	−	−
	蓋 c1	−	R-008	−	1.4+α	−	−	−
土師器	小皿 b	イト	R-006	7.0	1.75	4.6	○	×
	蓋	−	R-004	(15.6)	2.55+α	−	−	−

S-40 暗茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(9.0)	1.4	(6.6)	−	−

S-42

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト?	R-001	(7.8)	1.25	(6.1)	−	○?
	小皿 a1	イト?	R-002	(8.9)	1.4	(7.0)	○	○

S-44

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(9.4)	1.25	(6.9)	○	−
	坏 a	イト?	R-002	(13.6)	3.0	(9.1)	○	−

S-47

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	皿?	−	R-002	−	2.9+α	−	○	−

S-49b

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(8.6)	1.2	(6.4)	−	−

S-50j

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	−	1.2+α	−	○	○

S-50 茶褐色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(9.0)	1.2	(6.4)	○?	○

S-53

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(8.2)	1.1	(6.3)	−	−

S-55

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 b	イト	R-001	(11.4)	2.7	5.8	○	−
	坏 b	−	R-002	−	1.7+α	(6.5)	−	−
	坏 b	イト	R-003	−	1.3+α	6.0	○	−

S-55 灰茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 b	イト	R-001	13.0	3.65	6.2	×	×

S-55 明茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 b	−	R-005	(6.6)	1.7	(5.2)	−	−
	小皿 b	−	R-007	(6.6)	1.1	4.2	−	−
	小皿 b	イト	R-015	−	1.5+α	(4.0)	×	×
	小皿 b	〃	R-018	−	1.5+α	(4.2)	−	−
	小皿 b	〃	R-019	−	1.2+α	3.6	×	−
	小皿 b	〃	R-024	−	1.3+α	3.5	−	−
	坏 b	〃	R-001	−	2.0+α	5.6	−	×
	坏 b	〃	R-002	−	1.6+α	5.8	−	×
	坏 b	〃	R-003	(11.6)	3.05	(5.8)	−	×
	坏 b	〃	R-004	(12.2)	3.55	(5.6)	−	×
	坏 b?	−	R-023	−	1.4+α	−	−	−
	坏 b	イト	R-025	−	2.2+α	5.6	×	×

S-57

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(7.2)	1.2	(5.4)	−	−

S-59

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イトか	R-001	(9.0)	1.1	(7.4)	○	−

S-60

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	?	R-002	(9.0)	0.8	(7.2)	○	○
	坏 a	イト	R-001	13.0	2.55	8.8	○	○

Tab.3-2　大宰府条坊跡　第 193 次出土遺物計測表

A：内底ナデ　B：板状圧痕

S-65 淡灰色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 b	イト	R-001	(6.1)	1.25	(4.6)	○	−

S-77a

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	R-001	(8.4)	1.25	(6.8)	○	○

S-86

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	R-001	8.1	0.75	7.0	×	×

S-87

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト?	R-005	(8.0)	1.2	(6.1)	○?	−
	坏 a	イト	R-001	(12.4)	2.6	(7.6)	○	○
	坏 a	ヘラ?	R-002	(13.0)	2.7	(8.6)	○	−
	坏 a	ヘラ	R-003	(12.5)	2.8	(8.6)	○	−
	坏 a	イト	R-004	(12.2)	2.5	(8.0)	○	○
瓦器	椀 c	−	R-006	−	1.3+α	−	○?	−

S-88

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	R-001	(8.0)	1.0	(6.6)	○	−

S-93

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(8.9)	1.3	(6.4)	○?	○?

S-96

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
須恵器	蓋	−	R-002	−	1.5+α	−	−	−

S-98

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a	イト	M-001	(12.2)	2.7	(7.4)	○	○
	坏 a	−	M-002	(12.8)	2.8	(8.4)	−	−
	坏 a	イト	M-003	(13.2)	2.6	(8.0)	○?	×?
	坏 a	−	M-004	11.6	2.8	8.4	−	○
	坏 a	イト	M-005	(12.0)	2.6	7.8	○	○
	坏 a	−	M-006	(12.4)	2.6	(8.8)	○	○
	坏 a	−	M-007	(12.2)	2.6	(8.2)	○	○
	坏 a	イト	M-008	11.4	2.7	6.8	−	−
	坏 a	〃	M-009	(12.8)	2.9	7.4	○	○
	坏 a	〃	M-010	(12.0)	3.0	8.3	○	○
	坏 a	イト?	M-011	11.9	2.7～3.0	8.2	○	○
	坏 a	イト	M-012	(12.8)	2.5	8.0	○	○
	坏 a	〃	M-013	(12.0)	2.5	7.9	○	○
	坏 a	〃	M-014	(12.2)	2.4～3.1	(8.0)	○	○
	坏 a	〃	M-015	(12.0)	2.6	7.5	○	−
	坏 a	〃	M-016	(15.4)	3.5	10.4	○	○

S-98 茶灰色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	M-001	11.6	2.1～2.6	8.6	○	○
	小皿 a	〃	M-004	(6.6)	1.6	4.6	−	−
	坏 a	〃	M-002	11.7	2.8	7.6	○	○
	坏 a	〃	M-003	(11.9)	2.6～3.1	7.4	−	−
	坏 a	〃	M-005	(11.8)	2.7	7.8	○	○
	坏 a	−	M-006	(12.1)	3.0	7.9	○	○?
	坏 a	イト	M-007	(12.4)	3.0	9.0	−	○
	坏 a	〃	M-008	(16.0)	3.2	(11.0)	○	○
	坏 a	〃	M-009	(12.2)	2.7	(8.1)	○	○
	坏 a	〃	M-010	11.8	2.4～2.9	7.8	○	○
	坏 a	〃	M-011	11.8	3.0	6.8	○	−
	坏 a	〃	M-012	11.4	2.85	8.4	○	○
	坏 a	〃	M-013	12.0	2.85	8.0	○	○
	坏 a	〃	M-014	12.0	2.8	7.4	○	−

S-98 淡茶黄色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a	イト	R-001	11.9	2.85	8.0	○?	−
	坏 a	〃	R-002	(11.65)	2.45	7.65	○?	−
	坏 a	〃	R-003	(13.0)	3.05	(8.0)	○	−

S-113

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	椀 c	−	R-001	−	2.25+α	(7.4)	−	−

S-114

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(8.2)	1.05	(5.8)	○	×

S-126

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	−	R-001	(8.6)	1.0	(7.2)	−	−

S-128

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(8.6)	0.85	(7.0)	○	○

S-137

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(8.4)	1.3	(6.0)	−	−
	小皿 a1	〃	R-002	(8.0)	1.25	(5.9)	○?	○
	坏 a	〃	R-003	(12.6)	2.55	(8.4)	○	○
	坏 a	〃	R-004	(12.0)	2.5	(7.5)	○	○

S-161

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	−	R-001	(7.9)	1.35	(6.0)	○	−

S-186

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a	イト	R-001	(15.5)	3.2	(9.5)	○	○

S-193

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a	イト	R-001	(14.8+α)	2.8+α	(10.6)	○	○

S-196

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a	ヘラ?	R-001	(11.3)	2.2	(7.4)	○?	−
	坏 a	−	R-002	(13.6)	2.3	(10.0)	○?	−
	坏 a	ヘラ?	R-003	−	2.3	−	−	−
	坏 a	−	R-004	−	1.8+α	−	−	−
	坏 a	ヘラ	R-008	(13.7)	(2.8)	(8.4)	○	○
瓦質土器	坏蓋	−	R-009	−	1.6	−	−	−
	坏 c	−	R-010	−	1.6+α	(4.6)	−	−

S-198

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小坏 a or 小皿 b	ヘラ?	R-001	(9.1)	1.6	(7.6)	○	○

S-198 茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	R-001	(8.3)	0.8	(6.4)	○	○

S-199

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(9.0)	1.1	(7.4)	○	○

S-202

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-002	(8.0)	1.3	(6.0)	−	−
	小皿 a1	〃	R-010	(8.6)	1.1	(7.0)	○	○
瓦器	坏 a	−	R-003	(15.8)	(3.1)	(10.0)	−	−
	椀	−	R-005	−	1.7+α	−	−	−
	椀	−	R-007	−	2.3+α	−	−	−
	椀 c	−	R-006	−	1.3+α	(8.6)	−	−

S-214

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a	−	R-001	(11.8)	2.4	(8.3)	−	−

S-215

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(9.5)	1.1	(8.2)	○?	○
	小皿 a1	〃	R-002	(8.6)	1.0	(6.6)	○	○?
	小皿 a1	〃	R-004	7.8	1.3	6.4	−	○
	坏 a	〃	R-003	−	1.3+α	(8.2)	○	○
	坏 a	〃	R-008	(12.2)	2.6	(9.0)	○	○

S-219

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
瓦器	椀 c	−	R-001	−	1.6+α	(6.1)	−	−

S-220 暗茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	R-001	(9.2)	1.0	7.6	○	○
	小皿 a	〃	R-002	(9.4)	1.2	(7.2)	○	○
	小皿 a	〃	R-003	(8.6)	1.0	(6.3)	○	×
	小皿 a	〃	R-005	(9.0)	0.9	(7.0)	○	×
	小皿 a	〃	R-006	(9.0)	0.9	(7.6)	○	×
	小皿 a	−	R-007	(9.2)	1.3	(7.0)	−	○
	小皿 a	イト	R-008	(9.4)	1.0	(7.0)	○	○
	小皿 a	〃	R-009	−	0.85+α	(8.0)	○	○
	小皿 a	〃	R-010	(8.6)	0.9	(7.4)	○	○
	小皿 a	〃	R-014	8.3	1.0	6.1	○	○
	小皿 a1	〃	R-021	(8.8)	1.0	(6.3)	○	○
	小皿 a1	〃	R-022	(9.0)	1.2	(7.2)	−	○
	小皿 a1	〃	R-023	8.5	1.0	5.8	○	○
	小皿 a1	〃	R-024	8.2	0.95	6.3	−	○

Tab.3-3　大宰府条坊跡　第 193 次出土遺物計測表

A：内底ナデ　B：板状圧痕

S-220 暗茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-031	(8.1)	1.15	(6.3)	○	○
	小皿 a1	−	R-032	(8.8)	1.2	(7.7)	○	○
	小皿 a1	イト	R-033	7.7	1.2	5.6	○	○
	小皿 a1	〃	R-034	(8.7)	1.25	6.5	○	○
	小皿 a1	〃	R-035	8.2	1.25	6.6	○	○
	小皿 a1	〃	R-036	8.5	1.0	7.3	○	○
	小皿 a1	〃	R-037	9.0	0.9	7.0	○	○
	小皿 a1	〃	R-038	(9.0)	1.05	(6.6)	○	○
	小皿 a1	〃	R-039	9.1	1.1	7.2	○	○
	小皿 a1	〃	R-040	9.0	1.0	6.4	○	○
	小皿 a1	〃	R-041	(8.4)	1.0	(7.4)	○	○
	小皿 c	−	R-042	(9.1)	1.9	6.9	○	−
	坏 a	イト	R-004	(12.4)	2.3	(8.6)	−	−
	坏 a	〃	R-011	−	2.1	−	−	−
	坏 a	〃	R-012	(13.8)	2.25	(8.4)	○	○
	坏 a	〃	R-013	(13.6)	2.2	(7.8)	−	−
	坏 a	〃	R-015	13.0	2.2	7.9	○	×
	坏 a	〃	R-016	(13.2)	2.2	(8.2)	−	○
	坏 a	〃	R-017	(13.4)	2.25	(9.0)	○	○
	坏 a	〃	R-018	13.3	2.15	9.1	○	○
	坏 a	〃	R-025	(12.2)	2.25	(8.6)	○	○
	坏 a	〃	R-026	(13.6)	2.3	(9.1)	○	○
	坏 a	〃	R-027	(12.6)	2.2	(8.6)	○	○
	坏 a	〃	R-028		1.9+α	(8.4)	○	○
	坏 a	〃	R-029	(12.8)	3.2	(9.4)	−	○
	坏 a	〃	R-043	(13.2)	2.25	(9.2)	○	○
	坏 a	イト？	R-044	(12.9)	2.4	(8.7)	−	○

S-221

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(8.9)	0.95	(6.6)	○	○

S-224

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
須恵器	坏	−	R-003	−	1.4+α	−	−	−
土師器	小皿 a	イト	R-002	(8.2)	(1.2)	(5.0)	○	−
	坏 a?	〃	R-001	(9.4)	2.5	(5.2)	○	−

S-224 茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(8.7)	1.15	(6.2)	○	○

S-224 暗茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
須恵器	坏身	−	R-005	−	2.0+α	−	−	−
土師器	小皿 a	ヘラ？	R-001	(9.0)	0.9	(7.6)	○	○
	坏 a	−	R-002	(13.3)	2.4	(8.8)	○	○

S-224 西土層 暗黒茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a	ヘラ	R-001	(13.5)	2.7	(9.0)	○	○

S-224 東土層 明黄灰色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a	−	R-001	11.9	2.6	7.7	○	○

S-225

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	8.4	0.9	6.0	○	○

S-227

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	R-002	(8.4)	1.5	(3.1)	○	○
	小坏 a?	〃	R-001	(10.4)	2.3	(6.4)	○	−
	坏 a	〃	R-003	(13.2)	2.55	(8.0)	○	○
	坏 a	ヘラ	R-004	(13.7)	2.9	8.8	○	○

S-237

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a	イト	R-006	(12.4)	2.45	(8.0)	○	×
	坏 a	〃	R-007	13.2	2.6	9.2	○	○
	坏 a	〃	R-008	12.6	2.7	8.3	○	○
	坏 a	〃	R-009	12.25	2.6	7.1	○	○
	坏 a	〃	R-010	(13.3)	2.05	9.2	○	×
	坏 a	〃	R-011	(14.4)	2.3	(10.4)	○	○
	坏 a	〃	R-012	(13.3)	1.7	(10.0)	○	○

S-238

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	R-001	9.2	1.3	7.15	○	○
	小皿 a	〃	R-002	8.65	1.25	6.6	○	○
	小皿 a	〃	R-003	8.3	0.8	7.0	○	○
	小皿 a	〃	R-004	(8.8)	0.9	7.0	○	○
	小皿 a	〃	R-005	8.65	0.8	7.2	○	○
	小皿 a	〃	R-006	(9.0)	1.0	6.4	○	○
	小皿 a	〃	R-007	8.7	1.0	7.2	○	○
	小皿 a	〃	R-008	8.7	1.1	6.7	○	○
	小皿 a	〃	R-009	9.0	1.2	6.35	○	○
	小皿 a	〃	R-010	9.0	0.95	7.1	○	○
	小皿 a	〃	R-011	9.0	1.0	6.7	○	○
	小皿 a	〃	R-012	8.8	0.9	6.6	○	−
	小皿 a	〃	R-013	(8.8)	0.8	7.1	−	−
	小皿 a	〃	R-014	8.55	1.05	6.2	○	○
	小皿 a	〃	R-015	8.8	0.95	7.2	○	○
	小皿 a	〃	R-016	8.4	1.05	6.7	○	○
	小皿 a	〃	R-017	8.8	1.1	6.6	○	×
	小皿 a	〃	R-018	8.6	1.1	6.9	○	○
	小皿 a	〃	R-019	8.6	1.0	7.0	○	○
	小皿 a	〃	R-020	9.2	1.1	6.9	−	○
	小皿 a	〃	R-021	8.9	1.3	7.0	○	○
	小皿 a	〃	M-001	8.8	1.1	6.6	○	−
	小皿 a	〃	M-002	8.8	1.1	6.4	○	○
	小皿 a	〃	M-003	9.0	1.1	6.8	○	○
	小皿 a	〃	M-004	9.0	1.2	7.0	○	○
	小皿 a	〃	M-005	8.9	1.1	7.3	○	○
	小皿 a	〃	M-006	8.9	1.5	−	−	−
	小皿 a	〃	M-007	9.0	1.1	7.0	○	○
	小皿 a	〃	M-008	8.8	1.0	6.8	○	○
	小皿 a	〃	M-009	8.6	1.1	6.6	○	○
	小皿 a	〃	M-010	8.8	1.0	6.8	○	○
	小皿 a	〃	M-011	8.4	1.0	6.4	○	○
	小皿 a	〃	M-012	8.6	0.9	6.6	○	−
	小皿 a	〃	M-013	9.0	1.1	7.2	○	○
	小皿 a	〃	M-014	9.0	1.2	6.2	○	○
	小皿 a	〃	M-015	9.0	1.15	6.4	○	○
	小皿 a	〃	M-016	8.8	0.9	7.0	○	−
	小皿 a	〃	M-017	8.8	0.9	7.0	○	○
	小皿 a	〃	M-018	8.8	1.0	6.4	○	○
	小皿 a	〃	M-019	9.0	0.9	6.0	○	○
	小皿 a	〃	M-020	9.0	1.2	6.2	○	○
	小皿 a	〃	M-021	8.6	1.0	6.6	○	○
	小皿 a	〃	M-022	9.0	1.2	7.2	○	○
	小皿 a	〃	M-023	8.7	1.1	6.7	○	○
	小皿 a	〃	M-024	8.6	1.2	6.8	○	○
	小皿 a	〃	M-025	8.6	1.1	6.6	○	○
	小皿 a	〃	M-026	8.9	1.2	6.8	○	○
	坏 a	〃	R-023	14.2	2.4	9.45	○	○
	坏 a	〃	R-024	13.3	2.75	8.3	○	○
	坏 a	〃	R-025	13.4	3.3	7.2	−	○
	坏 a	〃	R-026	13.1	3.0	8.25	○	○
	坏 a	〃	R-027	13.6	2.85	9.4	○	○
	坏 a	〃	R-028	13.2	2.55	7.9	○	×
	坏 b	〃	R-022	(13.6)	2.85	(8.6)	○	−

Tab.3-4　大宰府条坊跡　第 193 次出土遺物計測表

A：内底ナデ　B：板状圧痕

S-229

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a	ヘラ？	R-001	(12.3)	2.8	(8.0)	○	○

S-231

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	ヘラ	R-001	(9.9)	1.2	(8.0)	○	−

S-232

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(6.6)	1.1	(4.6)	○	−

S-237

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	R-001	8.7	1.25	6.4	−	○
	小皿 a	〃	R-002	(8.8)	0.9	(7.1)	○	−
	小皿 a	〃	R-003	8.35	1.35	6.5	○	○
	小皿 a	〃	R-004	8.7	1.2	6.4	○	○
	小皿 a	〃	R-005	(8.4)	0.95	(7.0)	○	○

暗灰色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	R-002	(8.8)	1.0	(6.2)	○	○
	小皿 a	〃	R-015	(8.0)	1.2	(6.2)	○	−
	小皿 a1	〃	R-016	(8.2)	1.2	(5.0)	○	−
	小皿 a1	〃	R-017	(8.9)	1.3	(6.7)	○	○
	坏	〃	R-008	−	2.15+α	−	−	−
	坏 a	〃	R-001	12.7	2.3	8.6	○	○
	坏 a	〃	R-014	(10.9)	2.65	(7.8)	○	○
	坏 a	〃	R-018	(12.5)	2.5	(7.6)	○	○
	坏 c× 椀 c	−	R-019	−	1.9+α	(10.8)	○	−

明黄灰色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-002	(8.8)	1.3	7.2	○	○
黒色土器 B 類	椀 c	−	R-003	−	1.3+α	(7.6)	−	−

茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
須恵器	坏蓋	−	R-002	−	1.6+α	−	−	−
	坏蓋 a	−	R-014	−	1.0+α	−	−	−
土師器	小皿 a	イト	R-001	8.0	1.2	6.1	○	○
	小皿 a	〃	R-021	8.6	1.0	6.0	○	○
	小皿 a	〃	R-022	8.6	1.0	6.2	−	○
	小皿 a	〃	R-023	(8.3)	0.9	(6.1)	○	○
	坏 a	〃	R-011	(13.2)	2.9	(8.6)	○	○
	坏 a	〃	R-012	(12.2)	2.5	(8.4)	○	○
	坏 a	〃	R-013	12.0	2.6	8.6	−	−
	坏 a	〃	R-029	(11.6)	2.3	(8.4)	○	−
	坏 b	〃	R-010	−	1.95+α	5.8	×	−
瓦器	椀 c	−	R-020	−	1.2+α	(7.2)	−	−

表土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
黒色土器 B 類	椀	−	R-001	−	1.7+α	−	−	−

Fig.48　第 210 次調査　遺構図（1/250）

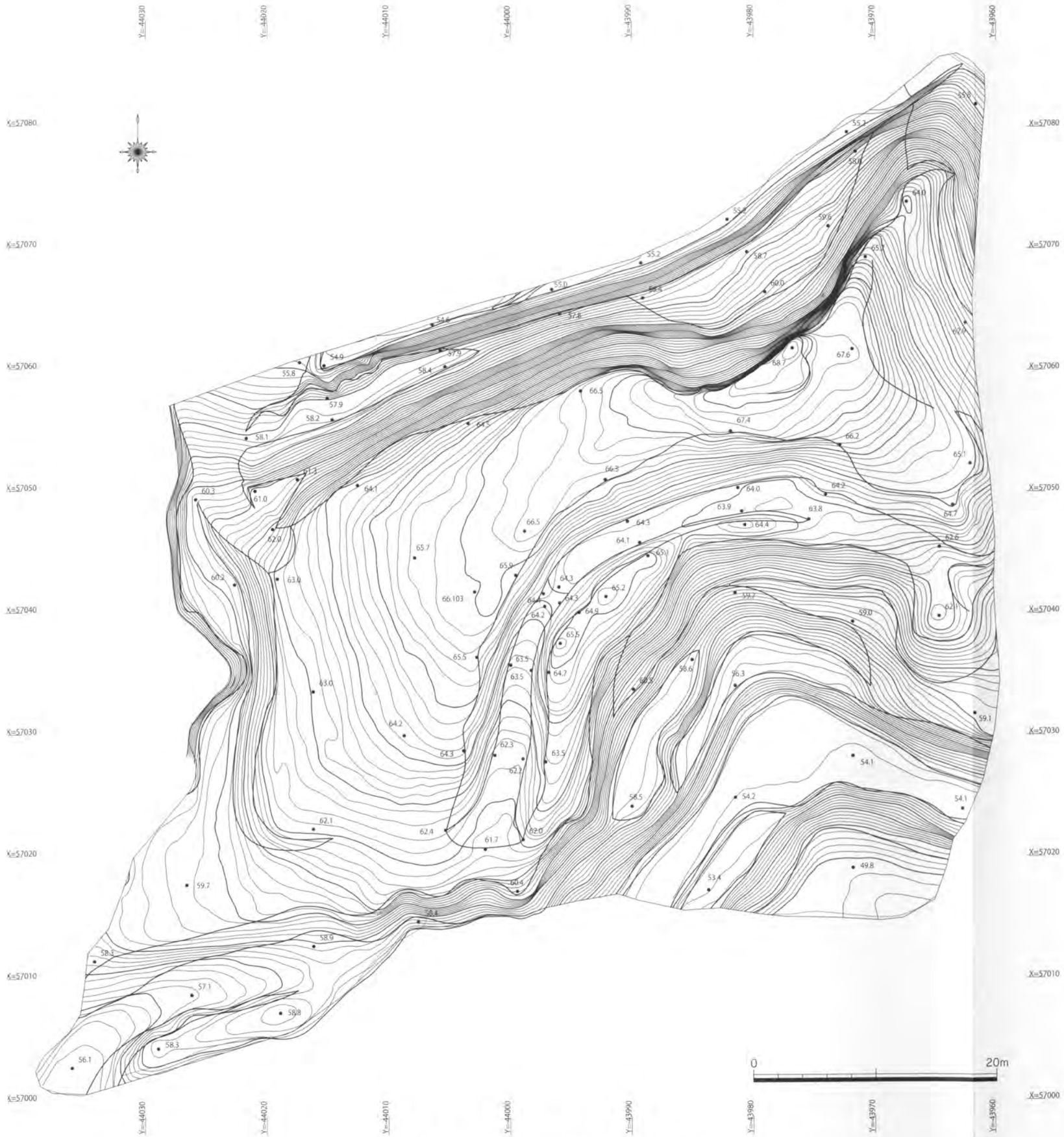


Fig.49　第 210 次調査　調査前地形図（1/350）

2. 大宰府条坊跡第 210 次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は、太宰府市観世音寺 5 丁目 870、867-1 外に所在する。立地は、四王寺山から南に派生し突出した丘陵の突端にあたる。丘陵の先端からは東西方向に尾根が短く続く。北側の四王寺山方向へは、馬ノ背状に丘陵が存在していたと推定できるが、調査以前に大規模に土取りをされており、丘陵を切りとおして確保した平坦面には、花関酒造という会社の建物があり、調査直前まで営業をしていた。この建物には、東の御所ノ内から白川へ向かう南北道路から、西方向の斜面をあがる急な坂道が接続していた。当該地において、丘陵を掘削して団地を造営したいという申し出があった。遺構の有無を確認するために、平成 11 年 12 月（1999）に確認調査を狭川真一が行った。調査結果として花関酒造の跡地は完全に丘陵のカット面で遺構が存在しないことと、南側に残存していた丘陵部では、丘陵を切った堀切のようなものと丘陵頂部に墓の存在を確認した。そのため工事が行われる前に埋蔵文化財の発掘調査を行うことになった。開発対象面積は 10,324 ㎡、調査面積は 3,793 ㎡。調査期間は平成 12 年（2000）4 月 17 日から平成 13 年（2001）3 月 9 日。調査は髙橋学が担当した。

(2) 基本層位

調査地は丘陵のため堆積層自体は薄く、表面に表土（腐葉土）が全面に 0.3m ほど堆積していた。この表土を除去すると、調査区全面に茶色土が 0.2m ほどの厚さで展開しており、これを遺構検出土として設定した。この茶色土を除去すると遺構が検出される。

調査地を便宜的に地形から大きく 3 つの地区に分けた。1 つは丘陵の尾根の部分。ここには尾根を切りとおした堀が平面逆 U 字型に尾根に沿って掘られている。また、丘陵の頂部には高まりがあり、ここに墓が構築されていた。2 つ目は尾根からやや下がった西側の平坦面。ここには溝や墓。そして、1 つ目と同じく東西方向の堀が掘られている。3 つ目は丘陵から南側に降りたところにある谷部である。ここには土坑が集中していた。

また、花関酒造の建物があった尾根掘削地帯を越えた北側の丘陵斜面にトレンチを a ～ f の 8 箇所入れて確認調査をした。現況地形としては北から南、そして東から西へ傾斜しているが、トレンチ調査によって旧来の地層堆積の変遷を追った。

(3) 検出遺構

溝

210SD005（Fig.58）

調査区北部中央に位置する南北方向の溝。210ST010 の東側に位置し、この墓に伴うものと考えている。幅 1.5m、長さ 5.3m、深さ 1.1m を測る。埋土観察では西側の墓の高まりから土砂が流入しているのが確認された。出土遺物から 12 世紀に埋没した可能性が考えられる。

210SD039（Fig.50）

調査区西部中央部に位置する溝。北から南方向へ下がった後、西へ折れ曲がった平面プランを呈す。長軸長 5m、短軸長 4m、溝の幅は 0.3 ～ 1.2m、深さは 0.02 ～ 0.08m。溝の深さが極端に浅いため削平された可能性が考えられる。埋土は茶褐色土で花崗岩の風化土を大量に含む。西側に近接した

210ST040 の墓を取り囲むようにこの溝は展開していることから、丘陵の上部からの雨水が墓にかかるのを防ぐため掘られた排水用の溝と考えている。遺物が出土していないため、時期は不明だが、遺構の立地から 210ST040 と同一時期に掘削されたものと考えておく。

210SD045 (Fig.50)

調査区西部西側に位置する溝。長軸長 17m、幅 0.3 ～ 1m、深さ 0.1 ～ 0.8m を測る。中ほどでやや西に振ってまた東へ戻っている。周辺の中世墓を壊して構築されている。検出した溝の中央付近の土層断面図をみると、東側、つまり丘陵側に板状のものを数回にわかって差し込んでいるような土層が確認されている。これが何を示すのかは現状では判断できないが、土留めの板だったとも推測される。出土遺物から 12 世紀前半以降に埋没したことが考えられる。

土坑

210SK003 (Fig.51)

調査区北部東側に位置する土坑。平面プランは隅丸長方形。210SX001 の埋土を除去後の床面検出段階で検出された。長軸長 1.1m、短軸長 0.55m、深さ 0.8m。210SX001 の北側掘方を垂直に掘り下げてＬ字型にしている。遺物は検出されていない。

210SK004 (Fig.51)

調査区北部東側に位置する土坑。平面プランは隅丸長方形。210SK004 の南側に隣接する。210SK003 と同様に、210SX001 の床面で検出されている。長軸長 1.9m、短軸長 0.75m、深さ 0.75m。土層は水平堆積。SK003 と SK004 は近接しており、配置からは逆Ｔの字型であることがわかる。相互に関係する遺構である可能性も考えておきたい。

210SK006 (Fig.51)

調査区北部東側に位置する土坑。210SX001 の埋土を除去後の床面検出段階で検出された。長軸長 1.5m、短軸長 0.6m、深さ 0.65m。平面プランは隅丸長方形。平面検出時は掘立柱建物の柱痕と想定したが、断面断ち割りをして土層を確認すると、柱痕ではない浅い窪み堆積だと判断した。出土遺物から 12 世紀前半以降に埋没したものと考えられる。

210SK007 (Fig.51)

調査区北部東側に位置する土坑。210SK006 の南東方向へ 2.1m 離れた箇所に位置する。SK006 と同様、210SX001 の埋土を除去した床面から検出された。平面プランは隅丸方形。長軸長 1.8m、短軸長 0.5m、深さ 0.8m。

210SK013 (Fig.51)

調査区南部東側に位置する土坑。長軸長 1.6m、短軸長 1m、深さ 1.6m。北側の斜面側を切り込んで、南側に開放される。底面は平坦だが中央にわずかに窪みがある。土層は水平堆積後に表面を上部から流れた土で覆われている。

210SK020 (Fig.52)

調査区南部中央に位置する土坑。長軸長 3.5m、短軸長 3 m、深さ 0.5m。谷部中央の谷筋に沿っている。北に 1.3m ほど掘方が延びるが、平面は楕円形のプランを呈す。堆積土層中位、特に赤茶色土層に礫と炭が多量に交じっていた。礫は谷筋に沿って配置していることからも何らかの意図を持って並べられている可能性が高い。炭が混じった層が礫の上層にあたるため、礫の上で何かを焼いてそのまま炭ごと埋め戻している可能性が考えられる。出土遺物は古墳時代の須恵器から、8 世紀代の須恵器蓋、9 世紀代の黒色土器Ａ類椀等、時期差がある遺物が出土しているが、谷筋の遺構のため周辺からの遺物混入が多

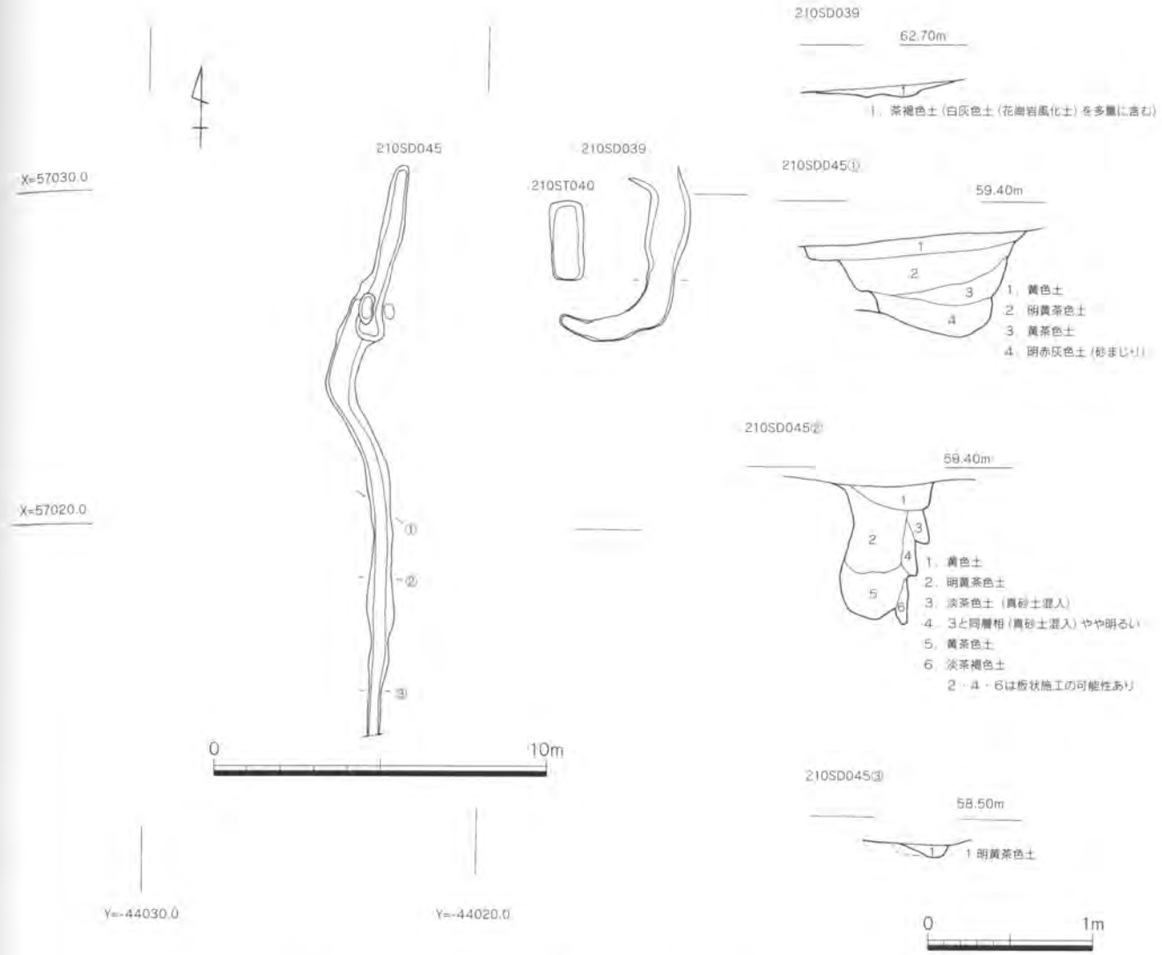


Fig.50　210SD039、045 遺構図（1/200、土層図は 1/40）

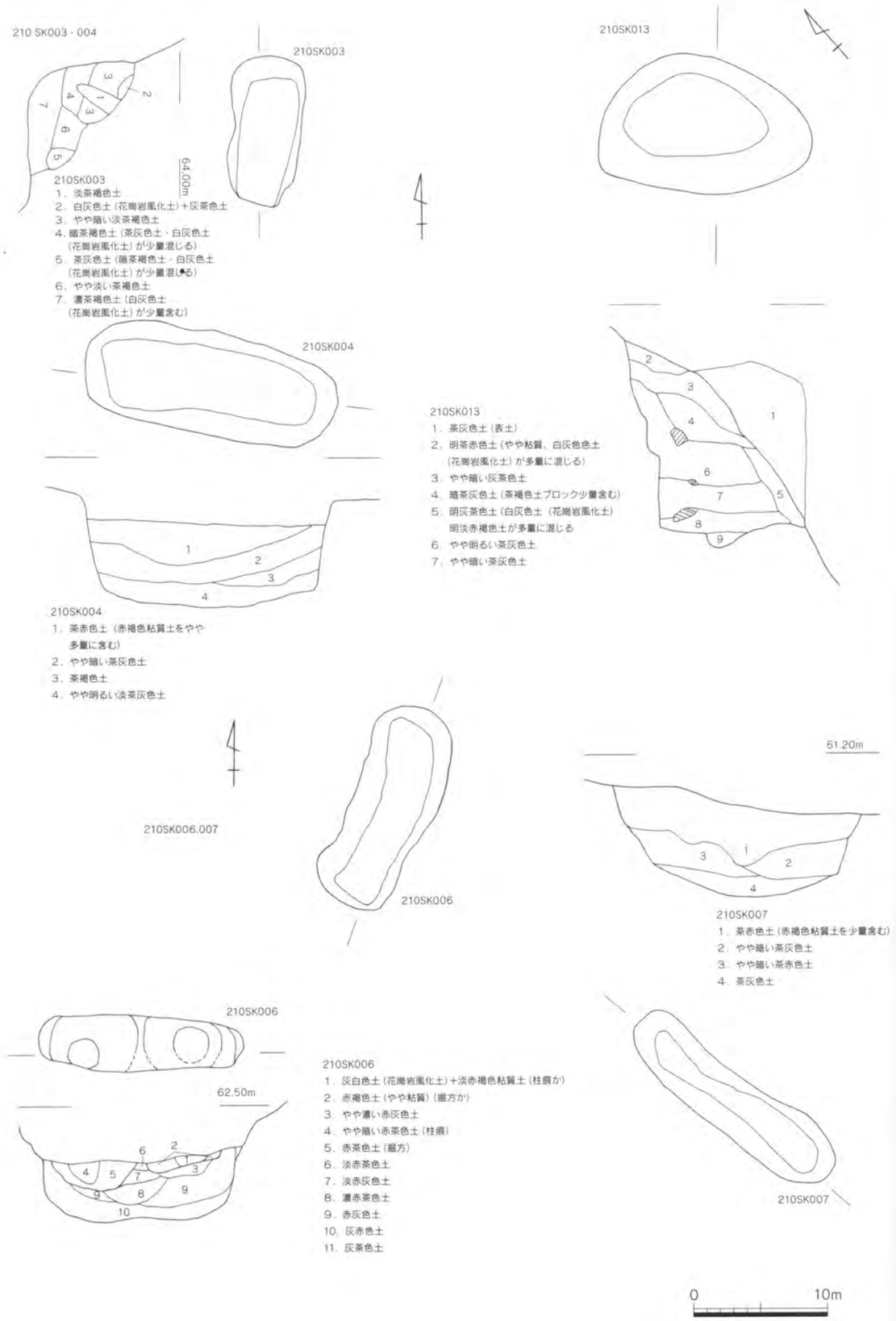


Fig.51　210SK003・004・006・007・013 遺構図（1/40）

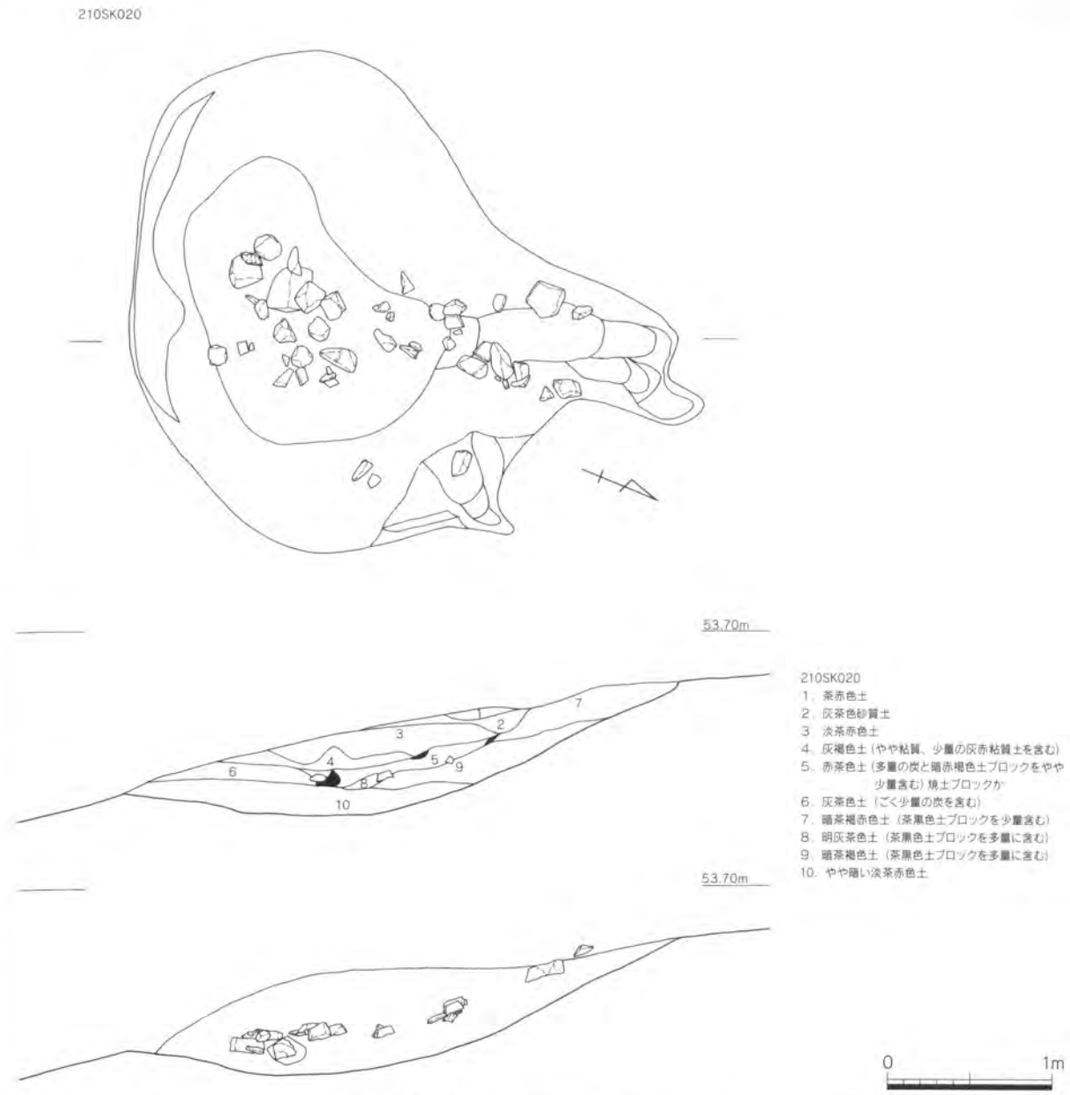


Fig.52　210SK020 遺構図（1/40）

かったと考えられる。出土遺物の下限は粉青細器の椀と考えられるため、埋没の下限は 14 ～ 15 世紀と推測しておく。

210SK022（Fig.53）

調査区北部中央に位置する土坑。210SX001 の埋土を除去後の床面検出段階で検出された。長軸長 2m× 短軸長 2m、深さ 1.1m。楕円形の平面プランを呈す。土坑内の北西部に、長軸長 1.1m、短軸長 0.7m、深さ 0.7m の平面プランが方形の土坑が切り合っていた。その土坑内は水平堆積しており、埋め戻し行為と考えている。その土坑の東側には 0.2m 四方の方形の切り込みがあり、深さ 0.1m と非常に浅い単一土層で埋まった穴がある。東西方向の土層を観察すると、切り合いの土坑以外の埋土は土層をみると細かく分けて埋めてあり、きちんと埋め戻して突き固めている。

210SK023（Fig.53）

調査区北部中央に位置する土坑。210SX001 の掘方に切り込んでいる。長軸長 1.2m、短軸長 0.8m、

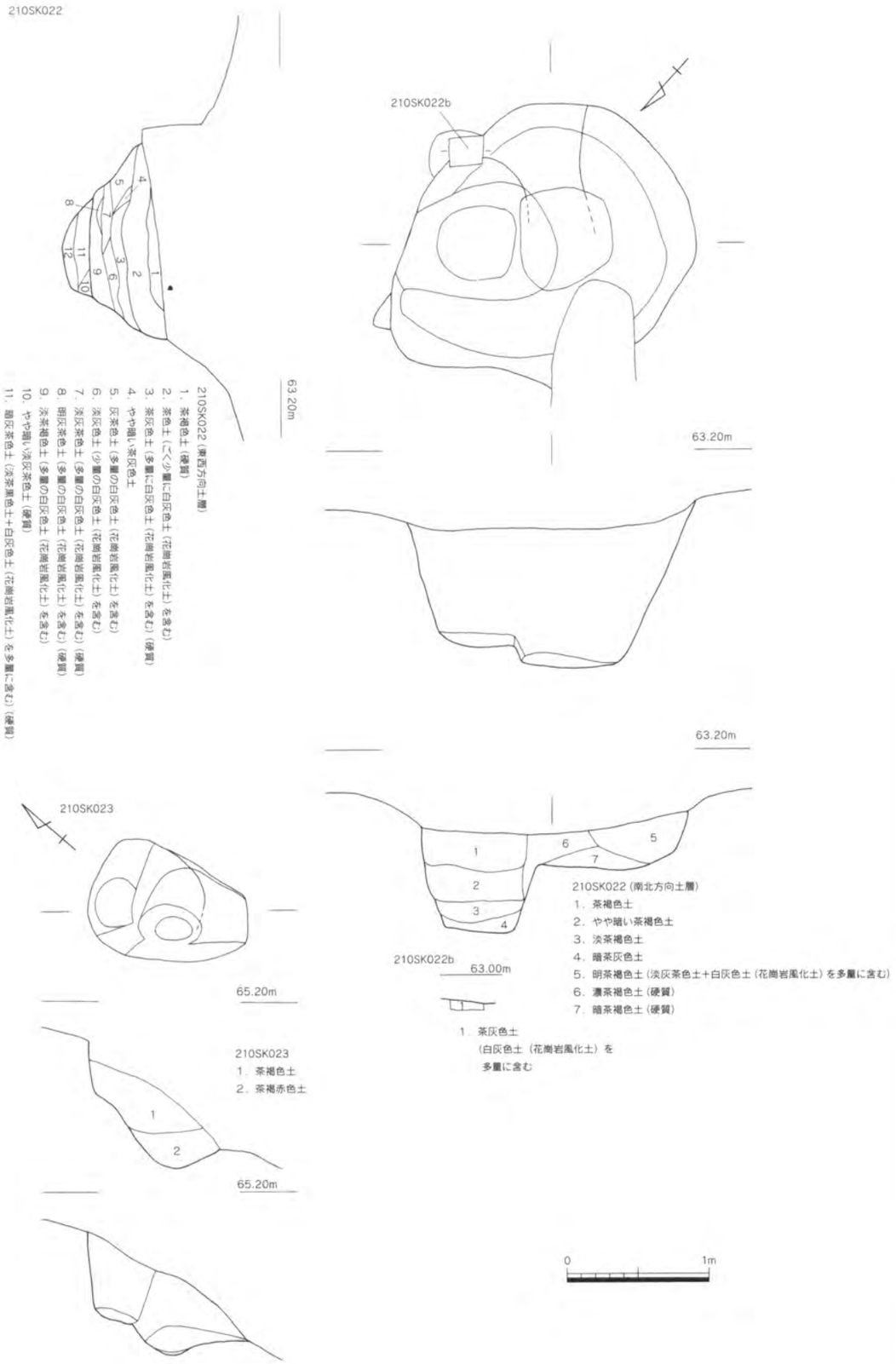


Fig.53　210SK022・023 遺構図（1/40）

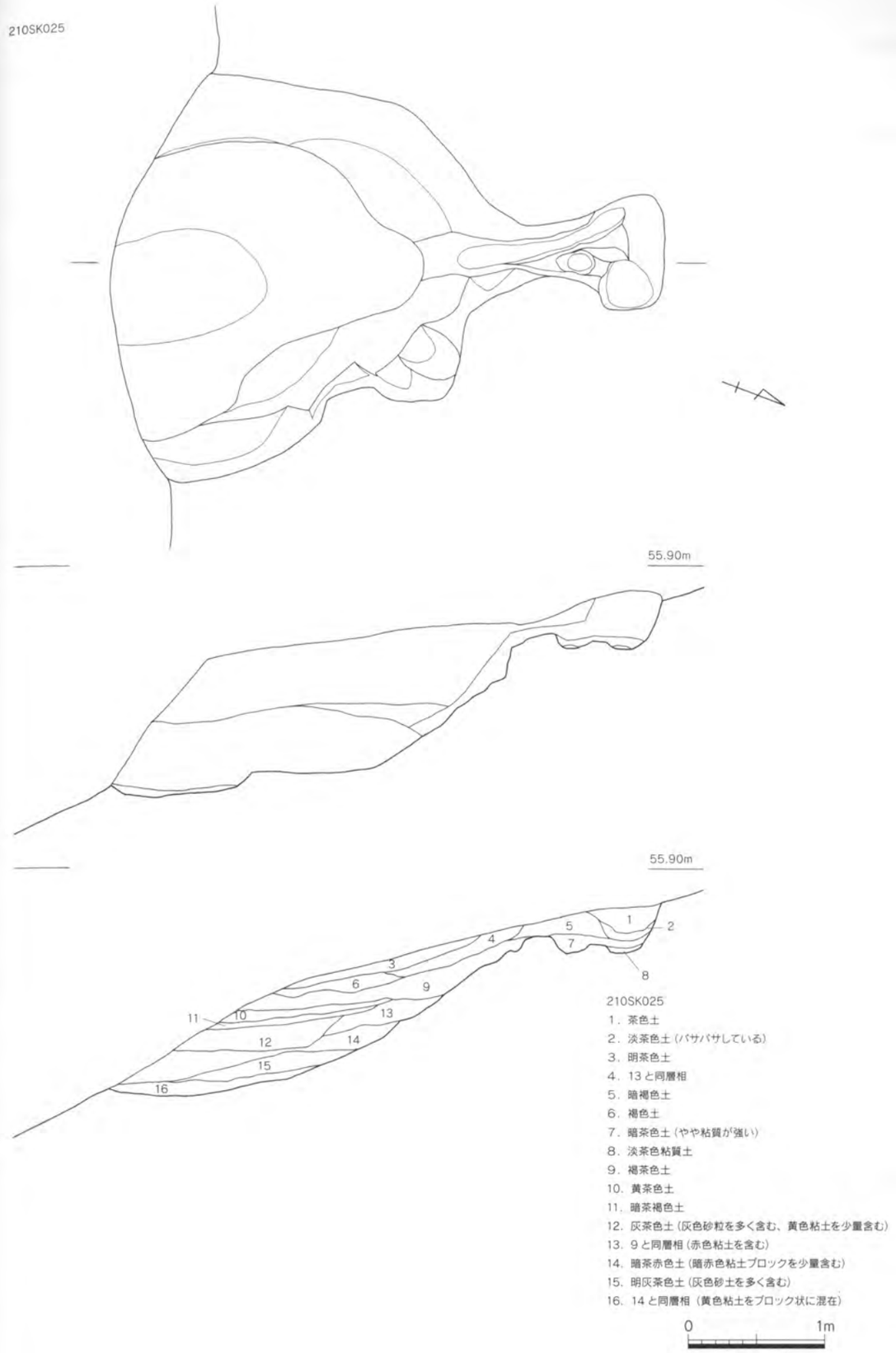


Fig.54　210SK025 遺構図（1/40）

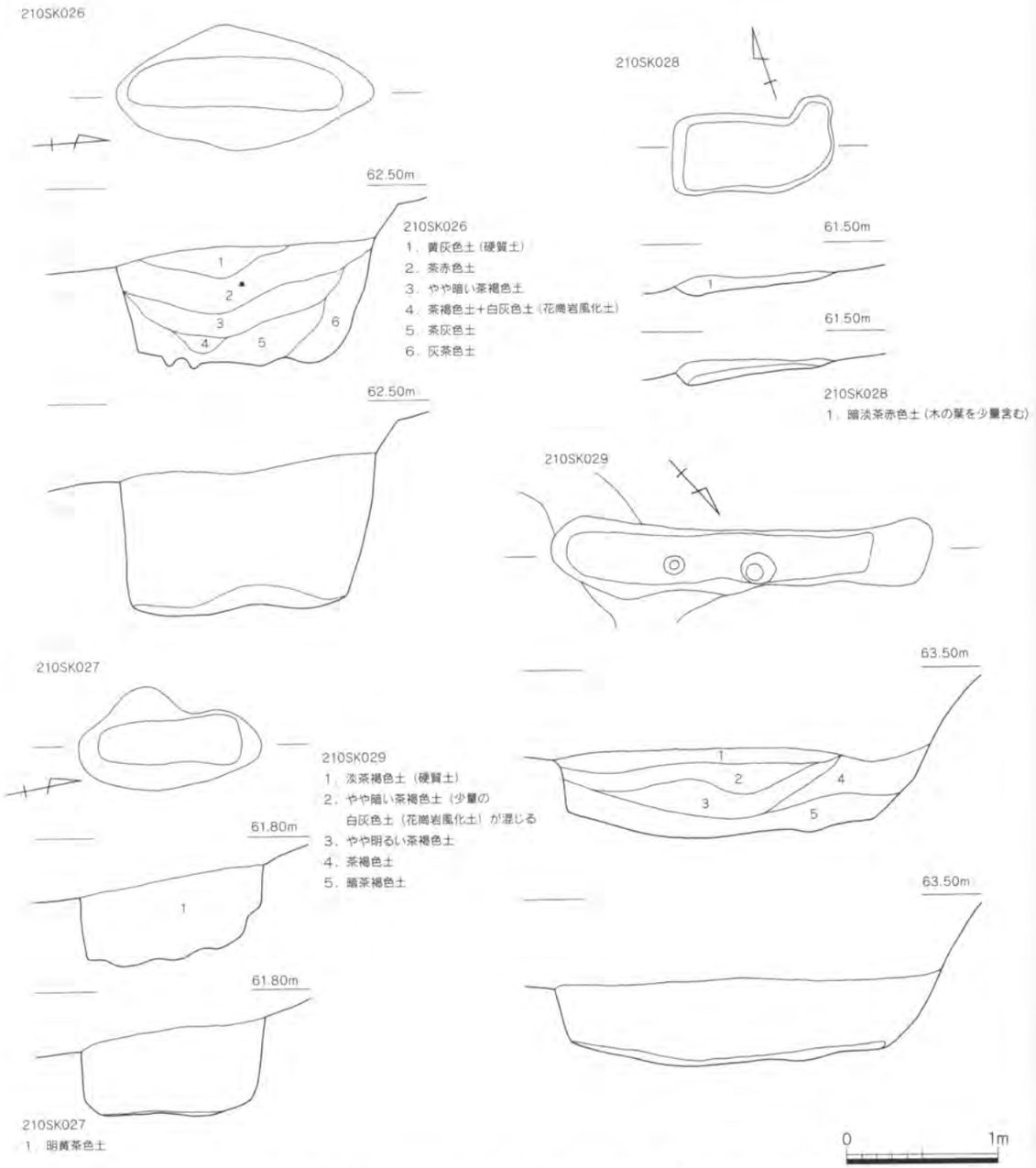


Fig.55　210SK026・027・028・029 遺構図（1/40）

深さ 1.05m を測る。北側の斜面側を掘り窪めて南側は開放している。

210SK025（Fig.54）

調査区南部中央に位置する土坑。谷堆積の一部とも考えられる。平面プランは、半円形で東西長 5.5m、南北長 2.3m、深さ 0.20m を測る。出土遺物が少なく埋没次期は明確ではないが、少なくとも古代以降に埋没したと考えられる。

210SK026（Fig.55）

調査区北部西側に位置する土坑。210SX001 の床面から検出された。平面プランは楕円形。長軸長 1.7m、短軸長 0.95m、深さ 0.95m を測る。遺物としては土製品の土壁が出土している。

210SK027（Fig.55）

調査区北部西側に位置する土坑。210SX001 の床面から検出された。平面プランは楕円形。長軸長 1.2m、短軸長 0.68m、深さ 0.63m を測る。埋土は明黄茶色土。遺物は土師器の破片が出土している。

210SK028（Fig.55）

調査区北部西側に位置する土坑。210SX001 の床面から検出された。平面プランは隅丸方形だが東側は不整形。長軸長 1.05m、短軸長 0.6m、深さ 0.16m を測る。埋土は暗淡茶赤色土で、木の葉を少量含む。遺物は検出されていない。

210SK029（Fig.55）

調査区北部中央に位置する土坑。210SX001 の床面から検出された。210SK022 を切る。平面プランは長方形。長軸長 2.5m、短軸長 0.45m、深さ 0.55m を測る。底面に小穴状の窪みが 2 つ検出されている。遺物は検出されていない。

210SK032（Fig.56）

調査区西部中央に位置する土坑。平面プランは隅丸方形。南北長 1.6m、東西長 1.65m、深さ 1.22m を測る。掘り方は二段になっており、下のプランは東西方向に長い楕円形を呈す。土層は、最下層に 40cm ほど、茶灰色土が溜まった後に自然堆積をしている。遺物は出土していない。

210SK033（Fig.56）

調査区北部西側に位置する土坑。平面プランは方形。南北長 1.45cm、東西長 1.7m、深さ 0.30m を測る。土層の堆積は、中央部に南北長 0.5m、東西長 0.3m の楕円形の円形たまりがあった。土色は淡茶黄色土で堅くしまっていた。土層断面で確認したが柱穴ではないと思われる。遺物は出土していない。

210SK034（Fig.56）

調査区西部北側に位置する土坑。平面形は楕円形。南北長 1.8cm、東西長 1.13m、深さ 0.4m を測る。遺物は出土していない。

210SK036（Fig.56）

調査区西部中央に位置する土坑。平面プランは方形。南北長 2.25m、東西長 2.30m、深さ 1.59m を測る。遺物として、黒曜石のフレークが 1 点出土している。

210SK037（Fig.57）

調査区西部中央に位置する土坑。平面プランは東西方向に細長い溝状。南北長 0.75m、東西長 2.45m、深さ 0.73m を測る。

210SK038（Fig.57）

調査区西部中央に位置する土坑。平面プランは楕円形。南北長 2.3m、東西長 1.5m、深さ 0.62m を測る。出土遺物は土師器の破片、平瓦等である。

210SK041（Fig.57）

調査区西部南側に位置する土坑。210SX035 の底面から検出された。平面プランは南北に長い溝状。210SK042 と切り合いがあり、切っている。210SX035 の底面から立ち上がりにかけて掘られており、210SX035 とは直交している。南北長 2.3m、東西長 0.87m、深さ 0.5m を測る。遺物は出土していない。

210SK042（Fig.57）

調査区西部南側に位置する土坑。210SX035 の底面から検出された。平面プランは長方形。南北長 0.95m、東西長 0.75m、深さ 0.70m を測る。埋土は上下 2 層に大別でき、下層は砂質土傾向にある。

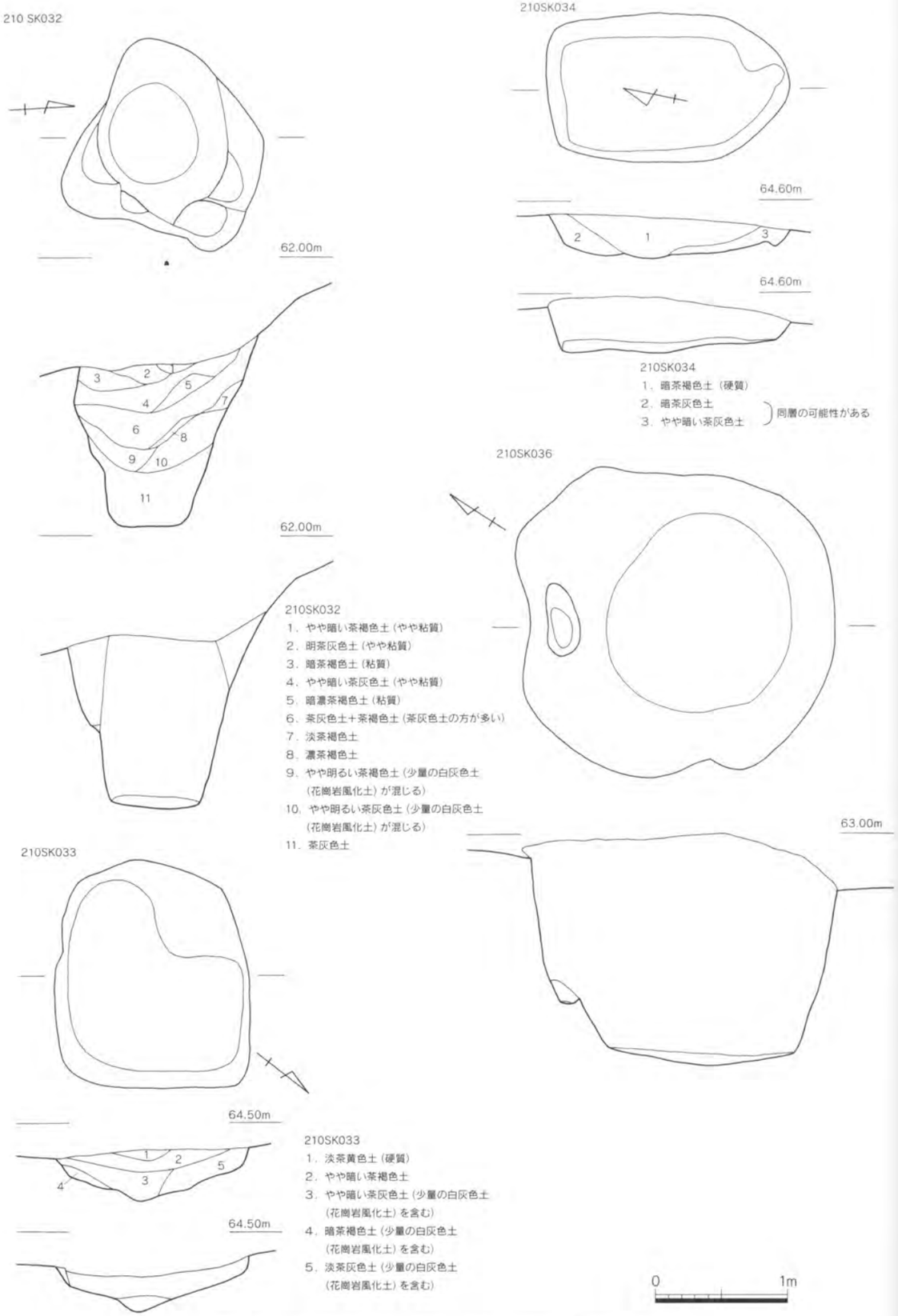


Fig.56　210SK032・033・034・036 遺構図（1/40）

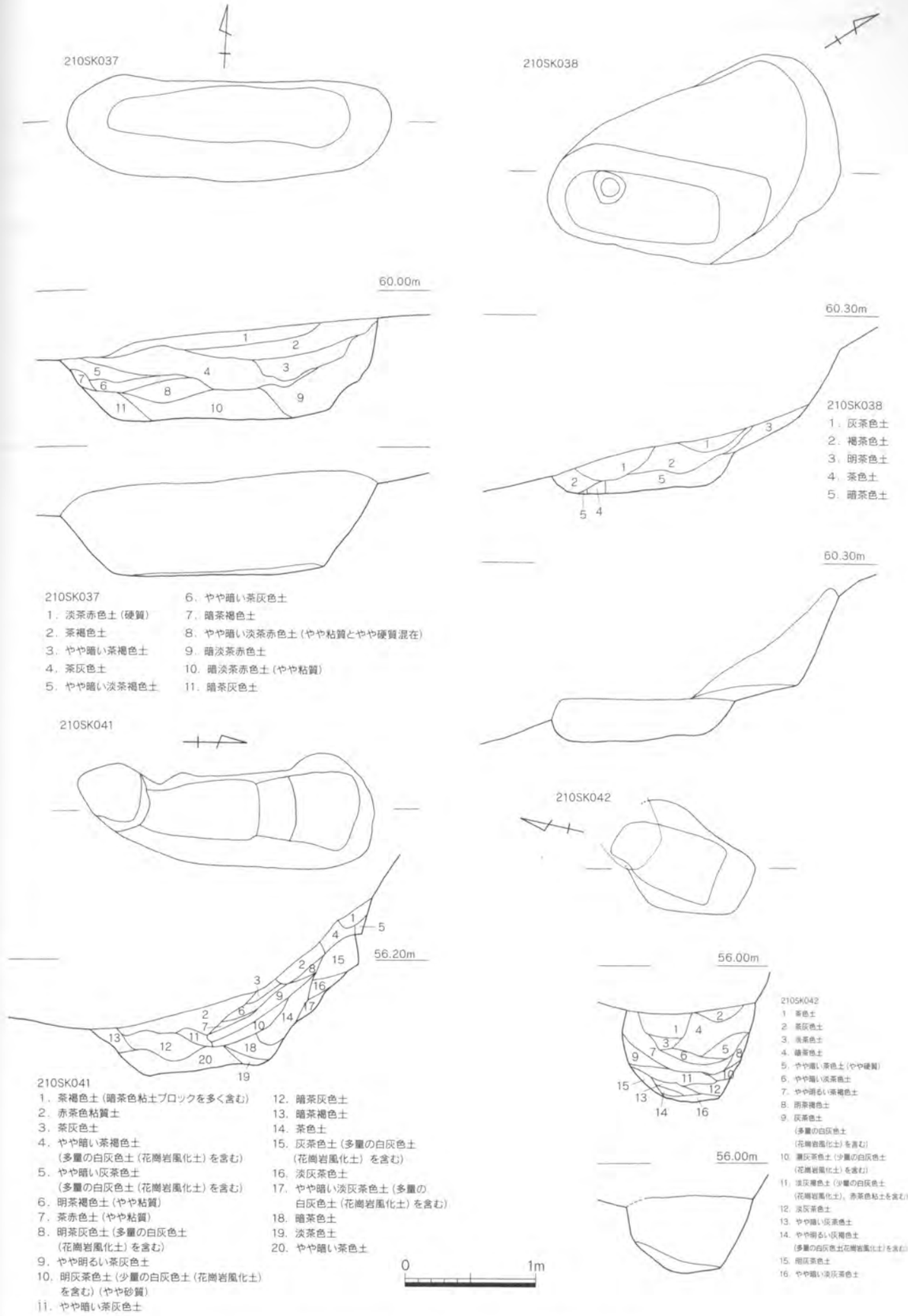


Fig.57　210SK037・038・041・042 遺構図（1/40）

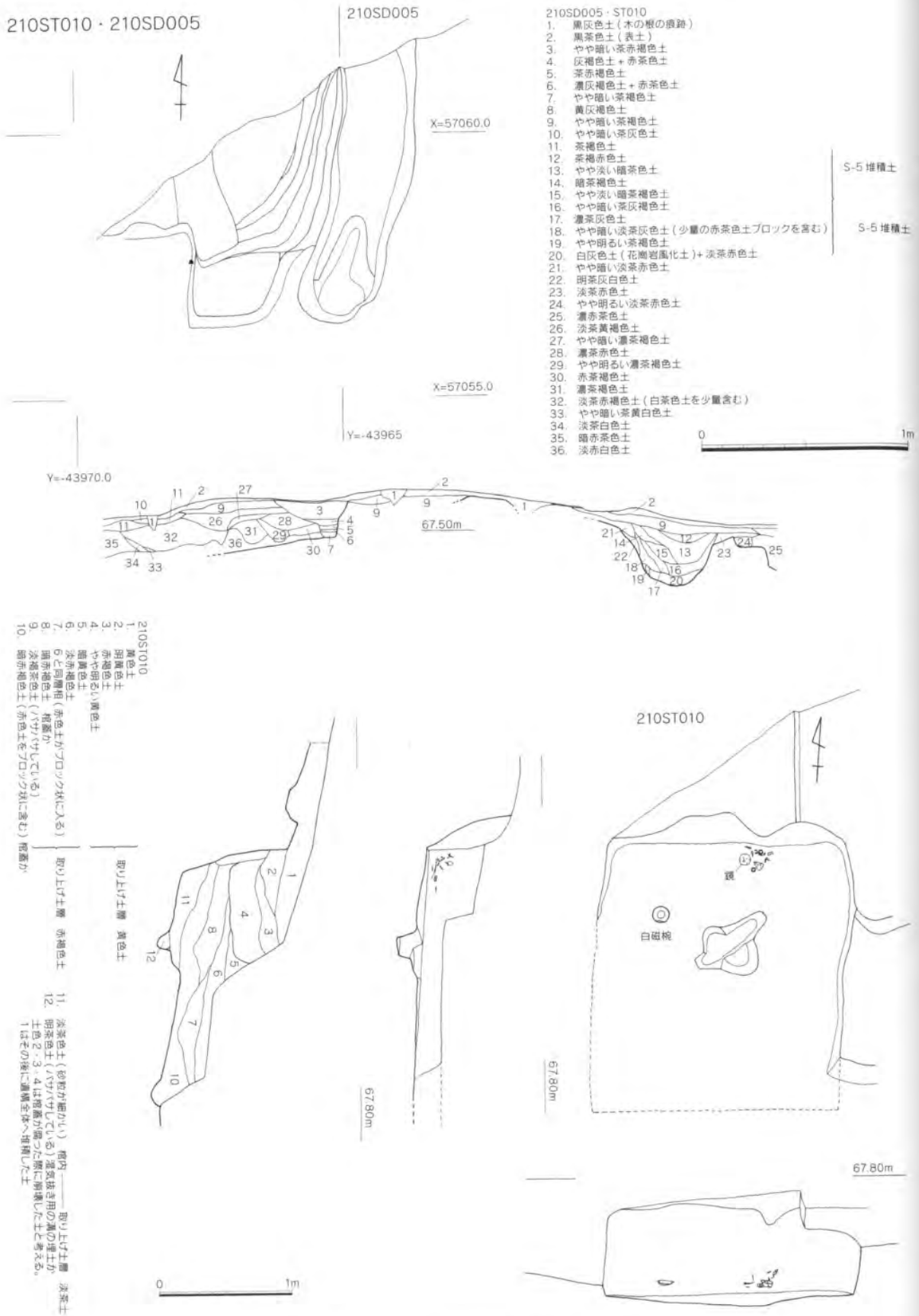


Fig.58　210SD005・ST010 遺構図（1/50、1/40）

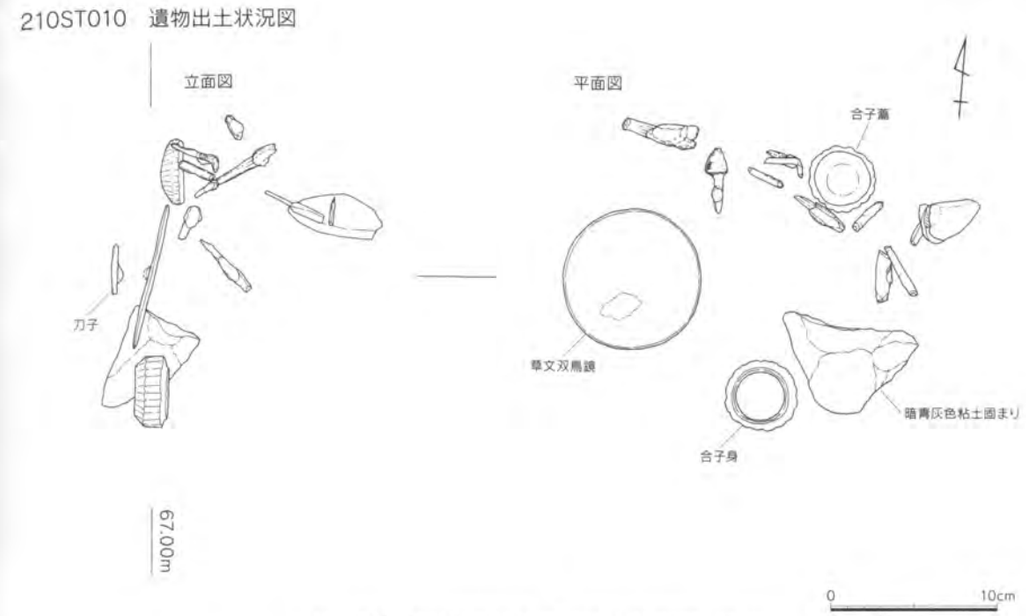


Fig.59　210ST010 遺物出土状況図（1/4）

遺物は出土していない。

墓

210ST010（Fig.58、59、60）

調査区北部やや東によった頂部で検出された墓。墓壙が検出された高まりは、調査以前に北部は酒造工場の建築のために掘削されており、当初の姿は不明である。旧地形図をみると、四王寺山方向から延びてきた丘陵の突端にあたると考えられる。また、発掘調査のための確認（試掘）調査により西半分は掘削されており、全容の把握が難しくなっている。現状では東西長 4m、南北長 4m、高さ 0.65m の高まりが確認された。東側には 210SD005 とした溝が南北方向に巡っている。これは、この墓に伴うものと考えている。墓壙のプランとして確認されたのは、東西長 1.7m、南北長 1.85m、深さ 0.67m である。ただし、南側、西側については削平されており、平面プランは不明である。北東部の隅と他の辺の比率からいって、方形もしくは正方形に近いものであった可能性がある。210SX012 とした遺構に切られているが、この遺構は墓の可能性があり、丘陵端部で墓が切り合っていた可能性が残る。

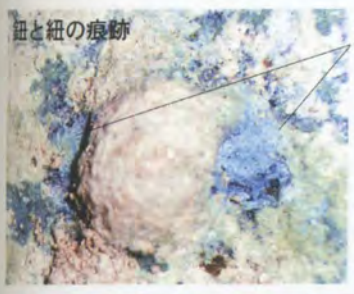
墓壙内の北西部に白磁の皿が、北部端中央にはまとまって鏡、刀子、鉄釘、和鋏、青白磁の合子が検出された。鏡は紐を下にしており、鏡面に織った布と思われる付着物があるため、鏡は布に包まれていたことが想定できる。鉄釘はこの鏡周辺にしか検出されていない。南北方向の土層を立ち割って確認したが、棺が据えられた痕跡は検出されてなかった。これらのことから、この墓は直葬であり、副葬品を納める釘をつかった小さな箱状のものがあった可能性がある。出土遺物から遺構の年代は 12 世紀代と考えている。

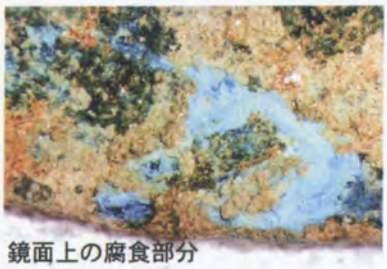
210ST030（Fig.61）

調査区西部で検出された石組み墓の一群。南北長 5.5m、東西長 1.7m。南より、a、b、c、d と 4 つの個別の墓に分かれる。それぞれの墓には、緑色片岩の自然石を葺いている。この緑色片岩を除去すると、個別の墓のプランが明確になった。またそれぞれの埋土からは焼骨の破片が確認されている。こ

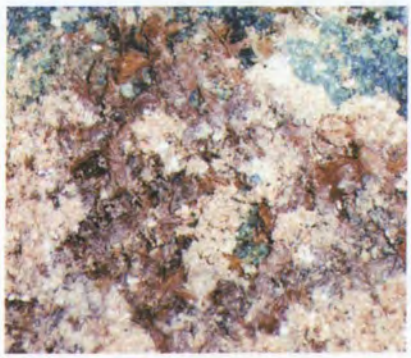
条210次

S-10 淡茶土 20000801（処理前）

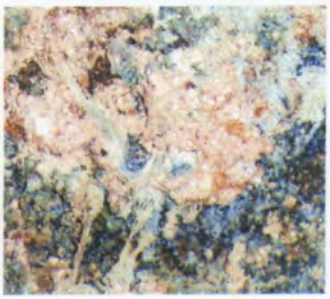


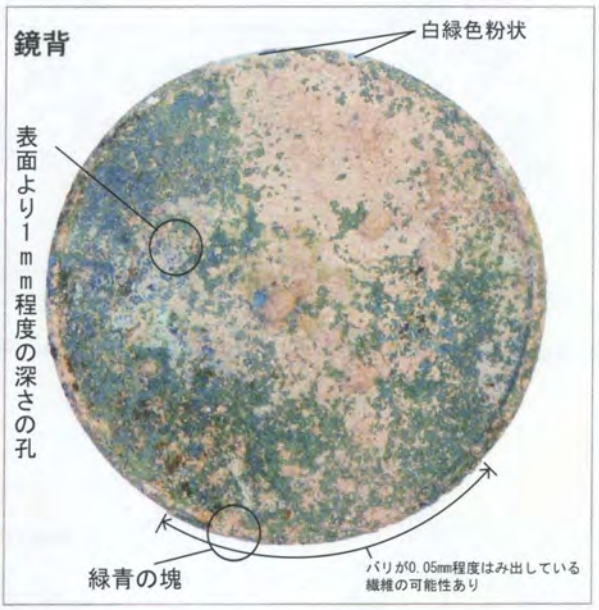


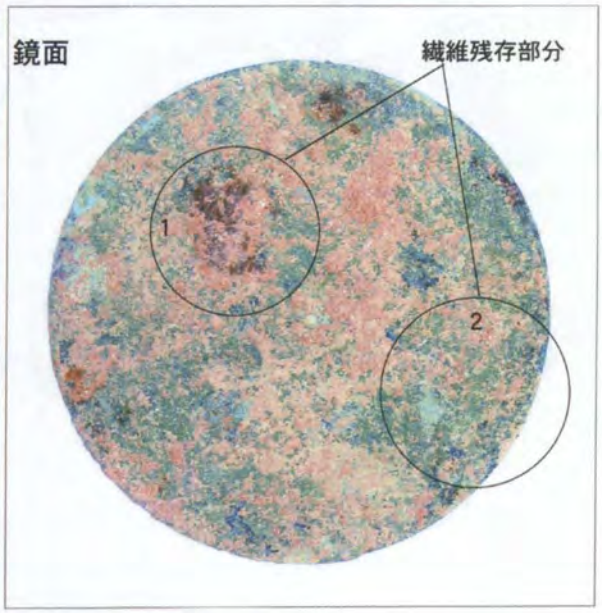
1
繊維が最も良く
残る部分



2
繊維の残欠が散
在する部分







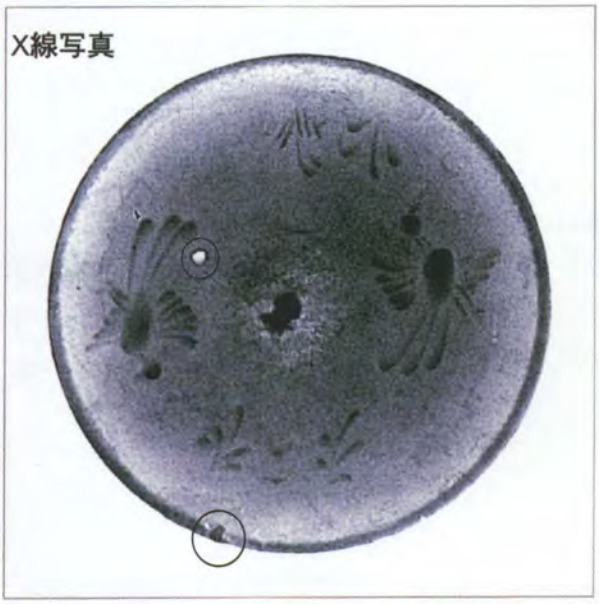


Fig.60　210ST010 出土鏡保存処理前状況

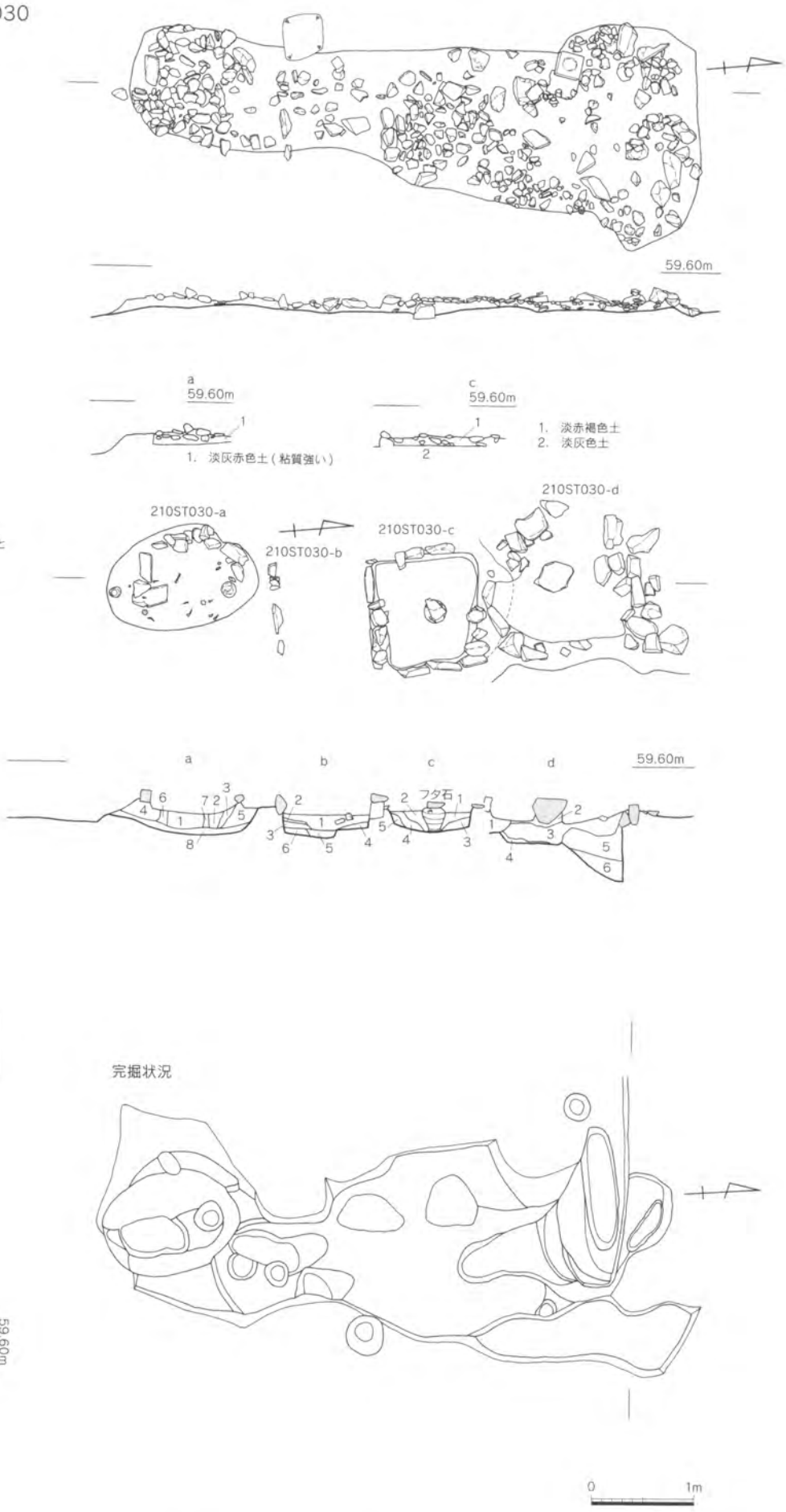
210ST030

210ST030a
1. 明赤褐色土（粘質が強い）
2. 赤褐色粘質土
3. 暗灰褐色土
4. 1と同層相
5. 1と同層相
6. 茶黒色土（炭まじり）
7. 6と同層相
8. 暗黒色土（木灰）

210ST030b
1. 明茶色土
2. 黄灰色土
3. 茶褐色土（粘質強い）
4. 3と同層相（黄色土を含む）
5. 赤褐色粘土
6. 淡赤褐色土

210ST030c
1. 淡黄灰色土
2. 茶色土
3. 赤茶色土
4. 灰茶色土（地山真砂土まじり）
5. 灰茶色土

210ST030d
1. 黄灰色土（S-30cの掘方埋土）
2. 淡黄色土（やや粘質が強い）
3. 茶黄色土（粘質が強い）
4. 茶灰色土
5. 明赤褐色土（真砂土まじり）石組みの石と共通の花崗岩が2点落ちこんでいる
6. 淡赤褐色土（灰色系の砂を含む）



210ST030 土層図
1. 黄茶色土
2. 明赤褐色土
3. 黄褐色土
4. 赤褐色土
5. 淡黄灰色土（パサパサしている）
6. 淡赤褐色土（砂っぽい）
7. 褐赤色土（粘質が強い）
8. 暗赤褐色土

59.60m

Fig.61　210ST030 遺構図（1/60）

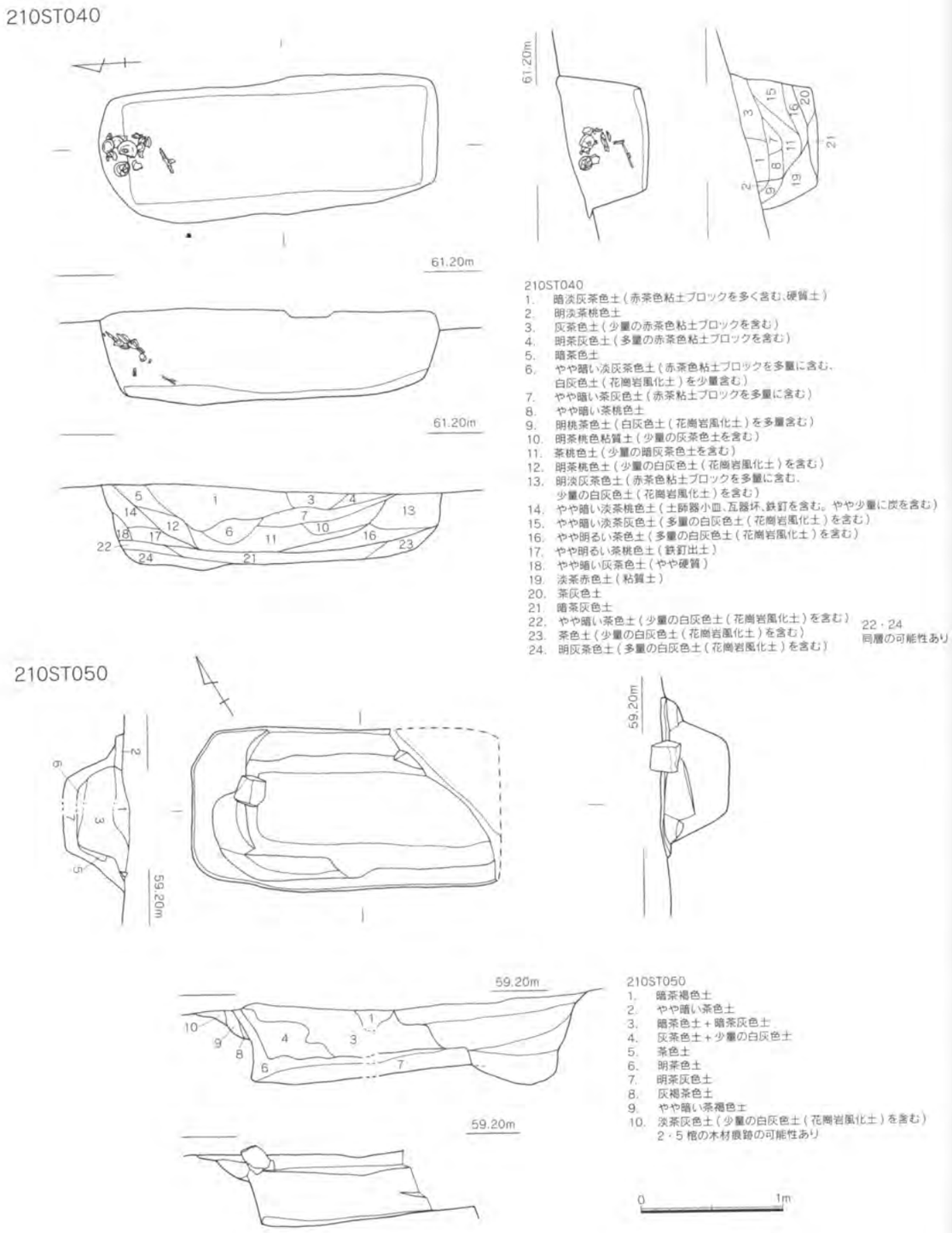


Fig.62　210ST040・050 遺構図（1/40）

の遺構周辺には軒丸瓦や平瓦が点在している。

a.　a の平面プランは楕円形で、南北長 1.5m、東西長 1.0cm、深さ 0.53m を計る。土坑の底に 0.25×0.35m×0.10m 程度の平たい石があり、その上面に 3cm ばかりの炭層が広がっていた。炭層の上面に釘や土師器皿が点在しており、周辺を囲むように石が配置されている。土師器皿は南に 2 枚、北に 2～3 枚の重なりが確認できた。床面の底石を木棺安定用の石と仮定すれば、釘が打たれた木棺を野焼きして、その後に土をかけて盛り土した後、石を配して区画した墓と考えられる。

b.　b は a の北側に位置している。A との境界に東西方向の石列が確認された。c との区画の間を占有すると思われるが、東西方向の石列がなく東西の長さは不明。南北長は 1.0m、深さは石列の頂部から 0.4m を計る。

c.　平面の形は、方形で南北長 1.1m、東西長 1.2m、深さ 0.43m を測る。地山を 0.25m ほど掘り窪めた後に、中央部に白磁の四耳壺を据える。この四耳壺は口を上にして正立させている。四耳壺の口縁部は打ち欠いており、検出時には口をふさぐように平坦な石で蓋をしていた。四耳壺の中には火葬された骨が詰まっていた。火葬骨は打ち欠いた口から 10cm 程度下まで堆積しており、中央が盛り上がって端に行くにしたがって空間が空いていた。この四耳壺内から火葬骨以外は出土していない。
遺構の時期は骨蔵器に転用された白磁四耳壺が 12 世紀代のため、それ以降と考えられる。

d.　c の北に位置する。土層断面観察によれば、c のほうが切り合い的に勝っている。平面は石によって囲まれた方形となっている。中央部に上面が平らな石が配されているが、周辺に焼土などはない。緑色片岩で葺かれた状態で、平坦な石に載せていたのが西側にずれた状態で、五輪塔地輪が確認できた。墓の上部施設として使われていたものか。

210ST040（Fig.62）

調査区西部中央に位置する木棺墓。東から南にかけて逆 L に曲がる溝を伴う。平面プランは長方形で、南北長 2.38m、東西長 0.95m、深さ 0.68m を測る。遺物は北側に集中している。土器類は土層 14 からまとまって出土している。断割した土層断面を観察すると、このまとまった土器は北側から中央に向かって斜めに傾斜してなだれ込んでいる状態が確認できた。これは木棺の蓋の上に置かれた土器群が、蓋が腐って埋没したことに伴って傾斜堆積したものと理解できる。同じく土層 14 からは炭が検出されている。土層 17 からは釘が 4 点出土しており、それぞれ木質が残存しているため木棺に使われていたと考えられる。土層 17 からは金属製品の刀子も 1 点検出されており、これは出土した位置と深さから棺内品と推測され、副葬品と考えられる。出土遺物の土師器坏 a の底部がヘラ切りで、小皿 a の底部切り離し技法が糸切りと混在していることから、この墓の構築年代は太宰府土器編年 XIV 期前後、12 世紀中頃と考えられる。

210ST050（Fig.62）

調査区西部西側に位置する墓。平面プランは長方形と思われるが、南東部を 210SD045 によって切られているため確定ではない。長軸長 2.2m、短軸長 1.15m、深さ 0.50m を測る。埋土は、明茶灰色土を除いた上層が墓に関係する土層と考えている。北側に長方形の石が 0.2×0.2m 程度の花崗岩が 1 点検出された。中央から北側の 3 ヶ所で骨の破片を検出した。出土遺物は土師器破片と須恵質土器破片のため時期の推測は難しい。切り合い関係にある 210SD045 の埋没が 12 世紀前半以降の埋没のため、それ以前に構築されたと考えられる。

その他の遺構

210SX001（Fig.63）

調査区南西～中央～南東部で検出された平面プランは溝が半円状に続く堀状遺構。谷地形から丘陵部

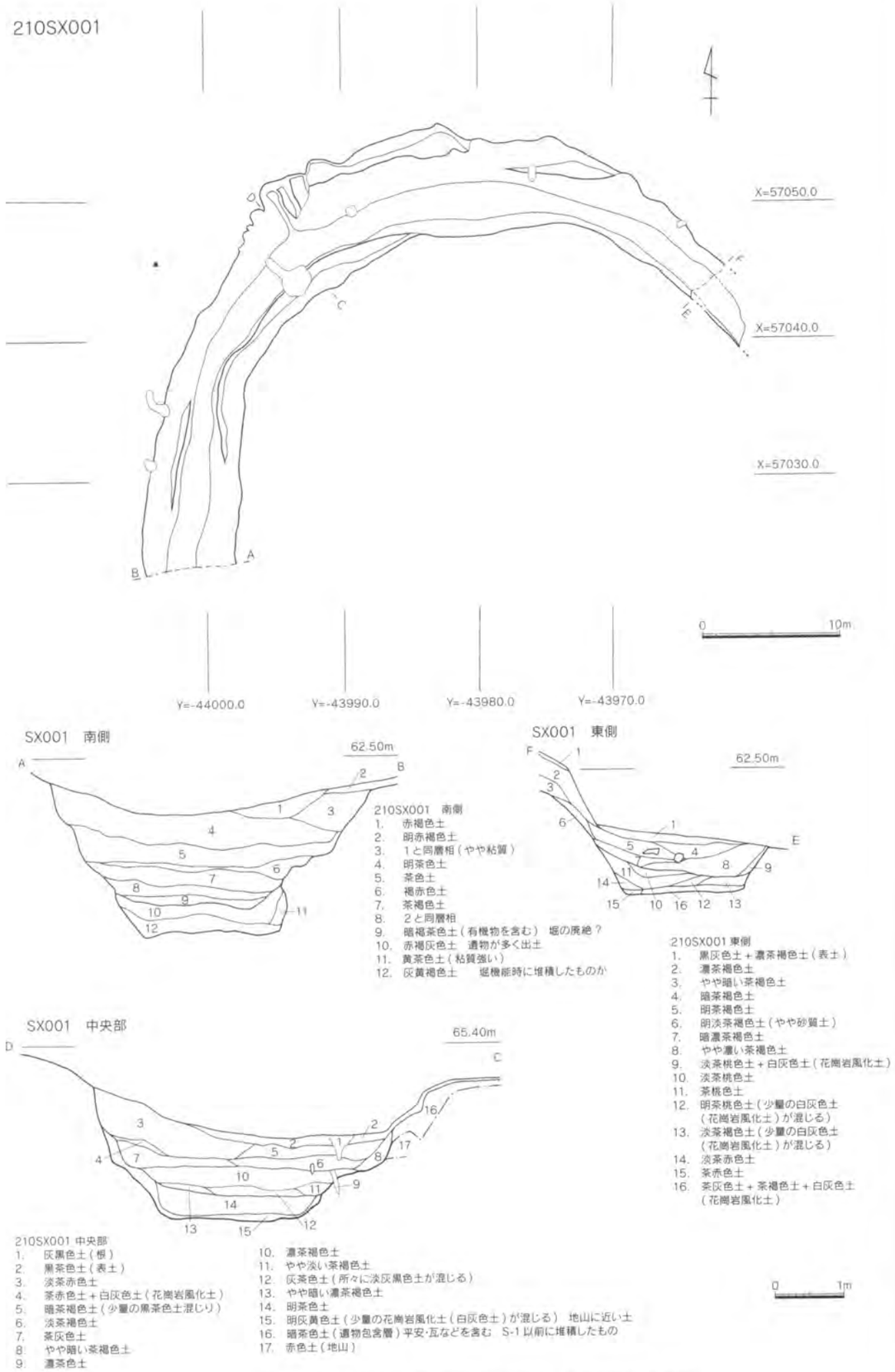


Fig.63 210SX001 遺構図（1/400、土層図は 1/80）

に接続したあたりで、丘陵に沿うように断面U字型で長大に掘削されている。堀上部の幅は5～7m、深さは検出面から2～2.3mを測る。堀に対して直交するように土層の断面を南西部、中央部、南東部で確認したが、その結果、堀内部の堆積土はほぼ水平に堆積をしている箇所が多かった。おそらく堀を構築して使用していた時期がすぎると、そのまま放置され埋まっていったと考えてられる。発掘調査時の安全上の問題から、調査区外に延びる堀の南西部と南東部については完掘しておらず、この堀がどのように斜面につながっていったのかは不明である。出土遺物の中で、時期の同定しやすい土器の出土が少ない点で時期の推定は厳しいが、土師器の坏aをみると、大宰府土器編年XⅦ期～XⅧ期以降（13世紀前半～中頃）に埋没したと考えられる。ほかには阿蘇凝灰岩製五輪塔の火輪の一部が出土している。また、小型の角がとれた川原石が3点出土しているが、これは飛礫の可能性もある。特殊遺物であるFig.74-12の瓦質土器乗燭の存在や、瓦類がある程度出土していることからも、この堀状の遺構の上部にそれらの供給先が考えられる。

210SX002（Fig.48）

調査区北部北東部に位置する確認調査時のトレンチ。210ST010の西側を掘削しており、210SX012も切っている。トレンチ内埋土掘り出し段階で土師器皿と白磁椀Ⅳ-2a類が出土していることから、本来は210SX012に伴っていた可能性がある。

210SX012（Fig.64）

調査区北部北東に位置する。210ST010を切っている。東西方向のプランと思われるが、南と西に関しては削平されており元々の寸法は不明。南北長0.65m、東西長1.4m、深さ0.45mが確認された。土層を検討すると、底面は掘りすぎてしまっていることがわかった。土層1.2までが本遺構に伴うものである。出土遺物としては、堀方の東端から完形の土師器皿aの上に、白磁椀を重ねた状態で出土している。これを副葬品とすると、この遺構は墓であると考えられる。白磁椀はⅡ類。大宰府陶磁器区分C期。12世紀以降のものか。そうすると210ST010との時期差はなく、210ST010が構築されてあまり時間をおかずにこの遺構がつくられたことになる。

210SX035（Fig.64、Pla.3-2）

調査区西部南端に位置する東西方向の堀状遺構。東と西側は調査区外に伸びるため、東西長13.4m、南北長8.0m、深さ3.0mを測る。現況で堀は埋まっていたが浅くぼみが続いており堀状に見えていた。埋土堆積は1.7mである。断面形は緩やかなV字型を呈している。埋土は自然堆積と思われる。土層No.5～11を取り上げ時は淡茶色土としてとりあげている。遺物の多くはこの淡茶色土から出土している。出土遺物の特徴として、瓦類が豊富に出土していることがある。特に完形の丸瓦や完形に近い平瓦が多くでている。これは、調査区西側、この210SX035より北側に瓦を伴う構造物があった可能性を指摘できる。堀の埋没は、出土した土師器小皿bの編年観からXIX期～XX期（14世紀前半）以降の埋没と考えている。

210SX043（Fig.65）

調査区西部西側に位置するたまり状遺構。遺構の切り合い関係では210SD045に切られる。南北長1.5m、東西長0.85m、深さ0.28mを測る。北側に0.2m程度の礫が4点集中している。

210SX044（Fig.65）

調査区西部西側に位置するたまり状遺構。遺構の切り合い関係では210ST030に切られる。出土遺物は、白磁椀Ⅱ類。大宰府陶磁器区分C期。これにより遺構の埋没は12世紀以降と考える。

210SX046（Fig.65）

調査区西部のさらに西側下場に位置する五輪塔群。丘陵の西斜面と宅地造営地の間の1.6mの幅に存

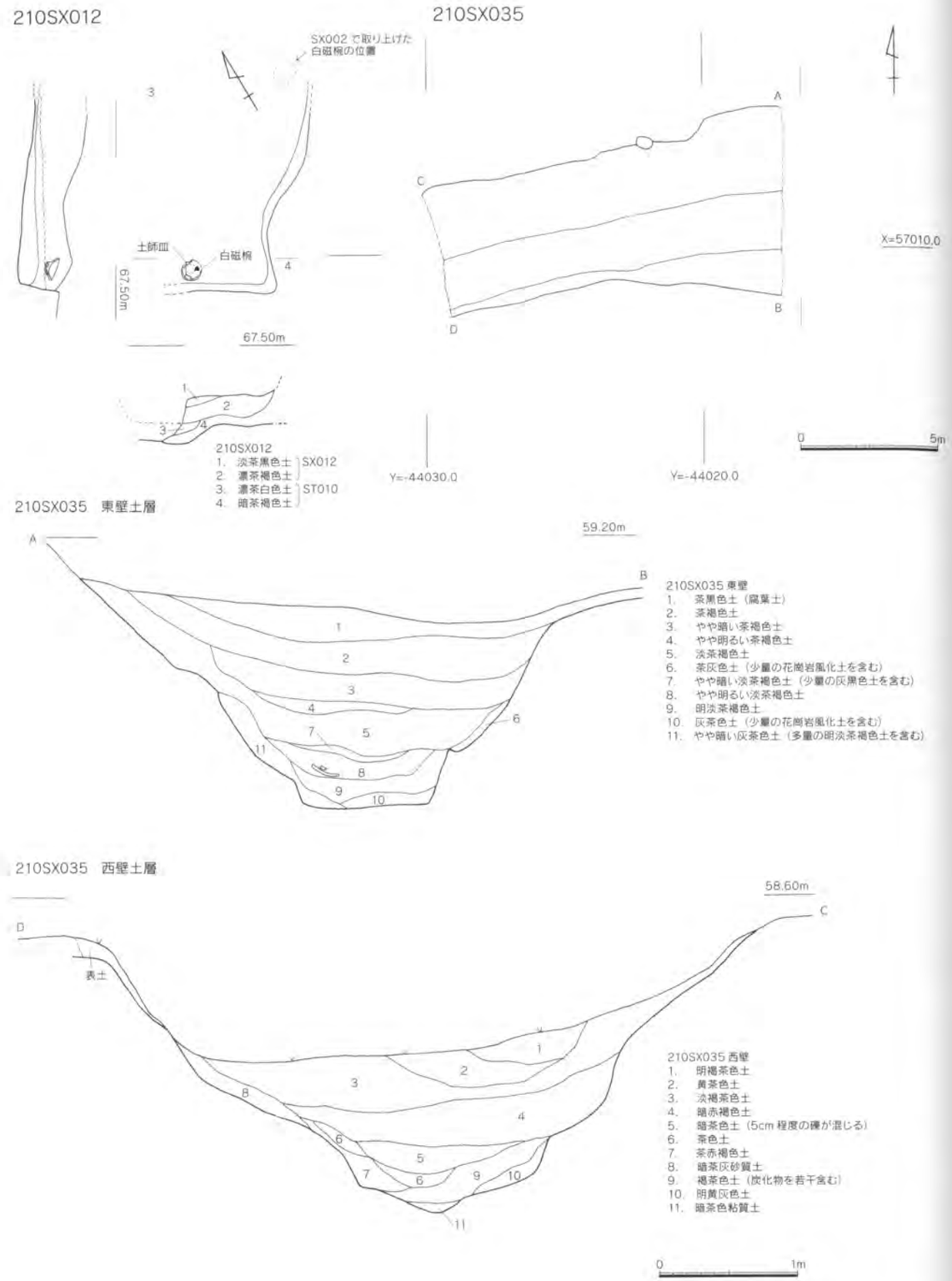


Fig.64　210SX012・035 遺構図（1/40、210SX35 平面図は 1/200、土層図は 1/60）

在していた。周辺に確認のトレンチを３箇所にわたっていれたところ、やはり周辺に遺構は確認されず、近年の宅地造営に伴って移動されたものと考えられる。

210SX055（Fig.66）

調査区北部中央に位置する埋納遺構。210SX001 の埋土を掘り下げて、床面が検出された段階で、北側の壁面で確認された。平面プランは半円形で、南側が切られたように直線になっている。東西長 0.2m、南北長 0.11m、深さ 0.18m を測る。現況では堀の斜面に棚状に掘られているが、元々は円形の小穴だった可能性もある。埋土は、上層が明茶灰色土でパサパサしており、下層が暗灰褐色土でやや粘質だった。下層の埋土を除去すると、東西方向に３列、出土銭が検出された。それぞれ手前から A 列、B 列、C 列として取り上げており、その組成は表 Tab.4-1、4-2 を参照して頂きたい。注目されるのはそれぞれの銅銭が 100 枚単位でまとまっており、いわゆる緡銭と呼称されるものがそのまま埋納されている状況であった。この埋納遺構は、210SX001 の堀が埋まっていく過程で構築されたと考えている。

試掘坑

トレンチの位置関係は、Fig.67 を参照して頂きたい。主に工場建造段階で掘削されていない北斜面の埋没状況と、南側では斜面の状況を把握する目的でトレンチをいれた。

210 北地区トレンチ a（Fig.67）

東西方向に 5m の長さで設定した。表土下、すぐ地山となり、それ以上はさげなかった。出土遺物なし。

210 北地区トレンチ b（Fig.67）

東西方向に 9.7m の長さで設定した。北壁の土層観察により、土層 1 ～ 7 までは昭和 20 年代に埋められたものであることがわかった。それより下層は、東側から西側へ傾斜堆積をしている。出土遺物は古代から中世にわたる。注目されるものは、7 世紀末～ 8 世紀初頭に位置づけられる須恵器蓋の返り付き口縁端部である。須恵器坏 c の高台も外側に張るタイプで古い様相をもっている。

210 北地区トレンチ c（Fig.67）

南北方向に 5.2m の長さで設定した。東面の土層を観察した。土層 17. 暗茶黒色土（ごく少量に明灰茶色土が混じっている）が旧表土である。よって土層 1 ～ 16 までは昭和 20 年代の埋土と考えられる。

210 北地区トレンチ d（Fig.67）

南北方向に 4.7m の長さで設定した。トレンチ c と同じく近現代の堆積層を確認した。

210 北地区トレンチ e（Fig.67）

南北方向に 3m の長さで設定した。古代から中世の遺物は小量出土したが遺構は確認できなかった。

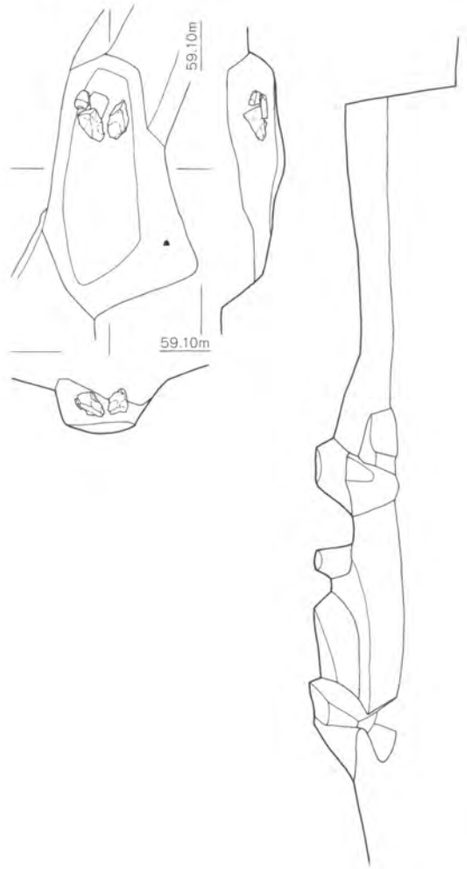
210 北地区トレンチ f（Fig.68）

北地区の一番西側に設定したトレンチ。南北方向と東西方向で設定した。後に調査をした大宰府条坊跡第 210-2 次調査に隣接している。隣の土地とのつながりを調べておきたかったので拡張して調査をした。このトレンチからは遺物が多く出土している。特に注目されるのは、阿蘇凝灰岩製の五輪塔や瓦質土器の瓦灯、そして瓦経の破片である。瓦経の福岡県での出土例は福岡市飯盛山出土のものが著名である。近隣の出土例としては、観世音寺北側の日吉神社境内や、観世音寺境内からの出土が知られている。これらの小規模な瓦経の出土については、付近に瓦経を埋納した経塚の存在を指摘されている。日吉神社が所在する丘陵は、この条坊跡第 210 次調査と同じく四王寺山の南端裾である。そのため同じような経塚が点在している可能性は高い。

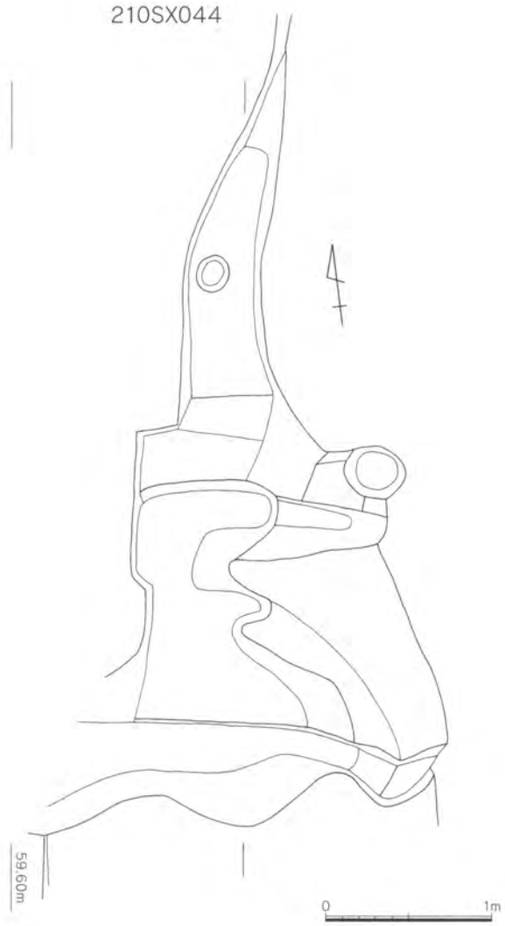
210 北地区トレンチ g（Fig.68）

東西方向に 4m の長さで設定をした。北地区での一番東側のトレンチ。現況地形はなだらかに傾斜しているが、旧地形は途中段を持ちながらも西から東へ急激に落ち込む。トレンチ内でも比高差は 2.4m と

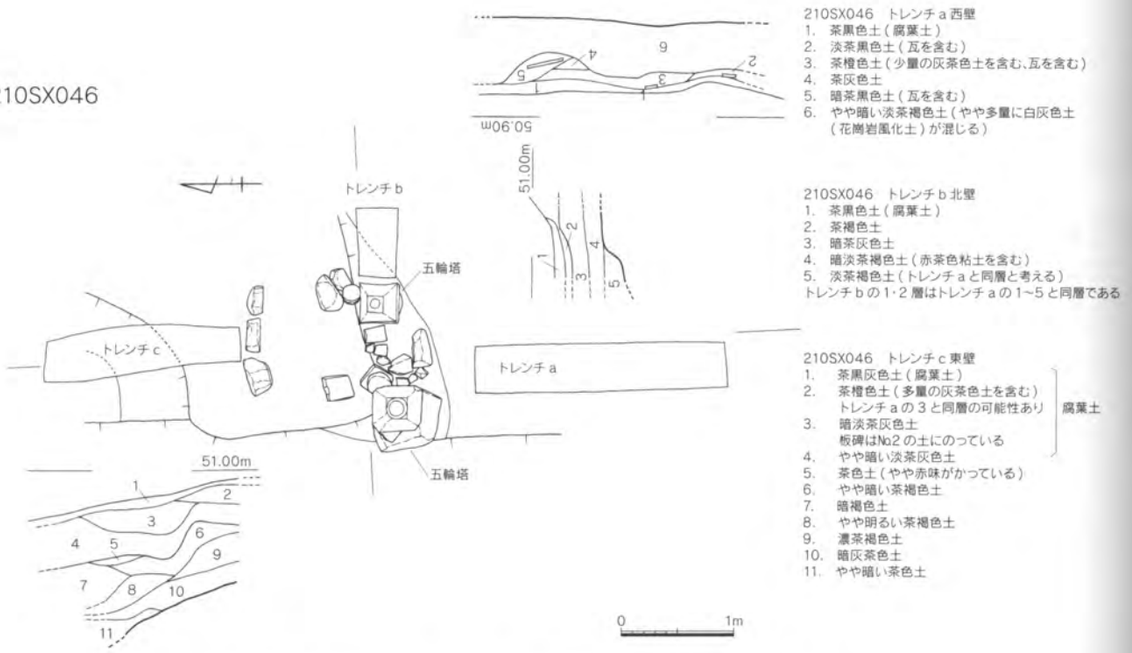
210SX043



210SX044



210SX046



210SX046　トレンチａ西壁
1.　茶黒色土（腐葉土）
2.　淡茶黒色土（瓦を含む）
3.　茶橙色土（少量の灰茶色土を含む、瓦を含む）
4.　茶灰色土
5.　暗茶黒色土（瓦を含む）
6.　やや暗い淡茶褐色土（やや多量に白灰色土（花崗岩風化土）が混じる）

210SX046　トレンチｂ北壁
1.　茶黒色土（腐葉土）
2.　茶褐色土
3.　暗茶灰色土
4.　暗淡茶褐色土（赤茶色粘土を含む）
5.　淡茶褐色土（トレンチａと同層と考える）
トレンチｂの1･2層はトレンチａの1~5と同層である

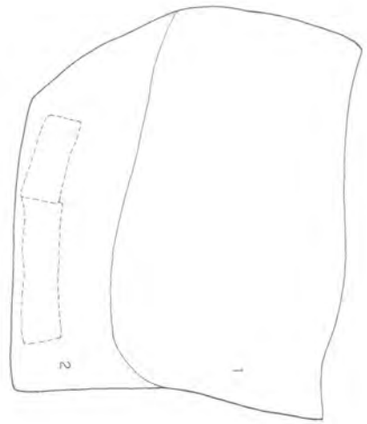
210SX046　トレンチｃ東壁
1.　茶黒灰色土（腐葉土）
2.　茶橙色土（多量の灰茶色土を含む）
　　トレンチａの３と同層の可能性あり
3.　暗淡茶灰色土
　　板碑はNo2の土にのっている
4.　やや暗い淡茶灰色土
5.　茶色土（やや赤味がかっている）
6.　やや暗い茶褐色土
7.　暗褐色土
8.　やや明るい茶褐色土
9.　濃茶褐色土
10.　暗灰茶色土
11.　やや暗い茶色土

腐葉土

Fig.65　210SX043・044・046 遺構図（1/40、046 は 1/60）

210SX055

土層図



210SX055
1.　明茶灰色土（パサパサしている）
2.　暗灰褐色土（やや粘質）

平面図

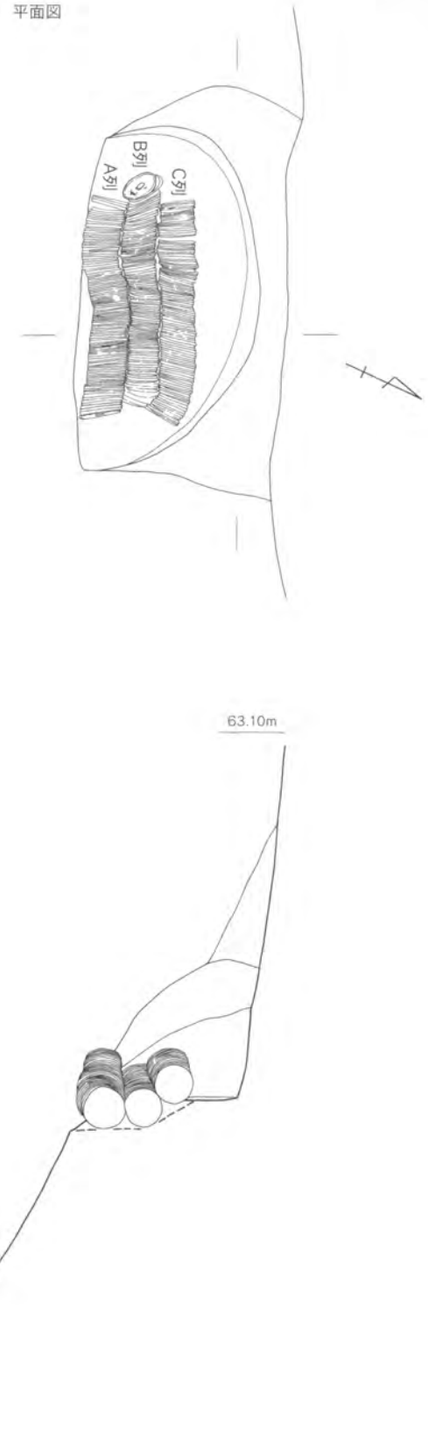
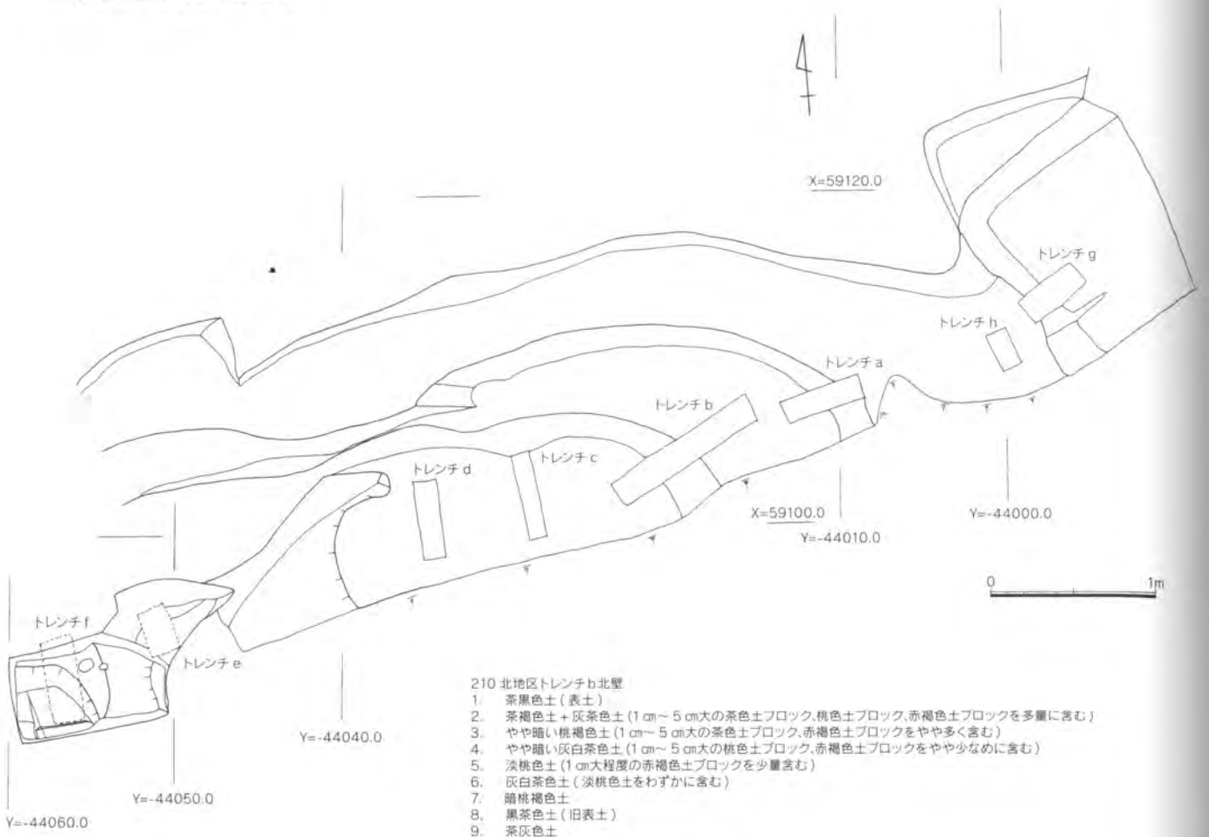


Fig.66　210SX055 遺構図（1/4）

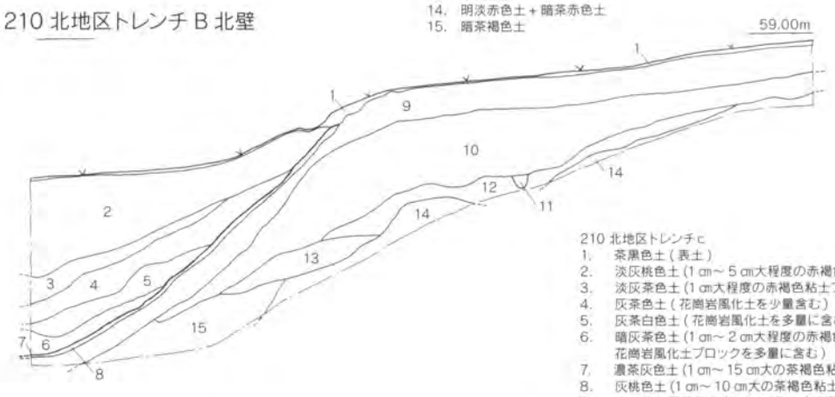
210 北地区トレンチ配置図



210 北地区トレンチ b 北壁

1. 茶黒色土（表土）
2. 茶褐色土＋灰茶色土（1 ㎝～ 5 ㎝大の茶色土ブロック、桃色土ブロック、赤褐色土ブロックを多量に含む）
3. やや暗い桃褐色土（1 ㎝～ 5 ㎝大の茶色土ブロック、赤褐色土ブロックをやや多く含む）
4. やや暗い灰白茶色土（1 ㎝～ 5 ㎝大の桃色土ブロック、赤褐色土ブロックをやや少なめに含む）
5. 淡桃色土（1 ㎝大程度の赤褐色土ブロックを少量含む）
6. 灰白茶色土（淡桃色土をわずかに含む）
7. 暗桃褐色土
8. 黒茶色土（旧表土）
9. 茶灰色土
10. 濃茶褐色土
11. やや明るい濃茶褐色土（根の痕跡か）
12. 淡茶褐色土
13. 茶褐色土
14. 明淡赤色土＋暗茶赤色土
15. 暗茶褐色土

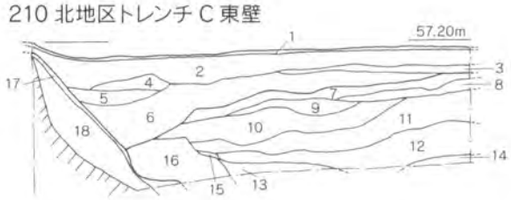
210 北地区トレンチ B 北壁



210 北地区トレンチ c

1. 茶黒色土（表土）
2. 淡灰桃色土（1 ㎝～ 5 ㎝大程度の赤褐色粘土ブロック、茶褐色粘土ブロックを多量に含む）
3. 淡灰茶色土（1 ㎝大程度の赤褐色粘土ブロック、茶褐色粘土ブロックを少量含む）
4. 灰茶色土（花崗岩風化土を少量含む）
5. 灰茶白色土（花崗岩風化土を多量に含む）
6. 暗灰茶色土（1 ㎝～ 2 ㎝大程度の赤褐色粘土ブロック、茶褐色粘土ブロック、花崗岩風化土ブロックを多量に含む）
7. 濃茶灰色土（1 ㎝～ 15 ㎝大の茶褐色粘土ブロック、赤褐色粘土ブロックを多量に含む）
8. 灰桃色土（1 ㎝～ 10 ㎝大の茶褐色粘土ブロックを多量に含む）
9. やや淡い灰茶色土（1 ㎝～ 10 ㎝大の茶褐色粘土ブロックを少量含む）
10. 暗茶灰色土（1 ㎝～ 25 ㎝大の茶褐色粘土ブロック、赤褐色粘土ブロックが多量に含まれる）
11. 灰褐茶色土（1 ㎝～ 10 ㎝大の茶褐色粘土ブロック、赤褐色粘土ブロックを多量に含む）
12. やや暗い灰茶色土（1 ㎝～ 10 ㎝大の茶褐色粘土ブロック、赤褐色粘土ブロックを少量含む）（少量の黒褐色土混じる）
13. やや明るい灰茶色土（1 ㎝～ 5 ㎝大の茶褐色粘土ブロック、赤褐色粘土ブロックを少量含む）
14. やや暗い茶灰色土（少量の黒褐色土が混じる）
15. 明灰茶色土
16. 赤褐色粘質土
17. 暗茶黒色土（ごく少量明灰茶色土が混じる）旧表土（腐植土）
18. やや暗い茶褐灰色土

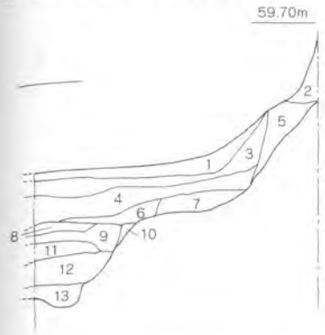
210 北地区トレンチ C 東壁



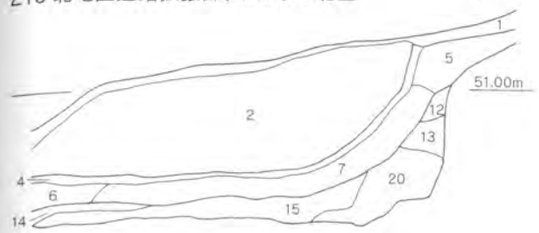
0 1m

Fig.67　第 210 次調査北区地区トレンチ配置図 (1/200)、北地区トレンチ b、トレンチ c 土層図 (1/80)

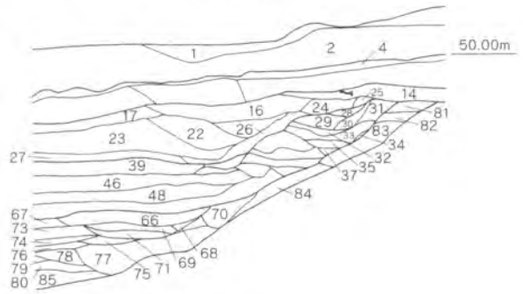
210 北地区トレンチ g 南壁



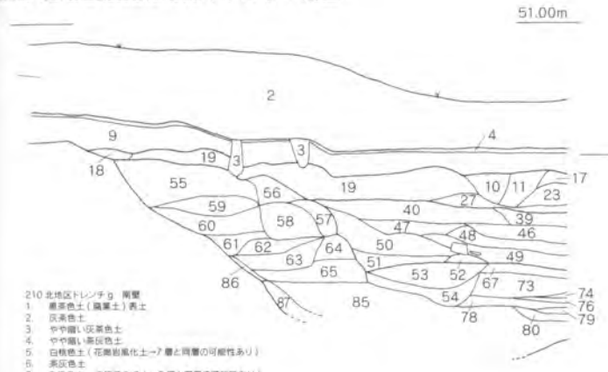
210 北地区道路拡張部トレンチ f 北壁



210 北地区道路拡張部トレンチ f 西壁



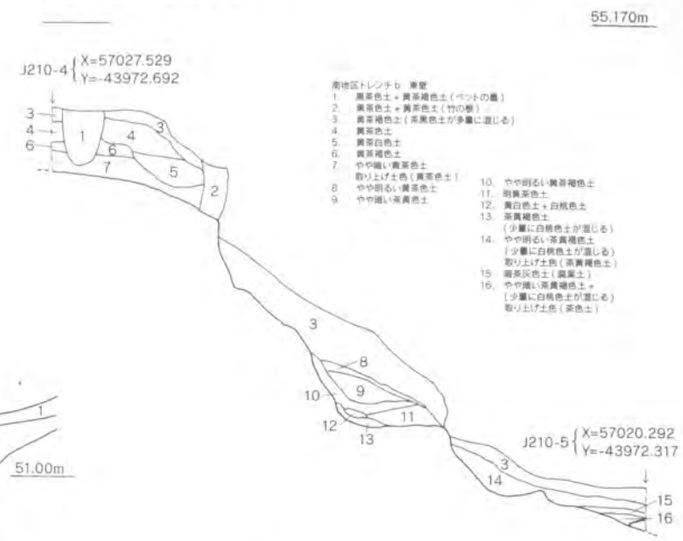
210 北地区道路拡張部トレンチ f 南壁



210 北地区トレンチ g　南壁

1. 黒茶色土（腐葉土）表土
2. 灰茶色土
3. やや暗い灰茶色土
4. やや暗い茶灰色土
5. 白桃色土（花崗岩風化土→7 層と同層の可能性あり）
6. 茶灰色土
7. 白桃色土＋淡灰茶白色土→5 層と同層の可能性あり）
8. 淡灰茶色土＋白桃色土
9. 淡茶赤色土
10. 灰白色土
11. 淡灰黄色土（少量の砂質土が混じる）
12. 灰黄白色土（少量の桃白色土が混じる）
13. やや暗い灰黄白色土（少量の桃白色土が混じる）

210 南地区トレンチ b



南地区トレンチ b　南壁

1. 黒茶色土＋黄茶褐色土（ペットの糞）
2. 黄茶色土＋黄茶色土（竹の根）
3. 黄茶褐色土（茶黒色土が多量に混じる）
4. 黄茶色土
5. 黄茶白色土
6. 黄茶褐色土
7. やや暗い黄茶色土
   取り上げ土色（黄茶色土）
8. やや明るい黄茶色土
9. やや暗い茶黄色土
10. やや明るい黄茶褐色土
11. 明黄茶色土
12. 黄白色土＋白桃色土
13. 茶黄褐色土
   （少量に白桃色土が混じる）
14. やや明るい茶黄褐色土
   （少量に白桃色土が混じる）
   取り上げ土色（茶黄褐色土）
15. 暗茶灰色土（腐葉土）
16. やや暗い茶黄褐色土＋
   （少量に白桃色土が混じる）
   取り上げ土色（茶色土）

北地区トレンチ f

1.	茶黒色土（腐葉土）表土	I 層群
2.	淡茶色土（茶色粘土ブロック、灰色粘土を多量に含む）	
3.	暗灰褐色土（木の根）	
4.	灰黒色土（表土だった土）	
5.	暗茶白色土	II 層群
6.	暗茶色土	
7.	濃褐茶色土（少量の遺物を含む）	
8.	やや暗い褐茶色土	
9.	暗褐茶色土	
10.	暗黄褐茶色土（少量の遺物を含む）	
11.	やや暗い濃褐茶色土	
12.	茶褐茶色土（白灰色土（花崗岩風化土）を少量含む）	
13.	やや暗い淡褐茶色土（白灰色土（花崗岩風化土）を少量含む）	
14.	茶灰色土（平らな石、陶器、土師器、炭、瓦等を少量に含む）	
15.	浅茶灰色土（ごく少量の炭を含む）	
16.	明淡茶灰色土（少量の遺物を含む）	
17.	やや明るい淡茶灰色土（少量の遺物を含む）	
18.	暗茶灰色土（少量の白灰色土（花崗岩風化土）を含む）	
19.	やや暗い淡茶灰色土（少量の遺物を含む）	
20.	やや暗い茶色土	
21.	やや明るい淡茶褐色土（少量の遺物を含む）	III 層群
22.	やや暗い淡茶褐色土（少量の遺物を含む）	
23.	茶褐灰色土（少量の遺物を含む、やや多量の白灰色土（花崗岩風化土）を含む）	
24.	明淡茶褐色土（赤味を帯びている）	
25.	やや明るい淡茶色土	
26.	明淡茶赤色土（硬質）	
27.	淡茶黄色土	
28.	濃茶色土（硬質）	
29.	やや明るい濃茶褐色土（硬質）	
30.	明淡灰茶褐色土（硬質）	
31.	濃茶褐色土（硬質）（粘質）	
32.	明淡茶黄色土（硬質）	
33.	やや明るい濃茶褐色土（硬質）	
34.	灰白色土（硬質）	
35.	濃茶灰褐色土（硬質）	
36.	灰褐白色土（濃茶色土ブロックを多量に含む）（硬質）	
37.	淡茶白色土（硬質）	
38.	濃茶黄色土（硬質＋粘質）	
39.	暗淡灰茶色土（少量の遺物を含む）	IV 層群
40.	灰褐茶色土（少量の遺物を含む）	
41.	明淡灰色土（少量の赤茶色粘土ブロックを含む）（硬質＋粘質）	
42.	淡茶赤色土（硬質＋粘質）	
43.	明茶赤色土（硬質＋粘質）	
44.	やや暗い灰褐色土（硬質＋粘質）	
45.	暗灰褐色土（硬質＋粘質）	
46.	やや明るい茶灰色土（少量の遺物を含む）	
47.	やや暗い淡灰茶色土	
48.	やや明るい淡灰茶色土（少量の遺物を含む）	
49.	淡灰茶色土（少量の遺物・炭を含む）	
50.	暗灰褐茶色土（少量の遺物・炭を含む）	
51.	やや暗い茶灰色土（少量の遺物・炭を含む）	
52.	明淡灰茶色土	
53.	淡黒灰色土（炭層）（やや暗い帯灰色土を少量含む）	
54.	淡黒灰色土（炭層）（少量の淡灰褐色土を含む）	
55.	淡褐灰色土（少量の淡桃色粘土ブロックを含む）	
56.	やや暗い淡褐灰色土（少量の遺物を含む）	
57.	やや明るい淡褐灰色土（淡桃色粘土ブロックを含む）	
58.	暗淡褐灰色土（茶赤色粘土ブロック、茶褐色粘土ブロックを多量に含む）	
59.	やや暗い灰褐色土（茶赤色粘土ブロック、茶褐色粘土ブロックを多量に含む）	
60.	やや明るい褐茶色土（茶赤色粘土ブロック、茶褐色粘土ブロックを多量に含む）	
61.	やや明るい淡褐茶色土（多量の茶赤色粘土ブロックを含む）	
62.	明淡灰褐茶色土（硬質）	
63.	明淡茶黄色土（粘質）（硬質）	
64.	淡赤茶色土（少量の茶黄色粘土を含む）（硬質＋粘質）	
65.	赤茶色土＋白灰色土（花崗岩風化土）	
66.	淡灰褐色土（少量の遺物、炭、赤茶色粘土ブロックを含む）	
67.	やや明るい淡茶褐灰色土（少量の炭を含む）	
68.	やや暗い淡茶褐灰色土（少量の遺物を含む）	V 層群
69.	淡灰茶黄色土（少量の遺物・炭を含む）	
70.	明淡茶褐灰色土（少量の遺物を含む）	
71.	やや暗い淡灰褐色土（砂質）	
72.	暗淡茶灰褐色土	
73.	淡灰褐色土（少量の遺物を含む）	
74.	淡茶灰黄色土	
75.	淡灰褐茶色土	
76.	暗灰色土	
77.	暗褐茶灰色土（少量の茶赤色粘土ブロックを含む）	
78.	淡灰色土	
79.	淡灰褐色砂質土＋淡茶黄色粘質土ブロック	
80.	灰褐色土	
81.	淡桃茶色土（硬質）	
82.	淡茶赤褐色土（硬質）	
83.	濃茶赤褐色土（硬質）	
84.	濃茶褐色土（硬質）	
85.	濃赤茶色土（硬質＋粘質）	
86.	淡赤茶色土	
87.	淡灰褐白色土	

Fig.68　第 210 次調査北地区トレンチ g、北地区道路拡張部トレンチ、南地区トレンチ b 土層図 (1/80)

なる。土層の堆積は水平堆積の箇所が多いので近現代の埋め土の可能性が高い。

210 北地区トレンチ h (Fig.67)

南北方向に 2.3m の長さで設定をした。土師器坏 a が出土した。北から南への堆積だが、遺構は確認されなかった。

210 北地区道路拡張トレンチ (Fig.68)

北地区のトレンチ f を拡張する意味で設定したトレンチ。遺構は検出されなかったが、北壁、西壁、南壁と土層の確認をした。確認された土層を群として分けてそれぞれの特徴を記載する。1 層群は、I 層を表土層と考えている。2 層は大量の土、淡茶色土が確認でき整地層と考えている。これらは比較的新しい近現代の堆積と考られる。時期的に工場建築の際の廃土かもしれない。II 層群は 4 層を表土として考え、5 ～ 9 層が整地層と考えられる。整地層は全体的に見て褐茶色土を呈している。III 層群は、14 層から骨、緑色片岩、陶器片、土師器皿がまとまって出土したので墓があった可能性が考えられる。12 ～ 20 層を表土面として、21 ～ 27 層が整地層と推定できる。また 10、11 層は遺構内埋土の可能性がある。土色は全般的に茶色土である。IV 層群は、28 ～ 38 層が堅くしまっており、全体的にみて少し赤みを帯びた茶色土である。この層から 39 ～ 41 層へ続いているので、この層群が生活面を示しているのは不明である。ただし、暗い灰色を帯びた土色の共通点を重要視して同じ層群とした。V 層群は 53.54 層（炭層）が遺構である可能性に注目して、層位を検討してみた。全体的にみて 55 ～ 65 は少し赤みを帯びた暗灰茶色。81 ～ 85 層は赤茶色土、66 ～ 67 層は暗灰茶色となっている。

210 南地区トレンチ b (Fig.68)

調査の表土めくりの前に、調査区から外にのびる南側の斜面にトレンチ a ～ e の 5 本のトレンチを入れて掘削の範囲を決定した。明確な遺構は確認できなかったが、遺物の出土があったため調査範囲にいれた。トレンチ b は 210SK015 の存在している平坦面から 210SK025 の平坦面への土層の堆積を表している。

(4) 出土遺物

溝出土遺物

210SD005 出土遺物 (Fig.69)

瓦器

椀 c (1)　復元口径 18cm、器高 5.5cm、底径 6.3cm。貼り付け高台。

白磁

皿 (2)　器高 1.5+cm、復元底径 4.2cm。皿Ⅲ -1 類。

210SD008 出土遺物 (Fig.69)

土師質土器

火鉢 (3)　器高 2.7+cm。

210SD045 粘質土出土遺物 (Fig.69)

土師器

杯 a (4)　器高 0.9 + cm。

黒色土器

杯 (5)　器高 1.6+ ㎝、復元底径 6.2 ㎝。

瓦類

平瓦　縦 6.8+ ㎝、横 7.0+、厚さ 1.7 ㎝。

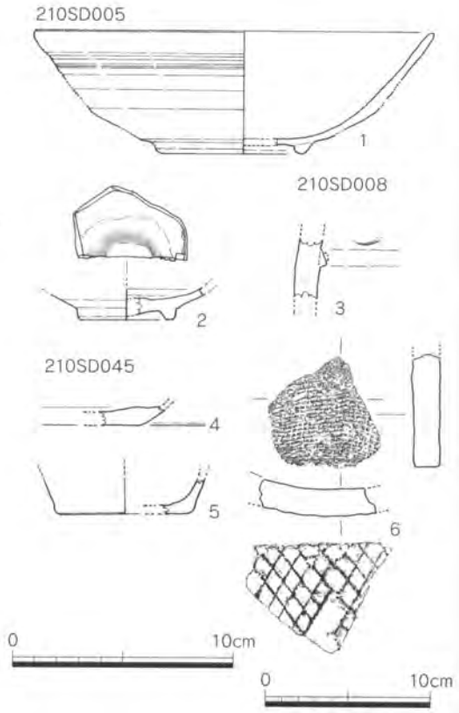


Fig.69　第 210 次調査溝出土遺物実測図 (1/3、1/4)

土坑出土遺物

210SK006 出土遺物 (Fig.70)

土師器

坏 a× 小皿 a (1)　底部破片。器高 1.4+cm、底径 8.0cm。底部切り離し技法は回転イト切りか。わずかに板状圧痕が確認できる。色調は橙褐色。外面調整は摩滅が激しく不明。

210SK015 赤茶色土出土遺物 (Fig.70)

土師器

取手 (2)　破片。縦 7.0+cm、横 7.1+cm、厚さ 4.4cm。色調は淡橙褐色。調整はナデ調整だがやや荒く施してあり、部分的に成形段階の工具痕跡が確認できる。

210SK020 明茶土出土遺物 (Fig.70)

須恵器

蓋 (3)　復元口径 13.4 ㎝、器高 4.4+ ㎝。

黒色土器

椀 c (4)　器高 1.95+ ㎝、復元底径 7.0 ㎝。A 類。

磁器

椀 c (5) 器高 4.8+ ㎝、底径 6.6 ㎝。

210SK020 赤褐色土出土遺物 (Fig.70)

須恵器

蓋 3 (6、7)　6 は復元口径 14.6 ㎝、器高 1.2+ ㎝。天井部は回転ヘラ削りを施す。色調は灰白色～灰黄色。7 は口縁端部の破片。器高 0.9+ ㎝。色調は暗灰色。

土師器

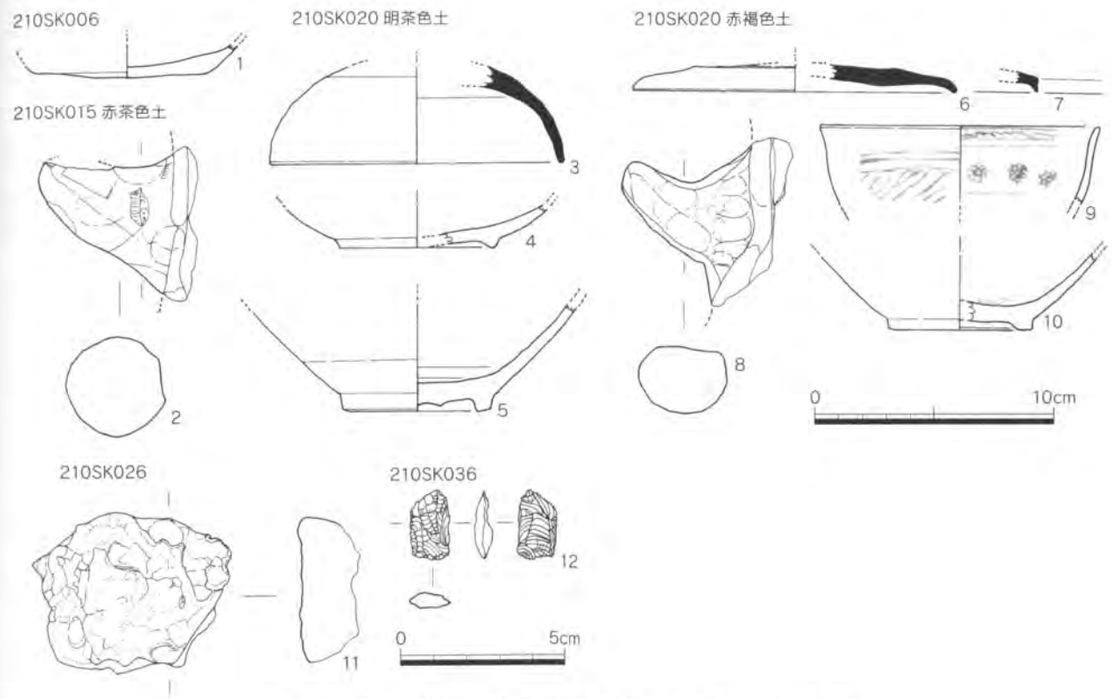


Fig.70　第 210 次調査土坑出土遺物実測図 (1/2、1/3)

取手（8） 破片。縦 7.5+ ㎝、横 7.7 ㎝、厚さ 3.0 ㎝。体部に取手を貼り付けた際の指頭圧痕が残る。色調は淡橙茶褐色。調整はナデ調整。取手上部はやや平坦に仕上げている。

陶器

椀（9） 口縁部破片。復元口径 12.6 ㎝、器高 3.5+ ㎝。

椀 c（10） 器高 3.4+ ㎝、復元高台径 6.6 ㎝。

210SK026 出土遺物（Fig.70）

土製品

土壁（11） 縦 4.9+cm、横 6.0+cm、厚み 1.8+cm。

210SK036 出土遺物（Fig.70）

石製品

剥片（12） 縦 2.1cm、横 1.2cm、厚み 0.55cm。黒曜石製。

墓出土遺物

210ST010 出土遺物（Fig.71）

白磁

皿（1） ほぼ完形。口径 10.8cm、器高 2.55cm、底径 3.4cm。皿Ⅵ-1b 類。

青白磁

合子（蓋・身）（2） 蓋は口径 3.8 ㎝、器高 1.3 ㎝。外面に薄い青白色の透明感がある釉を施す。内側は露胎。身は口径 3.0 ㎝、器高 1.8 ㎝、底径 3.2 ㎝。外面体部に蓋と同じく薄い青白色の透明感がある釉を施す。内部と、体部下部から底部に掛けては、釉を掛けていない。

金属製品

釘（3） 縦 5.0+ ㎝、横 0.35 ～ 0.9 ㎝、厚さ 0.6 ㎝。釘先端を欠く。頂部近くに木質（横方向の木目が確認可能）が残存している。

210ST010 淡茶色土出土遺物（Fig.71、Pla.4-1）

白磁

皿（4） 口縁部破片。復元口径 10.2 ㎝、器高 1.7+ ㎝。皿Ⅵ-1a 類。

金属製品

刀子 × 和鋏（5） 縦 0.9 ㎝、横 2.7+ ㎝、厚さ 0.3 ㎝。刃部の一部だが、11 の和鋏と比較すると、非常に近いサイズと形状をしている。和鋏の一部という可能性も提示しておきたい。

草文双鳥鏡（6） 縦 8.3 ㎝、横 8.3 ㎝、厚さ 0.45 ㎝を測る円鏡である。鏡背を観察すると、紐は紐座を持たない素紐で界圏を巡らさず、周縁の断面はややつぶれた三角形を呈す。紐を中心にして鳥文を対照に配置しており、鳥文の対角には草花文を配置する。宋鏡式と呼ばれる和鏡の祖型の 1 つである。三重県多度神社経塚出土例の花枝散蝶鳥鏡に文様構成が類似する。出土した段階では紐の穴に紐の痕跡が確認できた。また、鏡面には縦糸と横糸が確認できる布のようなもの数カ所付着しており、鏡が布に包まれていたことが推定できる。

釘（7、8、9） 7 は縦 3.4+ ㎝、横 0.25 ～ 1.15 ㎝、厚さ 0.3 ㎝。頭部と先端を欠く。8 は縦 4.2+ ㎝、横 0.8 ～ 1.5 ㎝、厚さ 1.6 ㎝。先端を欠く。木質は横方向の木目を確認。9 は縦 5.3 ㎝、横 0.25 ～ 1.6 ㎝、厚さ 0.6 ㎝。先端を若干欠く。頭部近くでは横方向の木目をもつ木質が残存している。

210ST010b 出土遺物（Fig.71）

金属製品

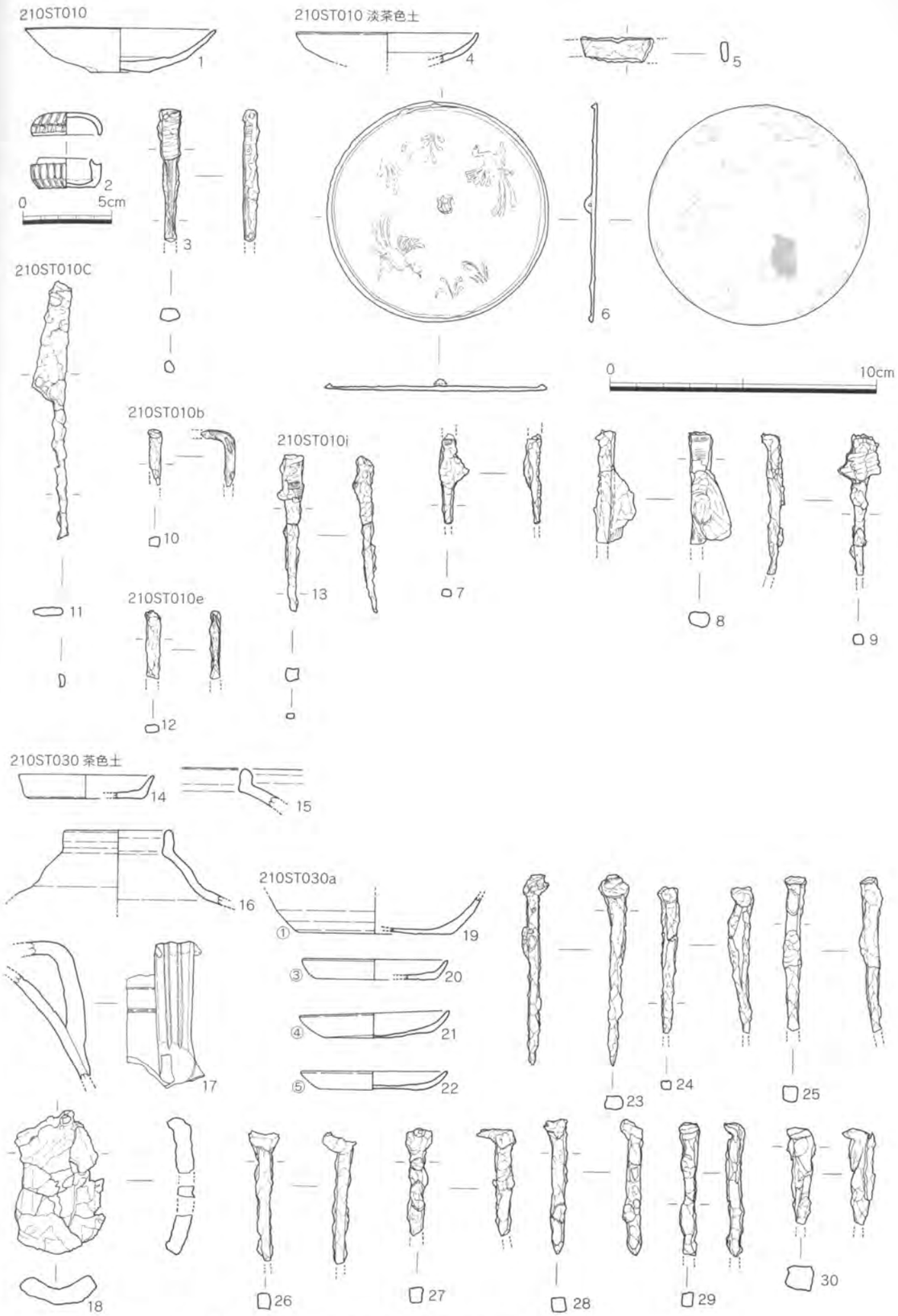


Fig.71 第 210 次調査墓出土遺物実測図その 1（1/2、1/3）

釘（10） 縦 2.05+ ㎝、横 4.0 ㎝、厚さ 0.4 ㎝。L 型を呈す。

210ST010c 出土遺物（Fig.71）

金属製品

和鋏（11） 縦 9.7 ㎝、横 0.2 ～ 1.4 ㎝、厚さ 0.3 ㎝。本来、刃が付いた U 字型をしているが、片刃しか残存していなかった。軸部がやや曲がり始めているのが U 字型の根本にあたるためだろう。刃の尖端は欠けている。

210ST010e 出土遺物（Fig.71）

金属製品

釘（12） 縦 2.6+ ㎝、横 0.5 ㎝、厚さ 0.4 ㎝。頭部と先端を欠く。

210ST010i 出土遺物（Fig.71）

金属製品

釘（13） 縦 5.9 ㎝、横 0.3 ～ 0.95 ㎝、厚さ 0.2 ～ 0.7 ㎝。

210ST030 茶色土出土遺物（Fig.71）

土師器

小皿 a1（14） 口縁部破片。復元口径 8.2 ㎝、器高 1.1 ㎝、復元底径 6.8 ㎝。底部糸切り。焼成は良好。色調は灰赤黄色。

中国陶器

壺（15） 口縁部破片。器高 2.15+ ㎝。壺Ⅳ。

水注（16、17） 16 は口縁部破片。復元口径 6.2 ㎝、器高 4.3+ ㎝。17 は取手の破片。最大残存高 8.3 ㎝、取手部幅 2.2 ㎝を測る。水注Ⅷ類。

金属製品

用途不明品（18） 縦 5.4 ㎝、横 3.5+ ㎝、厚さ 0.7 ㎝。中央部が窪む。

210ST030a 出土遺物（Fig.71、72）

土師器

杯 a（19） 器高 2.1+ ㎝、復元底径 8.5 ㎝。底部切り離しは糸切りのち板状圧痕。色調は暗黄灰色。①出土。

小皿 a1（20、21） 20 は復元口径 8.2 ㎝、器高 1.1 ㎝、復元底径 6.8 ㎝。口縁部破片。底部糸切りか。③出土。21 は口径 8.3 ㎝、器高 1.05 ㎝、底径 6.0 ㎝。色調は暗褐色～明黄色。底部糸切り調整のち板状圧痕。XⅧ類。④出土。

小皿 a（22） 口径 8.45 ㎝、器高 1.6 ㎝、底径 6.0 ㎝。焼成はやや不良。色調は黄褐色。胎土は赤色粒子を含む。XⅧ～XⅨ類。⑤出土。

金属製品

釘（23 ～ 36）

23 から 36 は鉄製の釘である。23 は縦 7.2 ㎝、横 0.2 ～ 1.15 ㎝、厚さ 1.2 ㎝。頭部は折れ開く。24 は縦 5.5+ ㎝、横 0.4 ～ 0.75 ㎝、厚さ 0.8 ㎝。25 は縦 5.8+ ㎝、横 0.4 ～ 0.8 ㎝、厚さ 0.7 ㎝。先端を欠く。26 は縦 4.9+ ㎝、横 0.6 ～ 1.1 ㎝、厚さ 1.3 ㎝。頭部が平たく開いている。先端を欠く。27 は縦 3.9+ ㎝、横 0.5 ～ 1.0 ㎝、厚さ 1.3 ㎝。頭部は折れ曲がる。先端を欠く。28 は縦 5.1+ ㎝、横 0.5 ～ 0.9 ㎝、厚さ 0.7 ㎝。完形に近いが先端を少し欠く。29 は縦 5.0+ ㎝、横 0.8 ㎝、厚さ 0.7 ㎝。30 は縦 3.6+ ㎝、横 1.0 ㎝、厚さ 1.0 ㎝。先端を欠く。31 は縦 3.55+ ㎝、横 0.9 ㎝、厚さ 0.9 ㎝。先端を欠く。32 は縦 3.0 + ㎝、横 0.5 ～ 1.0 ㎝、厚さ 0.7 ㎝。先端を欠く。33 は縦 3.2+ ㎝、

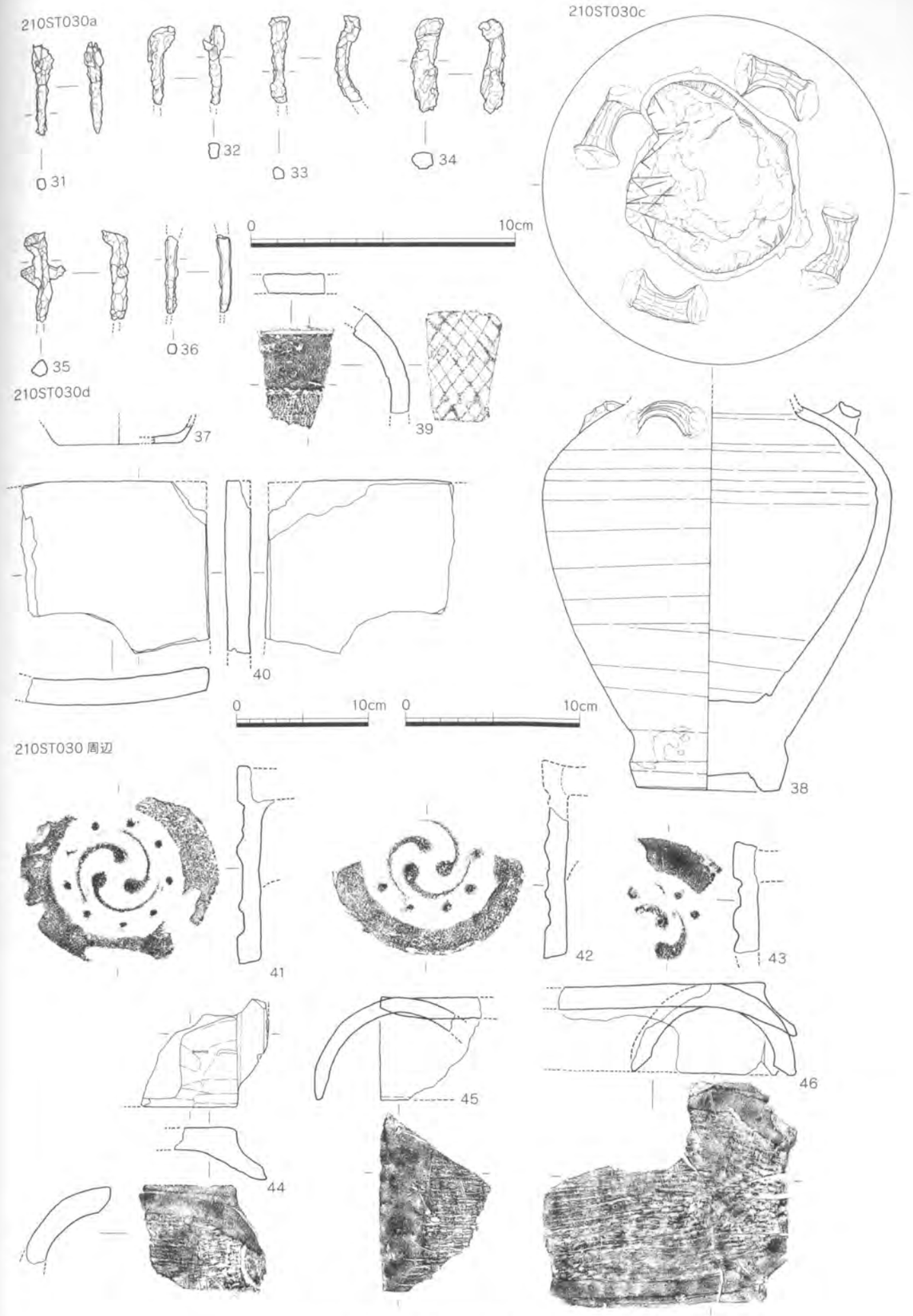


Fig.72 第 210 次調査墓出土遺物実測図その 2（1/2、1/3、1/4）

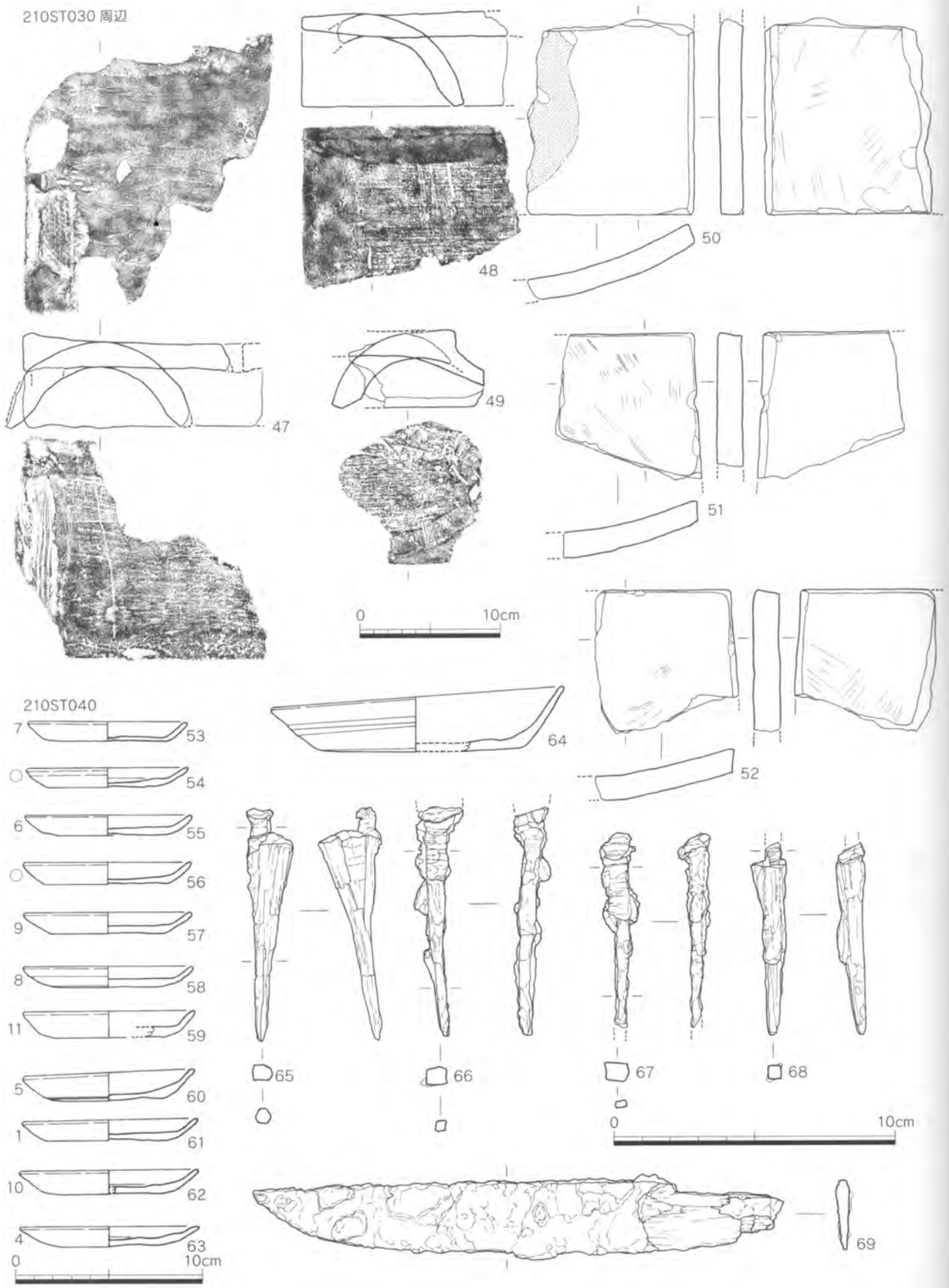


Fig.73 第 210 次調査墓出土遺物実測図その 3（1/2、1/3、1/4）

横 0.4 ～ 0.8 ㎝、厚さ 0.7 ㎝。頭部はつぶれて、先端を欠く。34 は縦 3.4+ ㎝、横 0.8 ㎝、厚さ 0.7 ㎝。31 と同一個体の可能性がある。35 は縦 3.4+ ㎝、横 0.4 ～ 1.3 ㎝、厚さ 0.9 ㎝。先端を欠く。頭部は折れ曲がっている。中位には横方向の残存部が吸着している。36 は縦 2.9+ ㎝、横 0.4 ㎝、厚さ 0.5 ㎝。頭部を欠く。

210ST030d 出土遺物（Fig.72）

土師器

小皿 a（37） 底部破片。器高 1.05+ ㎝、復元底径 6.8 ㎝。色調は灰黄色。底部回転糸切り。

白磁

四耳壺（38） 器高 21.8+ ㎝、胴部最大径 19.8 ㎝、高台径 8.1 ㎝。口縁部頸部は打ち欠いている。内部には火葬骨が詰まっており、蔵骨器として転用して使われていた。

瓦類

平瓦（39、40） 39 は側端部の破片。縦 5.8 ㎝、横 7.6 ㎝、厚さ 1.9 ㎝。焼成は良好。還元炎焼成。凹面は布目痕跡。凸面は格子目叩き。側端部はヘラで分割線を入れたあとに、割っており、未調整。40 は広端部の破片。縦 13.1 ㎝、横 15.5 ㎝、厚さ 2.0 ㎝。焼成は良好。須恵質。色調は淡青灰色。胎土は 5mm 以下の白色粒子を大量に含む。側端部、広端部ともにヘラ切り調整。凹面凸面ともに仕上げは器具を使ったナデ調整を施す。

210ST030 周辺出土遺物（Fig.72、73）

瓦類

軒丸瓦（41 ～ 43） 41 ～ 43 は、巴紋。三つ巴でそれぞれ左巴である。41 は瓦頭径 15.0 ㎝、厚さ 1.85 ㎝。焼成はやや良好。瓦質。42 は瓦頭径 11.5+ ㎝、厚さ 1.8 ㎝。珠文は 9 つ。焼成はやや良好。瓦質。43 は瓦頭径 8.4 ㎝、厚さ 2.0 ㎝。焼成はやや良好。瓦質。

丸瓦（44 ～ 49） 44 は玉縁部をもつ破片。長さ 9.7+ ㎝、高さ 6.3+ ㎝、厚さ 2.7 ㎝。焼成はやや良好。燻し状態になっており瓦質。色調は淡暗黒灰色。胎土は 2mm 以下の白色粒子を少量含む。凸面調整は器具をつかったナデ調整。凹面は布目痕が残り、端部はヘラ切り後にヘラ調整をしている。45 は広端部の破片。長さ 7.8+ ㎝、幅 10.75 ㎝、厚さ 1.7 ㎝。凹面には布目痕が残り、端部をヘラ切り後にヘラで調整している。凹面広端部には 3.5cm ほどの幅でヘラ調整を施している。46 は玉縁部をもつ破片。長さ 9.7+ ㎝、高さ 6.3+ ㎝、厚さ 2.7 ㎝。焼成は良好。燻し状態になっており瓦質。色調は暗黒灰色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を少量含む。凸面調整は器具をつかったナデ調整。凹面は布目痕が残り、端部はヘラ切り後にヘラ調整をしている。長さ 18.3 ㎝、高さ 7.0 ㎝、厚さ 1.7 ㎝。47 は長さ 18.1 ㎝、高さ 6.7 ㎝、厚さ 1.8 ㎝。48 は長さ 14.7+ ㎝、高さ 6.7 ㎝、厚さ 1.7 ㎝。49 は長さ 9.7+ ㎝、高さ 5.5 ㎝、厚さ 1.9 ㎝。

平瓦（50、51、52） 50 は縦 14.1+ ㎝、横 12.0 ㎝、厚さ 1.7 ㎝。51 は縦 10.5+ ㎝、横 10.4+ ㎝、厚さ 1.9 ㎝。52 は縦 10.3+ ㎝、横 10.2+ ㎝、厚さ 1.9 ㎝。

210ST040 出土遺物（Fig. 73）

土師器

小皿 a1（53 ～ 63） 53 は復元口径 8.5 ㎝、器高 1.05 ㎝、底径 5.3 ㎝。54 は口径 8.65 ㎝、器高 1.05 ㎝、底径 6.0 ㎝。色調は黄灰色。底部糸切り後、板状圧痕。55 は口径 8.9 ㎝、器高 1.1 ㎝、底径 5.6 ㎝。色調は黄灰色。内面見込みに一定方向のナデ調整を施す。底部糸切り後、板状圧痕。56 は復元口径 9.0 ㎝、器高 1.15 ㎝、底径 6.6 ㎝。色調は黄灰色。底部糸切り。57 は復元口径 9.0 ㎝、器高 1.15 ㎝、底径 6.0 ㎝。58 は復元口径 9.1 ㎝、器高 1.15 ㎝、底径 5.0 ㎝。色調は黄灰色。底部糸

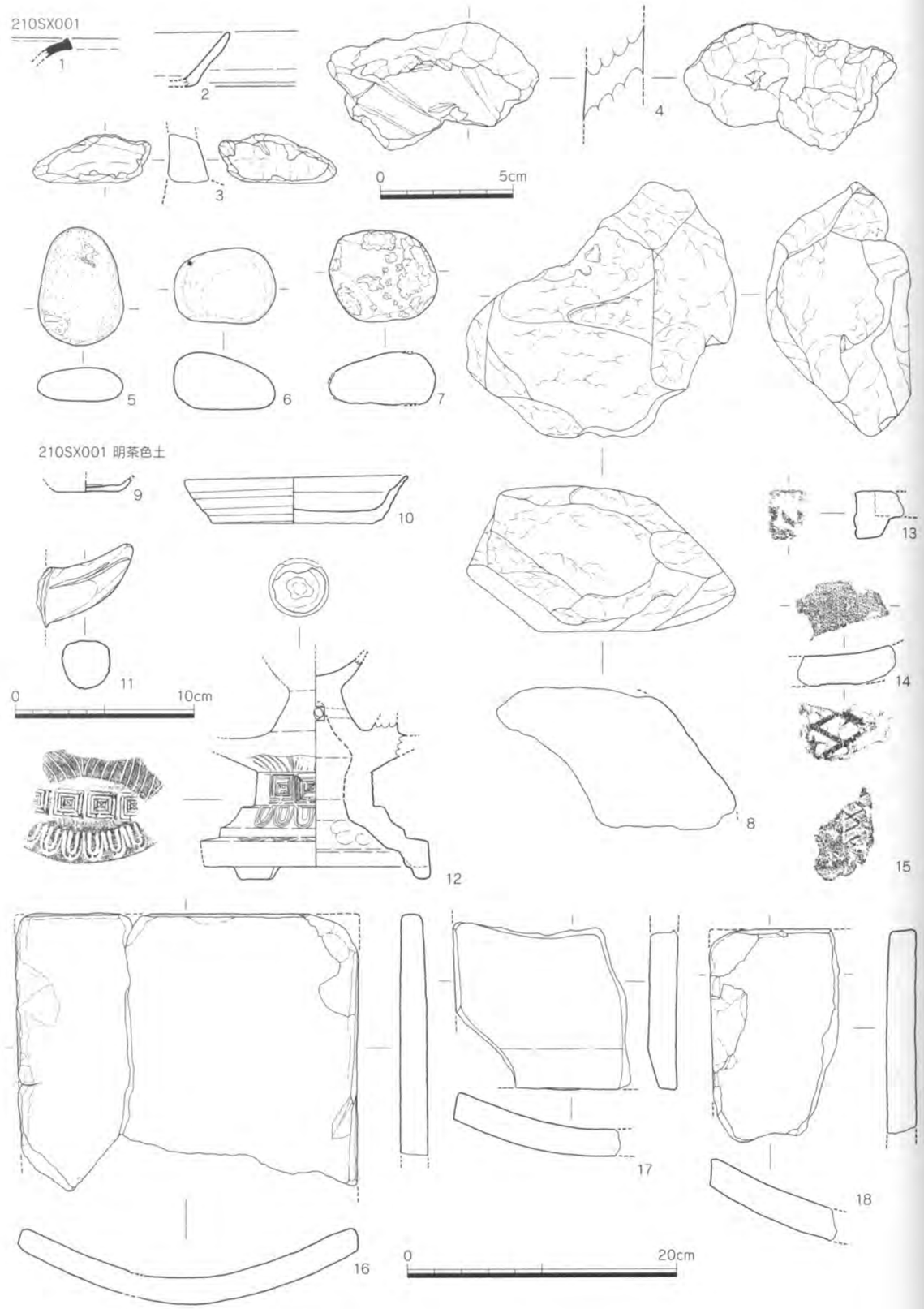


Fig.74 第210次調査その他の遺構出土遺物実測図その1（1/2、1/3、1/4）

切り後、板状圧痕。59は復元口径9.1㎝、器高1.45㎝、復元底径6.0㎝。色調は黄灰色。底部糸切り後、板状圧痕。60は口径9.2㎝、器高1.5㎝、底径6.1㎝。色調は黄灰色。見込み部には不定方向のナデ調整。底部糸切り後、板状圧痕。61は口径9.4㎝、器高1.15㎝、底径6.5㎝。色調は黄灰色。底部糸切り後、板状圧痕。62は復元口径9.6㎝、器高1.3㎝、復元底径5.3㎝。色調は黄灰色。底部糸切り後、板状圧痕。63は復元口径9.6cm、器高1.1cm、底径5.5cm。色調は黄灰色。底部糸切り後、板状圧痕。XⅣ期前後か。

坏a（64）　口径15.6㎝、器高2.95㎝、底径11.1㎝。焼成はやや良好。色調は褐茶色。胎土は2mm以下の白色粒子を少量含む。内外面、回転ナデ調整。底部切り離し技法はヘラ切り。XⅣ期。

金属製品

釘（65～68）　65から68はすべて鉄製の角釘である。65は縦8.4㎝、横1.7㎝、厚さ2.3㎝。木質が釘全体に付着している。木目は縦方向。釘の頭部は折れ曲がっている。66は縦8.2+㎝、横1.8㎝、厚さ1.3㎝。頭部は広がっており、先端はわずかに欠く。釘の頭部に近い部位には木質が確認でき横方向である。67は縦7.0+㎝、横1.3㎝、厚さ1.2㎝。先端をわずかに欠く。頭部近くに付着している木質は横方向の木目が確認できる。68は縦6.9+㎝、横1.2㎝、厚さ1.1㎝。頭部と先端を欠く。木質が全面に吸着しており、木目は縦方向に確認できる。

刀子（69）　全長18.9㎝、刃部長15.1㎝、刃部最大幅2.8㎝、厚さ0.6㎝。枝の部分に木質が残存している。

その他の遺構出土遺物

210SX001 出土遺物（Fig. 74）

須恵器

小壺（1）　口縁部の破片。器高1.1+㎝。

土師器

杯a（2）　器高3.1+㎝。色調は淡灰黄色。器壁が風化して調整は不明。

石製品

滑石製石鍋（3、4）　3は器高1.8+㎝。4は器高4.8+㎝。2点とも滑石製石鍋の破片である。積極的な転用の跡は見られない。

玉石（5～7）　5～7、すべて表面は滑らかである。5は縦4.4㎝、横3.2㎝、厚さ1.25㎝。6は縦2.8㎝、横3.8㎝、厚さ2.1㎝。7は縦3.4㎝、横4.0㎝、厚さ2.0㎝。

五輪塔

火輪（8）　火輪の破片。縦19.2+cm、横20.0+cm、厚さ10.8+cm。阿蘇凝灰岩製。

210SX001 明茶色土出土遺物（Fig. 74、75、Pla.4-2）

土師器

小皿a1（9）　器高0.7+㎝。底径3.4㎝。焼成は不良。色調は茶灰色。

杯a（10）　口径12.5㎝、器高2.55㎝、底径8.8㎝。底部切り離しは回転糸切り、その後に板状圧痕。XⅦ～XⅧ期。

須恵器

取手（11）　縦4.2+㎝、横5.3+㎝、厚さ2.7㎝。焼成は良好。還元炎焼成。色調は青灰色。胎土は1mm以下の白色粒子が極少量含まれる。取手の下部に3本の線刻が入る。

土師器

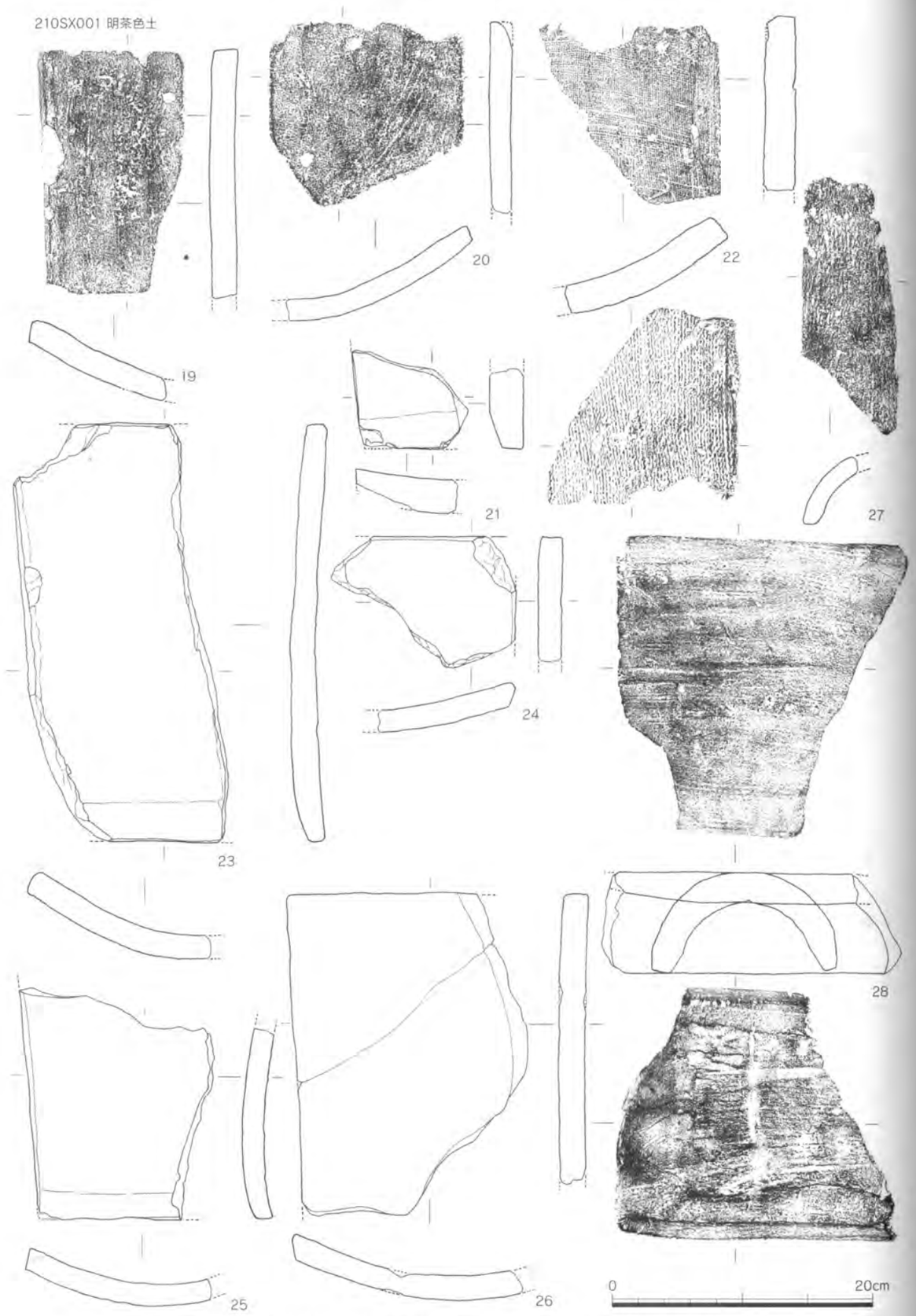


Fig.75　第 210 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 2（1/4）

乗燭（12）　器高 12.2+ ㎝、復元底部径 12.5 ㎝。焼成は良好だが、器壁には中央に黒色変化してサンドイッチ状に焼き上がっている。色調は明灰黄色。胎土は 2mm 以下の白色粒子をごく少量含む。高台は台形をしたものが2つ残存しており、欠損部との位置関係を考えると本来は 3 脚と考えてよい。円形の台座の上面にスタンプによる波文様が巡る。その上には簡略化した蓮華紋をスタンプしている。体部は円柱状をしており、そこにも方形が連なるスタンプを押す。体部上位に軒のように張り出し部があり、張り出し部の下部に、線刻による蓮華紋を施す。張り出し部は欠損しているため形はわからないが、横方向と上方向にのびるものと考えられる。上にのびている部位は、ぐるりと円形に巡ると考えられる。張り出し部の上部中央には、小さい椀状のものに円錐形の脚が付いており、器台に似ている。その脚部には直径 5mm の穿孔が貫通して対角線上に 2 つ開けられている。特殊な形をしており、仏具関係と考えられる。

瓦類

軒平瓦（13）　軒部破片。縦 4.3+ ㎝、横 4.0 ㎝、厚さ 1.9 ㎝。焼成はやや良好。色調は黄灰色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を少量含む。

平瓦（14 ～ 26）14 は破片。縦 6.1+ ㎝、横 7.9+ ㎝、厚さ 2.3 ㎝。焼成は良好。色調は暗灰色。凹面に格子叩き。凸面には布目痕。15 は破片。縦 8.3+ ㎝、横 4.7+ ㎝、厚さ 2.5 ㎝。焼成はやや良好。色調は淡赤黄色。凹面に格子叩き。16 は広端部の破片。縦 20.7+ ㎝、横 25.6+ ㎝、厚さ 2.0 ㎝。焼成はやや不良。色調は灰黄色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を多量に含む。器壁が風化しており調製は不明。側端部はヘラ切り。17 は挟端部の破片。縦 12.4+ ㎝、横 13.3+ ㎝、厚さ 2.1 ㎝。焼成は良好。色調は淡黄灰色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を少量含む。凹面凸面ともにナデ調製。側端部はヘラ切り。凹面挟端部には幅 2.8cm 程度の範囲を帯状にヘラ調整をしている。18 は広端部の破片。縦 15.8+ ㎝、横 10.8+ ㎝、厚さ 2.3 ㎝。焼成は良好。色調は暗灰色。胎土は 2mm 以下の白色粒子を少量含む。端部はヘラ切り。19 は広端部破片。縦 19.3+ ㎝、横 10.9+ ㎝、厚さ 1.9 ㎝。20 は広端部破片。縦 14.7+ ㎝、横 14.2+ ㎝、厚さ 1.7 ㎝。19 と 20 は接合して 1 つの破片となる。同じ破片として詳細を記載する。焼成はやや良好。色調は黄灰色。胎土は、5mm 以下の白色粒子を少量含む。凹面凸面ともにナデ調整。側端部はヘラで垂直に切り落とし。21 は挟端部破片。縦 7.6+ ㎝、横 8.8+ ㎝、厚さ 2.6 ㎝。焼成は良好。色調は灰黄褐色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を少量含む。側端部はヘラ切り。凹面はナデ調整。凸面は表面剥離のため不明。挟端面凹面には幅 3cm ほどの帯状ヘラ削り調整を挟端面端部に向かって斜めに行っている。22 は端部の 2 方向が確認できる破片。縦 15.5+ ㎝、横 13.5+ ㎝、厚さ 2.4 ㎝。焼成は良好。やや須恵質。色調、灰白色～暗灰色。4mm 以下の白色粒子を少量含む。1mm 程度の黒色粒子を多く含む。凹面布目痕、凸面は縄目。端部切り落としはヘラで内側に向かって切られている。端部の凹面側はヘラケズリ調整を施している。23 は端部 3 方向が確認できる破片。縦 32.2 ㎝、横 16.4+ ㎝、厚さ 1.9 ㎝。焼成は不良。色調は黄灰色。胎土は 7mm 以下の白色粒子を多く含む。狭端部凹面に 2.2cm 程度の帯状の削りを挟端面端部に向かっておこなう。24 は端部が 2 方向確認できる破片。縦 10.1+ ㎝、横 14.1+ ㎝、厚さ 1.8 ㎝。焼成はやや良好。色調は黄灰色。3mm 以下の白色粒子を多量に含む。1mm 程度の金色雲母をごく少量含む。側端部はヘラ切り。推定広端部はヘラ削り調整。25 は端部の 2 方向が確認できる破片。縦 17.7+ ㎝、横 15.0+ ㎝、厚さ 1.7 ㎝。焼成は良好。須恵質。色調は灰青色。胎土は 5mm 以下の白色粒子を大量に含む。凹面凸面ともにナデ調整。挟端面凹面には幅 2.5cm ほどの帯状ヘラ削り調整を挟端面端部に向かって斜めに行っている。全体的に歪んでいる。26 は 2 方向の端部が確認できる破片。縦 24.8+ ㎝、横 18.5+ ㎝、厚さ 1.9 ㎝。焼成はやや不良。色調は明黄灰色。胎土は 6mm 以下の白色粒子を多量に含む。表面が風化しており調整は

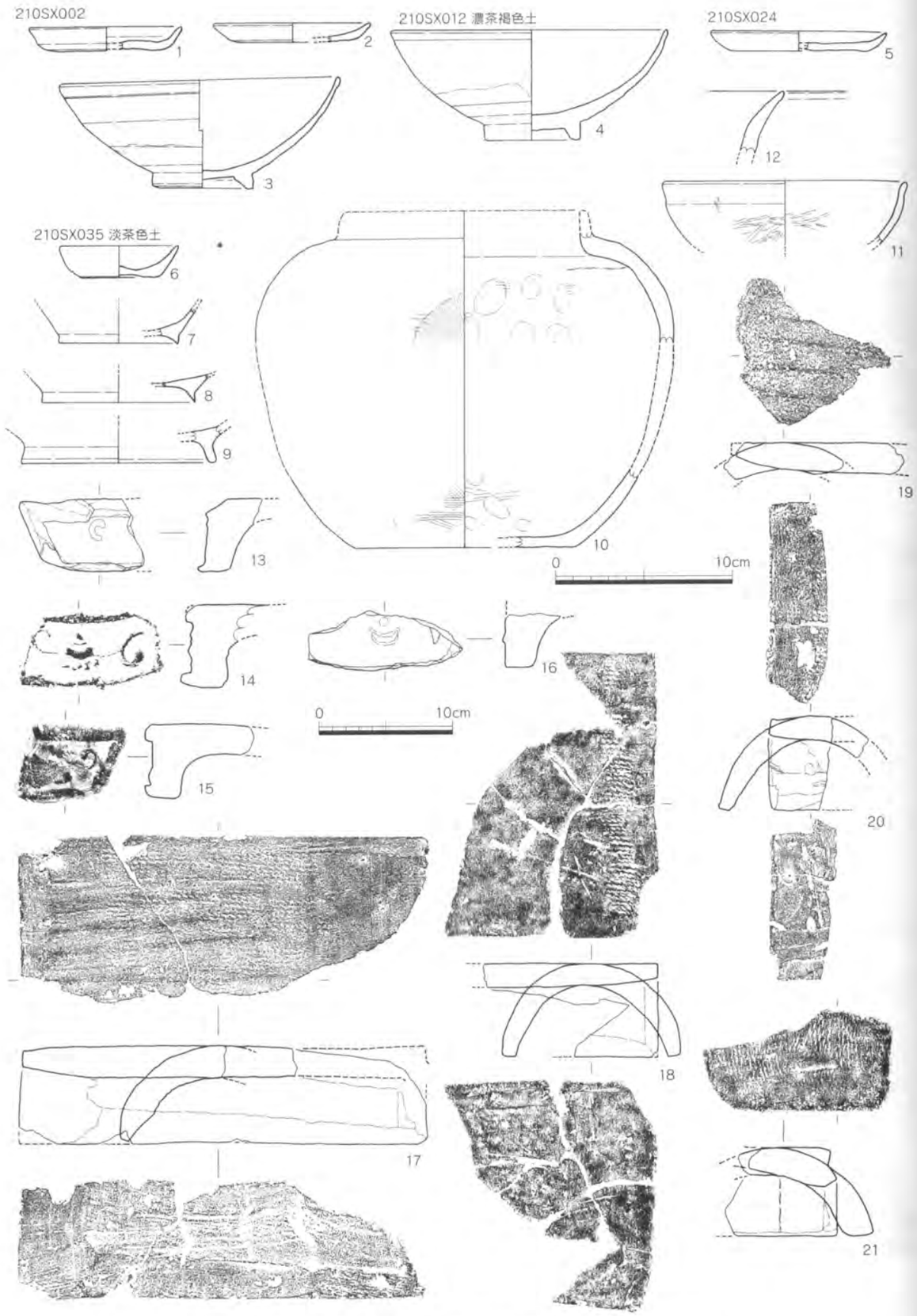


Fig.76　第 210 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 3（1/3、1/4）

不明。

丸瓦（27、28）　27 は側縁部が 1 方向確認できる破片。縦 19.5+ ㎝、横 4.2+ ㎝、厚さ 1.4 ㎝。焼成はやや不良。瓦質。断面の色調が焼成不良のためサンドイッチ状に黄色に挟まれた黒色部が存在している。色調は暗黒灰色～黄灰色。胎土は、4mm 以下の白色粒子を多量に含む。凹面の調整は摩耗により不明。凸面は縄目叩き。28 は側縁部と広端部が確認できる破片。縦 23.2+ ㎝、横 14.2+ ㎝、厚さ 2.3 ㎝。焼成は良好。還元炎焼成でよく焼き締まっている。須恵質。色調は、明青灰色。胎土は 5mm 程度の白色粒子を少量含む。凹面には布筒と模骨痕跡が確認できる。側縁部と広端部はヘラ切りしたあとにヘラで調整をしている。凸面は縄目叩きの後、工具をつかったナデ調整が行われている。

210SX002 出土遺物（Fig.76）

土師器

小皿a1（1、2）　1は復元口径8.6㎝、器高1.4㎝、復元底径6.8㎝。2は復元口径8.9㎝、器高1.1㎝、底径7.0㎝。

白磁

椀（3）口径 15.8 ㎝、器高 6.1 ㎝、高台径 5.8 ㎝。Ⅳ -2a 類。

210SX012 濃茶褐色土出土遺物（Fig.76）

白磁

椀（4）口径 15.5 ㎝、器高 6.2 ㎝、高台径 5.4 ㎝。Ⅱ類。

210SX024 出土遺物（Fig.76）

土師器

小皿a1（5）　復元口径9.9㎝、器高1.1㎝、復元底径7.5㎝。

210SX035 淡茶色土出土遺物（Fig.76 ～ 86）

土師器

小皿 b（6）　復元口径 6.7 ㎝、器高 1.8 ㎝、底径 4.4 ㎝。

椀c（7）器高1.85+㎝、復元高台径6.7㎝。

椀（8、9）　8 は器高 1.6+ ㎝、復元底径 8.6 ㎝。9 は器高 2.1+ ㎝、復元底径 11.0 ㎝。

甕（10）　推定器高 10.8+ ㎝、復元底径 12.2 ㎝。

黒色土器（B 類）

椀（11）　復元口径 13.8 ㎝、器高 3.6+ ㎝。

瓦質土器

甕（12）　器高 3.5+ ㎝。口縁部破片。口縁部は外反している。焼成は不良。胎土は 0.5 ～ 0.3mm の白色粒子を多く含む。内外面の調整は、器壁の摩滅により不明瞭。

瓦類

軒平瓦（13 ～ 16）　13 は縦 5.5+ ㎝、横 9.4+ ㎝、厚さ 3.0 ㎝。14 は縦 6.2 ㎝、横 10.1 ㎝、厚さ 2.8 ㎝。15 は縦 6.0 ㎝、7.8+ ㎝、厚さ 2.5 ㎝。16 は縦 4.5 ㎝、横 11.5 ㎝、厚さ 2.5 ㎝。

丸瓦（17 ～ 24）　17 は玉縁部を欠損するが、わずかに凸面狭端縁連結面が残る。広端面と側面が残存している破片。凸面は布目の叩き痕跡が残るが、長軸に対して平行な強いナデ調整を施す。広端面、狭端面に近い箇所は横方向のヘラ削りを施す。凹面には布目痕跡が残存し、吊り紐痕も確認できる。端部はヘラ削りにより調整している。色調は灰白色。焼成はやや良好で、須恵質。胎土は 3mm 程度の白色粒子を多く含む。1cm ほどの長石縦 30.6 ㎝、横 8.6+ ㎝、厚さ 2.4 ㎝。18 は長さ 13.15+ ㎝、幅 13.4 ㎝、厚さ 1.65 ㎝。19 は縦 13.0+ ㎝、横 10.5+ ㎝、厚さ 2.1 ㎝。20 は広端面と側面の 2 面が

残る破片。縦 4.7 ㎝、横 11.3 ㎝、厚さ 1.8 ㎝。調整は、17 と同じで端面を丁寧にヘラ削り調整をしている。側面から広端面に接するコーナーは他の半分程度の厚みに削って調整している。焼成はやや良好で、還元炎焼成。色調は淡赤灰色。21 は長さ 6.5 ㎝、幅 10.0+ ㎝、厚さ 2.2 ㎝。22 はほぼ完形。縦 36.3 ㎝、横 14.5 ㎝、厚さ 2.1 ㎝。焼成は良好。色調は黄灰色～灰青色。胎土は 7mm 以下の白色粒子を大量に含む。凹面には布目痕が残り、3 箇所ほど吊り紐痕跡も確認できる。端部はすべてヘラ切り後にヘラ削り調整を行っている。また凹面の側端部側は 2 ～ 2.5cm の幅でヘラ削りによって形を整えている。また凹面の広端部は端部から 5cm ほどの範囲をヘラで削りとり薄く仕上げている。凸面は縄目叩きの後に、器具をつかったナデ調整を長軸方向にそろえて施すことでナデ消している。23 は一部を欠くがほぼ完形。全体的に 22 と同じ成形・調整である。縦 35.9 ㎝、横 14.5 ㎝、厚さ 2.4 ㎝。焼成は良好。22 に比べると還元炎焼成。色調は明灰青色～暗青色。24 は玉縁部をもつ丸瓦。22 と同様の成形・調整である。縦 36.9 ㎝、横 7.4 ㎝、厚さ 2.3 ㎝。焼成はやや良好。色調は灰黄色。胎土は 6mm 以下の白色粒子を大量に含む。

平瓦（25 ～ 75） 25 はほぼ完形。縦 34.2 ㎝、横 23.8 ㎝、厚さ 1.9 ㎝。焼成はやや良好。色調は淡赤褐色～暗灰色。胎土は 5mm 以下の白色粒子を大量に含む。側端部はヘラ切り。凹面狭端部は 1.2cm の帯状にヘラ調整を行っている。表面は風化が進んでいるが、残存部から判断するとナデ調整を施している。26 は端部が 2 方向確認できる破片。縦 7.8+ ㎝、横 8.1+ ㎝、厚さ 2.2 ㎝。焼成は不良。色調は灰白色。胎土は 2mm 以下の白色粒子を大量に含む。表面が風化して調整は不明。27 は広端部破片。縦 11.2+ ㎝、横 10.0+ ㎝、厚さ 1.8 ㎝。焼成は良好。色調は淡赤青色。胎土は 4mm 以下の白色粒子を大量に含む。端部はヘラ切り。凹面凸面ともにナデ調整。28 は狭端部の破片。縦 12.7+ ㎝、横 9.7+ ㎝、厚さ 2.3 ㎝。焼成は良好。色調は淡赤灰色。胎土は 5mm 以下の白色粒子を大量に含む。側端部はヘラ切り。凹面狭端部に幅 1.5cm のヘラ調整を行う。29 は端部が 3 方向確認できる破片。縦 28.7+ ㎝、横 24.7+ ㎝、厚さ 2.5 ㎝。焼成はやや良好。色調は暗黒灰色～灰黄色。挟端部側がややいぶし気味に暗黒灰色を呈す。胎土は 5mm 以下の白色粒子を多量に含む。側縁部は垂直に切り落とされており、ヘラ削り調整を行っている。調整はナデ調整。30 は 1 方向の側縁部が確認できる破片。縦 9.0+ ㎝、横 7.9 ㎝、厚さ 1.8 ㎝。焼成はやや不良。色調は灰黄色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を多量に含む。表面の摩耗のため調整は不明。側縁部は垂直に切り落としされ、調整はヘラで行われている。31 は端部 3 方向が確認できる破片である。縦 30.5 ㎝横 24.5+ ㎝、厚さ 2.2 ㎝。焼成はやや不良。表面に重ね焼きの痕跡か、暗灰色の箇所と明赤茶色の箇所が存在している。暗灰色の箇所は焼き締まっているので、明赤茶色部分が重ねられた箇所か。色調は暗灰色～明赤茶色。胎土は 10mm 以下の白色粒子を多量に含む。調整はナデ調整。側縁調整はヘラ削り調整。挟端面凹面には幅 2cm ほどの帯状ヘラ調整を挟端面端部に向かって斜めに行っている。32 は挟端面近くの破片。縦 14.5+ ㎝、横 9.7+ ㎝、厚さ 1.8 ㎝。焼成はやや不良。色調は灰黄色。胎土は 5mm 以下の白色粒子を多量に含む。表面の調整はナデ調整。凹面挟端部には、1.3 ～ 1.8mm の幅でヘラ調整が帯状に行われている。33 は端部が 2 方向確認できる破片。縦 16.3+ ㎝、横 16.7+ ㎝、厚さ 2.4 ㎝。焼成はやや不良。瓦質。胎土は 3mm 以下の白色粒子を少量含む。摩耗のため調整は不明。側縁部は垂直に切り落とされている。34 は欠けてはいるが、全体の寸法が復元できる個体である。縦 34.1 ㎝、横 24.1 ㎝、厚さ 1.8 ㎝。焼成は良好。やや還元炎焼成。胎土は 1 ～ 7mm 程度の白色粒子を多量に含む。側縁部は垂直に切り落とされている。側縁調整はヘラ削り調整。挟端面凹面には幅 2.5cm ほどの帯状に、挟端面端部に向かって斜めにヘラ調整を行っている。35 は 2 方向確認できる破片。焼成は良好。やや還元炎焼成。胎土は 3 ～ 10mm 程度の白色粒子を多量に含む。色調は淡黄灰色。凹面凸面ともに一定方向のナデ調整を施されている。広端面凹面

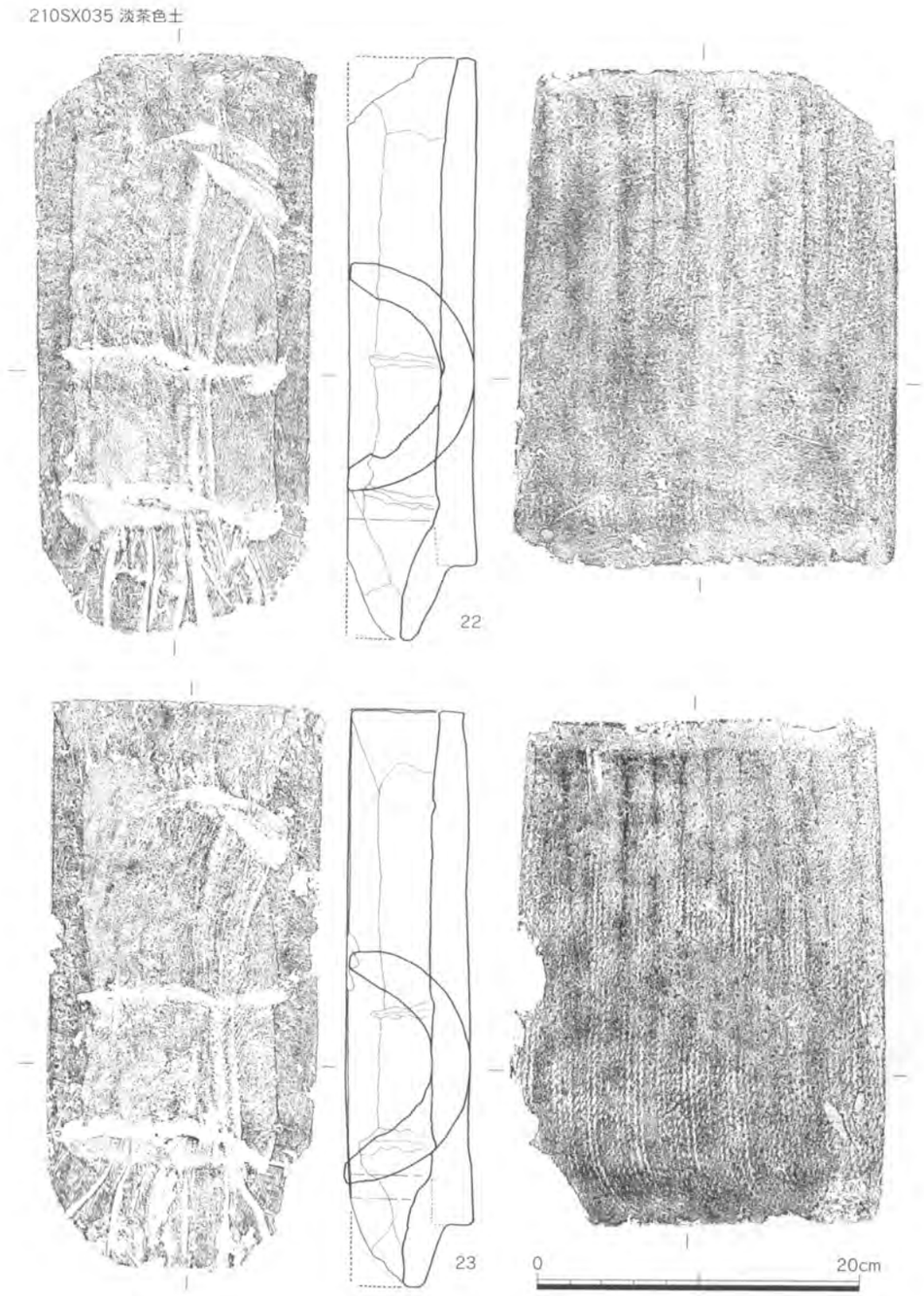


Fig.77 第 210 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 4（1/4）

210SX035 淡茶色土

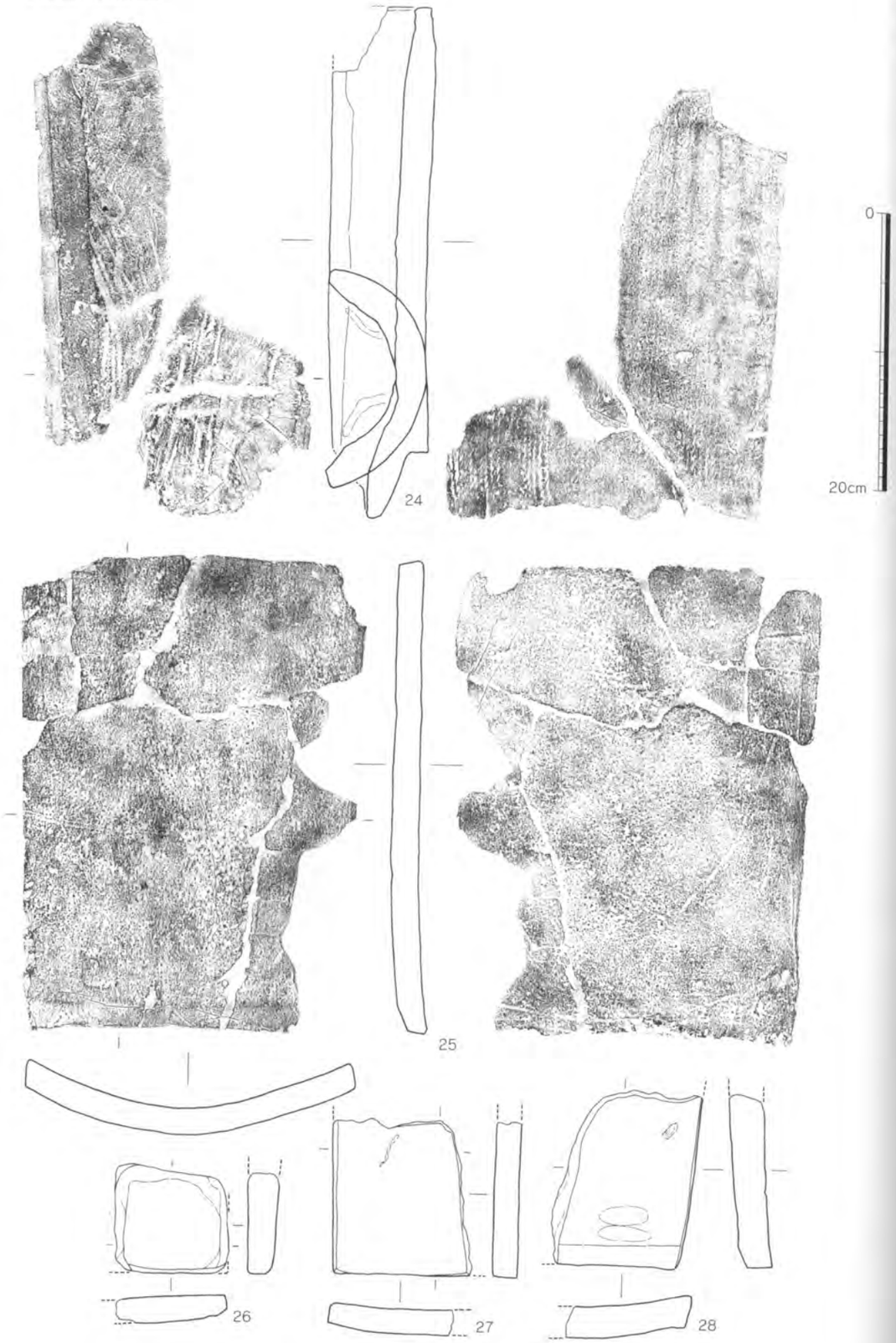


Fig.78　第 210 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 5（1/4）

210SX035 淡茶色土

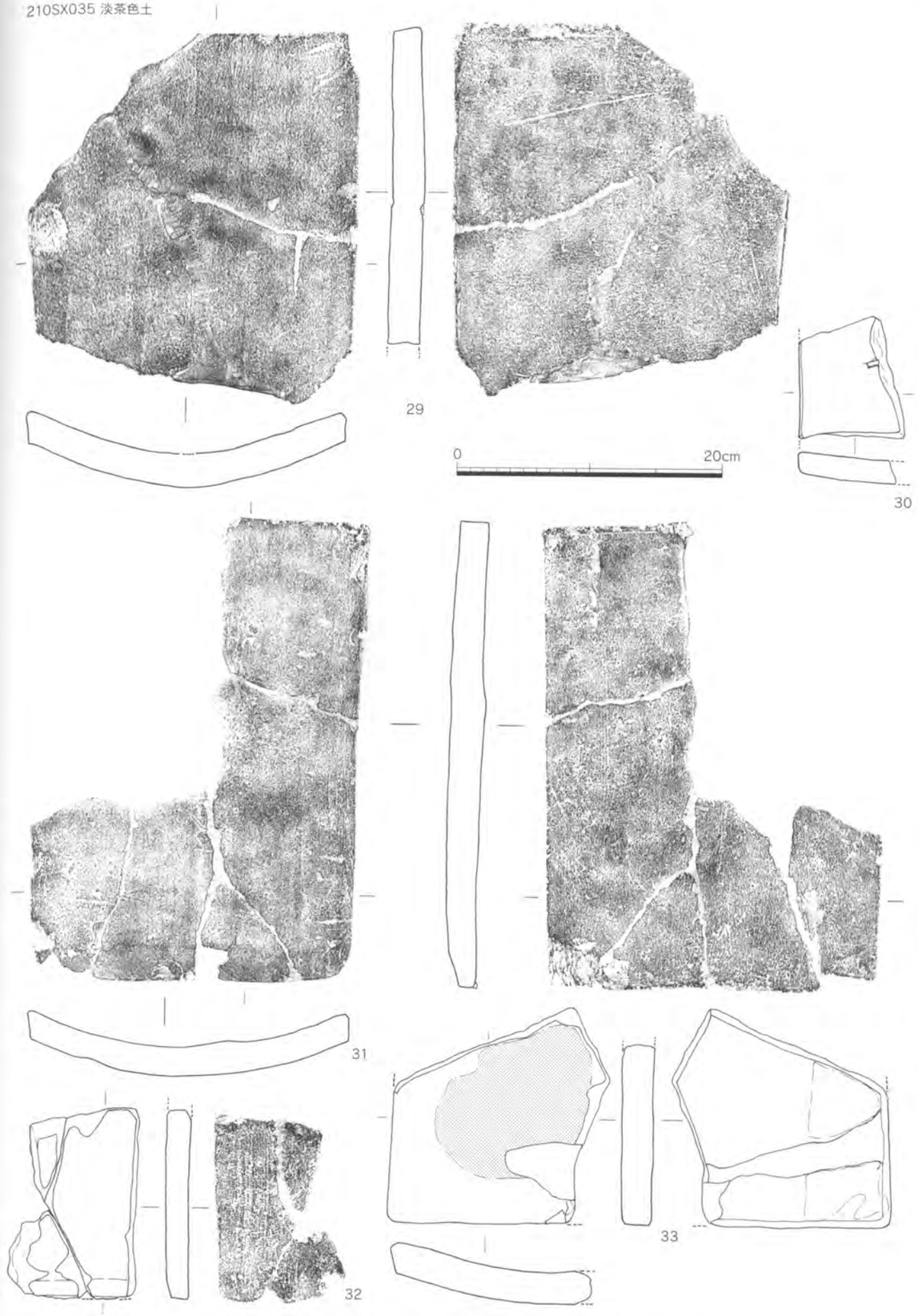


Fig.79　第 210 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 6（1/4）

210SX035 淡茶色土

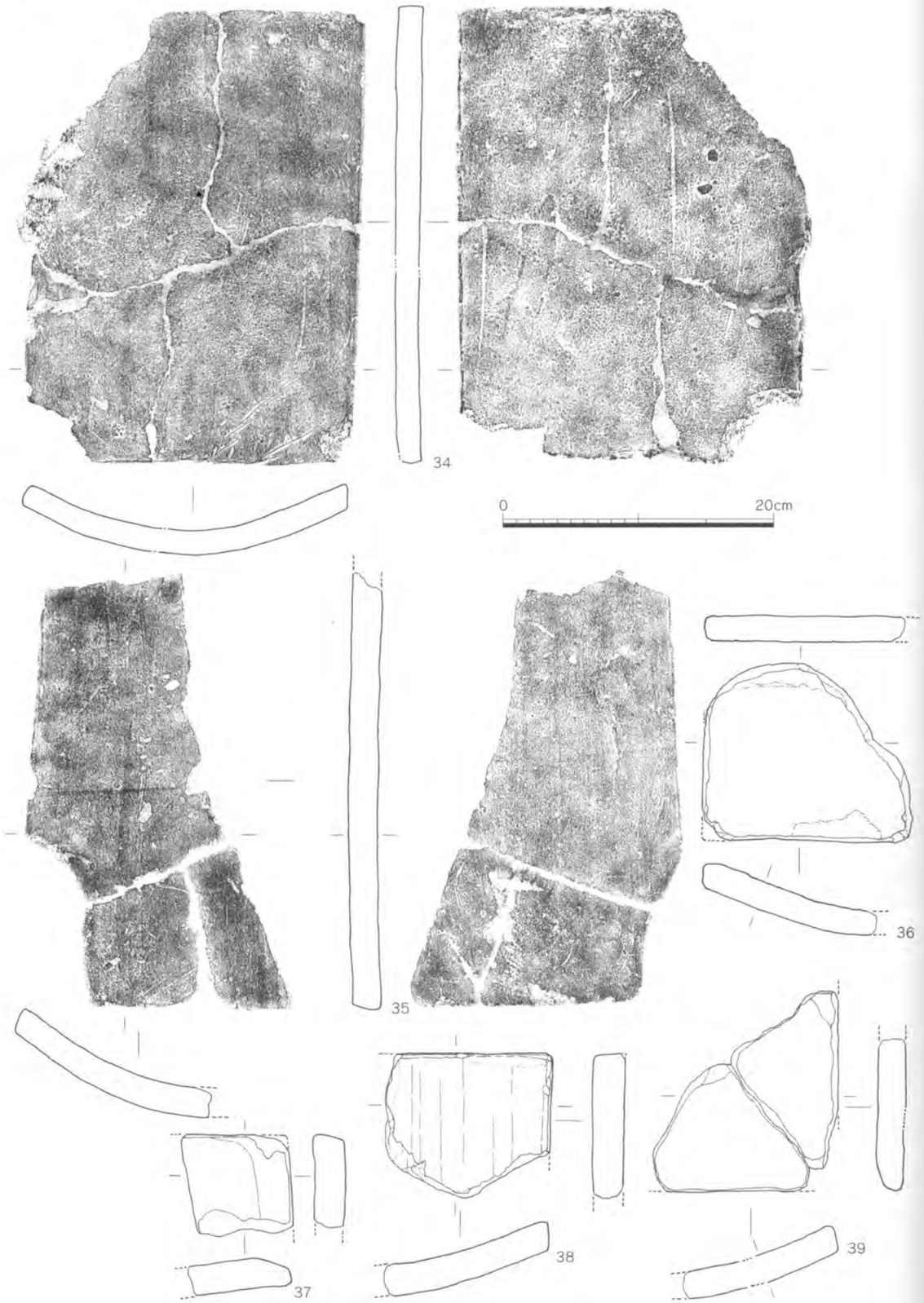


Fig.80　第 210 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 7（1/4）

210SX035 淡茶色土

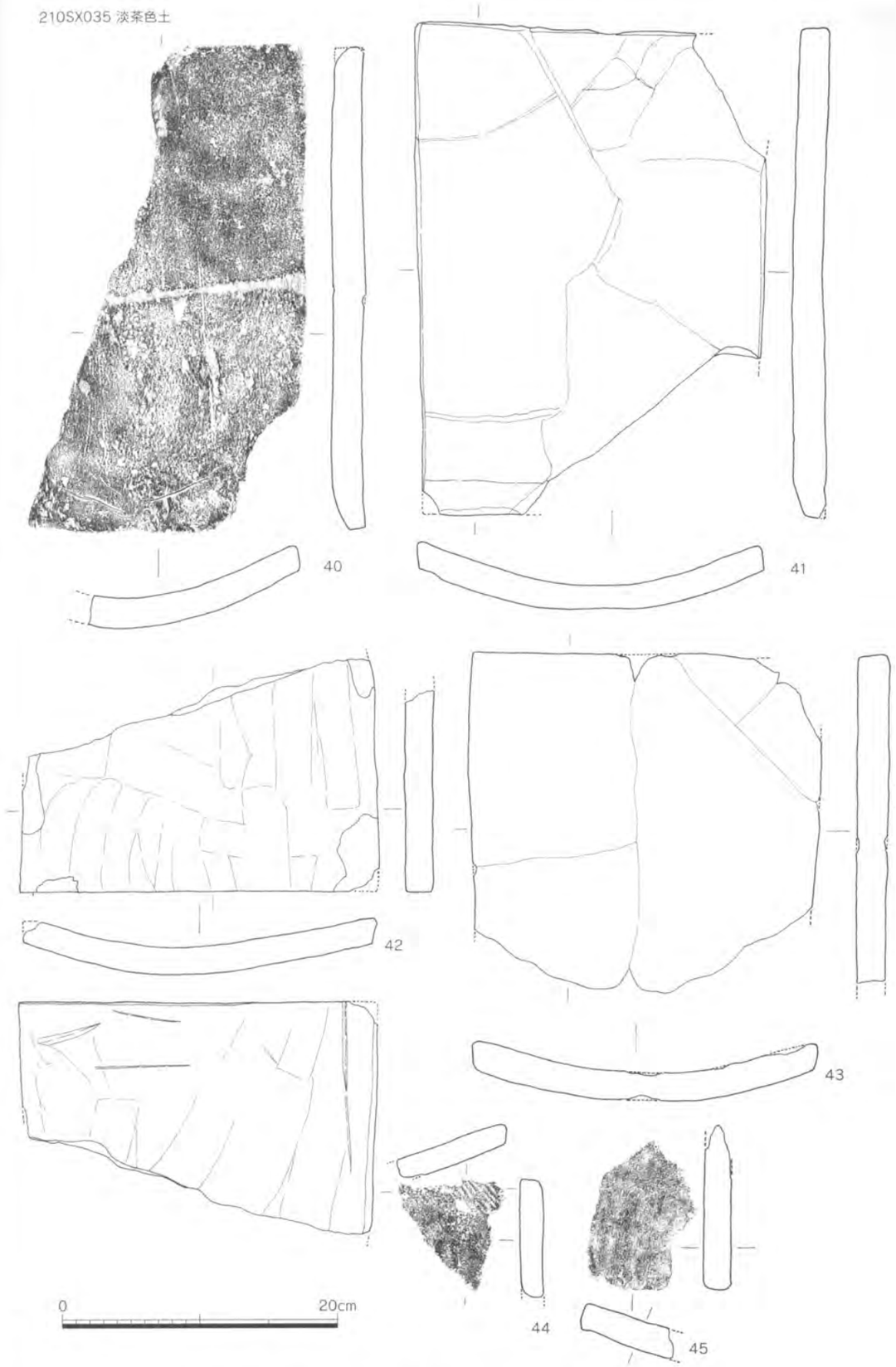


Fig.81　第 210 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 8（1/4）

210SX035 淡茶色土

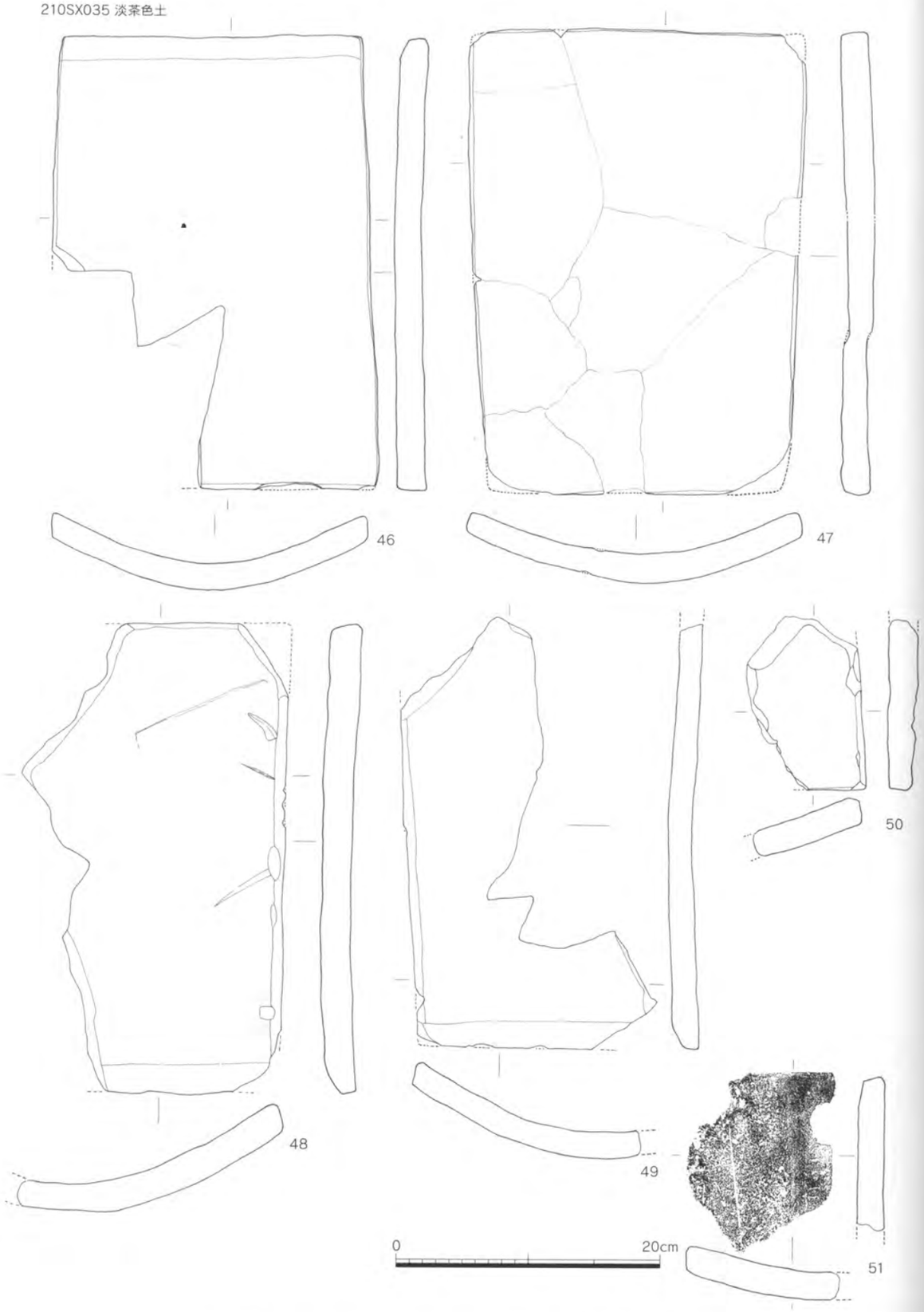


Fig.82　第 210 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 9（1/4）

210SX035 淡茶色土

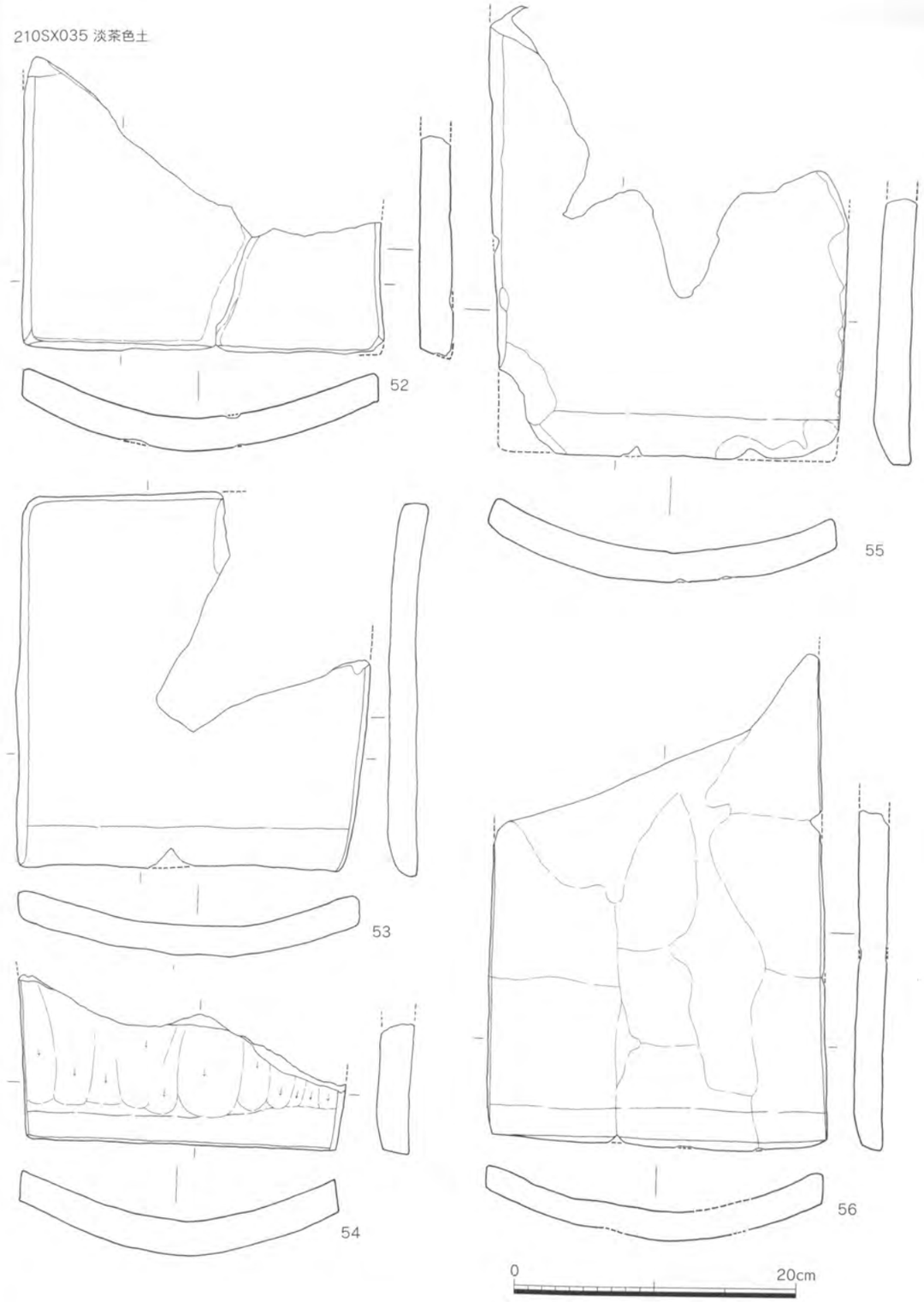


Fig.83　第 210 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 10（1/4）

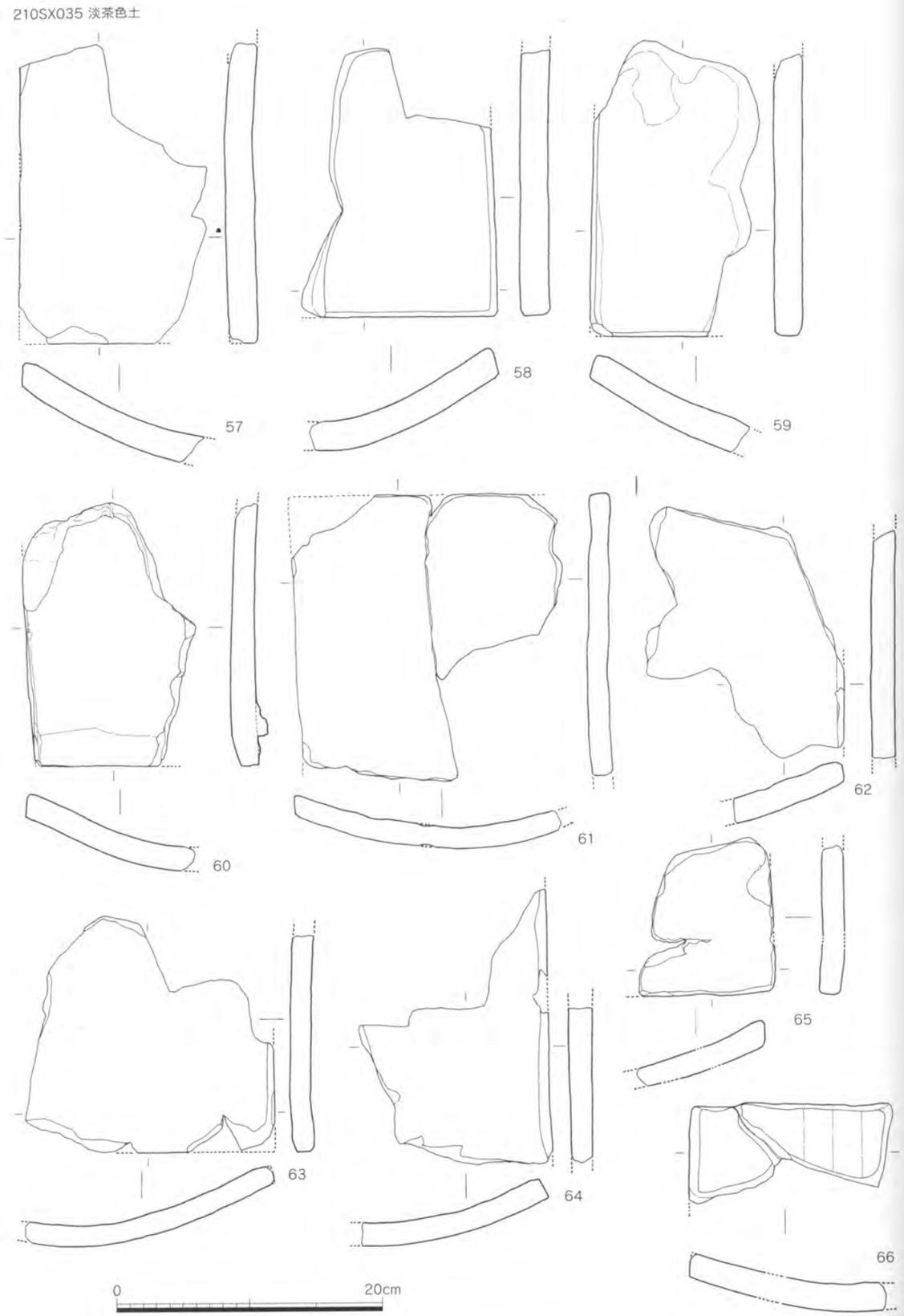


Fig.84　第 210 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 11（1/4）

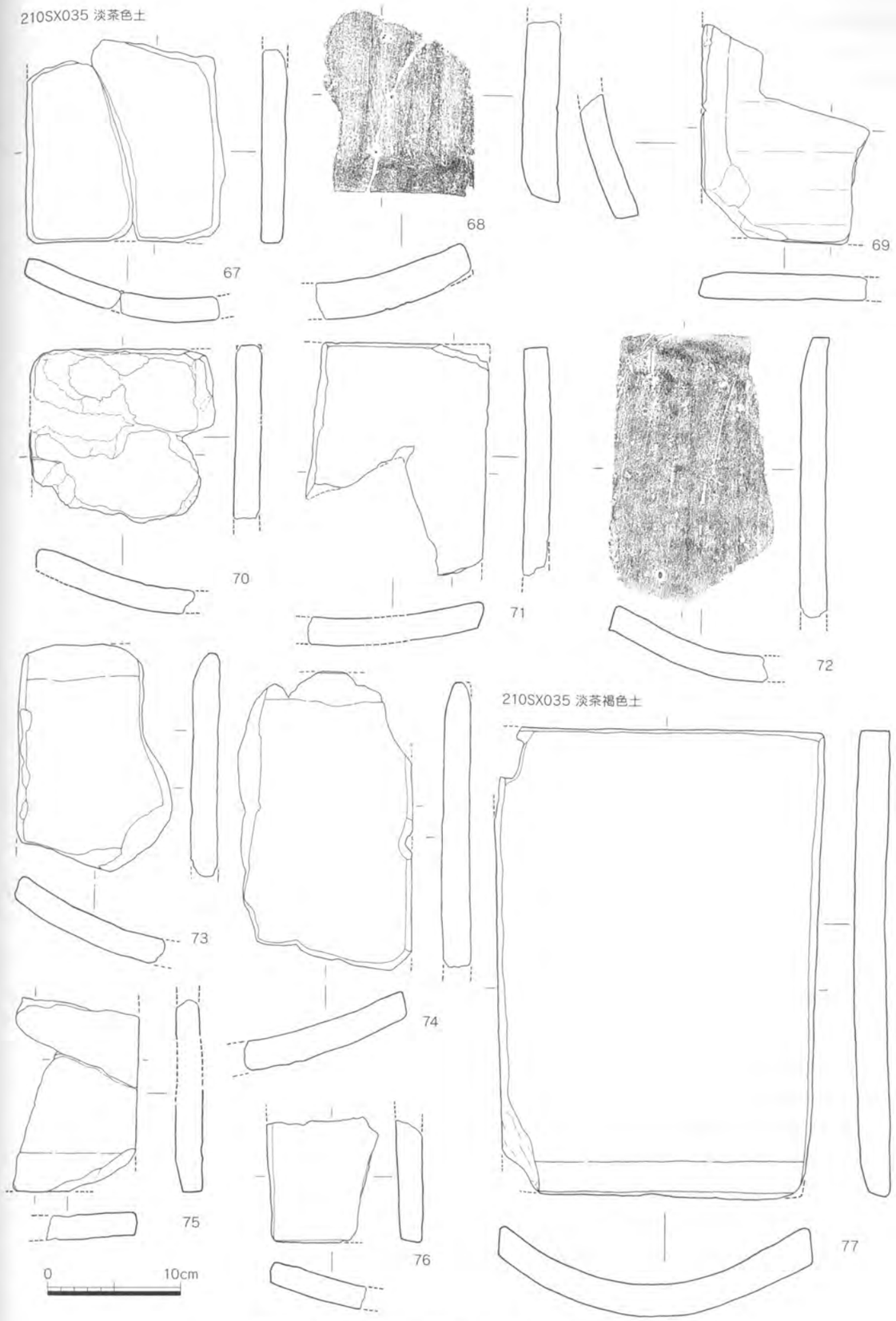


Fig.85　第 210 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 12（1/4）

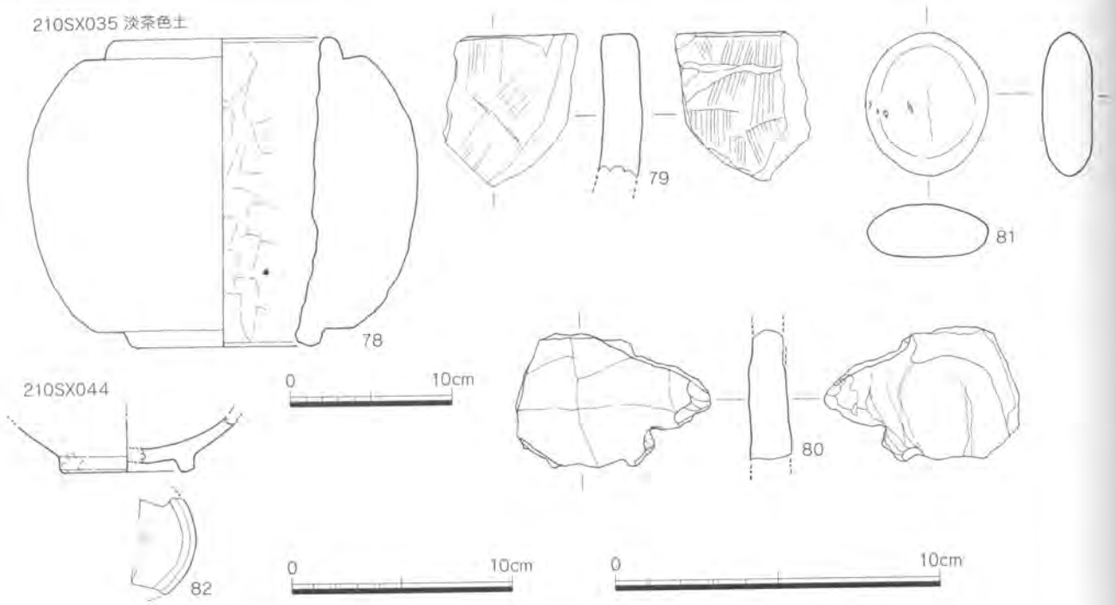


Fig.86　第 210 次調査その他の遺構出土遺物実測図その 13（1/2、1/3、1/4）

側にわずかだが、粘土切り離しのため糸で引いた痕跡が認められる。側縁部は垂直に切り落とされている。側縁調整はヘラ削り調整。縦 32.4+ ㎝、横 11.5+ ㎝、厚さ 2.1 ㎝。36 は端部 2 方向が確認できる破片。縦 15.7 ㎝、横 13.2+ ㎝、厚さ 2.0 ㎝。焼成は不良。1 ～ 5mm 程度の白色粒子を多量に含む。色調は明黄灰色。凹面の調整はナデ調整。凸面は表面の剥離により調整は不明。37 は端部の 2 方向が確認できる破片。縦 7.6+ ㎝、横 8.1+ ㎝、厚さ 2.35 ㎝。焼成は不良。色調は灰黄色。器壁の摩耗で調整は不明瞭。凹面に 2.5cm ほど斜めにヘラ調整を行っているため、こちら側が挟端面だと理解できる。端部は垂直に切り落とし、ヘラ削り調整を行っている。38 は端部 2 方向が確認できる破片。縦 10.7+ ㎝、横 12.4+ ㎝、厚さ 2.3 ㎝。焼成は不良。1 ～ 5mm 程度の白色粒子を多量に含む。色調は明黄灰色。端部の一部は明灰色。凹面の調整は一定方向のナデ調整。凸面は表面の剥離により調整は不明。側縁部は垂直に切り落とされている。側縁調整はヘラ削り調整。39 は端部の 2 方向が確認できる破片。縦 14.7+ ㎝、横 13.7+ ㎝、厚さ 2.1 ㎝。焼成は不良。器壁は摩滅して調整は不明。40 は端部が 3 方向確認できる破片。縦 35.2 +㎝、横 20.2+ ㎝、厚さ 2.15 ㎝。焼成はやや不良。瓦質。色調は暗灰色。胎土は 5mm 以下の白色粒子を多く含む。調整はナデ調整。側縁部は直線的にヘラ切りしている。挟端部凹面側に、幅 3.0cm ほどの帯状に、端部に向かうヘラ調整を行っている。41 は 4 方向の端部がわかる破片。縦 35.8 ㎝、横 25.2 ㎝、厚さ 2.0 ㎝。焼成はやや不良。色調は淡茶灰色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を少量含む。凹面挟端部に幅 2.0cm ほどのヘラ調整が帯状に施される端部はヘラ切り調整。42 はおそらく広端部破片。縦 16.95+ ㎝、横 26.1+ ㎝、厚さ 2.0 ㎝。焼成は良好。やや還元炎焼成。色調は、赤灰色～薄青灰色。胎土は 1mm ～ 7mm までの白色粒子を多量に含む。表面調整はナデ調整。側端部はヘラ切り落とし後、端部を少し丸く調整している。広端部はヘラ削り調整。43 は端部が 3 方向確認できる破片。縦 24.4+ ㎝、横 25.5 ㎝、厚さ 2.1 ㎝。焼成は不良。色調は黄灰色。胎土は 4mm 以下の白色粒子を多量に含む。端部はヘラ切り。器壁の調整は表面の風化により判別ができない。44 は端部が 2 方向確認できる破片。縦 12.0+ ㎝、横 8.7+ ㎝、厚さ 2.2 ㎝。焼成はやや不良。色調は黄

灰色。摩耗のため調整は不明。端部はヘラ切りの可能性が高い。44 は端部が 2 方向確認できる破片。縦 8.8+ ㎝、横 8.1+ ㎝、厚さ 2.1 ㎝。焼成はやや良好。色調は灰黄色。やや暗灰色を呈す箇所あり。胎土は 10mm 以下の白色粒子を大量に含む。側縁部はヘラ切り。45 は縦 8.3+ ㎝、横 8.0+ ㎝、厚さ 1.7 ㎝。46 は一部を欠損するが復元するとほぼ元の寸法がわかる個体である。縦 34.4 ㎝、横 24.8+ ㎝、厚さ 2.0 ㎝。焼成はやや不良。色調は灰白色～淡茶灰色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を多量に含む。側端部・挟端部・広端部ともにヘラ切り調整。凹面挟端部には帯状に幅 2.0cm のヘラ調整が行われている。凹面凸面ともに器壁の風化が激しく調整は不明瞭。47 はほぼ完形の個体である。縦 35.2 ㎝、横 25.4 ㎝、厚さ 2.2 ㎝。焼成はやや不良。色調は黄灰色～淡紅灰色。胎土は 4mm 以下の白色粒子を多量に含む。凹面凸面ともに器壁の風化が激しく、調整は不明。挟端部にも帯状のヘラ調整が行われているように見えるが不明瞭である。48 は狭端部と広端部と側端部が確認できる破片である。縦 35.7+ ㎝、横 20.2 ㎝、厚さ 2.4 ㎝。焼成はやや不良。断面では不完全燃焼でサンドイッチ状態に内部が焼け残っている。色調は褐灰色。端部はヘラ切り落とし。凹面狭端部には幅 2cm ほどの帯状ヘラ調整が施される。表面が風化しており調整が不明瞭。49 は狭端部と側端部が確認できる破片。縦 32.6+ ㎝、横 19.8 ㎝、厚さ 1.9 ㎝。焼成はやや不良。色調は暗灰色。端部はヘラ切り落とし。凹面狭端部には幅 1.6cm ほどの帯状ヘラ調整が施される。表面が風化しており調整が不明瞭。50 は端部の 2 方向が確認できる破片。縦 13.2+ ㎝、横 9.1+ ㎝、厚さ 2.2 ㎝。焼成はやや不良。色調は黄灰色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を大量に含む。端部はヘラ切り。調整は表面が風化しており不明。51 は狭端部の破片。縦 11.8+ ㎝、横 11.7 ㎝、厚さ 2.2 ㎝。焼成は不良。色調は黄灰色。胎土は 7mm 以下の白色粒子を大量に含む。全体的に表面が風化しており調整が不明瞭。凹面の狭端部には幅 2.0cm で帯状にヘラ調整を行っている。52 は広端部と側縁部 2 方向が確認できる破片。縦 20.8 ㎝、横 25.3+ ㎝、厚さ 2.4 ㎝。焼成はやや良好。色調は淡赤灰色。胎土は 5mm 以下の白色粒子を少量含む。凹面凸面ともに器具をつかったナデ調整。側端部･広端部はヘラ切り。53 は一部を欠くが復元できる個体である。縦 26.8+ ㎝、横 25.0+ ㎝、厚さ 2.3 ㎝。焼成はやや不良。色調は淡茶灰色～黄灰色。胎土は 2mm 以下の白色粒子を大量に含む。端部はヘラ切り。凹面狭端部に 2.7cm の幅でヘラ調整を施している。ほかの平瓦より長さが短い。54 は狭端部と側端部の破片。縦 11.6+ ㎝、横 23.5+ ㎝、厚さ 2.4 ㎝。焼成は良好。須恵質。色調は灰青色。胎土は 2mm 以下の白色粒子を大量に含む。端部はヘラ切り。凹面狭端部には 2.5 ～ 2.8cm 幅のヘラ調整が施されている。凹面凸面ともに工具をつかったナデ調整を施している。55 は挟端部と側縁部 2 方向が確認できる破片。縦 31.6+ ㎝、横 30.7+ ㎝、厚さ 2.5 ㎝。焼成はやや不良。色調は灰白色。胎土は 4mm 以下の白色粒子を多量に含む。凹面挟端部は幅 3.0cm 程度の帯状にヘラ調整している。凹面凸面ともにナデ調整か。56 は狭端部と側端部の破片。縦 34.8 ㎝、横 24.0 ㎝、厚さ 2.1 ㎝。焼成は不良。色調は淡灰色～褐灰色。胎土は 2mm 以下の白色粒子を大量に含む。側端部はヘラ切り。凹面狭端部には幅 2cm ほどのヘラ調整が施されている。57 は端部が 2 方向確認できる破片。縦 22.7+ ㎝、横 14.2+ ㎝、厚さ 2.2 ㎝。焼成は不良。色調は黄灰色。胎土は 5mm 以下の白色粒子を大量に含む。摩耗のため調整痕跡は不明瞭だが、表面はナデ調整と思われる。凸面に器壁が生乾きの際にヘラで傷をつけたような線が 2 箇所見られる。長辺軸にむかって 19cm ほど延びている。58 は端部の 2 方向確認できる破片。縦 20.3+ ㎝、横 14.7+ ㎝、厚さ 2.3 ㎝。焼成は不良。色調は黄灰色。胎土は 4mm 以下の白色粒子を多量に含む。表面が摩耗しており、調整は不明。側縁部はヘラ切り。59 は端部が 2 方向確認できる破片。縦 22.4+ ㎝、横 12.7+ ㎝、厚さ 2.2 ㎝。焼成は不良。胎土は 4mm 以下の白色粒子を多量に含む。器壁は摩滅して調整は不明。側縁部はヘラ切りで調整されている。60 は挟端部が確認できる破片。縦 19.8+ ㎝、横 13.0+ ㎝、厚さ 1.8 ㎝。焼成はやや良好。色調は淡灰色～薄赤灰

色。胎土は 2mm 以下の白色粒子を少量含む。調整はナデ調整。側縁部はヘラ切り調整。挟端部凹面側に、幅 2.6cm ほどの帯状に、端部に向かうヘラ調整を行っている。凹面挟端部近くに 3.7cm ～ 5.5cm の範囲に銅を含むスサのようなものが付着している。61 は端部が 2 方向確認できる破片。縦 21.7+ ㎝、横 19.6+ ㎝、厚さ 1.7 ㎝。他の個体と比べて、厚みが薄い。焼成は不良。色調は黄灰色。胎土は 1mm ～ 12mm の白色粒子を多量に含む。摩耗のため調整は不明。62 は縦 19.1+ ㎝、横 14.9 ㎝、厚さ 1.9 ㎝。63 は縦 17.8+ ㎝、横 18.75 ㎝、厚さ 1.6 ㎝。64 は縦 20.6+ ㎝、横 14.6 ㎝、厚さ 1.8 ㎝。65 は縦 11.9+ ㎝、横 10.3+ ㎝、厚さ 1.7 ㎝。66 は縦 7.3+ ㎝、横 14.8+ ㎝、厚さ 2.2 ㎝。67 は端部の 2 方向が確認できる破片。縦 15.3+cm、横 15.0+cm、厚さ 1.8cm。焼成はやや不良。色調は黄灰色。胎土は 5mm 以下の白色粒子を少量含む。表面の摩耗が激しくて表面の調整は不明。68 は挟端部と側端部の破片。縦 14.7+ ㎝、横 12.3+ ㎝、厚さ 2.7 ㎝。焼成は良好。色調は明黄灰色～白灰色。胎土は 4mm 以下の白色粒子を少量含む。側端部はヘラ切り。凹面は一定方向の器具をつかったナデ調整。凹面挟端部には 2.5cm の帯状の幅でヘラ調整を施す。69 は挟端部と側縁部の破片。縦 12.7+ ㎝、横 16.7+ ㎝、厚さ 1.9 ㎝。焼成はやや不良。色調は灰白色。胎土は 4mm 以下の白色粒子を多く含む。凹面挟端部には、2cm の幅で帯状にヘラ調整を行っている。側端部はヘラ切りか。表面が風化しており調整は不明瞭。70 は端部が 2 方向確認できる破片。縦 13.2+ ㎝、横 14.0+ ㎝、厚さ 1.9 ㎝。焼成は不良。色調は淡赤灰色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を少量含む。側端部はヘラ切りか。表面の調整は風化により不明。71 は端部が 2 方向確認できる破片。縦 17.5+ ㎝、横 13.6+ ㎝、厚さ 2.0 ㎝。焼成は不良。色調は黄灰色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を多少含む。側端部はヘラ切り。凹面凸面の調整は表面の風化により不明。72 は挟端部と側端部の破片。縦 21.1+ ㎝、横 12.05+ ㎝、厚さ 2.05 ㎝。焼成は良好。瓦質。色調は明黒青色～灰白色。胎土は 4mm 以下の白色粒子を多く含む。側端部はヘラ切り。凹面挟端部には幅 3cm で帯状にヘラ調整を施している。凹面凸面ともにナデ調整。73 は挟端部と側縁部の破片。縦 17.2+ ㎝、横 11.9+ ㎝、厚さ 2.15 ㎝。焼成はやや不良。色調は灰白色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を多く含む。凹面挟端部には、2.5cm の幅で帯状にヘラナデを行っている。側端部はヘラ切りか。表面が風化しており調整は不明瞭。74 は挟端部と側端部の破片。縦 22.5+ ㎝、横 13.55+ ㎝、厚さ 2.2 ㎝。焼成はやや不良。色調は黄灰色。胎土は 5mm 以下の白色粒子を大量に含む。側端部はヘラ切り。凹面挟端部には 2.5cm ほどの帯状にヘラ調整を行う。凹面凸面ともに表面はナデ調整。75 は挟端面近くの破片。縦 14.7+ ㎝、横 9.4+ ㎝、厚さ 2.05 ㎝。焼成はやや不良。色調は黄灰色。胎土は 3mm 以下の白色粒子を少量含む。摩耗のため表面の調整は不明瞭だが、ナデ調整か。挟端面凹面には、幅 2cm ほどの帯状に端部に向かってヘラ調整を行っている。側縁部は三角状に 2 方向からヘラにより調整されている。

210SX035 淡茶褐色土出土遺物 (Fig.85)

瓦類

平瓦（76、77） 76 は端部が 2 方向確認できる破片。縦 9.2+ ㎝、横 8.4+ ㎝、厚さ 1.9 ㎝。焼成はやや不良。色調は明赤黄色。胎土は 0.1 ～ 0.7mm 程度の白色粒子を多量に含む。白色の雲母片を少量含む。摩耗のため調整は不明。側縁部はヘラ切りで切り落とされているが、垂直ではなくゆるい三角状に仕上げている。77 はほぼ完形。縦 35.8+ ㎝、横 24.8+ ㎝、厚さ 2.3 ㎝。焼成は良好。やや還元炎焼成。胎土は 3 ～ 5mm 程度の白色粒子を多量に含む。色調は淡黄灰色。凹面凸面ともに一定方向のナデ調整を施されている。凸面の一部にナデ調整がされてない箇所の観察では、器具をつかったナデが縦方向に施されている。挟端面凹面には幅 1.6 ～ 2.9cm ほどの範囲を、挟端面端部に向かって斜めに帯状にヘラ調整を行っている。側縁部は垂直に切り落とされている。側縁調整はヘラ削り調整。

210SX035 淡茶色土出土遺物 (Fig.86)

石製品

五輪塔（78） 水輪の破片。高さ 19.1 ㎝、復元最大径 24.0 ㎝、復元差し込み口径は、上方 13.8 ㎝、下方 11.7 ㎝を測る。阿蘇凝灰岩製。

滑石製石鍋（79・80） 79 は口縁部の破片。器高 4.7+ ㎝。内面は丁寧な削り調整で滑らか、外面はやや荒い削り調整。色調はやや赤色が混じる明灰色。転用材か。80 は体部の破片。

不明製品（81）扁平な石。縦 4.4cm、横 3.8cm、厚さ 1.6cm。白い長石で表面が研磨されたかのように平滑である。

210SX044 出土遺物 (Fig.86)

国産陶器

椀（82）器高は 2.5+cm、復元高台径 6.2cm。高台外面に墨書がある。

210SX055 出土遺物 (Fig.87 ～ 91、Tab.5-1 ～ 6)

金属製品

銅銭（1 ～ 100） それぞれの詳細なデータは、別表にそれぞれまとめている。たとえば、通貨の種類については、Tab.4-1 に 300 枚の内訳を記載している。Tab.4-2 では手前から（南から北へ）A 列、B 列、C 列とわけて、それぞれの銭の種類と東方向からみた銭の裏表についてまとめている。Fig.87 ～ 91 には銭の裏表の拓本を載せている。Tab.5-1 では個々の銭についての測定値を表にしている。

さて、この銭が出土した穴の検出状況から考えると、この3緡以外に緡銭が存在した可能性は否定できない。ただ、周辺からも全く銭は出土しておらず、現場の廃土からも銭が見つかってないことから、ここでは300枚の銅銭が3緡の状態で出土したと理解している。他の出土例との比較 (1) によっていろんなことが判ってくると考えるが、現時点では判っている点について以下に箇条書きで記す。

特徴

- 銭 100 枚を 1 つの単位として緡をつくっている。これにより丁百法が採用されていることがわかる。
- 緡銭は東西方向にそろえて据えてあり、位置は乱れていない。
- 緡銭の 1 つの単位内の銭についてのデータとしては、Tab.4-1 ～ 3 にまとめているが、この表を元に分析すると、緡銭内で特定の銭を揃えたり、銭の裏表を揃えたりしている状態は確認できない。
- 300 枚の内、1 枚しかでていないが、最新銭は景定元寶（初鋳 1260 年）である。
- Tab4-1 の分析によれば、銭種の割合で 10%を超えて他の銭に対して、優位と判断されるものは、開元通寶、熙寧元寶、元豊通寶があげられる。

註

(1) この埋納銭との比較対象としては大宰府条坊跡第 83 次調査出土例がある。出典は「条坊 83 次備蓄銭一覧」『遺跡だより』第 28 号 1994 年　太宰府市教育委員会文化課。

Tab.4-1　第 210 次調査 SX055 出土銭貨分類表

No.	銭貨名	国名	初鋳年	枚数	出土割合	No.	銭貨名	国名	初鋳年	枚数	出土割合
1	開元通寶（かいげんつうほう）	唐	621	31	10.33%	19	治平通寶（じへいつうほう）	北宋	1064	1	0.33%
2	宋通元寶（そうつうげんぽう）	北宋	960	1	0.33%	20	熙寧元寶（きねいげんぽう）	北宋	1068	35	11.67%
3	太平通寶（たいへいつうほう）	北宋	976	3	1.00%	21	元豊通寶（げんぽうつうほう）	北宋	1078	46	15.33%
4	淳化元寶（じゅんかげんぽう）	北宋	990	2	0.67%	22	元祐通寶（げんゆうつうほう）	北宋	1086	21	7.00%
5	至道元寶（しどうげんぽう）	北宋	995	5	1.67%	23	紹聖元寶（しょうせいげんぽう）	北宋	1094	8	2.67%
6	咸平元寶（かんぺいげんぽう）	北宋	998	6	2.00%	24	元符通寶（げんふつうほう）	北宋	1098	9	3.00%
7	景德元寶（けいとくげんぽう）	北宋	1004	7	2.33%	25	聖宋元寶（せいそうげんぽう）	北宋	1101	13	4.33%
8	祥符元寶（しょうふげんぽう）	北宋	1009	4	1.33%	26	大観通寶（だいかんつうほう）	北宋	1107	3	1.00%
9	祥符通寶（しょうふつうほう）	北宋	1009	8	2.67%	27	政和通寶（せいわつうほう）	北宋	1111	13	4.33%
10	天禧通寶（てんきつうほう）	北宋	1017	4	1.33%	28	宣和通寶（せんわつうほう）	北宋	1119	1	0.33%
11	天聖元寶（てんせいげんぽう）	北宋	1023	14	4.67%	29	淳熙元寶（じゅんきげんぽう）	南宋	1174	4	1.33%
12	景祐元寶（けいゆうげんぽう）	北宋	1034	5	1.67%	30	嘉泰通寶（かたいつうほう）	南宋	1201	1	0.33%
13	皇宋通寶（こうそうつうほう）	北宋	1038	29	9.67%	31	開禧通寶（かいきつうほう）	南宋	1205	2	0.67%
14	至和元寶（しわげんぽう）	北宋	1054	1	0.33%	32	嘉定通寶（かていつうほう）	南宋	1208	2	0.67%
15	至和通寶（しわつうほう）	北宋	1054	1	0.33%	33	紹定通寶（しょうていつうほう）	南宋	1228	1	0.33%
16	嘉祐元寶（かゆうげんぽう）	北宋	1056	3	1.00%	34	景定元寶（けいていげんぽう）	南宋	1260	1	0.33%
17	嘉祐通寶（かゆうつうほう）	北宋	1056	6	2.00%	35	判読不能			7	2.33%
18	治平元寶（じへいげんぽう）	北宋	1064	2	0.67%		合計枚数			300	100.00%

Tab.4-2　第 210 次調査 SX055 出土銭貨分類表（銭の表裏は東から見た際のものである）

東から	A	種類 A	字体	B	種類 B	字体	C	種類 C	字体
1	裏	天禧通寶	真	裏	開元通寶		表	元豊通寶	行
2	裏	政和通寶	分楷	表	元符通寶	篆	裏	元符通寶	行
3	裏	景德元寶	真	裏	元豊通寶	行	表	元豊通寶	行
4	裏	皇宋通寶	篆	裏	×		表	天聖元寶	真
5	裏	熙寧元寶	篆	裏	元豊通寶	行	裏	大観通寶	
6	裏	熙寧元寶	篆	裏	嘉祐通寶	篆	表	聖宋元寶	篆
7	裏	天聖元寶	篆書	表	祥符元寶	真	裏	△熙寧元寶	真
8	裏	天聖元寶	真書	表	天禧通寶	真	表	熙寧元寶	真
9	裏	開元通寶	背下月	裏	熙寧元寶	真	裏	元豊通寶	篆
10	裏	祥符元寶	真	表	元豊通寶	行	表	熙寧元寶	真
11	裏	政和通寶	篆	表	皇宋通寶	真	表	元祐通寶	篆
12	裏	政和通寶	篆	表	至道元寶	行	表	天聖元寶	篆
13	裏	天聖元寶	篆	表	聖宋元寶	行	表	元豊通寶	行
14	表	元符通寶	篆	表	開禧通寶「三」		表	治平元寶	篆
15	表	□□元寶	×	裏	熙寧元寶	真	表	元豊通寶	篆
16	表	元豊通寶	行	表	元祐通寶	篆	裏	元豊通寶	行
17	裏	熙寧元寶	△篆	表	開元通寶		裏	元豊通寶	篆△
18	表	開元通寶		裏	開元通寶		裏	皇宋通寶	篆
19	裏	元豊通寶（? 刃銭）	行	表	聖宋元寶	篆	裏	嘉祐元寶	真
20	裏	淳化元寶	真	裏	祥符元寶		裏	元符通寶	行
21	表	熙寧元寶	真	表	宣和通寶	篆	表	熙寧元寶	篆
22	表	景祐元寶	真	表	開元通寶	行	表	聖宋元寶	篆
23	裏	熙寧元寶	真	裏	元祐通寶	行	表	景德元寶	真
24	表	嘉祐通寶	篆	表	皇宋通寶	篆	表	元豊通寶	行
25	表	皇宋通寶	真	裏	祥符通寶	真	裏	元豊通寶	行
26	表	元豊通寶	行	裏	太平通寶		裏	太平通寶	
27	表	治平元寶	篆	裏	景祐元寶	真	裏	咸平元寶	真
28	表	熙寧元寶	篆	表	元豊通寶	行	裏	元祐通寶	行
29	表	元豊通寶	篆	裏	紹聖元寶		裏	開元通寶	
30	裏	□□元寶		裏	開元通寶		裏	至道元寶	行
31	表	開元通寶		裏	政和通寶	篆	裏	政和通寶	分楷
32	裏	祥符通寶	真	表	皇宋通寶	真	表	政和通寶	分楷
33	表	□□通寶		裏	元豊通寶	篆	裏	紹聖元寶	行
34	裏	治平通寶	篆	裏	元祐通寶	行	裏	元豊通寶	篆
35	裏	熙寧元寶	篆	表	天聖元寶	行	表	皇宋通寶	篆
36	表	紹聖元寶	行	表	天禧通寶		裏	元豊通寶	行
37	裏	紹聖元寶	篆	裏	△熙寧元寶	篆	表	祥符元寶	真
38	裏	開元通寶		表	元祐通寶	行	裏	政和通寶	篆
39	裏	嘉泰通寶 背文「三」		裏	熙寧元寶	真	裏	元豊通寶	篆
40	表	元豊通寶		裏	元符通寶	行	裏	至和元寶	篆
41	表	熙寧元寶	真	裏	嘉祐通寶	篆	表	紹聖元寶	篆
42	裏	開元通寶		表	熙寧元寶	真	裏	政和通寶	篆
43	表	元豊通寶	行	表	開元通寶		裏	開元通寶	
44	表	祥符元寶	真	裏	嘉祐通寶	篆	裏	熙寧元寶	真
45	表	元祐通寶	篆	表	皇宋通寶	篆	裏	熙寧元寶	真
46	裏	元豊通寶	篆	裏	宋通元寶		裏	元符通寶	行
47	裏	景德元寶	真	表	△元符通寶		裏	元豊通寶	篆
48	表	元豊通寶	行	裏	咸平元寶	真	裏	元符通寶	行
49	表	元豊通寶	行	表	皇宋通寶	篆	裏	天聖元寶	篆
50	表	開元通寶	背方上「月」	裏	元豊通寶	行	表	開元通寶	
51	表	熙寧元寶	真	表	熙寧元寶△	篆	裏	元豊通寶	行
52	裏	嘉祐元寶	真	表	至道元寶	行	表	開元通寶	
53	裏	皇宋通寶	真	裏	元豊通寶	行	裏	嘉定通寶	背文「二」
54	表	淳熙元寶	「背月見」真	表	元祐通寶	篆	裏	元祐通寶	行
55	裏	熙寧元寶	△篆	裏	祥符元寶		裏	紹聖元寶	篆　背文上
56	裏	元豊通寶	? 刀銭	表	聖宋元寶	行	裏	開元通寶	
57	表	聖宋通寶	行	表	元祐通寶	行	裏	淳熙元寶	真　背？文
58	裏	開元通寶	背上月	表	天禧通寶	真	表	元豊通寶	篆
59	表	聖宋元寶	篆	裏	熙寧元寶	行	裏	元祐通寶	行
60	表	元豊通寶	行	表	天聖元寶	真	表	咸平元寶	真
61	表	熙寧元寶	真	裏	皇宋通寶	篆	表	紹聖元寶	篆
62	表	開元通寶		表	皇宋通寶	篆△	裏	天聖元寶	真
63	裏	皇宋通寶	真	裏	開元通寶		表	皇宋通寶	篆
64	表	至道元寶	草	裏	皇宋通寶	篆	裏	嘉祐通寶	真
65	裏	開元通寶		裏	熙寧元寶	行	裏	元豊通寶	篆

Tab.4-3　第 210 次調査 SX055 出土銭貨分類表（銭の表裏は東から見た際のものである）

66	裏	熙寧元寶△	篆	表	景德元寶	真	表	淳熙元寶	背文「九」真
67	表	政和通寶	分楷	表	熙寧元寶	行	表	△景祐元寶	篆
68	裏	熙寧元寶	篆	裏	元豊通寶	篆	表	元豊通寶	行
69	表	政和通寶	分楷	表	祥符通寶	真	裏	天聖元寶	真
70	裏	元祐通寶	「 ? 」篆	裏	元祐通寶	行	裏	祥符元寶	真
71	裏	聖宋元寶	篆	裏	元豊通寶	篆	裏	熙寧元寶	篆
72	裏	元豊通寶	篆	表	聖宋元寶	行	表	皇宋通寶	篆
73	裏	嘉祐通寶	篆	裏	開元通寶		裏	皇宋通寶	真
74	裏	大観通寶		裏	開元通寶		裏	開元通寶	背上月
75	裏	熙寧元寶	篆	表	皇宋通寶	真	裏	開元通寶	
76	裏	熙寧元寶	真	裏	咸平元寶	真	表	景祐元寶	真
77	裏	天聖元寶		裏	開元通寶		裏	皇宋通寶	篆
78	裏	開元通寶		表	至道元寶	真	裏	元祐通寶	篆
79	裏	至和通寶	真	表	祥符通寶		裏	紹定通寶	背月文「四」
80	裏	至道元寶	真	裏	大観通寶		表	元豊通寶	篆
81	裏	×		表	景祐元寶	篆△	裏	皇宋通寶	真
82	裏	天聖元寶	真	裏	開元通寶		表	熙寧元寶	真
83	表	淳化元寶	行	表	元祐通寶	篆	表	政和通寶	分楷
84	裏	皇宋通寶	真	表	熙寧元寶	真	表	天聖元寶	篆
85	裏	嘉定通寶	背 ??	表	元豊通寶	行	表	祥符元寶	真
86	裏	聖宋元寶	行	表	皇宋通寶	篆	表	淳熙元寶	
87	表	元祐通寶	篆	裏	皇宋通寶	真	表	聖宋元寶	篆
88	表	熙寧元寶△	篆	表	×× 元寶		表	景德元寶	真
89	裏	天聖元寶	真	表	△元祐通寶	篆	表	皇宋通寶	篆
90	表	景德元寶	真	裏	聖宋元寶	行	表	開元通寶	
91	裏	皇宋通寶	篆	裏	元豊通寶	行	表	元豊通寶	行
92	表	開禧通寶	背元	表	開元通寶		裏	元豊通寶	行
93	表	皇宋通寶	真	裏	元豊通寶	行	裏	元祐通寶	行
94	裏	政和通寶	分楷	表	聖宋元寶	行	表	景定元寶	背二
95	裏	紹聖元寶	行	表	元豊通寶	行	表	咸平元寶	真
96	裏	元豊通寶	篆	表	熙寧元寶	行	表	景德元寶	真
97	表	皇宋通寶	真	表	太平通寶		表	元祐通寶	篆
98	表	皇宋通寶	篆	裏	元祐通寶	篆	裏	咸平元寶	真
99	裏	政和通寶	分楷	表	皇宋通寶	篆	表	元祐通寶	行
100	表	開元通寶		裏	祥符通寶		表	元符通寶△	篆

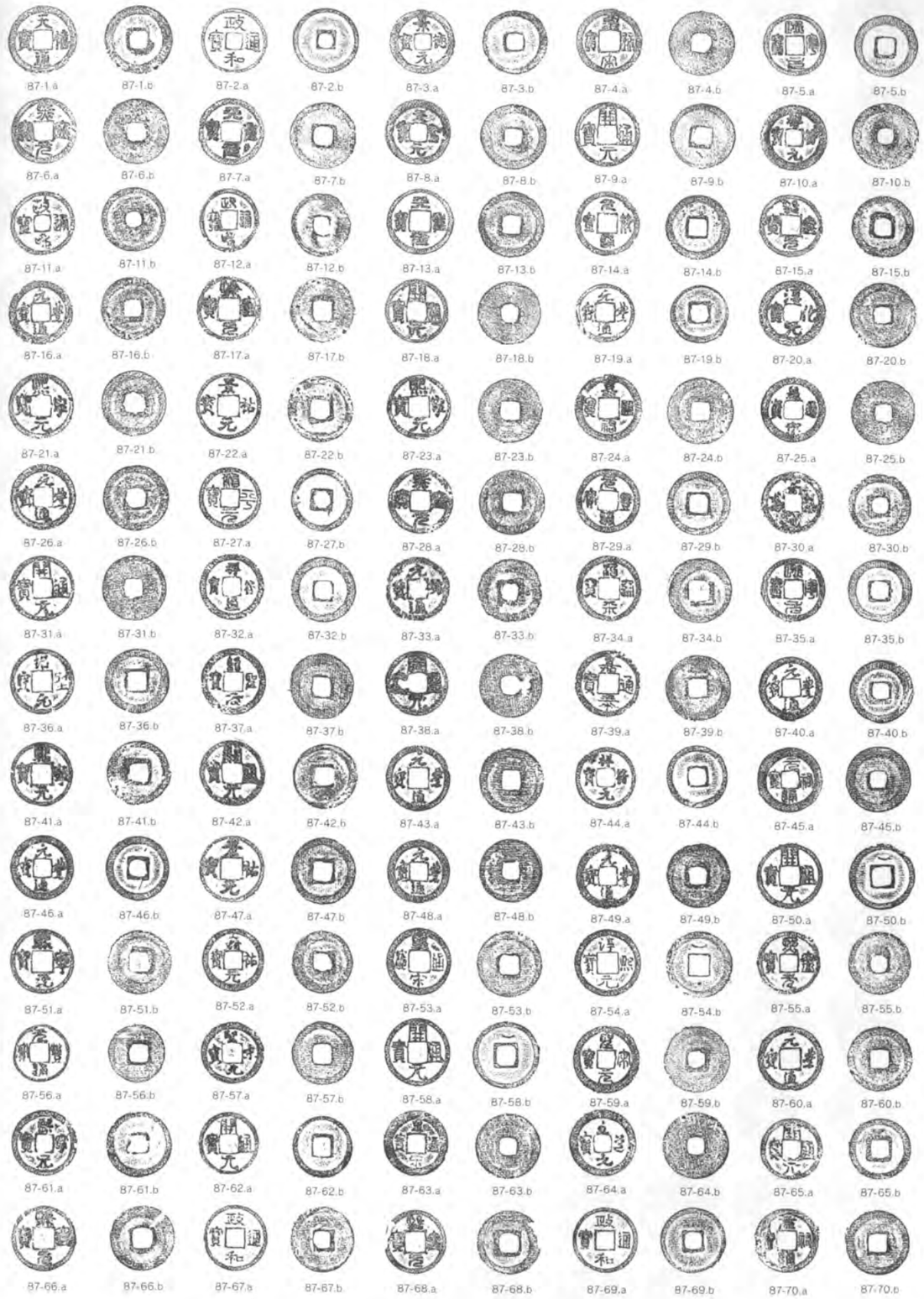


Fig.87　第 210 次調査 SX055 出土遺物実測図その 1（1/2）

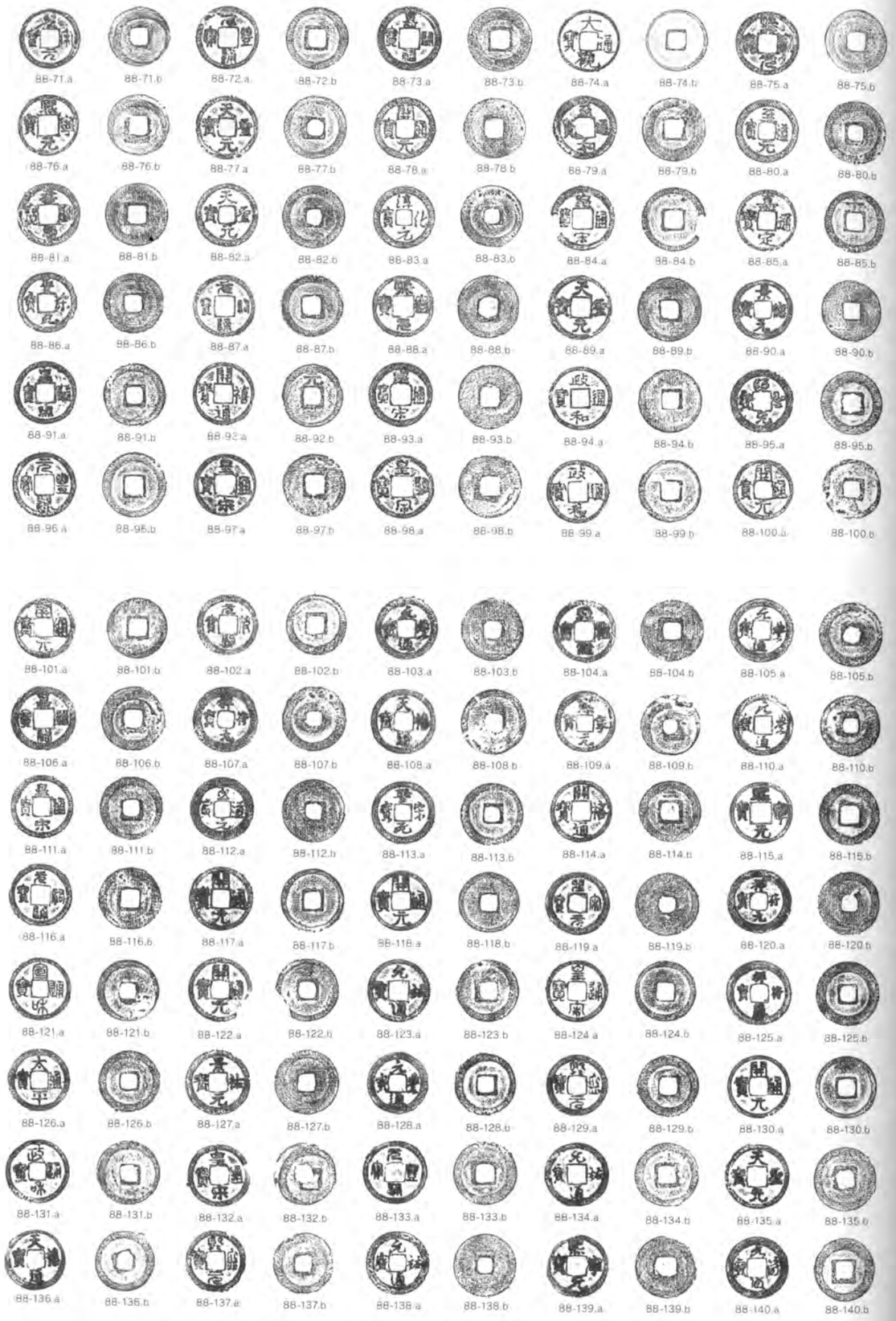


Fig.88　第 210 次調査 SX055 出土遺物実測図その 2（1/2）

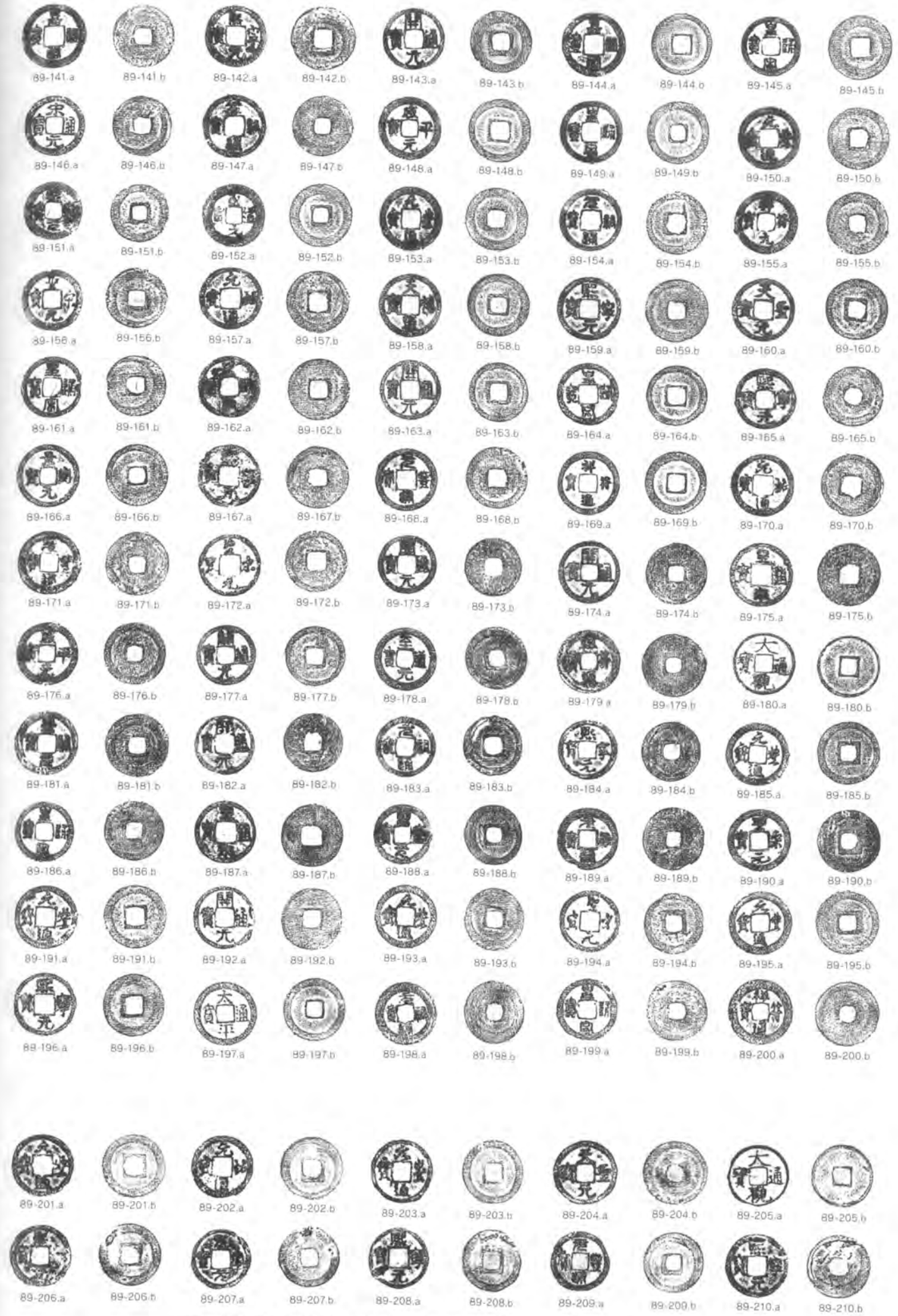


Fig.89　第 210 次調査 SX055 出土遺物実測図その 3（1/2）

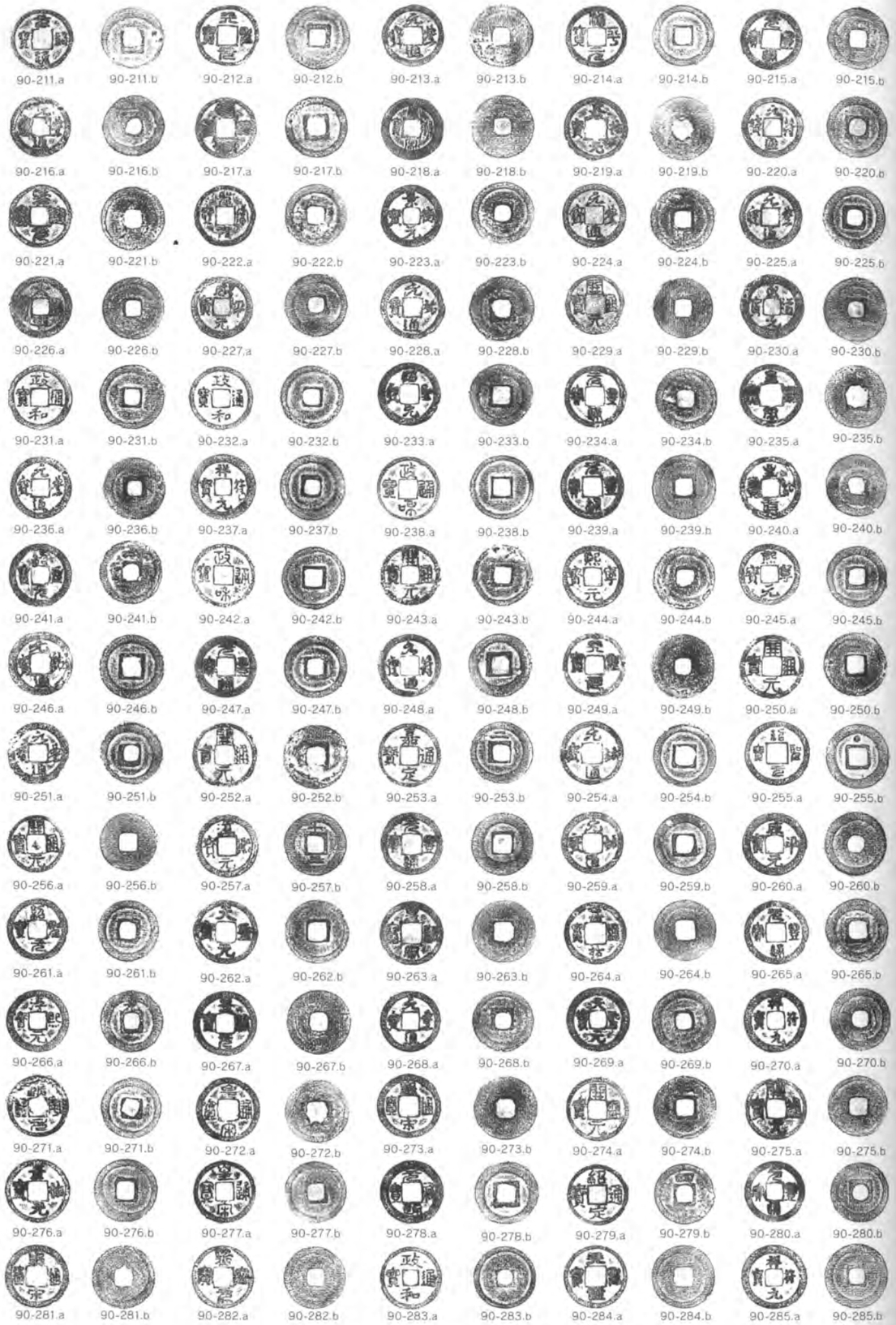


Fig.90　第 210 次調査 SX055 出土遺物実測図その 4（1/2）

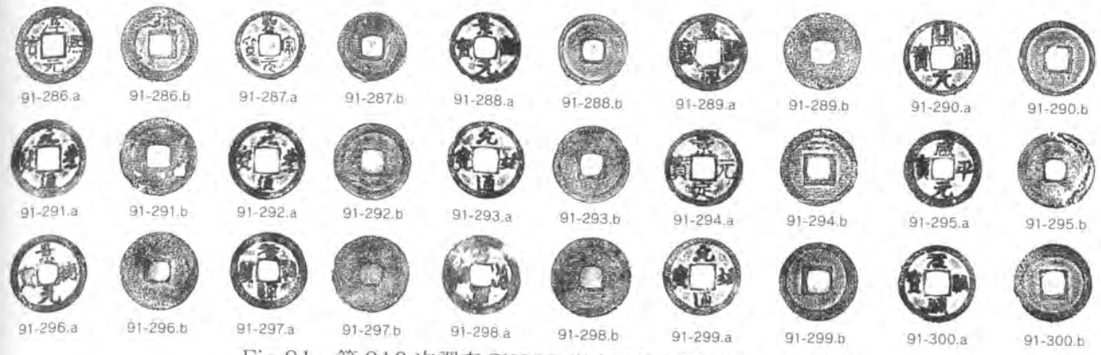


Fig.91　第 210 次調査 SX055 出土遺物実測図その 5（1/2）

Tab.5-1　第 210 次調査 SX055 出土銭貨計測値

A 列 【条 210　SX-55】

番号	(A)　銭径 (mm)　(B)		(C)　内径 (mm)　(D)		銭厚 (mm)	量目 (g)		R 番号
1	25.83	25.66	20.72	20.16	1.14 ～ 1.28	3.7		001
2	24.48	24.84	21.10	21.01	1.12 ～ 1.43	3.9		002
3	24.42	24.41	18.23	18.24	1.13 ～ 1.41	3.6		003
4	24.88	24.84	19.73	19.27	1.05 ～ 1.22	3.6		004
5	23.82	23.84	19.28	18.97	1.43 ～ 1.53	4.0		005
6	24.89	24.77	20.59	19.81	1.08 ～ 1.25	2.9		006
7	25.08	24.78	20.10	20.17	1.21 ～ 1.39	3.8		007
8	24.66	24.69	17.90	17.73	1.05 ～ 1.15	3.3		008
9	24.60	24.62	20.35	20.29	1.15 ～ 1.22	3.0		009
10	25.02	24.93	18.20	17.51	0.96 ～ 1.08	3.0		010
11	24.25	24.22	20.83	20.65	0.84 ～ 1.33	3.2		011
12	24.08	22.53	19.74	18.18	1.05 ～ 1.43	2.8		012
13	24.77	24.83	20.40	20.79	1.13 ～ 1.33	3.6		013
14	24.33	24.32	19.89	19.64	1.14 ～ 1.32	2.9	表	014
15	23.56	23.56	19.58	19.71	1.26 ～ 1.38	3.4	表	015
16	23.98	24.32	17.57	17.79	1.09 ～ 1.36	3.5	表	016
17	24.61	24.38	21.08	21.69	1.18 ～ 1.50	3.5		017
18	23.78	23.93	20.77	20.04	1.10 ～ 1.38	3.5	表	018
19	21.84	22.04	17.66	18.29	1.27 ～ 1.40	2.9		019
20	24.69	25.19	18.21	17.82	0.95 ～ 1.30	2.9		020
21	24.68	24.61	20.46	20.80	1.21 ～ 1.43	3.8	表	021
22	24.90	24.76	20.99	21.10	1.27 ～ 1.77	3.8	表	022
23	24.05	24.02	20.10	20.23	1.41 ～ 1.49	4.0	表	023
24	25.20	25.19	19.64	19.64	1.06 ～ 1.24	3.3	表	024
25	24.19	24.10	18.20	18.78	1.35 ～ 1.46	3.8	表	025
26	24.65	24.62	18.45	19.85	1.25 ～ 1.43	4.1		026
27	23.57	23.49	19.61	19.23	1.46 ～ 1.71	3.7	表	027
28	24.53	24.25	20.55	21.01	1.07 ～ 1.43	3.5	表	028
29	24.01	24.08	19.41	19.09	1.19 ～ 1.42	3.6	表	029
30	23.28	23.60	19.30	17.91	1.12 ～ 1.48	3.4		030
31	24.41	24.44	21.11	19.84	1.05 ～ 1.12	3.2	表	031
32	24.58	24.57	19.28	18.58	1.19 ～ 1.35	3.4		032
33	23.93	24.33	19.12	19.31	1.08 ～ 1.38	3.6	表	033
34	24.52	24.39	19.85	19.50	0.95 ～ 1.28	3.0		034
35	23.84	24.08	19.07	18.83	1.12 ～ 1.39	3.2		035
36	24.25	24.35	20.07	20.34	1.17 ～ 1.44	3.2	表	036
37	24.64	24.48	18.55	18.53	1.40 ～ 1.58	4.3		037
38	24.00	23.88	19.99	20.25	0.88 ～ 1.16	2.7		038
39	24.69	24.50	20.08	19.96	1.02 ～ 1.32	3.1		039
40	24.03	23.78	17.86	18.58	1.23 ～ 1.38	3.6	表	040
41	23.98	24.16	20.06	19.75	1.27 ～ 1.74	3.7	表	041
42	24.43	25.15	20.14	20.63	1.17 ～ 1.43	3.5		042
43	24.55	24.26	19.42	19.26	1.25 ～ 1.77	3.6	表	043
44	23.23	22.66	19.27	18.64	1.37 ～ 1.60	3.8	表	044
45	24.30	24.35	17.35	17.55	1.10 ～ 1.38	3.7	表	045
46	24.14	24.07	18.32	18.72	1.19 ～ 1.41	3.5		046
47	25.02	24.81	21.16	21.47	1.27 ～ 1.40	3.8		047
48	23.71	23.95	17.80	17.67	1.02 ～ 1.16	3.1	表	048
49	24.22	24.17	17.36	18.10	1.02 ～ 1.32	3.0	表	049
50	24.61	24.72	20.08	20.69	1.25 ～ 1.39	3.3	表	050
51	24.07	23.99	20.33	20.35	1.08 ～ 1.38	3.2	表	051
52	23.74	23.60	18.02	18.64	1.20 ～ 1.54	3.6		052
53	24.93	24.51	19.41	19.40	1.00 ～ 1.35	3.5		053
54	25.09	24.85	19.81	19.32	1.12 ～ 1.90	3.6	表	054

Tab.5-2　第 210 次調査 SX055 出土銭貨計測値

55	23.42	23.31	19.40	19.62	1.17 ～ 1.60	3.4		055
56	21.55	21.35	18.89	18.63	1.00 ～ 1.35	2.5		056
57	23.72	23.86	18.20	18.67	0.98 ～ 1.37	3.3	表	057
58	24.96	24.97	20.99	20.64	1.20 ～ 1.49	3.4		058
59	24.96	24.64	18.38	18.20	1.11 ～ 1.34	3.9	表	059
60	24.34	24.58	19.32	19.34	1.18 ～ 1.48	3.5	表	060
61	24.64	24.62	19.23	19.13	1.04 ～ 1.35	3.3	表	061
62	23.23	23.32	19.65	19.37	1.10 ～ 1.40	3.0	表	062
63	24.53	24.46	17.39	18.01	0.99 ～ 1.20	3.1		063
64	24.91	24.94	18.25	18.48	0.90 ～ 1.34	3.2	表	064
65	22.94	23.17	18.83	19.10	1.12 ～ 1.74	3.4		065
66	24.24	24.50	20.60	20.61	1.25 ～ 1.50	3.8		066
67	24.57	24.49	20.91	20.93	0.91 ～ 1.50	3.5	表	067
68	24.08	22.47+α	19.63	19.64	0.96 ～ 1.08	2.5		068
69	24.41	24.49	20.33	20.94	1.00 ～ 1.41	3.7	表	069
70	24.09	24.13	18.97	19.01	1.01 ～ 1.55	3.2		070
71	23.92	24.17	19.23	19.07	1.23 ～ 1.70	4.1		071
72	24.44	24.53	20.54	19.79	1.22 ～ 1.52	3.7		072
73	25.21	25.06	19.30	19.22	1.15 ～ 1.31	3.7		073
74	24.30	24.21	20.92	21.51	1.12 ～ 1.50	3.3		074
75	24.81	24.99	19.94	20.61	0.95 ～ 1.22	3.0		075
76	24.18	23.91	20.75	20.74	1.34 ～ 1.52	3.8		076
77	24.76	24.48	20.39	20.02	1.27 ～ 1.57	3.9		077
78	24.15	24.45	18.91	18.40	1.15 ～ 1.51	3.8		078
79	24.77	24.86	18.64	18.64	1.06 ～ 1.23	3.3		079
80	24.69	24.62	18.34	18.72	1.28 ～ 1.44	3.9		080
81	24.81	24.58	19.85	19.85	1.22 ～ 1.72	3.9		081
82	24.10	24.47	18.97	19.00	1.11 ～ 1.45	3.3		082
83	24.20	24.38	18.32	18.21	1.32 ～ 1.90	3.9	表	083
84	25.24	(21.55)	19.36		1.17 ～ 1.67	3.6		084
85	24.01	24.10	20.63	20.32	1.18 ～ 1.45	3.4		085
86	23.57	23.42	18.38	18.07	1.26 ～ 1.35	3.6		086
87	24.22	24.49	20.56	20.37	1.01 ～ 1.16	2.8	表	087
88	24.52	23.77	20.53	20.10	1.26 ～ 1.42	3.8	表	088
89	25.10	25.06	21.14	20.93	1.04 ～ 1.43	3.1		089
90	23.68	23.96	19.08	18.47	1.11 ～ 1.31	3.6	表	090
91	24.76	24.57	19.76	19.85	1.06 ～ 1.38	3.4		091
92	24.68	24.23	20.99	20.59	1.00 ～ 1.28	3.3	表	092
93	24.94	24.96	18.77	19.37	1.06 ～ 1.55	3.9	表	093
94	24.75	24.52	20.74	21.02	0.98 ～ 1.29	3.1		094
95	24.50	24.74	18.17	18.55	1.04 ～ 1.28	3.6		095
96	25.13	25.19	20.69	19.99	1.03 ～ 1.56	3.5		096
97	24.20	24.36	21.22	20.81	1.18 ～ 1.59	3.7	表	097
98	24.61	24.73	20.78	21.03	1.21 ～ 1.61	3.6	表	098
99	24.36	24.79	20.83	20.38	1.12 ～ 1.55	3.4		099
100	23.40	23.54	19.37	19.37	1.26 ～ 1.63	3.1	表	100

Tab.5-3　第 210 次調査 SX055 出土銭貨計測値

B 列 【条 210　SX-55】

番号	(A)　銭径 (mm)	(B)	(C)　内径 (mm)	(D)	銭厚 (mm)	量目 (g)		R 番号
1	23.86	23.78	19.78	20.04	0.95 ～ 1.28	2.3		101
2	24.02	24.25	18.57	18.73	1.13 ～ 1.72	3.2	表	102
3	24.61	24.67	19.07	18.54	1.17 ～ 1.44	3.7		103
4	24.72	24.74	20.04	20.33	1.04 ～ 1.29	3.1		104
5	25.28	25.21	18.56	18.84	1.20 ～ 1.60	4.0		105
6	25.22	25.23	19.56	19.30	1.09 ～ 1.45	3.0		106
7	25.45	25.09	17.99	18.65	0.98 ～ 1.42	3.2	表	107
8	25.65	25.71	20.08	19.88	1.19 ～ 1.59	4.0	表	108
9	23.75	23.57	19.44	18.47	1.22 ～ 1.75	3.9		109
10	23.95	23.83	18.91	18.64	1.20 ～ 1.84	3.4	表	110
11	24.48	24.73	19.24	19.64	1.11 ～ 1.47	3.7	表	111
12	24.93	24.89	17.00	17.01	1.15 ～ 1.39	3.9	表	112
13	24.49	24.72	19.22	19.22	0.98 ～ 1.29	3.1	表	113
14	24.28	24.26	20.66	20.28	1.11 ～ 1.38	3.7	表	114
15	24.21	24.23	21.00	20.14	1.23 ～ 1.47	3.9		115
16	24.32	24.56	19.68	19.39	1.21 ～ 1.53	3.7	表	116
17	24.85	25.04	20.69	20.20	1.09 ～ 1.50	3.6	表	117
18	23.83	23.91	20.38	19.77	0.90 ～ 1.07	2.6		118
19	24.77	25.06	19.15	19.16	0.96 ～ 1.31	3.3	表	119
20	24.91	24.63	18.29	18.17	0.96 ～ 1.28	3.0		120
21	24.29	24.29	20.22	20.38	1.02 ～ 1.59	3.4	表	121
22	24.76	24.89	20.56	20.24	1.07 ～ 1.37	3.0	表	122
23	24.46	24.68	20.58	20.00	1.21 ～ 1.51	3.8		123
24	23.92	24.10	20.40	20.49	1.22 ～ 1.48	3.7	表	124
25	25.33	25.34	19.26	19.32	1.14 ～ 1.79	4.1		125
26	24.06	24.14	19.15	19.26	1.02 ～ 1.21	2.9		126
27	25.43	25.14	20.20	19.69	1.07 ～ 1.34	3.2		127
28	24.34	23.85	18.10	17.24	1.12 ～ 1.65	3.7	表	128
29	24.09	24.08	18.66	18.63	1.29 ～ 1.60	4.1		129
30	24.52	24.56	20.98	20.82	0.78 ～ 1.38	3.0		130
31	25.31	25.13	20.67	20.56	1.32 ～ 1.82	4.9		131
32	24.44	24.31	19.50	19.64	1.09 ～ 1.58	3.5	表	132
33	24.77	24.88	19.73	19.62	0.93 ～ 1.40	3.4		133
34	24.91	24.76	20.19	19.85	1.08 ～ 1.52	3.8		134
35	25.19	25.15	20.99	21.12	1.06 ～ 1.62	3.6	表	135
36	23.82	23.81	20.55	19.56	1.21 ～ 1.34	3.1	表	136
37	23.77	23.55	18.50	19.00	1.28 ～ 1.64	3.9		137
38	24.60	24.71	18.91	18.94	1.22 ～ 1.74	4.0	表	138
39	24.10	23.73	20.08	20.87	1.18 ～ 1.31	3.5		139
40	24.33	24.38	18.03	18.03	1.15 ～ 1.30	3.5		140
41	25.74	25.48	19.50	19.55	1.10 ～ 1.42	3.6		141
42	24.31	24.44	18.54	18.35	1.15 ～ 1.40	3.8	表	142
43	24.27	24.07	20.29	20.31	1.08 ～ 1.24	3.2	表	143
44	25.35	25.32	19.87	19.63	1.04 ～ 1.55	3.5		144
45	23.58	23.32	19.23	18.22	1.15 ～ 1.42	3.1	表	145
46	23.85	23.69	18.55	18.09	0.89 ～ 1.27	2.2		146
47	24.76	24.80	20.45	20.06	1.33 ～ 1.79	3.9	表	147
48	24.77	24.78	18.15	19.04	1.06 ～ 1.32	3.3		148
49	24.39	24.33	19.34	19.29	0.90 ～ 1.24	2.7	表	149
50	24.89	24.63	18.91	19.47	1.19 ～ 1.47	3.7		150
51	22.99	23.09	17.24	17.23	1.44 ～ 1.70	4.4	表	151
52	24.84	24.66	16.87	16.63	1.19 ～ 1.40	4.0	表	152
53	24.98	24.78	19.19	19.36	1.06 ～ 1.43	3.5		153
54	24.32	24.47	19.90	20.38	1.29 ～ 1.47	3.9	表	154

Tab.5-4　第 210 次調査 SX055 出土銭貨計測値

55	24.86	24.69	18.49	18.41	0.98 ～ 1.35	2.9		155
56	23.99	24.04	18.03	18.28	1.09 ～ 1.41	3.1	表	156
57	24.52	24.64	20.54	19.88	1.10 ～ 1.40	3.3	表	157
58	24.74	24.76	20.28	19.86	1.19 ～ 1.38	3.8	表	158
59	25.04	25.07	20.58	20.21	0.97 ～ 1.59	3.5		159
60	24.60	24.62	20.03	20.09	1.34 ～ 1.54	3.9	表	160
61	24.18	23.39	20.02	19.68	0.97 ～ 1.40	3.0		161
62	24.35	24.61	21.18	20.04	0.98 ～ 1.27	3.2	表	162
63	23.71	23.73	20.29	19.82	0.97 ～ 1.20	2.7		163
64	23.39	24.18	19.23	19.74	0.95 ～ 1.28	2.7		164
65	23.75	23.84	19.31	19.48	1.25 ～ 1.51	3.7		165
66	24.67	24.54	20.23	19.54	1.06 ～ 1.63	3.6	表	166
67	24.90	24.62	20.27	20.55	1.07 ～ 1.66	3.4	表	167
68	24.51	24.54	19.13	18.96	1.17 ～ 1.76	3.9		168
69	24.98	24.39	19.13	19.05	1.09 ～ 1.42	3.4	表	169
70	24.47	24.40	19.89	19.04	1.27 ～ 1.48	4.0		170
71	25.08	25.07	18.34	19.14	1.15 ～ 1.57	3.9		171
72	23.94	24.44	20.31	20.17	1.14 ～ 1.45	3.4	表	172
73	23.04	23.29	18.58	18.55	1.33 ～ 1.60	3.4		173
74	24.40	24.16	20.11	19.86	1.00 ～ 1.29	3.0		174
75	24.93	24.65	20.77	20.29	1.19 ～ 1.33	3.7	表	175
76	24.59	24.52	18.90	18.72	0.99 ～ 1.47	3.0		176
77	23.61	23.54	19.83	19.86	1.08 ～ 1.15	3.0		177
78	24.74	24.68	18.69	18.33	1.01 ～ 1.09	3.0	表	178
79	24.82	25.02	18.49	18.99	1.11 ～ 1.56	3.5	表	179
80	24.68	24.44	21.58	21.59	1.31 ～ 1.90	4.1		180
81	24.95	25.15	19.63	19.40	1.04 ～ 1.21	3.1	表	181
82	23.36	23.43	20.54	20.54	1.18 ～ 1.33	3.5		182
83	23.87	23.89	18.78	19.26	1.23 ～ 1.59	3.5	表	183
84	23.45	23.30	19.09	18.21	1.17 ～ 1.51	3.3	表	184
85	24.61	24.69	18.90	18.68	1.40 ～ 1.93	4.4	表	185
86	23.51	23.56	18.79	18.36	1.15 ～ 1.63	3.4	表	186
87	24.64	24.14	20.83	20.51	1.11 ～ 1.42	3.4		187
88	23.51	23.82	18.31	18.41	1.18 ～ 1.48	3.7	表	188
89	24.73	24.51	19.21	19.58	1.20 ～ 1.45	4.2		189
90	24.64	24.86	18.24	19.35	1.32 ～ 1.48	3.6		190
91	24.82	24.92	19.65	20.22	1.12 ～ 1.33	3.5	表	191
92	24.20	23.97	20.38	20.36	1.11 ～ 1.79	3.5	表	192
93	24.76	24.55	18.60	19.33	1.08 ～ 1.30	3.6		193
94	24.27	23.79	20.01	19.40	1.47 ～ 1.63	4.6	表	194
95	25.34	24.84	18.34	18.62	1.19 ～ 1.45	4.0	表	195
96	24.58	24.67	21.38	20.74	1.18 ～ 1.48	3.9	表	196
97	24.53	24.56	19.14	18.60	0.94 ～ 1.20	2.9	表	197
98	24.53	24.54	17.81	18.88	0.94 ～ 1.11	2.7		198
99	23.88	24.10	18.86	18.04	1.10 ～ 1.58	3.3	表	199
100	25.63	25.33	18.11	18.24	1.19 ～ 1.40	4.0		200

Tab.5-5　第 210 次調査 SX055 出土銭貨計測値

C 列 【条 210　SX-55】

番号	(A)　銭径 (mm)　(B)		(C)　内径 (mm)　(D)		銭厚 (mm)	量目 (g)		R 番号
1	24.63	25.10	20.01	19.51	1.18 ～ 1.33	3.2	表	201
2	24.71	24.69	19.81	19.35	1.39 ～ 1.65	4.2		202
3	24.96	25.01	21.70	20.86	0.96 ～ 1.42	3.4	表	203
4	25.32	25.64	20.42	20.36	1.10 ～ 1.54	3.6	表	204
5	24.46	24.42	21.51	21.51	0.94 ～ 1.71	3.4		205
6	23.68	23.76	19.35	19.07	1.23 ～ 2.18	3.9	表	206
7	24.53	24.59	19.82	19.44	1.47 ～ 2.66	3.9		207
8	24.16	24.43	20.28	20.27	1.45 ～ 2.11	4.2	表	208
9	23.77	23.72	18.20	18.65	1.32 ～ 1.84	3.8		209
10	24.60	24.73	20.53	20.54	1.17 ～ 1.99	3.7	表	210
11	24.57	24.55	20.68	20.54	1.21 ～ 1.71	3.6	表	211
12	25.21	25.04	20.60	20.64	1.26 ～ 1.38	3.9	表	212
13	24.61	24.39	18.89	19.39	1.14 ～ 1.67	3.5	表	213
14	24.23	24.34	19.87	19.43	1.29 ～ 1.49	3.6	表	214
15	24.19	24.04	18.50	18.21	1.33 ～ 1.47	3.7	表	215
16	23.64	23.91	18.05	18.36	1.24 ～ 1.90	3.9		216
17	23.86	24.17	19.81	18.74	1.13 ～ 1.65	3.4		217
18	24.68	24.78	16.94	16.99	1.00 ～ 1.21	3.4		218
19	24.83	25.04	19.95	19.94	1.06 ～ 1.29	3.6		219
20	23.70	24.02	18.46	18.46	1.45 ～ 1.59	4.3		220
21	24.79	24.82	21.10	21.01	1.16 ～ 1.46	3.5	表	221
22	24.16	24.17	19.38	19.56	1.34 ～ 1.68	4.3	表	222
23	24.45	24.42	18.75	18.57	1.00 ～ 1.35	3.2	表	223
24	25.13	24.93	18.89	19.66	1.22 ～ 1.60	4.0	表	224
25	24.49	24.65	19.00	18.64	1.21 ～ 1.54	3.8		225
26	24.23	24.29	18.80	18.79	1.10 ～ 1.31	3.3		226
27	24.25	24.51	18.31	18.68	0.96 ～ 1.18	2.8		227
28	24.83	25.32	19.82	19.30	1.11 ～ 1.64	3.6		228
29	23.32	23.42	19.58	18.63	1.34 ～ 1.60	3.9		229
30	24.47	25.14	16.44	17.27	1.01 ～ 1.40	3.3		230
31	25.18	25.19	19.61	18.90	1.19 ～ 1.44	3.4		231
32	24.45	24.56	19.75	20.14	1.24 ～ 1.65	3.4	表	232
33	24.36	24.58	18.52	18.53	1.00 ～ 1.20	2.8		233
34	24.06	23.90	19.12	19.13	1.26 ～ 1.74	3.7		234
35	24.69	24.56	19.74	20.19	1.17 ～ 1.43	3.8	表	235
36	24.10	23.96	18.74	18.33	1.10 ～ 1.34	3.2		236
37	25.31	25.47	18.28	18.08	1.15 ～ 1.32	3.7	表	237
38	24.44	24.51	20.96	21.08	1.07 ～ 1.42	3.7		238
39	24.73	24.87	19.65	20.22	1.20 ～ 1.51	4.1		239
40	24.06	24.04	19.84	19.20	1.64 ～ 1.93	3.8		240
41	24.56	24.40	15.23	18.64	0.99 ～ 1.24	3.1	表	241
42	24.43	24.48	20.67	20.98	1.14 ～ 1.68	4.2		242
43	23.74	22.97	19.43	18.91	1.14 ～ 1.58	3.0		243
44	24.30	24.32	19.43	20.03	1.31 ～ 1.75	4.1		244
45	23.83	23.95	19.03	18.25	1.00 ～ 1.19	2.8		245
46	24.95	25.04	18.85	19.99	1.25 ～ 1.45	3.7		246
47	24.04	24.33	17.90	18.15	1.25 ～ 1.58	3.8		247
48	24.51	24.63	18.63	19.38	1.21 ～ 1.38	3.6		248
49	25.21	24.81	21.04	20.27	1.06 ～ 1.58	3.7		249
50	24.79	24.81	20.71	20.41	1.19 ～ 1.66	3.3	表	250
51	24.57	24.82	17.68	17.61	0.96 ～ 1.15	3.5		251
52	24.18	24.19	19.43	19.34	1.11 ～ 1.19	3.1	表	252
53	24.33	24.06	19.95	18.58	0.91 ～ 1.07	3.3		253
54	24.42	24.35	18.99	18.94	1.19 ～ 1.42	3.2		254

Tab.5-6　第 210 次調査 SX055 出土銭貨計測値

55	22.31	22.37	19.02	18.95	0.93 ～ 1.04	3.7		255
56	25.04	24.97	19.50	19.71	1.20 ～ 1.34	2.3		256
57	24.64	24.85	20.25	20.51	1.07 ～ 1.27	3.6		257
58	24.45	24.48	21.04	20.71	1.10 ～ 1.30	2.8	表	258
59	24.93	25.04	21.20	20.32	1.10 ～ 1.88	3.2		259
60	24.39	24.35	18.99	17.71	1.19 ～ 1.64	3.1	表	260
61	24.01	23.62	18.63	18.39	1.23 ～ 1.41	3.5	表	261
62	24.93	25.15	20.40	20.11	1.10 ～ 1.38	3.5		262
63	24.73	24.69	20.68	20.70	1.18 ～ 1.42	4.1	表	263
64	24.08	24.04	19.71	18.85	1.21 ～ 1.74	4.1		264
65	24.77	24.86	19.77	19.68	1.18 ～ 1.41	3.5		265
66	24.18	24.25	18.90	18.67	1.11 ～ 1.32	3.4	表	266
67	24.94	24.67	19.31	19.30	1.04 ～ 1.22	3.2	表	267
68	23.60	23.78	18.19	18.31	1.36 ～ 1.49	4.1	表	268
69	24.68	24.47	18.96	18.08	1.07 ～ 1.30	3.5		269
70	24.33	24.30	18.27	18.36	0.97 ～ 1.24	3.1		270
71	23.98	23.51	19.87	18.97	1.18 ～ 1.78	3.4		271
72	24.62	24.81	20.04	19.39	0.93 ～ 1.14	2.6	表	272
73	24.71	24.81	19.16	19.50	1.05 ～ 1.26	3.6		273
74	24.94	24.52	20.36	21.05	1.09 ～ 1.32	3.3		274
75	24.05	23.85	20.77	20.70	0.94 ～ 1.22	2.8		275
76	24.65	24.85	20.74	20.47	1.07 ～ 1.28	3.3	表	276
77	23.98	24.26	20.14	20.25	0.94 ～ 1.23	3.1		277
78	24.45	24.66	18.22	17.62	1.14 ～ 1.29	3.5		278
79	23.79	23.61	19.75	20.43	1.14 ～ 1.55	3.6		279
80	23.51	23.46	18.67	18.39	1.25 ～ 1.38	3.8	表	280
81	24.74	24.94	19.15	19.57	1.28 ～ 1.74	4.7		281
82	24.32	24.12	20.41	20.56	0.96 ～ 1.27	3.1	表	282
83	24.38	24.19	19.88	20.39	1.03 ～ 1.35	3.2	表	283
84	24.65	24.62	20.68	21.13	1.20 ～ 1.38	3.8	表	284
85	25.21	25.19	18.95	18.55	0.84 ～ 1.36	3.5	表	285
86	24.43	24.60	18.09	17.83	1.22 ～ 1.49	3.8	表	286
87	21.75	22.41	18.07	17.91	0.82 ～ 1.02	1.9	表	287
88	22.66	22.21	18.51	17.95	1.04 ～ 1.28	2.6	表	288
89	24.39	24.02	20.32	20.11	1.06 ～ 1.34	3.5	表	289
90	24.33	24.01	20.55	20.25	1.03 ～ 1.35	3.3	表	290
91	24.80	24.56	19.10	19.30	1.15 ～ 1.52	2.9	表	291
92	24.53	24.32	19.35	19.35	1.22 ～ 1.60	4.1		292
93	24.48	24.41	20.83	20.05	1.13 ～ 1.42	3.9		293
94	24.30	24.46	20.41	20.44	1.11 ～ 1.42	3.6	表	294
95	24.22	24.40	18.25	18.38	1.17 ～ 1.82	3.5	表	295
96	24.64	24.70	19.65	19.49	1.16 ～ 1.47	3.3	表	296
97	24.18	24.30	18.21	19.07	1.24 ～ 1.40	3.9	表	297
98	25.11	25.21	18.27	20.14	1.04 ～ 1.15	3.0		298
99	24.40	24.73	20.09	19.80	0.98 ～ 1.19	3.2	表	299
100	24.45	24.39	19.90	20.06	1.12 ～ 1.41	3.2	表	300

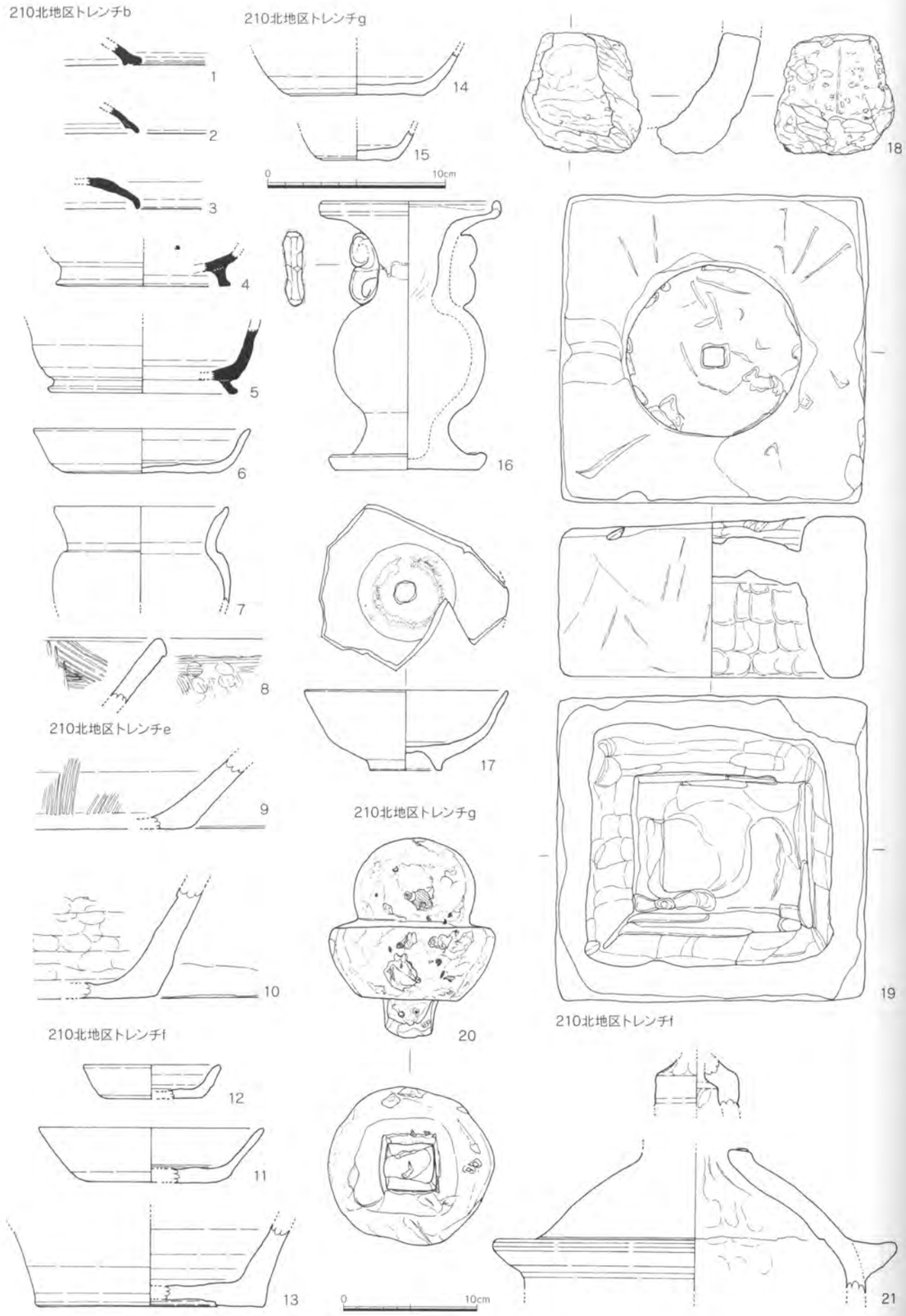


Fig.92　第 210 次調査トレンチ出土遺物実測図その 1（1/3、1/4）

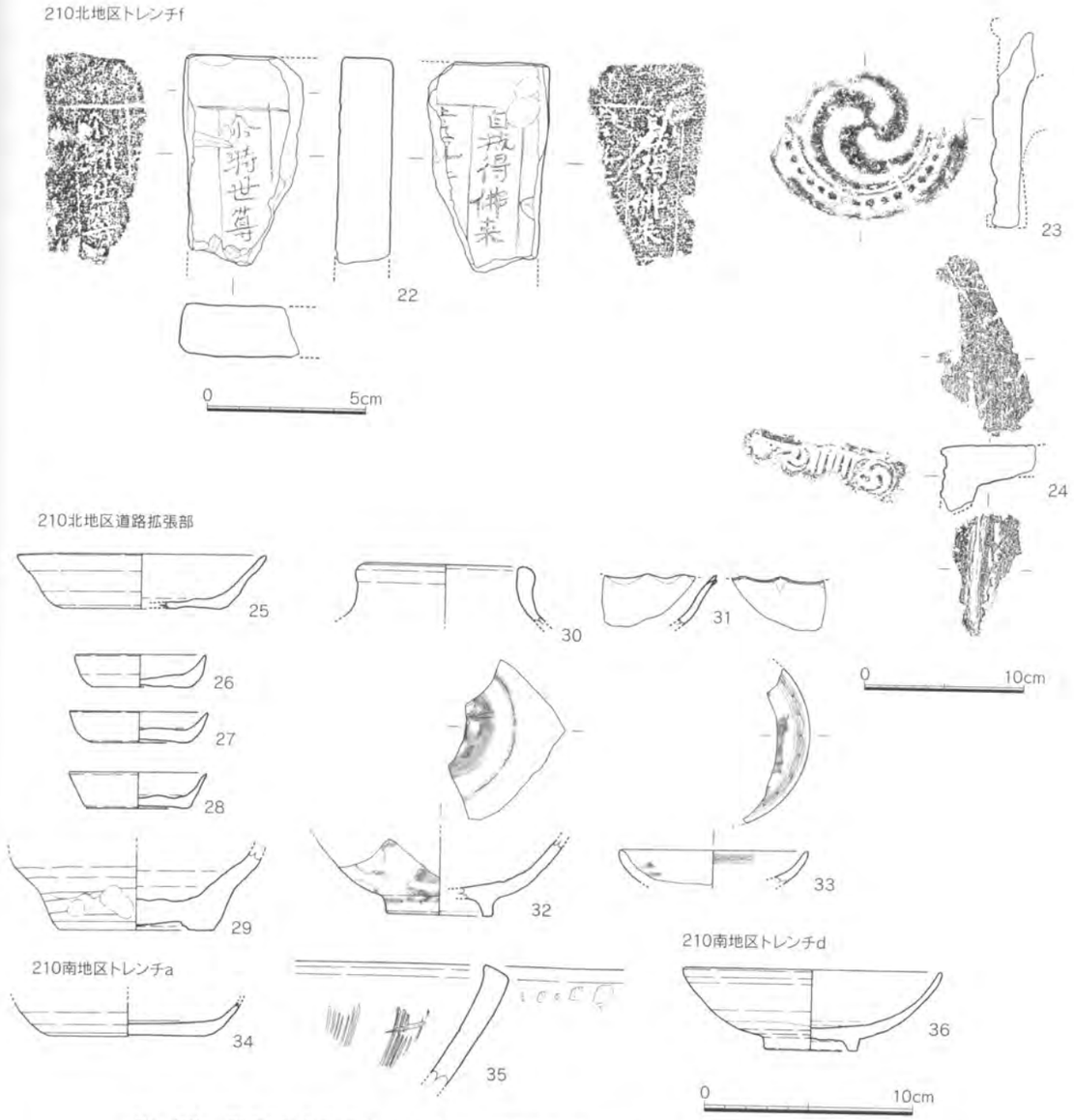


Fig.93　第 210 次調査トレンチ出土遺物実測図その 2（22 は 1/2、1/3、1/4）

210 北地区トレンチ b 出土遺物（Fig.92）

須恵器

蓋（1 ～ 3）　1、2 は蓋 1 破片。1 の方が口縁部内部のかえりがしっかりしており、2 はかなり退化している。3 は蓋 3 破片。天井部を回転ヘラ削り調整。

坏 c（4、5）　4 は器高 2.0+cm、復元底径 9.8cm。高台はやや外側に向いて張っている。5 は器高 3.7+cm、復元底径 10.8cm。高台は大きく外側にむかって張っている。

土師器

坏 a（6）　復元口径 12.2cm、器高 2.5cm、復元底径 9.0cm を測る。底部回転糸切り。

小壺（7）　口径 9.8cm、器高 5.5+cm を測る。調整は内外面、横ナデ。全体的に摩耗瓦激しい。器

形から古墳時代のものか。

瓦質土器

擂鉢（8） 口縁部破片。内面調整は刷毛目調整で、その後に擂目を刻んでいる。外面には器壁調整時の指頭圧痕が残り、それの上から縦方向の刷毛目調整をする。口縁部付近は横方向の刷毛目調整となる。

210 北地区トレンチ e 出土遺物（Fig.92）

国産陶器

擂鉢（9） 底部破片。器高 4.0+cm。内面に擂目が入る。器壁断面に焼成不良による生焼け部が認められる。胎土の色調は淡灰色だが、その生焼け部は淡黄褐色を呈す。

鉢（10） 底部破片。器高 6.1+cm。内面は横ナデ。指頭圧痕が残る。外面は横ナデ。体部の下部はヘラ削り調整を施す。底面は不定方向のヘラによるナデ調整。

210 北地区トレンチ f 出土遺物（Fig.92）

土師器

坏 a（11） 復元口径 12.6cm、器高 3.1cm、復元底径 9.1cm を測る。底部切り離し技法は摩耗のため不明。

小皿 b（12） 復元口径 7.6cm、器高 1.9cm、復元底径 6.0cm を測る。底部切り離し技法は摩耗により不明。

中国陶器

壺（13） 底部破片。器高 4.7+cm、復元底径 12.8cm を測る。削り出し高台。

210 北地区トレンチ g 出土遺物（Fig.92）

土師器

坏 a（14） 口縁部を欠く破片。器高 2.5+cm、復元底径 7.9cm を測る。風化のため調整は不明瞭。

小皿 b(15) 口縁部を欠く破片。器高 1.8+cm、復元底径 4.4cm を測る。底部切り離しは回転糸切り。

国産陶器

華瓶（16） 復元口径 9.8cm、器高 15.1cm、底径 8.2cm を測る。頸部に耳が付く。釉は乳白色の不透明のものが施される。内面の器壁には粘土の絞り痕跡が確認できる。底部は回転糸切り。

国産磁器

椀（17） 復元口径 11.5cm、器高 4.5cm、底径 4.1cm を測る。内外面を施釉して、内面の見込み部を蛇の目状に釉剥ぎを施す。見込み部分には重ね焼き時の高台の跡が残る。

石製品

五輪塔（18） 水輪の破片。縦 9.1+cm、横 9.0+cm、厚さ 3.5cm。石材は阿蘇凝灰岩。

210 北地区トレンチ f・g 出土遺物（Fig.92）

石製品

五輪塔（19、20） 19 は地輪の完形品。縦 23.2cm、横 23.15cm、厚さ 12.1cm。上面は火輪の受けのため窪みをもつ。内面は底面から削られて空洞になっている。内面の削りは粗く削り痕跡が明瞭に残っている。20 は風水輪の完形品。縦 15.1cm、横 12.5cm。石材はすべて阿蘇凝灰岩である。

210 北地区トレンチ f 出土遺物（Fig.92）

瓦質土器

瓦灯（21） 摘み部分と本体部分の２つに分かれて出土している。同一個体の破片と思われるが接合はしない。摘み部分の器高 2.6+cm。内面に粘土を捻ったねじり皺が観察できる。本体部は器高 7.8+cm、最大径 22.0cm を測る。胴部の鍔は貼り付け。内外面が黒色化している。本体部の上部には刻み目があり、

一部透かし用の処理がしてあり上部との接合部にあたり何らかの細工がしてあったと想定される。

210 北地区トレンチ f 出土遺物（Fig.93）

瓦類

瓦経（22） 瓦経の破片。縦 6.7cm ＋、横 3.7cm ＋、厚み 1.6cm。上端部以外は割れている。胎土はやや密。0.2mm 程度の白色粒子を含む。焼成はやや良好。色調は淡黄灰色。細いヘラにより罫線を引き、区画に収めるように経文をヘラにより刻書している。横罫線は上部から 1.5cm の所に引く。縦罫線の幅は 1.6cm。表には、「自我得佛來」とあり、左に文字は判読できないが、次の行の経文が刻まれているのが確認できる。自我得佛來は、如来寿量品第十六 91 行目の前半である。裏には、「爾時世尊」と刻まれている。これは、如来寿量品第十六 92 行目の前半である。

軒丸瓦（23） 左回りの三巴紋。胎土は白色鉱石を多く含む。焼成は不良。色調は明黄灰色。土師質。

軒平瓦（24） 剣頭紋と巴紋の組み合わせ。三巴は右巻き。巴紋と巴紋の間に剣頭を２つ配置する。

210 北地区道路拡張部出土遺物（Fig.94）

土師器

坏 a（25） 復元口径 12.0cm、器高 2.6 ＋ cm、復元底径 7.5cm。底部切り離しは回転糸切り。1/4 程度の破片。XⅣ期か。

小皿 b（26 ～ 28） 26 は口径 6.3cm、器高 1.55cm、底径 4.9cm を測る。ほぼ完形。内外面の調整は摩耗により不明。XX期。27 は復元口径 6.6cm、器高 1.5cm、復元底径 4.7cm を測る。底部切り離し技法は回転イト切り。XX期。28 は復元口径 6.6cm、器高 1.7cm、復元底径 5.0cm を測る。XX期。

中国陶器

壺（29） 底部破片。高台は削りだし。焼成はやや良好。壺 B 類。

国産陶器

油壺（30） 口縁部破片。焼成はやや不良。胎土の色調は明橙色。釉調は不透明な茶橙色を施す。

国産磁器

坏 × 皿（31） 口縁部の破片。器高 2.3 ＋ cm。口縁部は外反し、口縁端部が輪花状を呈す。

中国磁器

染付（32） 器高 3.8cm ＋、底径 5.2cm。釉調は、やわらかく光沢があり硬質。半透明。内外面に呉須を使って文様を描く。大きめの貫入と、大きめの気泡が多くある。高台畳付部には、砂目があり、重ね焼きをしていたと考えられる。明染。

肥前系磁器

皿（33）

210 南地区トレンチ a 出土遺物（Fig.93）

土師器

坏 a（34） 底部から体部の破片。器高 1.7cm ＋。復元底径は 7.5cm。底部切り離し技法は、回転糸切り。板状圧痕あり。

国産陶器

擂鉢（35） 口縁部の破片。器高 5.8cm ＋。内面に刷り目を施す。刷り目は 7 条。焼成は良好で、硬く焼き締まっている。色調は内外面共に暗茶褐色。

210 南地区トレンチ d 出土遺物（Fig.93）

国産陶器

皿（36） 復元口径 12.4cm、器高 3.85cm、底径 4.0cm。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。高台は削りだし高台で、釉は付け掛けか。ただ、内面の釉調は艶のある透明で光沢がある緑黄色を呈し、釉垂れ部は青みがかかっている。外面は、灰色がかった緑色で釉は薄く施している。

210 茶色土出土遺物 (Fig.94)

土師器

小皿a1（1、2） 1は復原口径7.1cm、器高1.45cm、復元底径4.0cm。色調は黄灰色。底部回転糸切り。2は復元口径8.2cm、器高1.15cm、復元底径6.1cm。色調は淡赤褐色。底部切り離しは、糸切り。その後に板状圧痕。

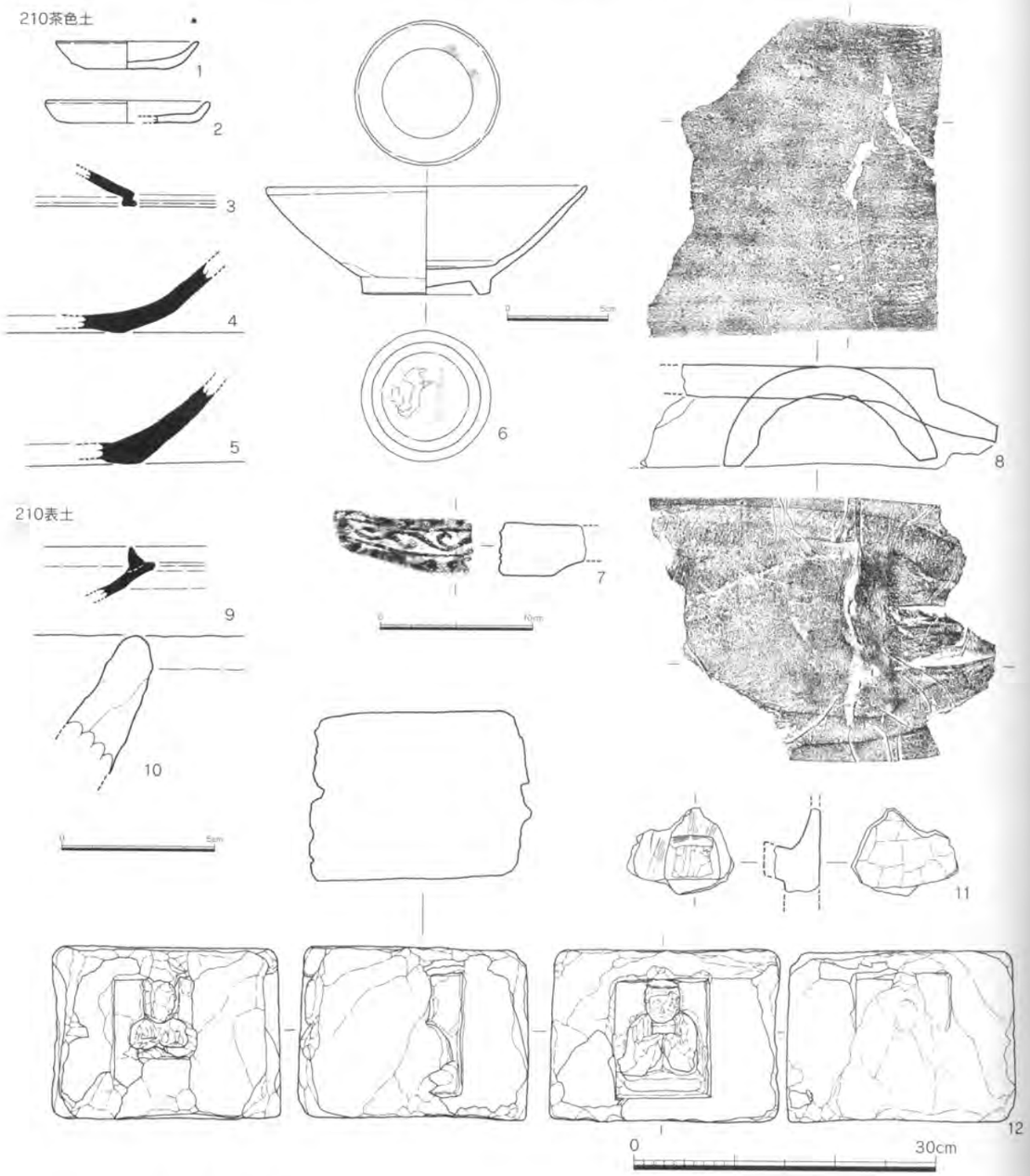


Fig.94 第 210 次調査トレンチ出土遺物実測図その 3（1/3、1/4、12 は 1/6）

須恵器

蓋（3） 口縁部破片。端部形状が異質。蓋以外の可能性もある。

須恵質土器

捏鉢（4、5） 共に底部から体部の破片。焼成は良好。還元炎焼成。色調は暗灰色。胎土は 2mm 以下の白色粒子を少量含む。1mm 程度の黒色粒子を少量含む。内面は使用して摩滅しており、表面は滑らかである。底部の切り離し後は未調整。

瓦類

軒平瓦（7） 破片。軒平面には、偏向唐草文と珠文が確認できる。焼成は不良。色調は灰黄色～黒灰色。胎土は 4mm 以下の白色粒子を少量含む。

丸瓦（8） 玉縁部の破片。縦 21.0+cm、横 14.0cm、厚さ 2.3cm。焼成は良好。還元炎焼成。色調は暗青色。表面は部分的に溶けて光っている。凹面は布目痕跡と吊り縄痕跡が確認できる。凸面は縄目叩きをナデ調整によって消している。側端部はヘラ切り後に丁寧に調整している。凹面の側端部から玉縁部にかけては 2cm 前後の幅でヘラ削り調整を施している。

210 表土出土遺物 (Fig.95)

白磁

椀（6） 口径 16.0cm、器高 5.35cm、底径 6.4cm。Ⅷ-2 類。底部高台内に薄く透明な釉が掛かる。

須恵器

坏身（9） 口縁部破片。器高 2.6 + cm。焼成は良好。還元炎焼成。色調は淡灰色。

土製品

とりべ（10） 口縁部破片。器高 4.65 + cm。外面に溶解した付着物が吸着している。

石製品

石鍋（11） 破片。縦 2.9cm、横 3.5cm、厚み 1.5cm、滑石製。

石塔（12） 北地区で表採をした石塔の一部で方形を呈す。層塔の一材と考えている。高さ 17.5cm、横幅 23.1cm、奥行き 23.2cm（すべて残存値）を測る。石材は粘質土で軟質の砂岩。全体の 2/3 ほどが残存。現状の観察では、神・仏とみられる像が彫出されている面は 3 面確認できる。残り 1 面も像彫り出しに伴う方形彫り窪みが確認できるため、側面のそれぞれ 4 面には元々、像が彫られていたと考えられる。比較的残りが良い部位で観察をすると、像の彫出しに伴う方形の窪みは、左右 6.5cm、上下 2.5cm の空間をとるように割り付けられている。方形窪みはやや歪んでおり、下部の横幅は 9.5cm だが、上部の横幅は 10.2cm とやや上部が広い。彫り出しの深さは深い部位で 2.5cm、浅い部位は 0.03cm。像は坐像で、残りが良い面を例にとると、ゆったりとした僧衣のようなものを着用しており、両手を合わせている姿である。これらの特徴からは神像と推定できる。この面の反対の面の坐像は、残った所を観察すると、手は合わせておらず、右手と左手の位置はずれている。この彫り込まれている像の特徴を、胸前で左手の人さし指を立てて拳を作り、その人さし指を右手の拳で包み込む智拳印と、頭上に宝冠を持つとみるならば、金剛界大日如来が考えられる。

また、左手と右手が智拳印にしては離れすぎているとみると、左手に何かを持ち、右手は削れてしまっていると考えることも可能である。すると、右手が施無畏印で左手に蓮華などを持っているようにも見える。それらの属性からは観音菩薩と推定ができる。残存が悪い面も像のシルエットから考えると、如来の可能性が高い。以上のように、層塔の 4 面に彫られてことから、如来四仏の可能性が高いと考え

ていたが、薩摩川内市指定文化財である薩摩国分寺層塔など、4 面それぞれの尊格が統一されていない例もあるため、類例の調査など、今後の検討をしていくことが必要だろう。

(5) 小結

本調査は小弐氏と関係が深いと想定されている字「御所の内」地区の後背地にあたる丘陵の調査であった。時代を追って土地利用の変遷を追ってみたい。まず、丘陵南端の頂部に、周溝を伴う墳墓 210ST010 が構築された。ここは南側に遮蔽物がなく、眼下には当時栄えていた大宰府の町並みが広がる見晴らしのよい場所であった。その点からも墓所として選定されたものと考えられる。210ST010 の副葬品としては、、輸入陶磁器の白磁 II 類碗、青白磁の合子（紅皿か）、双鳥草文鏡、鋏、刀子などが出土しており、被葬者が女性であった可能性も推定できよう。時期は 12 世紀代を考えている。時をあまりおかず、210SX012 が同じ場所に構築されている。これも墓の可能性が高い。西側の丘陵の突端部とその西側の平坦部にそれぞれ、210ST030、040、050 という墓が作られている。ST040 と 050 はそれぞれ木棺墓と考えられる。同じ墓でも ST030 は 4 つ小区画が集まってできた石組み集団墓という違いもみてとれる。おおよそ、それぞれの墓は 12 世紀代を中心としている。

丘陵の東西方向の頂部を横断するように、幅 4 ～ 5m、深さ 2m 程度の堀が 50m 以上に渡って掘られている。埋没の時期は、出土した遺物や、埋納遺構（210SX055）によれば、13 世紀後半～ 14 世紀代と考えられよう。これは少弐氏が大宰府を中心に活躍していた時期とかさなり、字御所ノ内と近接していることからも、少式氏に関係する防御的な機能をもっていた可能性を考えておきたい。また、南西部の 210SX035 からは大量の中世瓦が出土しており、堀の北側、つまり丘陵側に瓦葺きの施設があった可能性が考えられる。この瓦を多くつかっていた建物は観世音寺の子院の可能性も考えられる。以後は顕著な土地利用がされず、昭和 20 年代に調査区北側は土取りされ大規模に地形が変化した。その後、花関酒造が建設され現代に至った。

今回の対象範囲内の北側はトレンチ調査しかできなかったが、遺物に五輪塔や瓦経が出土していることからも、北側の丘陵に平安後期～鎌倉・室町期の遺跡が広がっていることが推定される。

以上、12 世紀代の墓としての利用と、13 世紀後半～ 14 世紀代の堀の構築・利用の停止がこの土地に関する大きな土地利用の流れということがわかった。

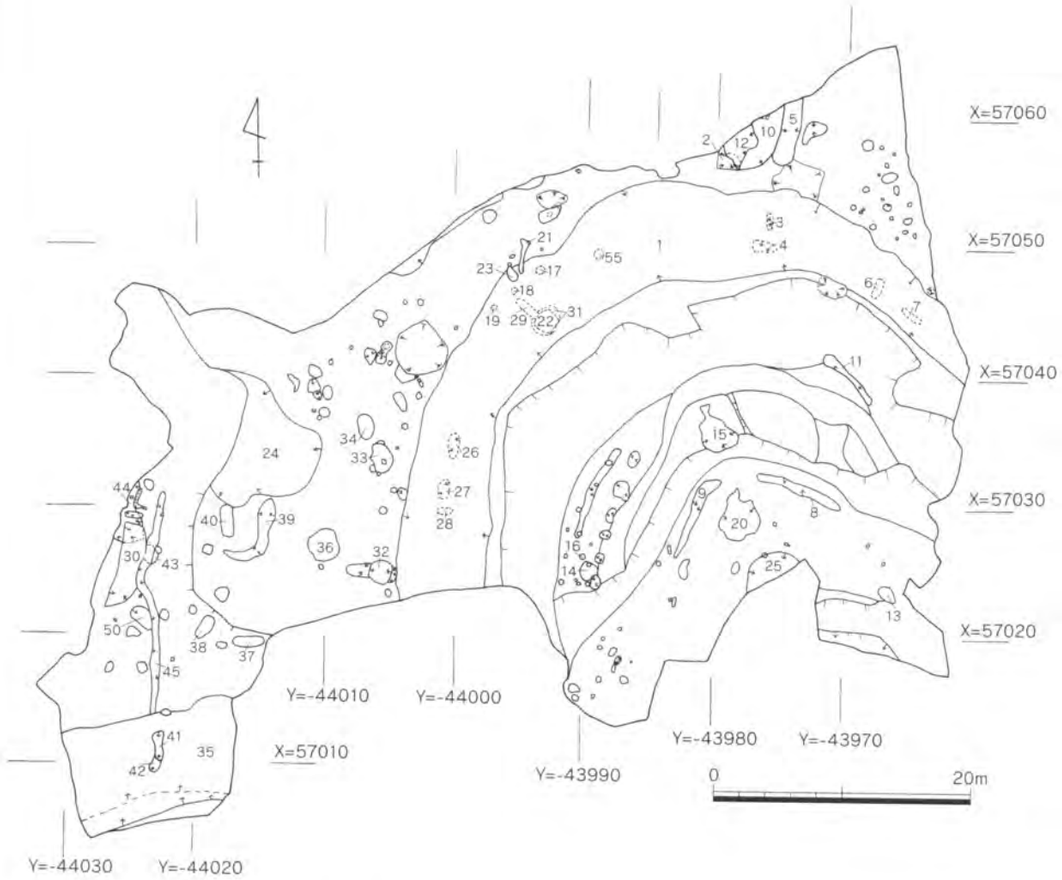


Fig.95　第 210 次調査遺構略測図（1/500）

Tab.6　大宰府条坊跡第 210 次調査遺構番号台帳

※「遺構面」で未記入のものは、1 面目および遺構面不明のものを含む。

S- 番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
1	210SX001	掘		明赤茶色土（反転後明茶土）		13 世紀前半～中頃	
2	210SX002	試掘トレンチ	1998 年の確認調査トレンチ			12 世紀代	
3	210SK003	長方形土坑		明茶赤色粘	3→1		
4	210SK004	長方形土坑		明茶赤色粘			
5	210SD005	溝	10 との関係を注意	明茶色土		12 世紀～	
6	210SK006	長方形土坑			6→1		
7	210SK007	長方形土坑			7→1		
8	210SD008	溝（東側）					
9	210SD009	溝（西側）					
10	210ST010	墓				12c 中～後	
11	210SD011★	溝		明茶土		中世～	
12	210SX012	墓の可能性が高い	10 の掘りまちがいか				
13	210SK013	土坑か					
14		土坑					
15	210SK015	土坑					
16		小穴					
17	210SX017	小穴	横穴 動物（穴熊）の巣か	淡茶灰色土	17→1		
18		小穴		淡茶灰色土	18→1		
19		小穴		淡茶灰色土	19→1		
20	210SK020	土坑				14 世紀～ 15 世紀	
21		土坑？	北に向かってドル状になる	淡赤色土			
22	210SK022	土坑			22→1		
23	210SK023	土坑					
24	210SX024	谷状堆積		茶色土			
25	210SK025	土坑				～古代	
26	210SK026	土坑		茶色土	26→1		
27	210SK027	土坑×		茶色土	27→1		
28	210SK028	土坑×		暗茶色土	28→1		
29	210SK029	土坑×溝		明茶色土	29→1		
30	210ST030	墓　中世墓	a、b、c、d の 4 区画が確認できた			12 世紀～	
31		土坑		淡茶色土	31→22→29→1		
32	210SK032	土坑					
33	210SK033	土坑					
34	210SK034	土坑					
35	210SX035	塀	SX001 の続きか			14 世紀前半～	
36	210SK036	土坑					
37	210SK037	土坑					
38	210SK038	土坑					
39	210SD039	溝	210ST040 に伴う溝か				
40	210ST040	墓　木棺墓				12 世紀中頃	
41	210SK041	土坑			41→42→35		
42	210SK042	土坑			41→42→35		
43	210SX043	墓か					
44	210SX044	たまり状遺構		赤褐色土	44→30	12 世紀～	
45	210SD045	溝		明茶色土		12 世紀前半～	
46	210ST046	墓	集積墓			近現代	
欠番							
欠番							
欠番						～12 世紀前半	
50	210ST050	墓					
欠番							
欠番							
欠番							
欠番							
55	210SX055	埋納遺構	銅銭出土（さし銭）			13 世紀中～後半	
北地区トレンチ e						中世～	
トレンチ f						～近世	
トレンチ g						14c ～近世末	
トレンチ g				灰黄白色土		13 ～ 14c	
トレンチ h						中世～近世末	
茶色土							
明黄色土							
南地区トレンチ a						12c ～	
南地区トレンチ a				茶色土			
南地区トレンチ a				明灰色土		～現代	
南地区トレンチ b				黄茶色土		12c ～	
南地区トレンチ b				茶黄色粘土			
南地区トレンチ b				茶色土		～江戸後期 18c 後半～	
南地区トレンチ b				明灰色土			
南地区トレンチ d						17c ～	
南地区トレンチ e							
北地区トレンチ b						奈良～鎌倉	
北地区トレンチ c							
トレンチ d							

Tab.7-1　大宰府条坊跡第 210 次調査　出土遺物一覧表（1）

S-1

須恵器	蓋　把手
土師器	坏 a　坏 b　破片
白磁	椀；V-4×VIII-1.3 (1)
瓦類	熨し瓦
石製品	滑石製　滑石製石鍋　石（表面がなめらか）
	五輪塔（阿蘇凝灰岩）

S-1 明茶色土

須恵器	甕　壺
土師器	高台　破片
瓦器	椀 c
龍泉窯系青磁	椀；I (1)　破片 (1)
同安窯系青磁	皿；I-2b (1)
瓦質土器	器台
肥前系陶磁器	皿 (1)
白磁	椀；II-1 [1]　V-2×VI ～ VIII-4 (1)　V-2c (1)　V ～ VII (1)
中国陶器	壺；D-3 (1)
	他；水注 ×? (2)　破片 (D-2) (1)
瓦類	平瓦（土師質、無文）　平瓦（土師質、格子）
	平瓦（須恵質、無文）　丸瓦（須恵質、無文）
	丸瓦（瓦質、縄目）　軒平瓦（土師質）　瓦玉
石製品	石（表面がなめらか）

S-2

土師器	小皿 a

S-5

須恵器	甕
黒色土器 A	椀 c
白磁	皿；III-1 (1)（内面墨痕）
瓦類	平瓦（瓦質、縄目）

S-6 北側柱痕

土師器	坏 a（仆）

S-8

瓦質土器	火鉢

S-10

土師器	皿
白磁	皿；VI-1b (1)　VII-2a (1)
青白磁	合子（蓋、身）

S-10 淡茶色土

白磁	皿；VI-1a (2)

S-10 赤褐色土

土師器	小皿 a（仆）

S-10 黄色土

土師器	破片
瓦類	破片

S-11

須恵器	甕
土師器	破片
瓦類	平瓦（須恵質、無文）

S-12 淡茶褐色土

土師器	高台

S-12 濃茶褐色土

白磁	椀；II-1 [1]

S-13

須恵器	蓋 c
土師器	破片（中世～）

S-14

土師器	破片

S-15

土師器	破片
瓦類	瓦玉

S-15 赤茶色土

金属製品	鉱滓

S-15 赤褐色土

須恵器	甕
土師器	把手　破片
瓦類	平瓦（須恵質、格子）

S-16

土師器	破片

S-20 明茶色土

須恵器	蓋　坏 H　甕
土師器	破片
黒色土器 A	椀 c
白磁	椀；白？椀 VIII-1
瓦類	平瓦（瓦質、格子）

S-20 灰茶色土

須恵器	甕
土師器	小皿
須恵質土器	甕
瓦類	平瓦（須恵質、格子）

S-20 赤褐色土

須恵器	蓋 a3　甕
土師器	把手　破片
越州窯系青磁	椀；I-2 ア (1)
高麗青磁	象嵌；椀 (1)
白磁	皿；破片 (1)
瓦類	平瓦（土師質、無文）　平瓦（瓦質、格子）
	丸瓦（須恵質、無文）

S-24

土師器	椀 c　小皿　小皿 a1　破片（煮沸具）
龍泉窯系青磁	椀；I-2 (1)
須恵質土器	甕（軟質）
白磁	椀；V-4a (1)
	皿；VII-1b (1)
中国陶器	壺；B (1)
瓦類	平瓦（瓦質、無文）　平瓦（瓦質、格子）
	平瓦（土師質、縄目）

S-25

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	破片（瓦質）

S-26

土製品	炉壁

S-27

土師器	破片
石製品	石（表面がなめらか）

S-30 茶色土

中国陶器	壺；II (1)　IV
	他；水注 B　水注 VIII
瓦類	平瓦（須恵質、無文）　平瓦（瓦質、無文）

S-30a

土師器	坏 a　小皿 a

S-30a 明赤褐色土

中国陶器	壺；A-2 (1)

S-30b

土師器	破片
越州窯系青磁	椀；I

S-30d

土師器	小皿 a（仆）
中国陶器	壺；A-2 (1)
瓦類	平瓦（須恵質、格子）　平瓦（須恵質、無文）

S-30 周辺

瓦類	平瓦（瓦質、無文）　丸瓦（瓦質、無文）　軒丸瓦（巴文）

S-35

土師器	破片

Tab.7-2　大宰府条坊跡第 210 次調査　出土遺物一覧表（2）

S-35 淡茶色土

土師器	小皿 a（仆）
黒色土器 B	椀
須恵質土器	甕（産地不明）　鉢
国産陶器	甕
白磁	皿：II（未分類）（1）　破片（1）
中国陶器	壺：B（3）
瓦類	平瓦（土師質、無文）　平瓦（瓦質、無文）
	丸瓦（須恵質、無文）　軒平瓦（土師質）
石製品	五輪塔（阿蘇凝灰岩）　緑色片岩（2）

S-36

石製品	安山岩剥片

S-38

土師器	高台　破片（煮沸具）
瓦類	平瓦（瓦質、無文）

S-40

土師器	小皿　小皿 a（仆）　高台

S-40 ③

土師器	小皿 a（仆）

S-40 ⑥

土師器	坏 a（ベラ）

S-44

白磁	椀：II（底部外面墨書）
瓦類	平瓦（瓦質、格子）
石製品	緑色片岩

S-45

土師器	椀 c　小皿 a（仆）　甕
瓦器	坏
瓦類	平瓦（土師質、縄目）　平瓦（須恵質、格子）
	丸瓦（須恵質、無文）

S-50

土師器	皿　破片
須恵質土器	破片

トレンチ b（北地区）

須恵器	蓋 I　蓋 3　坏 c　坏 c1　甕　壺底部
土師器	坏 a（仆）　小皿 a（仆）　甕　破片（煮沸具）
黒色土器 B	椀
龍泉窯系青磁	椀：I（2）　I-2（1）　II-b（5）　破片（1）
同安窯系青磁	椀：I（1）
瓦質土器	こね鉢　擂鉢
白磁	椀：II（1）　IV（4）　V-1×VIII-2　V-1～VIII-2（1）
	V～VII（1）　V-2×VI～VIII-4（1）　V-4×VIII-1,3（2）
	椀？（1）　破片（10）
	皿：V×VI　皿？II（1）
	他：壺 III（1）　破片（4）
中国陶器	壺：A-1（1）　B（1）
	他：盤 I,C-I（3）
瓦類	平瓦（須恵質、無文）　平瓦（土師質、無文）
金属製品	銅滓
石製品	滑石製石鍋

トレンチ c（北地区）

須恵器	破片
瓦器	破片
同安窯系青磁	椀：I（1）
中国陶器	壺：A-1（1）
瓦類	破片

トレンチ d（北地区）

土師質土器	七輪
瓦類	丸瓦（瓦質、無文）

トレンチ e（北地区）

須恵器	坏　甕
土師器	小皿 a（仆）　破片
龍泉窯系青磁	椀：1（円盤状 2 次加工）（1）
国産陶器	甕（備前？）　擂鉢

トレンチ f（北地区）

須恵器	坏
土師器	坏 a（ベラ）　小皿 a（仆）
土師質土器	羽釜　鉢　七輪
肥前系陶磁器	椀（2）　破片
国産陶器	椀　甕　土瓶
国産磁器	青磁椀？
白磁	椀：IV（1）　IV-1（1）
中国陶器	壺：A-2（1）　B
瓦類	平瓦（須恵質、縄目）　平瓦（須恵質、格子）
	平瓦（瓦質、無文）　丸瓦（須恵質、縄目）
	軒平瓦（剣菱文）　軒丸瓦（巴文）　瓦経
石製品	五輪塔（阿蘇凝灰岩）　滑石
土製品	不明土製品

トレンチ g（北地区）

土師器	坏 a（仆）
国産陶器	椀（買入り）　瓶
国産磁器	坏
瓦類	熨し瓦　桟瓦
石製品	五輪塔（阿蘇凝灰岩）

トレンチ g 灰黄白色土（北地区）

土師器	坏 a

トレンチ h（北地区）

土師器	小皿 a　甕
須恵質土器	鉢
瓦質土器	破片
国産陶器	甕
瓦類	破片

トレンチ a（南地区）

須恵器	甕
土師器	坏 a（仆）
国産陶器	擂鉢
白磁	椀：IV-2a（1）
瓦類	平瓦（瓦質、縄目）　平瓦（須恵質、無文）

トレンチ a 明灰色土（南地区）

土師器	小皿 a
瓦質土器	破片
国産磁器	皿（プリント、近・現代）　染付椀（1）
瓦類	平瓦（瓦質、無文）　平瓦（須恵質、格子）　熨し瓦

トレンチ b 茶色土（南地区）

肥前系陶磁器	染付丸椀（くらわんか手、外面二重縄、内面一重縄）
瓦類	平瓦（瓦質、無文）

トレンチ b 黄茶色土（南地区）

肥前系陶磁器	染付椀（外面二重ひも、内面一重ひも）
中国陶器	他：盤 I-2（1）

トレンチ b 明灰色土（南地区）

国産陶器	破片
瓦類	平瓦（須恵質、無文）　熨し瓦

トレンチ茶黄褐色土（南地区）

国産磁器	破片
瓦類	破片

トレンチ d（南地区）

国産陶器	皿（見込み蛇ノ目釉剥ぎ）
瓦類	熨し瓦

トレンチ e（南地区）

須恵器	蓋 c　甕
龍泉窯系青磁	椀：II-a（1）
土師質土器	擂鉢
瓦質土器	擂鉢
瓦類	平瓦（瓦質、不明）　熨し瓦

Tab.7-3　大宰府条坊跡第 210 次調査　出土遺物一覧表（3）

北地区 道路拡張部

土師器	坏 a（仆）　小皿 a（仆）
肥前系陶磁器	染付蓋　染付椀
国産陶器	甕　壺　油壺
国産磁器	皿（1）
染付（輸入）	明染椀（小野 B×C）
中国陶器	壺：B（1）
瓦類	平瓦（瓦質、無文）　平瓦（須恵質、格子）
	丸瓦（瓦質、縄目）
金属製品	鉱滓
石製品	緑色片岩

茶色土

須恵器	蓋 a　坏 c　甕　壺
土師器	坏　破片（煮沸具）
黒色土器 B	高台
龍泉窯系青磁	椀：I-2（1）
須恵質土器	こね鉢
白磁	椀：IV（2）　V-1×VIII-2（2）　VI-1（1）　VIII-2（1）
	IX-Ia（1）　破片（1）
中国陶器	壺：B
瓦類	平瓦（須恵質、格子）　丸瓦（瓦質、無文）　軒平瓦　熨し瓦
石製品	滑石二次利用品

明黄色土

土師器	椀 c

表土

須恵器	坏身 H　甕
土師質土器	甕
国産陶器	破片
瓦類	破片
金属製品	鉱滓

Tab.8-1　大宰府条坊跡　第 210 次調査　出土遺物計測表

S-1

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a	－	R-006	－	3.1+α	－	－	－

S-1 明茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	－	R-001	－	0.7+α	－	－	－
	坏 a	イト	R-012	12.5	2.55	8.8	○	－

S-2

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	－	R-001	(8.9)	1.1	7.0	○	○
	小皿 a1	－	R-002	(8.6)	1.4	(6.8)	○	○

S-5

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
瓦器	椀 c	－	R-002	(18.0)	5.5	6.3	－	－

S-6 北側柱痕

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a× 小皿 a1	イト？	R-001	－	1.4+α	8.0	○	○

S-20 赤褐色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
須恵器	蓋 3	－	R-003	－	0.9+α	－	－	－
	蓋 3	－	R-004	(14.6)	1.2+α	－	－	－

S-20 明茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
須恵器	蓋	－	R-002	(13.4)	4.4+α	－	○	－
黒色土器 A 類	椀 c	－	R-001	－	1.95+α	(7.0)	－	－

S-24

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	－	R-001	(9.9)	1.1	(7.5)	○？	－

S-30 茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 b	イト	R-001	(7.6)	1.35	(6.4)	－	－

茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	－	R-003	(7.1)	1.45	(4.0)	－	－
	小皿 a1	－	R-004	(8.2)	1.15	(6.1)	－	－

表土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
須恵器	坏身	－	R-001	－	2.6+α	－	－	－

北地区道路拡張部分

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 b	－	R-001	6.3	1.55	4.9	－	－
	小皿 b	イト	R-002	(6.6)	1.7	(5.0)	○	－
	小皿 b	〃	R-003	(6.6)	1.5	(4.7)	－	－
	坏 a	〃	R-004	(12.0)	2.6	(7.5)	○	－

北地区トレンチ b

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
須恵器	蓋 1	－	R-004	－	1.5+α	－	－	－
	蓋 1	－	R-005	－	1.3+α	－	－	－
	蓋 2	－	R-006	－	1.75+α	－	－	－
	坏 c	－	R-007	－	2.0+α	(9.8)	－	－
	坏 c	－	R-008	－	3.7+α	(10.8)	－	－
土師器	坏 a	イト	R-002	(12.2)	2.5	(9.0)	○	○

北地区トレンチ f

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 b	－	R-001	(7.6)	1.9	(6.0)	－	○
	坏 a	－	R-002	(12.6)	3.1	(9.1)	○	－

北地区トレンチ g

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小坏 a	イト	R-003	－	1.8+α	(4.4)	○	－
	坏 a	○？	R-004	－	2.5+α	(7.9)	○？	○？

南地区トレンチ a

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a× 坏 a	イト	R-002	－	1.7+α	(7.5)	○	○

Tab.8-2　大宰府条坊跡　第 210 次調査　出土遺物計測表

S-30 ③

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	(8.2)	1.1	(6.8)	−	−

S-30a ①

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a	イト	R-001	−	2.1+α	(8.5)	−	○

S-30a ④

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a	イト	R-001	8.45	1.6	6.0	○	○

S-30a ⑤

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト？	R-001	8.3	1.05	6.0	○	−

S-30d

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	R-001	−	1.05+α	(6.8)	○	−

S-35 淡茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 b	イト	R-002	(6.7)	1.8	4.4	×	×
	坏 c	−	R-062	−	2.1+α	(11.0)	−	−
	坏 c	−	R-063	−	1.6+α	(8.6)	−	−
	椀	−	R-073	−	1.85+α	(6.7)	−	−
黒色土器 B類	椀	−	R-003	(13.8)	3.6+α	−	−	−

S-40

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	イト	R-001	9.4	1.15	6.5	○	○
	小皿 a1	〃	R-002	8.65	1.05	6.0	○	○
	小皿 a1	〃	R-003	(9.0)	1.15	6.6	○	○
	小皿 a1	〃	R-004	(9.6)	1.1	5.5	○	○
	小皿 a1	ヘラ	R-005	9.2	1.5	6.1	○	○
	小皿 a1	イト	R-006	8.9	1.1	5.6	○	○
	小皿 a1	〃	R-007	(8.5)	1.05	5.5	○	○
	小皿 a1	〃	R-008	(9.1)	1.15	5.0	○	○
	小皿 a1	〃	R-009	(9.0)	1.15	6.0	○	−
	小皿 a1	〃	R-010	(9.6)	1.3	(5.3)	○	○
	小皿 a1	〃	R-011	(9.1)	1.45	(6.0)	○	○
	皿	ヘラ	R-012	15.6	2.95	11.1	○	○

S-45

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a	−	R-001	−	0.9+α	−	−	−
黒色土器？	坏	−	R-002	−	1.65+α	(6.2)	−	−

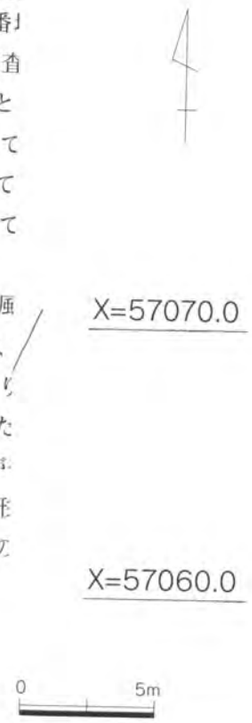
(6) 大宰府条坊跡第 210 次調査隣接地

調査地点は、太宰府市観世音寺字横岳 1752 番1
が移転した場所にあたる。事前に確認（試掘）調査
た。ただし、条坊 210 次調査の隣接地ということ
蔵文化財の情報が得られたため地権者の了解を得て

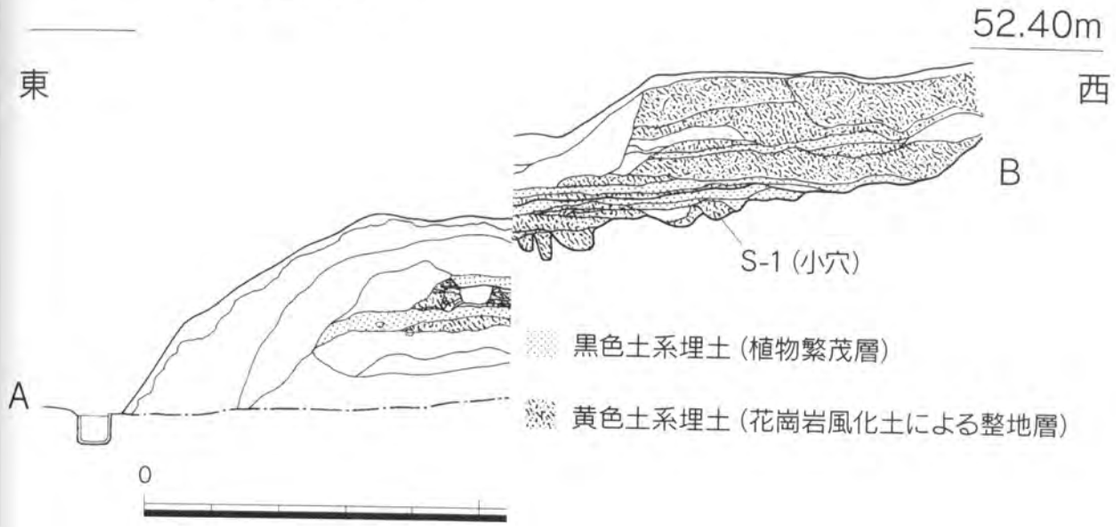
立会調査は 2000 年 1 月 27 日～ 31 日にかけて
た。現地調査担当は髙橋学、実測・測量補助として
力を得た。

南壁土層を観察すると、地山の淡白黄色花崗岩風
れる。その遺構の断面形状から内容としては柱穴、
ないが、土層からは何点かの土師器皿（底部糸切り
以降の所産であることがわかる。また、S-3 とした

層位から判断して、最低 5 層にわたる文化面が
崗岩の風化土も混じっていることからも、周辺地形
るので、この土地が過去に活発に利用されたことの



南壁土層図



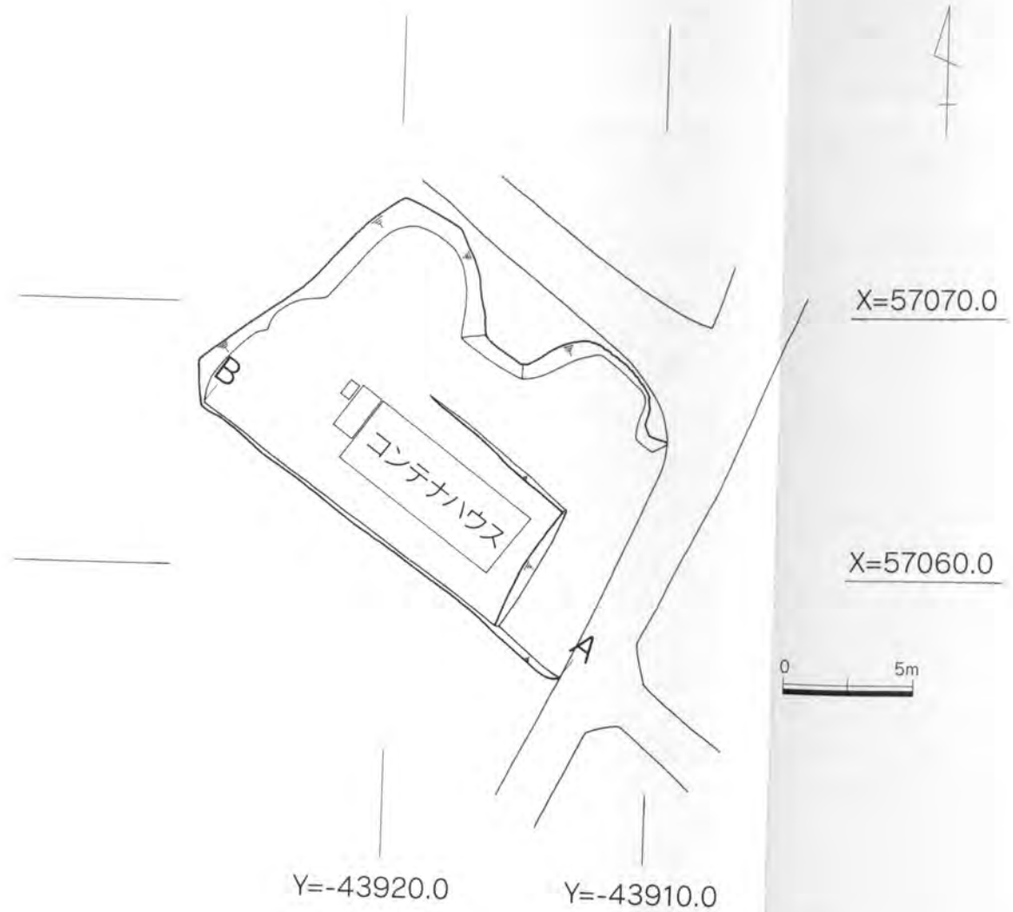
(6) 大宰府条坊跡第 210 次調査隣接地調査について

調査地点は、太宰府市観世音寺字横岳 1752 番地である。ここは北西にあった花関酒造の仮設会社が移転した場所にあたる。事前に確認（試掘）調査をしており、平坦面は削平されていることが判明した。ただし、条坊 210 次調査の隣接地ということもあり、対象地の南側の斜面を精査したところ、埋蔵文化財の情報が得られたため地権者の了解を得て、立会調査を行った。

立会調査は 2000 年 1 月 27 日～ 31 日にかけて、平板測量と国土座標入れ、南壁の土層図作成を行った。現地調査担当は高橋学、実測・測量補助として、補助員平島義孝、島（豊岡）純子、坂本雄介の協力を得た。

南壁土層を観察すると、地山の淡白黄色花崗岩風化土をベースにして、遺構の切り込みが多く認められる。その遺構の断面形状から内容としては柱穴、土坑、小穴などが推定できる。時期は明確にはできないが、土層からは何点かの土師器皿（底部糸切り技法）が見つかっているため、少なくても 12 世紀以降の所産であることがわかる。また、S-3 とした小穴からは奈良時代の土器片も出土している。

層位から判断して、最低 5 層にわたる文化面が存在した可能性が指摘できる。これは地山である花崗岩の風化土も混じっていることからも、周辺地形を整形しながら、整地を繰り返していたと考えられるので、この土地が過去に活発に利用されたことの証左となろう。



南壁土層図

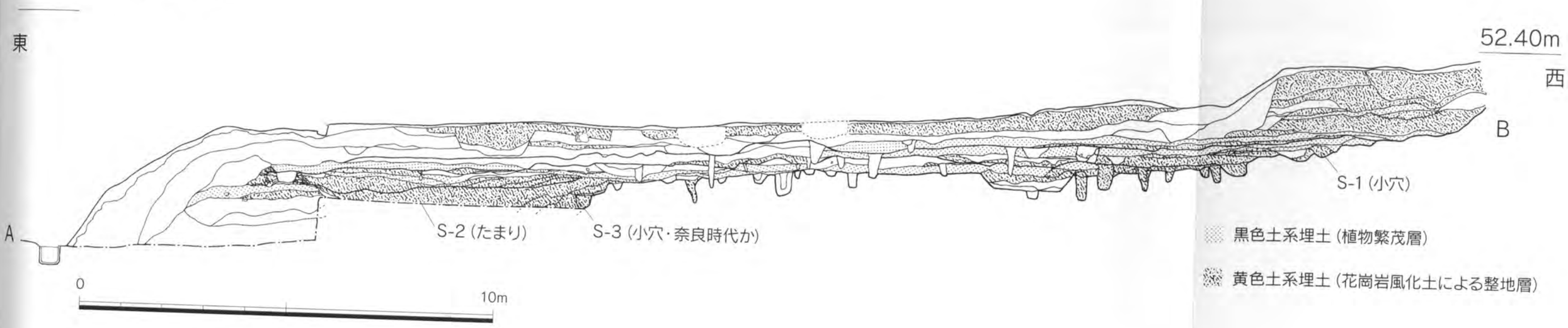


Fig.96　第 210 次調査立会調査　平面図（1/250）・土層図（1/100）

3. 大宰府条坊跡第 210-2 次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は、太宰府市観世音寺５丁目 870、875-3 に所在する。立地は、四王寺山から南に派生し突出した丘陵の西側にあたり、東西北の３方向を丘陵によって遮蔽された谷地形の最深部に位置する。大宰府条坊跡第 210 次調査で発掘調査をした東隣接地を、団地として開発するに先だって、この地点を団地用公園用地として確保したいと申し出があった。そのため工事が行われる際に地表面からの掘削が、遺構にどのような影響を与えるかを判断するため、本調査区を国庫補助事業の重要遺跡確認として埋蔵文化財の発掘調査を行うこととなった。開発対象面積は 340 ㎡、調査面積は 193 ㎡。調査期間は平成 12 年 12 月 25 日から平成 13 年 3 月 31 日。調査は髙橋学が担当した。

(2) 基本層位 (Fig.98)

調査地の調査前の現況は竹が鬱蒼と茂ってあまり日が差さない暗い竹林であった。地表面を観察すると、中央部やや東側に中世墓の墓石などを利用した集積遺構があり、地蔵菩薩を中心にして現代でも信仰が続いている様子が認められた。地形的には北から南へ緩やかに傾斜しており、調査区の中央に段差が認められる状況だった。北側では 0.2m、南側では 0.8m ほど堆積している表土を除去すると、整地土とみられる黄色土が全面に堆積している。厚さは 0.35m ～ 0.4m を測る。その下層に灰茶色土層が 0.3 ～ 0.4m ほど堆積している。これが遺物包含層にあたり、この灰茶色土層を除去する遺構面が確認できる。遺構面は現況 GL よりおおよそ 80 ～ 100cm ほどさがっており、暗灰褐色土層で形成されている。トレンチ a、c の土層から暗灰褐色土層の下層にもう 1 層遺構面と考えられる面を確認している。

Fig.97　第 210-2 次調査遺構図 (1/150)

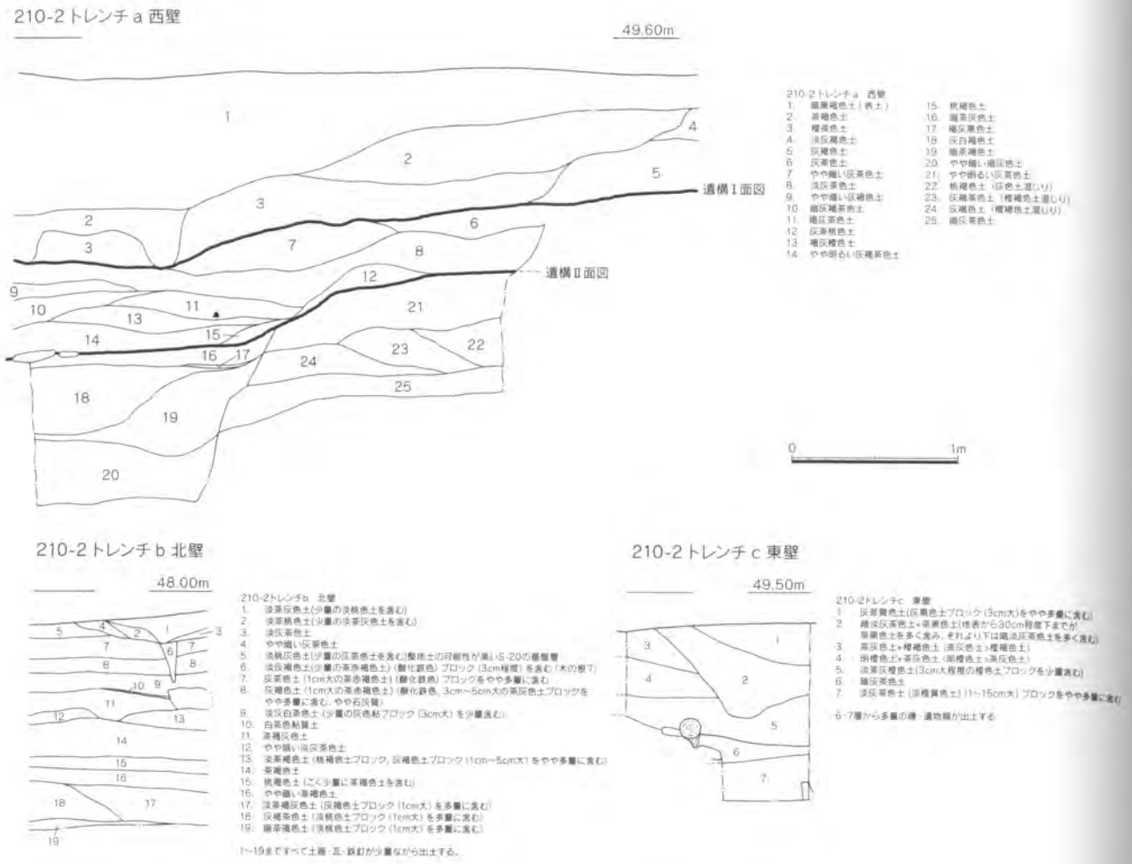


Fig.98　条 210-2 次調査土層観察図（1/40）

(3) 検出遺構（Pla.5-1）

以下、今回の調査地点のすべての遺構に共通することだが、今回の調査はあくまで重要遺構の確認調査という調査制限があるため、必要最小限の掘削でとどめている。よって遺構の性格は推論にならざるを得ず、調査時に遺構を確認した際のデータで遺構の性格を推測しているため、限界があることをあらかじめご了承頂きたい。

墓

210-2ST001（Fig.99）

調査区北西部に位置する墓と推定される遺構。L字状の石組みが確認できる。石組みの直線部分を基準に考えると、主軸は西へ大きく振っている。平石と遺物が集中している範囲は、南北長 1m、東西長 1.5m で掘り方は、いびつながら正方形に近く南北長 1.45m、東西長 1.5m である。この範囲に土師器の小皿 a と国産陶器・中国陶器の壺が散乱している。墓の設計としては、本来は平石を使い、方形（おそらく正方形に近い平面形）に区画してその中央部を掘り、その中心に壺を据えてその上に墳丘を構築したものと考える。そのため、これらの壺はこの墓に伴う骨蔵器というよりはのちに墓に供えられたものか、周辺の壊れた墓からの混入と考えたい。中央部の扁平な石と組み合さって現状南側に北から斜めに倒れこんでいる 0.2m×0.2m の石は、本来は直立して標石として機能していた可能性が考えられる。

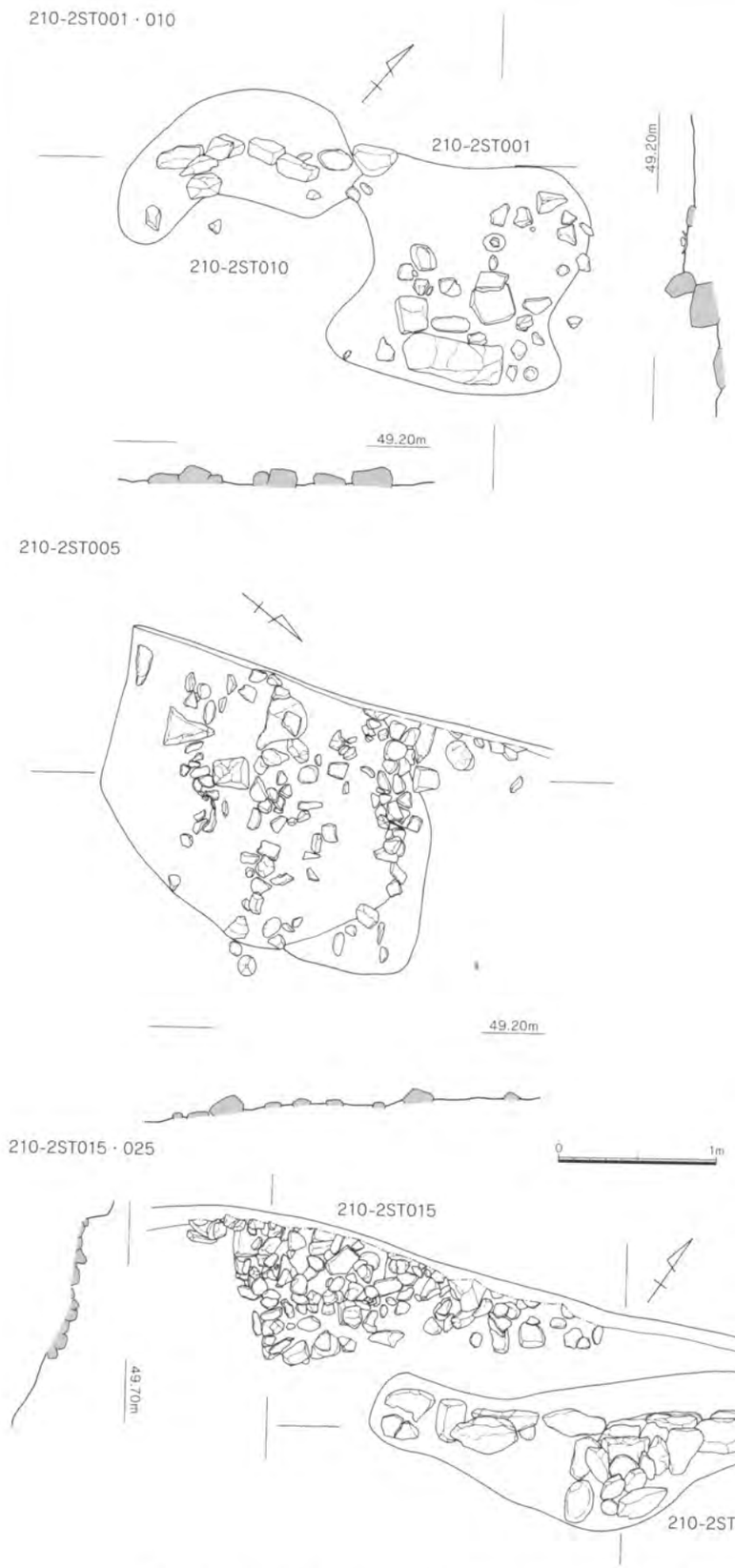


Fig.99　210-2ST001・005・010・015・025 遺構実測図（1/40）

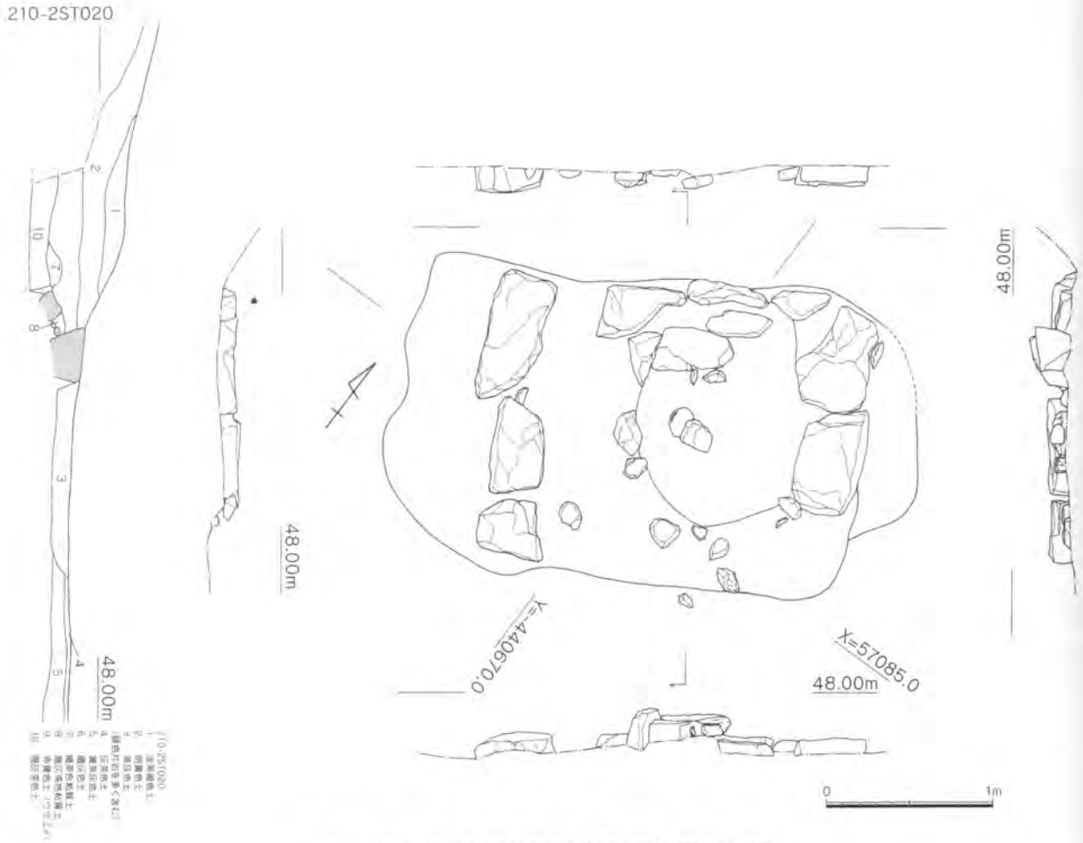


Fig.100　210-2ST020 遺構実測図（1/40）

出土遺物から大宰府土器編年 XX 期前後以前に埋まった可能性がある。

210-2ST005（Fig.99）

調査区西部中央に位置する墓。長方形で平たい石が数カ所確認できる他は、手のひらサイズの割れ石が集中している。遺構の掘り方の軸はやや西へ振っており、長軸長 2.1cm、短軸長 1.3m のプランを持つと考えられる。また、阿蘇凝灰岩製の五輪塔火輪の軒部が出土していることから、墳丘の上には五輪塔が所在していた可能性がある。出土遺物から 12 世紀前半以降に埋没したことが考えられる。

210-2ST010（Fig.99）

調査区北西部に位置する墓と推定される遺構。直線的な石組みが 1.5m ほど確認された。掘り方はその石組みを中心に南北 1.5m、東西 1m のいびつな形状をしている。

210-2ST015（Fig.99）

調査区北部中央に位置する墓と推定される遺構。210-2ST025 に隣接する。緑色片岩で墳丘を覆っている。調査区外に展開しているため、全容は不明だが確認できる範囲では、長軸長 2.1m、短軸長 1m となる。墳丘からは五輪塔の破片が 3 点出土している。このことから墳丘の上部施設として五輪塔が存在していた可能性が考えられる。

210-2ST020（Fig.100）

調査区中央部中央に位置する墓と推定される遺構。平坦な石を据えて石組みをしている。その範囲は長軸長 2.4m、短軸長 1.8m を測る。掘方は長軸長 3.2m、短軸長 2.1m。南西方向に張り出すように灰青色粘質土の平面方形の堆積と、そのまわりに灰褐色土が堆積している。これらの土層が北側に隣接

する石組み本体と関係するかは現時点では不明である。出土遺物の中国陶器壺Ⅴ類から 13 世紀後半から 14 世紀前半以降に埋められたものと考えられる。五輪塔を上部に安置していてもおかしくないほど、しっかりした石積みである。

210-2ST025（Fig.99）

調査区北部中央に位置する墓と推定される遺構。平石を直線的に組み合わせているもので、北側に面を持つ石組み遺構。すくなくとも３段は積まれている。中央から東側には南方向の石も配置される。長軸長 2.4m、短軸長 0.7m、高さ 0.25m。掘方は石組みを囲むように確認された。

その他の遺構

210-2SX008（Fig.101）

調査区中央部やや北側に位置する緑色片岩を中心として集石された遺構。五輪塔の破片などが表面の集石の中から見つかるなど、墓の可能性も高い。しかしながら北から南へ傾斜する地形で、北と南で 0.6m もレベル差があることや、墓と認定できる平面プランなどが調査時点では確認できなかったため、ここでは集石遺構としておく。遺構のプランが調査区外に展開するため、全容は不明だが長軸長 2m、短軸長 1.2m を測る。出土遺物は国産陶器の壺、甕等が出土しており、遺構の埋没は江戸時代以降と推定している。

210-2SX009（Fig.101）

調査区中央部やや北側に位置する集石遺構。長軸長 1.1m、短軸長 0.7m。平面は南側が欠けているが長方形を呈していたと推測できる。ただし、他の推定墓遺構と違い掘り方が明瞭ではない。集石の間に口縁部を欠損した国産陶器の壺が出土している。

210-2SX030（Fig.102、Pla.5-2）

調査区東部中央部からやや北側に位置する集積遺構。集積の範囲は長軸長2.75m、短軸長2.2m。現状ではハゼの木の根元に集積されたようになっている。この集積遺構は地蔵菩薩の石仏や墓碑（近世）を中心に、周辺に散在していたと思われる中世墓のパーツを集積し、それに中世墓に葺かれていた緑色片岩を集めてマウンド状に盛り上げて構成されている。この集積墓の注目すべき点としては、集積された中世墓構成パーツの数の多さである。空風輪10基、火輪1基、水輪7基、地輪1基、板碑19（梵

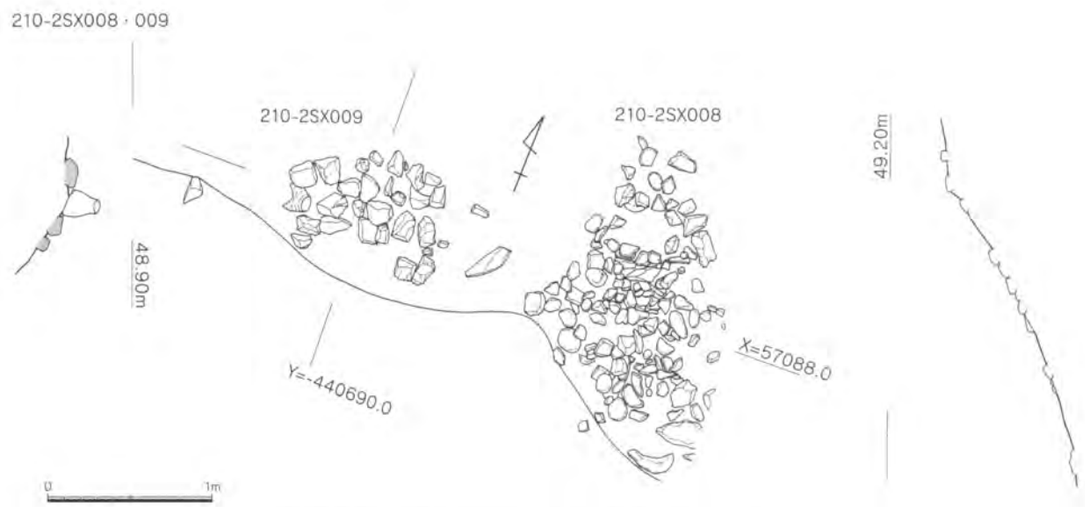


Fig.101　210-2SX008・009 遺構実測図（1/40）

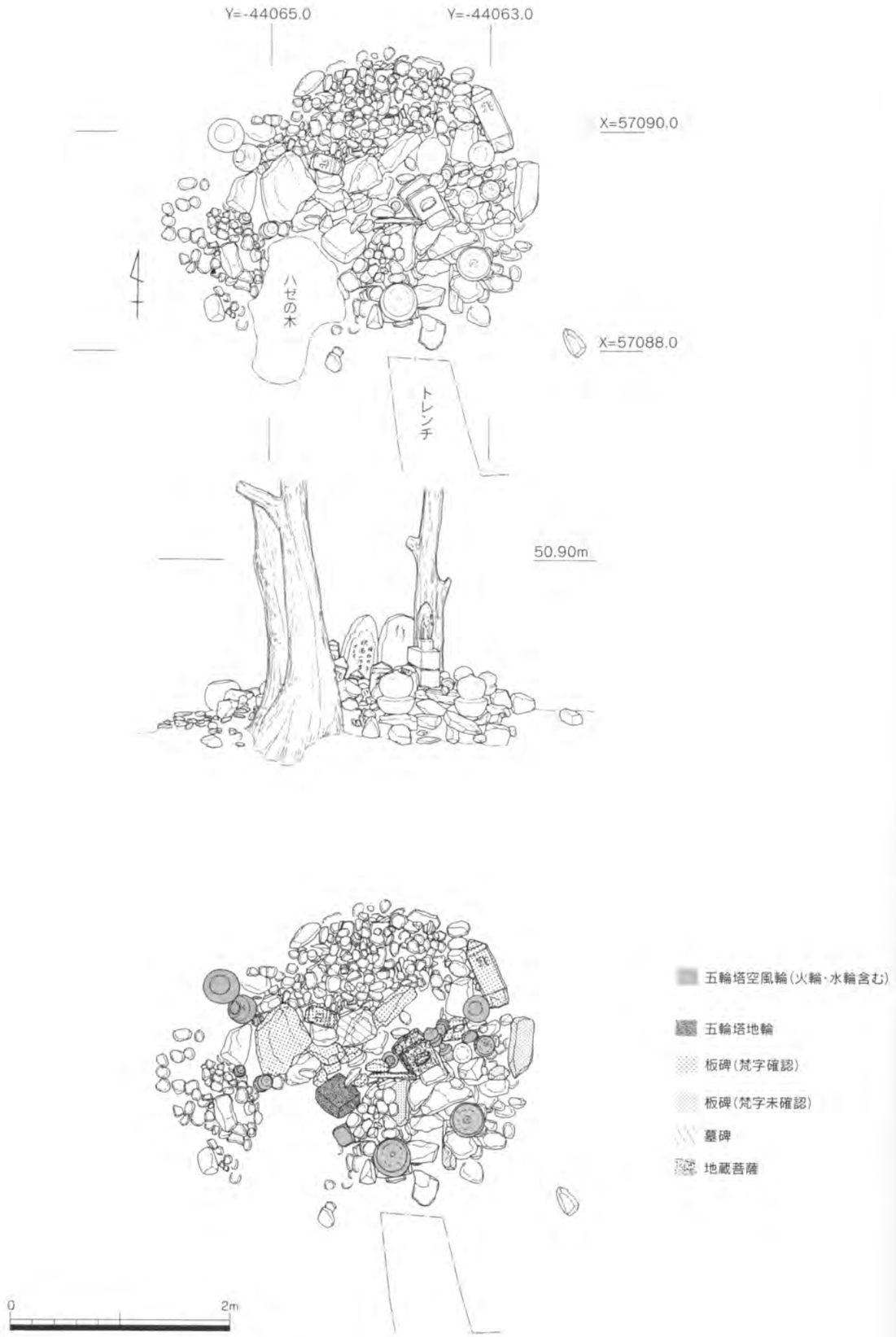


Fig.102　210-2SX030 遺構実測図（1/50）

字確認したのが14基、未確認が5基）基、墓碑1基、地蔵菩薩とその台座1基が確認された。これらは他地域から搬入したのではなく、本調査地に近接した場所より移動されたと考えている。原因としては、土砂崩れなどのため中世墓地が崩壊してしまい、後にそれが露頭した際に供養のために集積して供養したのではないかと推定している。その中でも高さ40cm以上の空風輪2基は、五輪塔として復元した場合の高さが1.6mを超えるため、太宰府地方では珍しい大形五輪塔として注目される。なお、210-2SX030の遺構図作成と石造物の把握には、同僚の宮崎亮一技師の協力を得た。

（4）出土遺物

墓出土遺物

210-2ST001 出土遺物（Fig.103）

土師器

小皿 a（1）　復元口径 6.7 ㎝、器高 1.3 ㎝、復元底径 4.8 ㎝。底部切り離し技法は摩耗が激しく推定だが回転糸切り技法か。

陶器

壺（2、3）　2 は体部破片。器高 6.5+ ㎝、復元胴部最大径 13.6 ㎝。3 は口縁部を欠損するが、完形に近い壺である。器高 20.0+ ㎝、胴部最大径 22.6 ㎝、底径 11.0 ㎝である。体部の調整は強い回転ナデが施される。

210-2ST005 出土遺物（Fig.103）

土師器

杯 a（4）　底部破片。器高 1.6+ ㎝、復元底径 8.4 ㎝。底部切り離し技法は回転糸切り。

石製品

五輪塔（5）　火輪破片。軒部。残存高 5.35 ㎝。阿蘇凝灰岩製。

210-2ST020 出土遺物（Fig.103）

瓦類

丸瓦（6）　縦 18.4 ㎝、横 10.4 ㎝、厚さ 1.8 ㎝。凹面調整は布目痕跡。同じく凸面には太い紐の結び目痕跡あり。凸面は縄目叩きをナデ消している。焼成は良好。瓦質。端部はヘラ切り、凹面側には端部から 1cm ほどの範囲を縦方向のヘラ削りを施し、面取りをしている。

210-2ST020 灰茶色土出土遺物（Fig.103）

土師質土器

こね鉢（7）　口縁部破片。片口部。器高 3.0+ ㎝。

金属製品

釘（8）　縦 5.4+ ㎝、横 0.7 ㎝、厚さ 0.7 ㎝。

210-2ST020 明黄茶色土出土遺物（Fig.103）

陶器

壺（9）　口縁部から体部の破片。復元口径 10.9 ㎝、器高 6.8+ ㎝。口縁部は肥厚し水平に外側に張り出す。釉調は暗茶褐色。光沢があり透明度は低い。中国産。V 類。墓に伴う蔵骨器であった可能性が高い。

その他の遺構出土遺物

210-2SX004 出土遺物（Fig.103）

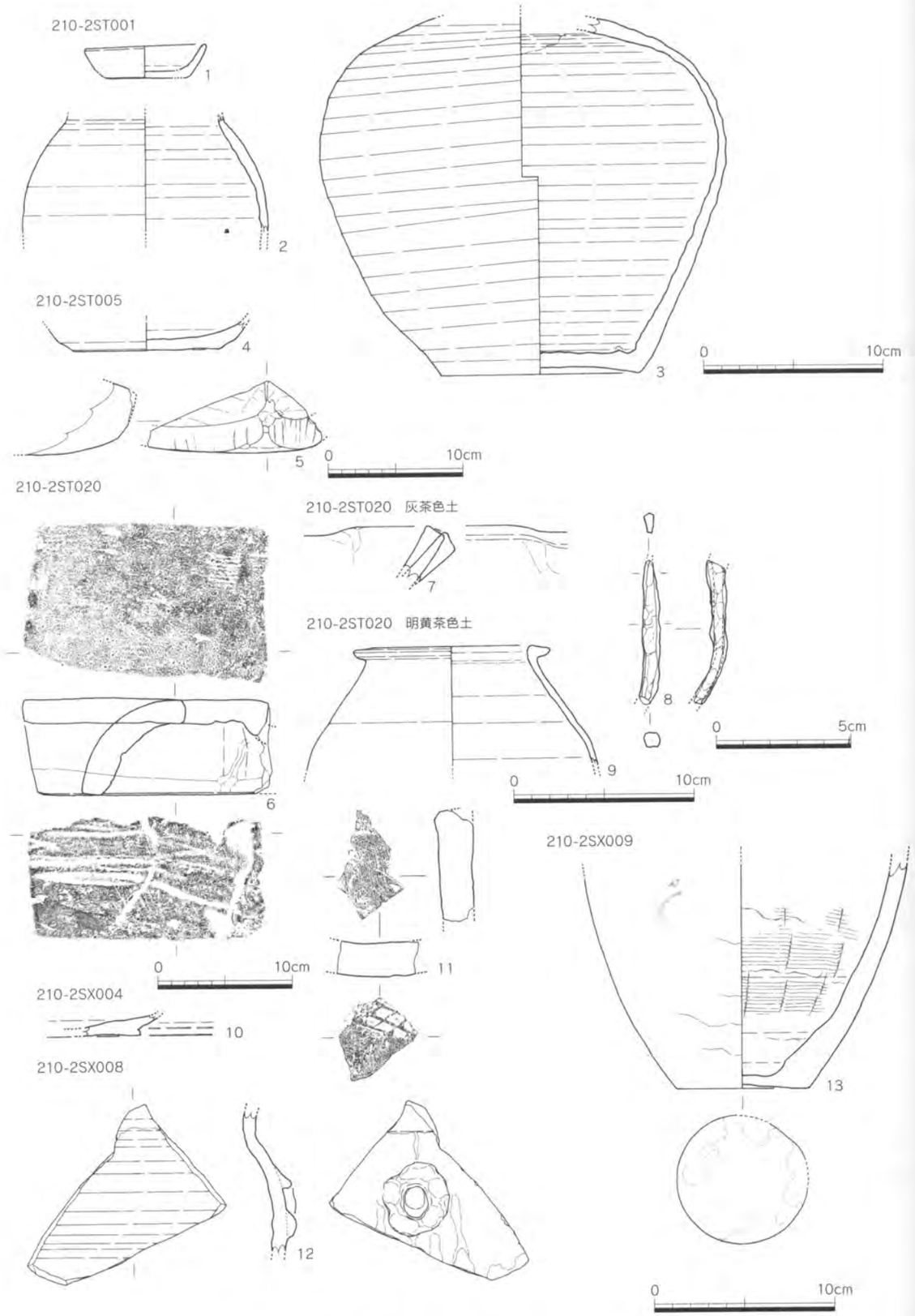


Fig.103 第 210-2 次調査墓、その他の遺構出土遺物実測図（1/2、1/3、1/4）

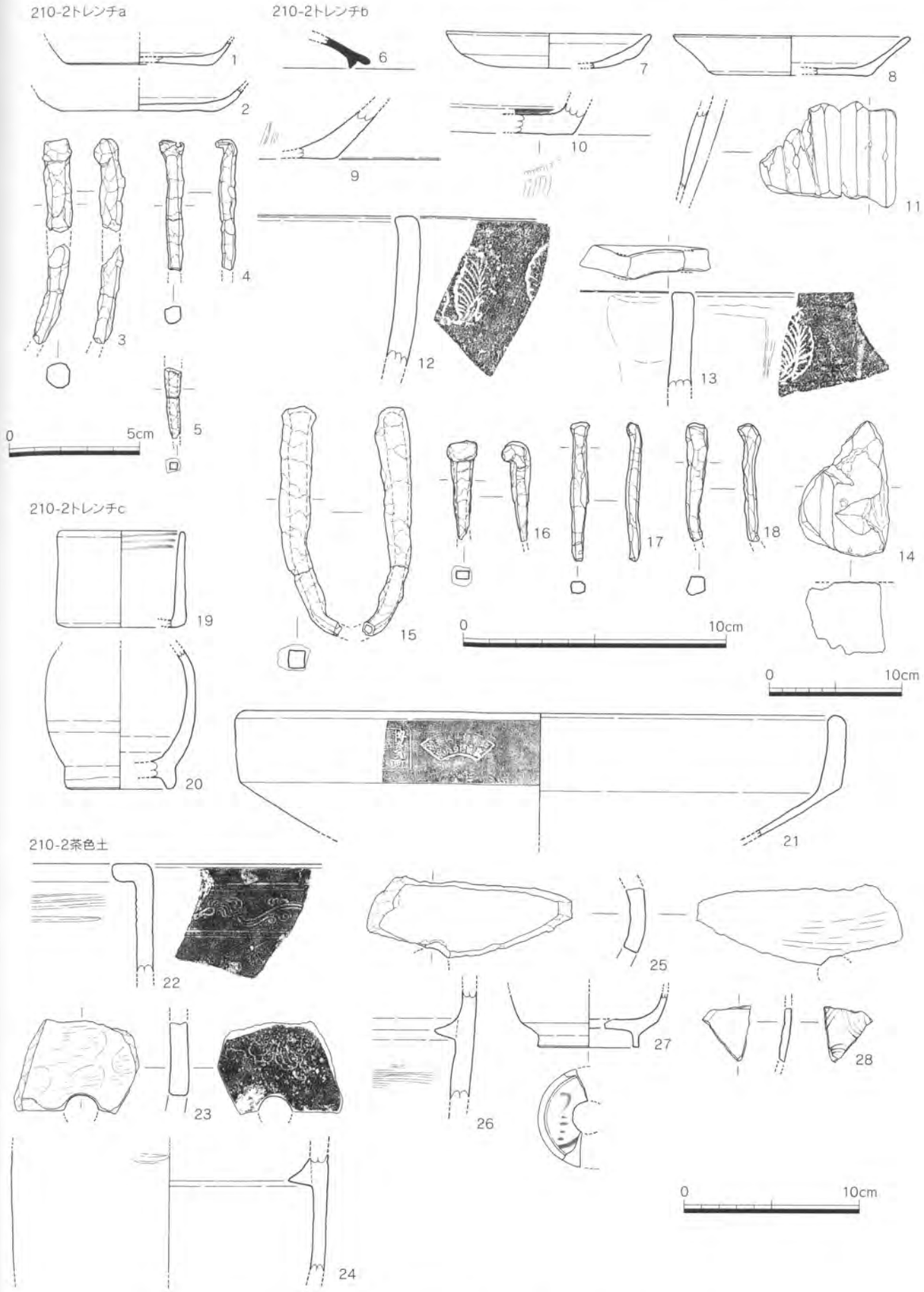


Fig.104 第 210-2 次調査トレンチ、土層出土遺物実測図（1/2、1/3、1/4）

土師器

小皿ａ（10） 底部破片。器高 1.1+ ㎝。底部切り離し技法は摩耗のため不明。

瓦類

平瓦（11） 小破片。縦 8.2+ ㎝、横 6.4+ ㎝、厚さ 2.4 ㎝。凹面は布目痕。凸面は格子目叩き調整。端部はヘラ削り後に面取り調整をしている。

210-2SX008 出土遺物（Fig.103）

陶器

壺 × 瓶（12） 体部破片。残存高 7.8 ㎝。体部の肩部には中央が窪む 5 方向からの指頭圧痕が明瞭に残る突帯が貼り付けられている。

210-2SX009 出土遺物（Fig.103）

陶器

壺（13） 体部から底部の破片。器高 12.4+ ㎝、復元底径 7.3 ㎝。内面は横方向刷毛目調整。

210-2 トレンチ a 出土遺物（Fig.104）

土師器

坏ａ（1、2） 1 は器高 1.3+ ㎝、復元底径 8.4 ㎝。摩耗して調整は不明。2 は器高 1.4+ ㎝、復元底径 8.8 ㎝。底部切り離しは回転糸切り。

金属製品

釘（3、4、5） 3 は釘の頭部と中部の破片。接合しない同一個体である。縦 3.55 ㎝、横 3.8+ ㎝、厚さ 0.95 ㎝。4 は頭部から中部までの破片。縦 5.0+ ㎝、横 1.0 ㎝、厚さ 0.7 ㎝。5 は釘の先端部破片。縦 2.7+ ㎝、横 0.7 ㎝、厚さ 0.55 ㎝。

210-2 トレンチ b 出土遺物（Fig.104）

須恵器

蓋 1（6） 小縁部破片。器高 1.8+ ㎝。

土師器

小丸坏ａ（7） 復元口径 10.6 ㎝、器高 2.0 ㎝。底部切り離しは回転ヘラ切りで、その後底部を押し出している。

坏ａ（8） 復元口径 13.4 ㎝、器高 2.3 ㎝、復元底径 8.8 ㎝。底部切り離し技法は回転糸切り。

土師質土器

擂り鉢（9） 底部破片。器高 2.7+ ㎝。焼成は不良。

瓦質土器

鉢（10） 底部破片。器高 1.8+ ㎝。内面に強く刷毛目痕調整が認められる。

火鉢（11、12、13） 11 は火鉢の胴部修飾部の破片。断面三角形の縦方向のパーツの一部。残存高 5.0 ㎝。12、13 ともに口縁部破片。12 は器高 8.6+ ㎝。13 は器高 5.6+ ㎝。口縁部に切り込みが入り輪花状になると推定される。口縁部は 12 と 13 は同一個体の可能性がある。

石製品

五輪塔（14） 破片。縦 10.3+ ㎝、横 6.8+ ㎝、高さ 5.5+ ㎝。石材は阿蘇凝灰岩。

金属製品

釘（15、16、17、18） 15 は先端部が曲がり欠損している。縦 8.7+ ㎝、横 1.3 ㎝、厚さ 1.4 ㎝。16 は頭部が折れ曲がっている。縦 3.8 ㎝、横 1.15 ㎝、厚さ 1.1 ㎝。17 は縦 5.3+ ㎝、横 0.75 ㎝、厚さ 0.7 ㎝。18 は縦 4.5+ ㎝、横 0.9 ㎝、厚さ 0.9 ㎝。

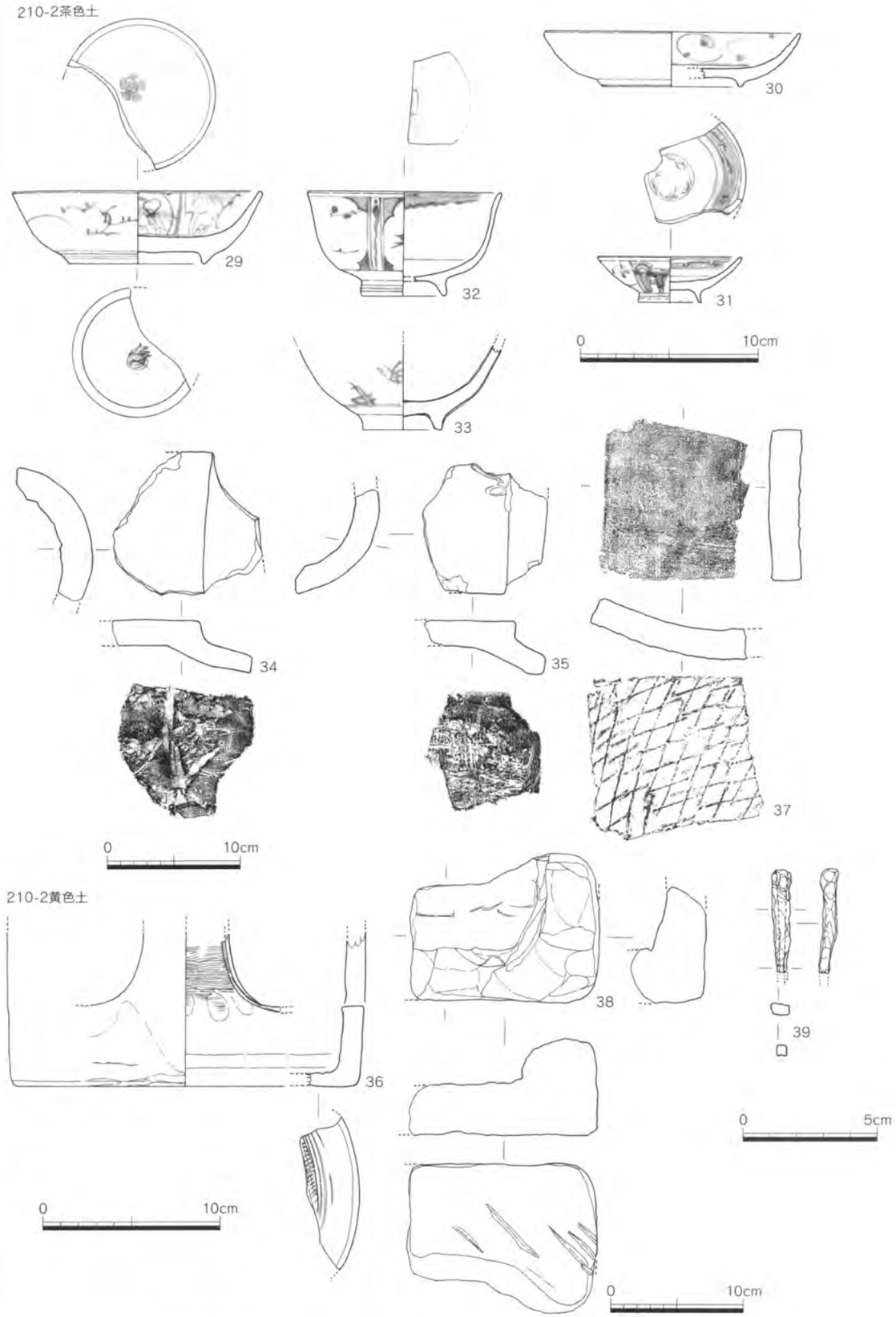


Fig.105 第 210-2 次調査土層出土遺物実測図その 1（1/2、1/3、1/4）

210-2 トレンチ c 出土遺物 (Fig.104)

国産磁器

筒型椀 (19)　復元口径 7.3 cm、器高 5.5+ cm。内面は呉須による 3 条の線を染付。外面は青磁釉を施す。

青磁

壺 (20)　小型の壺。器高 7.9+ cm、復元底径 6.1 cm。復元胴部最大径 8.6 cm。畳付部は釉剥ぎをする。内面は基本的に釉をかけず露胎だが、見込み部には口縁部から垂れた釉が溜まっている。

210-2 茶色土出土遺物 (Fig.104、105)

陶器

焙烙 (21)　復元口径 34.6 cm、器高 7.0+ cm。外面口縁部には 2 種類のスタンプが施される。1 つは方形の「博多元町 (続きあり)」。もう 1 つは、扇形のスタンプで上部に「□兼課御試検済」下部に「□□博多□□」とある。

土師質土器

七輪 (22 ～ 26)　22 は口縁部破片。器高 6.2+ cm。内側に水平に折り曲げられている。外面に流雲文を施す。「試」という文字を彫っている。23 は体部破片。縦 5.2+ cm、横 7.0+ cm、厚さ 1.1 cm。穿孔あり。外面には文様あり。24 は体部破片。七輪のサンが落ちないように、内面に断面三角状の突帯をめぐらす。器高 6.9+ cm。25 は体部破片。縦 4.4+ cm、横 11.7+ cm、厚さ 0.9 cm。26 は体部破片。24 と同じ部位。器高 6.0+ cm。

陶器

植木鉢 (27)　底部破片。底部中央に水抜きのために穿孔されている。器高 3.0+ cm、復元底径 5.7 cm。高台内部に「フニシ」と墨書されている。

青白磁

梅壺 (28)　破片。縦 3.1cm、横 2.6cm、厚さ 0.45cm。

肥前磁器

皿 (29、30)　29 は復元口径 14.0 cm、器高 4.1 cm、復元底径 7.7 cm。内外面に呉須で絵付けを施す。内面文様は「竹ノ葉」。外面文様は「唐草文」。見込み五弁花文はコンニャク印判。高台中央には「渦福」を描く。30 は復元口径 14.4 cm、器高 3.1 cm、復元高台径 8.0 cm。見込み部は蛇ノ目釉剥ぎ。畳付は露胎。高台内部も施釉。内面を呉須で絵付けしている。内面の文様は「花卉」。

小皿 (31)　内外面を呉須で絵付けしている。復元口径 8.1 cm、器高 2.6 cm、復元高台径 3.6 cm。高台の畳付は釉剥ぎ。外面文様は「宝」文様。

椀 (32、33)　32 は復元口径 10.8 cm、器高 5.85 cm、復元高台径 4.8 cm。内外面はしぶい藍色の呉須で絵付けをしている。高台畳付は釉剥ぎ。33 は器高 4.8+ cm、高台径 4.4 cm。外面に呉須で絵付けを施す。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。

瓦類

丸瓦 (34、35)　34 は縦 10.6+ cm、横 9.8+ cm、厚さ 2.4 cm。凸面は丁寧なナデ調整。凹面はヘラ削り調整。35 は縦 9.1+ cm、横 7.4+ cm、厚さ 2.0 cm。凸面は丁寧なナデ調整。凹面は縄目痕が残る。

210-2 茶色土出土遺物 (Fig.105)

土師器

七輪 (36)　底部～体部破片。器高 8.6+ cm、復元底径 19.0 cm。体部には大きくヘラにより窓が開けられている。内外面ともに使用時についたと思われる煤が確認できる。

瓦類

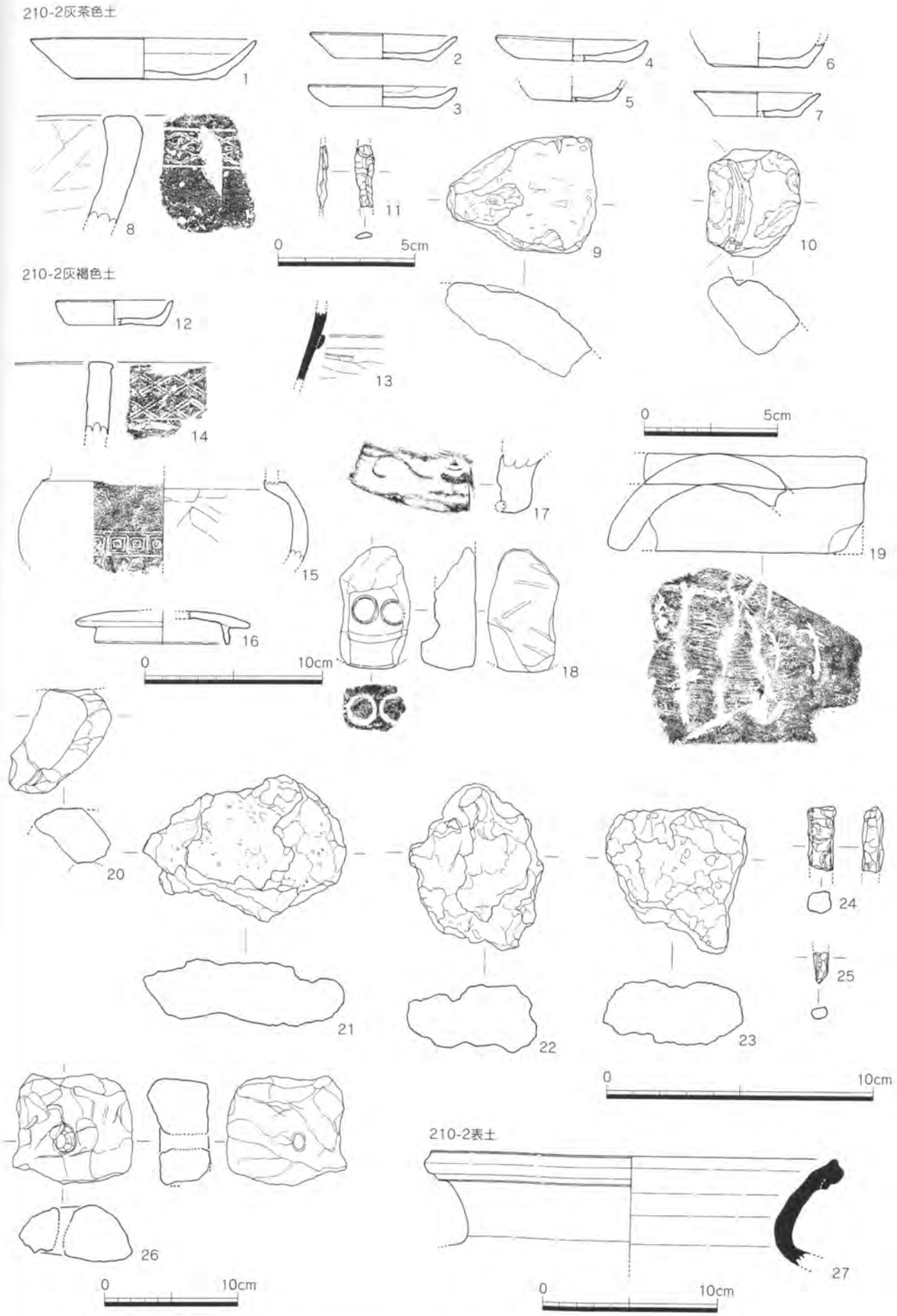


Fig.106　第 210-2 次調査土層出土遺物実測図その 2 (1/2、1/3、1/4)

平瓦（37）　縦 12.3+ cm、横 12.0 cm、厚さ 2.4 cm。凹面は布目痕のあと不定方向のナデ調整。凸面は格子目叩き。端部はヘラ切り後に角をナデ調整。

石製品

五輪塔（38）　地輪破片。縦 11.25+ cm、横 14.2+ cm、厚さ 7.2+ cm。内外面ともに工具による削りの痕跡が明瞭に残存している。阿蘇凝灰岩製。

金属製品

釘（39）　頭部から中部までの破片。先端部は欠損している。縦 3.9+ cm、横 0.8 cm、厚さ 0.7 cm。

210-2 灰茶色土出土遺物（Fig.106）

土師器

杯 a（1）　口径 12.7 cm、器高 2.4 cm、底径 8.3 cm。表面の摩耗が激しく調整不明。

小皿 a（2 ～ 6）　2 は復元口径 8.2 cm、器高 1.4 cm、底径 7.6 cm。底部切り離し技法は回転糸切り。板状圧痕。3 は口径 8.3 cm、器高 1.2 cm、底径 5.85 cm。底部切り離し技法は回転糸切り。板状圧痕。見込みと口縁部内面に煤が付着している。4 は復元口径 8.4 cm、器高 1.25 cm、復元底径 5.7 cm。底部切り離し技法は回転糸切り。板状圧痕。5､6 は口縁部を欠損する破片。外面調整も磨滅によって不明瞭。5 は器高 0.8+ cm。復元底径 4.4 cm。6 は器高 1.5 cm、復元口径 5.5 cm。

小皿 b（7）　復元口径 7.1 cm、器高 1.4 cm、復元底径 4.8 cm。底部切り離し技法は回転糸切り。

瓦質土器

火鉢（8）　口縁部破片。器高 6.15+ cm。口縁部外面に沈線で区切った範囲に菱形文のスタンプを押している。内面は削り調整。外面は丁寧な横ナデを施す。

石製品

五輪塔（9、10）　水輪破片か。9 は縦 8.9+ cm、横 11.0+ cm、高さ 6.8+ cm。10 は縦 8.2 cm、横 7.0 cm、高さ 5.8 cm。肩部に窪みを持ち火輪との嵌めこみになるものか。溝状になっている窪みの径は 12 ～ 13cm である。阿蘇凝灰岩製。

金属製品

用途不明（11）　長さ 2.35+ cm、幅 0.8 cm、厚さ 0.35 cm。全面に錆。

210-2 灰褐色土出土遺物（Fig.106）

土師器

小皿 a（12）　復元口径 6.6 cm、器高 1.4 cm、復元底径 5.1 cm。底部切り離し技法は回転ヘラ切り。

須恵質土器

甕（13）　残存高 3.95 cm。幅 7mm、高さ 3mm ほどの突帯を貼り付けている。

瓦質土器

火鉢（14）　口縁部破片。器高 4.1+ cm。内面は丁寧な横ナデ。外面は菱形文をスタンプしている。焼成は良好。

仏器（15）　体部破片。器高 4.7+ cm、復元胴部最大径 15.3 cm。内面は不定方向の削り。体部には横一列に 3 つの方形が入れ子になっているような方形文様をスタンプしている。

陶器

蓋（16）　復元口径 7.6 cm、器高 1.85+ cm。かえりをもつ蓋。施釉される。胎土は淡黄橙色で、釉調は黄橙色。

瓦類

軒平瓦（17）　瓦当の破片。縦 4.3+ cm、幅 8.9 cm、厚さ 2.5 cm。瓦当文様は、中心飾りとして宝珠を配置し、左右に唐草文を配す。

軒丸瓦（18）　瓦当の破片。縦 9.2+ cm、横 5.0+ cm、厚さ 4.2 cm。円形のスタンプ文がめぐる。

丸瓦（19）　縦 16.5+ cm、横 13.3 cm、厚さ 2.4 cm。凸面は摩耗により調整不明。凹面は布目痕跡。袋の継ぎ目痕が確認できる。

土製品

鞴羽口（20）　破片。縦 3.9+ cm。体部の色調は暗灰色と橙色に変化している。

金属製品

鉄滓（21 ～ 23）　21 は縦 5.5 cm、横 5.3 cm、厚さ 2.4 cm。表面に黒灰色の付着物がある。22 は縦 6.3 cm、横 5.2 cm、厚さ 2.5 cm。23 は縦 5.6 cm、横 7.7 cm、厚さ 2.5 cm。表面に黒色（若干艶あり）の鉱物が付着している。

釘（24、25）　24 は釘頭から体部中位の破片。縦 2.45+ cm、横 1.1 cm、厚さ 0.8 cm。25 は先端部の破片。縦 1.15+ cm、横 0.6+ cm、厚さ 0.45+ cm。

土製品

不明品（26）　縦8.3+cm、横9.0+cm、厚さ4.1cm。中央部に穿孔あり。色調は淡黄橙白色。部分的に錆の付着と煤の付着が認められる。

210-2 表土出土遺物（Fig.106、107）

須恵器

甕（27）　口縁部破片。口縁端部は貼り付けをして、外側に肥厚させている。復元口径 23.1 cm、器高 6.0+ cm。焼成は良好。還元良好。色調は暗灰色。

陶器

小皿（28）　復元口径 10.9 cm、器高 1.95 cm、復元底径 6.6 cm。内面中央部に梅鉢文、見込み部に「太宰府神□（社か）」と文字を浮き彫りにする。

擂鉢（29）　底部破片。器高 4.1+ cm、復元底径 13.8 cm。内面に擂目を 6 条彫り込む。外面底部は工具によるナデ調整。内面の器壁は使用により表面が磨滅して平滑になっている。

肥前系磁器

湯呑み茶碗（30）　復元口径 6.4 cm、器高 5.1 cm、復元高台径 3.4 cm。外面に呉須により絵付けをする。外面の文様は「遠山」「雁」である。高台畳付部は釉剥ぎをして露胎しており、重ね焼き時の砂粒が付着している。

磁器

椀（31）　31 は復元口径 10.7 cm、器高 6.1 cm、復元高台径 4.2 cm。高台畳付部は釉をかきとる。高台内部も施釉。釉調は淡緑灰色～淡茶灰色が横縞状に施される。

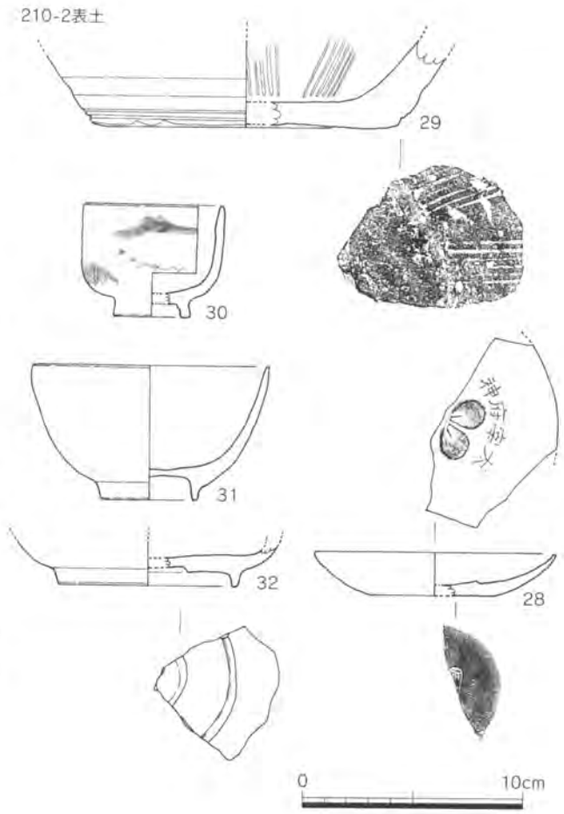


Fig.107　第 210-2 次調査土層出土遺物実測図その 3（1/3）

Ⅲ（32） 32は器高2.0+㎝、復元高台径8.2㎝。高台内面を蛇ノ目状に釉をかきとっている。釉調は光沢がありガラス質、不透明で細かい貫入が全体に入る。化粧土を使用。

(5) 小結

遺構は墓と考えられるものが集中して検出された。その中でも、五輪塔を伴う可能性が高い石組み墓（210-2ST020）が検出されており注目される。それ以外は平石を区画として使う墓と、緑色片岩を多量にマウンドに積む積石墓が見つかっている。出土遺物からは12世紀前半～14世紀前半、近世、近現代のものが出土している。江戸期の墓の可能性がある210-2SX008もあり、古代末から中世～近世と長期にわたって墓地として利用されてきたことが明らかになった。

後の特論で詳細は触れているが、210-2SX030で見つかった五輪塔空風輪2点は無銘無種子の大型五輪塔の構成物であり、その特徴からいわゆる「律宗系五輪塔」と考えられる。そして、210-2ST020の石組み遺構と結びつけて考えると、このあたりに大型五輪塔が複数立ち並んでいた風景が推定可能になった。地形的にも平野の奥まった山裾の平坦部でもあり、五輪塔が立ち並んでその周囲には緑をもとめて積み石墓が点在した墓地、もっといえば中世寺院に伴う「奥の院」であった可能性が高くなった。これについては特論で論ずる。

後の課題としては、地表面に露出していた210-2SX030の石像物群の詳細の調査である。これは調査地周辺に路頭していたものを集積したものと考えられるが、多くの情報を含んでいる。残念ながら、調査時は五輪塔空風輪に注目したのみに終わった。しかしながら、改めてみるとそれらの構成物は興味深いものが多い。大小の五輪塔、そして板碑群。これらも詳細に観察していけば、多くの情報をもたらしてくれるはずだ。また、江戸期の石像物もある。たとえば、墓碑にしても「明和四亥年　釈西□（山偏に左にノ右下に牛、異体字と思われる）昊　十一月二日」とある。明和四年丁亥は西暦1767年である。法名が釈で始まっているので浄土真宗の墓碑とわかる。墓碑の形も自然石（花崗岩）を使って古い様相を残している。地蔵菩薩に刻まれた「寛保二戊年　施主　観世村金平」も寛保二年壬戌（1742年）とあり、古いものである。江戸時代、18世紀中頃に当時の観世村金平が施主として地蔵菩薩を建立した理由は何だったのだろうか。興味は尽きない。

周辺の出土遺物に肥前系陶磁器が点在しており、年代も18世紀代のものがあるため、中世以来再びこのあたりを墓として再利用しはじめた時期を示しているのかもしれない。

調査直前まで地蔵菩薩には水やお供えものがしてあったのを確認している。現在でも信仰が続いていたのだろう。

現在、調査地点は埋め戻した跡に整地され、東に隣接している新興住宅地の公園として利用されている。その公園の片隅に文化財説明板とともに210-2SX030はそのままの姿でみることができる。いずれ石像物の評価が定まると最低でも五輪塔空風輪の大型の2点については、きちんとした保護措置を施す必要がある重要な文化財と考えている。

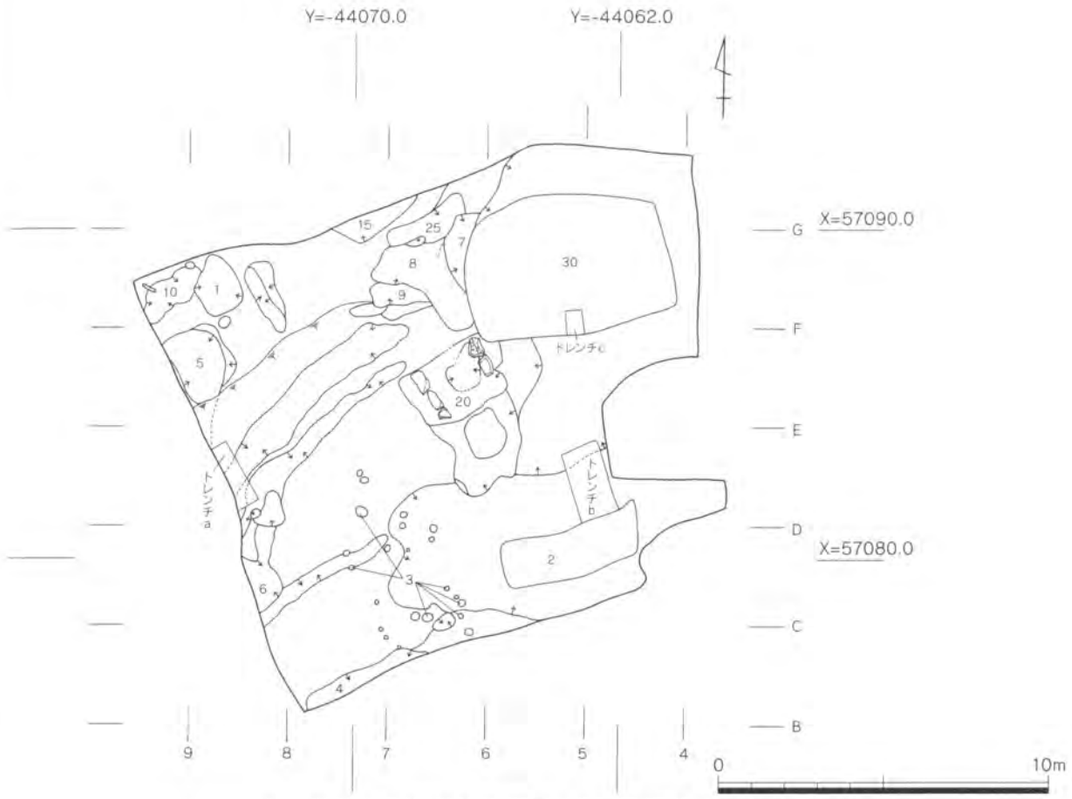


Fig.108　第210-2次調査　遺構略測図（1/200）

Tab.9　大宰府条坊跡第210-2次調査遺構一覧表

※「遺構面」で未記入のものは、1面目および遺構面不明のものを含む。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
1	210-2ST001	墳墓	石組み　包土に焼骨が多く含む				XX期～	F8
2		たまり状遺構		明灰茶色粘質土				C4・5
3		小穴群						C6
4	210-2SX004	落ち込み						B6・7
5	210-2ST005	墳墓					12c前半～	E8・9
6		小穴						C8
7		墳墓か						F6
8	210-2SX008	墳墓か						F6
9	210-2SX009	墳墓か						F6
10	210-2ST010	墳墓						F9
11		溝						D8～E7
欠番								
欠番								
欠番								
15	210-2ST015	墳墓	石組み　五輪塔（熟色凝灰岩）					G7
欠番								
欠番								
欠番								
欠番								
20	210-2ST020	墳墓	石組み　五輪塔の基礎か？ S-30との関連				13c後半～14c前半	D5～E6
欠番								
欠番								
欠番								
欠番								
25	210-2ST025	墳墓	石組み　（直線的に並ぶ）					F6・7
欠番								
欠番								
欠番								
欠番								
30	210-2SX030	五輪塔集積遺構					江戸～	F4・5
黄色土							明治～	
灰茶色土	1面包含層							

Fig.109　第 210-2 次調査　周辺地形図（1/250）

Tab.10-1　大宰府条坊跡第 210-2 次調査　出土遺物一覧表（1）

S-1 ①

土師器	小皿 a（仆）

S-1 ②

国産陶器	壺
中国陶器	壺：A-2（2）

S-1 ③

土師器	小皿

S-1 ④

中国陶器	壺：破片（1）

S-2

瓦類	平瓦（無文）　丸瓦（無文）
石製品	緑色片岩（1）

S-3

土師器	破片
瓦類	平瓦（無文）

S-4

土師器	坏　皿　破片
肥前系陶磁器	赤絵皿
瓦類	平瓦（須恵質、格子）　平瓦（無文）　いぶし瓦
石製品	磨石？

S-5

土師器	坏 a（仆）　小皿 a（仆）　人形？　破片
瓦類	平瓦（無文）
石製品	緑色片岩（81）　五輪塔

S-6

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	破片

S-8 ①

国産陶器	甕　壺

S-9 ①

国産陶器	壺

S-20

中国陶器	壺：B（未分類）（2）
瓦類	丸瓦（瓦質、無文）

S-20　明黄茶色土

土師器	小皿 a
国産陶器	壺

S-20　灰茶色土

土師器	破片
土師質土器	こね鉢
国産陶器	甕　擂鉢
瓦類	平瓦（須恵質、縄目）　平瓦（瓦質、格子）
石製品	阿蘇凝灰岩

トレンチ a

土師器	坏 a（仆）
龍泉窯系青磁	椀：I（1）
	他：坏 III-3（1）
土師質土器	柿渋蓋
白磁	皿：IX（1）
中国陶器	他：天目椀（1）
瓦類	平瓦（須恵質、格子）　破片

トレンチ b

須恵器	蓋 I
土師器	坏 a　小皿 a
土師質土器	火鉢　擂鉢
瓦質土器	不明品
白磁	椀：IV（1）
中国陶器	壺：A-1（1）　A-2（1）
瓦類	丸瓦（格子）　軒丸瓦
石製品	五輪塔（凝灰岩）　緑色片岩（2）

トレンチ c

肥前系陶磁器	筒形椀（外面緑釉、内面染付）（1）
国産磁器	白磁壺
中国陶器	壺：B（1）

トレンチ①

肥前系陶磁器	染付椀（外側青磁椀）

茶色土

同安窯系青磁	椀：I-1b（1）
土師質土器	焙烙　火鉢
須恵質土器	擂鉢
肥前系陶磁器	染付皿（五花系ｽﾀﾝﾌﾟ）　椀（ｽﾀﾝﾌﾟ）　角皿　皿　椀
	染付皿（見込み蛇ノ目ﾊｹﾞ）　徳利
国産陶器	甕　椀　椀（墨書「ﾌﾆｼ」　壺　徳利　筒形　小型土鍋
	擂鉢　行平（近世）
国産磁器	壺　白磁椀　破片（白磁）
青白磁	梅瓶（1）
瓦類	平瓦（瓦質、縄目）　丸瓦（瓦質、縄目）
	丸瓦（土師質、無文）　燻し瓦　ｻﾝ瓦
石製品	緑色片岩（42）　五輪塔（阿蘇凝灰岩）

黄色土

土師器	坏 a（仆）
土師質土器	火鉢
肥前系陶磁器	染付皿（近代）
国産陶器	壺
国産磁器	椀　青磁筒形壺
白磁	他：耳壺 III
瓦類	平瓦（瓦質）　平瓦（須恵質、無文）　燻し瓦
	平瓦（須恵質、格子）　丸瓦（須恵質、無文）　ｻﾝ瓦
石製品	五輪塔（阿蘇凝灰岩）　緑色片岩（54）

灰茶色土

土師器	坏 a（仆）　小皿 a（仆）　破片（煮沸具）
龍泉窯系青磁	椀：I-2（1）　II-b（2）　III-2（1）　破片（1）
	他：壺
高麗青磁	象嵌：椀（1）
土師質土器	火鉢
瓦質土器	擂鉢　破片
肥前系陶磁器	染付：椀　皿
国産陶器	椀　椀（内面平行文）　甕　壺　油差し　破片
白磁	椀：破片（1）
青白磁	梅瓶（4）
中国陶器	壺：A-2（1）　II（未分類）（1）
李朝	釉青砂器椀
瓦類	丸瓦（瓦質、無文）　平瓦（須恵質、無文）　軒平瓦
	平瓦（土師質、縄目）　平瓦（須恵質、縄目）　燻し瓦
石製品	阿蘇凝灰岩　緑色片岩（61）　石斧？

灰褐色土

須恵器	甕　破片
土師器	坏 a　小皿 a（仆）　小皿 b　破片
越州窯系青磁	壺：B（1）
龍泉窯系青磁	椀：㋐？（1）
同安窯系青磁	皿：I（1）
土師質土器	鍋　火舎
須恵質土器	甕
瓦質土器	火鉢　擂鉢　器台
緑釉陶器	破片？
肥前系陶磁器	染付（江戸末～）
国産陶器	褐釉　擂鉢　壺　甕　柿渋釉蓋　酒徳利　椀（近世～）
	鉢？　行平（近世～）　破片
国産磁器	破片
白磁	椀：V-2×VI ～ VIII-4（1）　破片（1）
中国陶器	壺：A-2（2）　B（1）　C-I（1）　D（A-1）（1）
	他：C-1（1）　盤
須恵質（輸入）	朝鮮系無釉陶器壺
瓦類	丸瓦（瓦質、無文）　丸瓦（須恵質、無文）　丸瓦（須恵質、縄目）
	平瓦（須恵質、無文）　平瓦（土師質、格子）　軒平瓦　燻し瓦
	平瓦（破片）　鬼瓦
金属製品	鉱滓
石製品	滑石製品　滑石製石鍋　緑色片岩（80）　凝灰岩
	五輪塔（阿蘇凝灰岩）
土製品	円板状土製品　ﾌｲｺﾞ羽口　塼？
その他	炭化物

Tab.10-2　大宰府条坊跡第 210-2 次調査　出土遺物一覧表（2）

表土

須恵器	甕
土師器	小皿 a（仆）
龍泉窯系青磁	椀：II- b（1）
土師質土器	鍋
肥前系陶磁器	染付：椀　皿　湯飲み椀
国産陶器	椀　擂鉢　皿（「太宰府神社」見込み銘入り）　鉢？　瓶？
	皿？
国産磁器	坏（貫入）　椀　椀（アリント、近代）　染付小坏（近代）
白磁	椀：IV-1（1）
中国陶器	壺：A-1（1）
瓦類	丸瓦（瓦質、無文）　平瓦（須恵質、二重格子）　燻し瓦
石製品	緑色片岩（ﾄﾚﾝﾁ）　五輪塔（凝灰岩）
土製品	ﾚﾝｶﾞ×塼？

Tab.11　大宰府条坊跡　第 210-2 次調査　出土遺物計測表

A：内底ナデ　B：板状圧痕

S-1③

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	R-001	(6.7)	1.3	(4.8)	－	－

S-4

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a×c	－	R-002	－	1.1+α	－	－	－

S-5

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坏 a	イト	R-004	－	1.6+α	(8.4)	－	－

灰茶色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	イト	R-001	8.3	1.2	5.85	○	○
	小皿 a	イト	R-003	(8.4)	1.25	(5.7)	○	○
	小皿 a	イト	R-004	(8.2)	1.4	7.6	○	○
	小皿 b	イト	R-002	(7.1)	1.4	(4.8)	○	－
	小皿 a1	－	R-007	－	0.8+α	(4.4)	－	－
	坏 a	－	R-005	12.7	2.4	8.3	－	－

灰茶色土①

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	－	R-001	－	1.5+α	(5.5)	－	－

灰褐色土

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a	ヘラ	R-001	(6.6)	1.4	(5.1)	－	－

トレンチ a

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿 a1	－	R-001	－	1.3+α	(8.4)	○？	－
	坏 a?	イト	R-002	－	1.4+α	(8.8)	－	－

トレンチ b

種別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B
須恵器	蓋 1	－	R-001	－	1.8+α	－	－	－
土師器	皿 a	－	R-002	(10.6)	2.0+α	－	－	－
	皿 a	イト	R-003	(13.4)	2.3	(8.8)	○？	－

4. 大宰府条坊跡第 283 次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市観世音寺 5 丁目 18-5、18-6 で、小字名は朝日と称し、太宰府市役所の北方 300m、朝日地蔵の南方 90m に位置する。付近一帯は四王寺山山麓の低丘陵地で、東側や南側の御笠川に向かって緩やかに傾斜している地形である。

この土地については、平成 3（1991）年 7 月 23 日に住宅建築に先立ち、平成 3（1991）年 8 月 21 日に試掘調査を行い、GL-35cm で遺構が確認された。その際には遺構に影響がなく建物は建築された。平成 22（2010）年 2 月 12 日、専用住宅新築に係わる文化財の問い合わせがあり、協議を重ねた結果、遺構に影響が及ぶ設計となったため、国庫補助のもと発掘調査を行うこととなった。発掘調査は平成 22（2010）年 8 月 6 日～ 9 月 1 日に実施した。開発対象面積は 221.97m² で、調査面積は 178m² である。

なお、調査区南側の SX015 は、東側にある SK025 などの状況などから、専用住宅の基礎の掘削深度とその保護層を加味しても、さらに深くなることが予想されたため、基礎より深い位置まで掘削したが、完掘せずに保存している。

(2) 基本層位（Fig.110）

調査直前は駐車場として利用されていたため、最上面には砕石が敷かれていたが、その以前は建物が建っていた。遺構面は比較的浅く、北側ほど表土直下で遺構が確認できる状態で、耕作土などは未検出である。遺構面は東側道路面から 0.5m 前後の深さにあり、標高 42.1m 前後である。遺構検出時の取り上げ土色は明茶色土である。

(3) 検出遺構

柵列もしくは掘立柱建物

283SA010（Fig.112）

柱間が北から 2.44m と 2.3m のピットが南北に 3 個並んで検出された。振れは N-5°　10′　27″ -E である。調査区の西端に近く、調査地内でそれ以上の展開はなく、現状では南北 4.74m の柵列の状態を示している。建物とした場合は西側に展開することが予想されるため東西棟になるとみられる、掘り方は径 0.3 ～ 0.4m の円形で、中央に径 0.1m の柱痕がある。この柱痕は 3 個とも先端を掘り方底部に打ち込んでいるような状況が窺える。なお、真ん中の掘り方は 283SE005 の埋土に切り込んでいた。

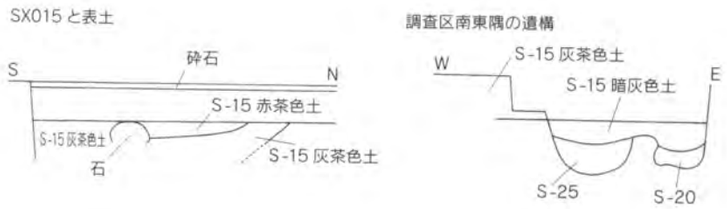


Fig.110　第 283 次調査区模式図

Fig.111　第 283 次調査遺構全体図（1/100）

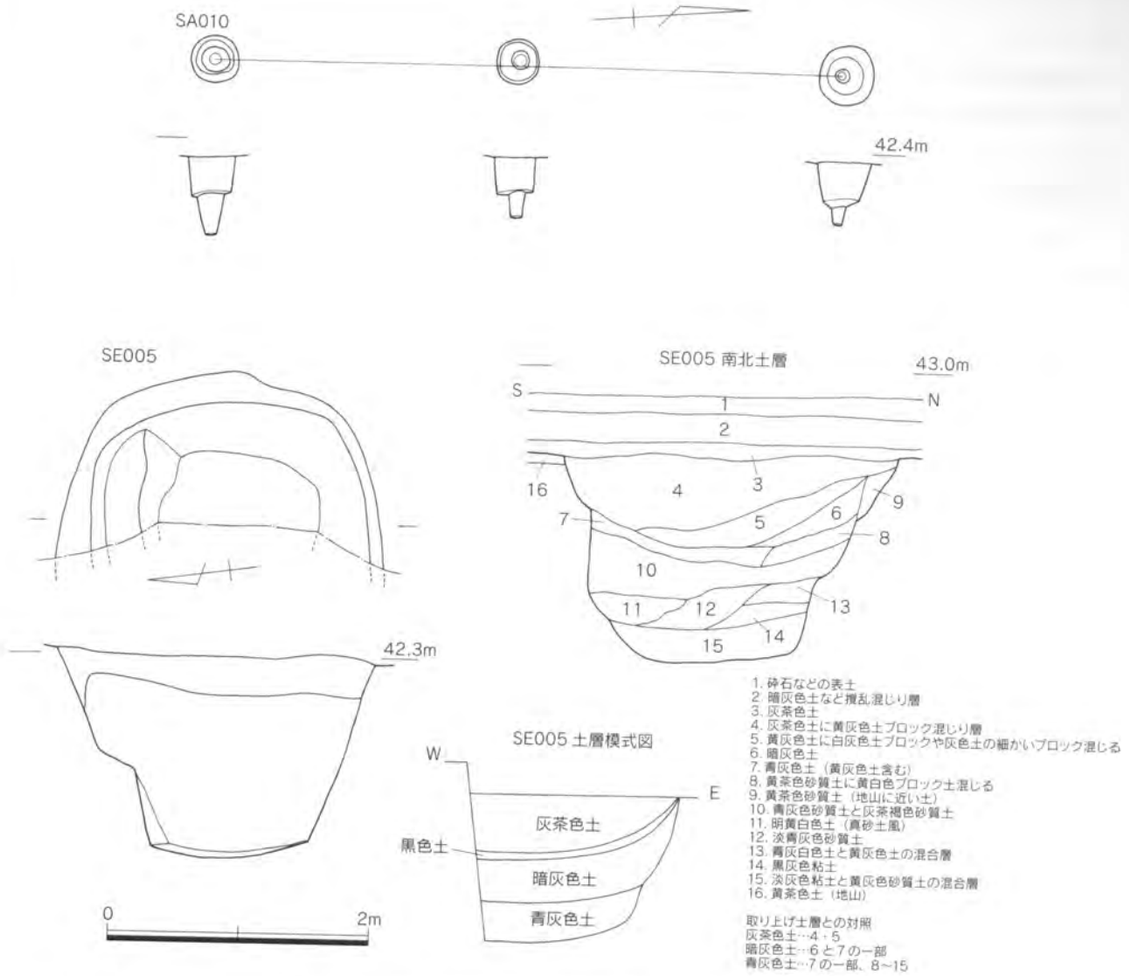


Fig.112　283SA010・SE005 遺構実測図（1/50）

井戸

283SE005（Fig.112）

調査区西端で検出された円形状の土坑で、深さや形状から井戸と推測される。掘り方は南北 2.48m、東西 1.45m 以上で、深さは 1.58m を測る。埋土に井戸枠の痕跡は確認できず、木片や曲物などの破片も全く出土していなかった。埋土途中に炭層があるなど井戸構築時の掘り方の埋土というより、廃絶後の埋め戻しのような痕跡が見られた。

土坑

283SK001（Fig.113）

調査区西端で検出された円形状の土坑で、南北 3.05m、東西 1.6m 以上で、深さは 0.84m、西側が若干深くなっていて、さらに調査区外に続いている。埋土は白色粘土混じりの灰茶色土のほぼ単層で、自然堆積ではなく、人為的に埋められたと考えられる。SX015 と並んでおり、小さな土坑ではなく、溝もしくは大きな土坑になる可能性もある。

283SK025（Fig.113）

調査区南東で検出された円形状の土坑で、南北 1.8m、東西 1.95m で、深さは 0.77m、埋土は暗灰色土と黄灰色土の混合層で、中位には西側から傾斜した炭層が堆積し、その前後で完形の土師器坏が多く出土した。

283SK052 (Fig.113)

南北 0.9m、東西 0.85m、深さ 0.4m の方形土坑で、上層に瓦とその直下に須恵器の横瓶がかたまって出土した。

段落ち

283SX015

調査区南側に展開する段落ちで、専用住宅の基礎の掘削深度より深くなるため、上面のみ調査し、残りは完掘せずに保存している。SK025 付近の検出状況からすると、北側の遺構検出面より 0.4m 低い位置に平坦面が広がり、さらにその面に溝やピットが展開しているものと考えられる。埋没時期が SX020 と同時期であり、SK001 も並んでおり、東西の区画溝のようなものになる可能性がある。

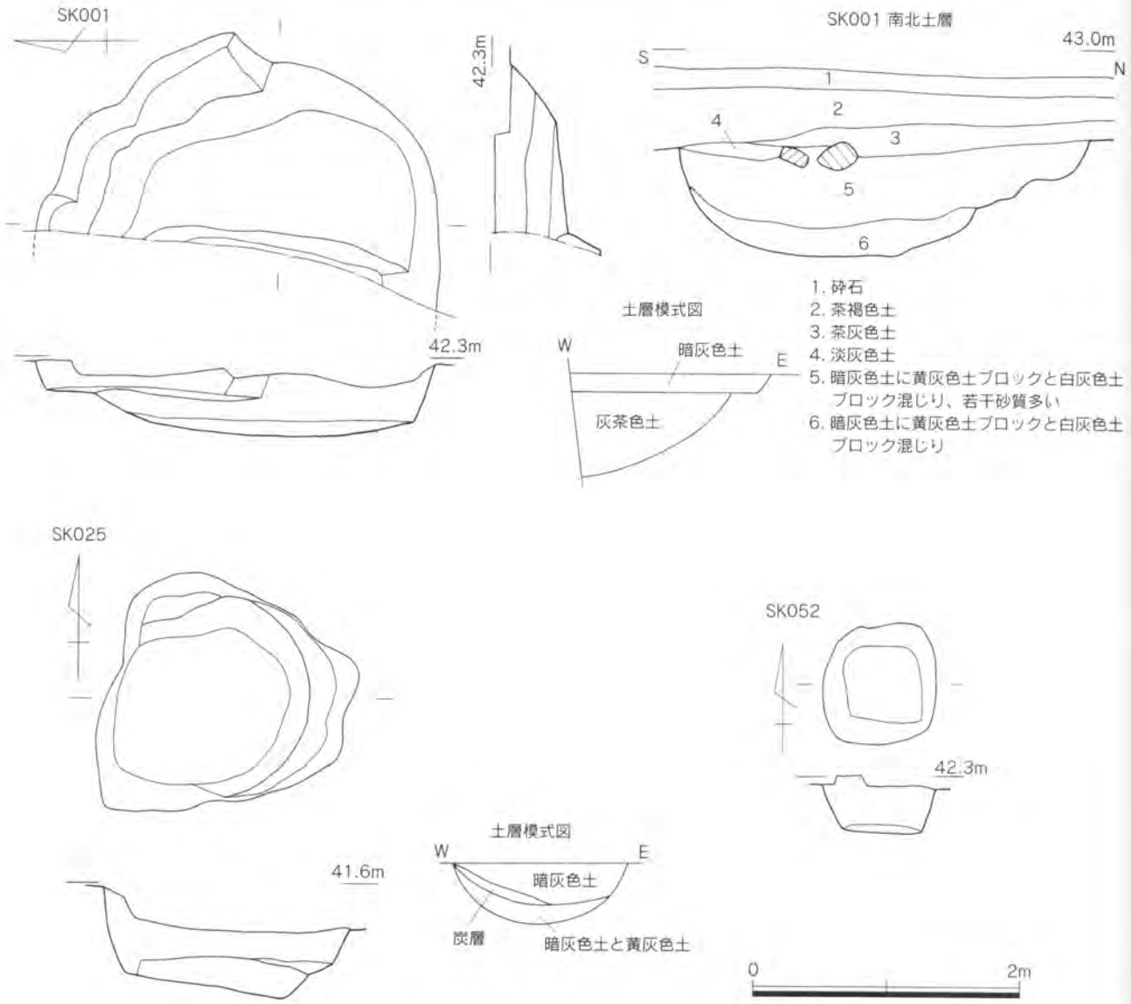


Fig.113　283SK001・025・052 遺構実測図 (1/50)

283SX020

調査区東端で南北に溝状に検出されたものの、調査区際の上、すぐ東を現在市道が南北に走っており、東側の状況が分からない現状では、段落ちとして報告する。第 284 次調査にも続いており、合わせて振れは N-5° 34′ 47″ -W である。この市道付近が井上条坊案の左郭 10 坊路の推定ラインに位置するため、SX020 は道路関連遺構の可能性は十分考えられる。最終埋没時期は条坊廃絶後である。

(4) 出土遺物

柵列もしくは掘立柱建物

283SA010a 出土遺物 (Fig.114)

瓦器

椀 (1)　口縁端部で内外面にミガキが残る。胎土は精製されている。

283SA010b 出土遺物 (Fig.114)

土師器

小皿 a (2)　外面底部には板状圧痕が残る。焼成はやや不良で淡橙白色を呈する。

甕 (3)　口縁部で、胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや不良で淡橙白色を呈する。

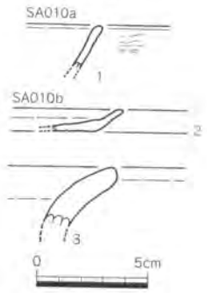


Fig.114　283SA010 出土遺物実測図 (1/3)

井戸

283SE005 灰茶色土出土遺物 (Fig.115)

土師器

小皿 a (1、2)　1 は復元口径 9.2cm、器高 1.2cm、復元底径 7.0cm。底部外面には板状圧痕が残る。2 は復元口径 9.6cm、器高 1.2cm、復元底径 7.0cm。底部は回転ヘラ切り。

丸底坏 (3、4)　内面にはミガキ b が残る。

甕 (5)　口縁部で端部はヨコナデ、下半はヨコハケ、内面下半はヘラケズリである。外面の一部には煤が付着する。胎土は 0.3cm 以下の砂粒を含み、色調は茶灰色などを呈する。

283SE005 黒色土出土遺物 (Fig.115)

土師器

小皿 a (6)　復元口径 9.8cm、器高 1.15cm、復元底径 7.8cm。底部切り離しは不明だが、外面底部には板状圧痕が残る。

丸底坏 a (7)　復元口径 15.8cm、器高 3.3cm。口縁端部は肥厚させている。底部押し出しは明瞭であるが、指頭圧痕は明瞭でない。内面はミガキ b を施す。焼成は良好である。

283SE005 暗灰色土出土遺物 (Fig.115)

土師器

小皿 a (8、9)　2 点とも外面はヘラ切りで僅かに板状圧痕が残る。内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。8 は復元口径 9.3cm、器高 1.65cm、復元底径 6.6cm。9 は復元口径 9.6cm、器高 1.2cm、復元底径 6.4cm。

坏 a (10)　復元口径 14.0cm、器高 3.6cm、底径 9.0cm。底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。内面底部はナデで、その他は回転ナデ調整。色調は灰黄褐色を呈する。

丸底坏 a (11、12)　それぞれ復元口径 15.0cm と 16.0cm。胎土には金雲母を含み、色調は淡橙色を呈する。11 の外面下半には指頭圧痕が残る。

瓦類

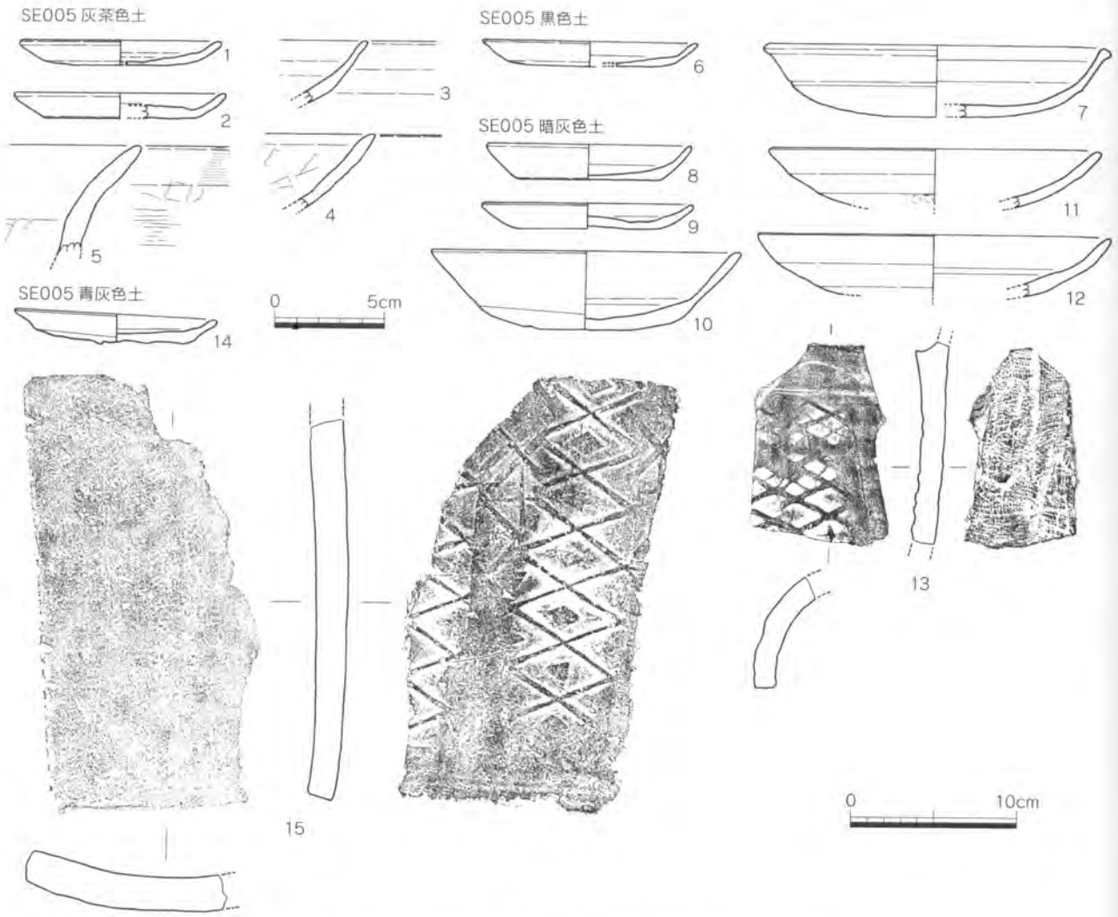


Fig.115　283SE005 出土遺物実測図（1/3、13・15 は 1/4）

丸瓦（13）　凸面はやや大きな格子叩き。焼成は良好で灰褐色を呈する。

283SE005 青灰色土出土遺物（Fig.115）

土師器

小皿 a（14）　口径 9.2cm、器高 1.4cm、底径 6.8cm。底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。内面底部はナデで、その他は回転ナデ。色調は淡黄白色を呈する。

瓦類

平瓦（15）　凸面に大きめの格子とその中に菱形を有する叩きを施す。端部断面は分割線でヘラ切りし切断後未調整である。

土坑

283SK001 暗灰色土出土遺物（Fig.116）

土師器

小皿 a（1、2）　2 点とも焼成不良で磨滅し、調整不明。1 は復元口径 8.8cm、器高 0.9cm、復元底径 6.1cm。2 は復元口径 9.3cm、器高 0.95cm、復元底径 7.2cm。

坏 a（3）　底部切り離しは回転糸切りで、板状圧痕も残る。内面底部は不定方向のナデ。復元口径 11.4cm、器高 2.4cm、復元底径 7.9cm。焼成良好で淡橙白色を呈する。

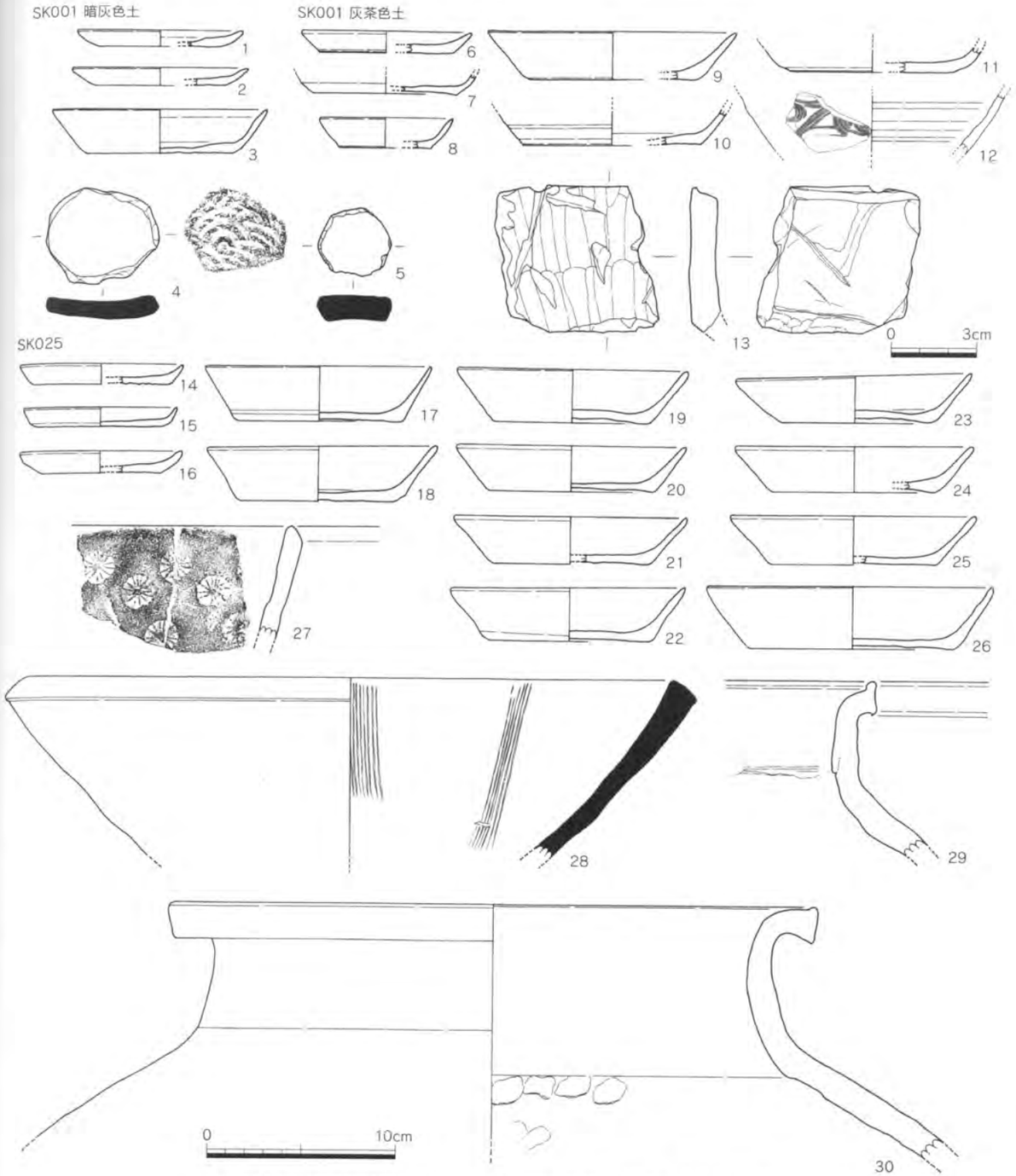


Fig.116　283SK001・025 出土遺物実測図（1/3、13 は 1/2）

須恵器

甕加工品（4、5）　全面的に磨滅し、断面も加工し丸くなる。現場の環境から自然に磨滅したとは思えず、人為的なものと考えられる。4 は内面に同心円叩きを有する甕の破片。5 は内外面ナデ調整された甕もしくは壺の破片である。

283SK001 灰茶色土出土遺物（Fig.116）

土師器

小皿ａ（6、7） 6は復元口径9.0cm、器高1.2cm、復元底径7.1cm。底部外面には板状圧痕が残り、切り離しは不明。7は復元底径7.6cm。底部切り離しは回転糸切り。

小皿ｂ（8） 復元口径7.0cm、器高1.6cm、復元底径5.0cm。内外面回転ナデ。底部調整は不明。色調は淡橙白色を呈する。

坏ａ（9～11） 3点とも底部切り離しは回転糸切りで、内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ調整である。9は復元口径13.1cm、器高2.6cm、復元底径8.8cm。10は復元底径9.4cmで、底部外面に板状圧痕が残る。11は復元底径8.8cm。

青白磁

壺（12） 形状から壺の下半付近と見られる。胎土は僅かに黒色粒を含む。内面は回転ナデのあと若干青味のある透明釉を施し、外面は幅広で浅い彫り込みの文様を施したあと、青味のある白濁した釉を施す。

石製品

石鍋（13） 滑石製石鍋を二次加工した破片である。内外面は石鍋の時の縦方向の細かいケズリを施し、外面に煤が付着する。

283SK025 出土遺物（Fig.116）

土師器

小皿ａ（14～16） 復元口径8.2～8.7cm、器高1.05～1.2cm、復元底径6.5～7.2cm。底部切り離しは回転糸切りとみられるが、14は板状圧痕が強くて確認できない。14は板状圧痕があるが16にはない。3点とも内面底部はナデ調整される。

坏ａ（17～26） 17～25は復元口径12.0～13.0cm、器高2.45～2.95cm、復元底径7.9～8.8cm。底部切り離しは全て回転糸切りで、板状圧痕を残す。内面底部はナデで、その他は回転ナデ。胎土は金雲母や微細な砂粒を含むが精製されている。26は他より大きく、復元口径15.2cm、器高3.35cm、底径10.8cm。底部切り離しは回転糸切りで、板状圧痕を残す。

土師質土器

鉢（27） 内面に菊花文のスタンプを施す。口縁端部はヨコナデ調整で、色調は黄白色を呈する。

須恵質土器

擂鉢（28） 復元口径36.6cm。胎土は0.3cm以下の砂粒を含むが精製されている。内外面ともヨコナデで、内面には間隔をあけて縦方向の摺り目を施す。また、内面底部は使用によりやや滑らかになっている。

国産陶器

甕（29、30） 常滑産とみられる甕である。29の胎土は0.1cm以下の白色砂粒を多く含む。内外面はヨコナデ調整。色調は内外面とも暗赤茶褐色を呈し、焼成時の灰かぶり部分は灰黄色を呈する。頸部内面には粘土接合痕が残る。30は復元口径34.4cm。外面は頸部から肩部と口縁部内面に自然釉がかかり、肩部が灰緑色、頸部から口縁部内面にかけて茶褐色を呈する。胎土は0.2cm以下の砂粒を多く含む。内外面ともヨコナデ調整され、肩部内面には口縁部接合時のナデ調整の指頭圧痕が残る。

283SK052 出土遺物（Fig.117）

須恵器

甕（1） 胴部下半で、外面は平行叩きで、内面には同心円の当て具痕を残す。底部は若干擦り減っている。色調は還元不良で暗茶褐色を呈する。

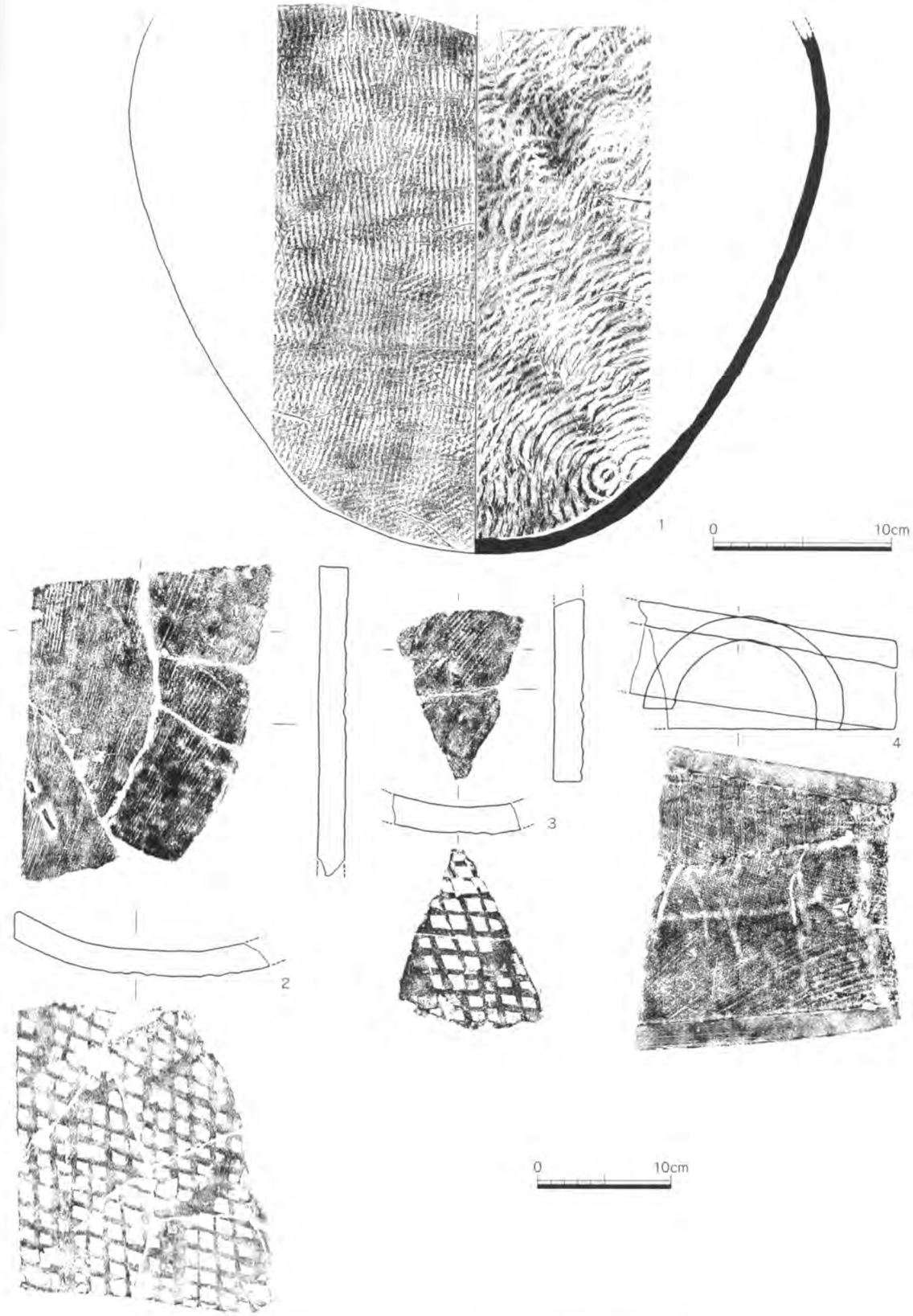


Fig.117 283SK052 出土遺物実測図（1/3、瓦は1/4）

瓦類

平瓦（2、3）　2点とも凸面にやや太い格子叩きを施し、断面部はヘラケズリ調整する。内面には糸切り痕を残す。胎土は0.2cm以下の砂粒を多く含み、焼成はやや不良で灰白色を呈する。

丸瓦（4）　全体的にやや歪んでいる。外面はヨコナデ、内面は布目痕を残す。断面部はヘラケズリ調整される。色調は灰白色や暗灰色を呈する。

その他の遺構

283SX015 赤茶色土出土遺物（Fig.118）

土師器

小皿a（1、2）　底部切り離しは回転糸切りで、内面底部は不定方向のナデ。1は復元口径7.7cm、器高1.15cm、底径5.8cm。2は復元口径7.8cm、器高1.25cm、復元底径4.2cm。

小皿b（3）　復元底径3.4cm。底部切り離しは回転糸切り。色調は淡橙白色を呈する。

坏a（4、5）　底部切り離しは回転糸切りで、その後板状圧痕を残す。内面底部は不定方向のナデ。端部に向かって細く仕上げる。4は復元口径12.2cm、器高2.6cm、底径7.8cm。5は復元口径13.3cm、器高3.1cm、底径7.5cm。

瓦器

椀c（6）　丸く低い高台を貼付し、復元高台径6.4cm。磨滅し調整は不明瞭。

283SX015 灰茶色土出土遺物（Fig.118）

土師器

小皿a（7～10）　復元口径7.2～8.5cm、器高1.2～1.45cm、復元底径5.1～6.2cm。磨滅するものもあるが、底部切り離しは回転糸切りで、板状圧痕を残す。色調は淡茶褐色などを呈する。

坏a（11～18）　復元口径11.8～13.6cm、器高2.4～3.3cm、復元底径7.2～8.7cm。底部切り離しは全て回転糸切りで、板状圧痕を残す。底部内面は不定方向のナデ。その他は回転ナデ。12と18はやや歪んでいる。

甕（19）　丸味のある口縁部で、体部内面はヘラケズリのようにみえる。胎土は0.5cm以下の砂粒を多く含み、色調は淡茶灰色を呈する。

土師質土器

鉢（20）　口縁部を断面三角形に肥厚させる。口縁部はヨコナデで、内面は細かいヨコハケ、体部外面はナナメハケの後ヨコナデで煤が付着する。微細な砂粒や金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。

須恵質土器

鉢（21）　復元底径13.2cm。外面はナデ調整、内面はヨコナデで使用により滑らかになる。胎土は0.5cm以下の砂粒や黒色粒を多く含む。色調は灰色を呈する。

瓦質土器

鉢（22～24）　22の内面はヨコハケで、外面はヨコナデ。色調は白灰色を呈する。23は箱型の火鉢と考えられる。口縁部はミガキで、外面は斜め方向のナデ、内面は工具のようなヨコハケ痕が残る。胎土は0.3cm以下の砂粒を含み、断面白灰色、内外面は暗灰色を呈する。24は外面に径5.5cmの菊花文のスタンプを施す。内面はヨコハケ、口縁端部はナデ調整で、その一部に煤が付着する。胎土は微細な砂粒を多く含み、色調は灰白色や淡灰黄色などを呈する。焼成は良好である。

龍泉窯系青磁

椀（25）　底部を残し、体部を意図的に打ち欠いている。底部内面に文様を施す。Ⅳ類。

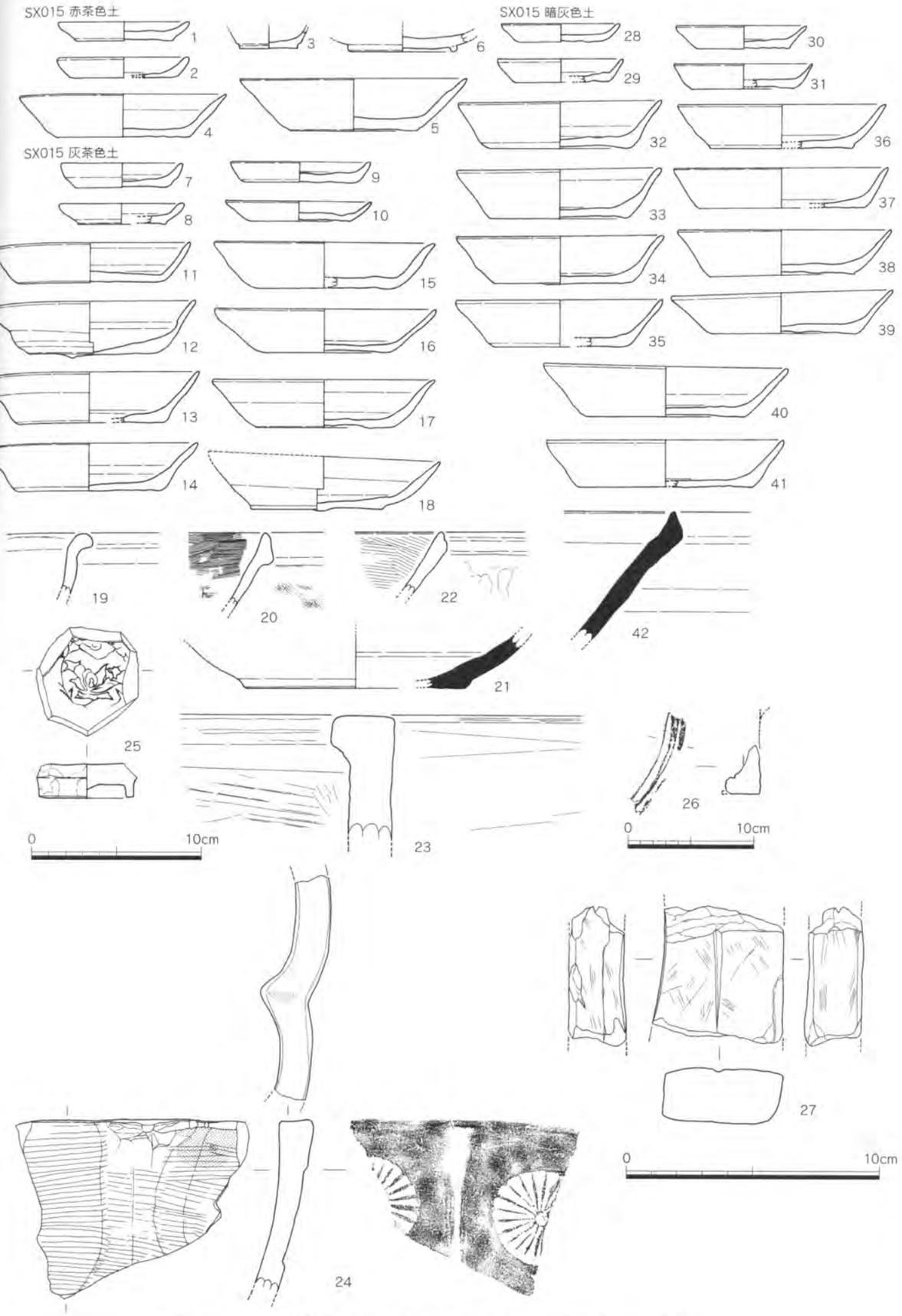


Fig.118　283SX015出土遺物実測図（1/3、26は1/4、27は1/2）

瓦類

軒丸瓦（26）　軒丸瓦の周縁部分で、二重圏縁が確認できる。焼成は良好で色調は灰色を呈する。

石製品

砥石（27）　上下は欠損する。使用面は4面で、1面の中央に溝状の摺り目痕が残る。砂岩製。

283SX015 暗灰色土出土遺物（Fig.118）

土師器

小皿a（28～31）　復元口径7.0～8.2cm、器高1.1～1.5cm、復元底径4.8～6.0cm。底部切り離しは全て回転糸切りで、板状圧痕を残す。底部内面は不定方向のナデ。その他は回転ナデ。

坏a（32～41）　復元口径11.9～13.0cm、器高2.4～2.95cm、復元底径8.0～9.7cm。底部切り離しは全て回転糸切りで、板状圧痕を残す。底部内面は不定方向のナデ。その他は回転ナデ。

須恵質土器

鉢（42）　内外面ヨコナデだが、内面下半は磨滅する。色調は灰褐色で、口縁端部外面のみ暗灰色を呈する。胎土は0.5cm以下の白色砂粒を含むが精製されている。

283SX020 出土遺物（Fig.119）

土師器

小皿a（1～5）　復元口径8.0～9.1cm、器高1.0～1.3cm、復元底径6.2～7.3cm。磨滅しているものもあるが、底部切り離しは全て回転糸切りで、板状圧痕を残す。色調は橙褐色や黄茶褐色を呈する。

坏a（6）　復元口径12.7cm、器高2.65cm、復元底径8.3cm。底部切り離しは回転糸切りで、板状圧痕のようなものを残す。内面は磨滅する。色調は淡橙色を呈する。

瓦質土器

火鉢（7）　内面はヨコハケで、外面はナデで、花文スタンプを施す。口縁端部は面取りしナデ調整を行う。胎土は0.1cm以下の砂粒を含み、灰色や暗灰色を呈する。

白磁

皿（8）　復元口径8.8cm。口縁端部内面の釉を拭き取る。IX-a類。

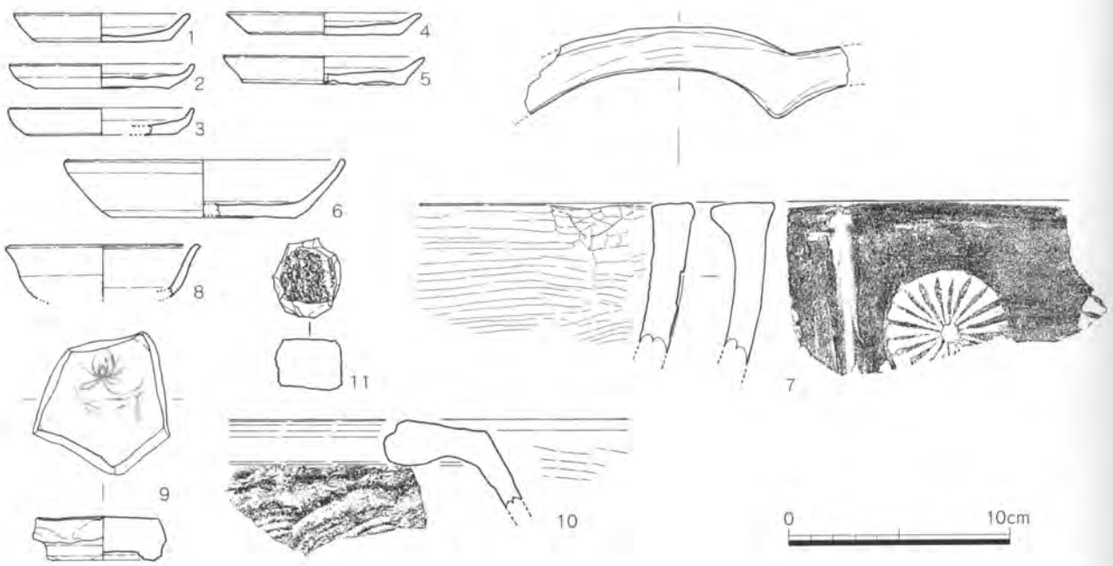


Fig.119　283SX020 出土遺物実測図（1/3）

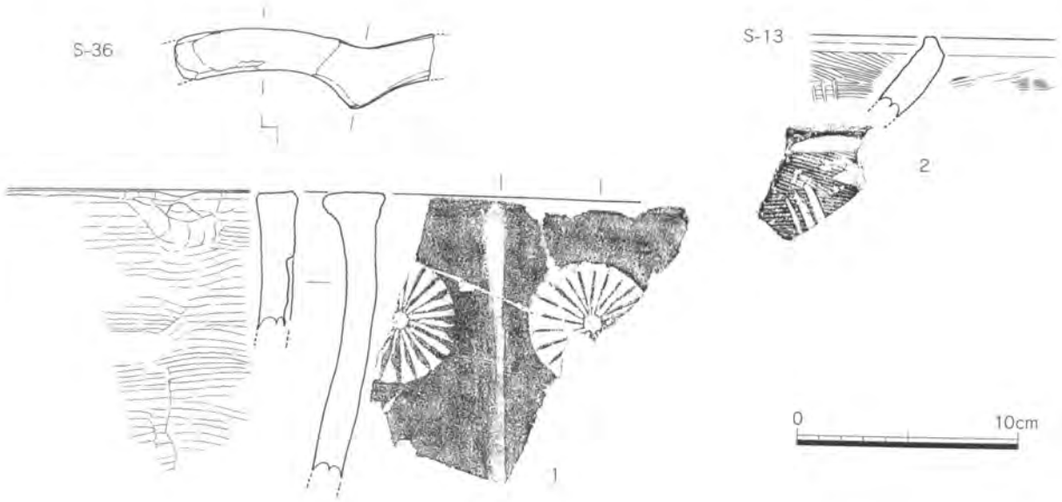


Fig.120　第283次調査その他の遺構出土遺物実測図（1/3）

龍泉窯系青磁

椀（9）　底部を残し、体部を意図的に打ち欠いている。I類で内面に文様を施す。

中国陶器

甕（10）　口縁部で、内面には同心円の当て具痕が残り、外面には斜め方向の平行叩きを施すが、ナデ消しているのか、うっすらと見える程度である。口縁端部は回転ナデ。胎土は0.2cm以下の砂粒や黒色粒を含み、褐灰色を呈する。I類。

瓦類

瓦玉（11）　大きさは3.6×3.1cm、厚さ2.3cm。

その他の遺構出土遺物（Fig.120）

瓦質土器

火鉢（1）　内面はヨコハケで、外面はナデで、花文スタンプを施す。外面下半は縦方向のミガキを施す。口縁端部は面取りしナデ調整を行う。胎土は0.1cm以下の砂粒を含み、暗灰色や黒灰色を呈する。S-36より出土。

鉢（2）　内面は細かいハケ、外面にも僅かにハケ目が残る。胎土は微細な白色粒を含むが精製され、色調は淡灰褐色を呈する。S-13より出土。

(5) 小結

調査では13世紀後半を前後する時期の遺物を中心に出土した。武藤氏が太宰府に来た時期や横岳崇福寺が創建された時期にあたる。しかし、調査地は横岳崇福寺境内や武藤氏屋敷跡の伝承が残る「御所ノ内」の外側に位置し、両者に挟まれた場所に位置する。遺構については特異な状況は見られず、両者に関わる遺構と言い切れる明確なものは確認できなかった。

また、東端の段落ち（SX020）については、西肩のみのため、道路の側溝として成立するか明確で

ないが、井上条坊案の左郭 10 坊路の推定ラインに位置するため、道路関連遺構である可能性が考えられる。SX020 の埋没時期は政庁廃絶後であるため、鎌倉時代にかけて道路として使用されていたことが推測される。市内の条坊が廃絶する中で、依然として使用され続けたのは、やはり横岳崇福寺や武藤氏屋敷が存在したことによるものだろう。

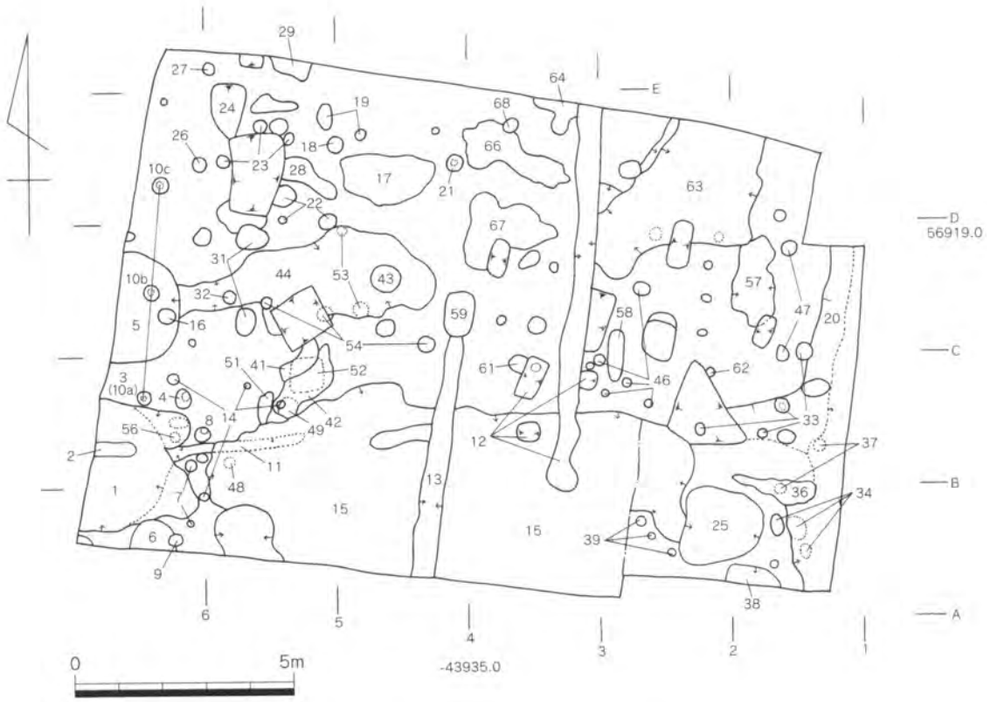


Fig.121　第 283 次調査遺構略測図（1/150）

Tab.12　大宰府条坊跡第 283 次調査　遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	283SK001	土坑		13 世紀代	AB6
2		溝	S-1→2　茶褐色土	13 世紀以降	B6
3	283SA010a	ピット	暗灰色粘土　S-10a に変更		B6
4		ピット	暗灰色粘土　柱痕残る		B6
5	283SE005	井戸		12 世紀前半	C6
6		土坑	明褐色土	12 世紀以降	A6
7		ピット群		12 世紀以降	A6
8		ピット		12 世紀以降	B6
9		ピット		12 世紀以降	A6
10	283SA010	柵列×掘立柱建物	S-5→10	12 世紀以降	BC6
11		溝	S-11→1	13 世紀以降	B5・6
12		撹乱群			B3
13		溝	茶褐色土（やや砂質）	近世～	A～C4
14		ピット群			B5
15	283SX015	段落ち		13 世紀後半～ 14 世紀前半	AB2～5
16		ピット	S-5→16		C6
17		窪み			D4
18		ピット	白色粘土混じり暗灰色粘土	近世～	D4
19		ピット群			D4
20	283SX020	段落ち	暗灰色土	13 世紀後半～ 14 世紀前半	A～C1
21		ピット	柱痕あり		D4
22		ピット群			D5
23		ピット群			D5
24		撹乱			D5
25	283SK025	土坑	炭混じり	13 世紀後半～ 14 世紀前半	A1・2
26		ピット			D6
27		ピット			E5
28		窪み			D5
29		窪み			E5
31		窪み群			C5
32		ピット			C5
33		ピット群			B1
34		ピット群			A1
36		溝	淡灰色土	12 世紀後半～	A1
37		ピット群		12 世紀後半～	B1
38		土坑			A1
39		ピット群		14 世紀～	A2
41		土坑			B5
42		土坑			B5
43		土坑	炭混じり黒灰色土	12 世紀後半～	C4
44		溝		平安時代	C4・5
46		ピット群			B2
47		ピット群			C1
48		ピット	S-15 の下		B5
49		ピット		8 世紀末～ 9 世紀初頭	B5
51		ピット	柱痕残る		B5
52	283SK052	土坑		8 世紀後半	B5
53		ピット群	S-44 の下		C4
54		ピット群			C4・5
56		ピット			B6
57		窪み	暗灰色土と灰色土の混合層		C1
58		土坑			B2
59		土坑		近世～	C4
61		ピット			B3
62		ピット			B2
63		窪み	暗灰色土と黄灰色土の混合層	12 世紀以降	D2
64		窪み			D3
66		窪み			D3
67		窪み			CD3
68		ピット			D3

Tab.13-1　大宰府条坊跡第 283 次調査　出土遺物一覧表

S-1 暗灰色土

須恵器	蓋 3、蓋 4、甕、甕加工品
土師器	小皿 a（仆）、坏、坏 a（仆）、甕、破片
瓦質土器	鉢
龍泉窯系青磁	椀：II-b (1)　破片 (1)
同安窯系青磁	皿：I-1a (1)
白磁	椀：V-4×VIII-1×3 (1)　破片 (2)
中国陶器	破片 (1)
瓦類	平瓦（格子叩、無文）

S-1 灰茶色土

須恵器	甕、壺？
土師器	小皿 a（仆）、坏、坏 a（仆）、甕、破片
龍泉窯系青磁	椀：I (2)、II-a (1)、III-2 (1)
白磁	椀破片 (1)　白磁破片 (2)
中国陶器	破片 (1)
青白磁	壺
瓦類	平瓦（格子叩、縄目叩、無文）、破片
石製品	丸石、石鏃加工品

S-2

須恵器	破片
土師器	小皿 a（仆）、坏、破片
石製品	丸石

S-4

土師器	坏、破片

S-5 灰茶色土

須恵器	蓋 1、坏 a、坏 c、甕
土師器	小皿 a（ベラ）、小皿 a（仆）、坏、丸底坏 a、椀 c、甕、鉢、破片
黒色土器 A	椀、椀 c、破片
越州窯系青磁	坏：I (1)　破片 I (1)
瓦類	平瓦（格子叩）、破片
土製品	焼土塊

S-5 暗灰色土

須恵器	甕、壺
土師器	坏 a、小皿 a、丸底坏 a、甕×鍋
瓦器	破片
白磁	皿：V-2a (1)
瓦類	丸瓦（格子叩）、平瓦（無文）
土製品	焼土塊

S-5 黒色土

須恵器	坏 a、坏 c、甕
土師器	小皿 a、坏、丸底坏 a、丸椀、鍋
瓦類	平瓦（格子叩）

S-5 青灰色土

須恵器	甕
土師器	小皿 a（ベラ）、坏、器台
越州窯系青磁	椀：II (1)
瓦類	丸瓦（無文）、平瓦（格子叩、縄目叩、無文）

S-6

須恵器	破片
土師器	小皿 a×坏 a（仆）、坏
中国陶器	壺 IV (1)

S-7

須恵器	破片
土師器	小皿 a（仆）、坏、破片
須恵質（輸入）	朝鮮系無釉陶器

S-8

土師器	坏
瓦質土器	破片

S-9

土師器	小皿 a（仆）、坏、丸底坏、破片

S-13

須恵器	蓋 3、甕、破片
土師器	小皿 a（仆）、坏、坏 a（仆）、破片
瓦質土器	擂り鉢
肥前系陶磁器	椀
白磁	椀：IV (1)、破片 (1)　皿：破片 (1)　白磁破片 (2)
越州窯系青磁	椀：I-3 (1)
龍泉窯系青磁	椀：I-2×3 (1)
同安窯系青磁	椀：I-I (1)、III-1b×c (1)
中国陶器	破片 (2)
瓦類	破片
石製品	石炭

S-14

土師器	坏、坏 a
越州窯系青磁	破片 II (1)

S-15 赤茶色土

須恵器	坏、甕、破片
土師器	小皿 a（仆）、小皿 b、坏、坏 a（仆）、破片
瓦器	椀 c
白磁	破片 (2)、広東系 (1)
瓦類	丸瓦（格子叩）、破片
石製品	平玉石

S-15 暗灰色土

須恵器	坏、甕、破片
土師器	小皿 a、小皿 a（仆）、坏 a（仆）、椀 c
黒色土器 A	破片
白磁	椀：II (1)、IV (1)、V (1)、VIII (1)、破片 (3)
	皿：IX (1)　白磁破片 (3)
龍泉窯系青磁	椀：I-1b (1)、III-2 (1)　破片 III (1)
瓦類	丸瓦（格子叩、無文）、平瓦（格子叩、無文）
須恵質土器	鉢

S-15 灰茶色土

須恵器	坏 a、坏 c、坏身、甕、壺、破片
土師器	小皿 a（仆）、坏、坏 a（仆）、椀 c、甕、破片
黒色土器 A	椀 c
土師質土器	鉢
須恵質土器	鉢
瓦質土器	鉢、火鉢
緑釉陶器	破片
国産陶器	破片
須恵質（輸入）	朝鮮系無釉陶器
越州窯系青磁	椀：I (1)
龍泉窯系青磁	椀：I-6b (1)、II-b (1)、IV イ (1)
	坏 III-4 (1)　破片 I (1)、III (1)
同安窯系青磁	椀：破片 (1)　皿：I (1)
白磁	椀：II-I (1)、II (1)、V-4×VIII-1×3 (3)
	IV (2)、V (1)、破片 (1)
	皿：IX (2)　壺 (1)　破片 (11)、広東系 (1)
中国陶器	壺把手 (1)　盤 (3)　壺 (1)　破片 (3)
瓦類	平瓦（格子叩、無文）、軒丸瓦、破片
石製品	丸石、砥石、剥片、石鏃

S-16

須恵器	坏、甕
土師器	坏、丸底坏
白磁	破片 (1)

S-17

須恵器	破片
土師器	破片
瓦器	椀 c
白磁	破片 (1)
瓦類	平瓦（格子叩）

S-18

土師器	破片
瓦類	平瓦（燻し瓦）、破片
土師質土器	火皿

Tab.13-2　大宰府条坊跡第 283 次調査　出土遺物一覧表

S-10a

土師器	坏
瓦器	椀

S-10b

土師器	小皿 a、坏、甕

S-10c

須恵器	坏
土師器	破片、破片（仆）
黒色土器 B	破片
瓦類	破片

S-11

須恵器	甕
土師器	小皿 a（仆）、坏、椀 c、破片、破片（仆）
須恵質土器	鉢
龍泉窯系青磁	椀：II-b (1)
同安窯系青磁	椀：I-1b (1)
白磁	皿：VI (1)
瓦類	破片

S-12

土師器	坏 a（仆）、破片
瓦器	破片
土師質土器	鉢
瓦類	燻し瓦（丸瓦）、平瓦（格子叩）

S-24

国産陶器	破片
長沙窯系青磁	破片 (1)

S-25

須恵器	甕、破片
土師器	小皿 a（仆）、坏、坏 a、坏 a（仆）、甕、破片
瓦器	破片
土師質土器	鉢
須恵質土器	擂り鉢
国産陶器	甕
龍泉窯系青磁	椀：I (1)、I-4 (1)、III-2 (1)　破片 I (1)
同安窯系青磁	椀：III-1c (1)
白磁	椀：IV (2)　皿：II-I (1)、IV (1)　破片 IX (1)、広東系 (1)
中国陶器	壺 (1)
金属製品	鉱滓
土製品	土壁
石製品	丸石、石鏃
瓦類	丸瓦（格子叩、無文）、平瓦（格子叩、縄目、無文）、破片

S-26

土師器	坏
白磁	皿 V (1)
瓦類	平瓦（無文）

S-27

土師器	坏

S-28

土師器	破片

S-29

須恵器	蓋 3、坏
土師器	小皿 a
国産陶器	破片

S-31

土師器	坏、破片

S-32

須恵器	坏 c
土師器	小皿 a、坏、椀 c、甕
瓦類	瓦玉

S-33

土師器	坏、破片
瓦類	平瓦（格子叩）

S-34

土師器	小皿 b（仆）、坏、坏 a（仆）

S-19

須恵器	蓋 3、坏、甕
土師器	坏、坏 c、丸底坏、甕
瓦器	破片
龍泉窯系青磁	破片 I (1)
白磁	破片 (2)
瓦類	丸瓦、平瓦（格子叩）

S-20

須恵器	坏 a、甕、破片
土師器	小皿 a（仆）、坏、坏 a（仆）、破片
瓦質土器	火鉢
白磁	皿：IX (1)
龍泉窯系青磁	椀：I (1)、II (1)
中国陶器	甕：I (1)
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦（格子叩）、瓦玉、破片
石製品	石鏃

S-21

土師器	坏、坏 a（仆）、破片

S-22

須恵器	破片
土師器	坏、破片

S-23

土師器	坏
白磁	椀：IV (1)

S-49

須恵器	皿 a
土師器	破片

S-51

須恵器	甕
土師器	小皿 a×坏 a（仆）、坏

S-52

須恵器	蓋 3、甕
土師器	破片
瓦類	丸瓦（無文）、平瓦（格子叩）
石製品	丸石

S-53

須恵器	破片
土師器	坏

S-54

須恵器	蓋 3、坏 c
土師器	小皿 a×坏 a、坏、甕
瓦類	平瓦（格子叩）
石製品	平玉石

S-56

土師器	坏

S-57

須恵器	蓋 3、坏、坏 c
越州窯系青磁	椀：I-2 ア (1)
瓦類	破片

S-58

瓦類	平瓦（格子叩）

S-59

須恵器	坏
土師器	坏、破片
肥前系陶磁器	破片
龍泉窯系青磁	破片 I (2)

S-61

土師器	坏 a、破片
龍泉窯系青磁	椀：II-b (1)

S-62

土師器	小皿 a、坏
瓦類	破片

Tab.13-3　大宰府条坊跡第 283 次調査　出土遺物一覧表

S-36

須恵器	破片
土師器	小皿 a、坏、坏 a、坏 a (仆)
瓦質土器	火鉢
龍泉窯系青磁	椀：I (1)　破片 I (1)
白磁	椀：破片 (1)　皿：広東系 (1)
瓦類	平瓦

S-37

土師器	小皿、破片
瓦類	破片

S-38

須恵器	破片
土師器	小皿 a (仆)、坏、坏 a (仆)

S-39

土師器	小皿 a× 坏 a (仆)、小皿 b (仆)、坏、坏 a (仆)、破片
龍泉窯系青磁	椀：i (1)

S-41

土師器	破片
瓦類	破片

S-42

須恵器	坏、甕
土師器	坏、破片
瓦類	平瓦 (格子叩、無文)

S-43

土師器	小皿 b (仆)、坏、坏 a (仆)

S-44

須恵器	蓋 1、蓋 3、坏、坏 a× 皿 a、高坏、甕、小壺、破片
土師器	小皿 a、坏、坏 c、丸底坏 a、甕
黒色土器 A	椀 c
黒色土器 B	椀、椀 c
越州窯系青磁	椀：I-2 (1)、II-Ia (1)
白磁	椀：II-1 (1)
瓦類	丸瓦 (格子叩、無文)、平瓦 (縄目叩、無文)、瓦玉
石製品	平玉石
土製品	土壁

S-46

須恵器	坏 c
土師器	坏、破片

S-47

須恵器	坏
土師器	破片

S-48

土師器	小皿 a (仆)、坏
同安窯系青磁	椀：I-Ib (1)

S-63

須恵器	蓋 3、坏 c、甕、破片
土師器	小皿 a (仆)、坏、坏 a (仆)
白磁	椀：V-1×VIII-2 (1)、破片 (1)　白磁破片 (1)
瓦類	平瓦 (格子叩、無文)、瓦玉、破片
石製品	石鏃

S-64

土師器	坏 a、破片

S-66

須恵器	蓋 3、坏 c
土師器	坏 a、椀、甕
黒色土器 A	椀、破片

S-67

須恵器	破片
土師器	破片

S-68

須恵器	破片
土師器	小皿 a× 坏 a (仆)、坏
黒色土器 A	破片
石製品	滑石片

明茶色土

須恵器	蓋 3、皿 a、坏、坏 c、甕、甕加工品、壺 ?、破片
土師器	小皿 a、小皿 a (仆)、坏、坏 a、坏 a (仆)、椀 c、破片、破片 (仆)
黒色土器 B	蓋
土師質土器	鉢 ?
瓦質土器	鉢
肥前系陶磁器	破片
国産磁器	破片
越州窯系青磁	坏：III-b (1)　壺 I (2)　破片 I (1)
龍泉窯系青磁	椀：I-2 (1)、I-3 (1)、II-b (2) 破片 (1)、I (1)、III (1)
同安窯系青磁	椀：I-Ib (1)、II (1)　破片 (1)
白磁	椀：II-1 (1)、IV (3)、V-4×III-3 (1)、破片 (3)　壺 (1) 皿：II-1 (1)、IX (1)、IX-2 (1)、破片 (1)　白磁破片 (14)
中国陶器	甕 (1)　盤 (1)　破片 (2)
土製品	焼土塊
瓦類	丸瓦 (格子叩、無文)、平瓦 (格子叩、平行叩)
石製品	石鏃、砥石、丸石

表土

須恵器	破片
土師器	小皿 a、坏 a (ヘラ)、坏 a (仆)、椀 c、鍋、破片
須恵質土器	擂り鉢、鉢
白磁	椀：IV (1)、破片 (2)
龍泉窯系青磁	椀：I-2 (1)　III 類盤 (1)
中国陶器	甕：破片 (2)
瓦類	丸瓦 (格子叩)、平瓦 (格子叩)、破片

Tab.14　第 283 次調査　条坊関連遺構座標値

遺構番号	位置	遺構中点座標値		南門からの距離		方位
		X	Y	X 方向 (m)	Y 方向 (m)	
284SX005・283SX020	284SX005 検出北端西肩	56935.60	-43925.24	235.869	893.174	N-6° 9′ 19″ -E
	283SX020 検出南端西肩	56915.20	-43927.44	215.448	891.179	

5. 大宰府条坊跡第 284 次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市観世音寺 5 丁目 18-1 で、小字名は朝日と称し、太宰府市役所の北方 300m、朝日地蔵の南方 90m に位置する。付近一帯は四王寺山山麓の低丘陵地で、東側や南側の御笠川に向かって緩やかに傾斜している地形である。

この土地については、平成 3 (1991) 年 7 月 23 日に住宅建築に先立ち、平成 3 (1991) 年 8 月 21 日に試掘調査を行い、GL-35cm で遺構が確認された。その際には遺構に影響がなく建物は建築された。平成 22 (2010) 年 2 月 12 日、専用住宅新築に係わる文化財の問い合わせがあり、協議を重ねた結果、遺構に影響が及ぶ設計となったため、国庫補助のもと発掘調査を行うこととなった。発掘調査は隣接する第 283 次調査に引き続いて、平成 22 (2010) 年 9 月 2 日～ 9 月 30 日に実施した。開発対象面積は 246.2m² で、調査面積は 201m² である。

Fig.122　第 284 次調査遺構全体図 (1/100)

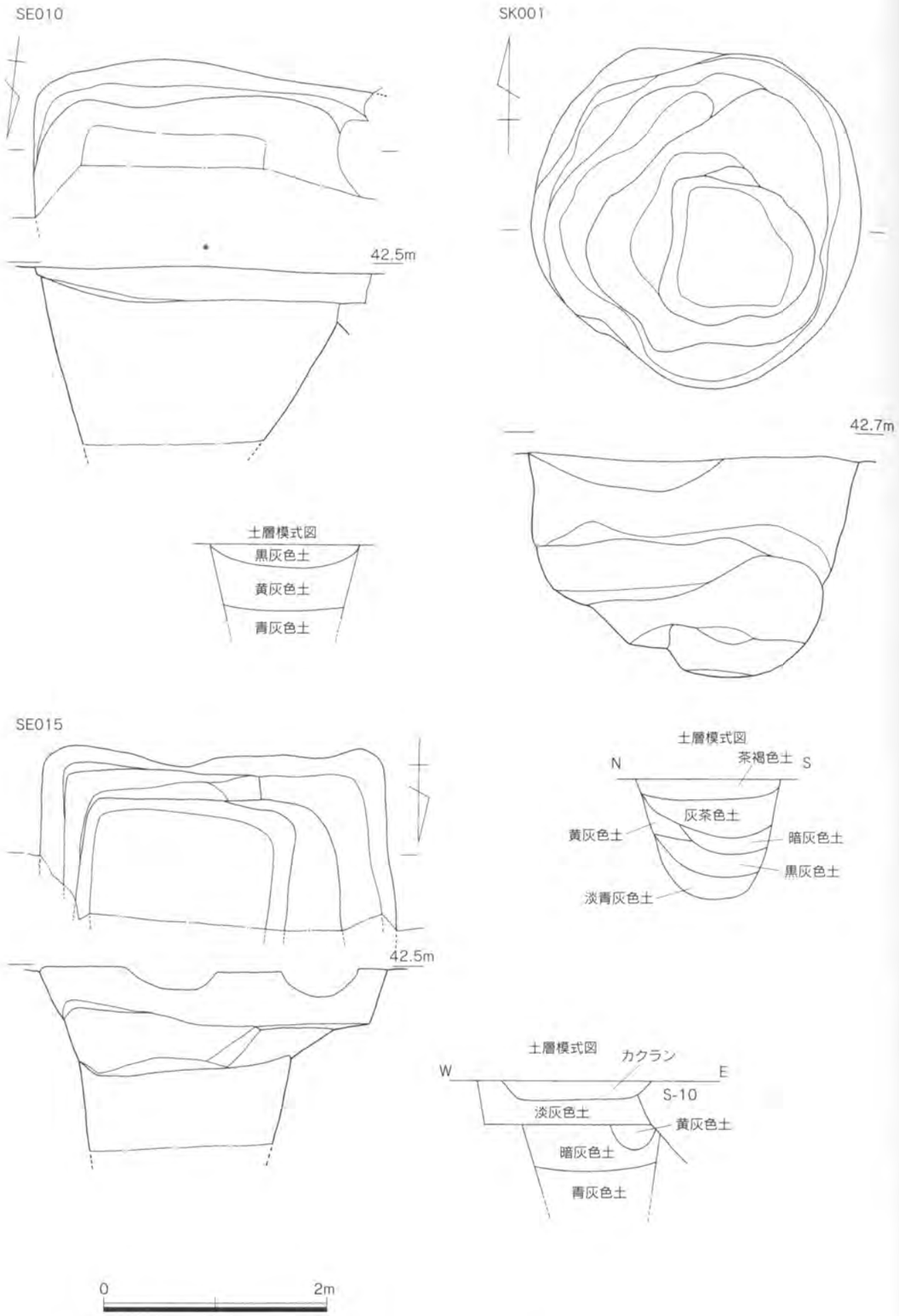


Fig.123　284SE010・015、SK001 遺構実測図（1/50）

(2) 基本層位

調査直前は駐車場として利用されていたため、最上面には砕石が敷かれていた。その下には明確な耕作土は見られなかった。これら表土は 0.4m と浅いため、現代の撹乱が遺構面に多くみられる。調査遺構面の標高は約 42.3 ～ 42.5m である。なお、遺構検出の際の遺物ラベルは明茶色土で取り上げている。

(3) 検出遺構

井戸

284SE010 (Fig.123)

調査区際で湧水もあり、隣接地の崩落の危険があったため完掘はしていない。東西約 3.0m、南北 1.4m 以上、深さ 1.7m 以上の隅丸方形状の掘り方を持つ。調査区壁には井戸枠内が埋まったとみられる痕跡が土層で確認でき、井戸枠材とみられる板材も一部確認できたが、枠の構造は不明である。埋土は最上面に土師器を多く含む黒灰色土があり、その下に井戸枠のウラゴメ土とみられる黄色土と白灰色土ブロック土の混合層が堆積している。黒灰色土は井戸埋没後の陥没穴を埋めた土と推測される。

284SE015 (Fig.123)

284SE010 同様、調査区際で湧水もあり、隣接地の崩落の危険があったため完掘はしていない。東西 3.1m、南北 1.6m 以上、深さ 1.6m 以上の方形状の掘り方を持つ。上面は 284SE010 や撹乱に切られている。埋土に部分的な違いはあるが、井戸枠痕と認識できるものはなく、板片も確認できていないが、284SE010 と状況がよく似ているため井戸と推測される。

土坑

284SK001 (Fig.123)

東西 2.92m、南北 3.0m、深さ 2.0m の円形の掘り方を持つ。形状から井戸と考えられたが、埋土からは井戸枠痕跡や井戸枠材など井戸に関するものは全く確認できていないため、土坑として報告する。しかし、埋土を除去した底面に約 1.3m 四方の方形状に地山を掘削した状況があることから、井戸枠痕跡と考えた場合、井戸廃棄の際に完全に井戸枠を除去し埋められた可能性も考えられる。埋土の中位ほどでは奈良～平安前期の遺物が多く見られた。また、深さ 1m 付近には自然の草木が堆積したような腐植土が 0.5m 前後堆積しており、この土坑は大きく穴が開いていた状態で一時放置されていたことを物語っている。

段落ち

284SX005 (Fig.122)

第 283 次調査の 283SX020 の延長部分である。調査地隣接の市道に平行する形で確認された。方位はやや東に振っていて、283SX020 と合わせるとおよそ N-5° 34′ 47″ -E を示す。調査区際のため東側の状況が不明なため、段落ちとして報告しているが、溝となる可能性も考えられる。検出長は 15.2m で、第 283 次調査の 283SX020 を合わせると 25.1m になる。深さは 0.13 ～ 0.6m で南側ほど深く、傾斜も南に向かって下がっている。埋土は茶褐色土と灰茶色土で、硬化面などは確認できていない。井上条坊案の左郭十坊路の推定ラインに位置するため、条坊の道路を踏襲した痕跡の可能性が考えられる。

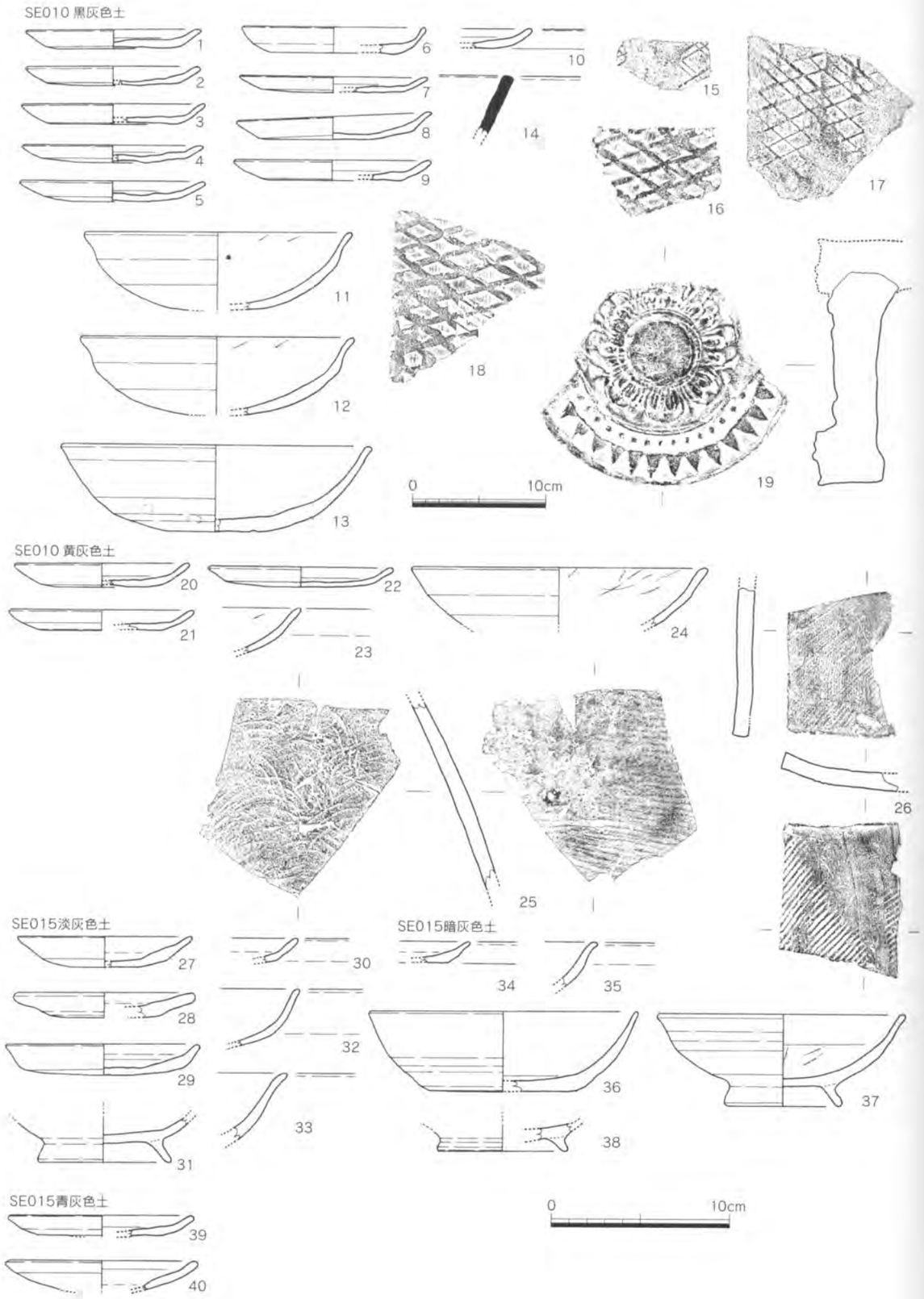


Fig.124　284SE010・015 出土遺物実測図（1/3、瓦は 1/4）

（4）出土遺物

井戸

284SE010 黒灰色土出土遺物（Fig.124）

土師器

小皿 a（1 ～ 10）　復元口径 9.8 ～ 11.0cm、器高 0.9 ～ 1.5cm、復元底径 7.4 ～ 8.6cm。6 以外底部切り離しは回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ調整。6 の底部切り離しは回転糸切りで、胎土に細かい雲母が含まれ、若干光沢がある。

丸底坏 a（11、12）　内面ミガキ b で、口縁部近くにコテ当て痕も残る。11 は復元口径 15.0cm。外面底部は回転ヘラ切り後ナデで、板状圧痕が残る。12 は復元口径 15.4cm。回転ヘラ切り後押し出しで、ナデ調整。

鉢（13）　復元口径 17.4cm、器高 4.8cm、復元底径 13.6cm。外面底部は回転ヘラ切り後粗いナデ調整で板状圧痕が残る。内外面上半部は回転ナデ、内面底部は回転ナデ後不定方向のナデ。色調は橙褐色を呈する。

須恵質土器

鉢（14）　焼成はやや不良で、一部回転ナデ調整が確認できる。淡灰白色を呈する。

瓦類

平瓦（15 ～ 18）　15 は二重の格子叩き。16・18 はやや太い斜格子叩き。17 はやや細い斜格子叩きを施す。

軒丸瓦（19）　中房は消滅して蓮子は全く残っていない。外区は中房より高く、そこに珠文と鋸歯文がある。

284SE010 黄灰色土出土遺物（Fig.124）

土師器

小皿 a（20 ～ 22）　復元口径 9.8 ～ 10.4cm、器高 1.2 ～ 1.35cm、復元底径 6.8 ～ 8.4cm。外面底部は回転ヘラ切り後ナデ調整し、板状圧痕が残る。色調は明灰白色などを呈する。

丸底坏（23、24）　23 は内面にコテ当て痕が残る。24 は復元口径 16.6cm、内面はミガキ b でコテ当て痕も残る。その他は回転ナデ。

灰釉陶器

甕（25）　外面は叩きのあと淡灰緑色釉を施釉し、一部厚く釉がかかる。内面は同心円の当て具で、釉がとても薄く点々と残る。胎土は 0.1cm 前後の砂粒や微細な黒灰色粒を含む。

瓦類

平瓦（26）　凹面は布目痕と糸切り痕があり、部分的にナデ消している。凸面は櫛目状の叩きで一部ナデ消す。胎土は精製され、淡橙灰白色を呈する。側面はヘラ切りである。

284SE015 淡灰色土出土遺物（Fig.124）

土師器

小皿 a（27 ～ 30）　復元口径 9.8 ～ 10.8cm。27 は底部ヘラ切り後ナデ、その他は回転ナデ。28 は全体的に厚い。底部はナデ調整に思えるが他は回転ナデ。淡橙色を呈する。29 は底部ヘラ切り後未調整で、板状圧痕が残る。

椀 c（31）　高台径 7.3cm。外面底部に板状圧痕が残る。色調は淡黄白色を呈する。

椀（32、33）　色調は淡茶褐色を呈する。32 は摩滅が目立つ。33 は内外面ヨコナデ。

284SE015 暗灰色土出土遺物（Fig.124）

土師器

小皿ａ（34）　体部はヨコナデが確認できるが、底部切り離しは不明。

椀（35）　摩滅が目立つが、内面にミガキのような痕跡が見える。

椀ａ（36）　復元口径 15.2cm、器高 4.5cm、復元底径 8.2cm。外面底部はヘラ切り後未調整。内面底部はナデ、その他は回転ナデ調整である。胎土は 0.2cm 以下の砂粒を多く含み、暗黄白色を呈する。

丸底坏ｃ（37）　復元口径 13.9cm、器高 5.15cm、高台径 6.6cm。内面下半はミガキｂで、外面下半は押し出し後未調整。焼成は良好で淡灰褐色を呈する。

黒色土器

椀ｃ（38）　復元高台径 7.3cm。

284SE015 青灰色土出土遺物（Fig.124）

土師器

小皿ａ（39、40）　内面底部ナデ調整、その他は回転ナデ。39 は復元口径 10.4cm、復元底径 7.0cm。底部切り離しはヘラ切り。40 は復元口径 10.8cm。

土坑

284SK001 茶褐色土出土遺物（Fig.125）

土師器

小皿ａ（1）　復元口径 10.4cm、器高 1.35cm、復元底径 7.2cm。外面底部は板状圧痕が残り、内面底部は回転ナデの後不定方向のナデ調整を行う。焼成良好で茶灰色を呈する。

椀（2）　口縁端部を僅かに外反させる。内外面回転ナデで、焼成は良好で淡白橙色を呈する。

284SK001 灰茶色土出土遺物（Fig.125）

土師器

小皿ａ（3、4）　3 は復元口径 10.2cm、器高 1.0cm、復元底径 8.8cm。底部はヘラ切りで内面底部ナデ、その他は回転ナデ調整である。色調は淡白茶灰色を呈する。4 は復元口径 10.2cm、復元底径 8.4cm。底部はヘラ切り後ナデ調整。色調は淡茶灰色を呈する。

小皿ｃ（5）　復元口径 11.8cm、器高 2.4cm、高台径 7.6cm。坏部中央を打ち掻いて径 1.5cm の円孔を穿つ。

椀ｃ（6）　復元口径 17.0cm。口縁部を僅かに外反させる。焼成不良で内外面とも摩滅が目立つ。外面の底部近くは回転ヘラケズリが確認できる。色調は淡白橙色を呈する。

器台（7）　外面には手づくねの指頭圧痕が残る。内部には径 1cm 程の空洞を作る。色調は橙灰色や黒灰色を呈する。

瓦類

平瓦（8）　凸面に「観世」の文字を施した文字瓦で、側面は半分だけヘラ切りで折っている。胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒や黒色粒を多く含む。焼成良好で灰色を呈する。

284SK001 暗灰色土出土遺物（Fig.125）

土師器

小皿ａ（9 ～ 12）　9 ～ 11 の復元口径は 9.8 ～ 10.0cm、器高 0.7 ～ 1.4cm、復元底径 7.0 ～ 7.3cm を測る。底部はヘラ切りで板状圧痕もみれる、色調は黄橙色を呈する。10 の底部には 0.7cm の孔が焼成前に穿たれている。12 はやや他より大きく復元口径 11.2cm、器高 1.6cm、復元底径 9.0cm を測る。底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。

坏ａ（13）　復元口径 13.4cm、器高 3.1cm、復元底径 10.8cm を測る。内面にミガキｂが施されているが、外面は上半部が回転ナデ、下半がヘラ切り後ナデ調整のみで押し出した痕跡がみられない。胎土には微細な雲母がやや多く含む。色調は茶灰色や灰色などを呈する。

丸底坏ａ（14）　復元口径 13.2cm、器高 3.9cm、復元底径 10.5cm を測る。内面にはミガキｂが明瞭に残り、口縁部近くにはコテ当て痕も残る。外面上半部は回転ナデ、下半は回転ヘラ切り後押し出しを行う。

越州窯系青磁

坏（15）　遺構と直接関係の時期の遺物ではないが、あまり出土例がないため報告する。内外面に茶褐色釉を薄く施釉し、内外面底部に目跡が残る。体部は僅かに内湾気味に立ち上がる。胎土は黒色粒を僅かに含み茶褐色を呈する。I 類。

瓦類

軒平瓦（16）　並列唐草文で、下外区は鋸歯文で、上外区は珠文である。

284SK001 黄灰色土出土遺物（Fig.125）

須恵器

坏ｃ（17）　真っ直ぐ外開きの体部で、低い高台を貼付する。還元やや不良で灰白色を呈する。外面底部には「浄川」の墨書文字が書かれている。

284SK001 黒灰色土出土遺物（Fig.125）

土師器

小皿ａ（18 ～ 24）　復元口径 9.4 ～ 10.7cm、器高 0.9 ～ 1.5cm、復元底径 5.0 ～ 8.1cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで、23 を除いて板状圧痕が残る。内面底部はほとんどナデ調整される。

坏ａ（25）　復元底径 9.0cm。底部は回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。内面底部はナデ調整。

椀ｃ（26、27）　26 は高台径 7.4cm、外面は回転ナデ調整。27 は復元高台径 7.6cm、丸みのある体部で内面底部以外回転ナデ調整。

丸底坏（28）　復元口径 13.2cm。内面ミガキｂ、外面中位に指頭圧痕が残る。底部はヘラ切り後未調整。

丸底坏ａ（29）　復元口径 14.0cm。内面下半はミガキｂでコテ当て痕も残る。外面は摩滅するが口縁部は強く回転ナデを行う。胎土には金雲母がみられ、色調は暗黄白色を呈する。

丸底坏ｃ（30）　復元高台径 6.4cm。内面はミガキｂで、外面下半に指頭圧痕がみられる。

黒色土器

椀ｃ（31）　復元高台径 8.4cm、内面にミガキｃが僅かに残る。

石製品

砥石（32）　両端を欠損しているようである。現存長 8.2cm、幅 4.9×3.65cm。4 面使用されている。

284SK001 淡青灰色土出土遺物（Fig.125）

須恵器

皿ｃ（33）　復元口径 18.4cm、器高 2.05cm、復元底径 14.6cm。外面底部は回転ヘラ切り後軽いナデ調整。内面底部は不定方向のナデ。色調は淡灰色で、体部外面は暗灰色を呈する。

土師器

椀（34）　復元口径 16.0cm。焼成不良で摩滅もあるが、外面下半は回転ヘラケズリされる。色調は淡茶灰色を呈する。

大皿ｃ（35）　復元口径 24.0cm、器高 3.95cm、復元高台径 16.2cm。内外面とも体部はミガキａが施され、内面底部は丁寧なナデ、外面底部は回転ナデ調整される。胎土には細かい金雲母が多く含ま

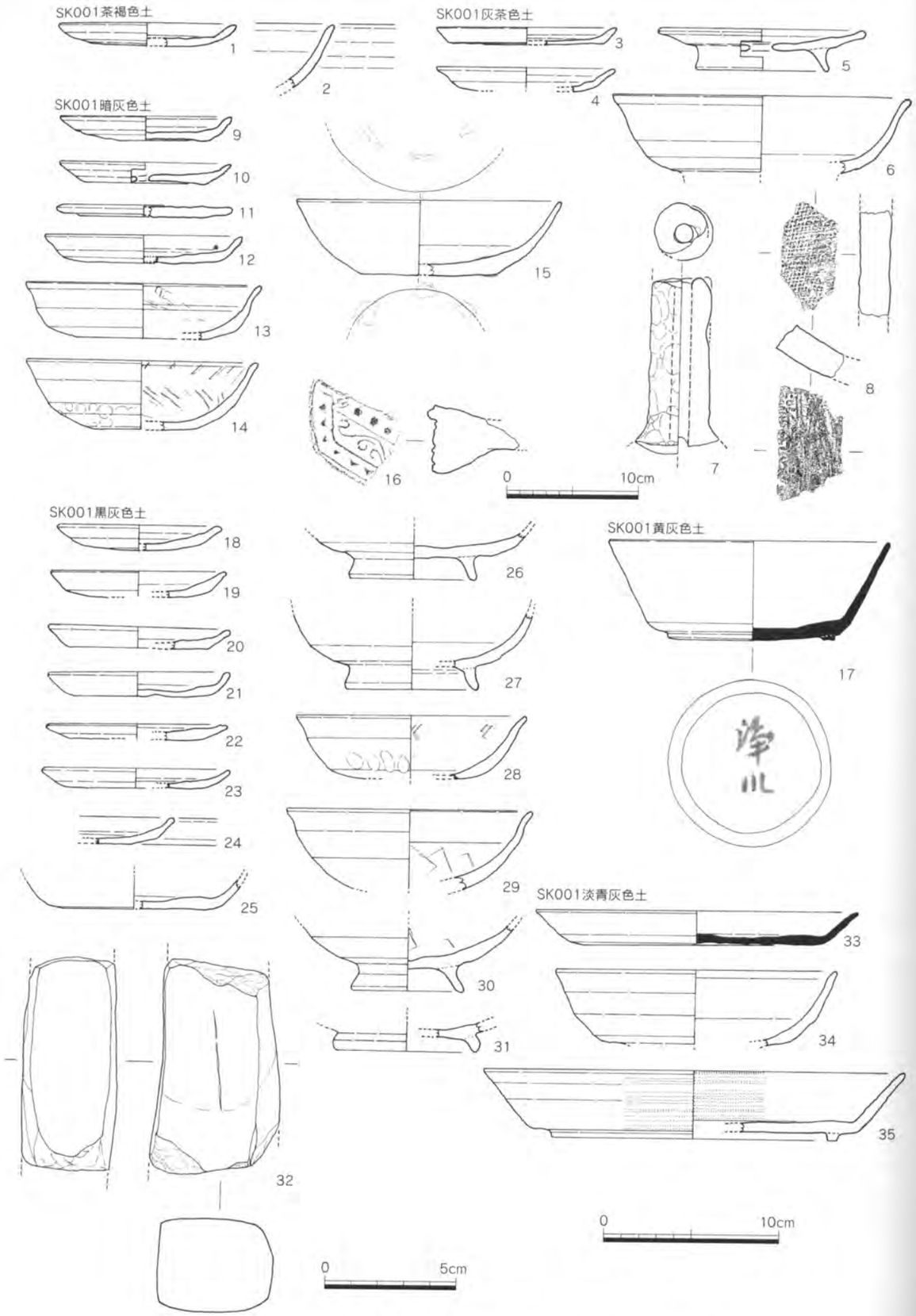


Fig.125　284SK001 出土遺物実測図（1/3、瓦は 1/4、32 は 1/2）

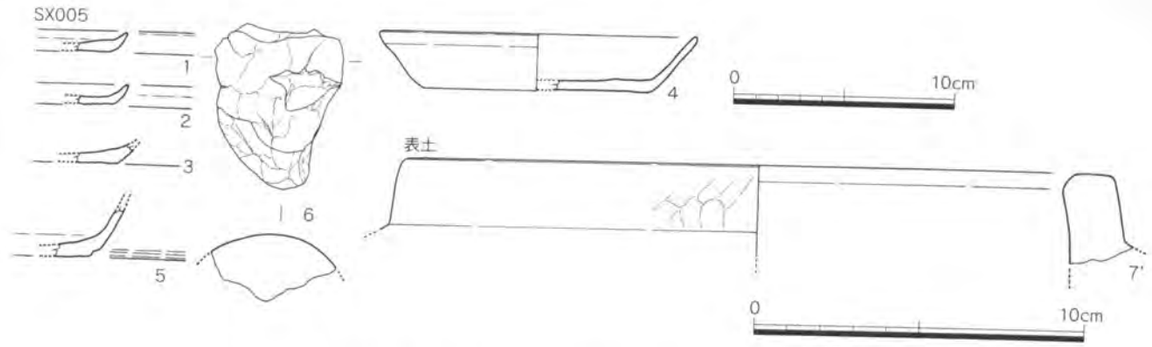


Fig.126　284X005・表土出土遺物（1/3、7 は 1/2）

れ、橙灰色を呈する。

その他の遺構

284SX005 出土遺物（Fig.126）

土師器

小皿 a（1 ～ 3）　1･2 の胎土は微細な白色砂粒と金雲母を含む。1 は器高 1.0cm。調整は摩滅し不明。2 は器高 0.95cm。底部切り離しは不明瞭だが、糸切りのように見える。3 は底部糸切り。

坏 a（4、5）　4 は復元口径 14.4cm、器高 2.6cm、復元底径 10.0cm。焼成不良で底部切り離しは糸切りのように見える。胎土は微細な白色砂粒を多く含み、金雲母も僅かに含む。5 は焼成不良で全体的に摩滅し調整不明。

土製品

鞴羽口（6）　外面はナデ調整され、被熱で淡灰色に変色する。内部は黒褐色で中心部は淡橙褐色を呈する。胎土は白色砂粒を多く含む。

表土出土遺物（Fig.126）

石製品

石鍋（7）　鍔の部分が残る口縁部の破片で、内外面ケズリ成形され、内面は斜め方向の細かい傷が多数見られる。滑石製。

(5) 小結

南隣の第 283 次調査では 13 世紀代の遺構や遺物が多く確認できたが、今回の調査では 284SX005 以外に 13 世紀代の遺構は全く確認できず、平安後期の井戸などの深い遺構しか残っていなかった。ピット類も少なかったことを考えると、平安・鎌倉時代の地形は現在より若干高かった可能性が十分考えられ、掘削が浅い遺構は後世の削平により消失したものと推測される。

また、調査区東端を南北に検出された 284SX005 は、南隣の 283SX020 と合わせて井上条坊案の左郭十坊路の推定ラインに位置する。詳細は第 283 次調査に記載しているが、条坊の道路を踏襲した痕跡と推測され、大宰府条坊を考える上で貴重な成果を得ることができた。

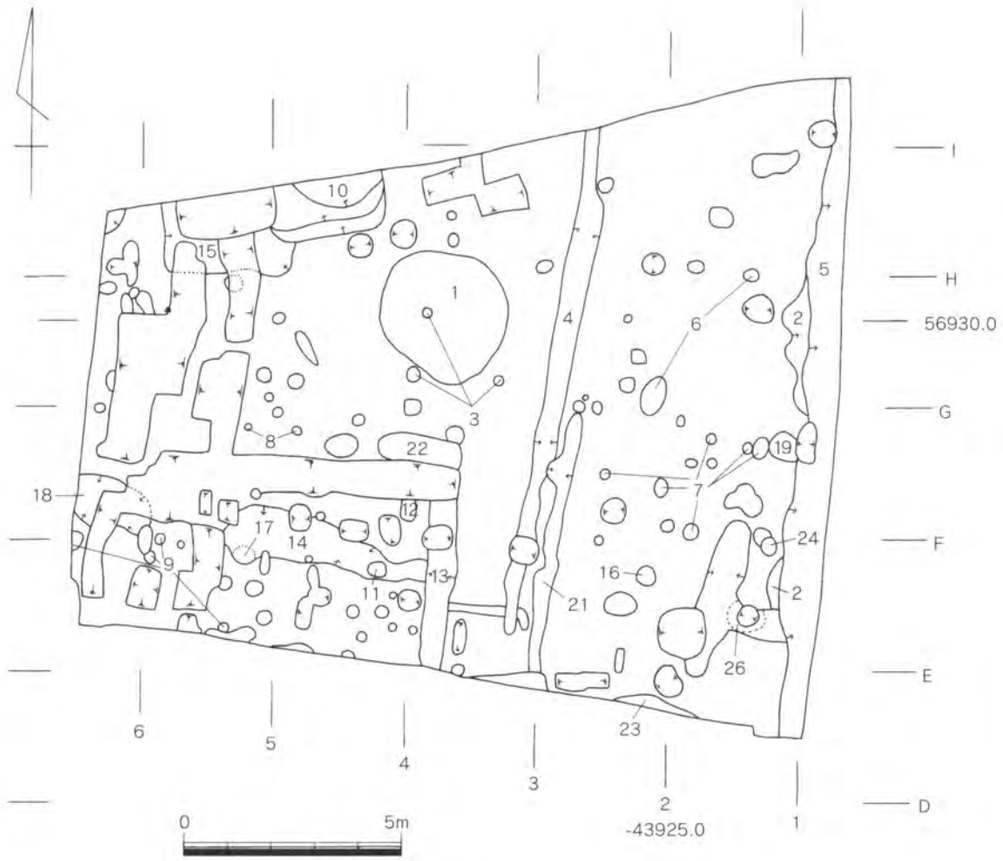


Fig.127　第 284 次調査遺構略測図（1/150）

Tab.15　大宰府条坊跡第 284 次調査　遺構一覧表

S- 番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	284SK001	井戸		11 世紀中頃前後	G3
2		窪み			G1・E1
3		ピット群		平安後期～	G3
4		溝		近代～	E～I2・3
5	284SX005	段落ち	茶色土　第 283 次調査の S-20	13 世紀以降	0 ライン
6		ピット群		近世～	G2・H1
7		ピット群			F1
8		ピット			F4・5
9		ピット群			E5・6
10	284SE010	井戸	S-15 → 10　未完掘	11 世紀中頃前後	H4
11		ピット			E4
12		ピット			F3
13		溝	暗灰色土　断面 U 字形	平安時代後期	EF3
14		溝	暗灰色土　S-14 → 13	奈良時代?	EF3～5
15	284SE015	井戸	S-15 → 10　未完掘	11 世紀前半～中頃	H5
16		ピット		平安時代	E2
17		ピット	S-14 の下		E5
18		土坑	茶褐色土	古代	F6
19		ピット	穴の中に礫		F1
21		溝		近現代	EF2
22		土坑			F3
23		土坑	第 283 次調査の S-63		D2
24		ピット			E1
26		土坑			E1

Tab.16-1　大宰府条坊跡第 284 次調査　出土遺物一覧表

S-1 茶褐色土

須恵器	蓋 3、坏、坏 c、甕、壺 × 甕、破片
土師器	蓋、小皿 a、坏 a、丸底坏、椀、椀 c、甕、破片
製塩土器	破片?
越州窯系青磁	椀：I-2 ア (1)
白磁	椀：II-1 (1)　　破片 (1)
瓦類	丸瓦 (無文)、平瓦 (格子叩、無文)、破片 (格子叩)、破片
石製品	石鍋

S-1 灰茶色土

須恵器	蓋 1、蓋 3、蓋 c、蓋 c3、坏、坏 a、坏 c、皿 a、甕、壺、壺 e、鉢 b、破片
土師器	小皿、小皿 a、小皿 c、皿 a、坏 a、坏 c、丸底坏?
	丸椀、椀 c、器台、甕
製塩土器	焼塩壺
黒色土器 A	破片
越州窯系青磁	椀：I (1)　　破片 I (1)、輪花 (1)
白磁	椀：II-1 (1)
瓦類	丸瓦 (格子叩、無文)、平瓦 (格子叩、縄目叩、無文)、破片
石製品	剥片 (安山岩)
土製品	鞴羽口?

S-1 暗灰色土

須恵器	蓋 c、坏、坏 c、皿、高坏 b
土師器	小皿 a、坏、丸底坏 a、椀、椀 c、甕、坏 a
黒色土器 A	椀 c
黒色土器 B	椀
越州窯系青磁	坏：I (1)
白磁	椀：XI-1 (1)
瓦類	丸瓦 (無文)、平瓦 (格子叩、無文)、軒平瓦
石製品	丸石

S-1 黄灰色土

須恵器	坏 c、鉢?
土師器	椀 c
瓦類	丸瓦 (無文)、破片

S-1 黒灰色土

須恵器	蓋 3、坏、坏 c、甕、破片
土師器	小皿 a、坏、坏 a、丸底坏 a、丸底坏 c、丸底坏、椀 c、甕、破片
黒色土器 A	破片
黒色土器 B	椀 c、破片
越州窯系青磁	椀：I-2 (1)
白磁	皿：XI-1 (1)　　破片 (1)
瓦類	丸瓦 (格子叩、無文)、平瓦 (格子叩、無文)
石製品	砥石

S-1 淡青灰色土

須恵器	皿 a、甕
土師器	坏 a、椀、大皿 c、甕
白磁	破片 (1)
瓦類	丸瓦 (無文)、平瓦 (格子叩、無文)

S-2

須恵器	坏、坏 a、破片
土師器	坏、椀 c、小皿 × 坏 a
白磁	破片 (1)
瓦類	破片
土製品	鞴羽口?

S-3

土師器	小皿 a (仆)、坏、坏 a (仆)、破片
白磁	椀：IV (1)　　破片 (1)

S-4

須恵器	甕
土師器	坏
瓦類	平瓦 (格子叩)、燻し瓦、破片
肥前系陶磁器	破片
白磁	椀：IV (1)　　破片 (2)
土製品	土塊
その他	ガラス破片

S-5

須恵器	蓋 3、破片
土師器	小皿 a (仆)、坏、坏 a、坏 a× 小皿 a、椀 c、破片
越州窯系青磁	椀：I (1)
龍泉窯系青磁	椀：II-b (1)　　破片：I (3)、III (2)、IV (1)
白磁	椀：II (1)、IV (1)、VIII (2)、破片 (2)
	白磁破片 (6)、広東系 (2)
瓦類	丸瓦 (格子叩)、平瓦 (格子叩)、破片
石製品	丸石
金属製品	鉱滓
土製品	鞴羽口

S-8

土師器	破片
瓦類	丸瓦 (無文)

S-9

土師器	小皿 a× 坏 a (仆)、坏、甕、破片
瓦類	破片 (格子叩)

S-10 黒灰色土

須恵器	蓋 3、坏、甕、破片
土師器	小皿 a、坏、丸底坏 a、器台、鉢、破片
黒色土器 A	椀
須恵質土器	鉢
越州窯系青磁	椀：I-2 ア (1)
瓦類	丸瓦 (無文)、軒丸瓦、平瓦 (格子叩、無文)

S-10 黄灰色土

須恵器	蓋?、甕、破片
土師器	小皿 a、椀 c、丸底坏、破片
黒色土器 B	破片
瓦類	丸瓦 (無文)、平瓦 (格子叩、縄目叩、無文、平行)
灰釉陶器	甕

S-11

土師器	坏、小皿 a× 坏 a、破片
龍泉窯系青磁	椀：I-2 (1)
白磁	椀：IV (1)　　破片 (2)

S-12

土師器	破片

S-13

須恵器	坏
土師器	坏、破片
白磁	椀：V-2b (1)　　破片 (1)
瓦類	破片

S-14

須恵器	蓋 3、坏、坏 c、高坏、甕、壺
土師器	坏 a、坏 c、椀 c、甕、破片
白磁	破片 (1)
瓦類	丸瓦 (無文)、平瓦 (格子叩、縄目叩、無文)

S-15 淡灰色土

須恵器	蓋 3、坏 c、甕、破片
土師器	小皿 a、丸底坏 a、椀 c、椀、甕、破片
黒色土器 B	破片
越州窯系青磁	破片 I (1)
瓦類	丸瓦 (無文)、平瓦 (格子叩、無文)

S-15 暗灰色土

須恵器	蓋 3、坏、坏 c、甕、壺?、破片
土師器	小皿 a、坏、椀、椀 c、大椀、丸底坏 c、破片
黒色土器 A	破片
黒色土器 B	椀 c
越州窯系青磁	椀：I-2 ア (1)
瓦類	丸瓦 (格子叩、無文)、平瓦 (格子叩、無文)

S-15 青灰色土

土師器	小皿 a、坏、丸底坏?
白磁	破片 (1)
瓦類	丸瓦 (格子叩、無文)、平瓦 (無文)、破片

S-16

須恵器	坏
土師器	坏、破片
白磁	皿破片 (1)
瓦類	破片 (無文)

S-17

土師器	破片

S-18

須恵器	蓋 3、壺?、破片
土師器	坏 a、破片
瓦類	丸瓦 (無文)、平瓦 (無文)、燻し瓦、破片

S-19

土師器	小皿 a、坏 a (仆)、甕、破片
黒色土器 A	椀 c
白磁	破片 (1)
瓦類	破片 (格子叩)

Tab.16-2　大宰府条坊跡第 284 次調査　出土遺物一覧表

S-6

土師器	坏
瓦類	丸瓦（格子叩）
土師質土器	火皿

S-7

須恵器	高坏 b
土師器	小皿 a× 坏 a（仆）、甕、破片
国産陶器	破片

S-23

土師器	坏、小皿 a× 坏 a、破片

S-24

須恵器	破片
土師器	坏
土製品	焼土塊

S-26

須恵器	壺？
土師器	小皿 a、坏、坏 a× 小皿 a（仆）、甕
黒色土器 A	椀 c
白磁	椀：V-4（1）
同安窯系青磁	椀：III（2）
瓦類	平瓦（格子叩）

S-21

瓦類	丸瓦（格子叩）、平瓦（格子叩、無文）
肥前系陶磁器	椀、皿
国産陶器	土瓶、破片
龍泉窯系青磁	椀 × 皿 III（1）

S-22

須恵器	蓋 3、坏、破片
瓦類	破片（格子叩）
白磁	破片（1）
土製品	焼土塊

明茶色土

須恵器	坏 c、破片
土師器	坏 a、破片
黒色土器 A	破片
瓦類	熨し瓦
瓦質土器	破片
国産陶器	破片
白磁	破片（1）
龍泉窯系青磁	椀：I-4（1）

表土

須恵器	坏 c
土師器	坏、坏 a、坏 a（仆）、椀、甕、破片
瓦類	平瓦（格子叩、縄目叩）、破片（無文）、熨し瓦
石製品	石鍋

6. 山ノ井遺跡第 1 次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市観世音寺 5 丁目 881 番にあり、観世音寺の北約 400m の新山ノ井池の北岸に位置する。西側は国史跡観世音寺及び子院群に接する。

遺跡は南側に開く馬蹄形の丘陵地であり、中央に低平な窪地を有す。標高は谷底で 56m、丘陵上部では 66m を測る。

平成 22 年に開発に伴う事前協議が地権者からあり、事前の調査（踏査）により対象地の谷間で土器片と中世墓に特有の円礫状の緑色片岩が見られたため、重機による予備調査を実施した。調査では丘陵上部から谷底までの間に 4 つの試掘坑を設定し地下の状況を観察したところ、谷底の 3 トレンチにおいて地下約 1m で鉄釘を伴った墓坑を検出した。平成 23 年 8 月に実施した再度の予備調査では、同じトレンチ 2 および 3 を開けて精査したところ、3 トレンチにて 3 つの墓坑の可能性のある遺構が確認された。

(2) 基本層位

調査対象地の南西側に設定した幅 1.2m、長さ 9m の試掘坑で、西側では深さ約 1m で鉄釘を伴った墓坑 1ST002 と不明遺構 1SX003 を検出した。東側半分は地山面の深さを探るため地表下 1.6m まで下げたが、ここでも釘を伴った墓坑 1ST001 を検出している。

トレンチ内での基本的な層序は近現代の遺物を含む表土層の下に、山が崩壊したような花崗岩風化土による 2 次層の黄白色層があり、その下に鎌倉期頃の中国産陶器壺などを持つ厚さ 40cm 以上の厚い灰茶色土層がある。その下に全体を覆う明褐色土があり、その下面に 1ST001 や 1ST002 が検出された。遺構は遺物を包含する茶灰色土層を基盤とし、地表下 1.4 から 1.6m で花崗岩風化土の基盤層である淡明黄橙色土層に至る。

(3) 検出遺構

墳墓

1ST001（Fig.130）

3 トレンチの東側で確認された幅 0.6m、長さ 1.4m 以上の長方形を呈す遺構で、内部から 2 個以上の酸化した鉄釘が確認され、木棺墓と考えられる遺構である。埋没土は淡灰褐色を呈す。長軸はほぼ南北の正方位に合う。

1ST002（Fig.130）

3 トレンチの西側で確認された幅 0.7m、長さ 1.3m 以上の長方形を呈す遺構で、内部から酸化した鉄釘が確認され、木棺墓と考えられる遺構である。埋没土は淡灰褐色を呈す。長軸は 1ST001 と同様にほぼ南北の正方位を採る。遺構上面には鉄塊のほか、緑色片岩の円礫と平瓦片があり、墓坑北東側には長さ 0.6m、幅 0.3m に亘って炭が集積している箇所がある。

その他の遺構

1SX003（Fig.130）

3 トレンチの西側で確認された幅 1m、長さ 1m 以上の隅丸長方形を呈す遺構で、埋没土は淡灰褐色

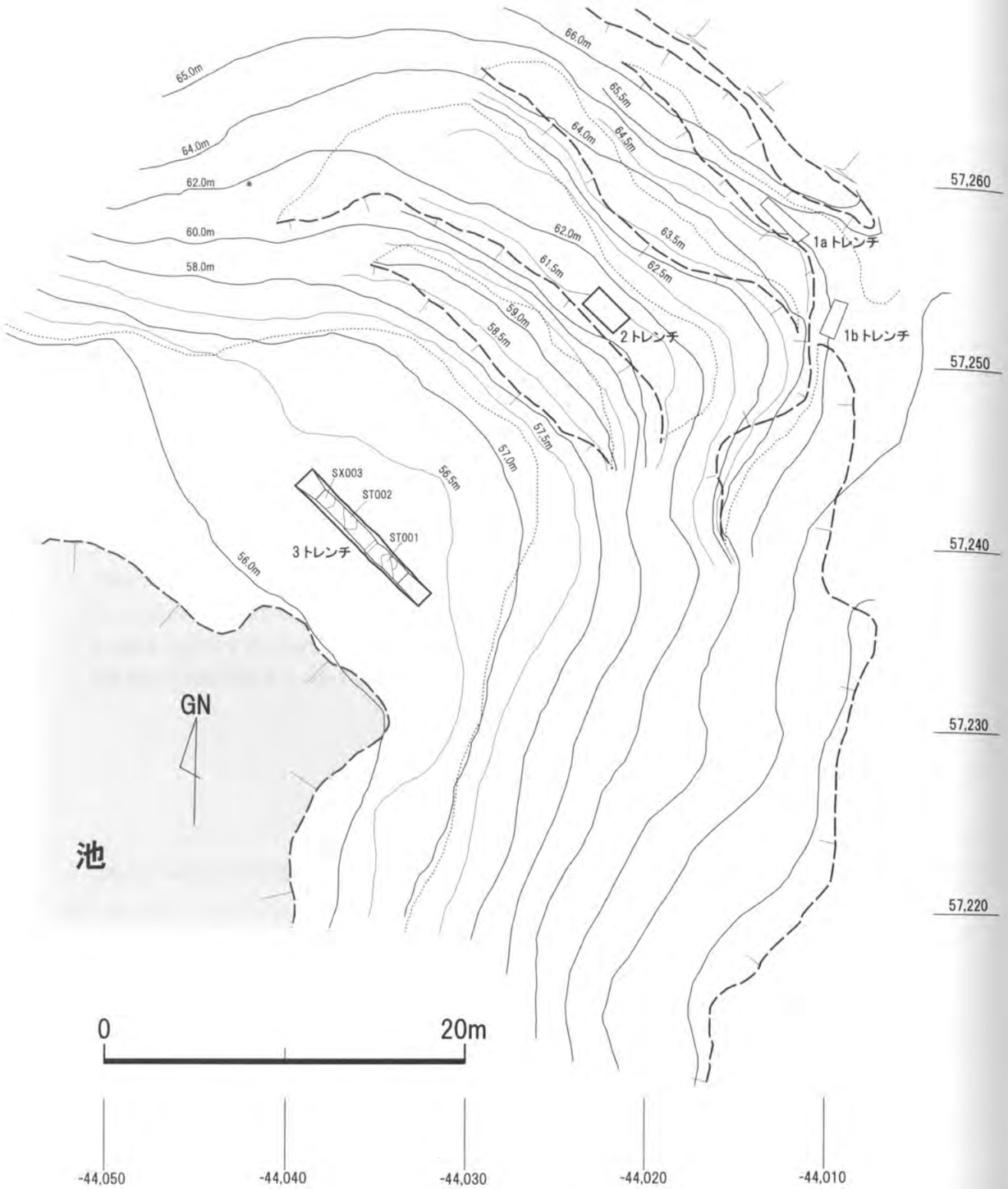


Fig.128　山ノ井遺跡第１次調査全体図（1/300）

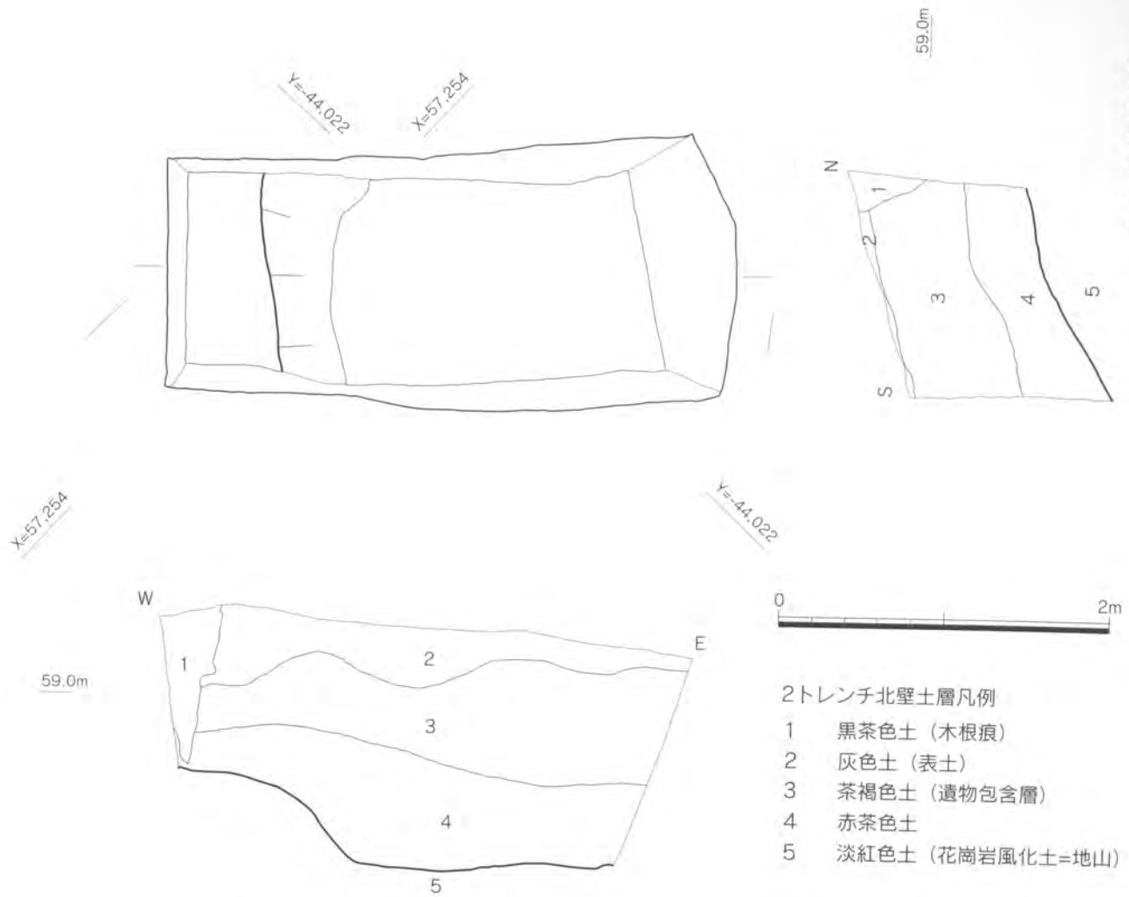


Fig.129　山ノ井遺跡第１次調査２トレンチ実測図（1/40）

を呈す。遺構上面に緑色片岩の円礫が乗っている。1ST002 同様に南北に長い墓坑である可能性もある。

(4) 出土遺物

２トレンチ出土遺物（Fig.131）

土師器

小皿ａ（1）　やや肉厚の体部で、摩耗のため調整などは不明。焼成は良好で淡橙白色を呈する。底が平坦であり糸きり段階の製品か。

須恵器

甕（2）　胴部の小片で、胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で硬質。外面に擬格子目のタタキがあり、内面には同心円の充て具痕跡がある。外面は淡灰色、内面は黒灰色を呈する。厚みから小型の部類に属すものと考えられる。

石類

円礫（3、4）　緑色片岩の自然石で扁平な円礫状を呈す。観世音寺周辺の丘陵地、原遺跡（天台系山岳寺院）、宝満山遺跡群などで中世墓の標石として使用されている。石材は至近には無く、太宰府側と

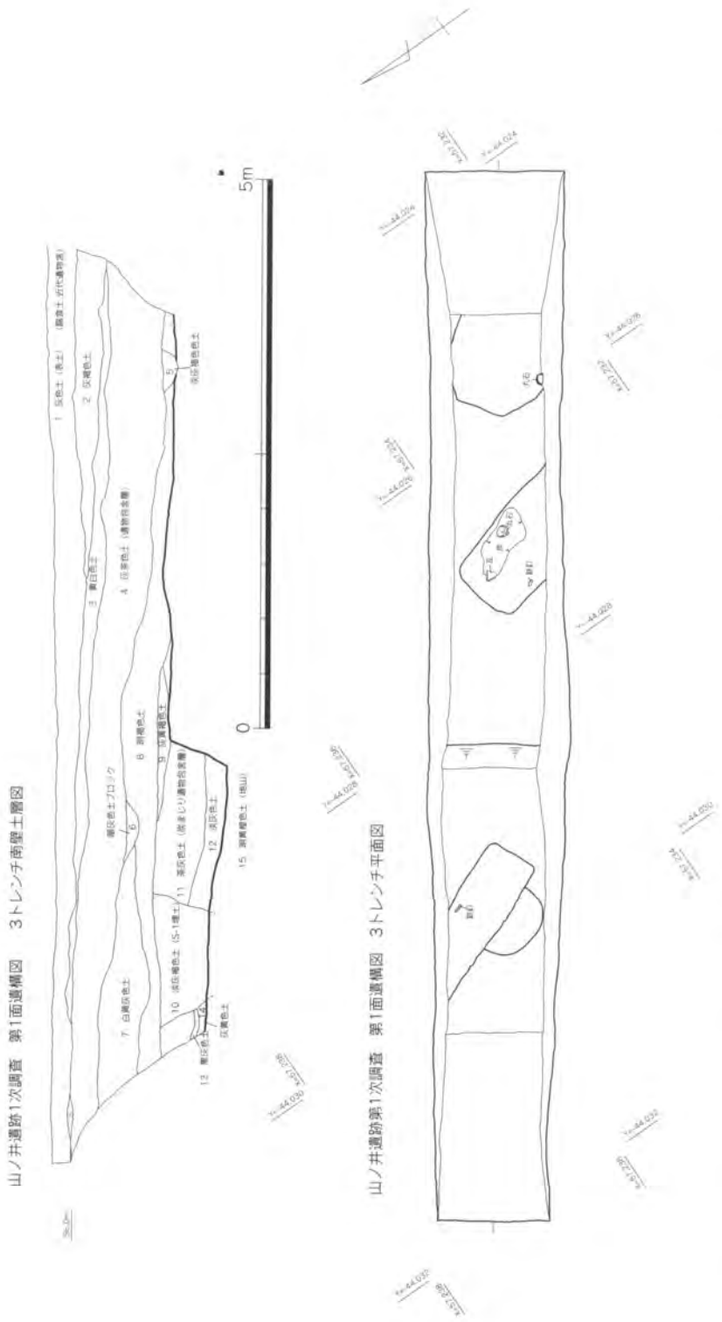


Fig.130　山ノ井遺跡第１次調査３トレンチ実測図（1/60）

四王寺山の対面にある糟屋側から調達されたものと考えられる。

３トレンチ表土出土遺物（Fig.131）

龍泉窯系青磁

坏 III-1a（5）　透明感のある青緑の釉が厚くほどこされたもので、体部の下位が屈曲し、高台は先細りする形状を呈す。

３トレンチ明褐色土出土遺物（Fig.131）

中国陶器

壷（6）　胴部下半の部位で、内面にロクロ目が顕著に見られる。胎土は淡赤褐色で、ややざらざらで褐色粒が多少含まれるＢ系のものである。

３トレンチ灰茶色土出土遺物（Fig.131）

須恵器

坏ｃ（7,8）　屈曲する体部と底部の境近くに低い幅のある台形を呈す高台を持つ。焼成は硬質で淡灰色を呈す。大宰府土器編年 III 期の８世紀中頃の所産か。

土師質土器

すり鉢（9）　淡黄灰色のしまりのない酸化焼成の胎土を持ち、内面縦方向に擦り目がわずかに残る。13 世紀後半以降の所産。

石類

円礫（10 ～ 14）緑色片岩の自然石で扁平な円礫

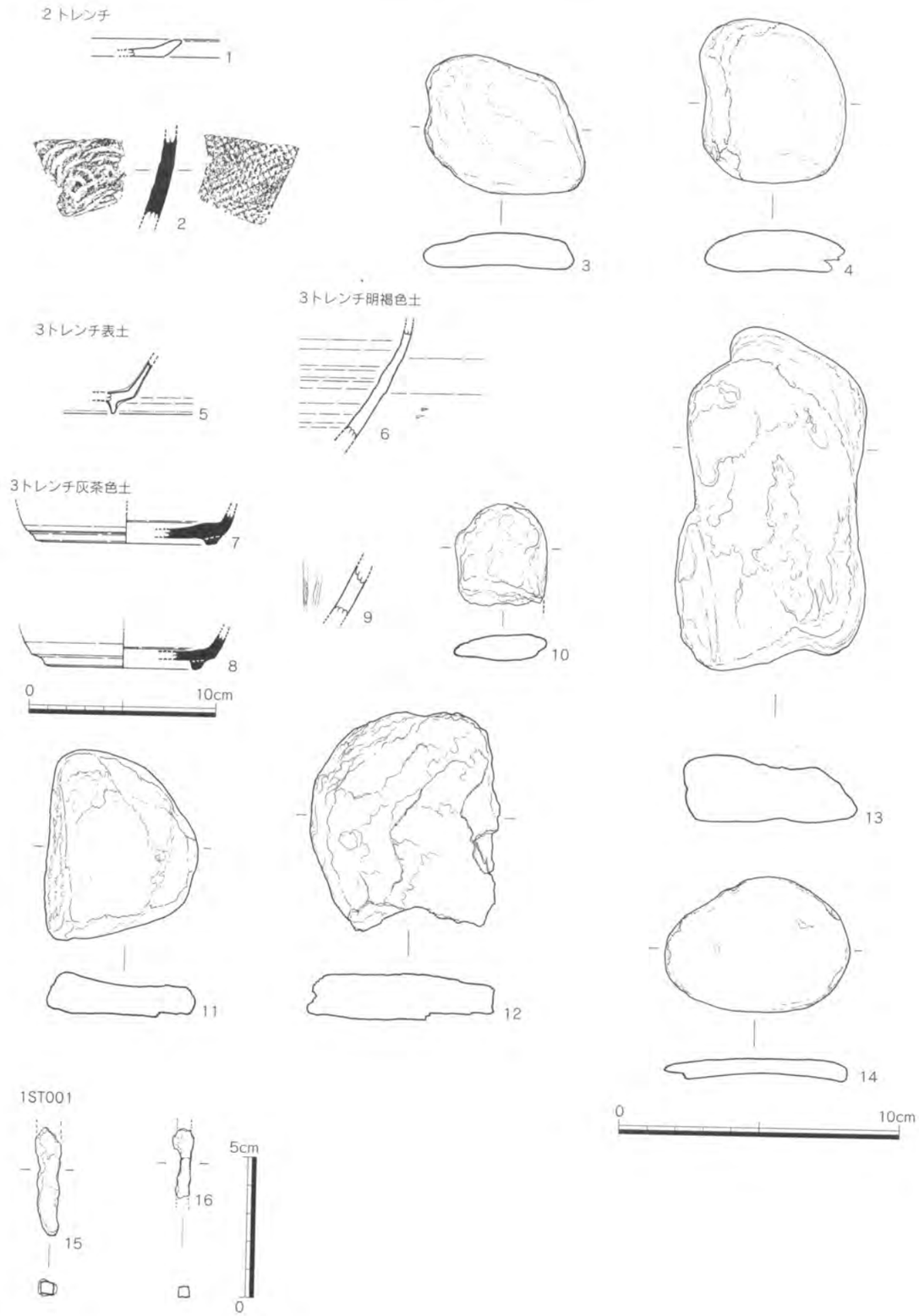


Fig.131　山ノ井遺跡第１次調査出土遺物実測図（1/2、1/3）

状を呈す。特に人為的な加工が認められるわけではないが、12 は下半が破砕されたような状況で欠損する。

墓

1ST001 出土遺物（Fig.131）

金属製品

鉄釘（15、16）　15 は長さ 3.9cm 以上で幅は 0.9 ～ 0.6cm の大ききのもので、先端部になるものか。錆が進行し膨張気味である。16 は長さ 2.5cm 以上で幅は 0.4cm を測る。

（5）小結

本調査地は南に開いた狭小な谷とそれを取り囲む丘陵からなるいわゆる「谷地」であり、その中央の平地に於いて木棺墓群が発見された。

木棺墓は中国華南産陶器壺を有す土層である灰茶色土層に覆われており、太宰府地域の中世墓の付帯要素である緑色片岩の円礫を持ち、火葬の段階以前であることから鎌倉時代後期までに形成された遺構と判断される。

中世観世音寺の周辺ではこのような「谷地」が鎌倉時代に至って活発に土地利用が進んだことが発掘調査によって明確になっており、推定金光寺跡、安養院跡、崇福寺心宗庵跡例などでは、谷地に主体施設としての建物群、その後背丘陵にその主体者が営む奥つ城としての墳墓群が発見され、一つの定型化した遺跡構造を持っている。

今回の山ノ井遺跡での発掘調査では丘陵裾部において中世墓が確認された。その墳墓には観世音寺子院群周辺の中世墓に特有の円礫状の緑色片岩が伴っていた。円礫状の緑色片岩の分布を地表観察で確認したところ字「山ノ井」の丘陵全体に広がっており（Fig.132）、既に史跡指定された西側隣地の丘陵地と同様の遺跡環境であることが判明した。

本遺跡の「谷地」の南側の前面は、現在では日吉神社南東側の観世音寺区の小集落になっているが、『大野城太宰府旧蹟全図北』（註 1）ではこの箇所に観世三名水の一つである「五色ノ井」と「エソダイリ」「ヤクシドウ」と並んで山裾に「ザスアト」と記載されている（Fig.133）。この「谷地」の墓地経営の主体者が観世音寺座主であった可能性が指摘され、観世音寺子院群中に置いても重要な位置を占める場所と言える。

本遺跡のある山ノ井の丘陵地は観世音寺子院群の中では北東を占め、禅宗寺院である横岳山崇福寺との寺域境の要にあり、さらに観世音寺座主との関連が指摘される。このことから本来は史跡指定地に含まれるべき場所と考えられる。県道側から見た史跡観世音寺及び子院群とそれに連なる特別史跡大野城跡をつなぐ重要な緑地帯としての存在価値を合わせて考える時、保全に努めるべき丘陵地と考えられる。

註（1）『大野城太宰府旧蹟全図北』の画像掲載については原史料所有者の木村敏美氏にご配慮を頂いた。記して感謝いたします。

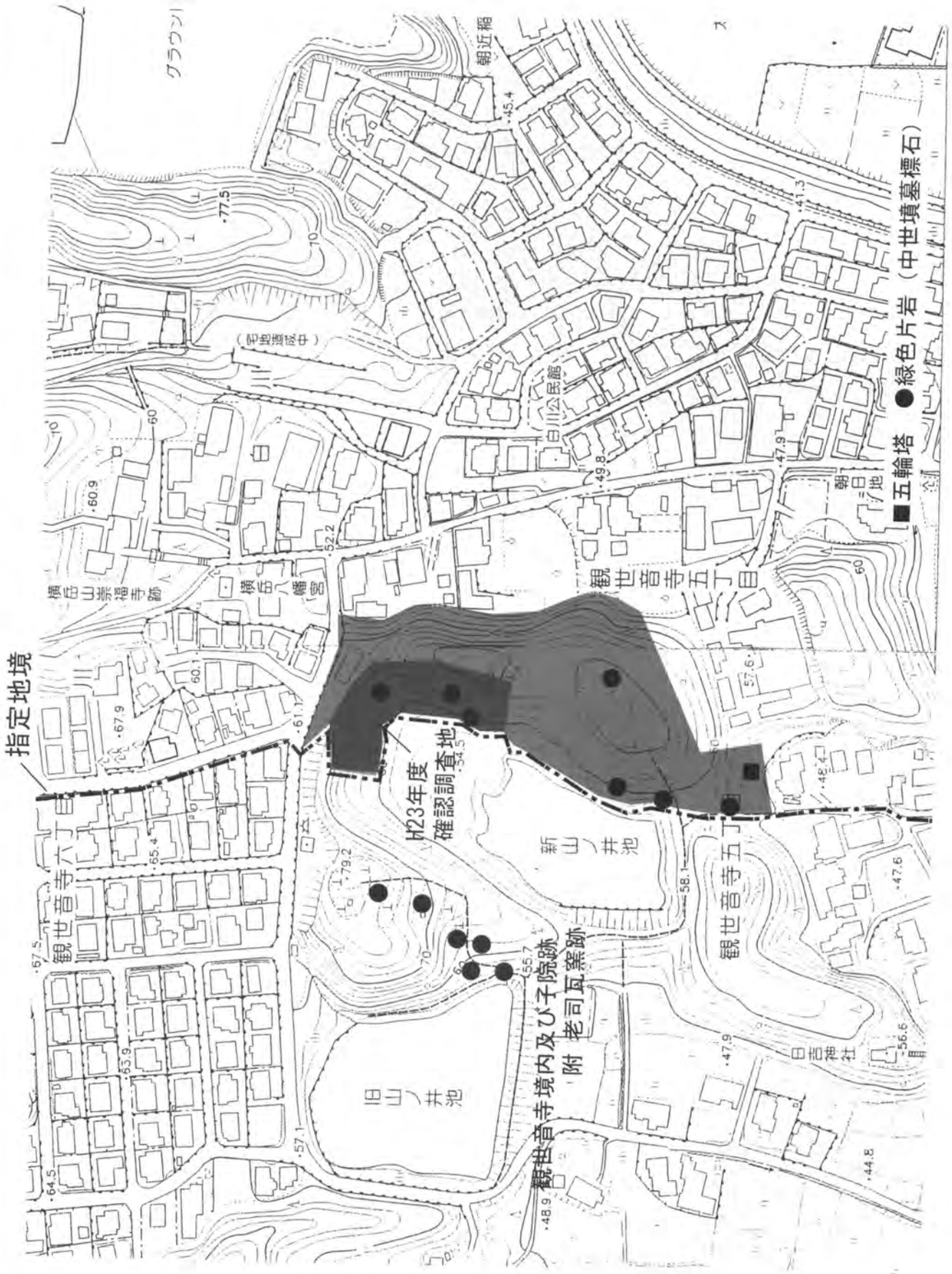


Fig.132　山ノ井丘陵の遺物分布図

1. 山ノ井遺跡調査地点位置図

2. 『大野城太宰府旧蹟全図北』の観世音寺

3. 「ザスノアト」と山ノ井

Fig.133 山ノ井遺跡の地理的環境

Tab.17-1 山ノ井遺跡第1次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	地区
1	1ST001	木棺墓	3トレンチ
2	1ST002	木棺墓	3トレンチ
3	1SX003	木棺墓状遺構	3トレンチ

Tab.17-2 山ノ井遺跡第1次調査 出土遺物一覧表

2トレンチ

須恵器	甕
土師器	小皿a
石類	円礫（緑色片岩）(2)

3トレンチ明褐色土

須恵器	坏c2
土師器	供膳具
中国陶器	壺B
石類	円礫（緑色片岩）(2)

3トレンチ赤茶色土

瓦類	片?（瓦質）(1)

3トレンチ灰茶色土

須恵器	坏c2
土師器	供膳具
土師質土器	すり鉢
石類	円礫（緑色片岩）(5)

3トレンチ表土

龍泉窯系青磁	坏III-1a

S-1

金属製品	鉄釘 (2)

Ⅴ．特論

大宰府条坊跡第 210-2 次調査出土五輪塔空風輪について

髙橋　学・西野元勝

はじめに

今回報告した条坊跡 210-2 次調査（以下、条 210-2 と略す）において、現地表面に集積されていた石塔群を 210-2SX030 としてとりあげた。本文中に遺構としての概要は記しているため、細かい説明は繰り返さないが、そのなかで特に注目されるものとして、五輪塔の空風輪 2 点をあげたい。この五輪塔の残欠である空風輪に注目する理由としては、その大きさと見事な造形があげられる。考察の手続きとしては、五輪塔の観察の上から導くことができる情報をまず抜き出し、それらを手がかりとしてその位置づけを考えていきたい。

五輪塔の名称としては、現地で集積墓群に向かって左側（西側）に位置するものを No.1 として、右側（東側）に位置するものを No.2 として記述していく。

(1) 各塔の概要

石製品（Fig.135、Pla.5-2、6-1・2）

五輪塔(1､2)　No.1 と No.2 ともにわずかに欠けるところはあるが､完形に近い五輪塔空風輪である。空風輪は分割できるものではなく、一体で削りだしている。ともに表面は時間の経過による風化が進行している。表面に梵字が刻まれていない、いわゆる無種子の五輪塔である。

No.1 は、頂部と枘の一部を欠損し、残存高 44.5 ㎝を測る。枘を除いた高さは 41.3cm。石材は、薄いピンク色の粒子を含む花崗岩製。(註 1) 椀状の風輪に、滴状の空輪が乗る。空輪の最大幅 31.0 ㎝に対し、風輪の幅は 35.0 ㎝と風輪がやや広い。枘は円柱形で、高さ 3.5 ㎝であり、空風輪の高さに対して低い。空輪の底面も内輪側にえぐっており、古相を呈す。空輪の形状に注目すると、明瞭な肩をもたずにきれいな円弧を描いている。これらの特徴から、13 世紀末～ 14 世紀初頭のものと考えられる。

No.2 は、頂部と枘の下部に一部欠損し、残存高 45.3 ㎝を測る。枘を除いた高さは 40.2cm。石材は微細な黒色粒子を多く含む花崗岩製。(註 2) 椀状の風輪部に、滴状の空輪部が乗る。空輪の最大幅は 30.0 ㎝、風輪の最大幅は 32 ｃｍ。空輪は 1 に比べてやや肩が張り出す。風輪上部には傾斜がつき、空輪と風輪の間の溝はしっかりと彫られている。枘は円柱状で、高さ 5 ㎝と No. 1 に比べて高い。形態的な特徴から判断すると、No.2 は No.1 の空風輪を真似て製作した可能性がある。14 世紀前半のものと考えられる。

(2) 形状・法量からの位置づけ

条 210-2 出土の五輪塔空風輪は､どちらも太宰府市域の石塔を知る上で重要な資料である。そのため、ここではその位置づけを形状・規模の面から検討する。

No.1 は、近畿地方を中心に分布する所謂「中央形式」といわれるものである。石材も兵庫県の御影石の可能性があり、近畿からもたらされた可能性が指摘できる。九州で 14 世紀以前の御影石製大型五輪塔としては、五大種子の四転が配されているなど違いがあるが、長崎県平戸市所在の神応寺跡五輪塔（大渡長者の墓）の 2 基が知られるのみである。(Fig.136 左画像参照) そのため、No. 1 は九州では

条 210-2 次 SX030 石塔 No.1　　条 210-2 次 SX030 石塔 No.2

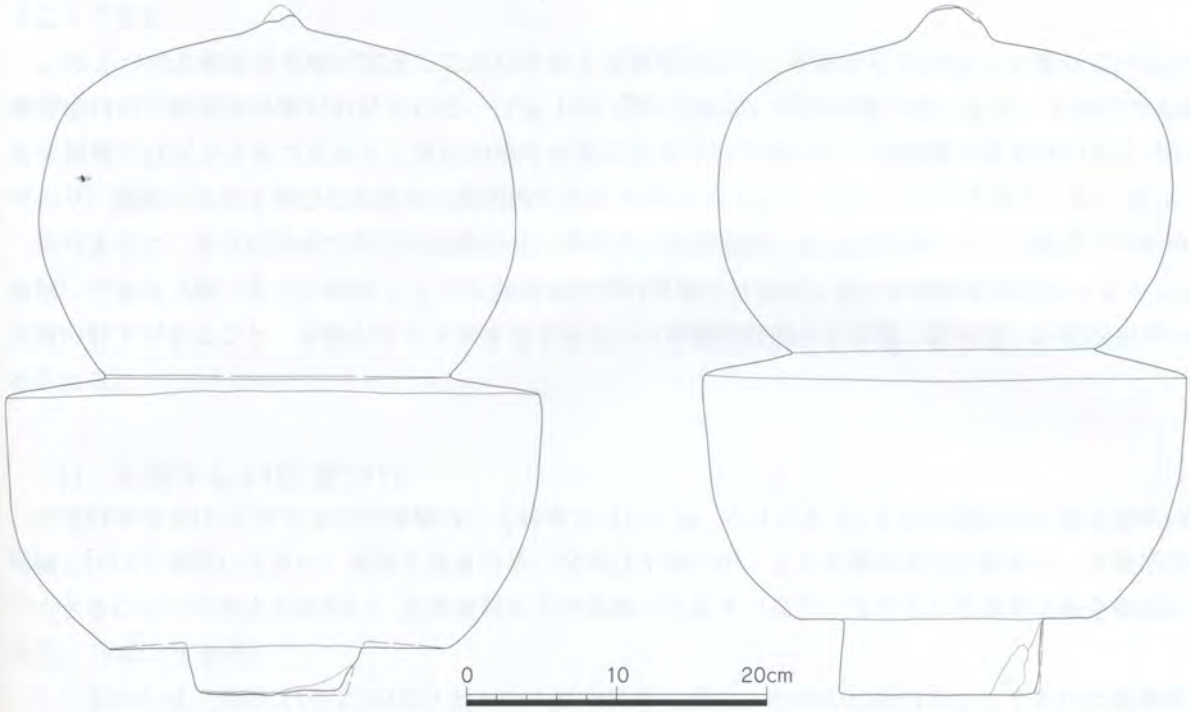


Fig.135 条坊 210-2 次 SX030 出土石塔実測図（S=1/5）（西野作図）

長崎県平戸市　神応寺跡五輪塔（西野撮影）

福岡県太宰府市
戒壇院境内五輪塔（西野撮影）

Fig.136 五輪塔画像

数少ない御影石製大型五輪塔であるといえる。

No.2 は、石材が花崗岩製のため、凝灰岩製や砂岩製に比較すると、在地で製作された可能性が高いと考えられる。No.2 の特徴としては、風輪上部に傾斜がつき、空輪と風輪の間の溝が深く彫られていることである。

この 2 つの五輪塔空風輪と関連して注目される五輪塔として、現場から 350m しか離れていない戒壇院境内の五輪塔空風輪があげられる。(Fig.136 右の五輪塔) 風化が進んでいるが、花崗岩である。表面観察ではピンク色ではなく、黒色の粒子が混じる花崗岩であった。空風輪の高さはおよそ 40cm であり、風輪の丸みを帯びた形状から時期的には条 210-2 の No.1 に近いものと考えている。(註 3)

参考までに、太宰府市域で最古の五輪塔は、京都市北村美術館にある伝宝満山出土五輪塔 (平安時代後期) である (狭川真一 1998)。この五輪塔は太宰府市域では産出しない阿蘇熔結凝灰岩であること、火輪の軒下が反ること、水輪がナツメ形を呈するという形態的特徴から所謂「肥後型」の構成要素が認められる。

(3) 規模からの位置づけ

太宰府条坊 210-2 次出土の空風輪は、1 は高さ 41.3 ㎝、2 は高さ 40.2 ㎝と周辺の小型五輪塔の空風輪と比べて格段に大きい。部材であるため、全高は不明だが、他の五輪塔との比較から、五輪塔全体の大きさについて考えてみたい。各種資料から空風輪の大きさ (高さ) を主として基準に表を作成してみた。(Tab.18 参照)

この表からは、条坊 210-2SX030 出土の大型空風輪 2 基は、前述の比較対象としてあげた長崎県平戸市岩上町所在の神応寺跡五輪塔の数値に近いことがわかった。空風輪の大きさでの比較ではあるが、塔長の比率から考えると、最低でもこの五輪塔の塔長は、160cm 程度はあったと思われる。空風輪が多少欠損していることから、本来 42cm 程度あったと仮定すれば、塔長 180cm 程度に復元できる。御霊神社、トーボージのデータを元に考えると、あながち外れてはいないだろう。塔長 160cm と仮定しても、現在確認されている福岡県内の五輪塔では最大級の大きさになる。これより大きいものは県内では北九州市大興禅寺に所在する五輪塔である。地輪を欠いているが、無種子の大型品で 7 尺塔に復元可能という。花崗岩製で、造営時期は 14 世紀前半。同所にはほかにも同規模の五輪塔の残欠があるため複数の石塔があったことがわかっている。なお大興禅寺は律宗系寺院である。(註 4)

(4) 成果と課題

ここまでわかってきたこととして、条 210-2 次で出土した五輪塔空風輪の特徴は以下の通りである。

1. 石材は花崗岩である。(搬入品の可能性が高いピンク色のものと、黒色粒子が混じるものにわかれる)
2. 無銘無種子である
3. 大きさの比較では県内でも最大級。九州一円でも 30 番内に入る。
4. 単独ではなく複数出土している。(註 5)
5. 戒壇院境内五輪塔に同じタイプの火輪、地輪、水輪が確認できる。(註 6)

これらの情報をふまえて、この五輪塔がこの地にあることの意味を考えていきたいと思う。まず、五輪塔の特徴 (無銘無種字・大型である等) から、この五輪塔は律宗の影響でつくられた可能性が高いと考えた。これは、「律宗系五輪塔」と仮称されているものと同じである。(註 7) 条 210-2 次の発掘調査では 13 ～ 14 世紀と考えられる緑色片岩を使用した積み石墓が多く検出されているが、210-

Tab.18 九州大型石塔表（空風輪の大きさ比較）

番号	所在	所在地	時代	紀年銘	西暦	材質	総高	塔高	風輪高さ	風輪幅	空輪高さ	空輪幅	空風輪高さ	備考
1	中尾	大分県豊後大野市久田	南北朝	康暦３年	1381	凝灰岩	225.0	212.0	35.0	54.0	28.0	51.0	63.0	銘文あり、水輪四方に金剛界四仏の種子を刻む
2	蓮華院誕生寺	熊本県玉名市築地	鎌倉後期			凝灰岩		257.7	25.7	57.9	36.9	49.3	62.6	向かって左
3	勝福寺墓地	熊本県阿蘇郡深田村荒茂	鎌倉後期			凝灰岩		214.5	20.0	46.0	42.0	49.5	62.0	水輪に梵字あり
4	福昌寺跡墓地	鹿児島県鹿児島市池之上町	南北朝			凝灰岩		140.9	21.3	54.2	40.1	56.3	61.4	火輪先欠
5	大興善寺五輪塔仮No.1	福岡県北九市小倉南区蒲生２丁目	14 世紀前半			花崗岩			36.3		24.8		61.1	律宗寺院
6	西安寺跡	熊本県玉名郡玉東町山北	鎌倉中期	正嘉元年	1257	凝灰岩		232.7	21.1	43.0	36.6	37.5	57.7	
7	蓮華院誕生寺	熊本県玉名市築地	鎌倉後期			凝灰岩	271.8	252.9	24.4	51.2	31.7	43.1	56.1	向かって右
8	大興善寺五輪塔仮No.2	福岡県北九市小倉南区蒲生２丁目	14 世紀前半			花崗岩			31.5		22.5		54.0	律宗寺院
9	石塔院	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町	南北朝					209.6	22.0	42.0	31.6	39.0	53.6	
10	石塔院	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町	南北朝					218.9	21.7	42.5	31.3	30.4	53.0	
11	石塔院	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町	南北朝				230.7	215.2	20.6	40.8	32.0	36.8	52.6	
12	常忠寺	大分県豊後大野市藤北	鎌倉後期			凝灰岩		203.0	20.5	25.0	30.0		50.5	
13	福昌寺跡墓地	鹿児島県鹿児島市池之上町	南北朝			凝灰岩		119.4	18.7	41.7	28.2	44.3	46.9	火輪先欠
14	町宮グランド脇稲荷神社横	鹿児島県さつま町柏原字山下	鎌倉中期	弘安３年	1280	凝灰岩		167.4	18.5	42.6	27.8	34.9	46.3	銘文は水輪部、水輪下部一部破損
15	御坊墓地	鹿児島県西之表市野萱				凝灰岩		193.3	15.3	34.6	29.4	35.4	44.7	地輪下部埋没
16	旧房寺	熊本県熊本市北区植木町豊岡字本村	鎌倉中期	建治３年	1277	凝灰岩		169.5	14.7	35.4	28.3	31.8	43.0	銘文あり、水輪四方に種子あり
17	御霊神社（亀門氏墓地）	大分県別府市野田字羽室	鎌倉後期			凝灰岩	221.0	188.0	20.0	24.0	22.0	26.0	42.0	
18	御霊神社（亀門氏墓地）	大分県別府市野田字羽室	鎌倉後期			凝灰岩	195.0	187.0	20.0	29.0	22.0	26.0	42.0	
19	トーボージ	熊本県熊本市北区植木町豊岡字塩部	鎌倉中期	健治元年	1275	凝灰岩		182.0	15.0	40.0	27.0	36.5	42.0	銘文あり、水輪四方に種子あり
20	御坊墓地	鹿児島県西之表市野萱				凝灰岩		194.2	15	35.2	27	34.4	42	地輪下部埋没
21	旧常盤小学校裏山	鹿児島県鹿児島市郡山町常盤	鎌倉後期			凝灰岩		170.8	15.7	28.8	25.8	29.4	41.5	
22	**大宰府条坊跡 第210-2次調査地**	福岡県太宰府市観世音寺	13 世紀末～14 世紀前半			花崗岩（兵庫県六甲山産）		不明	18.0	35.0	23.3	31.0	41.3	塔 No.1 空風輪のみ
23	一丁田	宮崎県宮崎市一丁田	鎌倉後期			凝灰岩		131.2	15.1	27.6	25.4	24.7	40.5	
24	**大宰府条坊跡 第210-2次調査地**	福岡県太宰府市観世音寺	14 世紀前半			花崗岩		不明	17.7	32.0	22.5	30.0	40.2	塔 No.2 空風輪のみ
25	神応寺跡	長崎県平戸市岩上町	鎌倉後期			花崗岩（兵庫県六甲山産）		162.8	16.2	30.0	23.8	26.8	40.0	左塔、各輪に種子あり
26	神応寺跡	長崎県平戸市岩上町	鎌倉後期			花崗岩（兵庫県六甲山産）		158.6	16.3	30.2	23.5	26.3	39.8	左塔、各輪に種子あり

2ST020 のように大型五輪塔が設置されてもおかしくない立派な石組みも見つかっている。Fig.109 の周辺地形図をみると、調査地は平野の奥まった山裾にあたり、現状でも平坦面が複数確認できる。これらを加味して考えると、条 210-2 の調査地、その周辺の平坦面には大型の五輪塔が立ち並び、その周辺には積み石墓が点在した光景が想像できる。

ここで五輪塔がいわゆる律宗系五輪塔であることに再度注目すると、13 世紀～ 14 世紀段階の条 210-2 次の調査地には律宗系五輪塔が立ち並んでいたことになる。つまり、それは律宗系寺院の墓所、いわゆる奥の院的な空間であったことを示しているのではないだろうか。

実は太宰府における律宗寺院の展開については、早くから八尋和泉氏が指摘している。(註 8) その成果から、大宰府に所在する西大寺末寺としては、宰府最福寺の存在が知られていた。ただし史料からは推定される最福寺に関しては、朱雀信城氏が指摘するように、4つの最福寺が想定されている。(註 9) ここで関係するのは、明徳 2 年（1391）および永享 8 年（1436）の西大寺末寺帳に記載されている「宰府最福寺」となろう。最福寺の場所の推定には、『太宰府旧蹟全図北』が参考になる。これをみると戒壇院の北西の方向に「サイフクジ」とある。近辺は九州歴史資料館が過去に発掘調査をしており、掘立柱建物群や、庭園遺構が出土したほか、墨書経石や卒塔婆が確認された。(註 10) 最福寺の寺としての建物や関連施設は、大宰府史跡第 78 次調査で調査された遺構・遺物であった可能性は高いが、全面を調査したわけでないため、戒壇院の裏にあたる北側周辺が、最福寺であった可能性も十分考えられる。そう考えると、その後背地にあたる日吉神社の東側から条 210-2 次の調査地点までは、山に抱かれた山際の平坦面がずっと続いていく。条 210-2 次調査地点から数百メートルという距離は近すぎず遠すぎずの適度な距離であり、最福寺と奥の院との距離関係だと考えても不具合はないだろう。『大野城太宰府旧蹟全図北』によれば、条 210-2 次の南西あたり、旧観世村の中心部に「ザスノアト」と記載があり、観世音寺、またその子院とのつながりを考えさせるものであることも興味深い。

狭川氏の指摘（狭川 2012）にあるように、律宗系五輪塔が寺院の歴代住職の墓塔群であるならば、条 210-2 次調査地点は、最福寺の歴代住職の墓塔跡があったと考えられる。現在、戒壇院境内に安置されている五輪塔残欠の構成から考えて、最低三基の律宗系五輪塔があったことから考えると継続的な墓地利用があったことが推定できる。

戒壇院に点在する花崗岩の五輪塔については、元々は条 210-2 次の周辺場所にあったものが、最福寺の廃絶に伴って管理が行き届かずに崩落・崩壊したものを、いつの段階かは不明だが、戒壇院に持ち込んだものと考えている。

今回、条 210-2 次調査出土の五輪塔空風輪の考察により、同調査現場が西大寺末寺最福寺の奥の院であった可能性を指摘した。今後の課題として、戒壇院の歴史的展開と律宗の関係、また観世音寺や同子院群内の歴史の解明、戒壇院内や周辺の五輪塔（石造物類）の詳細調査の充実があげられる。これらを調査研究していくことで、太宰府の中世を解明していけるのではないかと考えている。その際には五輪塔をはじめとした石造物の分析が、大宰府の中世史解明の新たな手かがりになる感触を得たことは筆者にとって新鮮な喜びであった。(註 11)

文末になったが、本稿作成にあたり多くの方に資料の提供とご教示を得た。(註 12) 特に、財団法人元興寺文化財研究所の狭川真一氏には、図面データの提示、現地での指導や五輪塔の評価について重要な指摘をして頂いた。感謝申し上げる次第である。

註 (1)　このピンク色を呈す花崗岩は、通常兵庫県六甲山産地産出の花崗岩と考えられており、御影石とも称されている。

註 (2)　このような特徴をもつ花崗岩の産地は厳密にはわかっていないが、在地産と推定する考えもある。但し、厳密な石材産地の研究は進ん

でおらず、今後の課題である。

註（3）　戒壇院では、この五輪塔は「鑑真和上の供養塔」として看板が立てられ紹介されている。石材の質と風化の具合や、形状の特徴から空風輪と火輪は同じ時期のセット関係だと思われる。火輪には「開山大唐国」と追刻がされている。また、最下部には古い層塔の石材が使用されている。今後、実測図の作成などを行っていく必要がある。五輪塔空風輪の形状はNo.1に近いが、石材の質はNo.2と共通する。

註（4）　八尋氏、狭川氏が指摘しているように、九州内での律宗系寺院には無種子無銘の大五輪塔が伴う例が多い。たとえば、石塔院、旧浄光寺（蓮華院誕生寺）、玉泉寺、宝満寺墓地、大興禅寺があげられている。

註（5）　単独の場合は、その墓地のシンボル的な意味がつよいとされている。また、その場合は同規模の石塔は周囲には見あたらないことが多く周囲に墓が多く作られる。

註（6）　戒壇院境内には、ほかにも花崗岩製の五輪塔が点在しており、現状で14世紀代に作られたと思われる古手の五輪塔が、空風輪1，火輪2，水輪2、地輪2点が確認できた。今後これらも実測図を作成して検討していく必要があるだろう。

註（7）　狭川真一（2012）で、無銘無種子の大型（5尺～6尺以上）の五輪塔を「律宗系五輪塔」と定義している。

註（8）　八尋和泉（1976）でふれられている。

註（9）　朱雀信城（2004）によれば、史料にみえる最福寺は、1に西大寺末寺のもの、2に太宰府天満宮関連のもの、3に観世音寺の末寺のもの、4に禅宗寺院のものが確認できるという。それぞれが一致するものか、併存したものかは史料の限界で不明であるとする。3の観世音寺末寺のものは、『筑前国続風土記』に記載されている観世音寺四十九院の中にある「西福寺」との関連性がうかがえる。

1と3の寺が同じ寺をさすのであれば、観世音寺子院群内に律宗寺院である最福寺があったと理解できる。「太宰府旧跡全図」に記載されている位置が正確だとすると、条210-2次の律宗系五輪塔と戒壇院境内の律宗系五輪塔の存在から戒壇院の北側裏あたりに最福寺の推定地を考えたい。以下、余談であるが、続記の記載中の四十九院のなかで、西福寺が2つ記載されて重複していることも単純なミスではなくて、何かしらの意味があるのかもしれないと考えられるのではないか。全くの想像に過ぎないが、たとえば片方は、最福寺を示して重複ではなく、最福寺と西福寺という2つの寺の伝承を音のみで伝えている可能性も考慮しないといけないだろう。

註（10）　西福寺推定地の調査情報は以下の通りである。　調査名称：大宰府史跡第78次調査　遺構：池を伴う庭園、礎石建物2棟、掘立柱建物2棟。遺物：剣巴文軒先瓦，位牌、卒塔婆、柿経。内容：中心となる建物は東西6間×南北2間以上の礎石建物。その南西に3間×3間の同時期の礎石建物が伴う（後に掘立柱建物に建て替えられる）。三間堂か。出土遺物から14世紀中頃から16世紀代にかけて存続している。旧小字は安養寺であるが、「太宰府旧跡全図」ではこの付近を「サイフクジ」としている。

註（11）　本論の執筆分担は、西野が1.各塔の概要、2.形状・法量からの位置づけ、の素案を作成して、それを元に高橋が、はじめ、3.規模からの位置づけ、4.成果と課題を加えて全体を構成したものである。最終的な年代判定や位置づけに関しては西野の意見を参考にしながらも、高橋が若干修正している。よって文責は高橋にある。

註（12）　Fig.136の五輪塔の画像掲載に関しては、最教寺（長崎県平戸市）、戒壇院（福岡県太宰府市）それぞれのお寺から許可を頂いている。記して感謝いたします。

参考文献

多田隈豊秋　1975『九州の石塔　上巻』財団法人西日本文化協会

八尋和泉　1976「筑前飯盛神社神宮寺文殊堂文殊菩薩騎獅像および豊前大興禅寺如意輪観音像について」『研究論集2』九州歴史資料館

高倉洋彰　1977「筑紫観世音寺子院小考」『研究論集3』九州歴史資料館

多田隈豊秋　1978『九州の石塔　下巻』財団法人西日本文化協会

（財）元興寺文化財研究所　1995『五輪塔の研究 - 平成六年度調査概要報告 -』

高倉洋彰　1996『大宰府と観世音寺』海鳥ブックス18

狭川真一　1998「附編　太宰府の中世石造物」『太宰府市史』建築・美術工芸資料編　太宰府市史編集委員会

朱雀信城　2004「市史だより180　四つの最福寺（西福寺）」『太宰府市広報』

2004『福岡県の地名』日本歴史地名大系第41巻　平凡社

九州歴史資料館 2007『観世音寺 - 考察編 -』

狭川真一・松井一明　2012『中世石塔の考古学　五輪塔・宝篋印塔の形式・編年と分布』高志書院

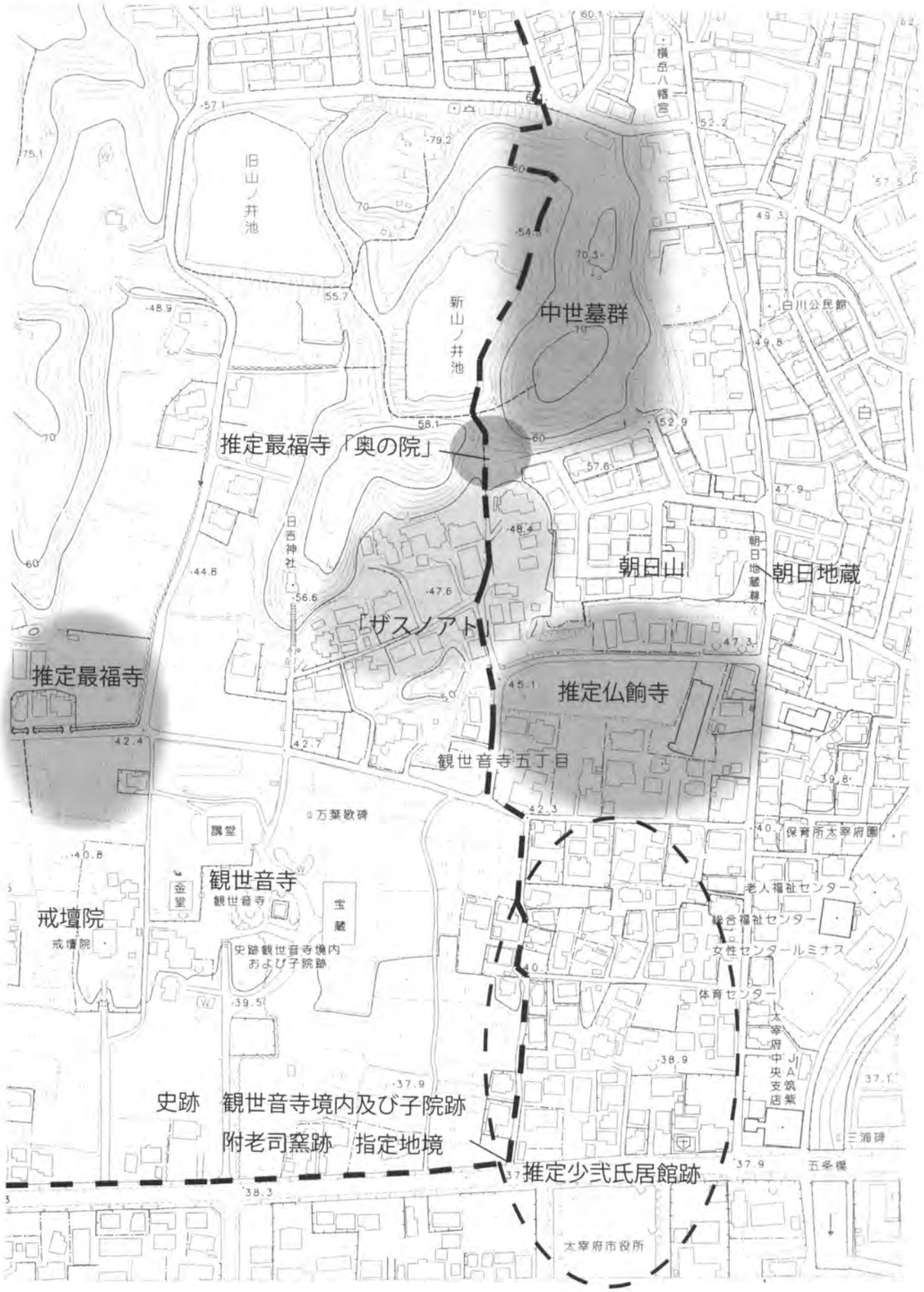


Fig.137　観世音寺子院群の展開

VI. 総括

今回の報告書では、大字山ノ井、大字朝日地区を中心とした地域で行った埋蔵文化財発掘調査の成果について報告をしている。

山ノ井地区では、まず条210次として、朝日山を調査した。ここでは12世紀代の墓群、13～14世紀に使用されていた長大な堀が確認できた。墓からは12世紀代の陶磁器や土器と共に鏡や鋏などの副葬品が出土している。丘陵の頂部に所在する墓は、南に開けて平野を見渡せる眺望の良い地点に構築されていた。また、300枚の備蓄銭も出土している。これらはすぐ南側の御所ノ内地区の中世遺構群（少弐氏の推定居館関係遺構群）との関係も考えられる。墓群に関しては観世音寺子院群との関係も立地からうかがえて興味深い。条210-2次では中世墓群が検出された。特論で論じているように、この条坊210-2次調査地点は西大寺末寺である宰府最福寺の奥の院であった可能性が高い。もしそうであれば、奥の院を発掘調査した大変珍しい事例となる。この最福寺は、観世音寺子院の1つであった可能性もある。山ノ井遺跡は『大野城太宰府旧蹟全図北』に「ザスノアト」と記載された地域の北部にあたる。今回の発掘調査で中世墓が検出されたことにより史跡観世音寺および子院群と密接に関係している可能性が指摘できた。

朝日地区では条193次、283次、284次の調査を行った。条193次では、石組基礎建物、壁建ちの建物や、礎石板を用いる大型の掘立柱建物が2棟、土塀の可能性がある遺構等、特徴的な遺構が集中して検出されている。また、井戸の断面観察になるが複数面の遺構面も確認された。この地域はⅠ.調査地周辺の地理的歴史的環境でも触れているとおり、観世音寺49子院の1つである仏餉寺の推定地であった。条193次で検出された遺構・遺物などは子院跡に関係するものであった可能性が指摘できる。条283・284次は隣接しており、朝日地区の東端にあたる。それぞれ土地は削平されて遺構の残りが悪いが、大宰府条坊制に関わる区割りと思われる段落ちが検出されている。その他は13～14世紀段階の遺構が多く、少弐氏との関係性が考えられる。

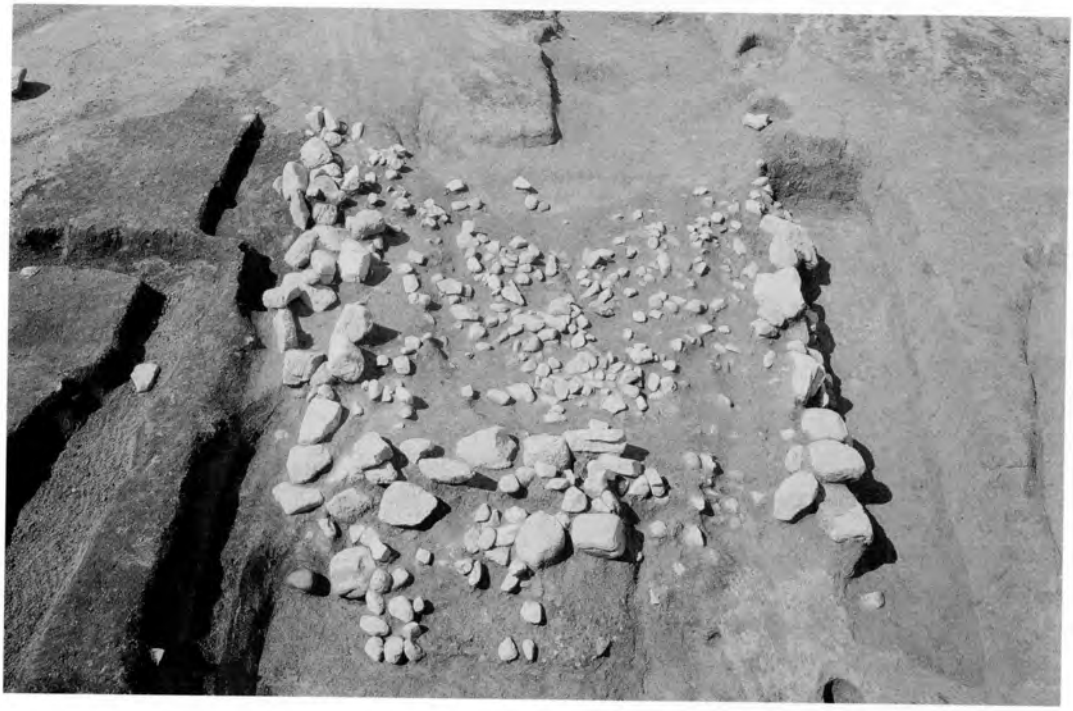
以上のように、山ノ井地区、朝日地区とも中世段階の観世音寺子院群や少弐氏に関係する重要な遺構が検出された重要な地域であることがわかった。過去の調査例をみても両地域の地下には全面にわたって遺構が良好な状態で残存していることが明白である。

このことから山ノ井地区と朝日地区は隣接する「史跡観世音寺境内及び子院跡附老司瓦窯跡」と同様の価値を持ち、将来的には史跡に指定され、保存していくべき地域と考える。

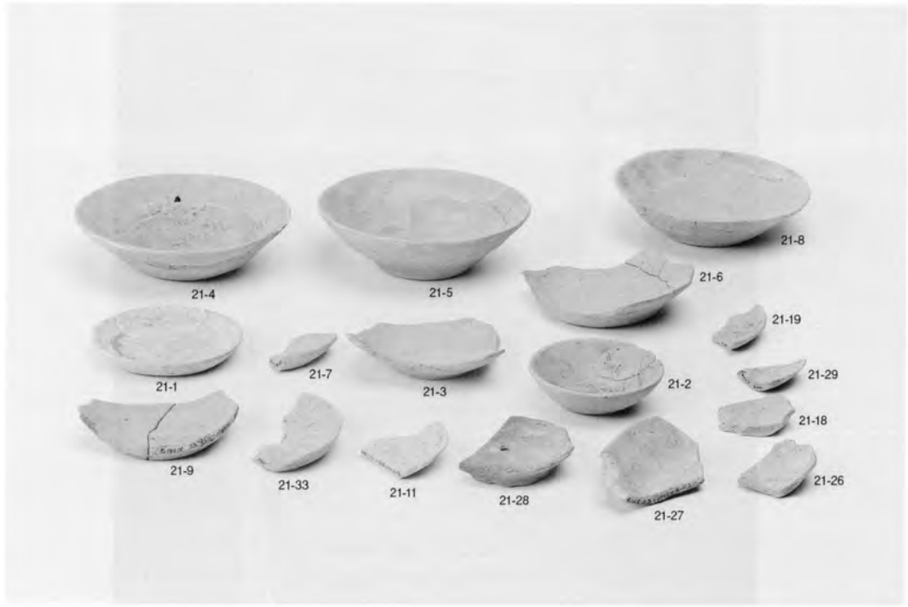
写　真　図　版

写真図版には、遺構全景と遺物の一部を掲載している。
その他の遺構写真および遺物写真は、附録のCDに収録している。
遺物写真に記載している番号は、Fig番号-Fig内の通し番号となっている。

Pla.1-1　条坊跡第 193 次調査　全景　空中写真 (上が北)



Pla.1-2 条坊跡第 193 次調査　SX224 (南から)



Pla.2-1　条坊跡第 193 次調査　SB010a・b・c・d ・050 茶褐色土、080a・b・c・d 出土遺物

Pla.2-2　条坊跡第 193 次調査　茶色出土遺物

Pla.3-1　条坊跡第 210 次調査調査区より南を望む　空中写真 (上が南)

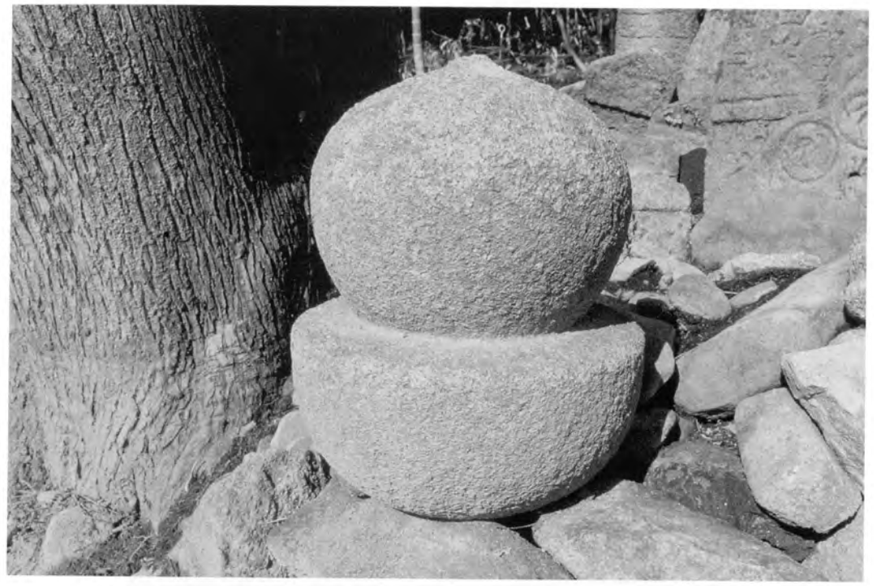
Pla.3-2　条坊跡第 210 次調査　SX035 完掘状況 (西から)

Pla.4-1　条坊跡第 210 次調査　ST010 淡茶色土出土遺物

Pla.4-2　条坊跡第 210 次調査　SX001 明茶色土出土遺物

Pla.5-1　条坊跡第 210-2 次調査　全景　空中写真（上が北）

Pla.5-2　条坊跡第 210-2 次調査　SX030 現況状況詳細（南西から）



Pla.6-1　条坊跡第 210-2 次調査　SX030 五輪塔空風輪 No.1

Pla.6-2　条坊跡第 210-2 次調査　SX030 五輪塔空風輪 No.2

Pla.7-1　条坊跡第 283 次調査　全景　空中写真（上が南）

Pla.7-2　条坊跡第 283 次調査　SE005 完掘状況（東から）

Pla.8-1　条坊跡第 283 次調査　SX015 暗灰色土出土遺物

Pla.8-2　条坊跡第 283 次調査　SK025 出土遺物

Pla.9-1　条坊跡第 284 次調査　全景　空中写真（上が南）

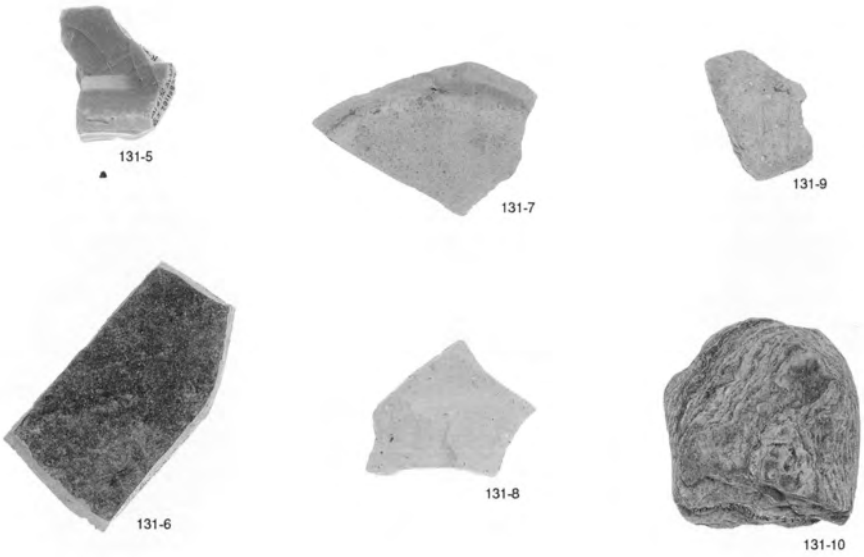
Pla.9-2　条坊跡第 284 次調査　SK001 完掘状況（西から）

Pla.10-1　条坊跡第 284 次調査　SE010 黒灰色土・黄灰色土出土遺物

Pla.10-2　条坊跡第 284 次調査　SK001 黄灰色土出土遺物

Pla.11-1　山ノ井遺跡第 1 次調査　調査区全景（南から）

Pla.11-2　山ノ井遺跡第 1 次調査　3 トレンチ近景（東から）



Pla.12-1　山ノ井遺跡第１次調査　３トレンチ出土遺物１(表)

Pla.12-2　山ノ井遺跡第１次調査　ST001 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうぼうあと
書名	大宰府条坊跡　43
副書名	大宰府条坊跡第 193・210・210-2・283・284 次調査、山ノ井遺跡第 1 次調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	116 集
編著者	髙橋学、山村信榮、宮崎亮一、西野元勝
編集機関	太宰府市教育委員会
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号
発行年月日	2013（平成 25）年 3 月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	条坊 【鏡山推定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡　第 193 次	左郭 1 条 9 坊	太宰府市 観世音寺	402214	210050-193	56960.00	-43969.00	19970417	19970929	570	専用住宅建設
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡　第 210 次	左郭 1 条 8・9 坊	太宰府市 観世音寺	402214	210050-210	57024.578	-43972.921	20000417	20010309	3798	宅地造成
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡　第 210-2 次	左郭 1 条 8 坊	太宰府市 観世音寺	402214	210050-210-2	57086.676	-44064.785	20001225	20010309	193	宅地造成に伴う 公園整備
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡　第 283 次	左郭 2 条 9 坊	太宰府市 観世音寺	402214	210050-283	56920.0	-43935.0	20100806	20100901	178	専用住宅建設
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡　第 284 次	左郭 2 条 9 坊	太宰府市 観世音寺	402214	210050-284	56930.0	-43932.0	20100902	20100930	201	専用住宅建設
やまのいいせき 山ノ井遺跡　第 1 次	条坊外	太宰府市 観世音寺	402214		57250.0	-44030.0	20110801	20110912	2000	重要遺構確認調査

所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
大宰府条坊跡 第 193 次	都城跡	奈良・平安・ 鎌倉・室町	掘立柱建物、井戸、壁立ち建物、 石組み遺構（建物基礎か）	土師器、輸入陶磁器、瓦質土器、 土師質土器、朝鮮李朝期の雑釉陶器	観世音寺 49 子院の 1 つ 仏餉寺（ぶつしょうじ）の推定地。
大宰府条坊跡 第 210 次	都城跡	平安・鎌倉・ 室町	堀、墓、土坑	土師器、輸入陶磁器、中世瓦、瓦経、 草文双鳥鏡、銅銭（100 枚× 3）	朝日山の丘陵部
大宰府条坊跡 第 210-2 次	都城跡	平安・鎌倉	墓	土師器、輸入陶磁器、五輪塔、 五輪塔集積遺構	大型五輪塔の風水輪（2 点）出土。
大宰府条坊跡 第 283 次	都城跡	奈良・平安・ 鎌倉	井戸、土坑、段落ち	土器、陶磁器、瓦	13 世紀後半の遺構中心。少弐氏との関係性。条坊痕跡の可能性がある段落ち。
大宰府条坊跡 第 284 次	都城跡	平安・鎌倉	井戸、土坑、段落ち	土器、陶磁器、瓦	削平されており深い遺構が残存。
山ノ井遺跡 第 1 次	寺院	中世	墓	土師器、釘、 円礫状の緑色片岩	「太宰府旧跡全図北図」ではこの箇所に観世三名水の一つである「五色ノ井」と「エソダイリ」「ヤクシドウ」と並んで山裾に「ザスアト」と記載されている。

太宰府市の文化財第 116 集

大宰府条坊跡 43

—大宰府条坊跡第 193・210・210-2.283.284 次調査、山ノ井遺跡第 1 次調査—

平成 25（2013）年 3 月 28 日

編集　太宰府市教育委員会文化財課
発行　〒 818-0198
　　福岡県太宰府市観世音寺 1 丁目 1 番 1 号
印刷　大成印刷株式会社
　　〒812-0892　福岡市博多区東那珂3丁目6番62号

太宰府市の文化財第116集

大宰府条坊跡43

—大宰府条坊跡第193・210・210-2・283・284次調査、山ノ井遺跡第1次調査—

太宰府市教育委員会

平成25年度
(2013)